

実力至上主義の教室と矮小な怪物

盈虚

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

高度育成高等学校。実力至上主義を掲げるこの高校に、ある事件が切っ掛けで入学を決めた男がいた。彼の名前は赤石 求。Dクラスに配属された彼が、ある1つの特技を武器に進んでいく。自身の特技がこの実力至上主義に高校にどこまで干渉できるのか。それを確かめるために……

基本は原作沿いです。

主人公は一部を除きあまり能力が高くないです。

4巻まではプロットが完成していますが、若干見切り発車です。

目次

0章 事前準備

「手順」

1

入学工作

5

節穴

10

1章 Dクラスと中間試験

Dクラス

13

媒介者

25

水泳とお昼と小テスト

44

返却とお昼と会議

55

他人・友人・隣人

74

勉強会

88

クラス闘争と堀北の勉強会

108

親友

120

試験範囲とBクラスと乱入者

126

中間試験

139

綾小路清隆の独白 1—1

155

綾小路清隆の独白 1—2

167

綾小路清隆の独白 1—3

185

2章 暴力事件

集会場

193

平田グループ チャプター1

207

榎田グループ チャプター1

217

カメラ、貼り紙、電話

234

買い物と口笛

246

一之瀬様を讃えよ	266
雨の日、再会	283
呪い	298
櫛田桔梗の策謀 2	319
櫛田桔梗の策謀 2	329
櫛田桔梗の策謀 2	342
3章 無人島	
無人島へと至る船	357
上陸と探索	370
崖下、滝上	383
一日目の終わり	397
談合、そしてCクラスへ	409
伝説的な功績	424
岩場の観測者	436
三日目、豊富な食料、飢餓	446
四日目の攻防	458
循環する白い布	472
大混乱	490
敗北者	499
堀北鈴音の錯誤 3	513
綾小路清隆の独白 3	530
綾小路清隆の独白 3	546
綾小路清隆の独白 3	559
龍園翔の努力 3	571
神室真澄の共鳴 3	579

神室真澄の共鳴 3 | 4 | 2

伊吹滯の役割 3 | 5

602 590

0章 事前準備

「手順」

中学校三年生の夏、赤石求（あかいしきゆう）は階段で転んで頭を強く打った。病院に運ばれた後、2日間意識が戻らず、医師も家族には厳しい状態であると告げた。しかし意識が戻った後は急速的に状態が回復し、1週間もかからずに退院した。何の後遺症も残らず、家族は安心したが、赤石求本人は自身の脳におかしな感覚を感じていた。

——頭がおかしい気がする。

病院から退院し、体の調子は問題なかった。しかし、数日後、頭の中で何かがぼやけているような感覚がした。何かの後遺症を疑い、パソコンを開きネットで「頭 衝撃 後遺症」と調べようとして、おかしなことが起こった。

検索を行おうとして頭のなかで何かの式や方法が突如として閃いてきた。それが何の方法かはまったくわからなかったが、手が勝手に動いて、その方法を行っていた。

自分のパソコンに対して次々と頭に浮かぶ謎の手順を入力していった。気がついたら画面には自分の医療記録が出力されていた。

唾然として、よく見ると、その記録はつい退院したばかりの病院の自分の診察結果であった。なぜ医療記録が表示されているのか、そこまで考えて、また新しい手順が頭に浮かんだ。

僅かな恐怖を感じたが、しかしそれ以上に、頭に思い浮かんだ手順を試したいと感じた。気が付くとまた手が動き、フローチャートのよなものが表示された。フローチャートには自宅からサーバーを通して病院までのアクセス方法が書かれていた。どうやら自分は無意識中に病院のデータにアクセスしていたようだ。

——そんなことありえるだろうか？

自分はパソコンやネットは好きだったが不正アクセスの方法などまったく知らなかったし、ハッカーという存在もせいぜい映画で知っている程度だった。そんなわけがないと思っていると、脳内でさらに新たな手順が生まれていった。なんの手順かはわからなかったが、おそらくこれも何かの情報に接続する方法だと感じた。試したいと咄嗟に思ったが、同時にこころも感じた、

——バレたらやばいよな、これ。

すると脳内の思考がいったん止まり、そしてさらに動き始めた。そして感じた。今度は手順ではなく、この手順により発生する結果が実行前に本能として感じ取れたのだ。

——あ、このアクセス方法はまったく感知されない方法だ。しかも、さっきの病院へのアクセスも記録に残ってないや。

そしてまた、手が動いた。今度は無意識というよりも半ば意識的なものであった。そして次々と自分のパソコンには信じられない事象の数々が表示される。

それは国家の予算記録だったり、スパイの活動記録だったり、戦争計画だったり、様々な知ってはいけない情報が映し出された。やりすぎたと思う反面、情報を抜き出すときの暗い愉悦感と万能感は薬物のように心を満たしていった。

気がつくとも検索をはじめてから数時間が経過していた。いったんパソコンを閉じようとする、手が再び勝手に動き出した。何をやっているのか少し分からなかったが、画面に映し出される情報と頭の中に残る方法の残滓から、おそらく侵入記録を消しているのだろう。

パソコンを消すと、頭の中で蠢いている手順が消えた。そして同時

に最初の課題であった、頭の中のぼやけがなくなっていた。むしろ、かなり頭がすつきりとしていた。

もう何も怖くはなかった。というのは少し嘘で、自分のハツキング能力が怖いと感じた。

あれから2日が経過した。両親は未だに自分の怪我を心配してくれたが、学校に通い元気な姿を見せると安心してくれたようだった。

中学校の教師にも顔を見せ、無事を確認してもらった。担任の先生に一通り心配していたことと快調したことに対する祝いの言葉を貰い、進路の話になった。なんとも話題転換が急だと思ったが。もう3年の夏であり、重要事項なことであった為、しっかりと聞いておいた。成績はそこそこ優秀だったため、勉強をすればかなり良い所まで狙えるのではという話だった。

帰宅するとパソコンを2日ぶりに開いた。不思議と「手順」が頭の中に現れることはなかった。あれ？と思い、もしや夢だったのかと感じたところで、再び頭の中に「手順」が現れ、手が動き、数々の国際機密が画面に表示された。

「これは、もはや一種の超能力だな」

そう呟き、今日本当にやるべきことを調べた。進路のことである。

「高校 難易度」や「高校 地元」などいろいろと探してみた。頭の中の「手順」に従うと、その高校の実績・歴史・在籍教員・生徒、拳句の果てには過去問題や問題の作る指針、ここ数年間でおきた秘密の不祥事なども明らかにあった。

次々の高校の情報を抜いていくと、だんだんと空しくなってきた。どうも完璧に素晴らしい高校というのは存在しないようであった。あたりまえである。

しかし、収穫がないわけでもなかった。1つ非常に面白い高校を見つけたのだ。その名も「高度育成高等学校」。

なんとこの学校では就職率・進学率が100%の高校らしい。これだけ聞くとなんとも胡散臭いが、「手順」を使って得た情報によると内

部はさらに歪であった。「実力至上主義」を伝統としており、弱肉強食、Sシステムという奇抜な制度により優秀な生徒には金をばらまき、そうでない生徒は生活難に苦しむという、ぶっ飛んだ発想により運営されているらしい。

——完全なる実力至上主義。

不思議とこの文面が頭の中を貫いた。そして感じた。試してみた。自分のこの歪な超能力とこの歪な学校は、この上なくマッチしているのではないかと感じた。

そう感じた次の瞬間になると「手順」が暴れ出し、手と指が荒ぶり、「高度育成高等学校」の入学方法と過去の試験と面接結果。そして今年の試験内容と面接方法がパソコンに表示されていた。

「うん、これ完全にカンニングだよな……いや実力至上主義って言うてるしいいかな？……ダメな気がする……」

まあいいかと、頭の中で思い込み、入学手順を再び確認した。試験は少し早く12月から準備を行うようであった。まだ5か月もあるが、それまでに色々とやるべきことをやらねばならないと心に決め、計画を立て始めて思ったことがあった。

——こんなに明確に行動しているのは15年の人生ではじめてかもしれない……

思えば少々他人より頭が回る程度で、他の能力は飛びぬけたところがなかった。絶望していたわけではないが、自分は成長しても特に何もなく、何もなく、淡々と生きていくのではないかと感じていた。それがこんなにも生き生きと活動をしている。これはとても嬉しいことなのかかもしれない。

入学工作

高度育成高等学校に入学するに渡って必要なことはいくつかあった。1つは試験を通る成績。この高度育成高等学校は入試のみで採点を行うため中学時代の成績は体育以外はあまり考慮されない。そのため入試の結果が重要になる。

ハッキングしたため今年の入試は簡単に突破できるのだが、ここで思わぬ問題があった。それはこの高度育成高等学校はふつうの秀才を求めていない可能性がある点だ。

どうも過去に好成绩でも落ちた生徒が何人かいる一方、ほとんど取り柄を持たない生徒が合格しているのである。

細かく調べると難しかったが、優秀枠・普通枠・異才枠・劣等枠があるように感じられた。普通枠と劣等枠はランダムか、もしくは面接に合格を一任しており、ある意味非常に合格が難しいようだ。

一方優秀枠も一定以上は取らないようで、優秀な生徒が多い年は一部がおそらくランダムで切られていた。しかし異才枠は珍しいようで、歴代の異才枠は確実に合格できていた。そこで狙うとしたら異才枠であるが……

「どうすればいいんだ……」

テストの解答はある。暗記し、対策して解法を覚えれば確実に満点を取れるだろう。しかし異才であることのアピールにはならない気がする。

異才、異才、異才……すべてのテストで50点を取るといのは異才になるだろうか。いや、やったとしても気づいて貰えないかもしれない……

悩みに悩んだ結果、ありきたりだが記憶に残りやすい方法を考えた。それは……

「名付けて、『難しい問題をすべて完答して、簡単な問題を単純ミスして70点くらい作戦』だ！」

テストの解答を完全に入手している自分としては比較的簡単に実行できる。この作戦でとりあえずは決まりだ。

入学に必要な事項の2つ目としては面接がある。どうやら高度育成高等学校は生徒にランク付けをしており、学力・知性・判断力・身体能力・協調性を判定するようだ。

学力は入試結果から判定され、知性は入試結果と面接、判断力は面接、身体能力は中学校時代の体育の成績や大会の実績、そして協調性は面接と中学時代の教師の評価などによるらしい。

これらの能力が高いと上のクラスに配属されやすくなるようだが、諸事情により配属されるクラスが能力に合わないこともあるようである。ここまで考えてふと思った、

——目標点はどこにしようか？

単純に卒業時にAクラスとするべきだろうか。それとも入学から卒業までAクラスを維持にするべきか。いや、自身の能力である「手順」を考えると……

「目標点はAクラス以外に所属して、誰も達成していない2000万ポイントの権利の使用だな」

それに異才枠との兼ね合いも考えると最初からAクラスは難しいだろう。ということとは面談はほどほどにこなしつつ、そこそこのクラスに配属でいいか……

とりあえず、入学対策は一通り考えた。次にやるべきことは、自身の能力である「手順」と入学後の準備である。「手順」はおそらく実力至上主義の学校においては切り札的な存在になるだろう。これを安定させて使用できるようになれば、かなり優位にたてる。その為に5か月間でこの「手順」を完璧に制御できるようになるべきだろう。

そして入学後の準備としては、高度育成高等学校のルールの把握だろう。情報端末を使用し様々なやり取りを行う高校らしい。その点も踏まえて学校の内部を探索するべきだろう。ちょうど「手順」の練習にもなるし、一石二鳥である

「さて、調べますか！」

頭の中ではつきりと強く高度育成高等学校の情報を求めると、脳内で踊る「手順」に導かれ、情報の読み取りを行った。

情報を読み取り数週間が経過した。夏休みの中、親に怪しまれないためにも、最低限の知識を掴むためにも勉強をこなしながら、空き時間を見つけては高度育成高等学校のデータベースをハッキングしていった。

「手順」に関しては思ったよりは制御が簡単であり、10日程度で精密に制御できるようになった。某大国の白い家に侵入できた時はガッツポーズをすると同時に、まるでテロリストみたいだと思って意気消沈した。ちなみに侵入経路はすでに削除したので、別に大国に狙われるとかそういうことはなかった。

また高度育成高等学校のSシステムの概略については、ほとんどの事柄が判明した。ただ、ポイントによって購入できるものがあまりにも多すぎるため、これは全ては覚えるのは難しい。おそらく入学後にもアクセス可能であるため、必要になったら調べるスタイルで良いだろう。

こうして少しずつ「手順」をマスターしていった。よって次の段階に移ることにした。それは、

「クラッキング……やってみるか……?」

クラッキングである。どうやら高度育成高等学校では監視カメラが至る所に仕掛けており、これを使い生徒の監視を行っている。

また故意に監視網を緩めており、一部の場所が監視カメラの死角になっっているが、このカメラの情報の書き換えができれば、自分の高度育成高等学校での行動はさらに優位になるだろう。

そこで、近くのコンビニのカメラを操作し、ある時間帯に5分間だけ、人がいないように表示するように変更した。別に万引きがしたいわけではないので、その時間帯にコンビニに行きお菓子を購入して帰宅した。

そしてカメラを確認し、自分が写っていないことを確かめた。またログにも何の異常も表示されていなかった。その後カメラの設定を

元に戻し、カメラの情報有効期限（このコンビニでは一定時間の経過で録画データを削除している）である2週間が経過し、再びアクセスしたが、何の異常も発生していなかった。

さらに、このコンビニの親組織も含めカメラの異常や修理履歴、コンビニ内で起きた犯罪状況なども調べたが、誰一人クラッキングには気づいていなかった。

「思ったより簡単だったか……?」

ある程度、慎重に動いたこともあり、成功に終わった。あと数回実験を行えばこの技術はおそらく高度育成高等学校でも通用するだろう。

そして12月になった。「手順」に関してはクラッキングを含めて完全にマスターできた。高度育成高等学校の対策も万全であった。もはや恐れるものは無い。

中学校の担任からは真面目な生徒という至極一般的な評価を貰い、入学試験では異才枠を意識し、難しい問題は完答し一般的な問題ではミスを連発し、70点前後全ての教科で達成した。

そして面談でも面接官に質問に対して比較的正直に答えつつ（もちろんハッキング能力に関しては何1つ答えていない）、実直な印象を抱かせた。ただ、面接内容自体はかなりフリーハンドな面があったらしく想定しにくかった質問があり、その答えに時間がかかってしまった事が少し不安だが、おそらく合格したかと思われる。

合格通知を待つのも退屈なためハッキングを敢行すると、無事合格していた。ついでに自身の評価を調べると、興味深いデータが見られた。

氏名：赤石 求（あかいし きゆう）

クラス：1年D組

学力：A-

知性：C

判断力：D

身体能力：C+

協調性：C-

【面接官からのコメント】

入学試験において最上級問題に正解した2人のうちの1人であるが、簡単な問題にミスが多いことから非常にムラがあると思われる。一方、面接時の答え方は比較的良好であり、好印象であった。ただ、想定外の質問に弱く、即席の判断力に欠ける面があった。また積極性に若干欠け、受け身な印象を感じた。前述した異才的な側面を踏まえてDクラスの配属とする。

「ふむ……なんというか、見る目がある面接官というか、ハツキング無しだと弱いな俺は……」

ポリポリと頬をかいて思った事を口にした。最近、独り言が増えていることが悩みだ。

「しかし、なんとも妥当な評価だ。実力至上主義に偽りなしといった感じだなあ。判断力が低いのは自覚があったがDか、Dはこの学校の判定だと確かかなり悪い方だが……というか俺は実際の学力はCくらいと考えると、ハツキング無しだったら不合格だったな」

いや、異才枠ロールという作戦は成功したし、とりあえずは第一関門突破ということにしよう。

「さて、他の合格者の能力査定でも見ますかね」

せっかくのチャンスである。ライバル達の情報を今のうちに見ておくか……

節穴

——とても強い。

同学年の優秀な生徒を見て感じた感想であつた。優秀といつても定義がいろいろとあるかと思つたが、とりあえず、合格者の中から、高度育成高等学校が定める学力、知性、判断力、身体能力、協調性を対象にA以上の能力を持つ生徒を抽出してみたのだが……

まずは1人目。とっても目立つヘアスタイルの彼を紹介しよう。

氏名：葛城 康平（かつらぎ こうへい）

クラス：1年A組

学力：A

知性：A

判断力：B

身体能力：C

協調性：B |

純粹に強い。経歴もよく、面接官からの受けも非常に良い。まさに優秀型のお手本のような男だ。スキンヘッドを決めているというのも気合が入っている。個人的には見た目の威圧感もあり彼が総合力1番だろうか。そうすると二番手はこの子だろう、

氏名：一之瀬 帆波（いちのせ ほなみ）

クラス：1年B組

学力：B+

知性：A

判断力：B

身体能力：C

協調性：A |

こちらも強い。葛城よりも協調性に寄っているという感じだろう。写真で見る顔立ちも明るそうな印象を受ける。面接官からも評価が高いが、病気がちだったのだろうか？欠席数の多さからBクラス配属となっている。個人的には総合力2位のイメージが強いので、やはりこの学校の入学評価は独特な印象を受ける。

三番手は決めるのが難しい。一之瀬の面接官の審査によると葛城・坂柳・一之瀬を同格のように表現しているが、肝心の坂柳のデータが一芸枠のような気がしてしまい三番手と言っていないか微妙に感じるのだ。それに坂柳は面接官の評価が異様なのだ。なんと評価になっていないのだ。先天性の疾患があることを注意するに留まっている。しかもなぜか坂柳自体、写真がなく、性別も名前も不詳である。

とりあえず坂柳は保留である。ただAクラスであることから、目下総合力1位である葛城との連帯を行うことが予想される。葛城の参謀的ポジションだろう。三国志ではないが、やはり参謀というのは病弱なイメージがあるし、じっくりくる。なんだか、想像が意味のない方向へ広がっていつているな……この癖は直した方がいい気がする。

さて問題の三番手は保留として、せっかくなので一芸枠を考察しよう。おそらく、一芸枠としてはCクラスの龍園・山田・椎名、Dクラスの堀北・幸村・高円寺がなかなか高スペックである。

堀北は全体的に高いバランスだが協調性が皆無という何ともぶつ飛んだ評価であり、同じく協調性が低い高円寺に至っては一部の能力が保留という状態である。

幸村・椎名組は学力が高い反面他の能力が低い。癖の強い参謀といったところだろうか。半面、山田は黒人の血が流れているためか運動能力が非常に高い。龍園は判断力がずば抜けているが面接官からの評価が非常に曲者といった形である。

一芸枠はおそらく自分よりは優秀だろうと何となくわかるが、いまいち評価に悩む人たちである。ある意味自分のハッパ能力もここ

に区分すべきかもしれない。

地味にA・Bクラスに一芸枠が少ないのが気になった。この学校は総合力を重視するのだろうか……？

最後は万能枠だろう。葛城・一之瀬ほどではないが能力が全体的にバランスが良く隙が無いタイプだ。Dクラスの櫛田と平田だろう。

2人とも人が良さそうな見た目でかつ能力も万能型で高めである。というよりなんでこの2人がDクラスかが分からない。やはりこの学校の評価は独特である。

この2人に一歩及ばないがBクラスの神崎も能力が高めである。先ほどの一之瀬と同じクラスであることから彼が一之瀬の手足となるのだろうか……いや協調性が若干低い事を考えると難しいかもしれない。

おそらくAクラスの葛城・坂柳ペアの方が盤石だろう。Aクラスだし。

全体としてみると人材はDクラス優位に感じた。特に平田・櫛田の2人は得難い人材だろう。他にも一芸枠が何人もいる事を考えると、自分たちの代のDクラスは歴代でも高い水準だと思われる。2000万計画は思ったより簡単だろう。

いつそのこともっと目標点を高くすべきだろうか……？いやさすがに慢心のし過ぎか……

「少なくともB評価持っている人は自分よりは素のスペックは上だろうし、ハッキング能力があるとはいえ舐めてかかるべきでは無いだろう……いや面接官の評価を気にしすぎるのも危険か？」

どちらにしる警戒を怠るべきではないだろう。

とりあえず仮想敵はAクラスの葛城・坂柳タツグ、Bクラスの一之瀬・神崎タツグだろう。Cクラスは一芸しかないから分らん。知力特化の椎名が司令塔になるとかだろうか……？いや司令塔に必要なのは判断力か？となれば龍園だが……うーん、わからん。

あと、どうでもいいことだが、この学校、美少女多いな。優秀な女子が全員美少女というのはちょっと驚いた。どうでもいいことだが。

1章 Dクラスと中間試験 Dクラス

そして4月になった。

高度育成高等学校へ向かうバスに乗ると、中には同じ制服を着た生徒がたくさんいた。今日の入学式終了後は学園に幽閉されるため、この通学が最初で最後のバス通学となるだろう。

バスの中は空いていて、席も空いていたため遠慮なく座って思考にふけることにした。

——準備に関してはほとんど完了した。基本的なルールは把握し、さらに一部の重要そうな情報も記憶した。問題は人物についての精査が終わっていない点だろう。しかし、これは入学後、対象を観察しながら、情報を漁ればいだろう。それに先入観を持ちすぎるともよくないし……いや、これだけ調べておいてそれは手遅れか……

そんなことをダラダラと考えていると、バスの中がだんだんと混雑していることに気づいた。そして同時に何かを言い争う声が聞こえた。そちらの方を見ると、1人の新生と一般人の女性が言い争っていた。

ん？、新生の方は同じクラスに配属予定になるであろう高円寺だった。何かと思い耳を澄ませると、自信に満ちた声が聞こえてきた。

「優先席は優先席であって、法的な義務は存在しない。若者だから席を譲る？ ははは、実にナンセンスな考え方だ」

この一文だけで今どういった状況かが分かるあたり、高円寺のぶつ飛び具合が良くわかる。つまり優先席に座っている高円寺は席を譲りたくないようだ。

一瞬、優先席だから譲ってあげればと思ったが、優先席って努力義

務だっけ？いや法律に詳しくないし、優先席に法律的義務が発生したら色々問題が発生しそうだから多分正しいのだろうが……気に
なったので手持ちの端末を使って調べてみた。

普通に調べてみた結果、特に法的義務はないようだ。一応、高円寺
が言ったことは筋は通っているようだ。

しかし、この状況で自分を曲げない高円寺はなかなか強い。自分な
らビビッて譲るだろう……いや、そもそも優先席には座らないか。

そうしていると口論はヒートアップしていき、ついには高円寺は他
の席に座っている人まで巻き込み始めた。やりやがったあいつ。こ
れは物凄く気まずい……譲るべきだろうか？お婆さんのことを考え
ると譲るべきだろうが、なんとというかここで出ると悪目立ちしそうで
ある。

ハッキングという陰謀特化の自分としては今後発生しうるクラス
闘争を考えると、目立つのは避けたいが……そう思っていると1人の
女子生徒が席を譲った。

よく見るとその生徒も同じクラスになる生徒である櫛田であった。
彼女もDクラスでかつ能力が高い人物だ。実は平田あたりも隠れて
いるのでないかと思えばバスを見回したがいなかった。代わりに黒髪
の美少女である堀北を見つけた。彼女は確か一芸だ。いや全体的
に自分より能力が高いので一芸と言うと失礼か？

このバスはDクラス御用達のバスかなと考えているとバスは無事
に高度育成高等学校へたどり着いた。まさか入学前にこんなイベン
トに巡り合うとは前途多難である。そう思っているとさらにイベン
トが発生した。

先ほどの堀北が校門の近くで男子生徒と話しこんでいた。相手側
の男子の顔に覚えはない。新入生だろうが、さすがに全員は覚えてい
ない。が、まったく記憶にひっかからない顔からすると一度も情報で
は見えていない生徒、つまり能力評価がB未満の生徒の可能性が高い。
恐らく大勢に影響を与えるタイプではないだろう。

話は終わったようで女子生徒の方がそのまま校門に入ってしまった。自分もそのまま校門に入ろうと考えたところで、堀北と話をしていた男子生徒に話しかけられた。

「なあ、少し聞きたいんだが、いいか？」

その生徒はこっちの目をはつきりと見ながらそういった。やはり顔に覚えはない。しかし整った顔立ちである。陰のあるイケメンといったところだろうか。目つきが鋭いところも含めて戦隊モノの敵役みたいな感じだ。並んでみると、身長は同じくらい、いや彼の方が1、2cm程高いだろうか？

「ええっと、何でしょうか？」

考えながらも答えてみた。入学式の場所だろうか？それとも時間だろうか？

「いや、あんたはさっきの女子と知り合いなのか？」

さっきの女子。堀北だろう。ハッキングにより一方的に知っているが、彼女は自分のことを知らないだろう。

「いえ、知り合いではありませんが……」

嘘はなかった。知っているだけで知り合いではないという、頓知のようだったが、男子生徒はじつとこちらを見た後に、一応納得したのか一度頷くと、

「そうか、なら別にいいんだが……」

と言った。何がいいんだ？まったくわからない。不思議系の人だろうか……？

とりあえず、彼とは一旦別れて、Dクラスを目指す。不自然にならない程度にゆつくりと歩き、校内を観察しながら進む。事前に入手した校内図と同じであった。また嬉しいことに監視カメラの配置も入手したカメラ配置図と同じだった。やはり死角はあるが、これだけ配置されているなら、ほとんど全ての生徒の動向を観察できる。これは十分――

「監視カメラが気になるのか？」

ふと、そんな声を後ろから掛けられた。一瞬慌てそうになるが、何とか冷静になり後ろを見ると先ほどの男子生徒がいた。何故だ？そ

んなに意識しないようにしたのになぜ分かる。いや自分は観察の
口というわけではないから、見る人が見ればわかるだろうか……？い
や、とにかく今は返答をしなければ。

「いや、校舎に入るところにもあったので、なんだか沢山配置されてい
るように思えて……」

できる限り、普通のトーンで話したつもりだが、少し声が震えたか
もしれない。いや落ち着け、普通の男子高校生がカメラのハッキング
などするだろうか？いやしない。自分がカメラをハッキングできる
とは目の前の男子生徒にも分からないだろう。

「そうか？そんなに配置されてたのか……気づかなかったな」

その男は特に興味もなさそうに言ったが……なんだ？話題の追求
もしない。何となく話してみたといった感じだ。もしや、話し方がわ
からなくて何となく適当なことを言ったのか？だとしたら墓穴を
掘ったか？いや、ここで自分がどう答えても監視カメラに関して自分
を結びつけることは不可能だろう。だが、この生徒なんとも独特だ。

とりあえず、Dクラスに行くまで念のため校内チェックは止める
か。大丈夫だとは思うが一応。

「ええっと、あなたは新生入生ですよね？もしかして同じクラスだった
りします？自分はDクラスなんです……」

一応聞いておく。そんなに危険な人物にも見えないし、事前情報に
引っかからなかったが、先ほどの校門での不思議の質問といい、なん
だか変な予感がするのだ。

「ああー、偶然だな。オレもDクラスだ。綾小路清隆って名前だ。よ
ろしく……？でいいのか？」

綾小路と名乗った男は何とも間の抜けた感じの挨拶だった。何と
いうか独特な男だ。どうも警戒しすぎていたような気がする。

「綾小路君、こちらこそよろしく。俺は赤石求と言います。【きゆう】
は【求める】って字の求です。よく変わった名前だって言われます」

……危ない。今間違って3年間宜しくお願いしますって言うところ
だった。本当に俺は抜けてるな……

綾小路は俺の挨拶を聞くと「確かに求って名前は珍しいな」と無感

動に言った。それからお互いに会話をしようとするも、バスの話や校舎の大きさ、挙句の果てには今日の天気の話など、2人のコミュニケーション能力が致命的だと判明しただけだった。綾小路の事を不思議系だと思っただが、俺も人のことは言えないかもしれない……

綾小路と一緒にDクラスの教室に入ると、すでに生徒が多くの生徒が中にいた。ふと、教室内に配置されているであろうカメラを確認しようとして、視線を感じた。もはや、これは偶然には感じられなかった。よってこちらから仕掛けることにした。少し顔を上げカメラを視界に収め、数秒ほど観察。配置通りだと確認し、綾小路に声をかけた。

「綾小路君。ここにもカメラがあるみたいですね」

綾小路は間髪入れずに答えた。

「そうだな」

まるで興味のないような口調であった。自分は人間観察に関しては何もなく不可もなくだと認識しているつもりだが、この綾小路に関してはまったく分からない。鋭いような鈍いような、本当に判断に困る。とりあえず帰宅したらこいつの入学時の評定を漁ろう。

綾小路は会話を続ける気がないらしく、そのまま、窓側の一番後ろの席に向かった。綾小路の方を見るが、こちらへの興味を失くしたように、視線は感じなかった。

こちらも一旦、綾小路のことは忘れ、自分の席に向かった。窓側の黒板に近い席であり、綾小路4つ前だ。席の座り周りを見ると、後ろの席の男子が目に入った。資料で何度も見た顔だ。彼はこちらが見ている事を気づくと、爽やかな笑顔で口を開いた。

「僕は平田洋介、よろしく。君は？」

事前資料ではDクラスで最も期待ができる人物である平田洋介だ。まさか、すぐ後ろの席になるとは……この好機、上手く生かしたいが

……

「赤石求と言います。平田君、こちらこそよろしく願います」

先ほど綾小路相手に失敗した名前ネタは止めておいた。が、流石は平田。綾小路とは格が違った。

「きゆう？どんな字を書くんさい？」

手早く会話を広げてきた。やはり、コミュニケーション能力が高い。——綾小路と俺が低すぎるだけかもしれないが。

「求めるとかいて『きゆう』と読みます。平田君のヨウ介のヨウは太平洋の洋？それとも太陽の陽？」

こちららも名前ネタで応戦する。とはいっても太平洋の方だというのは知っているが。会話を続ける手がこれしか思いつかなかったのだ……

「太平洋の方だよ。赤石君」

平田は人好きのする笑みのまま答えた。「なるほどー」と適当過ぎることを言ってみると、チャイムが鳴り響き、それと同時に黒いスーツを着た女性が教室に入ってきた。

彼女は教卓まで移動すると、鋭い声で着席を促すと、Dクラスの生徒たちはそれぞれ、自分の席に座った。そうすると、彼女は資料を配り、自己紹介を始めた。と言っても自身の名前と担当科目程度しか言うことはなかった。

茶柱と名乗った先生はその後、本学校ではクラス替えを行わないこと、担任も変わらないことを説明すると、肝心のSシステムの説明に入った。しかし、ここで問題が発生した。

「ポイントは毎月1日に振り込まれる。1ポイントで1円の価値だ。お前たちにはすでに今月分の10万ポイントが支給されている」

そう怜悧に言い放つと、クラス中から感嘆の声が響いた。が、問題はそこではない。今の言い方は非常に誤解を招く言い方だ。これでは毎月10万貰えるみたいだ。というより、事前調査がなければ、自分も間違いなく勘違いしている。しかも、さらに茶柱先生は誤解を加速する発言を繰り返した。曰く、

——支給額は実力で測られ、入学をはたしたDクラスの面々にはそれだけの価値がある

とのことだった。これは本気で間違えるぞ。……どうする？指摘すべきか？いや、さすがに目立つ。誰か気づいてくれないだろうか？平田、出番だぞ！ちらりと後ろを見るが、平田は資料をめくっている所だった。駄目だ。多分気づいてない。いや、これは気づくのは無理だよな……というか茶柱先生性格悪くないか？それともこの学校ではこういう誤解させる言い方がデフォルトなのか……？

茶柱先生が一通り説明を終えると、入学式が始まるまで待機ということになった。

茶柱先生が立ち去った後、後ろの席の平田が立ち上がって皆に言った。自己紹介をしよう。しかも、枕詞に「1日もはやく皆で仲良くするために」という言葉をつけた。流石は能力評価で協調性が飛びぬけて高い男だ。志が違う。

しかし、困った。こういうのは大体、時計回りで進行することが多い(逆時計の可能性もある)、そうなると第一声を行った平田の前にいる俺が第一犠牲者(平田は率先した事とコミュ力が高いので犠牲者カウントしない)になってしまう！

なんとか逸らせないかと思っただが、平田から無情のキラーパスが投げられた。おのれ。

「時計回りでいいかな？赤石君、次お願いできるかな？」

人の好笑みを浮かべている。うん。つい領いてしまった。仕方ない、ここは再び名前ネタで行くか……？

「赤石求です。【きゆう】は【求める】の求です。趣味は………
一応？チェスが少しだけ得意です。3年間よろしくお願いします」

パチパチと小さな拍手が聞こえてきた。名前ネタはあまり反応が良くなかったため急遽、趣味の話をはじめたが、そもそも趣味などなかった。いや、ハツキングはもう趣味みたいなものだが、まさか言うわけにもいかなかったのだ。仕方ないのでチェスと言ってみたが、そもそもチェスなんて最後にやったのは何時だったか？

またも思考が脱線していくと、自己紹介の輪は次々と広がっていき、櫛田のターンになった。曰く、同学年の全ての生徒と友達になるそうだ。それは、流石に目標が高すぎないか？というより、学年全体なら俺や綾小路、そして高円寺も含むが大丈夫か？いや、櫛田の友達の定義が限りなく緩く、喋ったら友達、クラスメイトなら友達とかかもしれない。もしくは連絡先を知っていたなら友達という可能性もある。

あ！それなら俺、学年全体どころか学校全体の全生徒と友達だ。いえーい、櫛田、見てるー？ ……やつても櫛田なら許してくれそうなの雰囲気があるが、周りが絶対に許さないだろうし、何より自分がそんな事を言える度胸が無いので絶対やらないが……というより、おもいつきりハツキング能力がバレルので、できない。

そんなこんなで、途中、須藤が出て行ったり、綾小路が渾身の一撃を放ったりなど見所が豊富な自己紹介だったが、比較的穏当に終了した。とりあえず、癖の多いやつが多すぎた。寮に帰ったら情報を整理せねば……！

自己紹介が終わると、入学式に整列して向かっていったが、特に面白みにあることは無かった。あえて挙げるとすれば堀北生徒会長だろう。

非常に優秀な生徒という評価に偽りはなく、カリスマ性を感じた。ただ、どうも正攻法に拘り過ぎるような人柄だった。よく言えば真面目すぎると言うべきだろうか？変な感じだが、これまで見た生徒の中で一番、奇襲に弱い印象を受けた。自分でもワンチャンあるんじゃないか？と思ってしまう。

いや、正面から戦ったら必ず叩き潰されるが、ハツキング・陰謀主体の自分からすると、かなり相性が良い相手に見えた。まあ、3年生である彼と直接対する機会は無いだろうか……

入学式終了後、クラスの皆でカラオケにいかないかという話になったが、今はすぐにでも寮に戻る必要があったため、平田には辞退を伝

えておいた。正直、平田との繋がりには維持したいが、席が近い以上、焦る必要は無いだろう。あと、人前で歌うのなんかイヤだ。

ちなみに綾小路や堀北・高円寺といった非コミュ戦士たちは素早く戦場を離脱し、平田・櫛田の攻撃を逃れた。あれが名将というものだ。対人関係に全く執着せずに離脱する。見習いたいものだッ！ いや、冗談抜きに淡々と帰宅モードに入れる彼らはすごいと思った。

帰宅すると、素早くPCを起動し、ハッキングを行う。まずは、カメラだ。特殊なルートを使い、学園内のDクラスのカメラにアクセスを開始した。カメラは常時起動しており、生徒の監視を行っていた。そして、ある時刻になると、教室の扉が開かれ、俺と綾小路が入ってくる。そこで一時停止をかけ、画像を特殊なプログラムにかけ、拡大・鮮明にした。

画面内の俺が僅かに上を向く、そして隣の綾小路はじっと俺の側頭部と視線の先を見ている……ように見える。正直、人間の動作や心理は専門ではないため分からなかった。しかし、見ている気がする。一度再生をかけると、画面内の俺が一瞬硬直したあとカメラを見回し、口を開いた。綾小路は俺の言葉を聞くと観察を終え窓側の自身の席へ向かっていった。そこで再びストップをかけた。

「やっぱり、見られてるよな、綾小路に。あいつは動くものを追いたくなるタイプなのか？ うーん。とりあえず綾小路の入学時に評価でも見るかー」

再び指を動かし、高度育成高等学校の評価一覧にハッキングをかけた。そして画面に綾小路の写真と評価が表示された。

氏名：綾小路 清隆（あやのこうじ きよたか）

クラス：1年D組

学力：C

知性：C―

判断力：C―

身体能力：C―

協調性：D

【面接官の評価】

積極性に欠け将来への展望なども持ち合わせておらず、現段階では期待の薄い生徒だと言わざるを得ない。

——え？

何といえいいのだろうか。なんとも普通の生徒だった。俺からハツキング能力を引いたみたいだな生徒だ。俺の勘違いか？勝手に思い込みで警戒してただけだろうか……？なんとも腑に落ちない。でも協調性Dはなんとなく分かる……

それにしても面接官の評価が致命的だな。いや、確かに物事に対して達観しているというか、やる気が無さそうな印象が強いが……うーん、学力は入学時の成績できまるが、知性は面接の応答にもよることを考えると……面接の時はやる気がなかったとかだろうか？気分で能力が変わるタイプとか……？

なんにしてもこの評価がすべてという訳ではないだろう。もちろん、これは綾小路だけに言えたことではないのだが……どうにも自分は面接官の評価や学校が決めた基準に引っ張られ過ぎた気がする。

とりあえず、綾小路に関しては、いったん保留だ。今日はなんだか一旦保留してばかりだ。なんとも想定外の事態が多い。いや、おそらく半分以上は綾小路が原因だが。

次に調べる事は、他クラスについてだろう。特にSシステムの説明が気になる。はたして茶柱先生が解りにくいことを言っているのか、それともこの学校の性質なのか……

結論。A・B・C全てのカメラのアクセスし音声も確認したが、説明の仕方は恐ろしい事にほとんど同じだった。もちろん話し方には個人差はあるが、言い回しが勘違いさせやすいという点においては4クラスとも同じであった。

これは完全に決まっている事項であると見るべきだろう。……口頭で決まった事項だろうか？それとも例年決まっているのか。一応調べてみるか……おお！見つけた。新入生への言い方マニュアルだ

！……ふむふむ。どうやら誤解させる言い方は学校の決まり方針のようだ。

それにしてもこの学校はマニュアルが多いな……事前調査にかなり時間を使ったが、こんなものまであるとは……いや、逆にこの高校はマニュアルに強く影響されていると考えることができるな。それならマニュアルを閲覧できる自分がやはり優位か？……問題は自分は抜けているところだな。能力の持ち腐れというべきか。

とりあえず、振る舞いには気を付けよう、ハッキング能力は警戒されていたら使いにくくなるからな……

あとは、せっかくだし、カメラを使って各クラスの動向でもチェックするべきか？いや、ポイントの詳細について調べるか？やるべきことがたくさんあるが……とりあえずはポイントだな。生活にも直結するしと思いい調べた結果はだいたい以下ようになった。

・茶柱先生の説明通りポイントで買えないものはない。中には校則を変えることができる。

・クラスポイントの1000倍の値が毎月1日に端末に支給される。
・入学時点で各クラスのクラスポイントは1000である。ただしクラスポイントは増減する。

・ポイントは学生証とも連動している携帯端末を用いて使用する。
・学園には無料の商品があり、ポイント無しで入手することができるが、1月に3度など回数制限がある。回数制限の判定のためには学生証が必要であるため、この方法で商品を購入する場合も携帯端末が必要である。

・端末間でポイントのやり取りが可能である。また匿名の相手に対してポイントを渡すことも可能である。

・支給や使用、端末間でのポイントのやり取りによって増減するプライベートポイントの記録は学園本部内にあるサーバー内に保管される。生徒が在籍している限り記録は残る。

サーバー内はなんとかハッキング可能であったため、時間をかけれ

ば個人のポイントの使用履歴や支給履歴は調べることができるだろう。しかし一方でサーバーに保管されることからポイントの不正受け取りは難しそうである。支給させて、サーバーのデータを削除すれば受け取りはできるが、そうするとポイントの使用や端末間でのやり取りの際に発覚する恐れがある。いや……端末のやり取りは双方の送受信履歴を消せば……ダメか、今度は相手側がサーバーのデータよりも多くポイントを持っていることになる。そうすると、捜査が行われ相手側から自分がバレる可能性がある。

つまりは、俺のハッキングは本物に限りなく近い偽札作りに近いのだ。偽札そのものは誰にもわからないが、通貨の総量が国家が定めた値より多くなって、偽札の存在がバレてしまうという事だ。さらには電子通貨なので発覚が早い。うーん、もう少し捻ればポイントを不正に得ることができそうだが……難しいな。

今日のハッキングはここまででいいだろう……明日からは授業だ。とりあえずは授業態度でマイナスをとらないように普通に受け、あとは平田との繋がりを大切にしよう。

媒介者

入学式から十数日が経過した。授業に関しては中々興味深かった。というのも、この学校の教師のレベルが思った以上に高かったからだ。どの授業もなんらかの長所があった。それは教え方が面白かったり、解りやすかったり、整理されていたりと様々だった。

具体例を挙げると日本史の茶柱先生は、歴史を時代・文化・人物ごとに整理していて、非常に解りやすく、すんなりと頭の中に入ってくるのだ。

元より、ハツキング抜きにして、多少は真面目に受けようと思っていたが、思った以上に本気で授業を受けてしまった。まあ、悪い事ではないだろう。

続いて平田に関してだ。1日に1度平田に声をかけることを自身に義務付けてきたが、状況は芳しくない。

いや、悪くはないのだが、平田が隣の席の軽井沢と付き合ってしまった。その軽井沢が前後の松下・篠原と平田を巻き込みながら行動しているため、平田に声を掛けにくく、またかけたとしても、軽井沢が来てしまうため、すぐ会話が終わってしまうのだ。

最近は、さらに森・佐藤がこの集団に合流し、平田が要塞化されてしまった。幸いなことに平田からはそこそこ話をする相手と認識してもらい、たまに声を掛けられるが……

反面、平田以外とのコミュニケーションはほぼ最悪だ。初日に話した綾小路は池・山内・須藤とつるみ、まったく交流がなくなってしまった。

他にも男子・女子ともに小集団を形成し、今更入ることが難しくなってしまったのだ。気づいたら皆、仲良くしてたのだ……カメラで調べたが、原理がまったくわからなかった。

現状、1日のうちに話をする相手は平田ぐらいである。極稀に櫛田が声を掛けてくるぐらいだろうか？

学校以外の活動では放課後は常にハツキングを敢行している。情報集めを重視し、他クラスの動向の確認とクラスポイントの増減要因

について調べた。

まず、他クラスの情報としては、非常に入手が容易だったのはBクラスだ。

Bクラスは後ろめたい事が無いのか、クラス内で堂々と会議を行っており、カメラで筒抜けであった。またDクラスと同様に自己紹介を行っており、全体的にDクラスよりも協調性に優れているように感じられた。現状のリーダーは予想通り一之瀬となった。少々予想外だったのは神崎が思った以上に協力的な人物であり、Bクラス内で独特のポジションを確立していた。

続いてCクラス。ここは最初に5日間しか情報を仕入れることができなかった。ある意味Dクラス以上に荒れたクラスであり、初日からギスギスした雰囲気であった。が、数日経過すると、石崎や山田といった面々が負傷しており、龍園が支配者として君臨していた。

カメラの範囲内で彼が活動していたのが見れたことから（気づいたら石崎と山田は負傷していた）、カメラを意識して行動している可能性が高かった。カメラを警戒していること、おそらくカメラの無い所で暴力を行っていることから危険な人物だと感じられた。また、龍園はカメラを警戒しているためか、入学式から5日経過すると、自身の独裁の宣言とCクラス全員の連絡先を提出させ、それ以降カメラの前では活動はしなかった。

Aクラスは最も混沌としたクラスであった。

まず、坂柳は美少女であった。入学前は写真も性別も不明という得体のしれない人物だったため、少々、というかかなり驚いた。儂い感じの銀髪の美少女であり、丁寧な言い回しを好んでいた。が、この坂柳は中々の曲者であった。

入学当初は葛城を支持するような動きを見せるが、葛城がAクラスの掌握を始めると、反対活動を開始。自身の派閥をいつの間にか（おそらくカメラ監視外で）形成し、Aクラスは二分されてしまった。

坂柳はカメラを警戒し、カメラの監視網を避けて活動する一方で、葛城は後ろ暗いことがないのか、カメラの前でも堂々としていた。活動もカメラの監視内で行われることが多かった。勿論カメラの監視外でも活動をしているのかもしれないが……

続いてクラスポイントの増減なのだが……これは少々難しい問題であった。まず朗報としては、特別試験というものが定期的開催され、その結果によりクラスポイントが増減するのだ。

他にも中間試験終了後に増加するらしい……しかし一方で悲しい問題として、授業態度によって減点されるということだ。最初に述べたがこの学校の教師はレベルが高く、気づくと授業に集中してしまうのだ。……授業に集中しすぎて、周りをよく見ていなかった。

さらに俺が抜けている点として、「こんな面白い授業なのだから皆聞いているだろうな」と勝手に思い込んでいたことだ。クラスポイントの増減のルールの情報を不正入手した次の日、須藤が休み時間中に爆睡しているのを目撃したとき、恐ろしさに気づいた。

そこで、授業中に隣の席の平田要塞警備兵の1人である篠原を周りに悟られないようにチラリと見たが、絶句。なんと携帯端末を弄っていた。

おいおいおい、コイツ死んだわ。

その日は帰宅後、急いで、Dクラスのクラスポイントを確認すると180c1という恐ろしい値が……

これが昨日の話である。

そこで本日の課題「クラスポイントの減少を防ぐにはどうするか？」

1、赤石は突如皆を説得するアイデアを思いつき披露し、ポイントの減少を防ぐ。

2、仲間（平田）が助けてくれる。

3、助からない。現実是非情である。

俺としては（1）にマルをつけたいが……現実的ではない。という

ことはここは(2)だ。ただ平田にはなんと説明しようか……？

平田がトイレに行く時を狙い話しかけ、無事昼休みに図書室で2人きりで会う約束を取り付けた。昼休みになり、図書室に行くと、初めて見る「見知った」少女が本を選んでいた。Cクラスの椎名ひよりだ。彼女は龍園から距離をとっているようで、Cクラスでは孤立気味であつたが、同時に龍園には頼りにされているようで、よく龍園から話しかけているのを見かける。

といつても椎名本人はあまり乗り気ではなく、また龍園と椎名の話はカメラの監視下での行動であるため、カメラを嫌う龍園も本気で椎名を自身の活動に組み込んでいるわけではないだろう。軽い相談役のような感じである。

そんなことを考えていると平田が図書室に入ってきた。彼はこちらに気づくと軽く手を振り、遅れてきたことを詫びた。本棚を使い椎名の視線が入らないように位置を調整し早速本題に入った。

「平田君。今日は来てくれてありがとうございます。実はさつき言つたように相談があるんです」

そういうと、平田はまったく不快な素振りも見せず、笑顔で答えた。「赤石君が困っているんだから来るのは当然だよ。どんなことかな？僕にできることなら喜んで力を貸すよ」

すげえ。コミュ力が高いというのもあるが。多分平田の今までの活動からこれは本心で言っている可能性が高い。平田大明神、いや救世主平田様だ。ここは頼らせていただこう。

「少し言いにくいことなんです……Dクラスの授業態度のことなんです」

そういうと、平田は若干緊張したように「Dクラスの？」と聞き返した。ん？なんでそこで緊張するんだ……？

「はい、その、なんというか、Dクラスはもう少し勉強に集中した方が

いいと思うんです。少なくとも勉強する意思がある生徒に配慮した方がいいと思うんです。その一、平田君や堀北さんのように集中力が強い人なら何も感じないと思うんですが、俺や、あとちよつと言いいくいです。幸村君みたく周りが少し気になるタイプからすると、その一、ちよつと他の皆の授業中の行動が気になってしまつて……」

そう言うと、平田は少し黙つたあとこちらを見た。

「確かに君の言う通りだね。Dクラスは少し授業に集中していないところがあるね」

よし来た！あとは流れで……

「ええ、そこで、その言いくいんですが、自分から言うとな角がたつので、その何といますか、もしできれば、平田君の方からクラスにやんわりと言つてもらえないでしょうか？平田君はDクラスで一番人望があるので……」

平田は若干険しい顔立ちになるが、すぐ笑顔になりこう返した。

「そうだね。わかつたよ。僕の方から今度皆にお願いしてみるよ。赤石君教えてくれてありがとう。君はクラスのために勇気をもつてくれたんだね。嬉しいよ」

実に爽やかな返しであった。しかも面倒なことを頼まれたのに、返事が「ありがとう」である。まさしく仁君平田様。よーし、作戦成功！今日はこれで――

「ただ、僕からも一つお願いをしていいかな」

やだ。なんか面倒事っぽいもん。

「えつと、なんでしよう……？」

すごく嫌な予感。だが、無情。平田はいつもの笑顔で言つてのけた。

「今日、軽井沢さんたちにカラオケに行こうって誘われててね。いつしよに来てくれないかな？」

4時から空手の稽古があるの付き合えないわ。というか人前で歌いたくない。あと何で軽井沢と行くのに誘うの？彼女と2人でデートしろや。多分、俺が行ったら軽井沢キレるぞ。

「その、すみません。今日はちよつと用事がありました……」

できるだけ申し訳なきような顔してみる。ちゃんとできたか分からないが、平田は少し目を瞑った後、再び切り返した。

「なら、来週でどうかな？来週ならポイントも入ってきてるし、なんならDクラス皆で行くのはどうかな？」

来週、Dクラスのポイント収入は多くて1万8千。そして一部の生徒はもうポイントを使い切っている。どう考えても、Dクラス皆は無理だろう。ならば……

「うん、それなら。実は軽井沢さんたちはちよつと苦手で。ああいや、嫌いという訳ではないんですが……でも『みんなで』一緒なら行けると思います」

そういうと、平田は目を輝かせて、喜んだ。……ちよつと、いや、けつこう罪悪感を感じる。

「うん！なら良かった。来月は皆で行こうね。入学式の際は赤石君が居なくて皆寂しそうだったから。できれば堀北さんや綾小路君も参加してくれといいんだけどね……赤石君は2人とは仲が良かったりするかな？」

俺は居なくても誰も寂しいとは感じないと思うが……いや、平田のこの言い回しとしては堀北と綾小路との関係があるか聞きたいんだよな……どう答えたものか……

「すみません。2人ともあまり喋らないので、よく知らないです」

なんだから、平田に少し悪い気がしてきたが……いや、でも、まあ、Dクラスの態度が改善されれば1万8千ポイントは失われずに済むから、来月次第だが、平田に得がないわけではないか……

「そつか。でも、良かったよ。今日は赤石君と話せて。それじゃあ、またね」

そう言つて平田は図書室を後にした。チラリと本棚から顔を覗かせると、椎名が先ほどから全く動かずに本を読んでいた。多分聞かれていなかったと思うが……まあ、藪を突いて蛇を出す必要もないと、立ち去ろうとすると椎名と目が合った。

椎名は少し驚いた顔をした後、左右を見て、そして誰もいないこと

を確認すると後ろに振り向き、また誰もいないことを確認すると、再びこちらを見て、口を開いた。

「私に何か御用でしょうか？」

——しまった。つい仕草が可愛くて逃げそびれた。こうなれば、コマンド「適当な事」を言うだ！……最近こればかり選んでるな……「いえ、その読んでいる本が気になってしまつて。邪魔をしてしまつてすみません」

そう言つて素早く背中を見せ撤退。（走らない程度に）急ぎ図書室を離脱。これは勝つたな。と、思いきや図書室を出る寸前で袖を掴まれた。

見るといつの間にか移動したのか椎名がしつかりと袖をつかんでいた。いや、お前身体能力Eじゃなかったっけ？今一瞬で距離を詰めたよね？お前も能力隠してる系なの？

そう現実逃避を始めるが、椎名は目を輝かせて、こちらに話しかけた。

「この本が気になりますか！これはウィルキー・コリンズの『月長石』という古典推理小説を代表する一作ですよ。私はもう持っているのどうぞ読んでみてください」

白い肌を若干赤くさせながら、迫るように本を押しつけてきた。思わず受け取つてしまうと、椎名はにっこりと万遍の笑顔を浮かべた。

——いや、忙しいから読めない。どうしよう。とりあえず、純粋に気になることを聞いてみるか……

「えつと、し、あなたはこの本を読んでいたように見えたのですが、どうして持っている本を読んでいたのでですか？」

今間違つて椎名さんって言いかけた。危ない。椎名は何度か瞬きすると、不思議そうな顔で逆にこちらに尋ねてきた。

「持っている本を図書館で読むではいけないという決まりはありませんよ」

違う、そこじゃない。

「そうではなくて、ですね。図書館というのは見たことない新しい本を探す場所なのではないかと思うんですが……」

話題を修正する。そしてさりげなく、『月長石』を近くの台に置く。椎名はそれを見ると、にこにこしながら『月長石』を回収し、こちらに再び押し付けてきた。やめろ。

「それはとても素晴らしい考えだと思います。近年、図書館では本を読む人が悲しい事に減っています。また、何を勘違いしたのか、図書館で本に関わらないことをする人や図書館で騒がしくする人も増えています。いえ、多少勉強場所として使用する分には私も文句はありませんが、図書館に敬意を払い、勉強に使用した時間の2倍の時間は本を読む時間に使ってほしいです」

と、若干怒り気味に言つてのけた。勉強に使用した時間の2倍というのは過激思想ではないだろうか。せめて勉強に使用した時間の10分の1くらいにしないか？というより『月長石』を押し付けてきた件に関してのコメントはない。それどころか、元々こちらの質問は『なんで持つてる本読んでるの』なのにそれにも答えてない。

椎名、コイツは危険すぎる。多分だが何かと心配性で突っ込み気質の自分と相性最悪だ。撤退準備に入ろう。

「なるほど、確かに仰る通りですね。あ、モウコンナジカンダ。すみません。ちよつと友達と約束がありました。あと自分、まだ図書カードを作っていないので、『月長石』はまた今度にしようと思います。ありがとうございます。じゃあ、さようなら」

素早く言つてのけ、『月長石』を椎名に渡すが、椎名は受け取りを拒否。しかたないので、さきほど置いた台に『月長石』を置き撤退した。椎名に『月長石』の片づけを押し付ける形になってしまったが……あ、違った『月長石』は元々椎名が読んでた本だった。しかし、なんだか怖かったので後ろは振り向かず脱出した。

学食に向かい比較的安価の定食を選び、席を探す。平田と椎名と会話をしている時間が休み時間の後半に入っているため、空いている席も多かった。定食が置かれたトレイを持って端の方の人がいないブロックに座った。ふう。やっぱ人がいないと良い。軽く目を瞑り、力を抜いた後、定食を食べるため目を開けた。

目の前には定食はなくなっており、『月長石』が置いてあった。

——え？

驚いて前を見ると、銀髪の美少女が座っていた。何故か彼女の前にはトレイと定食があった。

「同席してもいいでしょうか？」

駄目です。

「ええっと、その、その定食、あなたではないですよね」

一応聞いておく、もしかしたら1億分の1くらいの確率で目の前の定食は椎名が買ったもので、何らかの現象により俺の定食は『月長石』へと変化した可能性が……ねえよ。

「そうですね」

いや、返せよ。仕方ないので素早くトレイを掴むが、ダメだった。それより早く椎名がトレイを掴み抑えていた。やめろ。はなせ。

「あ、あの、返してほしいのですが……？」

早く返してくれねば冷める。俺は冷めた味噌汁が許せないタイプだ。頼む返してくれ。何でもするから……って言ったら最後、死ぬまで推理小説読ませてきそうだから言わない。

「友達と約束があるあなたのために『月長石』を借りてきました」

椎名はゆったりとした口調で言った。怒ってはないように見えるが笑ってはない。これは、あれだね。嘘ついたことがバレたね。仕方ない。毒を食わねば皿までも。一転攻勢だ。

「ありがとうございます。『月長石』は大切に扱いたいと思います。定食の方を返してもらってもいいでしょうか」

読むとは言っていない。ちゃんと図書館に大切に返却する。椎名は納得したのか、いつものふわふわとした笑顔で定食のトレイを離れた。素早く定食を奪還し、食べる。椎名がいたが関係ない。冷める前にながつかう。というより、最初の方は椎名と喋るだけで美少女オーラに圧倒されたが、もう慣れた。むしろいい経験だった。これでどんな美少女が来ても怖くない。

定食を食べ終わった後も椎名は笑顔でこつちを見ていた。手には『The Woman in White』と書かれた洋書を手にしていた。いや、しまった罠だ。気づいたときには遅かった。

「この『The Woman in White』は『月長石』の作者のウィルキー・コリンズが書いた本の1つですよ。これは洋書ですが、日本語版も図書館にありますよ。『白衣の女』というタイトルです。私も持っていますから、読みたくなったらいつでも言ってくださいね」

読みたくありません。

だが、今ので椎名の行動パターンが分かってきた。コイツは攻撃を行うときは必ず笑うのだ。笑顔とは本来攻撃的なものである、といった感じだ。

しかも、コイツの場合、自覚があるのか美少女なのでつい椎名の顔を直視できず視線を逸らしてしまう。そして誘導された先には本がある。椎名の地獄コンボだ。嵌めれば最後、定食が本に見えるまで小説を読まされる……なんと恐ろしい。

だが、定食を食べ終わった以上、椎名は用済みだ。そもそも『月長石』は椎名が借りたもの。又貸しは基本禁止されているはず。そこを突き……椎名が学生証端末を差し出してきた。なんだ。意味が分からない。

「定食代、お支払いしますね。少し冷めてしまったかもしれませんが。お話にも付き合ってくれましたから」

椎名は若干上目遣いで言ってきた。やめろ。『月長石』が返せなくなる。やめろ。

「えっと、いや、いいですよ。別に。それより本——」

全てを言い切る前に椎名は右手の親指を立てて言った。

「又貸しについて心配されているなら大丈夫ですよ。この『月長石』は私のものですから」

よくよく見るとこの『月長石』には図書館で見たものと違いラベルが貼ってなかった。ちよつとまでや。さつき借りてきたとか言ったやろ……許せん。

椎名の方を見ると悪戯っぽく笑っていた。けっこう可愛かった。

「あと、定食代は払わせてもらいます。学生証を出してください」

かなり強く出てきた。もしかしたら、椎名の中で何かが琴線に触れたのかもしれない。まあ、定食代1食分とはいえ、Dクラスは今後支給額が減る。ここは貰ってもいいだろう。

「えっと、ではお言葉に甘えて。ありがとうございます」

学生証を出し椎名に見せて、気づく。椎名が笑っていることに。ああ！また引つかかった。

「赤石君というのですね。私は椎名ひよりです。ひよりちゃんと呼んでもいいですよ」

名前バレた。いやまあ、いずれ分かることだが……ポイントを送るには相手側の連絡先が必要になる。勿論匿名送信機能を使えば連絡先を教えずにポイントだけ貰えるが……この状況では言い出しにくい。まずい。このままだと、なし崩し的に推理小説漬けにされる。

「椎名さん。ですか。色々ありがとうございます。でも俺は実は活字が若干苦手です……『月長石』もきつと読むのに時間がかかってしまうと思うのですが……それでもいいでしょうか？」

最後の抵抗だ。しかし残念、効果はなかったようだ。椎名は目を若干潤ませて、感動したように体を揺らした。

「苦手なのに興味をもって図書館に来て下さるなんて。とてもいいことですよ赤石君。これからはいっしょに頑張りましょうね！安心してください。私が読みやすい本を紹介してあげますから。最初は興味を持った『月長石』が良いかもしれませんので、まずはそれを読めるように頑張りましょう。ただ、『月長石』は少し難しいところがあるので、少し様子を見ながらいきましようね。何がいいでしょうか。やはりアガサ・クリステイーの名作を……いえ、あせってはいけませんね。それに推理小説に限らなくてもいいかもしれませんし……」

ひえ。椎名怖い。伊達に龍園の相談役をやってないな。こんな怖い食堂にいられるか、俺はDクラスに帰るぞ。というよりそろそろ休み時間が終わるので帰らなければいけないのだ。

「椎名さん、あの、そろそろ昼休み終わりますよ……」

そう言ってみると、椎名はピタリと止まり、学生証端末を使い、定食代をこちらに譲渡してきた。残念ながら番号は交換することになった。あと『月長石』も渡された。

「では赤石君。また会いましょうね。小説について話したいことがあるれば何時でも言ってくださいね。あと私のことはひよりちゃんと呼んでくれてもいいですよ」

やだ。

椎名は去っていき、『月長石』だけが残された。これ読むのか……

そして、波乱万丈の昼休みが終わり、午後の授業を順調にこなし、HR終了後、平田が立ち上がりみんなの前に立った。授業を真面目に受けるように皆にお願いしたのだ。流石は平田、約束も守るし、話も通じる、おまけに嘘もつかない。椎名とは大違いだ。平田の御言葉により女子の多数と男子の一部は了承したが、残りはなんとも不満そうだった。あと綾小路が平田の方をじっと見ていたのが多少不気味だった。相変わらず綾小路の考えはわからん。

平田の演説終了後は用事をはたすため、家電量販店に向かう。アリのバイという訳ではないが、用事と言ってしまった以上は直接寮に戻るのほ心情的に抵抗があった。

よって当初の予定を前倒しし、必要な電子機器の購入することにした。……のだが、思ったより高い。現在の所持ポイントは8万と少し。節約して使っているが、来月の支給が18000未満であることを考慮すると、予算はせいぜい1万程度だろう。とりあえず、ハードディスクだけは買うか……できれば、集音器と小型の無線機とカメラが欲しいが、最悪外付けハードディスクさえあれば、情報戦ではそんなに困らないだろうし。

——携帯端末の通信傍受。会話とメールの内容を特定の人物に限れば入手可能である。さすがに学園内の人物全員となると組むシステムも情報量も多すぎて処理できないが、特定の人物だけであれば、外付けハードディスク一つあれば保管は十分であるだろう。

つまり、動向が解りにくい龍園と坂柳の通話内容を狙って傍受可能だ。とりあえず、安価のもので6000ポイントで購入可能であったので買う。

ついでに一応カメラを確認するためにカメラコーナーに行ったのだが、そこには、どこかで見た少女がいた。服装から1年生だと思いが、思い出せない。縁が強いメガネをかけている……同じクラスにいたような気もするが……最近他のクラスのカメラばかり見ているせいか、肉眼で見た自分のクラスメイトだったかカメラ越しで見た他のクラスメイトだったか判別がつかない。

そうやって、少女を見ていて気付く。あ、これ、椎名の時と同じパターンだと。素早く視線を外し、物陰に隠れる。いや、隠れる必要はなかったかもしれないが念のためである。幸い、椎名の時とは違い向こうは気づいていないようだった。まあ、椎名レベルのヤバイ奴はそうはいないので過剰な警戒であったと思うが……とりあえず陰から怪しくない程度に女子生徒を見る。

その後、こちらを見ていない事を確認し、そそくさと監視カメラコーナーを巡り、その後集音器コーナー、最後の無線コーナーを回った。一応盗聴器コーナーも見たが必要なポイントは高めであった。やはり当初の予定通り通信傍受用のハードディスクだけでいいだろう。ポイントに余裕が出るか、もしくはは必要に駆られたら、集音器と無線から頑張って盗聴器を作るか……機械工作はあまり得意ではないが、幸いシステム構築はハッキング能力を駆使できるようになった時にマスターした。必要部品を揃えられれば、盗聴器より安く高性能のものを作れるだろう。

家電量販店を去り、あとは寮で情報の整理でもと思ったが、やはりハプニングが発生した。家電量販店を出て、人通りが少ない路地で後ろから猛烈なタックルを浴び、組み敷かれた。一瞬椎名の襲撃かと思っただが、ヤツはこんな大きくなかったはずだと思い後ろを向く。

背中には顔を真つ赤にした先ほどのメガネの少女がいた。どうやら彼女はマウントを取り続けるタイプらしく、俺の背中に乗ってから動く気配がなかった。

「あの、すみません、どいてもらっていいですか？」

とりあえず、頼んでみた。そうすると少女はさらに顔を赤く染め、「ち、違うんです」とつつかえながら両手を前に出し左右に振った。

いや、そうじゃなくて、どいてよ。

「えっと、もしかして、何か事情があつて動けないのですか？人呼びますか？」

「人を呼ぶ」のところで少女はさらに顔を真つ赤に染めた。この子はどこまで赤くなるのだろうかと思っていると、なんと少女は驚くべき暴拳に出た。前に出してい両手を使いこちらの背中を押してきたのだ。プロレスごっこかな？

「ち、違うんですって、あの私、さつきから視線を感じて……ろ、路地に入つて、それで誰かが、その、走ったら、ぶつかつてしまつて、そのすみません。私、わざとじゃなくて、その、すみません……」

なお、この間、彼女は背中に乗ったまま、両手を使いこちらの背中を圧迫している。

「そろそろ、厳しくなつてきたので、降りてもらっていいですか？」

そう言うと、ようやく自身の体勢に気づいたのか、彼女は俺の上から降りた。ふう。ようやく一息つける。

「えっと、とりあえず、次からは前を見て走ってもらえると嬉しいです」

お昼に絶対読書させるガールに出会つたと思つたら、放課後には絶対マウント取るガール（物理）である。この出会いは素早く破棄したいところだ。

「はい、すみません。赤石君」

おい、なんで俺の名前知ってるんだよ。

「あれ？えつと、すみません、どこかで会いましたっけ？ちよつと記憶力に自信が無いもので……」

正確には最近記憶すべき事項が多すぎてパンクしているだけかもしれないが……というより、名前を知っているということは、この少女はDクラスだったか？いまいち記憶にない。こんなプロレス少女が居たら話題になっていと思うが……うーん。

こちらが悩んでいると、少女は若干戸惑いながらもオドオドと自己紹介を始めた。

「あ、あの同じクラスの佐倉です。その赤石君は前の方の席だけど、後ろの方の席にいるので……」

後ろ……ダメだ。思い出せない。いや後ろの方の席は須藤・堀北・綾小路ぐらいしか覚えていないから、単純に忘れていただけだろう。「同じクラスの人でしたか。忘れてしまいましたすみませんでした。一応、言いますと、Dクラスの赤石です。よろしくお願いします」

適当な事を言いつつ距離を少しとる。この子は暫定椎名梓だ。つまり要危険人物だ。

「はい、よろしくお願いします。あのさつきは本当に……？……？……？あれ……？」

え？何？この間。普通に怖いんだが……

「あの赤石君。ちよつと聞いて良い……かな？」
やだ。

「えつと俺に答えられる事でしたら」

恐る恐る言ってみる。

「あの……もしかしたら間違ってるかもしれないんだけど……赤石君って、人と、ううん、私と話すの苦手……？」

うん。

「えーつと、どうでしょう。確かに人と話すのはあまり得意ではないですが……多分今、初めて……？初めてですよ？初めて話す佐倉さんの事は苦手とか思わないと思いますよ？」

ぶつちやけ苦手である。なんか椎名とは別ベクトルに怖い。

例えるならば椎名のは、おいおいやめろやめろやめろ、であり、佐倉のは、え！何?!え、ちよやめろ、なのだ。

「うん、赤石君と私が喋るのは初めてだよ……でも、その私も人と話すのは苦手で、特に、その、怖い人と話すときは緊張して話せなくてね……赤石君は平田君や茶柱先生と話すときは普通に話すのに、私と話すときは、なんだか、えつと、その、私が怖い人と話しているのと同じ雰囲気を感じるの。ごめんね。変な事言ってる……」

佐倉は若干下を向きながら喋った。すごい、だいたい合ってると思う。でもせつかくなので聞いておきたい。

「えつと佐倉さんが思う怖い人というのはどんな人なんでしょうか？あ、いえ、もし、できればいいので教えてもらえると助かります」やんわりと言ってみる。佐倉は一瞬迷っていたが、俺の方の目を強く見ると、一度頷いて語り出した。

「えつと、須藤君とか、軽井沢さんとか……あと、く、……そんな感じかな」

つつかえながらも、佐倉は答えた。最後の方がよく聞こえなかったが、怖いのが方向性が分かった。つまり威圧感があるタイプだ。そうすると、俺が佐倉に怯えている理由と違うのだが……

「多分佐倉さんは威圧感のある人を怖い人だと思ってると思うんですが、そうすると佐倉さんも威圧感を周囲に出しているんじゃないでしょうか？」

出してません。でも適当な詭弁を言ってみたかったです。

「……どうだろう……でも、その赤石君は私を見るときの目が怯えているように見えて……その勘違いだったらごめんなさい」

佐倉は妙に自信があるようだった。オドオドしつつも先ほどから俺が佐倉に関して感じた恐怖を主張し続けている。いや、それだけではない、先ほどからはつきりとこちらの目を見て話してくる。正直、こちらが逸らしたくなる。とりあえず、これは墓穴を掘っている可能性があるので、話題を変える。

「あ、いえ、そんな、全然謝ることはないと思いますよ。ただ少し不思議に感じてしまってます。そういえば、先ほど視線を感じると言っ

した、それは何だったのでしょうか？ずいぶん慌てていたみたいですが……？」

人にぶつかるほど慌てるのは分かる。でも人にマウント取るほど慌てるというのは正直分らない。

「あ、はい、その実は家電量販店にいた時から視線を感じてそれで、その後もずっと視線を感じて。誰かが追ってきている気がして、走って逃げようと思ったの。そしたら赤石君とぶつかっちゃって……」

上手く佐倉が乗ってくれた。よって話を続行する。

「そうだったんですか。では、その視線は今も感じるのでしょうか？」

今もあつたら、すごいよ。何がすごいって俺が鈍感すぎるよ。

「ううん、今は感じないよ」

よかった。俺はまだ鈍感ではないらしい。……いやその証明にはならないか。

「その、こういう事は何度もあったのでしょうか？」

初めてだったら過剰反応すぎない？あ、いや、俺も小さいころ暗い道路を歩くのが怖かったし、変な事でもないか。でもタツクルからのマウント取りはしなかったな……

「えっと今日で2回目かな。前も、あの家電量販店に行ったときに視線を感じて、最初は勘違いだと思ったんだけど、だんだん誰かが近づいてきた気がして……それで、今日も感じたから店を出ただけど。前回は店の中でしか感じなかったから……」

2回目というのはどうなんだろうか……自意識過剰の気もしないでもないが、だが女性はこういういった視線に敏感と聞くし、本当のことかもしれない。うーん。これが4回や5回なら偶然ではないと思うが。あ、いや監視カメラを調べればわかるか……今度時間に余裕があったら調べるか？いや、なんで佐倉のために……？」

「赤石君はどうしたらいいと思う？」

警察に相談するとか……？」

「あの、ありきたりですが、警察に相談するというのはどうでしょうか？」

そう言うと、佐倉は怯えたように若干目を逸らした。

「その、警察の人はなんだか怖くて」

俺にどうしろと？

「では、しばらくの間、あの家電量販店には行かないというのはどうでしょうか？それで視線を感じなくなればいい事ですし、逆に視線を感じるなら警察へ。というのでどうでしょう」

大丈夫。佐倉は可愛いと思うので警察も優しいよ。とは言えないので適当な事を言う。もう困ったら適当な事を言うでいいかな……？いや、椎名の時は失敗しているしな……

「う、うん、そうしようかな……」

今回はうまくいった。あとは適当に別れるだけだ。ここは慎重に……

「うん。そうするのが良いと思いますよ。それじゃあ、俺はこのへんで、明日またDクラスで。さようならー」

完璧だ。前回、椎名の時は、焦って早口になってしまったが、同じ愚は犯さない。いや最近同じ間違いばかりしているが、今回は大丈夫だ。話し方は自然だ。たぶん。

「あ、待って！赤石君！」

やだ。

「えっと、何でしょうか？」

聞こえないフリも考えたが、距離が近かったことと、今までで佐倉の声が一番大きかったことから不自然すぎるため止めた。そうすると、佐倉は若干心配そうにしながらこちらを向き言った。

「もし、良かったら、また話しかけても……いい……かな？」

だめ。

「ええ、いいですよ」

断る理由が思いつかなかった。佐倉は俺の答えを聞くと安心したように笑って、そして手を振って去っていた。なんか罪悪感を感じるからやめてほしい。なぜか椎名の時より心に響いた。アレだ、悪意が無い分、よりキツイのだ。佐倉の相手をするのは……

こうして、昼休みに続いて放課後まで大変な日であった。この日は寮につくと、疲れていたなのでハードディスクと通信傍受の準備だけして活動は終わりにした。実際の傍受開始は来週からでいいや……

水泳とお昼と小テスト

あの忌まわしき椎名・佐倉事件から3日が経過した。朝起きて手元の携帯を見ると、新着メールが3件あった。椎名からであった。『月長石』の読み込み具合、今日のオススメの1冊、そして今日こそは一緒にお昼を食べるまたは放課後に会おうという誘いの文だ。

椎名と番号を交換して以降、毎日のように『月長石』の読み込み具合とオススメの1冊と、会談を要求してくる。特に最初にメールは凄かった。

なんと今年のオススメの1冊、今春のオススメの1冊、今月のオススメの1冊、今週のオススメの1冊、今日のオススメの1冊の5通のメールが一遍に送られたのだ。あの時は恐怖に震えた。そして恐る恐る、お昼は昨日食べたばかりだからと断り、放課後はちよつと断った。さらに『月長石』に関してはまだ読んでいないと返し、オススメ本に関しては見なかったことにした。

それからは、毎日のように来るオススメ本紹介メールは見なかったことにし、『月長石』は最初の数ページだけ読み、「少し読みました、まだ序盤です」と返し、会合は拒否した。

しかし、もはや椎名の忍耐力が限界に達したのだろう。今回の会合に関するメールは今までで一番気合が入っていた。何でもお昼を一緒に食べてくれるなら昼食代を出すという内容であった。

ちなみに放課後に会ってくれるならアガサ・クリステイーの名作を貸してくれるらしい。こちらに何のメリットも無いところが実に椎名らしかった。

なお、どちらとも拒絶した場合は、放課後、Dクラスの教室に乗り込むという内容であった。今日は早退しようかな……いや、クラスポイントに影響が出そうなので、ここは勇気をもって昼飯を一緒に食べることにした。放課後だと何時まで拘束されるか分からないが、昼飯時間なら拘束時間は短い。実に合理的な判断であった。昼飯代に釣ら

れたわけではない。

椎名に「お昼を一緒に食べましょう！学食ですか？」と返しておいた。

今日の午前中の授業は体育の水泳だった。おいおいまだ4月だぞ……と思ったが、教師は必要になるの一点張りだった。いや、夏でいいじゃん。と思った。

せっつかくなのでこの気分を共有しようと近くにいた綾小路の話しかけようと思ったが……やめた。なにかを考えているようだった。どうも、綾小路とはいっても間が合わない。仕方ないので、とりあえず授業を真面目に受けることにした。

授業は幸いな事に室内のプールで行われ、プールの水も温かく、春でも気持ちよく入れた。一瞬見学の生徒たちが目に入った。女子の半数と男子の一部が見学であった。

体調不良がこんな同時に発生するとは思えないので、純粹に参加したくないのだろう。まあ、生物的理由もあるし、異性の肉体が近いのは嫌という理由もあるだろう。他にも泳げない人はきつと水の中ではかなり心理的な抵抗を感じるだろうし、仕方ない面もあるのだが……

そこまで考えていると見学場所にいる佐倉がこちらに手を小さく振った。左右を見て、後ろを見るが俺しかいなかった。なんだか椎名みたいな動きをしてしまった……恥ずかしい。

——佐倉とはあの事件以降、教室以外で会うと偶に声を掛けられる。この数日話した感じ、おそらくマウントを取るのが趣味という訳ではなく、アレは完全に事故であったのだが……第一印象的に苦手意識がある。ちなみに教室にいるときは全く話しかけてこない。

佐倉の方にそれとなく頷き、授業に集中する。といっても初めての

水泳の授業なので水遊びみたいなものだったのだが……最後先生がとんでもない事をした。

男女それぞれで50M自由形で1番早い生徒に5000プライベートポイントを贈呈するというものだった。なお遅い生徒は補講らしい。5000ポイントというのは中々心が躍る数字である。

なぜなら、Dクラスのクラスポイントは平田の努力空しくついには30c1となってしまうている。この数日で何があったし。もはやこれは来月0ポイントが切実にあり得るのだ。ここで5000ポイントあればと思ってしまう……だが、正直、平田や須藤、そして高円寺といった面々に勝てる気がしなかった。

とりあえず、ある程度頑張つて、補講にならなければ良いかという気持ちでチャレンジすることにした。

俺がいるグループでは須藤と綾小路が参加していた。近くで見たら綾小路はかなり筋肉質であった。きっと何か運動でもやっていたのだろう。堀北は興奮して綾小路の筋肉に触れている……あの2人はいつもあんな感じだ。付き合っているのだろうか？

イチヤイチヤする2人は放っておき、水中に入り、スタンバイをする。綾小路が若干遅れ気味に水中に入り、1グループ全員の準備が整った。一応頑張るがどうなるか……

先生の合図とともに泳ぎ出す。正直、泳いでいる最中に回りを観察する余裕はなかったが、最初の数秒で、左のレーンにいる須藤がすごい勢いで突き抜けていったのは分かった。うん、どう考えても1位は無理だ。だが、補講を避けるため、クロールを続けた。無事壁にタッチすると、先生から「赤石、31秒」と告げられた。

どうやら7人グループの中では3位と結構良いランクだった。ちなみに綾小路は思ったより遅く37秒である。その筋肉は飾りか？いや、水泳は普通なのかもしれない。40秒くらいまでなら高校生としては平均のラインだ。ただ、厄介なことに綾小路の方を見ているのがバレた。

綾小路はこちらを見るとゆつくりと近づいてきた。ゴメンナサイ、その筋肉は飾りじゃないです。

「赤石、速かったな。水泳をやってたのか……？」

どうやら怒ったわけではないようだが、何かを疑うようなそんな目をしていた。なので正直に答えることにした。

「小学生の頃スイミングスクールに行つてまして、といって水遊びの延長みたいなものだったので……競泳の選手とか水泳部の人には普通に負けると思いますよ」

綾小路は納得したのか「そうか……」と言つて決勝の試合を見に行つた。決勝は平田・須藤・三宅・高円寺で行われたが、高円寺が圧倒的な力で一位となつた。あの須藤を倒すとは……高円寺恐るべし。

女子の部は正直、佐倉が参戦しない以上あまり知り合いがいなかつた。一応番号を交換した櫛田が上位となつていた。彼女も平田と同じく何でもそつなくこなすタイプのようなうだ。

1位は水泳部の小野寺だつた。順当の結果である。また堀北は2位であつた。やはり協調性以外に関して非常に優れた人物だと思つた。未だに話したこともないが……今後を考えると、1度くらいは話をするべきだろうか？ いや、何かあつたら相方っぽい綾小路に頼めばいいか。

そして、名残惜しくも水泳の時間が終わり、お昼休みが来てしまつた。行きたくないと思つていたが、椎名からメールが届き、学食の近くで待っているとのことだつた。

覚悟を決めて行くと、椎名がこちらに手を振つてきた。うん。やっぱり見た目はとても可愛い。ふわふわした美少女だ。椎名の方へ向かい口を開く。

「今日は誘つてもらつて、ありがとうございます。椎名さん」

椎名はそれを聞くと、にっこりと笑つて言つた。

「いえいえ、私も赤石君と一緒にご飯を食べれて嬉しいです。ところで、今日のオススメの本は読んでくれましたか？」

ひえ、攻撃モードだ。

「いえ、その、すみません、中々忙しくて……」

そう返すと、椎名は少し悲しそうな顔をした。やめろ、やめろ、罪悪感を感じる。

「そうでしたか……私のオススメの本の紹介は煩わしいでしょうか……？赤石君は初めてのお友達ですので、少し張り切ってしまつて、迷惑のようでしたら言つてください。止めますから……」

そう、申し訳なさそうな声で言った。声のトーンがいつもより低く、椎名からどんよりとした空気が流れてくる。やめろ、やめろ。

「いえ、その迷惑というわけではないのですが……流星に——」
すべてを言い切る前に椎名はこちらの右手を両手で掴んで、顔を覗き込んできた。

「そうですよね！本を紹介されて迷惑のはずがありませんよねっ！ありがとうございます。赤石君。少し自分を見失いかけてました！もう大丈夫です！」

いや、大丈夫じゃねえから。

「いや、その椎名さん、つまりですね——ッ」

なんとか軌道修正しようとしたが、時既に遅し、椎名はそのまま、花が咲くような笑顔をこちらに向けた。一瞬喉を詰まらせると、その隙に椎名は畳みかけるように言葉を紡いだ。

「はい。大丈夫です赤石君。無差別に本を紹介したりしません。ちゃんと人を選んで、その人にフィットするような本を選びます。赤石君が言いたいのはそういうことですよね？」

違います。こちらが反論しようとするも、椎名は無意識なのかにぎにぎと両手で掴んだこちらの右手を揉み上げてきた。あ、なんかすごく変な感じ……目の前の純粹に喜んでる椎名の顔が見えるのも相まって、謎の背徳感が込み上げてきた。

しばらくすると椎名は手を離れたが、あの柔らかい女の子特有の感覚は頭の中から離れなかった。

「赤石君？大丈夫ですか。顔が赤いですよ。お昼ご飯食べますか？」

顔が赤いと、お昼ご飯食べるのか？と、思ったが、ある意味軌道修正の好機なので、椎名の意見に乗ることにした。

学食に入ると、椎名は少し悩んだ後、魚の定食を選んだ。奢りだと、安いものを買うか高いものを買うか悩んだが、椎名と同じものを頼めば問題ないかと思いつつも、魚の定食を選ぶ。

椎名に代金を立て替えてもらって思ったことがある。まるで金がないヒモの彼氏みたいだと。……いや、別に椎名と付き合っているわけではないが、なんとなく気まずかった。

しかし、椎名は俺のじつと顔を見ると「大丈夫ですよ。私はまだポイントに余裕がありますから」と言った。椎名はこういう時だけやけに鋭いのだ。……俺が単純なだけかもしれないが。

2人用の席につくとさっそく食べ始めた。椎名は食事中はあまり話さないタイプのように、お互い無言になりながら魚定食を食べた。

ポイントを節約していたため、魚定食は普段の俺の昼飯と比べると少し高価であった。それゆえ、普段の定食より美味しかった。食べ終わると満足感がある。なかなか、幸せな気分だ。椎名さんは良い人だ。少しぐらいなら椎名さんのお話を聞いてもいいかもしれない。そう思っていると、こちらの考えを読んだのか、椎名が話しかけてきた。

「それで、『月長石』はどこまで読みましたか？」

いきなりクリティカルな質問である。まだ数ページだよ。どう答えたものか……いや、椎名は相手が嘘を言うところをチマチマ攻めていくタイプだ。ネチネチではなくチマチマなのがポイントだ。

ここは正直に、本読んでません。あと、しばらくは読みません。テヘペロで行こう。

「じ、じ、じ、実は、ですね、あの、あれ、ですね、あれ、その、ちよつと、まだ、あれですよ、あれ」

しまった、最初から躓いた。なんか、言いにくいのだ。悪い事を告白する子供のような気分だ。しかし、椎名はそれで察したのか、両手を伸ばし、こちらの両手を握った。椎名の左手がこちらの右手を指を通すように握り、椎名の右手がこちらの左手を同じように握った。いや、違う、これ全然察してなさそうだ。

そう思っていると、椎名は優しい声音で、しつとりとこちらの目を見ていった。

「大丈夫ですよ。まだ序盤なんですよ。『月長石』は最初は難しいですけど、読めば読むほど面白くなつていきますよ。一緒にがんばりましょう。……そうです。今日放課後、私の部屋に来てください。本の読み方を教えてあげますから……ね」

ひええええええ。これ、あれだ、乱暴される女の子の気持ちだ。いや、野郎に襲われた事ないから分かんないけど。たぶんそんな感じだ。

というより、椎名はまだ会って数回の男子を家に招くとか戦闘力高すぎないか？普通に怖いんだけど。それともコイツはいつもこうやって、相手を家に招いて、そこで邪な儀式で相手を推理小説中毒にしているのかもしれない。ブルブル、椎名、なんと恐ろしい。誰だコイツを良い人とか言ったのは。

「い、いえ、その、放課後はちよつと色々と立て込んで……お気持ちだけ受け取っておきます」

だからその手を離せ。にぎにぎするな。椎名の指が細くて、滑らかで、なんか両手から変な気持ちになつていく。やめるな、あ、間違えた。やめろ、やめろ。やめろ。

椎名に俺の思いが通じたのか、通じなかったのか分からないが、両手を一旦離れた。危なかった、あと一分、にぎにぎされてたら、椎名の家に連れていかれていたかもしれない……

「遠慮しないでほしいのですが、仕方ありませんね。またの機会にしましょうね……」

そう言いながら椎名は自身の両手を見て何度か手を握っては開いてを繰り返していた。なんか、仕草が可愛かったが、さきほどまでの流れを考えると、純粹に可愛いだけでは済まされないものを感じる。

「そ、そういうえば、椎名さんはオススメの本をよく紹介されますが、椎名さん的には1番好きな本や1番好きなジャンルは何でしょうか？」

これ以上自身の話するのは危険すぎるので、こちらから攻撃をしかける。正直地雷感がある話題だが、本以外のイメージがあまり椎名にない。いや、Cクラスについて聞くべきだったか？次困ったら、C

クラスネタにしよう。

「そうですね。私はやはり推理小説がジャンルとしては一番好きですね。他にも好きなジャンルはありますが、読んでいて最も本に引き込まれていく感覚が好きです。1番好きな本は迷いますね……赤石君の『月長石』もかなり好きですが、1番となると、悩みますが、ジョセフィン・テイの『時の娘』でしょうか？」

椎名はいつものおっとりとした雰囲気に戻り話してくれた。でも、『月長石』は俺のじゃないからね。

しかし、ウイルキー・コリンズとジョセフィン・テイか。まったくわからん。本を読まないからだろうが、推理小説作家というのアガサ・クリステイーぐらいしか思いつかない。世界史とかで出てきていればわかるのだが……そう思っていると、こちらの表情を読んだのか、椎名は微笑みながら、ゆっくりとした動きで、両手を近づけてきた。

危ないと思い、素早くこちらも両手を遠ざける。それを見ると椎名は自身の両の掌をこちらに向けたまま2回ほど握り、さらにこちらの両手に近づけてきた。やめろ。

「あ、あの、椎名さん、さつきから両手掴むのは何なんでしょうか……？」

一応聞いてみるが、椎名はその言葉が意外だったのか、目を何度かパチパチと瞬かせた。

「赤石君の反応が一番良かったので、こうやって両手を掴まれるのが好きなのかと思いましたが、迷惑でしようか？」

ゴクリ。す、好きじゃないから。

「迷惑という訳ではないですが、なんだかビツクリします」

そう苦言を呈すと、椎名は自身の両手を見て、そうですか、と呟いた。心なしに残念そうに見えたのは気のせいだと思いたい。しばらく、そんな椎名を眺めていると、ピクリと再び動き出し、こちらを見た。

「もう昼休みも終わりですね」

時計を見ると確かにあと10分程度で終わるところであった。椎

名と一緒にトレイと食器を下膳台に戻し、食堂を離れた。食堂を出ると、椎名は穏やかな表情で話しかけてきた。

「今日はありがとうございました。赤石君。学食は前々から興味があったので、とてもいい機会でした」

あれ、てつきり使い慣れていると思つたが……違つたのだろうか？
「椎名さんつてもしかして食堂を利用するのは初めてですか？」

何となく気になって聞いてしまったが、悪手であつた。というより椎名相手には悪手ばかり打っているきがする。

「ええ、この前、赤石君のために『月長石』を届けた時が初めて食堂に入った時で、何かを食べたのは今回が初めてですね」

やめて、なんか罪悪感を感じる。すごい食堂で奢らせた感じになるから。いや実際そうだけど。やめて。やめて。

「ええっと、それは何か、すみません」

そう言ってみるが、椎名はそれに対して、いえ、とだけ言つていつもの様なふわふわした笑みを浮かべた。やめろ、やめろ。読書アタックしてこないと余計に辛い。そう思つてしていると俺の気持ちを察したのか、椎名は「あ、」と呟くと、悪戯っぽく笑つて、こう言い放つた。「では、私のことはひよりちゃんと呼んでください」

やだ。それとこれとは話が別だ。

そんなこんなで椎名と別れDクラスに戻つた。

午後の授業は茶柱先生の日本史のはずだったか、唐突に小テストに変更になつた。なんじゃそりゃ。しかもその小テストは5教科分であつた。皆が右往左往するなか、先生は淡々と小テストを配り開始を宣言した。Dクラスの面々は最初は唾然としていたようだったが、諦めたのか問題を解き始めた。

俺も目の前の問題を見て驚いている。マニュアルにはなかつたこ

とだ。クラスポイントやプライベートポイントの変動に関して一通り調べたがこの小テストについては記述がなかった。2学期の期末テストでは小テストを事前にセットで行うとあったが……

これはクラスポイントに影響するのだろうか……？いや、それはないはずだ。それならばマニュアルに記載があるはずだ。

なぜこんなに焦っているかというところ、この問題は答えを入手していないからだ。最近はハッキングで答えを入手するのが日常化しているため、こういう突発的な事態には昔以上に弱くなっている。……いや、とにかく解こう。考えても始まらない。

そう思い、解くこと15分。……コレ、簡単すぎない？

中学レベルの問題が半分以上、残る問題もほとんどが今までの授業を聞いていれば、普通にわかる。若干難しく復習しなければ解きにくい問題もあるにはある。おそらく抜き打ちだった事もあるだろうが、ほとんどの生徒が80点近くとれるだろう……

しかし、最後の3問だけやけに難しいな。これは解ける自信がない。これは後回しで、残りの問題を完璧に、……完璧に？それはさすがにやりすぎか？おそらくこれはプライベートポイントとクラスポイントの両方に影響しない。それならばここでいい点をとるのは警戒を呼ぶのでは？

……いや、そもそも公開されるかわからないのにその心配はあまりに杞憂すぎるか？それにこの簡単なテストで意識して点を下げれば逆に目立つぞ。皆80点の中に60点があると目立つのと同じだ。

やはり、ここはできるだけ高得点を取っていいだろう。一応考えても分からない3問と、分かるけど難しい2問を間違えよう。これで5問間違い。いい線だろう。最後の3問はほとんどの人間が正解できないと仮定して、さらに2問ぐらいなら間違えるやつも結構いるだろうし、低すぎて目立つということはないはずだ。それに5問間違いで罰則を受けることもないだろう……おそらくこの解き方が一番安泰……だよな……？不安になってきたな……

思考が何度も堂々巡りしたあたりで、茶柱先生から終了の合図があつた。終了後小テストが回収されたのだが、そこで驚くべき会話が聞こえた。わからない。難しかった。という声がクラス中から聞こえた。……最後の3問だよね??、あ、違う、今、池が半分くらい何言っているかわからないとか言つた。そして山内が同意。さらに須藤が、そんなにわかつたのかお前ら、と言つた。

おいおいおいおいおい、お前ら死ぬわ。

こうしてなんとも言えない。1日が終わった。

返却とお昼と会議

4月最後の日曜日に通信傍受のシステムが無事完成した。まだまだ試作版であり、対象や条件も限られるが、特定の人物に対する情報収集という点において、このシステムに勝る存在はこの学校にはないだろう。なんとか、クラス対抗戦が本格化されると予想される5月間に合つて良かった。

さて、せつかくのシステムが使わねば損だが。誰を傍受すべきだろうか？

現在のシステムは特定の人物の通話とメールの送受信をすべて、俺のPCの外付けハードディスクにコピーされるプログラムとなっている。傍受可能な特定の人物は設計上の都合から2人が最大人数だ。

最大人数から情報の流量を意識するならクラスの中心人物にするべきだろう。また、情報が現状でもある程度入る、一之瀬と葛城は後回しでいい気がする。

……やはり単純に考えて龍園と坂柳の2人だろう。問題は2人に逆探知されないかという点だが。おそらくその点は大丈夫だろう。通信傍受システムはかなり隠蔽・偽装能力に長けた構成にした。これは俺のPCの机身を完全に解析しなければ発覚はしない……はずだ。

正直、今まで以上に犯罪行為であるため、緊張するが……いや、この実力至上主義の高校に入ると決めた時に何度も練習しシミュレートしたのだ。ここで止まってどうする……やるぞ。システムをオンにし坂柳と龍園の端末に侵入した。この瞬間から、通話とメールの送受信は全てハードディスクにコピーされていく。

ふと、自身の端末のメールボックスを見た。いつも通り椎名からのオススメの本のメールがあったが、今週の本のメールはなかった。どうやら椎名にとつて1週間の始まりは月曜日らしい。

その日は緊張しながらメールを見た。自分のメールボックスには何も入ってこなかったが、ハードディスクには坂柳から橋本にメールが送られていた。内容は葛城派への工作依頼であった。……俺だけではなく、どこもかしこもスパイみたいな事をやっていた。……傍受

したメールを見て坂柳に感謝した。なんだか自分のやっていることが肯定されているような、そんな気分だった。

5月1日。平田の御言葉は結果的にはあまり効果はなかった。4月30日に確認したところ、Dクラスのクラスポイントは0であった。減少ペースから考えて納得できる結果であったが、なんとも酷い数値であった。ちなみに他のクラスは400ポイント以上であった。

そして現在、俺のプライベートポイントは7万と少しである。4月30日の夜から変化はしていない。当然である。しかし、知っていたとはいえ、現実に直面すると何とも表現しにくい気持ちになる。

朝、椎名からのメールを処理すると、登校し、Dクラスに向かう。教室に近づくにつれ、喧騒が大きくなっていく。どうやら、盛り上がっているようだ。確かに、あらかじめ知らなかったら絶対焦るだろう。これも全部茶柱先生が悪い。いや、まあ学校のマニュアルからして仕方ない面もあるが……

教室に入ると、こちらに近づいた平田が駆け寄ってきた。なんじや？

「赤石君。ちょうどよかった。赤石君の端末に今日ポイントは振り込まれているかな？」

0ポイント振り込まれたよ。と返すわけにもいかない。それに何より、平田要塞警護兵たちの視線が怖い。正直に言おう。

「ええ、平田君。実は俺も困っていて。朝起きてもポイントが増えていませんでしたから。平田君は何か知ってますか？」

嘘はなかった。ポイントが増えなくて困ってるし、平田に知ってるか聞いたけど、俺が知らないとは言っていない。ちなみに最初の「ええ」は相槌ではなく肯定である。平田はその声を聞くと、少し焦ったように周りを見た。俺が来たのはクラスの中でも最後の方だったようで、Dクラスのほとんどのメンバーがいた。しかし、非情にもチャイムが鳴り茶柱先生が入ってきた。いつも通りの冷淡な声で席

に着けと言った。

Dクラスの反応は何時もと違い、ブーイングの嵐であった。曰く、ポイントが振り込まれていない、ポイントを早く振り込んで欲しい、毎月1日がルールでしょ、などなど。

茶柱先生は煽り耐性が無いのか、それとも元来そういう性格なのかは知らないが、嘲笑うように「本当に愚かだなあ、お前達は」と言つてのけた。

茶柱先生曰く、遅刻や居眠り、授業中の携帯端末の使用により、クラスポイントが0になり、支給額も0となるとのことであった。うん。そうだね。

クラス中に絶望の声が響きわたった。聞いてねえよそんなの……ある山内がそう言った。うん。そうだね。

また、先生は前回の小テストの結果だと言いながら、紙を黒板に貼った。

おいおいおい、結果公開されるのかよ、聞いてねえよそんなの……ある赤石がそう思った。

小テストには上から順に高円寺・堀北・幸村の3名の名前があり、それぞれ90点という点数が添えられていた。点数も公開されるタイプでした。

さらに見ると、平田、櫛田、そして赤石と続いた。なんとクラス6位である。点数は83点とあった。さらに下にいくと、何人か生徒の名前があり中には佐倉71点や綾小路50点が見えた。下には下がいた。30点や20点などという点数もある。ひえ、椎名怖い、あ、間違えた。ひえ、Dクラスやばい。

茶柱先生が言うには、赤点を取ったら即退学というルールだ。うんそうだね。……確か赤点の定義は平均点の半分だったかな……？

まあ、テスト問題を見れる自分にはあまり関係のないことかもしれないが……他にもAクラスしか進路は保証されないなどの話もあったが、特に新情報はなかった。

茶柱先生が皆に中間テスト頑張つてね（意識）と言うとHRはお開きとなった。しかし、この言い方。茶柱先生はAクラスに興味が無い

のだろうか？この学校では担任の評価は卒業時のクラスに依存するようだが……まあ、あまり名声とかに拘らないタイプなのかもしれない。先生がAクラスに興味はないということは、やはりこのクラスをAクラスにあげるのは難しいな。まあ、そもそもCクラスに上げるのもかなり厳しいだろう。

やはり、ここは2000万計画だな……だが、ここまで阿鼻叫喚な状態のDクラスだと2000万隠し持っていることが発覚したら大変なことになりそうだ。誰にも悟られずに2000万集める。がんばらなくては。

HRが終わると、平田が皆を集めて、少なくとも今日のうちは授業を真面目に受けようという話と放課後皆で集まろうという話をした。どうやらクラス会議を開くようだ。会議に参加する意味があるかどうか若干悩むところだが、あまりに平田頼りになりすぎると、心証も悪いだろうし参加することにした。もう、放課後にやるべき情報の精査はだいたい終わったため、時間に余裕ができたという点もある。

通信傍受作戦も進行中だ。葛城と一之瀬周りの情報が監視カメラ頼りになってしまっているのが問題だが……そこまで他のクラスに注力する必要が無いのか？少なくとも現状Dクラスも含め、各クラスが団結を深める時期であり、他クラスに工作をしようとしている動きはない。

なお、Aクラスには団結を乱そうとする女がいるが、それは考慮しないものとする。いや、少なくとも彼女も通信状況を見るに、他クラスに干渉する余力は無さそうである。

というわけで、平田に参加したいという旨を伝えると、安心したような笑みで応じてくれた。平田の笑みは攻撃性がないので、話していて怯えずに済む。どこかの権名とは大違いだ。

なお、堀北・綾小路・高円寺の非コミュ三銃士は参加しないこととなった。ちなみに三銃士の4人目は須藤である。須藤はまだ非コミュ見習いぐらいだしね。しかし須藤、クラス最低点だけど大丈夫か……？

午前の授業を緊張感を持って皆で受けて、昼休みになった。今日は椎名とは食べない。

なぜなら、俺はDクラスの生徒で突然ポイントが振り込まれなかったのだ。慌てた俺は椎名のメールに「すみません、ちよつと大変なことになっていて。お昼は御一緒できないと思います」と返した。さらに、Dクラスの会議が決まった後、追加で「すみません、Dクラスで会議を行うので放課後も無理です。すみません」と送っておいた。

いやー、困っちゃうなー。本当は椎名と一緒に推理小説の話でもしたかったんだが、これは仕方ない。いやー、しょうがないなー。

そう思いながら、今日は登校時に買っておいたパンを見る。学食は避け、教室で食べる。完璧だ。いや、学食を避けるのは仕方ないのだ。Dクラスはこれから1か月ポイント0生活をしなければならない。許せ椎名。

そんなことを考えていると山内が近づいてきて、話しかけてきた。うん？なんじゃ？というより初めて話す気がする。

「なあ、赤石。ものは相談なんだが。ポイント貸してくんね？」

普通に駄目です。

「すみません。ちよつとポイントに余裕がないので」

ポイントは命より重いっ！……とまで言うつもりはないが、2000万貯めるためにはケチにならないかならなければならないのだ。

「そこを何とか……！」

しかし、さらに押してきた。駄目なものは駄目なのだ。というよりDクラスは皆ポイント無いので、Aクラスでポイントを募った方がいい気がする。

「すみませんが……」

面倒なので、教室から離れることに決めた。このまま教室にいたら山内どころか池まで来そうだったのだ。しかし、どこに行くべきか……中庭なら椎名もいねーだろ。じゃなかった、中庭は天気が良い

し、久々に外で食べるのもいいだろう。

そう思い、立ち上がろうとすると……椎名と目が合った。

——え？

椎名が教室の入り口にいた。右手の指を自分の口元に当てている。静かにと言いたいのだろうか……？

さらに左手では手招きしている。なんか可愛かった。いや、そうじゃない。椎名には今日は会えないとメールを送ったのだ。抗議の意味も込め、机から動かずにいると。椎名がDクラスの教室に1歩足を踏み入れた。そして、右手の指を口元から離して、今度は両手を使って口の周りにメガホンを作った。まて、やめろ。

仕方ないので今度は俺が右手を使い指を口元に持てつた。椎名の真似だ。しかし、大事な事を忘れていた。まだ山内がいたのだ。山内が「赤石何やってんだ？」と聞いてきた声で我に返った。本当に何をやっているんだ俺は。しかも、Dクラスの面々が廊下にいる椎名に気づき始めた。

これは危険なことが起こると察した俺は、席をたち、山内に軽く会釈し、椎名がいない方の出口から静かに出て行った。そのまま、立ち去り、中庭を指す。椎名が後ろから、ぱたぱたと着いくる音が聞こえる。

中庭の人通りが少ないベンチに座る。間を置かず、椎名が隣に座った。そちらの方を見るとにっこりと椎名が攻撃的な笑みを浮かべていた。

「赤石君、隣に座っていいですか？」

だめ。

というより、もう座ってんじゃん。でも一応「ええ、どうぞ」とは言っておいた。

「椎名さん。今日はどうしたんですか？お昼は会わない方向で決まっ

たと思いましたが……」

本当になぜ来た。Dクラスの面々にバレるところだったぞ。

「Dクラスは今月貰えるポイントが0になったと聞いたので、赤石君がお腹を空かせていると思いい来てみました」

文面は心配しているように聞こえるが、言っている椎名は何時も以上に、ここにこ顔だ。なにわろてんねん。

「それなら大丈夫ですよ。今日はパンを買ったので……しかし、今後は昼休みも放課後もDクラスで集まることが多くなると思うので、椎名さんとお会いできる機会は少なくなると思います」

椎名の笑い顔はスルーしながら、ジャブを放つ。これから椎名とはあまり会えないのだ。さびしいな。つらいな。でも仕方ないよね。というやつだ。

「Dクラスの集会が行われる日は事前に分からないのですか？」

椎名にしては大人しい反撃である。これに対する反撃は用意してある。……しかし今日の椎名は何時も以上に笑っている。何をする気だ……？

「ええっと、ですね。そのDクラスは少しばかり纏まりに欠いたところがありません……事前には難しいかと」

そう聞くと、椎名は我が意を得たりと両手を叩いて口を開いた。

「そうですか、では今日のようにお昼休みにDクラスの方に確認に行ってもいいでしょうか？」

だめ。

「その、それは少し、その控えて頂ければ……」

全力で控えてくれ。それはさすがに条約違反である。

「どうしてでしょうか？」

怖いから。主に椎名とDクラスの反応が。

「なんと言いますか、なんだか、変な気分がするので」

そう言う隣にいる椎名は、じっとこちらを見てきた。——これは、と気づいた時にはもう遅かった。椎名は右手で俺の左手を掴んでいた。手のひらと手のひらが触れ合い、さらには椎名の指がこちらの指と指の間を刺激してくる。やめろ、にぎにぎするな。やめろ。

「赤石君が言う私がDクラスに来た時にする変な気分というのは、今のような気分のことでしょうか？」

にぎにぎ、にぎにぎ、と椎名の白くて細い指がこちらの指や指間腔、手の甲を刺激してくる。やめろ、やめろ、やめろ、これで毎回俺が屈すると思ってるだろ。やめるな、あ、間違えた、やめろ。やめろ。しかし思いが通じなかったのか、椎名はこちらを観察しながらも、指を動かしていく。

「あの、椎名さん、ちよつと、困ります」

こちらの抗議を無視し、そのまま椎名は指を使い、こちらの手を弄ってきた。さらに、こちらの顔を覗き込み質問を放った。

「変な気分がしますか？」

にこにこ笑みを浮かべる椎名。めちやくちや可愛い。やばい。ちよつと正直になりそう。

「します」

あ、やべ、正直に言い過ぎた。それを聞いた椎名の表情を見るのは怖かったが、もう顔がかなり近いので、はつきりと見えてしまった。こちらの答えを聞いたとき、一瞬、悪戯っぽい笑みを浮かべた。そして、手を離れた。……ぐぬぬ。

それから、椎名はいつものペースに戻った。つまり推理小説の話を始めた。俺は何食わぬ顔で、持ってきたパンを食べ、椎名のお話を聞く。たまに、パンを食べるのを止め、椎名のお話で気になった点を聞いてみる。そうすると椎名が、その点を話すので、再びパンを食べ聞く。パンが尽きるまで聞いていた。ちなみに椎名はお弁当を持ってきていて、気づいたら食べ終わっていた。お前はいつたい何時食べたんだ……？

「赤石君のクラスが忙しいというのは中間テストとクラスポイントの件ですよね」

椎名はこちらが一息ついたのを見計らって、質問をしてきた。

「ええっと、まあ、そんな感じです」

「赤石君もAクラスを目指しているんですか？」

探りの質問だろうか……どう答えるべきか？ 目指してはいるが、正規の手段ではなく2000万の方法でだ……うーん

「一応は目指しています。ただ、そのちよつとDクラスのクラスポイント的に考えて難しいと思うので、多分無理だと思いますが……椎名さんは目指しているんですか？」

「私はCクラスのままでも良いと思っています。クラスポイントはあつた方が便利だとは思いますが……」

椎名はAクラスに興味が無いのか？ いや、そう言ってるだけか？

……しかし、椎名はあまり嘘をつかない印象がある。……いや、違つたコイツ初めて会つた時に本を借りてきたとか嘘を言つていた。判断に迷うな……そう考えていると、椎名が真剣な顔でこちらを見てきた。

「赤石君に1つ相談、いえ提案があります」

「提案ですか……？ 为什么呢？」

「これから、Dクラスは0ポイントで生活を行います。今後ポイントが増える機会が無い、もしくは乏しい場合はプライベートポイントが苦しい状態が続くでしょう。そこで、Cクラスの入る毎月のプライベートポイントとDクラスに入る毎月のプライベートの差の半分だけ、私が赤石君にお渡しします。その代わり赤石君にはこれから言う条件の飲んで頂きたいのですが……ここまではいいですか？」

いや、よくないよ。それって、つまり椎名と俺が月に同じ額だけポイントを貰うという事ではないか……いったい何を要求されるか恐ろしい。……しかし約25000ポイントか……いや、俺は、ポイントで釣られるような男ではない。ここは断ろう。

「その、条件とはなんでしょう？」

あれ、口が勝手に！ どうやら、思った以上にDクラスのクラスポイント0が響いていたようだ……いや、特別試験が定期的開催されるらしいが……でも条件だけは聞いておこう。

「赤石君の私が求める事は3つです。」

1つ、今後クラス間でトラブルまたは学校がクラス間での競争を促進した際にDクラスに積極的に肩入れしない事。

2つ、私と赤石君は双方、クラスが理由で対立しそうになった場合、可能な限り対立を避ける事。

3つ、毎週水曜日と木曜日は放課後に会う事。

以上です」

やだ。

特に3つ目がダメ。2つ目は良い。別に椎名と対立したいわけではない。1つ目もまあいい。Dクラスにおいては元々目立つ動きが避けるつもりだ。影からの支援は行うが、悟られないようにするつもりなので、椎名には分からないだろう。3つ目は駄目だ。どこで会うと言っていない点が怖い。図書室ならまだ良いが……もし椎名の寮とかになったら、1日持たないだろう。

よって拒否する。……いや、本当に拒否するよ？

「椎名さん——」

「よう、ひより。こんなところで何やってんだ？」

答えを言おうとしたら、誰かが割り込んでた。そちらを見ると初対面の「見慣れた」男である龍園翔であった。Cクラスのリーダー的存在であり危険人物である。……彼も「ひより」呼びを強制されているのか。可哀そうに。もしかしたら、彼とは友達になれるかもしれない……

「龍園君。どうも、こんにちは」

椎名はいつもの、のほほんとした顔のまま、龍園に挨拶をする。龍園はクックつと器用に笑うと、こつちを見てきた。なんだ？その笑い声の出し方でも教えてくれるのか？

「お前は？Cクラスじゃないよな？ひよりに何か用か？」

じつとりとした蛇みたいな視線であった。何だか不気味な男だ。しかし龍園はこちらに質問しつつも、何処か上の空なのか、しきりに周囲を確認していた。あれかな？やっぱ椎名と関わりと周囲を確認したくなるのかな？……龍園、残念ながら椎名はもう目の前にいるから今更警戒しても無意味だぞ。むしろ椎名の両手をよく確認して

おけ。と思ったが、口に出すと怒りそうなタイプであるため、無難なことを言うことにした。

「いえ、特に用はありませんよ。あと、どうも、こんにちは」

椎名に倣って挨拶を試してみた。無難だ。龍園は再びクツクと器用に笑うと椎名の方へ向かっていった。

「なんだ？ひより、彼氏とデートだったか？ずいぶんと間抜けな野郎だな？どのクラスだ？何て名前だ？」

何言ってるんだコイツ？疑問を口に出さないと気が済まないタイプか？というより1つの文に質問を3つも入れるな。椎名がキレるぞ。「今、お昼を食べていたので、龍園君に邪魔して欲しくはなかったのですが」

そう言って、椎名はこちらの手を掴んだ。おいしいいい。龍園、お前のせいで椎名キレてるじゃん。手、にぎにぎしてきたじゃん。ホントお前ふざけんな。あと流石椎名だ。質問に答えてない。

椎名の恐るべき『にぎにぎ』を見た龍園は「そうか」と呟き若干後ずさった。おい、逃げるな。お前が爆発させた爆弾なのに、どうしてお前だけが逃げるのか。

「邪魔して悪かったな。ひより。次の会合には参加しろよ。じゃあな」

そう言って龍園は去っていった。おい、なに逃げとんねん。

幸いにして龍園が去ると椎名は手を解いた。どうやら、今回の『にぎにぎ』は龍園に対して『次はお前だ』という脅しだったようだ。

しかし、これ以上、にぎにぎされると1日の許容にぎにぎ量を超えるので、ここらで俺も去ることにした。そこで、ベンチを立ち上がった、椎名の手が届かない範囲に離れたところで、椎名の方を向いて口を動かす。

「邪魔して悪かったな。ひより。次の会合は何時になるかわかんねーぞ。じゃあな」

頑張って、最後にクツクと笑い声を出してみた。残念ながら上手くいかずククとなってしまうが。椎名の方を見ると、渾身の物真似が良かったのか、前のめりになり顔を抑えていた。表情は見えなかった

が、確かな手ごたえを感じ、椎名の元から立ち去った。最後、普通に挨拶をするか悩んだが、やめた。物真似の余韻を残したかったのだ。

しかし、はじめて椎名に対して一本取った気分だ。これは龍園に感謝しなければな……心の中で。

ありがとう。龍園。

——この物真似が地獄の始まりであったことを俺はまだ知らなかった。

放課後になり、平田の会議のため教室に残る。会議にはDクラスの過半数が集まった。非コミュ三銃士以外にもテストの点が低かった池・山内は来ていなかった。他にも何人かが参加していないようだった。平田は前後の扉を閉めると、開口一番にこういった。

「今日は、皆集まってくれてありがとう。今日は皆には今後Dクラスがどうしていくべきか、を話し合ってもらいたいんだ」

安定したいつも通りの平田節だ。それから、平田は皆から意見をまとめたり、平田自身が意見を言ったりしていく。出た意見を書記となった櫛田が黒板に書いていく。なんだか、建設的な事をしている気分だが、……根本的な事は何もしていない気がする。

つまりは、今後は意識を変えてがんばりましょうという話だ。いや、それ1週間前にもしたやろ。まあ、今回はポイントというものがあるんで、皆もちゃんとやるだろうが、そんなことはきつと言われずともやっただろう。ポイントに影響を及ぼすような状態で平田に言われなかったからといってクラスポイントを落とすようなことをする生徒はいないはずだ（少なくとも会議に出るぐらいの協調性があるやつなら気を付けるはずである）。つまりは、現在の時間を有意義に使えていないのだ。

以上、クラスポイントの増減条件を知っていたくせにクラスに教え

なかつた男の八つ当たりタイムであつた。いや、ちやうねん。直接言うが目立つし、何より上手く伝える術がなかつたんだ。誰か、クラスと自分を繋ぐ媒介者のような存在はいないだろうか……？平田でもいいのだが、あまり平田頼りになりすぎるのもなあ……そう考えていると、平田がこつちを向いた。

「赤石君から何か意見はあるかな？」

え？なぜ？俺？こんなみんなの前では喋れないよ。怖いし、あと目立つし。しかし、平田に指名された以上は仕方がないので、立って言葉紡いだ。

「えつと、そうですね。……平田君の言うようにやはり授業態度が大事だと思います」

無難である。周りからは、そんな事わかつてる、というオーラを感じたか仕方がないのだ。唯一後ろの席にいる佐倉はこつちをじつと見ていたが気づかないフリをすることにした。いや、佐倉の為でもあるのだ。もし佐倉の方に気づいて佐倉を見たら、その視線に気づいた平田が佐倉に意見を聞くかもしれない。それを思つてのことだ。決して佐倉のことをマウント少女だとまだ疑っているわけではない。

それから、本当に何の進捗もなく会議はお開きとなつた。……会議には出ずに、明日平田に聞くでも良かったな。まあ、平田の心証を考えると出て正解だつた気もするが……あと椎名に対する言い訳にもなるか。

皆がDクラスの教室から出ていくのを確認し、俺も寮に帰ろうとすると、平田に話しかけられた。

「赤石君。先週の件で話があるんだけど。いいかな？」

待て、平田。俺をカラオケに誘うのは最後にすると言つたはずだぞ！

「ええつと、その平田君。カラオケの件だと思うのですが……ちよつとポイントが厳しいので。すみません」

カラオケには行かないぞ。俺は人前では歌わないからな。

「ああ、いや、そうだね、こんな状況になるとは思つていなかったから

ね。気にしないで」

「そう言って貰えると助かります」

ふう。助かった。

「ただ、うん。僕が赤石君に聞きたいことは別のことなんだ」

「別の事……ですか？」

なんだ……？

「先週、赤石君が授業態度の改善について話をしてくれたよね。それを、僕がもつと上手く皆に伝えていけば、こういう結果にはならなかったと思つて、一言君に謝りたかつたんだ。ごめんね」

流石平田だ、謝罪にも気持ちりが籠っている気がする。ただ、それは聞きたいことではなく話したいことだろう……ということとは、なんだ？先週の俺の話し方が平田に疑心を与えたか？そうならないように気を付けたが……不自然な話し方だっただろうか。

「いえ、そんな、平田君が謝ることではないと思いますよ。気にしないでください」

とりあえず、ゆつくりと言葉を紡ぎ時間を稼ぐ。今は1秒でも欲しい。ただ、上手く考えが纏まらない。

「うん。ありがとう。それで赤石君。大事な話なんだけど。赤石君はもしかして、茶柱先生が言ったように授業態度がポイントに反映されることに気づいていたのかな？」

ぐぬぬ。どうやら平田に疑われているようだ。これはいけない。どう答えたものか？俺の能力が高く評価されるのはできれば避けたいが、平田に嫌われるのも避けたい。

「その、なんと言つたらいいか難しいんですが……クラスポイントがこんなことになるというのは俺にはわかりませんでした。ただ……」

ここで、言葉を切る。一応ここまででは嘘はつかない。というより0ポイントなんて予想出来ない。平田の顔を伺いながら次の言葉を決める。だが、平田は俺の言葉が濁つたのを聞いて、先に口を開いた。

「いや、決して赤石君を責めようとは思ってないんだ。むしろ話してくれて、僕もDクラスもすぐ助かつてる。赤石君は人が良いからきつとあの時はやんわりと言つてくれたんだと思う。ただ、出来れ

ば、今後はもつとDクラスが良くなれるように、赤石君のアドバイスが欲しいんだ。力を貸してくれないかな？」

流れるように平田は言った。この感じからすると、平田の中では、俺は1週間前の時点で授業態度次第で支給額が変わることを予期していた人物だと半ば確信しているみたいだ。凄まじい観察力だ。俺が単純な人間であるという可能性もあるが、どうやら俺は平田の事を實力よりも低く見ていたようだ……事前データでは俺より優秀な人間であることは分かっていたが……俺の演技力の問題か？それとも事前データがある故の過信か？……どちらにしろ、これは今後の計画に支障をきたすな。いや、今自身の能力に気づけたのは幸いか。それに平田の言動を見ると、かなり俺に配慮している。Dクラスは敵ではないが味方でもないと考えていたが……ここは平田の誠実さに期待しよう。

「平田君。再度言いますが、あの時はこうなるとは予期できませんでした。ただ、『10万円を何度も支給されるのかな？』とは少しだけ考えました。そして、水泳の時に先生が5000ポイントを景品にしている、茶柱先生が實力主義という言葉は何度も言っていました。ということは、月の支給額が實力というものに左右されるのではないかなと考察してみました。その實力が何なのかは分かりませんが、もし学力を意味するならば授業に集中する必要があると感じました。穴だらけの考察だったので人には話せず……すみません。せめて平田君には相談すればよかったと思っています」

訥々と話す。話していて、筋はあまり外れていないと思う。実際に自分がハッキング無しでここまで考察できるかは分からない。もしかしたら論理が飛躍しているかもしれない……だが、今の平田はどうも参謀を求めている気がする。それなら若干飛躍している方が平田の望むところかもしれない。使い勝手が悪い参謀。ポジションとしては悪くはないかもしれない。平田の出方次第だが……

「いや、赤石君は悪くないよ。悪いのは僕だよ。それで、赤石君、今後は僕たちはどうするべきかな？」

平田はだいぶ下手に出ている。これはとりあえず、図書室での件は

許されたと考えていいか……いや蒸し返さないといったところか？
とりあえず質問には答えるか……

「その、俺としても難しいと思うんですが……茶柱先生が言うには今後のテストは赤点を取ると退学とのことなので、クラスでそうならないうようにすべきだと思います。授業を聞くだけでは分からないこともあると思うので、そういった授業の難所をクラスで共有したり、出来る人が教えたりするというのが必要だと思います」

そういうと、若干、難しい顔をしていた平田の顔がいくつか和らいだ。うん？こんな当たり前のことでなぜ……？いや、俺が平田の「お願い」を聞きアドバイスを形にしたことが重要だったのか？……もしや、かなり警戒されているか？どうする……もう少し言うか？平田からは評価が高い気がする。無難な事ばかり言うのとやる気がないやつだと思われかねない。せめて他の繋がりができるまでは平田は最重
要だ。……言うか。

「それと、単純に学力だけを實力と考えるのは危険かもしれません。水泳のときの5000ポイントがあつたように。体育の授業の出来次第でクラスポイントが上下するということがあるかもしれません。そのためにも——」

今、喋っていて気付く。悪魔の一手に。これをやって良いのか。少し考える。

道徳的には悪い。だが、この学校の理念には背かないだろう。そして効率が良い。もし上手くいけば、俺の平田に対する依存度も半減する。すぐには出来ないことだが……だからこそ今のうちにやる必要がある。デメリットは何だろう、この悪魔の一手のデメリットはクラス内の平田依存度が高まることだが……現状平田以外にリーダーがない上、地力が弱いDクラスが他クラスに対抗するにはリーダーが必要だ。ならば平田を中心のどつしりと構えた方が良い。……平田の影響力が高い時に平田に嫌われた場合のデメリットが生じるが………いや、平田はみたところ、仁君だ。それは本人の気質かもしれないし、役目としてそうでなければならぬと考えているのかもしれない。前者なら結構。後者なら、嫌いな相手でも決して疎かに

しない。よし。やろう。悪魔の一手を。

俺が考えている間。平田は黙ってこちらを見ていた。

「そのためにも、クラス内で連絡網を確立する必要があると思います」「連絡網？ 中学校のときに保護者の連絡に使ったりしていたやつのことかな？」

「それに近いです。たとえば、さっき言ったように授業の難しい点を連絡しあったり、教えあったりする時に使ったりします。今日の会議の内容なども連絡網に流すことで参加していない人にも状況を教えることができます。あとは、今後中間試験が近づいてくるとすると、勉強会などを開くと思うんですが、そういった時に、確実に場所と時間を伝えられます。それでも参加しないことはありますが……少ない場所と時間が分からなかったから参加しなかったという人はいなくなるでしょう。平田君は全員の連絡先を知っていますか？」

「クラスの中ではだいたい知ってるよ。けど勉強会か……確かに必要だね」

まあ、連絡網自体は別に大したことではない。しかし俺には重要な事だ。……けど勉強会の方を平田が意識している？ 赤点組を危惧しているのか……？

「平田君。これは余計な言葉になってしまいかもしれませんが……今後は常にDクラスという枠組みで行動することになると思います。そのためにはクラスで団結する必要があります。さっきの連絡網もその一環です。そして団結には中心となる人が必要であって、それはたぶん平田君だと思えます。具体的に言うとかラスメイト全員の連絡先を平田君が知っている必要があると思います」

「……団結は重要だね。僕が中心になれるかは分からないけどやってみるよ。ただ、連絡先を無理に聞くことは出来ないよ」

できれば、平田には無理にでも聞いてほしいが……いや、無理は言えないな。最後にポジションの確認だけはしておくか……

「俺が今思いつくことはこのくらいしかありません。……あと、平田君にお願ひがあるのですが、いいでしょうか？」

嫌とは言わないだろう。しかし言い方は大事だ。

「僕にできることなら。なんでも言っただけでいい」

「今日のごときはクラスの人には秘密にして欲しいんです。俺は目立つのが苦手で、上がり症でみんなの前だとすぐ緊張してしまうので。あと俺が平田君に変なことを吹き込んだと思われる、その、怖くて………できれば、平田君の考えでということにしてもらえないでしょうか？都合のいい話だとは分かっているのですが……」

目立たないようにしよう。平田の外部相談役あたりはポジションとしては悪くない。若干平田からの評価が高いのは問題だが、Dクラス全体からの評価が平均程度なら問題ない。俺にとって重要なのは自身がノーマークであることだ。俺は暴力には弱いし、尾行に気づく知識や能力もない。得意のハッキングの欠点を突かれない。そこが一番大事だ。

平田は俺の提案に戸惑っていたが、最終的には同意した。ただ、手柄をとるようなことはしたくないので、何時でも言ってくれば赤石君の貢献を示すとも付け加えてくれた。やはりいい奴である。

帰宅後、今日の通信傍受の結果を見る。Cクラスは振り込まれるポイントが減っていることから、朝に龍園に対して相談する生徒が何人かいた。あと気になる点として、龍園が椎名に何回も、昼休みに一緒にいた男、つまり俺について質問していた。なお、椎名は質問には答えていなかった。流石である。

一方Aクラスの坂柳派閥の方は動きがあまりなかった。どうも、坂柳派閥は連絡数があまり多くなく、坂柳が最低限の指示を出し、結果を待つというパターンが多いようだ。例外として多く連絡をしているのは葛城派の工作をしている橋本ぐらいだろうか？橋本の工作の記述が全て正しいものだった場合は葛城派閥内に内応の約束をした人物は今日増えた分も合わせると、3人となる。

学校が始まり1月もせずに3人も引き抜いた橋本がすごいのか、3

人も引き抜かれた葛城の求心力が意外と低いのか、それとも派閥をホイホイ変えるやつがAクラスには多いのか、判断に迷うところである。

一通り、傍受結果を閲覧した後はシステムの修正を行っていく。現在は2人の通信状況のみを漁っているが、将来的には学年全体に対して行うのが理想だ。

短期的な目標としては、今日布石を打っておいた平田に対する傍受である。平田がCクラスの龍園のようにクラス代表になった後、その通信を傍受すれば、Dクラスの情報はほとんど把握できる。わざわざ平田に聞く必要もなくなるし、今日のように情報を得るために無駄な会議に出席する必要もなくなる……それに将来、平田やDクラスと疎遠になったとしても、Dクラスの情報を把握し利用することができる。

ちなみに中期的な目標は葛城・一之瀬の通信傍受である。本来は短期的な方がこの2名で、中期的な方が平田であったが、Dクラスの団結力や全体的な能力が想像以上に低かったため、急遽変更とした。……無論、この計画は平田がリーダーにならないければ意味合いが下がってしまうが……しかし、Dクラスに平田以上のリーダーはいないだろう。人望のある櫛田ならば少し可能性があるが、櫛田はどちらかというとリーダーを支えるサブリーダータイプ、つまり副司令官だ。やはり、リーダーは平田だろう。

そんなこんなでシステムの調整に取り組んだが、この日は3人目への傍受拡張を行うことはできなかった。ただ手応えはあったため、近いうちに平田への傍受が可能になるであろう。そのころには平田の連絡網も完成しているだろうし丁度いいだろう。

他人・友人・隣人

Dクラスが阿鼻叫喚に包まれ、龍園と出会い、そして平田のアドバイザーになるというイベント盛りだくさんだった5月1日から2週間が経過した。

Dクラスは一応授業には集中し、クラスポイントを引かれるようなことがないように努力している。また、本日より勉強会が開始となる。これは平田の努力が一つの結果となったようだ。

しかし一方で、平田は連絡網の構築に手間取っている。三銃士の1人である綾小路の連絡先を手に入れ、櫛田の力を借り須藤・池・山内の連絡先も手に入れたが、高円寺と堀北の連絡先を手に入れることができなかった。あの2人はやはり別格だ。非コミュ三銃士改め非コミュ双壁と言うべきか？

幸いなことに綾小路が堀北の連絡先を知っていたため（やっぱり付き合ってるのか？）、間接的に平田と堀北のラインが繋がったが、高円寺の番号は誰も持っていないようだった。高円寺、おまえがナンバーワンだ。

龍園・坂柳に対する通信傍受は特に変化はない。

強いて言えば、坂柳の配下である凄腕営業マンである橋本がまた1人勧誘に成功したようだ。こいつはたぶん進路が保証されてなくても営業の道で食っていけると思うよ……

それと龍園が一之瀬にちよっかいを掛けたらしい。一之瀬可愛いからな。俺も一之瀬はカメラ越しでしか見たことはないが、気持ちわかる。

あと、通信傍受に関してだが、新たにフリー枠として傍受枠を増やすことに成功した。これは常に特定の人物ではなく、俺が決めた人を短時間だけ傍受する枠だ。少し今までは違う方式で動いているため、常時枠以上に制約はあるが、龍園・坂柳以外にも調査したい対象が広がったため、悪くない改善であった。

朝のメールを処理するためにメールボックスを見る。椎名から

メールが来ている。

そういえば、椎名とは龍園と出会った以降は直接会っていない。理由としては、どうも龍園が無理を言って椎名を昼休みと放課後にCクラスに引き留めているようだからだ。いいぞ、よくやった龍園。やっぱりお前とは友達になれる気がするぞ。

その上、龍園は本の勉強をしたのか、推理小説ネタを使い椎名に話しかけている。一瞬命知らずな、と思ったが、どうも龍園の推理小説トークに興味ที่薄いようで、監視カメラ越しにみた椎名は無表情であつた。

そのため、椎名とはメールやSNSでのやりとりが主体になっている。お互いの近況報告を主としている。と言つても基本的に椎名の小説感想メールに当たり触りの無い答えを返すだけだが……

本日の椎名のメールを一通り処理し、そして、椎名ではない発信元を見つける。発信元を見て若干、にやついてしまった。名前は「井の頭 心」、Dクラスのクラスメイトであり、俺にとってこの学校最初の異性の友人である。（椎名は友人ではない）

なぜ、俺が井の頭と友人になつたのか、それは2週間前のポイント騒動の後のゴールデンウィークまで遡る。

ゴールデンウィーク。5月3日から始まるこの連休はポイント支給が0のDクラスにも平等に訪れた。といつても、4月に遊び過ぎてポイントがない生徒が多いDクラスとしては、時間しか費やせるものがないというケースも多いが……

そして、ポイントは7万以上あるものの、浪費を避けたい自分としても、ゴールデンウィークは通信傍受システムの調整か、A・Bクラスの監視カメラを利用した葛城・一之瀬派閥の監視か、もしくは、散歩にでも行くかといったところであつた。

まあ、結論から言うとゴールデンウィーク初日に、通信傍受システムの調整が上手くいかず、息抜きに散歩に行ったら、ぼったりと井の頭と遭遇してしまったのだ。それも、ちょうど井の頭が他のクラスの女子と揉めている所だった。

正直関わりたくなかったが、井の頭と目が会ってしまったのだ。しかも井の頭は助けを求めるようにこちらを凝視してきたのだ。—— 囲んでいる女子は4人。4対1であり、自分が加勢しても4対2で不利である。しかし、助けを求めように見つめられて見捨てるのは少し気まづかったのと、何より井の頭は人気者である櫛田と友人であるため、ここで見捨てたら何をされるか若干不安だったことから、加勢することにした。

どうやら、井の頭の前方不注意でCクラスの女子と衝突してしまっただけらしい。井の頭は謝罪して立ち去ろうとしたのだが、許されず、Cクラスの女子に囲まれてしまったらしい。

中核人物である真鍋と名乗った女子は、衝突により汚れてしまった（見たところ汚れているようには見えなかったが）服のクリーニング代として3万ポイントを払うように井の頭に命じ、さすがにそれには答えられない井の頭が黙ってしまったという状態だ。

真鍋と女子2人が井の頭を囲むように陣取り、最後の1人はなぜか真鍋の後ろから様子を伺っている。よくわからない配置だ。

俺は井の頭がDクラスであるためポイントがない事と井の頭も悪気はなかった（あったかもしれないが事件発生時の現場を見なかった俺にはわからない）と真鍋に説明したが、そうすると真鍋はなぜか俺にポイントの賠償を命じてきた。いやいや。俺としては井の頭に恨まれない程度に助け、恩を売ればいい程度の気持ちで介入したのだが、どうも真鍋は井の頭の謝罪ではなくポイントが欲しいようだ。

しかたないので、適当な事を言い時間を稼ぎ、気の短そうな真鍋がキレるのを待つことにした。そこで包囲網を敷いていた2人の女子（藪と山下という名前らしい）と真鍋の後ろに隠れていた女子（こちらは諸藤という名前だ）を論争に巻き込み、道理や道徳の話をダラダラ

と展開していった。諸藤と藪はもういいんじゃないか？面倒だなコイツという気持ちになり真鍋・山下に撤退を進言したあたりで、真鍋の我慢の限界を超えたのか掴みかかってきた。

期待通りである。このあたりは元々カメラが通っており、どうも真鍋はカメラの監視網を計算していないようで、良い感じに掴みかかってきた。井の頭は心配そうにこちらを見ていた。が、問題なかった。

俺は真鍋にだけ聞こえるようにこう呟いた。

——俺は椎名さんと知り合いだぞ、と。

効果は抜群だった。というのも、椎名は監視カメラから見た映像でもCクラスで恐れられていた。そりやそうだ。アレは怖い。真鍋はビビッて掴んだ手を離し、負け惜しみを言いながら逃げて行った。竜がどうか言ってた。ドラゴンに憧れる年頃なのかもしれない……

真鍋が逃げると取り巻きは不思議そうな顔をしながらも真鍋を追いかけて次々と離脱していった。残されたのは井の頭のみであった。井の頭に感謝の言葉を言われたので、気にしないように伝えたが、俺を巻き込んだ罪悪感を感じたのか、喫茶店で1杯奢ってもらうことになった。

奢ってもらった時に、なんとなく、井の頭に話しかけたのだが、これがある意味、運命を分けた。

どうも自分と井の頭は相性が良かったのだ。どちらも内向的であり、物思いに耽ることが多く、人と話すのは結構好きだが、目立つのは苦手である。さらに面白い事に人間関係の構築の仕方にも似ていた。

俺は井の頭と榎田が仲が良いと思っていたが、井の頭からすると、榎田との仲は特別良いわけでも悪いわけでもなく、どちらかとクラスとの交流用としての繋がりだと言った。何時もの大人しそうな雰囲気のまま、淡々と言った事は驚いた。

榎田と井の頭の間を聞いた俺は、自分と平田との関係に似ていると正直に言った。

「意外……でもないかな。なんとなく、そうかなって思ったよ。……赤石君、私と少し似ている気がするから」

俺と平田との関係を伝えた後、井の頭はやんわりと言った。最初会った時は丁寧語だったが、お互いに言葉を交わしていくと、井の頭は砕けた口調になっていた。

「そう？自分としては結構平田君と仲良く見せてるつもりだったんだけど。やっぱり不自然だった？」

ちなみに俺も、いつもより砕いた口調だ。最初は丁寧語だったのだが、井の頭から、演技してるみたいだがら止めて欲しいと言われて変えた。やっぱり分かるのだろうか？

「うーん。そうでもないかな。……でも、あまり一緒に遊んだりしないし、距離を取ってる雰囲気はあるから、見る人が見れば平田君と赤石君は友達じゃないってわかるんじゃない？桔梗ちや——櫛田さんは分かると思うよ」

この、女子特有の本人がいないと苗字呼びになるのはすごく怖い……と言いたいところだが、井の頭の場合は櫛田を嫌っているわけではないだろう。おそらく櫛田に合わせて名前呼びをしているのだろう。せつかくだから、櫛田の事でも聞くか……

「櫛田さんって皆と友達になりたいって言ってたけど、実際はどこまで友達になったか知ってる？」

気になる。櫛田の交友網次第では傍受候補になるからな……

「赤石君。こういう時は他の女の子の話、普通はしないよ？」

井の頭は咎めるようにこちらを見た。ごめん。

「え、聞いちや駄目系？ごめんごめん。いや、純粋にクラス間でこれから対立していく中でどうやって他クラスと友達になるのか気になっただけ」

「なんというか赤石君って肝心な所で空気読めないよね……まあいいけどね。櫛田さんは一応Bクラスを中心に仲良くなってるみたいだよ。でも5月1日以降はDクラスを意識してるのか他のクラスの話はあんまりしないかな？」

空気読めない……確かにそういう面はあるかもしれないが……

「ぐぬぬ、空気はそこそこ読めるつもりだった……Bクラス？あ、いや、てか、井の頭さんって意外と櫛田さんの事見てるんだね」

少し意外ではあった。井の頭はあまり他人に興味がない印象がある。あと周りを見ていないような感じなのだ。

「流石に意識するよ。クラス内の繋がりとしても大事だし、それに人の好きさを演出してるから、頼れるし……」

なるほど、まさに俺にとつての平田だな。というか、やっぱり櫛田は演出だったか。平田はどうなんだろうな……

「あ、あれってやっぱり演出なの？」

「当たり前だよ。赤石君、女子にそんな高望みしちゃ駄目だよ……」

ジト目で見ないで。なんか井の頭みたいな大人しそうな感じの女の子がやると、グツと来るから。あと、高望みはしてないから。いや。本当に。本当だから。

「いや、高望みという訳ではなく。演出だとしたら、何であんな演出するかが分からなくて、デメリツトの方が多くない？」

結構気になる点なのだ。櫛田は普通に見た目も良いし、スペックも全体的に高い。コミュニケーション力も高い。あそこまで優しく明るくなくても十分だと思うのだが……

「あー、なるほど。それはちよつと分かるかも。でも女の子の中には偶に自分は優しい子ってアピールしたい時期があったりして、櫛田さんの場合はその時期がかなり遅くて高校だった……とかかな？」

それって遅くても中学生ぐらいまでだと思う。いや、俺は男なので分からないけど。

「疑問形？」

「うん。ふつう遅くても中学までだよ」

……うん。つまり、これは。

「やっぱり？てか、もしかして、井の頭さんも経験者？」

「小学校低学年くらいの時、そういう妄想したかな……でも、数か月で飽きちゃった」

「そこで、『飽きちゃった』って言う井の頭さんの思想は結構好き」

「褒めても何も出ないよ……」

そこで、褒めたって認識してくれるあたり、なんか本当に相性が良い気がする。なんだろう、まだ直接話をして数時間だが、まるで数年

来の友達の気分だ。そこで、少しお節介を焼こう。たぶん怒らないと思うが……

「そういえばさ、話変わるんだけど。というか結構アレな話なんだけど。していい?」

予防線は一応張っておく。

「え、ちよつと怖いかも……エツチな感じなのは止めてね……」

ちげえよ。

「いや、そつちじゃない。というよりその発想は軽井沢さんっぽいから意外。じゃなくて、井の頭さん中間大丈夫? あ、いや、嫌な質問なら答えなくていい感じだから」

これが一番重要なことである。確かうる覚えだが井の頭は小テストが赤点組だったはずだ。一昨日の結果発表の時はまったく気にしなかったが、井の頭の本性を知った後だと不思議なのだ。もしかして、俺と同じでバカアピールで櫛田あたりに気を使ってもらおう気だったのか……とか少し疑ってる。

「大丈夫。赤石君にはあんまり気を使わない方向で行くから。……中間はちよつと厳しいかも。実は結構勉強苦手で……」

……って、マジであの点数なのか。やばいやばい。これは何とかせねば。初めての友達が退学になる。真面目に手伝うか。

「苦手という授業集中するのが苦手系、それとも勉強するのが苦手系?」

授業には集中できないけど独学ならできるタイプなのか、それとも授業は聞いてられるけど実際に机に向かうと何をやったら良いかわからなくなるタイプなのか、他にもタイプはたくさんいるが、井の頭とのこれまで会話の印象からこの2択だと思う。

「どっちもかな……」

まさかの3択目。聞いてて分かんないし、やる気もないだった。かなり意外。どうしよう……でもその前に、

「ありや、ごめん、かなり嫌な話だった?」

勉強そのものが嫌いななら、今の話やこれからする話はかなり苦痛だろう……

「うーん、普通の人に言われたら嫌だけど。別に赤石君相手なら気にならないかな……赤石君小テスト結構できたよね……教えてもらっても大丈夫……？」

「いいよ。」

「俺としては井の頭さん相手なら全然問題ないけど……ただ、独学だから教えるのは下手かも。というか榊田さんと駄目な感じ？」

「うん。榊田さんは多分私に勉強を教えたくないと思うよ……というより私もできれば赤石君に教えて欲しいかな……」

頼ってもらうとちよつと嬉しい。うん異常だ。いつもなら、面倒だと思ふ所なのに……井の頭の見え目が可愛いからだろうか？あ、でも、椎名も見えた目は可愛いかな。

「おう、こういう仲の良さそうな女子が嫌いあつてる展開はリアルだと怖いなー」

なんかちよつと茶化してみた。これぐらいなら許されるかなという感じでいった。あと椎名との違いを見たかった。いや、そもそも椎名は怖くて茶化したことなかった。

「別に仲は悪いつもりはないんだけどね……赤石君が平田君に勉強を教えてもらいたくない理由と同じかな……」

これは思わぬカウンター。うん。こつちの人格もだいぶ把握されてる気がする。2000万計画を考えると、良くないと思うんだが……どうも、この短期間で井の頭にだいぶ心を許してしまったようだ。

「これは一本取られた。で、勉強の話だけど、中間テストはどの教科を教えればいい？」

小テストの結果は全て覚えているわけではないが……だが、断言しよう。井の頭、お前は次に全部と言う——ッ！

「ありがとう。赤石君。……できれば全部かな。いいかな……？」

いいよ。でも上目遣いはやめて。可愛くてグツと来るのと同時に椎名のトラウマを思い出すから……

「大丈夫大丈夫。一応時間には余裕あるから。あ、でも日曜日は個人的にはきついかも。あと学校では教えにくいかな……？」

日曜日は通信傍受の精査とシステムの改善だから難しい。それに今後を考えると井の頭と一緒にいるのは見られたくない。

「あ、やっぱり、私と一緒にいるところ見られたくないんだね……」

「どちらかというと、態度を崩して自分を見られたくない感じ」

嘘ではない。でも1番は一緒にいるところを見られたくない。――

――この先、井の頭がどんな選択を、いや、それは今度でいいか……

「確かに、私もそういうところは見られたくないかも……そうすると、どちらかの寮も駄目だよね……」

「お互い、相手が入るところを他の生徒に目撃されたくないからなあ。

あ、今の状況は一応Cクラスから守った的な感じでいい？」

「いいよ。実際本当の事だからね……ありがとね」

助けるようにこっち睨まなかった？とは聞かないでおこう。たぶん俺も同じ状況なら同じことをするから……

「いや、正直に言うと思捨てようと思ったから、むしろ感謝されると気まずい……」

「私が櫛田さんと友達だと思っただから助けたの？」

やっぱりわかるか。友よ。

「ぐぬぬぬ、バレたか」

「もう赤石君のことは大体分かるよ……」

それから井の頭と1時間ほど他愛のない雑談に花を咲かせた後、アドレスを交換し、一旦別れた。

今後はクラスではお互い今まで通りに接し、2人きりの時は友人として過ごすことにした。

また、平田が今後勉強会を開くなら、その時に不自然にならない程度に教えることになった。勿論、平田が俺を教師役にするか、いやそもそも、どのような形式で勉強会を開くかが未定なので決定事項ではないが。平田の勉強会までは、たまたま電話で分からないところを相談することにした。

――井の頭と別れた後は、心に一抹の寂しさを感じた。人と別れて

悲しさを感じたのはこの学校に来てはじめてのことであった。近いうちに、井の頭と周囲に悟られずに2人で会うことが可能なエリアの絞りこみでもやるかと心に決めたのだった。

それから二週間が経過した、ある朝。それが今日である。井の頭のメールを開くと、本日から始まる平田主催の勉強会についてであった。

平田は忙しく、サッカー部の休みの放課後に勉強会を行い、これまでの授業の復習を行うことになった。クラスの半数程度が参加する事になったが、高円寺・堀北・幸村の90点トリオが参加を拒否したため、教師役は櫛田と平田、そして俺になった。珍しく平田の頼みを受け入れた形だ。まあ、俺としても合法的に井の頭と話せるので悪い事でもないが……

ちなみにメールの本題は井の頭は櫛田経由で誘われたため、櫛田が教師役になりそうだが何とかならないかといった内容だった。

大丈夫じゃない？男子が櫛田に群がり、女子が平田に群がるため、押し出された人たちが俺の担当になるはず、よって押し出された可哀そうな女の子役でお願いします、と送っておいた。一応俺の方でも、教師役をやるときに、それとなく井の頭を誘うか？

そんなこんなで放課後を目指すため、午前の授業を終わらせたのだが、事件が発生した。念のため言っておくが椎名ではない。今日も朝から龍園が頑張って椎名にメールを送ったので、それだけはない。フリじゃないぞ。本当に龍園には感謝だ。メールの内容はヘンリー・クリストファー・ベイリーという作家の話だったのだが、まったく分からなかった。

いや、龍園は今はどうでもいい。事件の内容は簡単だ。

昼休み、なんか変な視線を感じたので、振り返ると綾小路がこっちを指さしていた。隣には堀北がいる。気になり、じつと綾小路の方を見ると、こちらに手招きしてきた。近寄ろうとするが、今度は堀北が隣の綾小路の脇腹を掴み、何か言っていた。おい、人を呼んどいてイチャイチャするな。抗議のためという訳ではないが……いや、純粋に彼らの話が気になり近づいてみる。

そうすると、堀北は怒りの表情を浮かべこちらを睨み牽制してきた。一旦止まる。しかし綾小路はまるで堀北の仕草には気づいていないように、再び手招きをした。おいおいおい、マジでどういう状況だ……？

机2個離れた距離で2人に対峙する。

「えっと、その、何か俺に用ですか？綾小路君」

距離を保ったまま話しかける。堀北の眼力に屈してしまった。なんか怖いよこの子。かなり美人なのに……

「おお、そうだ、赤石。良ければ一緒に学食に行かないか？堀北も一緒にだぞ」

いや、なんで？彼女と2人つきりで行けよ。俺と一緒にいったら堀北キレるぞ。いや、もうキレてるか。綾小路の言葉を聞いて般若みたいになってるぞ。というより、平田といい綾小路といい彼女との逢引に他人を誘うがDクラスの流行りなのか……？

「いえ。その、お二人の邪魔はできませんよ」

一応断っておく。たぶん綾小路も本気ではなく、ただ学食デートを自慢したかったんだろう。だが、俺には自慢にならんぞ。なぜなら食堂で女の子と2人っていうシチュエーションは最近の俺には鬼門だからだ。あ、いや、ここ2週間はそうでもなかったか……

「……？いや、邪魔とは思わないが。むしろお前が来てくれると——」
「悪いけど、赤石君はお呼びではないわ。私は綾小路君だけを呼んだのよ。そこを勘違いしないでもらえるかしら」

綾小路が全て言い切る前に堀北が凜とした声で遮った。

「いや、別に赤石1人ぐらい良いだろう。むしろ俺のためを思うなら

赤石を連れて行ってくれ」

が、素早く綾小路が言い返した。なんか、相性良いねこの2人は。当意即妙って感じた。

「赤石君を連れて行くメリットが無いわ。いえ、それ以上にデメリットがあるわ。彼は廉価版平田君みたいなものよ。平田君が使い物にならない以上、廉価版の彼に出番は無いわ。それに、一体どうして彼を連れて行くのが綾小路君のためになるのかしら」

「廉価版には廉価版の長所がある、という冗談はさておき、赤石と平田は違う人間だからその例えは止めた方がいいじゃないか。あと、赤石を連れて行くのはこれから、お前が起こす恐ろしい行為からオレを守ってもらうためだ」

「恐ろしい行為？ いったい何のことかしら。私はただ、ポイント不足で生活にも苦しんでいる哀れな綾小路君に食べ物を恵んであげようとしただけよ」

「いや、お前が無償の行為をするのが怖い。裏がありそうだ」

「可哀そうに。人の善意も素直に受け取れなくなってしまったのね。」

綾小路君は」

やべえ。こいつら流れるようなディスプレイ合いだ。ツツコミが追いつかない。

というか、堀北は俺の事を廉価版平田だと思ってたのか……結構、的を射ているか？ あ、いや、根本的には違う人間だが、俺の表面は結構平田に近いロールだからな。平田と違って友達いないけど。これは俺の演技力も捨てた事ではない証明になるか……？ あー、いや堀北の看破能力が低いだけかもしれない……わからん。

しかし、平田が使い物にならない、ってどういう事だ。何か堀北と綾小路は相談でもしていたのだろうか。それで相談に進歩がないから綾小路が俺を呼んだ？ いや、それは俺である必要性がわからない。綾小路が言ったように堀北へのボディガードとしてか？ いや冗談だよな。綾小路筋肉あるし、堀北より強いだろ。……でも水泳は苦手みたいだったし、やっぱり見せかけ筋肉なのか？ 実は見た目ほど運動能力は高くないのか……？ うーん綾小路は色々謎だ。

まあ、でも。面倒事なら離れるのが吉だな。なんだか、綾小路も堀北も面倒事を人にやらせるのが上手そうだし、ここは素早く撤退を選ぼう。

「えっと、俺は一応弁当を持ってきているので……すみません。失礼しますね」

そういつて素早く……おい、やめろ。綾小路。腕を掴むな。というより、机2つ分の距離を一瞬で詰めたぞ。どうやった。隣の堀北も目を丸くしてるぞ。運動能力が高くないと思っただらコレだよ。

「あの、綾小路君。離してもらっていいですか？」

「ああ、すまん。ちよつと、手が出た」

そういうと、綾小路はすぐ手を離れた。不思議だ。さつき掴まれたとき、まったく体が動かなかった。おそらくすさまじい力が入っていたはずなのに、痛みは全くなかった。腕にも異常はない。何かの武术だろうか？という原理だ？

「ええ、では」

まあ、とりあえず、2人の元を離れて自分の席に戻る。後ろを振り返ると堀北は綾小路の方をじっと見ていた。何？私の彼氏、武术も出来てかつこいく。みたいな気分なのだろうか。

まあ、いい。そんな事より弁当だ。まあ、おにぎり3個という、弁当と言っていいか微妙なものだがな。おにぎりを食べながら、今後を考える。

——平田の勉強会。井の頭のこと。2000万計画。通信傍受。クラス闘争。中間テスト。特別試験。椎名怖い。

あ、駄目だ。最近会ってないから逆に怖くなってきた。一昨昨日も夢で見たし。そろそろ会うか？いや、龍園の努力を無駄にするわけにはいかない……っ！

おにぎりを食い終わり、昼休みが終わる少し前に食堂に近い方の教室の入り口から綾小路と堀北が帰ってきた。

堀北はいつも通り、凜とした表情で自身の席に向かったが、綾小路

は何かを訴えるようにこちらを見た。……なんだ？奢ってもらえる
と思っただけなら逆に奢らされたのか？わからん。綾小路は少しの
間こちらをじつと見た後、席に戻り、再び堀北と何かを言い合っ
た。

……たぶん一番大変なのは三宅と王だと思う。あの2人の前は退
屈しないが、始終イチャイチャされたら鬱陶しいだろうに……いや、
俺と篠原も後ろが平田と軽井沢だから同じか。

勉強会

綾小路と堀北が食堂でイチヤイチャした日の放課後。待ちに待った、いや、待つてなかつた。とにかく平田の勉強会がついに始まる。

平田のリーダーへの第一歩となる大事な勉強会だ。ある程度、がんばろう。ちなみに場所は図書室だ。Dクラスの半数程度が参加するのだが……教師役の1人である櫛田がまだ来ていない。珍しい。櫛田は時間には精確なタイプであり、遅れ気味に来るのは意外だ。

気になり平田に聞くと、綾小路に何か相談されたらしく、少し遅れてから来るらしい。なんだ、堀北と上手くやる方法でも聞くのか？あ、いや、櫛田も堀北と仲良くないからダメか。というよりこのクラスで堀北と仲が良いのは綾小路だけだ。つまり、むしろ櫛田が綾小路に相談しなくてはならない。まあ、櫛田のことだから、もう綾小路に相談してそうだな……

そんなどうでもいい事を考えながら、周囲を見渡し、参加者を観察する。

だいたい2週間前のポイント0事件の時の会議に残ったメンバーだ。須藤・池・山内の姿はなかつた。櫛田が教師役とは伝えていたはずなので、50%くらいの期待で来るかと思つたか、どうやら櫛田と会う以上に勉強が嫌なようだ。いや、集団で勉強の出来なさを晒されそうな勉強会が嫌なだけかもしれない……

他のメンバーを見ると、佐倉が居た。なんでいるの？君、結構できるよね。あと、人が沢山いるところは駄目じゃないの？

そう思っていると、こちらの視線に気づいた佐倉と目が合った。そして素早く逸らされた。佐倉も、もしかしたら俺と知り合いだとは思われたくないのだろうか……？なんか悪い事した気分だ……

気を取り直し観察する。井の頭がいたが、スルーする。向こうも理解しているようで、こちらをまったく意識していなかつた。うーん。演技力はたぶん井の頭の方が俺より上だな。今度電話で演技力の磨き方を聞いてみるか。井の頭の隣には同じく櫛田の友達の王がいた。

櫛田・井の頭・王はよく3人で一緒にいる気がする。

他は平田要塞警護兵である軽井沢・篠原・佐藤・松下・森がいた。……松下は小テスト9位じゃなかったっけ？あと、王も7位だった気がする。……この2人は純粹に付き合いで来たのかな。女子も大変だな。

参加メンバーを大体確認した所で、櫛田が来た。櫛田が遅れた事を皆と平田に詫びると、平田はやんわりと櫛田に来てくれた礼を言い、全員に今回の勉強会の目的と方法を分かりやすく説明した。うん。こういった説明能力というのも平田は上手いな。俺はどうも余計な話をしてしまい、上手く要点を短時間では伝えられない。やはり、平田は優秀だ。アドバイザーという、良いポジションも頂いたし、少しはクラスに貢献するか。

平田の説明が終わると、教師役を除く参加者は3チームに分けられて、それぞれ、教師役が1人ずつ付いた。わかりやすく男子、女子、あまり、となった。平田の所は男子が1人もいない……うん？さり気なく沖谷が混じってないか？あ、追い出された。そしてトボトボと櫛田の方に向かった。

櫛田組は男子がほとんどと女子が数人だったが、沖谷が来た事で井の頭が櫛田に何かを囁き、こちらに来た。おお、良い感じに離脱できたようだ。最近離脱失敗が多い自分としては、なかなか見習いたい離脱能力だ。井の頭はこちらの方に来ると、少し下を向きながら、声をかけてきた。

「あの、……すみません。赤石君の所に入れてもらっていいですか……」

オドオド演技が上手い。素もあるかもしれないけど、上手い。というより、今思ってたんだが、入学時の自己紹介でオドオドしてたのって演技もあつたのかな……？

「ええ、どうぞ、よろしくお願いします。井の頭さん」

「はい、ありがとうございます」

よし、あとは井の頭に勉強を教えて終了だ。といきたいが、平田へ

の恩返しも含めて他のメンバーにも勉強を教える。せつかくなので、イカしたメンバーを紹介するぜ。

1 番、井の頭。言わずと知れた友達だ。

2 番、市橋、平田の所にいったが、最終的なジャンケンに敗北してこつち来た。篠原のクローンみたいなやつだ。……まあ、篠原よりは大人しいか。

3 番、外村、パソコン大好きのちよつと小太りのやつだ。だが、パソコンにポイントをつぎ込んだため今大変らしい。がんばれ。

4 番、王、櫛田と井の頭の友達。真っ先に平田の所に行ったのに、真っ先に追い出された。あとなんか、櫛田が追い出すの協力してたぞ……櫛田も結構厳しいね。

5 番、佐倉……おい、なんでこつちに入るんだ。平田の所行こうね。君、王と違って真っ先にこつち来たでしょ。あー、そういうの困るんだよねー。

ちなみに加入順は、佐倉、井の頭、外村、王、市橋だ。佐倉が開始早々迷いながら来て、櫛田組から炙れた井の頭・外村が合流、真っ先に追い出されたのに行くべき場所に迷っていた王が井の頭を見てこちらに来て、最後に運に見放された市橋が渋々来た感じだ。

え、紹介順は何かって……俺が関わりやすい順かな……

メンバーも揃ったので、さっそく勉強会を始めたいと思う。そのためにはまず、最初にやるべきことを5人に伝えよう。

——よし、お前ら、とりあえず1人1回椎名の部屋にピンポンダッシュして来い。10分以内な！あ、井の頭は休んでいいぞ。

「えっと、では、とりあえず、今までの範囲で数学の問題を作ってきたので解いてみて下さい。時間は10分以内でお願いします。あ、井の頭さんは、こちらの問題でお願いします。時間は同じです」

と言って、4人に標準クラスの問題を渡し、井の頭には基礎問題でとりわけ電話で聞かれていた事を中心としたものを渡した。が、市橋が問題を受け取らず話しかけてきた。

「どうして、井の頭さんだけ問題が違うの？」

篠原ほどではないが、市橋の質問の仕方は少し刺々しい。一応、準備しておいた言い訳を使おう。

「その、井の頭さんは勉強が苦手のようなので」

「でも、それって変じゃない。井の頭さんが来るか分からなかったし、それに井の頭さんは最初櫛田さんにチームに居なかった？」

なぜか、追求してくる。普通に言い訳があるが、なぜ……？

「えっと、須藤君や池君、あと山内君や佐藤さんといった小テストであまりいい成績を残せなかった方が何人かいるようでしたので、俺のチームになった時に分かりやすく理解してもらえるように問題を2種類用意しておいたのですが……何か問題がありましたか……？」

まあ、井の頭の専用問題だが、普通に基礎問題としても使えると思う。平田あたりなら、出題傾向が偏っている事に気づくかもしれないが、問題ない。平田には見せないし、仮に見られても、今回の小テストと授業の流れから基礎の重要な点だと思いましたがとも言うっておく。実際結構重要な所だし嘘でもない。

「ううん、別に何だか1人だけ鼻負されてるみたいで気になっただけ。井の頭さんができないのは知ってるから別にいいよ」

できないとか言うな。あと普通に鼻負するぞ。と思いつつ問題を渡す。——馬鹿め、市橋。この問題は10分で10問だが、最後の3問はひっかけが入ってるから解けないぞ。3問ともひっかけだったら馬鹿にしてやろう。心の中で。

5人は問題を受け取ると静かになり、解き始めた。おお、結構みんなやる気があるようだ……5人の解答を見ながら、10分後の計画を考える。あ、井の頭、そこ違う、間違えた。あ、次も間違えた、ああ、駄目だこりゃ。

隣の王は普通にスラスラと解いていく。そりやそうだ。お前みた

いな好成绩者が来るの想定してなかったもん。まだ6分だが最後の問題に入った。ん？9問目普通にひっかかっている。そして最後の問題も普通に引っかかった。こっちを見た王と目が合う。なんか嬉しそうな顔だ。というよりドヤ顔だ。簡単だね！とでも言いたそうだし、いや見直しなさい。少なくとも2問は間違っているから。

——おい、ドヤ顔のままこっち見るな。椎名呼ぶぞ。椎名呼んでお前だけCクラスの女子の中にぶちこむぞ。いや、そんなことできないし、流石に俺も引くレベルの悪魔の所業だからやらないけど……でもドヤ顔やめろ。

あと3分間こいつのドヤ顔見るのはツライ。仕方ないのでドヤ顔から視線を外し——外す瞬間、王が「やった」と小声で呟き握りこぶしを作った。はい、試験中にカンニング行為があったので、王さんは0点です。

王を心の中で0点にしたあと、隣の佐倉を見る。5問目にチャレンジ中。少し解答スピードが遅め、でも問題をしっかりと読んで対応している。いいぞマウント少女、その勢いで、隣のドヤ顔少女にマウントとつたれ。

さらに隣に市橋を見る。さーて、こいつは、問題にひっかかっているかなー？……あれ、もう10問目。結構早いね……ん？9問目合っているね。うん。8問目は？合っているね。うん。あれ？あれ？あ、10問目解き終わった？うん、うん。合っているね。

怖いから7問目より前は見ず、外村の解答に視線を向ける。3問目まで解き、4問目と5問目を捨て6問目にチャレンジ中。すまんな、外村。6問目は5問目を解かないと多分大変な問題だぞ。5問目と6問目、2問目と8問目は地味に繋がっている嫌らしい問題だ。

お、あと30秒だ。最後にドヤ顔少女の方を見たが、どうもヤツは俺にずっとドヤ顔を向けていたらしく、答案に変化はなかった。おい、やべーぞ。このままだと市橋を馬鹿にできねーぞ。

「10分経ったので止めてください。えっと、それでは採点をするので、次はこちらの英語の問題を解いてください。あ、ちなみに今日

は英語の問題を解いてもらった後、俺の方で気になった点を言わせてもらって、その後はこちらから課題を出すか、もしくは皆さんの質問に答える形にしようと思います。質問の方は数学と英語以外でも大丈夫ですよ。では始めて下さい」

5人に問題を配る。当然、井の頭だけ特別問題だ。が、今度は王が問題を受け取らなつた。何？市橋の真似っこ？お前はもうドヤ顔属性あるから他の属性はつけなくていいよ。

王はこちらの様子を伺いながらも、何かを決心したような顔になり口を開いた。

「えっと、私、英語はできるから……平田君の方に行つていい？数学の問題も簡単だったし」

いいよ。

「えっと、その、平田君の方は満員なので、あ、櫛田さんどうも」

一応建前を言おうとしたら櫛田が来た。なんだ……？と、思っていると櫛田がそそくさと王の方に寄つて小声で話しかけていた。

しばらく、皆で櫛田と王を眺めていると、途中で王が何度か首を振つて、こつちを見て、問題を受け取つた。……櫛田が説得してくれたいだ。さすが櫛田、どうやったか分からないが、ありがとう。でも、王は正直俺と成績あんまり変わらない気がするから、平田に教えてもらった方がいいかもしれない。

5人に英語の問題を解かせている間に、数学の採点をしていく。井の頭の答えはなかなか厳しかった。10問中3問正解。ぐぬぬ、単純な計算ミスもあるが、考え方自体に問題がある気がする……一応、井の頭に対応できるような問題集を図書館から選んできたが、演習ではなく理論の方から教える必要がありそうだな。

10分中5分を井の頭の採点に使い、残りの4人の採点を適当にこなししていく。佐倉5点、外村3点、市橋7点！よっしゃ、馬鹿め、単純な方の問題で間違えたな。王は本来0点のところだが、市橋を倒したことによる功績から8点とする。不正はなかった。いいね。

採点を終えたところで、残り時間は1分となり英語の問題を解いて

いる5人の方を見る。

王がこつちにドヤ顔を向けていた。この少女は普段は大人しい癖に得意になるとこんな顔もするようだ。とりあえず、スルーし左右の井の頭・佐倉の答案を見る。井の頭は6問目で止まっただけで、佐倉は7問目にチャレンジ中だ。

井の頭は英語の方の勉強は数学よりは順調そうだ。佐倉は英語も数学も同じくらいか？外村・市橋の答案にも目を通そうとしたあたりで、時間になり、5人に解答を止めるように伝え、答案を回収し素早く採点をする。

井の頭5点。よし、解いたところは全部正解だ。佐倉5点、外村3点、市橋5点であった。ちなみに王は10点だが、出題者を挑発していたので心の中では0点としておく。

うん、英語は多分、王の方ができるな。俺が教わった方がいいくらいだ。外村・佐倉は英語が数学のときと同じでできた。佐倉の学力はDクラスの平均以上、学年全体だと真ん中くらいか？逆に外村はDクラスの平均を下回る。学年全体で見ると厳しそうだ。

市橋は篠原のクローンにイメージが強かったが、数学はなかなか得意のようだ。ただし単純なミスが多い。半面英語は苦手のように、勉強不足が見られる。とはいっても英語もDクラスの平均以上だろう。

うん。なんか思ったより皆できる感じだ。というより佐倉と王はもう来なくていいんじゃないかな。一方市橋は少しだけ不安定だが、たぶん中間試験は大丈夫だろう。外村と井の頭は頑張ってもらえないな……

「えっと、とりあえず、2つの解答を返しますね。えっと、まず王さん。英語は完璧ですね。たぶん俺が教えられない点はないと思います」

俺の声を聞くと、王は渾身のドヤ顔を見せつけてきた。おい、その顔はマジで止めろ。権名呼ぶぞ。

「ただ、一方で数学を2つ間違えています。片方はおそらく問題文の読み取りに、もう片方は計算上に不備があります」

おお、ドヤ顔がビツクリした顔になった。はっは。いい気分じゃ。一応、風変りな問題集を勧めておくか……用意しておいた問題集の1

つを王に渡す。今度は素直に受け取った。ふむ。やっと立場が分かったようじゃな。わっはは。

「それなので、この問題集の応用問題を中心に勉強するのいいと思います。これは結構変わった問題が出るので、面白いですよ。あと、試験中は時間が余ったら見直しをして下さい」

ふう。今すぐくいい気分だ。王の悔しそうな顔でご飯3杯はいけるな……いや、人のためにアドバイスするのはいい事だなあ……王が渡した問題集を開き熱心に解き始めたのを視界の端に収めつつ、次は市橋に解答を渡す。そして、王の時と同じように問題点を指摘し、用意した問題集を英語と数学で1冊ずつ渡す。さらには外村にも同様に渡す。

流れ作業のように、さつさと佐倉の分を渡そうとしたあたりで、アクシデントが発生した。佐倉のヤツが俺の手首を掴み上げたのだ。さてはマウント技をかける気だな。やめろ。離せ。

「あ、あの佐倉さん？」

離せオーラを出す、佐倉は離さず、掴む圧を強くする。そして、こつちを向いて口を開いた。

「赤石君はーそ、その、どうして問題の正誤を見ただけでっ。おすすめの問題集が分かるんですか！」

ちよつと声が大きかった。おかけで、近くにいる王と外村が問題集から目を離しこちらを見ている。幸いなことに少し離れたところにいる平田・櫛田グループは気づいていないが、なんか目立つのでやめてほしい。

ちなみに井の頭は待機中であり、市橋は問題集に集中していた。うん、なんか市橋のことが好きになってきた。

「ええつと、その、佐倉さん。疑う気持ちは分かりますが、一応理由はあるので落ち着いてください。さっきの問題はいろいろな特徴的な問題集から出していて、問題1つ1つに特色を出したんですよ。それで、間違いの方向性から、オススメの問題集を選んでいるので……決して適当で選んでいる訳ではないですよ」

わりと本当のことを言ってみた。まあ、あらかじめ、色々な予備校

から過去の統計を抽出して、得られた莫大なビッグデータを解析プログラムに通して、パターンを最適化しているので、俺がちゃんと調べたりしている訳ではないが……予備校のデータは結構あるし、だいたい当たるだろ的な感じだ。

こちらの回答を聞くと、佐倉は納得したのか、慌てて手を離れた。「あ、いや、そのごめんなさい。疑ってるわけではないんですけど……その……赤石君がこんなに勉強ができるなんて思ってなくて、ビックリしちゃって……」

佐倉は丁寧語になつたり砕けた口調になつたりと俺への扱いに悩んでいるようだ……そういえば、クラスメイトの前で佐倉と話をしたのは初めてな気がする。

佐倉に対して別に気にしていない事を告げると、近くで王が悔しそうに唸り声を上げていた。……いや、なんでだよ。お前は勉強に集中しろや。あと外村が「赤石殿がここまでの猛者であったとは、これは拙者の中間テストも安泰でござる」とか言っていた。なんか外村は独特な言い回しだな……あと、外村も勉強に集中しよう。井の頭の次にピンチだぞ。

正直、王・佐倉・市橋は勉強会に出なくても中間乗り越えられると思うが、君と井の頭はけっこう危険域にいるぞ……

最後に井の頭にそこそこ丁寧に問題点を指摘し問題集を渡し、重点的にやるページを説明した。さらに数学の理論的な面について授業で学んだ点を1つ1つ復習のために説明していく。それに対して井の頭は頷きつつメモを取り聞き取っていった。が、10分くらい経過したところで、市橋が声を掛けてきた。まただよ。

「ねえ、なんで井の頭さんだけそんなに熱心に教えてるの？」

だから、さつき理由言つたじゃん。演習不足とかではなく、根本的な所で躓いているからだよ。あー、もうこれだから市橋は。

「いえ、ですから、さきほども言いましたが井の頭さんは、少し数学が苦手みたいなので。数学は理論的な面をしっかりと理解していないと、意外な落とし穴にひっかかってしまう事もありますから。それに、この勉強会は赤点回避を目的として平田君が開催したもので、勉強

がより苦手な人に時間を割くのは間違ったことではないと考えているのですが……」

「いや、うん、そうなんだけどさ。少し熱心すぎるといふか。赤石君ってそんなキャラだったけ……?」

ギク。ちよつと久々に井の頭と合法的に話をしたので、ギアを上げ過ぎたようだ。まあ、言い訳はある。

「あんなに頑張ってる平田君に頼まれた事ですし、できればやり遂げたいです……それに俺も退学者は出たくないですから」

しみりとした感じで言ってみる。いや、井の頭以外は退学になってもいい。というより、退学時のペナルティはクラスポイント100である以上、クラスポイントが枯渇している今のうちに、どんどん退学させた方がいいかもしれない。とりあえず、やる気が無さそうな池と山内と須藤は退学してもいい。あ、いや、須藤はかなり運動能力があるから、特別試験とかでは有用か?

……特別試験に関してはもう少し調べた方がいいのだが、内容自体が決定するのが時間がかかるようだ。どうも、1学期中間試験終了後の退学者の人数で1年の特別試験の内容がはつきりと決まるようで、今はまだ候補選定の段階なのだ。まあ、特別試験はひとまず置いておこう。

俺の演技がそこそこ良かったのか、市橋は少しすまなそうな顔をして、問題集に再び向き合った。どうやら、上手くいったようだ。ふう。とりあえず、そこそこ理論説明は終わったので、井の頭に問題集を解くように指示した。が、今度は王が来た。いや、お前はその数学の問題集を解け。俺が教えられる事はもうないから。

「えっと、あの、さっきの数学の問題。9問目はわかったけど……10問目が解けなかったから、……教えて………下さい」
やだ。

「ええっと、ですね、基本的には公式を流用するのも有りですが、それだと最終的に絶対値の処理が問題になるので……」

しかたないので1つ1つ解説していく。一応授業でも一瞬先生が言っていたが、復習を幅広くとらないと面倒な所であった。王の実力

的に多分、できると思うのだが、王はかなり熱心に聞いてくれた。なんか、意外と真面目なのだろうか……？説明が終わると王は純粹に感謝をして、問題集を解きに戻った。ドヤ顔されないと何か煽りにくい……

その後も、5人が英語と数学の問題集を解きつつ、ときどき誰かが質問しに来るという流れで勉強会は進んでいった。質問の内容は数学と英語が多かったが、途中で1回外村がやんわりと化学の質問をし、それに答えると、他のメンバーも現代文や社会の質問をたまにするようになった。

それに気を良くしたわけではないのだが、全員の数学と英語の問題は一応預かることにした。あとで、専用の解析プログラムを通せば5人の苦手分野がより詳しく分かるかもしれないからだ。

まあ、井の頭以外は時間に余裕があれば、だが。

——英語が満点の王の回答も、なんとなく回収してしまったが、まあいつか。

規定時間が過ぎ、櫛田グループ・平田グループ共に解散になり、よし、俺のグループも解散するか、と皆に声をかけるが……下校時刻ギリギリまで粘りたいらしい。おい、やめろ。時間外労働はしたくないぞ。

そんなことを思っていると、グループを解散させた平田と櫛田が不思議そうな顔をしながらこちらに来た。もう図書室には赤石グループと櫛田・平田しかない。マジで止めろ。目立つたら。

いや、まあ平田のアドバイザーである以上、櫛田に注目される可能性がある程度だから問題は無いのかもしれないが……でも、櫛田は友人も多いし口も堅い方とはいいいにくい気がするので、やっぱり避けたいな……井の頭との関係もあるし。

しかし、無情。平田が声を掛けてきた。

「赤石君の方はまだ続けるのかな？一応今日は初日だし、あまり詰め

込みすぎるのは良くないかもしれないから、この辺りで解散にしてもいいんじゃないかな？」

やんわりとした口調であった。いや、違うのだ。平田よ。俺は解散したいんだ。コイツらが問題なのだ。あと井の頭も何故か残る方針みたいだし……

「ああ、いえ、その俺もそう思ったんですが、みんながもう少し続けた方がいいのでは？という方向になったので。一応自由解散という形で飽きた人から帰る感じにしようかと……」

そう言うと、平田は驚いたような顔になり何かを思索しはじめた。やめてくれ、平田。お前と思考勝負では勝てる気がしない……黙考する平田の代わりに今度は櫛田が口を開いた。

「わっ！すごい。赤石君のグループはやる気満々だねっ！みいちゃんも、やる気みたいだし。心ちゃんも良かったよ！心配してたんだ。あ、さっきはゴメンね。どうしても人数を調整しなくちゃいけない。——でも、赤石君のグループでむしろ良かったかも。私教えるのあんまり上手じゃないから、心ちゃんと説明できるか不安だったんだー」

いつもの明るくニコニコとした笑顔だ。発言の内容も友達とクラス全体を気遣っている。また櫛田は今までの雰囲気と言動から教えるのは多分俺より上手い。謙遜も忘れないし、あまり嫌味のようにも感じられない。

井の頭曰く、好い人の演出らしいが、実際に根は良い人なのかもしれない。そう思っていると櫛田はグループだけではなく今度は俺の方を見てきた。

「赤石君もお疲れ様。今日はどんなことをグループでは教えたの？皆すごく熱心にやってみてみたいだし、良ければ私も真似したいから教えて欲しいんだけど……いいかなっ？」

上目遣いで櫛田が頼んできた。わお。櫛田は事前情報から見た目は知っていたが、何というかすごい美少女だ。堀北が美人系なら彼女は可愛い系だろうか？そんな少女が上目遣いで頼み事をしてきた。男ならすぐ首を縦に振るだろう。

しかし、椎名に鍛えられた俺は違った。心に来ると同時にちよつと恐怖を感じたのだ。いや、別に櫛田も悪気はないんだろうが、これも全て椎名が悪いのだ……まあ、別に教えるけどね。というより、変に隠したら怪しまれるし、どうせ俺が言わなくても櫛田の友達の王が喋るだろうし。

「ええっと、その、一応、今日のために問題を作ってきました、それを解答してもらった後、採点して、間違いから相性が良い問題集を薦めて皆さんに解いてもらった感じですね。あと、何か分からないところがあつたら、その都度質問してもらおう形式にしました。授業方式は上手くできる自信がなかったの……」

ちなみに遠目に見た感じ、平田が授業方式で女子たちに教え、櫛田は前半半分を使い要点を説明し、後は自習&質問タイムという風な感じでやっていた。ちなみに両者、異性との会話が無駄に長くなりがちで、進み具合は微妙であつた。イケメンと美少女の欠点が出てしまった感じだ。

俺の答えを聞くと、櫛田は笑顔で追及してきた。笑顔追求のパターンは椎名を思い出すから苦手である。

「えっ！赤石君今日のために問題まで作ってきてくれたの！見せてもらってもいいかな？わわ、すごい、ふむふむ。見た感じ全体の復習って感じだね。あ、でもこの問題は……小テストの難しかった問題の類題だね。こっちは……うん？あれ、平田君ここ X113で合ってる？」

櫛田は俺の手元にある回収した問題を見ると、少し悩んで、平田に質問した。その問題は王が間違えた問題なのだが……なぜか櫛田もひっかかった。

あれ？なんで？と思い気づく。もしかして故意に間違つたフリをしたのではないかと。

どうやら俺と平田に花を持たせてくれたようだ。うーん。なるほど井の頭の言ってる演出の意味がだんだんと実感してきた。

「いや、櫛田さん。これは X117になるね。すごいね赤石君。この最後の3問、すごく良い問題だね。時間的にも10分で10問は少し

難しいけど……中間テストを考えると、まずこのラインは解いてほしい……ってことかな？」

「ええと、まあ、そんな感じですよ。でも平田君も櫛田さんもやっぱり計算速いですね。9問目はXⅡ3だと誤認させる問題で、そこに至るまで30秒くらいかかって欲しかったんですが……」

「うーん、でも私は間違えちゃったなー。赤石君ってこんな頭が良かったんだね。同じクラスで良かったよ。私も赤石君のグループで教えて貰いたいな……なんて」

だめ。というより櫛田は教師役だから……

「櫛田さん、それだと櫛田さんのグループが困ることになるから。でも確かに赤石君は教えるのも上手いみたいだし、中間試験の時は僕と櫛田さんも赤石君に聞いた方がいいかな？」

やめろ。というより。2人とも、素の実力は俺より上だぞ……俺が教えられる事はないぞ。

「いえ、その、言いにくいのですが、多分、勉強は御二人の方が上かと……あと、多分、俺のグループになった王さんも実力的には俺より上だと思うので次からは平田君のグループに入れてもらっていいですか？」

平田に1人押し付ける。というより、王も平田の方に行きたかったみたいだし、これでいいだろう。俺も幸せ、王も幸せ、平田は仕事が増えるけどクラスのためになって幸せ。みんな幸せ。これに口を挟む者は——

「ま、待って……私は赤石君のグループでも、いいよ」

王が口を挟んだ。いや、俺が良くない。さっさと平田グループに行け。……もしかして、さっき櫛田が来た事に関係するのか？櫛田の面子を潰さない為だろうか……？

ちらりと櫛田の方を見ると、なんと、あの櫛田が驚いていた。口をあんぐりと開けている。呆けていると言うべきかもしれない。

——え？いや、そんな反応されても俺が困るよ。なんでそんな驚いてんだ。櫛田がこんなに驚いているのは初めて見る気がする。王の言葉が何かの琴線に触れたのか？

俺と櫛田が王の発言に黙り込むと、空気の変化を感じたのか平田が静寂を破った。

「うん、そうだね。王さんもそう言ってるし、赤石君にこのままお願いしていいかな。あと、そうだな……赤石君のグループはまだ続けるのかな？もしよければ僕も見学していいかな？」

よくない。

「ええ、その、王さんに教えられる事があるか疑問ですが……王さんが良いなら俺は別に大丈夫です。あと、ええっと、一応、下校時間までは自由解散となったので、まだ続くと思います。勿論、平田君が見学するのは大丈夫ですよ。むしろ俺も平田君が居た方が安心できます」俺が平田に許可を出すと、櫛田の方はようやく自身の状態に気づいたのか会話に入ってきた。

「じゃあ、私もいいかな？赤石君がどんな風に教えるのか興味あるなっ！」

だめ。

「ええ、大丈夫ですよ。櫛田さん。と言っても俺は、教え方が独特なので、間違った事を教えてしまっているかもしれないが……あ、良ければ、間違っている事を教えたとき指摘してもらえると助かります」

「うん。わかったよ。でも赤石君は間違えるのかなー？」

「俺も、結構うる覚えのところがあるので……」
そう言ったあたりで外村が手を上げ質問をしてきた。彼も存外やる気があるようだった。いや櫛田が来たからかもしれないが……

外村の質問に対して一応丁寧に返す。ただ、あまり深くは答え過ぎないようにする。もちろん不自然ではないように。櫛田と平田が居ない時よりは僅かに不親切な説明。現に、外村は特に疑問もなく、俺の答えに納得したような顔をして問題集を再び解き始める。

平田は外村が着席したのを見て、再び俺に声をかけようとして、途中で止めた。そして再び何かを思案し始めた。待て、なんか怖い。

その後も櫛田・平田の監視下でときどき来る質問に答える。幸いなことに、こちらの思いに気づいた井の頭が何かを聞きたそうにながらも質問を控えてくれた。すまない。井の頭。助かった。とりあえ

ず、解散したら、井の頭に電話しよう。

そして、なんとか無事下校時間になり解散となった。なんと、5人とも最後まで残った。佐倉と市橋は途中で帰ろうか悩んでいたように見えたが、最後まで残ったようだ。

解散後、平田に櫛田と共に呼び止められた。これは危険です。

5人が帰るのを確認してから平田が口を開いた。

「赤石君。櫛田さん。今日は本当にありがとうございます。2人のおかげで、すごく良い勉強会になったよ」

そういつて、平田は深く頭を下げた。誠意を感じる。やめて、この後来るであろう頼み事に断れなくなる。やめて。

「ううん。私もクラスの皆と過ごせたとつても楽しかったよ。私の方こそありがとう。平田君」

櫛田が笑顔で答えた。曇りないように見えるが、なんだろうか？なんか違和感があったが、とりあえず、櫛田に合わせて平田に返答をする。

「俺も成功したみたいで良かったです。ただ、教師役は中々難しくくて、得られるものも多かったです。5人教えるのにも……自分の限界を感じますね」

ついでに俺は5人以上は教えないぞというアピールをすると、平田の瞳が陰った。やはりか……しかし、俺の返答を聞くと今度は櫛田が口を開いた。

「そんなことないよ！赤石君はすごく教えるの上手いよ。皆のためにテストを作ったり、1人1人に合う問題集を探したり。すごい事だよ！きつと皆、赤石君に教えて貰えば中間試験は乗り越えられるよ！」

マジで止める。滅茶苦茶目立つだろ。いや今回はすこし自業自得だが。なんでこうなった？大失敗だ。しかも声が大きそうな櫛田にマークされたのは危険すぎる。いや、櫛田は悪気は無いだろうが……とりあえず口封じだ。効果はあるかわからないが、井の頭の言う通り、櫛田が好人であろうとするなら効果があるはずだ。信じるぞ井

の頭!

「いえ、そんな、その、それは、ちょっと困ります。俺は人前だと緊張してしまつて、本当だと5人相手でも大変でした……できれば、3、4人が限界で。それに平田君には言ったのですが目立つのが苦手なので……すみません。櫛田さんに期待には応えられないと思います。あと櫛田さんは多分俺のことを過大評価してますよ……俺の小テストの成績知ってますよね?お2人よりも下です。たぶん櫛田さんが本当に頼むべき相手は幸村君か堀北さんだと思いますよ……」

俺はもう働かないぞ!

いや、まあ、今日の4人くらいなら井の頭のついでに持つても良いが……ん?今、櫛田の表情が、いや、あまり観察すると気づかれそうだ……幸い位置取りの関係上櫛田と平田の表情はこの近くのカメラから確認できる。確認時に認識しやすいように、2人には見えないように背中を左手で一回摩る。これで良いか。

「うん。そうだよ。堀北さんが参加してくればよかつたんだけど。あと、ごめんね赤石君。赤石君がそんなに人が苦手だと思わなくて。無理な事を頼んじゃつて本当にごめんね。あと、赤石君のことは皆には黙っておくね」

無事察してくれたようだ。ありがとう。効果はあるかは分からないが……明日か明後日あたりで、井の頭に櫛田の行動について聞いておくか。近くにすることも多いし俺の情報をどう扱うかの判断にもなるだろう。

櫛田について考えていると今度は押し黙っていた平田が口を開いた。雰囲気からして厄介事ではない。いや、むしろ、これは……

「僕からも、ごめんね。赤石君。どうも君の事を頼りにすぎたみたいだ……クラスを良くしようと思ひ過ぎて、君に対して配慮を欠いていたみたいだ。これからは無理に勉強会に参加しなくても大丈夫だから……ただ、もし赤石君が負担に感じないようなら来てくれると、僕としてはすごく嬉しいよ」

なんだか、かなり平田に気を使わせてしまった。うん。どうするか……いや、まあ5人程度なら井の頭のついでと思えば……うん?5人

？……いい事考えたぞ。これは平田的にも損ではないし、なにより勉強会の目的にも沿う。俺があまり苦勞しなくても良い点でもベストだ。

「ええつと、そうですね、その平田君。俺も教師役は思ったより難しかったんですが、ただクラスで退学者を出したくない気持ちには平田君と同じだと思ってます。そこで、その提案なのですが、今度から勉強会の時、俺だけ図書館の別館の方に行って、少人数で教えるというのはどうでしょうか。具体的には井の頭さんと外村君の2人に関するのですが……すみません。なんだか都合のいい話だとは思っています。……その、クラスの人が沢山いる中、教師役を続けていく自信が無くて……」

平田は受け入れるだろう。櫛田はわからないが、拒否するような性格ではないだろう。ただ、表情は気になる。なんだか、さつきから櫛田が変なのだ。具体的には王が俺のグループに残ると言ったあたりから雰囲気かもやまやましているというか。まあ、直接櫛田の観察はしない。ここを監視しているカメラを、入学式の時に綾小路に使った手順と同じように利用しよう。

「ありがとう、赤石君。君の提案はすごく嬉しいよ。2人だけでも君に見てもらえれば、クラスとしてはすごく助かるよ。櫛田さんもそれでいいかな？」

平田は納得してくれたようで、櫛田に確認を取った。その時の平田の表情は安心感が見られた。

表情に関しては平田は少し分かりやすい気がする。綾小路・櫛田・椎名の表情がわからない三銃士に比べると遥かに楽だ……

「うん。もちろんいいよ。赤石君がまだ教師役を続けてくれて良かったよ」

櫛田も了承。よし！

「それじゃあ、佐倉さんと市橋さんと王さんはどうしようか？」

最後に平田が3人の処遇を決めることになった。王はどうなるのだろうか……？

「うーん、じゃあ市橋さんは平田君に任せていいかな。佐倉さんと

みーちゃんは私が持つよ」

しかし、櫛田の非情なる選択。王は平田グループには行けないようだ。……もしかして、櫛田は王と平田が一緒にいるのが気に食わないのだろうか……？

「うん、わかったよ。それじゃあ、今日は本当にありがとう2人とも、また来週の勉強会は上手くやろうね」

そう平田が締めくくり教師陣営も解散となった。

2人と別れ、寮に着き、食事をとった後、カメラをハッキングする。そして、先ほどの時間に合わせると、ちょうど背中を向けた俺が左手を使い背中を触った。よし、この前後の時間の櫛田の表情を拡大し観察する。

……わからん。いや、やっぱり少しいつもと表情が違う気がする。なんというか、櫛田はいつもニコニコ笑顔という感じだが、この話し合いの最中は全体的に無表情なのだ。あと堀北の話をした時は……悲しんでるのか？ いまいち表情が掴めない。

そういえば、櫛田は堀北の連絡先だけは持っていなかったな……それが原因か？ だが、井の頭が言うにはあれは演出過多の所があると聞くし、それならばDクラス全員友達計画も本音じゃないだろう……井の頭の言葉を過信しすぎか？ 彼女とて間違えることはたくさんあるだろうし……櫛田も思った以上に謎だな。綾小路ほどではないが……

しかしクラスの中心人物に近い以上櫛田が不安定なのは危険だな……

うーん、本来は平田用に組んだシステムだが、通信傍受システムの自由枠は櫛田に使うか……？ いや、井の頭がいる以上、櫛田に対してのリソースは使うのは無駄か……？ だが、平田は今回の雰囲気を見るにかなり俺を信頼しているようにも見えたが……

デメリットから考えよう。櫛田が不安定の場合と平田が実は俺の事をまったく信頼していなかった場合。どちらの方がより危険か。

——平田だな。平田は俺の事を高く評価しているしDクラスの中
心だ。

俺は、平田に対してフリー枠を使用することにした。一応後で変更
も可能だ。もし櫛田に異変の兆候を感じたら櫛田に変えればいいだ
ろう……

この日は井の頭に連絡し、今回の勉強会での復習を行った後、次の
勉強会の方針と、櫛田の観察を頼んだ。

井の頭にだいぶ頼み事をするようになったが、彼女は淡々と了承
し、そして求める答えを返してくれている。そろそろ、彼女との関係
を1歩進める必要があるかもしれない。

クラス闘争と堀北の勉強会

初めての勉強会から6日が経過した。

平田の勉強会はサッカー部が休みの時のみ開催されるため、まだ二回目が開催されていないが、平田曰く、5月中にあと2回はやりたらしい。また中間試験直前になれば、たとえ部活がテスト休みにならなくても平田は勉強会を優先するらしい。ちなみに櫛田の勉強会は平田に合わせて活動するため、こちらも未だ初回のみである。明日はサッカー部が休みのため、両人とも2回目の勉強会に備えている。

一方で、新赤石チームは初回の勉強会の翌日と休日を除き毎日のように放課後に活動している。

なぜ毎日かという点、外村が2日に1回しか出席しないからだ。そして井の頭が毎日出席するので、合法的に井の頭と2人つきりになれるのだ。そういう時は、勉強を教えつつ交友を深めている。図書館の別館は人がほとんどいないこともあり、お互い砕けた口調で話せる数少ない場だ。

まあ、他の理由としては、井の頭と外村を退学させないために真面目に教えるためでもある。外村は2日に1度だが、よく勉強をしてくれている。やる気があるようで、こちらとしても若干、情が湧いてしまったようだ。

しかし、この1週間は良い話だけではなかった。なんと、何を考えたのか櫛田がこの前の勉強会で5人に渡した問題とその正誤によるオススメ問題集について教えて欲しいと連絡してきたのだ。お前は、王と井の頭と友達だろ。2人に聞けよ。と思ったが、話はそう単純ではなく、どうも櫛田は直接会って話をしたいそうだ。

——勉強会終了後の櫛田の不安定さはこの6日間感じることはなかった。しかし、直接会うメリットは正直無い。というよりデメリットしかない気がする。

なんか堀北みたいな話し方になってしまった。櫛田との繋がりをもつことは悪くは無いのだが、今は新赤石グループに注力したい……

よって櫛田との会合には拒否のメールを送る。勉強会が忙しいのじゃ。

しかし、ただ拒否するだけだと角が立つため、しっかりと媚を売っておく。拒否メールにはこの前作った問題と解答、そして解答チェックシートを添付しておいた。

チェックシートは問題の正誤から自動的に観点別評価を出し、オススメ問題集を教えてくださいの優れものだ。

念のため、櫛田の勉強会で使うときは出所は秘密にする、ないし作者は櫛田にするように書いておいた。まあ、勉強会の2日後に井の頭に問い合わせたところ、櫛田は秘密を守ってくれているようなので大丈夫だと思うが……

また、良い話とも悪い話とも言えない話もある。傍受していた龍園の端末からCクラスの一部のメンバーにBクラスへの攻撃命令が送信されたのだ。これを「龍園事変」と名付けたい。

「龍園事変」は唐突に発生したが、メールを受け取ったCクラスのメンバーは驚きながらも龍園に確認のメールや電話を送っていた。が、メールの内容や電話の傍受をするに、突然龍園が思いついたのではなく、前々から計画していたようなのだ。

おかしいと思い、これまでの龍園の通信履歴を漁るが、まったくそれらしき計画はなかった。……どうも龍園は以前から集会場のような場所を設けて、何度かそこでCクラスの会合を開いているようであった。集会場の場所は龍園の端末のGPSの動きから高級カラオケのような場所であると推測される。——あのあたりはカメラが少なくやりにくいエリアであった。

主に龍園が椎名に送るメールには会合に参加するような要請文が含まれていることが多かったが、椎名が参加していない以上あまり重要だとは考えていなかった。クラス懇談会程度といったイメージだ。しかしCクラスの会合の方で重要な決定がされるのであれば、龍園の通信傍受だけでは足りないかもしれない……もし可能であれば、高級

カラオケ店を特定し、盗聴器でも付けたいが……

話が逸れてしまったが、お題を「龍園事変」に戻す。どうやら、傍受内容を精査していくと、龍園はCクラスの精鋭女子を中心に集め、Bクラスの気が弱そうな生徒に対して当たり屋のような事をしたみたいだ。……暴力団かよ。

しかし、かなり本気のように、龍園は作戦決行間際でビクついているCクラスの女子たちに「練習通りやれ」やら、「安心しろ、バレても退学にはならない」とか、「お前ならできる」とか、「もしもの時はポイントを用意する。大丈夫だ」とか言って励ましていた。意外にも情が深いタイプなのだろうか……？ いや、まあ椎名に対してあんなにもメールを送ったり、推理小説の勉強をしたりしている以上、かなりクラスの為に頑張っているみたいだが……

一之瀬や神崎に密告すべきか悩んだが、放置とした。どちらが勝っても負けても損失は無いし、何よりBクラスや学校側の対応を見たかった。……残念ながら、龍園はカメラを強く意識しているため、Cクラスの女子が攻撃を仕掛ける場所は監視カメラの範囲外であったため作戦決行の様子自体は見る事ができなかった。

仕方がないので、「龍園事変」が行われた次の日は龍園の通信履歴やB・Cクラスのカメラの様子など様々な角度から関係者を監視することにした。

一之瀬と神崎が被害にあったBクラスのメンバーから聞き取りを行い、そろぞれが、Cクラスの女子たちに話をつけにいった。これは、1日の間に連続して発生した当たり屋は4件にも及び、一之瀬・神崎ともに陰謀であると結論付けたためだ。

……なぜ一斉にやったのか自分には龍園の考えがよく分からなかったが、一之瀬曰くCクラスの挑発行為らしい。

ともかく、4件のうち2件はCクラス側が引き、事件とならなかったが、1件は龍園自らが話し合いを行い、2000プライベートポイ

ントを神崎から奪い取った。

交渉時はカメラのないところで行っていたため、どのように龍園が話し合いをしたかは分からなかったが、のちの神崎の話からすると、なかなか聞くに堪えない話術だったようだ。

4件のうち最後の1件は一之瀬が学校に報告し、生徒会が出てくる直前で、龍園が引き、有耶無耶になる形になった。結果として「龍園事変」では1人の当たり屋が打ち勝ち、被害にあった生徒の代わりに神崎がプライベートポイント2000を失う形になった。

事件後、Bクラスでは神崎は自身の不手際をBクラスに詫びたが、Bクラスはむしろ神崎の人徳を称え、一之瀬は神崎を上手く補佐できなかつた事を反省していた。……神崎って本当に協調性低いのか？普通に高いぞ……それにBクラスはかなり団結しているようで、隙がなかなか見つからなかった。

今回のような奇襲戦法でもない攻撃は難しく、また攻撃したとしても、2000ポイントぽちで終わってしまいそうだ。

それに今回の件でBクラスは連絡網を刷新したようで、緊急事態時はすぐに一之瀬・神崎に連絡という方式が確立したようだった。奇襲対策も取られてしまい、ますます攻略が難しくなった印象だ。

ただし、2人の指揮官に負担が集中したのが一概に良いとは言えない気がした……次突くとしたら、そこだろうか……？

Cクラスでは、反省会は教室外の会合で行われるらしく、残念ながら全体の様子は見られなかった。が、通信状況を見るに、龍園は戦った4人の女子を評価し、2000ポイントを奪った女子からマージンを取ることもなく、むしろ戦果を得られなかった女子3人に龍園自身が2000ポイントずつ振り込んでいた。

……なんだか龍園はカリスマ独裁者みたいな奴だな。

そんなこんなで、勉強会から6日経過した放課後、いつものように外村・井の頭両名を誘い図書館の別館に向かう。

今日は外村も参加の日だ。ぞろぞろと歩いていると、別館から聞いたことある凜とした声が聞こえた。なんだ？と思い、3人でこそそと声が聞こえた方を覗き見る。外村も井の頭も人前があまり得意ではないため、最近はどういった、隠密芸が映えてきた。

別館の中を見ると、中には堀北と綾小路、そしてなぜか櫛田と赤点3人衆がいた。何やってんだ……？

しばらく3人で黙って観察していると、堀北と櫛田が言い争いをしているようで、だんだんと険悪な雰囲気がちらまで漂ってきた。外村と井の頭を見ると2人とも、中の様子に困惑しているようであり、別館に入りたく無さそうであった。俺も入りたくない。

もう一度中を見たところで、かなり距離があったにも関わらず綾小路がこつちを見た。いや、見たというより凝視してきた。バレた？バレた？よーし。皆今日は解散だ！

「えっと、外村君、井の頭さん。その何だか別館は忙しそうですし、今日は別の場所にしませんか？」

俺の提案に対して井の頭はコクンと頭を振り、外村は「そうでござるな」と軽く言った。よし撤退！

そろりそろりと3人で別館から離れるが、パタパタと足音がした。おい、やめろ来るな。しかし無情にも追いつかれてしまった。後ろを見ると櫛田がいた。綾小路め、チクったな。

「あ、良かった赤石君。外村君と心ちゃんもいたんだね。ごめんね。3人の邪魔をする気はなかったんだけど、今日堀北さんたちが勉強会を開くみたいで、私も参加したくて来てたんだ。それで折角だから綾小路君にお願いして別館の方に集まることにしたんだ」

いや、別館で俺らが勉強するって知ってたでしょ。なぜ被せた……なんとなしに井の頭の方を見ると井の頭も驚いてるようだった。独断か……

「えっと、桔梗ちゃん。その、赤石君の勉強会は少人数でやるみたいだから……その。赤石君はどう思いますか？」

井の頭は櫛田に苦言を呈した後、俺に話を振った。断れって意味だよね。まかせて。俺も断りたい。

「あの、櫛田さんがどのように考えているかが良く分からないので、教えて貰いたいのですが……こちらの勉強会と堀北さんの勉強会を合流させるべきだと言いたいのでしょうか？」

文脈的にそれしか考えられないが……一応確認する。

「うん、それも含めて堀北さんと揉めちゃって……あの、電話で話そうと思ってたんだけど赤石君と上手く繋がらなくて、だから直前になっちゃって。本当にごめんね。でも須藤君や池君、山内君にそれに綾小路君が退学になって欲しくなくて……私……赤石君、少しだけいいの。4人を助けるのを手伝ってくれないかな？」

やだ。いや、というか井の頭経由で言えばいいじゃん。言っていないとか確信犯（誤用）だろ。まあ、井の頭経由で言われても答える気はおそらく無いだろうが……

あと、綾小路は大丈夫そうだけど、彼も意外と勉強は苦手なのか？
まあ、とにかく断ろう。井の頭も早く離れたそうだ。

「えっと、櫛田さん。確かに退学者は出したくありませんが……物事には順序があると思いますし、今日は外村君と井の頭さんと先に約束していますし、中間テストもまだまだ先ですから、今日の所は俺たちは別のところで勉強をしたいと思います。あと、その櫛田さんと堀北さんがいる以上、俺が入らなくてもこちらの4人は安泰だと思いますが」

本当はわからない。堀北次第だと思う。性格はキツそうだが、教えるのは実は上手いかもしれない。それなら4人とも大丈夫だろう。まあ、あの4人が退学になっても別に困らないがな……

「駄目かな……。心ちゃんはどう思う？外村君は？」

！
なんか、今日の櫛田はいつも以上に押しが強い。頼んだぞ2人とも

「えっと、桔梗ちゃん。その、言いにくいんだけど、堀北さんや須藤君って怖くて……ごめんね」

「拙者も、まあ、なんと言いますか、赤石殿の言う事に一理あると言いますが、いえ、決して櫛田殿が間違えているといわけではなく、単純に堀北殿と須藤殿が場を乱す印象が強いでござるか」と

よくやった！2人の攻撃を受け、櫛田は残念そうな顔しながらも、こちらに謝り、背を向けた。しかし今度は綾小路がやってきた。

「あー、櫛田。その感じだと上手くいかなかった感じか？」

「うん、ぐめんね綾小路君。せっかく教えて貰ったのに……綾小路君の方はどうだった？堀北さんやつぱり怒ってた……？」

櫛田は不安そうに綾小路に尋ねた。若干上目遣いに見える。うん客観的に見ると少しあざとく見えるな……なるほど、井の頭はずっと間近でこれを見てきたのか。

「いや、櫛田は悪くないと思うぞ。赤石はノリが悪いからな。あと堀北は、まあ、怒ってはいたが……あいつはいつも機嫌悪いから気にするだけ損だと思うぞ」

綾小路、もしかしてこの前、学食に行かなかったこと根に持つてる？というより、本当に俺も学食に連れて行きたかったの？てつきり堀北との学食デートを自慢したいだけだと思ったが……違うのか？

まあ、帰るか。俺は綾小路と櫛田の方に軽く会釈して帰ろうとするも、また腕を掴まれた。動けない。綾小路の謎技術だ。まただよ。

「まあ、待て赤石。堀北は美人だし、話してみると意外と面白いかもしれないぞ。須藤達も気のいい奴らだ、きつと話も合う」

いや、ねえよ。

「あの、綾小路君。櫛田さんにも言ったのですが、今日は外村君と井の頭さんと先約がありますので……失礼します」

こちらが動く気を見せると綾小路は掴んでいた腕を離れた。うん、ぜんぜん痛くない。本当に謎技術だな。しかし離れたが質問はまだするようで、再び綾小路が口を開いた。

「櫛田が言ってた勉強会か……どんなやつなんだ？」

櫛田が綾小路に情報を漏らしていたようだ。櫛田の方を見ると手を合わせてゴメンとジェスチャーをしていた。いやいやいや、許されないぞコレ。

「櫛田さんや平田君の勉強会に比べると小さいものですが、基礎の見直しをしています。ただ俺はあまり平田君たちほど教えるのが上手くないので、基本的に自主的に学習できる方がかつ中間が厳しい人だ

けとさせてもらっています」

須藤は勉強をしないとばかり宣言した猛者だ。この言い方なら、綾小路も誘えまい。

「そうか……確かにその方針だと池たちには難しいな。わかった邪魔して悪かったな、今度学食で何か奢るからそれで許してくれ」

許そう。ただし魚定食以上のモノを所望するぞ。

「ええっと、期待してますね。それじゃあ、外村君、井の頭さん行きましょうか」

2人は首肯し、綾小路達に軽く挨拶をし、歩き出した。俺もそのあとに続き、別館の入り口を去った。

その日は結局普通の図書館に向かい、端っこの方で3人で固まり勉強をした。1時間程度で外村・井の頭の集中力が切れたので早めに切り上げる事になった。

やはり中間テストが近くなったのか、ちらほらと図書館の利用者が増えているようだった。やっぱり別館の方がいいな……

寮に帰り、監視カメラにアクセスする。彼らの勉強会はまだ終わっていないようで、カメラには楢田と堀北と綾小路と赤点3人衆の姿があった。

懸念通り、楢田の近くには俺が渡したチェックシートがあり、綾小路と池と山内は指定の問題集をやっていた。須藤の近くには問題集が積まれていたが、問題集は使用されておらず、堀北が何かを言って、須藤がそれを必死に書き取っていた。どうやら須藤以外の3人は俺が教えていた教材を利用して楢田が教えているようだ。

なぜ、あの6人が行動しているのか気になったため、監視カメラのデータを漁り、会話を聞くと、どうやら以前から堀北と綾小路は赤点3人組のために勉強会を開いたが、その勉強会が一度失敗してしまっ

たようだった。

そこで堀北が榊田に3人組を集めるように頼んだが、榊田は勉強会に参入しない事を条件とした。うん。いろいろと意味が分からない。なんで、堀北が3人組を集めるように頼んだのに、榊田の勉強会入りは拒むのか……意味不明だったが榊田は了承したらしい。

しかし、土壇場になって本日、榊田が勉強会に参加。綾小路は知っていたようであり、それがまた堀北の怒りを誘い、口論になっていたようだ。

ちょうど、俺と外村と井の頭が目撃したのがこのタイミングだった。ちなみに以前の堀北勉強会は図書館の方で開催されていたのだが、榊田が綾小路に赤石勉強会との合流を提案し、綾小路が堀北に頼んだため今回は別館で開催されることになった。しかし綾小路は堀北に赤石勉強会については知らせていないようだった。

うん、堀北が怒った理由が分かった気がした。つまり堀北は榊田に綾小路を取られるのが不満のようだ。……いや、それ以外の理由がいまいち思いつかない。まあ、榊田が意外と口が軽くて信用できないというのは同意見だが……せつかくだから、ちよつと榊田について調べるか。

画面上で現在も開催されている堀北勉強会を見つつマルチウインドを使用し、榊田のこの1週間の行動を洗う。画像認識を用いて監視カメラから榊田らしき人影を追い、行動パターンを確かめる。監視カメラ外に出た場合は、再び監視カメラに観測された時刻からカメラ外での移動を予測する。同時にこの1週間間の綾小路と堀北の行動を重ね合わせ。榊田との影があった時、つまり榊田が堀北か綾小路と会っている時刻と場所を特定する。

授業中を除くと、榊田と綾小路は頻繁に会っているようで、逆に堀北と榊田は、2回しか会っていないかった。綾小路の方は監視カメラの範囲外が多く、情報の精査が難しかったが、堀北と榊田の2回の会合はカメラの範囲内であり、録音データも見れた。……どうも、堀北と榊田はあまり仲が良くないようだった。また綾小路含めて、監視カメ

ラの範囲内では櫛田はそこまで、俺の事を話している訳でもなかった。少し自意識過剰だったようだ。ごめん櫛田。

櫛田は一時保留として、堀北勉強会のログを見ていく。ちょうど綾小路が何かを櫛田に伝えると、櫛田が外に駆け出して行ったところだ。この後、どっかの雑魚が隠密判定に失敗して捕まるが、まあ、それはいい。櫛田が去った後、堀北と綾小路が言葉を交わし、綾小路が櫛田の後を追い、堀北が3人に勉強を教えることになった。さらに少し時間が経つと、綾小路と意気消沈とした櫛田が戻ってきて、堀北と話始める。

堀北は戻ってきた2人を問いただし、赤石勉強会との合流を綾小路と櫛田が画策していた事を話すと、非常に不機嫌になっていた。しかし何だかんだで、綾小路が上手く堀北を丸め込み、今回に限り特別に櫛田の同席が許されることになった。

そして、櫛田は自身のバックから問題とチェックシートを出すと、綾小路を含めて4人に解かせ始めた。堀北は怪訝な顔つきでそれを見たが、赤点3人衆が乗り気だったため、あまり追求せずに許したようであった。

10分が経過したあと、櫛田が4人の解答を採点し、チェックシートを使い必要な問題集を割り出していた。

その様子を見た堀北がチェックシートについて質問し、櫛田の答えを聞くと驚いたような顔になり、櫛田が作ったかを聞いた。えらいぞ、よく聞いた堀北！

櫛田は、一瞬詰まるも、自分が作ったと答えた。えらいぞ櫛田！お前は保留じゃない、推定無罪だ！

この間、赤点3人衆はよくわからない顔をしていたが、綾小路は問題とチェックシート、そして対応する問題集をじつと静かに見ていた。

ちなみに、3人とも基礎からして致命的だが、須藤は英語・数学共に0点という快挙をやったのけた。また、綾小路は5点ずつとついで

た。ちょうど1から5問まで正解していた。……数学の6問目は5問目を正答すれば、解けるはずだが時間がなかったのだろうか……？池と山内は問題集をやり始めるが苦戦し、そのたびに榎田が丁寧に教えていた。綾小路は問題集を解くよりもチェックシートに興味があるのか、対応する問題や正誤判定をずっと見ていた。なんか怖い。ちなみに須藤は問題集にチャレンジできるレベルではないため堀北が付きつきりで教えることになった。

その後はずっと長閑な勉強風景が続き最終的に下校時間の30分前程度で解散となった。

解散後、堀北が池と山内の相手をしてくれたことを榎田に感謝するが、やはり次回から榎田の参戦が許されることは無かった。綾小路と密会した罪は堀北の中では重いようだ。

また、綾小路は榎田に謝罪しつつも、堀北に対して榎田の評価を改めるように言った。どうやら、綾小路はチェックシートがえらくお気に入りようで、何度も榎田を持ち上げ、作り方を聞いた。おい、やめろ、ぼろが出たらどうするんだ。榎田がなれば。

堀北の様子を見ると、堀北もチェックシートに興味があったのか、綾小路に乗り、榎田に問題集の選び方などを聞いていた。マジで止めろ。榎田がなれば。

しかし、俺の応援は届かず、榎田が本当は自分が作ったわけではないと言いだめた。おいおいおい、やっぱ榎田は駄目だな。これは保留に格下げだ。

けれども榎田も最低限のラインは守ったのか追求する堀北・綾小路に対して、問題作成者の名前は出さなかった。人格攻撃も辞さない堀北は、「自分の手柄にしようとしているの？」とか聞いていた。やめてさしあげろ。

普段は止める綾小路も堀北のご機嫌取りのためか、榎田に対して「この問題を作った人が協力してくれれば須藤たちの勉強は大きく進むと思うが……」などと、言った。やめろ、やめろ。

櫛田は尋問に屈するような女ではなかった。最後まで問題作成者の名前は出さず、その人はとても忙しいからと言ってくれた。やつぱり櫛田はいい奴だ。綾小路と堀北も櫛田の強い意志を見て、質問を止め、そのまま解散となった。

——ここまで問題に興味を持たれるのは意外だった。いや、そこまですべきでもないし、最悪バレても問題はないのだが……あの2人は面倒事を押し付けるタイプに見えるので、出来る限り低評価でいたいのだ。しかし難しいかもしれない……あの問題は佐倉と市原と王も知っている。何時かは発覚するだろう。

……いや、3人の問題と解答は回収した気がする……たしか初回の勉強会の最中になんとなく回収したのだ。3人が堀北たちが持っている問題を見たら発覚するかもしれないが……でも3人ともあの後かなり多くの問題集を解かせた。記憶も混濁しているだろう……決定的な証拠にはならないな。

あの時、何で回収したのか忘れたが、結果的にはかなり良い行動だった。珍しく俺の行動が裏目に出なかったな。

そんなことを考えながら、その日は眠りにつくのであった。

親友

堀北勉強会の次の日。今日は平田勉強会・櫛田勉強会が図書館で開かれる日である。ここで良いニュースと悪いニュースがある。

良いニュースは外村が今日は勉強会に参加しないので、ひさびさに井の頭と友達気分で話せること。

悪いニュースは平田・櫛田勉強会を避けるため、堀北勉強会は別館で開かれることだ。どうやら堀北も別館が気に入ったようだ。櫛田と綾小路が余計な事をしたせいで、平和な場所がまた1つ無くなってしまった……

どこで井の頭と勉強しようか悩んだが……今日、井の頭にしたい大事な話もあったので、願懸けの意味も込めてゴールデンウィークの初日に入った喫茶店に入った。今回は俺が井の頭に奢る形だ。

この喫茶店は通りから少し離れた所にあるため、人も少ない。また、テスト勉強が本格的に始まるよりも前であるという点もあり、今日はゴールデンウィークの時より客が少なかった。

席に座り、軽く注文を済ませ、さっそく勉強会を始める。井の頭は理論的な面ではだいぶ補完されており、基礎に関しては問題はない。標準問題も対応できるようになってきた。

今日は外村がいないので、質問もいつもより多い。互いに偶に勉強とは関係のない話もしたりしながらも、穏やかな気分で話しをしている。井の頭の話は編み物の話と、よく行動する櫛田と王の話が多い。ちなみに愚痴が多い。やはり女子の付き合いは大変そうに見えた。しかし、井の頭のそういった一面を見るものまた面白かった。おそらく、ここまで親しくならなかったら、クラスの大人しい女子としか思わなかっただろう。

いつもならこの時間をもっと楽しむのだが……しかし、そろそろ井の頭との関係性を決めるべきだと感じた。というより、できれば友人である井の頭にあまり隠し事はしたくなかったというのもある。そ

れに何より自分の考えに井の頭が協力してくれれば、今後、この学園でできる事も増えるだろう。

決意を持ち、井の頭に話しかけた。

「……井の頭さんはAクラスに行きたいですか？」

「勉強の話じゃない……いえ。行きたかったですけど……その、難しいと思います。赤石君はいけると思えますか？」

話題が変わった事と、突然丁寧語になった事に若干怪訝な顔をしたが、こちらをの表情を見た井の頭は質問に答えた。しかも、途中からこちらに合わせ口調も変えた。うん。やはり井の頭は俺と似ている気がする。それに演技力はきつと俺以上にある。きつとこの相談をするのは必要な事だろう……

俺は井の頭の端末にチャットを送った。

『俺一人なら行けると思う。頑張れば井の頭さんも行けると思うよ。ただ、これは誰にも言えないので、秘密にしてほしい』

賭けでもある。ここで、井の頭が協力してくれれば最高だ。しかし協力してくれなければ……俺はどうするべきだろうか？

しかし、協力してくれると思っている。それは、俺が井の頭の事を友人だと思っているのと同時に、きつと井の頭も自分のことを友人だと思っているに違いないという期待があったからだ。いや、期待というよりも一種妄想に近い確信だったかもしれない。

頭の中が期待と不安に満ちて、時間が遅く感じられる中、井の頭から返信があった。

『誰にも言わないよ。でもどうやって行くの？クラスポイントでAクラスを超えるっていう意味ではないんだよね？』

とりあえずは、かなりいい。彼女は半信半疑といった形だが。こちらの話聞く姿勢を感じる。あとはこちらも正直に応じるだけだ。

『プライベートポイントを使う。2000万ポイントあれば好きなクラスへ行く権利を買うことができる。2人なら4000万ポイントで行ける』

学校の秘されたルールを告げる。といってもいざれ判明するルールでもあるが……この時点ではおそらく井の頭は知らないだろう。

『そんなことできるの？2000万も集まらない気がする』

できる。ただし方法を説明しろと言われると少し困る。つまりはハッキングによるカンニングが基本だからだ。

『井の頭さんが協力してくれれば3年の終わりぐらいまでには4000万は集まると思う。俺1人でも2000万は集められないことはないけど、せつかくだし一緒に行かない？』

なんか詐欺みたいだな書き方になってしまった。

『方法が気になるけど……多分赤石君じゃないと出来ない方法なんだよね……？』

書き方で、井の頭には方法が少し後ろ暗い事だと、そして俺でないとできない事だと伝わったらしい。

『うん。たぶん俺以外だとかなり難しいと思う』

少し返信が止まる。井の頭を見ると少し悩んでいるようだった。俺は端末に再び目を向け、祈りながら待った。

待つ事数分。人生でも最も長い数分だったかもしれないが、返信が来た。

『行く。どうせ、Dクラスにいても大したことはできないし、それなら赤石君に賭けてみる』

ありがとう。井の頭。

『ありがとう、井の頭さん』

返信を送り、前にいる井の頭を見る。そして、チャットと同じような事を口頭でも伝えることにした。

『よろしくお願ひしますね。井の頭さん』

『こちらこそ……よろしくお願ひします赤石君』

井の頭は俺の口調を聞いて、少し笑うと、同じような丁寧な口調で返してくれた。

せつかなので今後の事について話をすることにした。

『それで、井の頭さんをお願いがあるんだけど。いい?』

井の頭はこちらの文章を端末で確認すると、返信せずにこちらをじつと見た。

……え、駄目なのか?井の頭の反応に困っていると、井の頭が再び端末を操作し始めた。なんだったんだ?と思っていると再びチャットが再開された。表示される文章を見る。

『エッチなのは駄目だよ』

おい、そのネタ2回目だぞ。間があったわりに面白くないぞ。もしかして、このネタを使い続ける気が……?

『ちがわい。というよりそれは持ちネタなの?』

気になり聞いてみる。なんとなく井の頭の方を見ると、少し困惑した顔であった。いや、なんで困惑顔?

『いや、なんとなく……かな』

なんとなく……?俺ってそんなヤリサーみたいなイメージがあるのか、ちよつとショック。……まあ、いい。とりあえず話を元に戻す。

『えーつと、ではお願いの内容だけど、とりあえず、俺から受信したメールとかは一応削除しておいてほしい』

『うん。わかった。秘密にするってことね』

どっちかがバレて動きにくくなった時に助かる気がする。アリバイ工作とかも出来そうだし……

『そそ。だから、中間に向けての勉強会が終わったら、ほとんど接点のない2人に逆戻りな感じで』

少し悲しいが、仕方がない。繋がりがバレていなければできくことも多いだろう。

『それは少し寂しいけど分かったよ。これからの連絡はメールや電話がメインってことかな?』

基本的にはそんな感じかな……?うーん、坂柳や龍園だったら、どんな風にするのだろうか?彼らの通信履歴を見ても、どうもパターン

が読めないのだ……いや？読まれないことの方が重要だからパターンなど組まないのだろうか？難しいな……

『基本はそうなるかな。あと一応、秘密の話だけど、中間試験が無事に終わるとクラスポイントが少し入るみたいだよ』

ちよつとだけ手札を見せる。信頼の証というわけではないが、今後、井の頭には色々と諜報で得たデータを基にした予想を告げるので、今のうちに慣れて欲しいのだ。

『そうなの？何で知ってるの？』

当然の質問が飛んできた。さすがにハッキングしていると云うのは問題な気がするので……

『秘密の話なので……実は情報通なんですよ（ドヤ）』

情報通アピールに留めておく。嘘ではない。あとついでに渾身のドヤ顔マークを文末に添付して送る。なんだか王みたいな事をやっているな……

『さっきの2000万計画もそこから思いついたの？』

しかし、井の頭、迫真の王の物真似をスルー。さすがだ。

『そんな感じ』

それから2、3打ち合わせをした後は、チャットを止め、勉強の話へと戻った。

井の頭に受け入れて貰ったからか、その日はいつも以上に熱心に教えてしまった。少し井の頭の反応が気になったが、彼女も嫌そうには見えなかった。彼女と友達になることができて良かったと、そう思った。

井の頭と交友を深めることに成功した。

今日は記念に嗜好品を買うことにした。とても大好きな炭酸飲料だ。適当な店で購入し、冷蔵庫で冷やして、寝る前に飲んだ。

——美味しかった。

ベッドに横になりながらこれからの出来事考えようとして、止め

た。

今日の1日の最後は友達と、いや、親友ができたことへの余韻に浸り終わったかったからだ。

試験範囲とBクラスと乱入者

井の頭とズツ友宣言をしてから、一週間が経過し、6月に入った。ついに中間試験が近づいてきたのだ。といっても、赤石勉強会は非常に順調であり、井の頭・外村両名とも標準レベルの学習は終わり、次のレベルに挑戦中である。

しかし、残念ながら問題というものは常時発生するようである。今回の発生源はなんと茶柱先生であった。昨日、中間試験の範囲が発表されたのだが……範囲が間違っていた。

なぜそのことが分かったかと言うと、昨日の放課後は念のため試験問題を入手しようとハッキングを敢行したのだ。そのとき今年の試験問題が茶柱先生の説明と範囲と合っていない事に気づいた。

最初は試験問題がクラスで違い、入手した問題がDクラス以外の問題かと思い、隅から隅まで探したが、出てきたのはここ数年分の試験問題だけであった。しかもその試験問題にもおかしな点があった。というよりおかしな点しかなかった。

ここ数年、試験問題が全く同じなのだ。どの教科もそっくりそのまま同じであった。暗記すれば満点も余裕である。教師が怠けたのかと一瞬思ったが、そんな教師はせいぜい数年に1度であり、こんなにも一斉に怠けるのは有り得ないだろう。

おかしいと思い、昨年 of 1年生の期末テストと一昨年の期末テストを見比べたが、こちらは類似点はほぼなかった。一応数学と世界史は方向性は似ていたが、問題自体は1から作り直しているように感じられた。2学期の中間や期末に関して調べても、例年違う問題であった。

どうも、1年の1学期の中間のみ毎年完全に同じ問題のようであった。これは作画的なものだろう。上級生と連帯しろというメッセージだろうか……？

いや、どちらにしろ問題なのは、そこではない。茶柱先生が範囲を間違えた点だ。こればかりは納得できない。職務放棄ではないか？他のクラスのカメラを見たが、どの先生も範囲の説明は正しかった。

……本当にどうしよう……？

対策案を考えた。つまり他のクラスに聞けば良いのだ。……俺ではなく平田が。

ということ、作戦を考えた。そのために、まず朝、平田に昼に図書館で会えないかを問うメールを送った。これで、「軽井沢と昼飯食べるから無理」とか返されたらどうしようとか考えたが、杞憂に終わり、平田から了承の返事が届いた。

ふむ。これで準備はほぼ完了だ。あとは図書館での、俺の演技力とアドリブ次第になるが……一応、何度かシミュレーションを重ねた。問題は無いだろう……まあ、失敗しても最悪の場合は井の頭に過去問を渡せば問題はあまりない。範囲が違ってても平田や櫛田といった重要なメンバーが退学することはないだろう。

昼休み、図書館に行くと、まだ平田は来ていなかった。しかし、重要な所はそこではない。図書館の作戦決行地点である、中央の本棚が開けた場所を見る。

一之瀬とBクラスのメンバーが数人いた。よしよし、とりあえず作戦の第一段階はクリア。……できればBクラスの柴田が居てくれると助かったが、不参加のようだ。

——今日の昼休み、Bクラスはテスト対策の勉強会を開くことになっていた。これは昨日の日課のBクラスの監視カメラチェックから分かっていったことであつた。また、主催者が一之瀬であることも。

一之瀬と平田は面識があるか分からなかったため、サッカー部の柴田を使ったかったが、一之瀬もコミュ力が高いため、俺が少し誘導すれば、あとは平田が上手くやってくれるだろう……

そう考えていると平田が来た。よし。作戦の第二段階もクリア。あとは平田と適当に話ながら、一之瀬の方にぶつけるだけだ。

「赤石君。ごめん。待ったかな？」

「いえ、待ってませんよ……すみません。さっそく本題に入りますが、今日相談したことは中間試験についてです」

少し声の調子を落としながら話す。最近演技力が上手くなったような気がする。平田もこちらの雰囲気を感じてか、より真剣さの増した表情になった。

「そうだね。Dクラスは最近緊張感を持って授業を受けているけど、中間試験はまだ心配な事が多いね……」

「ええ、それでですね……かなり良い数学の演習書を見つけたので、もし可能であれば平田君の勉強会で取り入れて貰えれば、と思います」

「本当かい？ありがとうございます、すごく嬉しいよ。赤石君のお勧めの演習書なら、きつとみんな助かるよ、教えて貰ってもいいかな？」

「ちよつと今は持ち合わせていませんが、図書館にあります。こつちの方の棚にありましたよ」

そういつて平田についてくるように手招きする。平田を本棚に導くが……うん、最高の位置取りだ。ちよつとBクラスの勉強会が行われているテーブルを横切るような形になる。

ゆっくりと進んでいく。図書館だから静かに動くのは不自然ではない。ゆっくりとゆっくりと進むと、Bクラスに近づくにつれて、一之瀬たちの会話が聞こえてくる。

——素晴らしい。

ちよつと話をしてしている内容は世界史であり、Dクラスでは範囲外とされている所だ。しかも、見た所、一之瀬の周りには様々な問題集があり、予想問題のようなものを作っており、Bクラスの生徒も何人か問題集と向き合いながら一之瀬と協力しあっている。最高のタイミングだ。

俺は故意に一之瀬の隣の誰も座っていない椅子の足に引つかかり転倒する。椅子の上に載っていた一之瀬が用意していたであろう問題集が床に落ちた。ドサドサという音の直後、後ろから平田が声をかけながら、こちらに寄ってきた。

「大丈夫?!」

声は少し大きく、周りにいたBクラスの生徒が何事かとこちらを見る。いち早く気づいた一之瀬が転倒した椅子と俺を見比べると状況を把握したのか声をかけてきた。

「わわーっごめんね。君、大丈夫？」

「あ、いえ、こちらこそ、椅子のものを崩してしまいすみません」

そう言いながら、素早く落ちていた問題集を拾う。一番大事な所だ。不自然にならないように拾った問題集を集めて、Bクラスが勉強をしているテーブルの上に置く。

ちらりと問題集とテーブルの上にある一之瀬が作成していた予想問題のようなものを見る。あまりじつと見るのではなく、たまたま目に入ってしまったような形を意識した。

そして少し考えるような顔をして、不思議そうな顔を作り一之瀬の方を見た。あ、肉眼で見るのは初めてだけど、カメラで見るよりかわいいな……

「えっと、すみませんでした。一年生ですよね……？」

俺の質問を受けると一之瀬もまた不思議そうな顔をしながら口を開いた。

「いやいや。こっちこそ、椅子に本を重ねちゃってごめんね。あと私は1年Bクラスの一之瀬帆波だよ。そっちは平田君と、えっとごめん、君はDクラスの生徒であつてるかな？」

名前は覚えられたくない。けどここで名乗らないと不自然か？

いや、彼女はDクラスの生徒か聞いているだけだ……ここは答えない方向でいくか。卑屈なDクラス生徒でいこう。Bクラス様の前では名前を名乗らないのは決して不自然ではない。

……さてよ、カメラで見た感じの一之瀬の性格から考えると卑屈な感じは相性が悪いか……？いや、彼女は「龍園事変」での対応の仕方から排他的な印象がある。ここは下手に出よう。

龍園、俺に力を貸してくれ！

「はい、俺はDクラスですよ。……えっと、あの、Dクラスの俺がこんなこと言うのも失礼かもしれませんが、その問題は範囲外ですよ」

俺は一之瀬の予想問題のDクラスでは範囲外とされている部分を

指して、声に怯えを含みながら言った。目の前の一之瀬を椎名だと思うのだ……それで怯えは含まれる。龍園と椎名、本来は敵であるCクラスの2人が俺に知恵と勇気を授けてくれる。

俺の指摘を受けて周りのBクラスの生徒は予想問題を見て、怪訝な顔で俺を見たが、一之瀬に判断を任せているのか口を開くことは無かった。Bクラスの期待を背負った一之瀬は少し悲しそうな顔をしながらも俺に対して話しかけた。

「ううん。別の失礼だなんて思わないよ。あと、DクラスもBクラスもそんなに違いはないと私は思ってるよ。えっと、君の名前は何ていうのかな？」

おい、やめろ。お前に求めている答えは、「え、これは範囲内だよ、Dクラスは範囲も覚えられない人達しかいないのかな?」、だ、間違えるな。

……龍園め、俺に対して力を出し惜しんだな……

「ええっと、その、俺は、赤石といいます」

このまま卑屈路線で決して名前を教えないことも考えたが、調べたら簡単に割れるので諦めた……ぐぬぬ、一之瀬に名前を知られたくなかったが、仕方ない。

一之瀬は俺の名前を聞くと、一度、安心させるように優しく笑ってから口を開いた。凄く可愛い、あ、間違えた、コイツはきつと厄介な敵だ!

「うん。よろしくね!赤石君。あと、指摘してくれてありがとう。でもここは合ってると思うよ。ちよつと待ってね、今、星之宮先生に貰った範囲表が……っん、あつた、はい、ここ見て、ね!合ってたでしよ!」

一之瀬はバツクから範囲表を取り、こちらに見せてくれた。よし!任務達成。あとは平田が全部やってくれるだろう。まあ、最後に平田に橋渡しはするか……

「え?いや、……そんな、これは……平田君、ちよつと見てください。これ変ですよ」

近くにいた平田に見せる。どうでもいいが、さつきから平田は一言

も喋ってなかった。俺と一之瀬の会話に割り込めるように待機していたようにも見えたが……俺が上がり症であることを心配して介入できるように待つてくれていたのだろうか？

平田は範囲表を見ると驚いた顔をしていた。よーし。正義はなきれた。あとは流しで……

「えっと、その平田君も赤石君もどうかしたのかな？もしかして私が貰ったの間違えてる？皆、範囲表持つてる人いるー？あ、ありがとう仁美ちゃん」

一之瀬は平田と俺を見た後、近くにいたBクラスの女子からプリント貰い、こちらに持ってきた。そして一之瀬の範囲表と見比べる。当然、そこに不備はない。

「うーん。範囲表は間違ってるってことはないと思うけどなー。もしかしてDクラスでは範囲が違うのかな？」

「ええ、茶柱先生が配った範囲表とはかなり違います。テストは学年で統一だと思うのですが……」

それっぽい雰囲気を出しながら、適当な事を言う。

「うん。ごめん。一之瀬さん。この範囲表のコピーさせてもらってもいいかな？。茶柱先生のところに質問に行くのに必要になると思うんだけど……いいかな？」

「うんー！いいよ」
「ありがとう」

一之瀬に感謝を伝えると、平田は素早くコピーを行い、範囲表を一之瀬に返却すると、俺の方に軽く謝罪し職員室に直行した。問題集の件は次の機会となったようだ。まあ、問題集は図書館に来る口実にすぎない。

平田が風のように去ってしまったので、俺もあとを追うとしよう。一応挨拶だけはするか。

「ええっと、皆さんの勉強会を邪魔してすみませんでした。あと、範囲表はありがとうございます。それでは失礼しました」

うむ。ミッションコンプリート。一之瀬たちに挨拶をした後はD

クラスに帰還し、昼飯を食べ無事昼休みは終了した。

授業が終了しHRになると、平田が茶柱先生の代わりに前に出た。どうやら茶柱先生も了承しているようで、口を出すことは無かった。そして、平田は昨日の茶柱先生の渡した範囲表に誤りがあつた事を口にした。

素晴らしい事に、平田はどうして範囲表の間違いに気づいたのかを説明しなかった。やはり平田は櫛田とは違い口も堅い。平田、お前がナンバーワンだ。

ちなみに、この際、なぜか茶柱先生がつまらなそうな顔をしていた。……まさか、今回の範囲表も故意だったりするのだろうか。いや、それはないだろう。もしそうだとしたら性格が歪みすぎである。

茶柱先生への疑念を一旦保留にし、平田の演説を見守った。Dクラスの面々は1日分勉強が無駄になったと、少しだけ茶柱先生を非難したが、先生は悪気はなかったとか言っていた。なんだか、本当につまらなそうな顔をしている。

平田の演説は無事終わり、範囲の確認も含めて放課後の勉強会が始まった。どうやら、中間が近いためかこれから毎日、櫛田と平田は勉強会を図書館で開くようだ。ちなみにサッカー部は中間終了まで無事休みとなったようだ。これには平田も思わずニツコリであっただろう。

しかし一方で困ったこともある。平田と櫛田が図書館で勉強会をする以上、堀北勉強会は別館で開催されるようだ。赤石勉強会はどうしたものか……と思っていると、堀北と綾小路がこちらに迫ってきた。おい、来るな。

「ちよつといいか、赤石」
よくない。

「はい、なんでしよう綾小路君」

「榎田からお前が勉強会を開いていると聞いた。何でもかなり教えるのが上手いとも言っていた……実はオレも結構小テストがヤバくてな……できれば教えて欲しい」

やだ。

「それは過大評価だと思いますが……ちなみに綾小路君はどのあたりが苦手なんですか？」

地味に気になっていた質問をする。個人的なイメージでは現代文と化学が苦手そうな感じがする。

「そうだな。全部苦手だが……強いて言えば——」

「行きましよう、綾小路君。時間の無駄よ」

綾小路の解答を堀北が遮った。よく言った堀北。えらい！

「いや、榎田があそこまで言ってたし、それに最近の博士を見る。かなり授業に集中してるぞ」

あそこまで……？カメラで見た感じ、榎田はそんなに綾小路に俺の勉強会については説明していなかったと思うが……カメラ外で何か言ったのだろうか？やっぱり榎田は駄目だな。

「博士？——ああ、外村君のことね。外村君の事はあまり興味がなかったから、よく見てないわね。それにたとえ綾小路君の言った通りだったとしても、それが赤石君の勉強会の効果かどうかはわからないわ」

「お前は、どうにも赤石の能力を低い水準だと確信しているみたいだな」

「別に、私はただ事実を言っているだけよ。まあ、榎田さんのように『なんとなく』で話す人が赤石君を評価している時点で、あまり期待していないというのはあるわね」

堀北いいぞ——！がんばれ——！

「榎田からの評価が気に入らないということか？」

「別に榎田さんだけではないわ。平田君も『なんとなく』で話す人の一人よ。あと赤石君もね」

それは確かに的を射ている表現だ。よく見ていらっしやる。まあ

でも平田は俺よりは思考の質が深いと思うよ。話し方は『なんとなく』かもしれないけど。

「つまり櫛田の事を嫌っているように赤石も嫌いだから勉強会に入っ
て欲しくない？」

「別に嫌いではないわ。ただわざわざ関わらせるほど優秀な人間には
思えないと言っているのよ」

お！つまり綾小路は優秀って事ですね！それとも彼氏は特別粋な
のかな。

まあ、結構面白いけど、そろそろ夫婦漫才にも飽きてきたし、今日
は諦めて図書館の方に行くか……端っこの方ならみんなにも見つか
らないでしょ。

「ええつと、すみません。外村君と井の頭さんを待たせてしまうので。
俺は失礼しますね」

ここで、重要なのは綾小路にキャッチされないことだ。もう2回も
ヤツの手順は見た。今度は避けられるだろう。若干ステップを刻みタ
イミングを外しながら2人の前から離れる。

……綾小路は掴んでこなかった。いや、そこは掴めよ。何か1人で
ステップして恥ずかしいじゃん。

2人の前から去り、井の頭と外村の両名と合流し、図書館に向かう。
途中でAクラスの橋本が視界に入った。手に本を持っていた事から
図書館から来たのだろうか？すれ違いざまにタイトルを見ると、サバ
イバルガイドとあった。……そういえば、昨日坂柳が橋本にサバイバ
ル訓練をしておいてください。という謎過ぎる通信を送っていたな。
坂柳流の冗談かと思っただが、橋本は真面目にとったようだ。しかし
なぜサバイバル？……自身の部下は強くあれ！みたいな感じなんだ
ろうか……？

……一瞬、特別試験が頭をよぎるが、特別試験は中間試験が終わる
まで決定していない。……いや、まて中間試験の流用問題もある。も
しや、決定していないだけで、毎年行われている特別試験があるかも
しれない……数年分調べるべきだな。

といつても、しばらくは中間テストに注力しよう。どちらにしる中間が終わり次第か？

図書館に着くと、中間試験が近いためか中には多くの生徒がいた。昼休みに来たときよりも多い。Dクラスの群れも確認できた。中央よりも少し外れた地点に平田・櫛田を発見した。よし、本棚に隠れながら、彼らの逆サイドに向かおう。俺は井の頭と外村の2人を率い、そろりそろりと隠れつつ目標地点まで到達した。ここをキャンブ地とする！

小さなテーブルで4つ椅子がある場所だ。周囲は本棚に囲まれているため、視界は通らない。そのため人が多い図書室でありながらも、どこことなく静寂さと安心感を与えてくれる。外村と井の頭が椅子に着いたので、さっそくいつもの様に問題にとりかかる。

今日はあらかじめ、外村が疑問点があったようで、勉強会開始早々質問をしてきた。質問に答えつつ、思う。だいぶ外村と井の頭のレベルが上がってきた。2人とも標準問題はほぼ完璧だ。また、外村は数学に興味を持ってくれたようで、数学に関しては発展問題に取り組み始めてくれた。井の頭は残念ながら学問にはあまり興味を持ってないようだ。しかし、世界史に関しては何かを掴んだようで、他の教科よりも演習書を解いている時に少し楽しそうに見える。

井の頭には試験問題そのものを念の為渡すつもりだが、この分だと必要なさそうだな……

カリカリとシャープペンスルの走る音と、時々質問する2人の声とそれに答える自身の声だけが聞こえる。本棚が上手く周りからの音を弾いてくれるのか、周りで勉強しているであろう声は聞こえない。

うん。思ったよりいい場所のようだ。今後何か会合に使えるかもしれない。新たな安寧の地だ。大事に使っていこう……

なかなか平穏だ。と思つたら、また質問が来た。

「……この問題は赤石君はどう解くのが正しいと思う？ 私は先に平方完成させたい……です……」

ふむ、これは少し難しい問題だ。……確かに平方完成を先に、ん？ ちよつと待て。今、なんか2人とは違う声だったぞ。

というより、この丁寧語だったりそうでなかったりする口調は……顔を上げ、声の方向を見る。佐倉が座っていた。まて、何でお前がいる。お前は櫛田チームになったはずだぞ。

俺の視線に気づいたのか佐倉が答えた。

「あ、あの、私、櫛田さんのチームに馴染めなくて、その、ここにいてもいいですか？」

いや普通にダメだよ。……一応2人の方を見る。が、どちらも別にいいよ、みたいな雰囲気を漂わせていた。佐倉が気が弱そうだから大丈夫だろうと考えている顔だ。

甘いぞ2人とも。この佐倉は初対面の俺にマウントを取ってきた女だ。決して油断するな。気を引き締めるためにも、俺は佐倉に声をかけた。

「えつと、佐倉さん。実は平田君に勉強が苦手な人に注力するように頼まれていました。佐倉さんは結構小テストも出来ましたし、勉強も得意だったと思いますが……どうでしょうか？」

佐倉に負けないという強い意志を持ち、はつきりと目を合わせて喋った。

しかし、佐倉の方も引く気が無いのか、俺の方を強く睨み返すと外村の問題集を奪った。コイツ、外村を踏み台に！

「あ、あの、私、この問題集解けません！」

いや、だから何だよ……

「で、ですから、仲間に入れてください。……私、外村君より勉強が得意なので……」

いや、それはねーよ。と思い、外村の解いている問題集を見る。ふむ。最近渡した奴だ。確かにこれは若干難しめの数学の問題集である。近くにある外村のノートを見ると、だいたい合っている。……あれ？ 最初に佐倉が質問してきた問題を見る。うん。外村の方の問題

集が難しいな……………

……………おい！外村！お前。赤点組のくせに何でこんなに勉強できようになるって！

「た、確かに、……………そうですね。ええっと、外村君。佐倉さんが持ってきた問題は外村君ならどう解きますか？」

「そうでござるな。拙者としましても佐倉殿の言う通りまず、平方完成をしまして、そこから場合分け……………」

外村はそのまま問題の解法手順を1つ1つ述べていった。やっぱり、そう解くよな……………一応、公式で無理やり解く方法も考えたが、ミスが少ない方法は外村の方法だと思う。

うん。というか、あれだな。比較対象がいなかったが、どうも外村も井の頭もこの一か月で問題集解き過ぎたな……………勉強マンになっちゃまった。もう勉強会必要ない……………？

しかし、困ったな、佐倉が顔を真っ赤にしながら、こっちに迫っている。「わ、私嘘ついてませんよ！」とか言ってる。今にもマウンと取ってきそうだ。

ぐぬぬ。佐倉め。さては2人の勉強が上手くなったのを見計らって奇襲をかけてきたな！汚いヤツめ……………うん。いや、明らかに俺のせいだよな……………どうしよう？

非常に不本意ながらも、佐倉を仲間に加え勉強会は進行していった。どうも、櫛田の勉強会には1度しか出ずに、しかも途中で帰ってしまったらしい。佐倉にとって人数が多い櫛田勉強会は苦痛だったようだ。

じゃあ、何で赤石勉強会の人数を増やすんですかね？とは言いたかったが、そんな事を言うと今度こそマウンととられそうなので止めておいた。

ここまで、独学だったのか、はたまたあまり勉強をしなかったのか、佐倉の実力は5人で行った勉強会以降変化していなかった。まあ、赤

点ということはないだろうが、佐倉自体危機感を持っているようで、必死に問題集を解きつつも質問もたくさんしてきた。やる気のあることは決して悪い事ではないのだが、佐倉はやる気があるときは顔を上気させながら、迫ってくるから、やはり苦手だ……

こういつたら、失礼かもしれないが、佐倉は非常にスタイルが良く、顔も間近で見ると非常に可愛いのだ。そこらへんのアイドルより可愛いのでは？と思ってしまいうぐらいだ。それが顔を赤くしながら、マウントを取ろうとしてくるのだ。つまりビツクリしてしまうのだ。悪意が無い上、勉強も危機感を持っている以上やる気がある。故に断りにくい。

「あ、あの赤石君。ここはどう解けばいいの……？」
まただよ。

その日は結局佐倉が満足するまで付き合うこととなった。ちなみに外村と井の頭は佐倉の熱気に押し負けて、途中で帰った。曰く佐倉の方が中間危なそうだからである。それだけ聞くとクラスメイト思いに聞こえるが、俺にはわかる。2人とも佐倉の相手をするのが嫌で俺に押し付けたな……

中間試験

中間試験3日前となった。悩んだが、今後のこともあるため、井の頭に試験問題を送っておいた。メールには昨年の問題だが例年まったく同じパターンだからほとんど一緒であることと、外村含めて誰にも言わないように口止めしておいた。井の頭なら相手ならこれで十分理解してくれるだろう。

井の頭からの返信は感謝の言葉と、誰にも言わない事、あと、基本的に赤石君から貰った情報は誰にも言わないよとも書かれていた。……ごめん。確かに口止めは余計だったかも。どうやら自分は根本的な部分で人間不信でもあるようだ。

ちなみにこの学校では後輩に過去問を渡したり、特別試験の内容を告げたりするのは禁止事項とされているらしい。つまり過去問を持っている生徒は自分と井の頭だけになる。そのため、井の頭にはあまり目立つのも良くないので8割くらい取れたらあとは適当に回答するのもいいかもしれないとも送っておいた。

それと、赤石勉強会は無事解散となった。佐倉の一件で分かったが、井の頭と外村はもはや赤点組ではなく、勉強得意組だと言える。これ以上やる意味合いは薄いと思いつい昨日解散とした。

一応、今までに間違えた問題の復習を中心にやると良いとは伝えておいた。佐倉に関して、前回以降から毎日のように来ていたが、昨日でお別れとなった。いやー佐倉ともう会えないなんて悲しいなー。という冗談はさておき、佐倉も無事高得点組になれるだろう。

といっても、元々佐倉は出来が良かったので、ほとんど教えることはなかったが……外村に負けた事が悔しかったのだろうか？勉強会にはかなり熱心に参加してくれた。

平田・櫛田勉強会も順調のようで、赤点はなさそうという事であった。

問題は堀北勉強会である。かなり堀北が熱意を持って教えているようだが、順調とは言い難いらしい。これは4名の退学も覚悟した方

がよさそうだ。さらば、綾小路・池・山内・須藤。お前達のは忘れないよ！

さて、勉強会も終わったし、試験の問題も覚えた。中間試験に関してもはや俺がやることはないだろう。

そして、Dクラス以外も今は中間試験の勉強をしていることは、クラスのカメラと通信傍受から確認済みだ。よって前々から考えていた計画を行うとしよう。

堀北勉強会に所属する 4 人に心の中で別れを告げた 2 日後。つまり試験前日の放課後。大変なことが発生した。

なんと榊田が中間試験の過去問を手に入れたそう。いや、お前どうやって手に入れた？

俺は驚くのを抑えるに必死であった。ちなみに井の頭はまったく動じていなかった。友よ、流石じゃ。

しかも、榊田は全員分刷ってきたらしく、1人1人に配っていた。これはすごい。なんか、俺の器の小ささが露見してしまったが……まあ、過去問を配るなんて俺にはできない。これは仕方ない。というより榊田は本当にすごいな。先輩から入手したコミュ力もすごいが、皆の為によくここまで頑張れるな……案外、本当に良い人なのかもしれない。

榊田から過去問を受け取り、深く感謝を伝えて寮に戻る。昨日の疲れがまだ残っているようだ。ささっと寝て明日に備えよう……

そういえば、帰るとき、退学候補の3人は本当にうれしそうであった。なお、綾小路はいつも通り無表情だった。

そうして、ついに中間試験当日。普通に勉強してあった上、テストの内容も知っているので特に問題がなかった。強いて言えば、今回は調整をどうしようかという点である。

前は小テストの際、公開されるとは思っていなかったため調整に失敗してしまった。とは言っても、今回は皆過去問を持っている以上、満点でもそんなに可笑しくはない……むしろ、満点を取って赤点ラインを上げるべきかもしれない。赤点組を退学させるチャンスだ。まあ、みんな過去問をやったので、あまり意味はないかもしれないが……

あ、いや、過去問を持つてるのはこのクラスだけだから、変にテストの点が高いと他クラスから目立つか？まあ、おそらく平均点が高くなるであろうこのクラスで低すぎても目立つが……とりあえず、全科目85点くらいだろうか……？いや、さすがに皆もうちよつと高いか？90点くらいにするか？

……赤石勉強会の面々よりできないと平田あたりに怪しまれるかもしれないしな。井の頭には8割指示をしておいたし、外村がたぶん9割、俺も9割なら問題ないだろう。よし9割で行こう。

が、英語の試験前の休み時間に問題が発生した。なんと綾小路がこつちに来たのだ。待て、来るな。

「赤石。少しいいか？」
よくない。

「えっと、なんででしょう？綾小路君。英語は苦手なのでギリギリまで粘りたいのですが……」

といつつ、問題集を見せつけ、アピールする。英語は苦手に嘘はない。まあ、試験問題と模範解答は暗記済みだが……

そう思っていると、綾小路は口を俺の耳元に近づけてきた。なんじゃ？

「次の英語の試験、出来るだけ低い点を取ってくれ。お前ならできるだろう」

はっ！いや、なんで？

「すみません。その、言ってる意味がよくわかりません……」

「須藤が英語だけ過去問をやっていない。このままだと退学になる。おそらくクラスの平均点の半分が赤点のラインだ。お前は高得点組だから、点数を落とせば須藤を救える」

なんでコイツは赤点ラインについて知ってるんだ？それは結構秘密情報だぞ……いや、変に考えると態度に出そうだ……ここは少し不審な人を見た感じで行こう。

「ええつと、そのよくわかりませんが……目的があるのでしたら頑張ってみます。ただ、俺も英語は苦手なので、あまり落とすにいくいです。それでもいいですか？」

英語は80点でいっかな？もし周りから不審がられたら、綾小路が悪いです！って言おう。

「ああ、それでいい。頼むぞ」

そういうと綾小路は去っていった。丁度、綾小路が席に着くとチャイムが鳴った。なんか、後ろの方でまた堀北とイチャイチャしていたが、気にしないことにした。

中間試験が終わった。その日の放課後に井の頭に電話で確認したところ、指示通りにどの科目も8割をとったようだ。どうも自分はかなり信頼してもらっているらしい。嬉しい。

中間試験終了の数日後には採点が終わり、結果発表となった。この数日ずつと龍園のカリスマ演説を聞いていたが……いや、それはいい、それよりも重要な事がある。

須藤が退学になった。

悲しい事だが仕方ないこともある。点数公開の際、須藤の点が1点足りなかったのだ。ちなみに俺は82点だった。俺は悪くねえ。綾小路がこつちを鋭く睨んだ気がするが、気にしないことにした……もしかして、綾小路、怒ってる？いや、ちゃんと82点に落としたじや

ん。俺は悪くねえ。

でも赤点組が1人落ちたようで良かったかもしれない。これはこれでありだ。まあ、出来れば運動能力が高い須藤より様々な面で問題がある池・山内の方が良かったが……

須藤の退学が決定すると平田が演説を始めた。みんなで頑張つて須藤君を助けようといった感じだ。俺はいつもならその演説を見ながら、さすが平田君って思う所なのだが……綾小路に睨まれていたことから、つい彼の方を目で追ってしまった。

どうやら、彼は廊下の方へ走っていった。なんだ？トイレか？と思つていると堀北が後を綾小路を追つて教室から出て行った。なんだ？デートか？

綾小路の前後の行動から須藤のために何かするんだろうか？いや、退学の取り消しには2000万プライベートポイントと3000クラスポイントが必要である。このクラスにはどちらも無い。故に不可能だ。

そんなことを考えていると、茶柱先生と綾小路と堀北が戻つてきた。須藤は退学ではないらしい。なんか採点にミスがあったようで、須藤の点数は1点上がり赤点のボーダーを乗り越えた。いや、なんで？

茶柱先生が去ると、綾小路は堀北が茶柱先生の間違いを理路整然と正したと須藤をはじめとするクラスメートに伝えた。いや、意味わからん。なんで須藤は退学にならなかつたんだ？もしかして、本当に採点ミスか？

というより、綾小路の話が本当なら、なんかちよつとおかしい。いや、論理が破綻している訳ではないのだが、堀北が茶柱先生を正したならば、綾小路は何をしたのだろうか？彼の方が先に茶柱先生と会つているはずだ……彼が茶柱先生の説得に失敗し、後から来た堀北が論破したとかだろうか？

……これは、調べる必要がある気がする。ただの採点ミスなら問題は無いかもしれないが、そうでないなら大問題だ。何か俺が知ら

ない重大なルールがあるのかもしれない……

退学の条件は一通り調べたのだが、何か抜けていたのか？ いや、抜けていたことも問題だが、もし抜けていたとしたら、綾小路か堀北のどちらかはそれに気づいたという事だ。これは少なくともハッキング能力を使っている時の俺よりも優秀ということになる。もちろんハッキング能力が無ければ俺は堀北より下だ。

しかしハッキング能力ありで情報戦で負けることはないと思う。例えるなら、ただ走る人と目隠しして走る人では前者が勝つのが当たり前だ。それなのになぜ……？ いや、俺の考え過ぎで、ただの採点ミスという可能性もあるが……

そんな感じで、今日は早く寮に戻りたかったが、平田が邪魔してきた。

「赤石君。言うのが遅れてしまったけど、勉強会お疲れ様。それで、今日、誰一人欠けることなく中間試験を乗り越えられた記念に皆で打ち上げに行こうっていう話になってるんだけど。赤石君もどうかかな？」
「行きたくない。でも、あんなに退学者は出さないという建前を言ってしまった以上は断れない。あと、平田にはカラオケの一件で借りがあ。行きたくない。が、そこでさらに櫛田が来た。やめろ、今は忙しいんだ。」

「赤石君も行くようよ！ みーちゃんや心ちゃんも来てほしいって言ってきたよ」

友よ。裏切ったな。……いや、まあ、井の頭は櫛田が行く以上断れないのだから仕方ないし、その上、名目上俺は井の頭と外村の指導役だった。来てほしいと言うのはおかしい……仕方ない、行くか。

「えっと、そうですね。では俺も参加させてもらってもいいでしょうか？」

「ああ！もちろんだよ」

平田はかなり嬉しそうに見えた。最近の平田の通信傍受から見ても、どうやらある程度は信用されているようだ。俺も平田に信用されて嬉しい。

打ち上げ会場はちよつとした飲食店だった。貸切のようで他にはいなかった。参加費は1人2000ポイントだが、平田と櫛田に頼むと立替えてくれるらしい。何名か立替えて貰っていた。ちなみに俺はちゃんと払った。これで、残りのプライベートポイントは6万を切ってしまった事が悲しい点であった。

まあ、米を始め食費のほとんどを無料製品で賄っている以上、あまり文句は言えないが。

参加メンバーを見た所、平田・櫛田・赤石勉強会のメンバーはほとんど参加しているようだった。外村はどちらかという赤点3人衆や綾小路と仲がいい印象であったがこちらの打ち上げに来たようだ。

ちなみに赤点3人衆や綾小路は堀北が主催する打ち上げに行くらしい。あとなぜか開催場所は綾小路の部屋という話だ。なお、櫛田はそちらにも顔を出したいので、途中でこちらの打ち上げからは抜けると言っていた。……櫛田はまだ堀北と友達になることを諦めていないのだろうか？

そんな感じに適当に物思いに耽っていると、櫛田がこっちに来た。噂をすれば影というやつだ。手には飲み物を持っている2つ分……？持ってきてくれたの？

「赤石君。勉強会お疲れ様！はい、これどうぞ。どう、楽しんでるかな？」

櫛田は何時もの人が好きそうな笑顔で話しかけてきた。……打ち上げパーティーは何か所にテーブルと食べ物置いてある感じだ。俺は今まで1人で食った。周りには女子が数人いたが、櫛田を視線に収めると場所を動いた。なんか怖いぞ。が、とりあえず感謝を伝えることにした。

「これはどうも。ありがとうございます櫛田さん」

そう言つて、櫛田から飲み物を受け取つた。うむ。わし好みの炭酸飲料じゃ。苦しゅうないぞ。

……もし俺が嫌いな飲み物だつたらどうする気だつたんだ？炭酸が嫌いな人だつて多いだろうに。それに櫛田の方の飲み物は烏龍茶だ。俺は何も言わなかつたが炭酸を渡された。これで櫛田も炭酸なら違和感はないが……もしかして俺の趣味を知つていたのだろうか？誰にも教えていなかつたと思つたが……いや、もしかしたら、俺は櫛田の方を見た時、咄嗟に好みの炭酸を見てしまった。櫛田がその視線を読んだのだろうか。

うーん。わからん。聞くか？………墓穴を掘りそうだから止めておこう。

「今日、赤石君が来てくれて良かったよ。ほら、前、目立つのが苦手つて言つてたから、来てくれないかもつて思つて。心配してたんだけ」
「そういえば、櫛田のことは最近避けてたな………なんというか不安定な感じがしたのと、面倒事を頼まれそうだから避けていたが………うーん。これは怒つているのだろうか？櫛田は平田以上に読みにくいから、あまり心理戦とかしたくないのだが……」

「ええ、その、心配をお掛けしてしまいすみません。あと、前は櫛田さんの頼みを断つてしまひすみません。今考えると、櫛田さんのお話を受けておくべきだったかもしれませぬ。須藤君があんなにギリギリとは思わなくて……」

「ううん。全然いいよ。というより、むしろ、私があんな事頼んじやつてごめんね。赤石君も忙しかつたのに………赤石君は頼りになるから、つい頼つちやつて………迷惑かな？」
うん。

「ええつと、迷惑というわけではないのですが………あの時は、その、なんと言いますか、堀北さんつてちよつと苦手で。須藤君の時の対応を見るときつと良い人だとは思ふんですが、少し怖くて……」

というわけで、話を有耶無耶にすることにした。堀北について複雑な感情を抱いている櫛田なら、この話題に乗ってくるだろう。

「あー、うん、なるほど。赤石君の気持ちもちよつとわかるかな。ただ

堀北さんはとつても真面目で凄い人だから……赤石君も分かってくれてるみたいだけど、悪い人じゃないんだよね。うん！私もはやく堀北さんと友達にならないと！」

そう言つて、櫛田は自身の頬をパチンと叩いた。よーし。計画通り。あとはこのまま堀北と綾小路の悪口で盛り上がるぞー！

「……櫛田さんですら苦戦するとは堀北さんはやっぱり凄いですね……綾小路君はどうやって堀北さんと仲良くなつたんでしょうか……？」

俺の質問を皮切りに櫛田とちよつとしたトークをした。櫛田の話を引きつつ、途中で適度に櫛田をヨイシヨする簡単なお仕事だ。心なしか、話をしている時の櫛田の表情が何時もより明るく見えた。

櫛田との小トークの後、櫛田はクラスの男子に誘われて別のテーブルへと流れて行った。人気者はなかなか大変そうだ。俺も一人の時間を満喫しようと思つたら今度は平田がやつてきた。

しかもお供を大量に引き連れている。軽井沢と篠原、あとは松下と森と佐藤と市橋と盛りだくさんだ。このテーブルはそんなに人が入らないので帰つて。

「やあ、赤石君。調子はどうかかな？」

今は不調。さつきまで普通だった。だから帰つて。あと隣の軽井沢がちよつと機嫌悪そうだぞ。平田、早く彼女の機嫌をとりなよ。やくめでしょ。

「ええ、好調ですよ。平田君はどうですか？」

というよりお前は彼女と2人きりにならないの？いつも女子をたくさん連れてるけど軽井沢は嫉妬とかしないのか……？

「うん、僕も好調だよ」

平田はそれだけ言うが無言になった。おい、やめろ。何で喋らない。この狭い空間に男子2人と女子6人もいるんだぞ。しかも俺が会話できる相手はほとんどいない。話をしたことあるのは……市橋と篠原と、あと森と話をしたことがあつたかな？

……本当に平田は何をしに来たんだ？俺に嫌がらせをしに来たのか？なんか嫌われることしたっけ？いや、盗聴してるけど、それはバレてないし………わからん。

平田に対する疑心を深めていると、唐突に軽井沢が声をかけてきた。何じゃ？

「赤石君って櫛田さんと仲いいの？」

興味無さそうな投げやりな質問であった。というより、初めて声をかけられた気がする。……何でそんな質問するんだ？

「どうでしょう……？そこそこだと思っはいるのですが、櫛田さんがどう思っているか分からないので……普通ですかね？」

別に仲が良いわけではない。悪いわけでもないが。というより、井の頭以外とはだいたいそんな感じだ。

「ふーん。そうなんだ。ねえ、平田君あつちのテーブル行こうよ」

それだけ言うと、軽井沢は平田の方に声をかけた。よく分かんないけど好都合だ。いいぞ！平田達を連れていけ！

「あ、うん、そうだね。それじゃ、赤石君。また」

平田も彼女の誘いは重要なのか、軽井沢に導かれるように別のテーブルへと向かった。そろそろと平田と軽井沢のお供が移動していった。市橋が去り際にこちらに手を振ってきたので、軽く頭を下げておいた。彼女とは初回の勉強会以外ではあまり話をしなかったが、一応この集団の中ではまだ面識がある方だ。

こうして平田御一行が去っていった。本当に何しに来たんだよ………

おい、篠原、残ってんじやねーよ。早くお供しにいけよ。

篠原は俺の方を見ると、何かを言いかけたが、途中で止めて、軽井沢達を追いかけて行った。俺の念力が通じたか………とりあえず平和になった。と、思ったら、今度はこちらを伺っていた、王が近づいてきた。帰って。どう………ん？よく見ると井の頭も一緒だ。来たか友よ。

「赤石君。あのさ、……英語何点だった？……私は100点だったよ」
王が開幕いきなり喧嘩を売ってきた。っていうか、その嬉しそうな

ドヤ顔止める。一応言っておくけど、俺も本当は100点取れたから。いや、実際は調整して90点かもしれないけど、解答知ってたから100点取れたから……綾小路の勧めに従っただけだから。

だから、その顔止める。お前のツーンテール引きちぎるぞ。……俺じゃなくて佐倉が。

「82点でした」

質問にはとりあえず答える。俺の答えを聞いた王はあろうことか、満面の笑みを浮かべ、クススと笑い始めた。

おい、おい、おい、なにわろてんねん。椎名呼ぶぞ。椎名呼んでお前をCクラスの女子どもの中にぶち込むぞ。ついでに一之瀬あたりも呼んでくるぞ。

俺の心の叫びが聞こえたのか、隣にいた井の頭が「美雨ちゃん」と呼びながら王の肩を叩いた。ちなみに井の頭は俺と2人っきりの時は王さんと呼びます。まあ、俺に対しては何時も赤石君なので別に王に対してマウントを取れるわけではないが……

王はなんとか笑いを堪えた後、再び口を開いた。

「へー。そ、そうなんだ。……赤石君、英語は苦手なんだね」

確認しなくていいから。あと、本当は100点取れたから。その笑いを堪えたドヤ顔は止める。

王は俺の回答を待つことなく、少し顔を赤らめながら、さらに怒りを誘う提案をしてきた。

「赤石君。私が英語を教えること、どうですか？」

やだ。というより、何でコイツこんなに強気なの？クラスの中では井の頭と同じで大人しい方じゃん。数学の件をまだ根に持つてるの？

というよりコイツは、俺を怒らせることに興奮して顔を赤くしてるのか……？まさか新たなマウント少女が現れるとは……

あ、隣にいる井の頭が笑いをこらえてるように見える。彼女の的にはだいぶ面白かったようだ。よかったな王、お前の友達は喜んでるぞ。俺は怒ってるけどな。

「いえ、ご迷惑はかけられませんから」

まあ、適当に答える。次ふざけた事言ったらその口を縫い合わすぞ！と、だけ心の中で念じておく。

こちらの応答を聞くと、王は一瞬だけ鳩が豆鉄砲を食ったよう顔になった後、しかめっ面をし、じっとこっちを睨んできた。最近女子の間で俺の事を睨むの流行ってるの？

「……………なら、もういい」

そう言って去っていった。井の頭は王と俺を二回ほど交互に見たあと、俺に軽く会釈して去っていった。俺も軽く会釈する。お疲れ様です。

——王はどうも、俺に対してライバル心のようなものを抱いているらしい。井の頭が言うには、王が定期的に俺の話をして、かつ次のテストでは頑張って勝つと意気込んでいたようだ。ちなみに井の頭は曰く最初の1回目は面白かったけど、何度も同じ話になるから退屈らしい。中々厳しい評価である。

今回はマウント取りにいったら肩透かしを食らって怒ったのだから……大丈夫だ。俺も王のドヤ顔見たら怒ったから、これでお相子だ。

その後は外村に改めて御礼を言われたり、再びこちらに来た榎田に王の話を振られたり、平田集団から離れてフリーになった市橋に次にやるべき問題集を聞かれたりした。1人手持無沙汰になるかと思っていた打ち上げパーティーであったが、俺の交友網も思ったほど狭いというわけではないようだ。

パーティーの後半になったあたりで榎田が抜け、榎田目当ての男子が抜けて行ったので、それに紛れて抜けることにした。

ちなみに井の頭と王も同じタイミングで抜けた。友よ、やはり気が合うな。いや、まあ、榎田がいない以上付き合う必要が無いというだけだろうが……

寮に戻るとハッキングを行い、退学を取り消す条件を再確認する。やはり、クラスポイント300とプライベートポイント2000万が必要だ。

次は採点について探す。採点の不正を頼むことが可能かどうかを調べると……興味深いルールを見つけた。点数を買うことができるというルールだ。確かに茶柱先生が何度もポイントで買えないものが無いと言っていたが……普通点数を買うか？綾小路にしる堀北にしる、よく思いついたな……その上10万ポイントだ。

ポイントの履歴を調べたところ2人で5万ずつ払ったみたいだが、それでも5万も今のDクラスで払うとは……：……：……須藤はそれほどの人材なのだろうか？あの2人……いや、綾小路には俺とは違うものが見えているのだろう。

——茶柱先生と綾小路・堀北の交渉はバッチリとカメラに写っていた。音声を調整し聞き取ったところ、綾小路が強い意志を持ち交渉を行い、用意できるポイントが8万程度であり、10万は出せないという所で堀北が来て2人で10万払ったという事が判明した。堀北のやったことはポイントを出しただけだ。いや、まあ、それでもケチりもせずにポイントを払うあたりは、とても立派で真似できないが……

須藤が退学判定をされた後、すぐ茶柱先生のところに行ったことといい、交渉方法や、ポイントで点数を買うという発想力、そして、全てが終わった後に功績を堀北に渡すという手腕。恐ろしく手の込んだ偽装、俺じゃなきや見逃しちゃうね！

まあ、冗談はさておき、綾小路はどういうわけか実力を隠したいようだ。と、すると水泳の授業も本当はもっと速いのかな？いや、それに学力ももっと上かもしれないな……目立ちたくないのだろうか？それとも俺と同じように隠れて2000万集める気だろうか？

どちらにしる優秀な上、爪を隠したがる性質は関わると危険そうだな……あまり関わらないようにしよう。幸いにして、むこうはこちらの能力についてはあまり把握していないだろう。先にこちらが気づいたのは運が良かった。

……これからは綾小路の前では不自然にならない程度に手でも抜くか？いや、まあ、俺はハッキング無しだと、どの能力も学年の平均程度だから関係ないか……

せつかくなので、一度綾小路の動きを探ってみよう。前回、堀北勉強会を盗聴した際に櫛田相手に使用したプログラムを起動させる。対象を綾小路に絞り、学園内の全てのカメラから綾小路の行動範囲の絞り込みを行う。

正直、このプログラムはかなり動作が重い。まあ、画像認証を学園内のカメラデータ全てに対して使用し、さらにはカメラ外の経路予想を最適化するプログラムまで書き込んでいるのだ……重いのは仕方ないのだが、俺のパソコンが火を噴きそうだ……マズい。流石に入学から今までの範囲は処理が大変だ。櫛田に対して使った時も結構ギリギリだったのだが……

うーん。このシステムはかなり有効なんだが、PCスペックがボトルネックになるとは……これでもだいたいパソコンを改造したのにな。いっそのこと学校内のシステム上で走らせるか？いや、さすがに、それは危険か？俺のハッキング技術を全てかければ認知されなくても出来そうだが……

そこまで考えた所で、ようやく綾小路の行動履歴が表示された。学校への通学が基本となっており、たまに赤点三人衆と行動を共にしているようだ。しかし、コイツは櫛田の時も思ったが、カメラ外での行動が多い。やはりカメラを警戒しているのだろう。ん？あれ、なんか、ちよつと行動がおかしい日があるような……

ああ、これだ。綾小路のルーチンからはみ出してる。経路探索も混乱している所ようだ。うーん。この行動を見ると、綾小路は路地裏に入って、そして少ししたら路地裏から出てきてる。ここに何かある

のだろうか？

綾小路を観測した監視カメラを開き確認する。夜の時間帯だ。うん？あれ、堀北と一緒にだ。デートか？あれ、しかも心なしか堀北の表情が……カメラを拡大させ堀北をよく観測する。汗ばんでいるというか、疲れたような顔だ。路地裏……綾小路、お前まさか。堀北と路地裏で行為に及んだのか……!?

気になり、あ、いや、違う。これは純粋な仮想危険人物に対する警戒からであり、決してやましい気持ちではない。断じてない。

ぐぬぬ、肝心の路地裏にはカメラの目がない……仕方ないのでカメラをしばらく戻し、2人が行為に及んだとされる路地裏の他の出入り口を観測するカメラも使い。前後3時間を隅々まで見た。せ、じやなくて行為がどれくらい長いかわからなかったため3時間という長い時間を観測範囲とした。

しかし、それによりさらに驚くべき新事実が発覚した。堀北生徒会長が路地裏に入っているのだ。彼の路地裏から出た時刻から考えると、どう考えても2人に会っていると思われる。って、あれ？堀北と堀北生徒会長？苗字が同じだ。

ふと気になりデータベースにアクセスする。うん兄妹のようだと、いうことは綾小路は兄公認の前で堀北と行為に及んだのか……？いや、さすがにそれはないと信じたい。俺がハッキングで頑張りた学校の生徒会長がそんなはずがない。きつと何かの相談……そうか！綾小路は堀北兄に堀北と付き合う許可を貰ったんだ！うん。なんかイメージと合う。それで堀北が緊張して汗をかいていたのだろう。うんうん。堀北兄は威圧感もあるし、さすがの堀北妹も緊張したのだろう。

そういうことにしよう。性に乱れたクラスメイトとか嫌だ。綾小路や堀北とはあまり関わらないつもりだが。なんか嫌だ。まあ、高校生ぐらいだともしかしたら、そういったのが普通なのかも知れないが……俺には分からない世界だ。

心の中で綾小路と堀北兄妹の会合を非常に綺麗なエピソードに昇華することとした。きつと堀北兄が「妹は渡さない！」とか言って綾

小路に殴り掛かり、そして謎技術を持つ綾小路がそれに対抗し、一本とる。厳格そうな堀北兄が「なかなかやるな」とか言つて妹とのお付き合いを認める形だ。うん。これでいいや。

でも、きつと本当は路地裏で、いや、カメラの無い空間での出来事など想像でしかない。

だから想像の中ではあの3人を綺麗なエピソードに塗り替えておこう。うん。綾小路と堀北兄が拳で語り合った。それでいいじゃないか。

綾小路が2つの意味で関わりたくない人物だと判明したが、やはり有能な人物であるし、彼も盗聴対象に入れておいた方がいいな。……でも堀北とのデートのプランとか話されると嫌だな。

……あれ？そういえば平田って軽井沢とデートの約束とかしてなくないか？あー、いや、でも登下校が一緒だからいいのか？いや、平田はよく考えるとかなり忙しいし、デートする暇がないだけか。それに平田って結構プラトニックなイメージがあるし、綾小路と違ってそう乱れてはいないだろう。

しつつかし、これでまた盗聴対象が増えたな……平田の次は葛城・一之瀬と思っていたが、櫛田に綾小路とDクラスには曲者が多い。プログラムを刷新したいが……いつそのこと新しいPCでも買うか？あー、いや、そうすると今度は回線がボトルネックになりそうだな……それにポイントはケチりたいし。困ったものだ。

こうして、今日も日課になっている龍園のカリスマ演説を聞いて眠りに落ちた。はあ、もうちよつと集音器の調整をちゃんとやるんだっ
たな……

綾小路清隆の独白1—1

利用できる人間と利用できない人間。

オレにとって他人とはその2つに分類できる。

そう、思っていた。

高度育成高等学校の入学式の向かうバス内で揉め事を静観した後、オレは1人の少女に話しかけたが、生憎、間が悪かったようで、会話は長くは続かなかった。

——確固たる意志を持つて譲らないってなんだ。

少女の言動に関して若干困惑していると視線を感じた。

振り向くと、こちらを鋭い目で観察する男がいた。目測で身長は175cm程度であり、オレとほぼ同じ。体重は横幅と制服の凹凸を考慮すると60kg前後か？

男の意識はオレではなく先ほどの少女にあるのか、視線の先は少女が歩いて行った校門の奥へと流れていた。ひどく特徴的な視線であった。興味や関心というより確認作業のような視線だ。あの少女と知り合いなのだろうか？

少女の難解な言動を思い出し、せつなくなつたのでこの男に聞いてみることにした。勿論、この男が少女と知り合いではない可能性も十分にあるが、それならばそれで、会話の糸口にはなる。高校生活では友人を持つものが多いと聞く。オレも高校生らしく1人や2人、他愛もない話をする相手を作るのもいいだろう。

「なあ、少し聞きたいんだが、いいか？」

男の特徴的な目を見ながら話しかける。向こうもこちらに気づいたのか、鋭い視線を浴びせてきた。嫌な視線だ。この男の視線はあの施設の研究員に似ている。

「ええつと、何でしょうか？」

——ん？今、この男、左目が……

僅かな違和感を感じたが、質問を続けることにする。

「いや、あんたはさっきの女子と知り合いなのか？」

男の一挙一動を観察する。まさか無いとは思うが、あの施設の関係者である場合は何らかの特徴的な反応を返すはずだ。

「いえ、知り合いではありませんが……」

顔色、汗、肉体の些細な動き、姿勢。嘘というものは様々な点から判別することができる。

もちろん個人差もあり、まったく嘘を悟られないタイプもいれば、素人でも見分けられるタイプもいる。が、とりわけ特徴的なものは目の動きだ。一般的な目を逸らす者や、逆に露骨に意識してしまい、相手と目を合わすものなど様々だが、何らかの特徴が出やすい。

逆説的に、ある意味、目の動きさえコントロールすることが可能ならば嘘を見破られる可能性は大きく減少する。

そして、この男に関してはある1点を除けば「嘘をついていない」可能性が9割といったところだ。

ただ、その1点が非常に問題である。それはこの男の癖なのか、それとも身体的特徴の1つなのかが現状不明であるからだ。

癖ならば「嘘をついている」可能性が高まり7割程度となる。つまり先ほどの少女と知り合いだ。逆に、身体的特徴である場合は厄介だ。嘘か本当かが分からないからだ。

「そうか、なら別にいいんだが……」

しかし、不必要に干渉を続け怪しまれるのも良くはない。よって、一旦会話を打ち切ることにする。

ただ、オレはあの施設では比較的有名であったと思われることから、オレとある程度自然に会話している以上、この男はあの施設の関係者ではないだろう。

どうも警戒しすぎているのかもしれない……さすがにあの男がこの学校を嗅ぎつけるにはもう少し時間がかかるだろう。それまでの間に何か対応策を考える必要があるが。

男と一度分かれた後、ひっそりと発覚されない距離から行動を追う。目線や歩法、僅かな仕草から、この男について興味深い点が見つられた。

1つ目は、この男は癖が非常に少ないという点だ。ただ、それは故意に癖を隠蔽しているというより、習慣的な特徴を持つていない人物という解釈が正しい。つまりはまさに「普通の男子高校生」だ。おそらく、今、校舎内にいる男子高校生の仕草や癖の標準値を取ればこの男になるだろう。

それゆえ、先ほどの会話の時の疑問点が非常に厄介になる。

この男の唯一の特徴である目。左目の瞼が時折僅かに痙攣する点だ。最初は嘘をつくときの癖かと思ったが、ここまで癖が無いことを考えると身体的特徴の1つなのだろう。先天的なものか、もしくは後天的なものか、この男は何らかのタイミングで左目の瞼が僅かに動く。それが、どのタイミングかは現状は分からない。もちろんランダムの可能性もある。おそらくこの男と接していくことで理解できるようになるだろう。

2つ目は1つ目と若干矛盾する点だが……この男は設計・構造学または建築学、ないしセキュリティ理論において卓越した技術の持ち主だという事だ。

その根拠としては、この男は校内を歩き監視カメラの個数とその配置を確認していた手法にある。単純に視野が広い人間や、疾しい事がある人間、他にも視線に敏感なタイプや、プライバシーを高く意識するタイプであるならば、カメラが複数設置されていることには気づくだろう。

しかし、この男の場合はカメラの把握から次のカメラまでの足取りが非常に精確だ。これはおそらく、カメラの監視領域から他のカメラの設置地点を推測し、その方向を探索していると考えるのが妥当だろう。

さらにこの男は、校内の施設の配置から他の施設の配置を予測し行動している節があり歩き方に迷いが無い。

一方でこの男が仮になんらかの卓越した技術の持ち主だったとし

た場合は癖を持たないというのは少し奇妙に感じる。男の年齢が15歳だと考えると、この若さで1つの方面の卓越した天才である以上、なんらかの特徴的な癖を持っていてもおかしくはない。いや、持っている方が自然である。左目を除けば、まるで一般高校生のように特徴の無い、この男が卓越した何らかの技術を持っている。少し不気味であった。

無論、癖は矯正することで無くすことが可能である。あの施設の出身者であればそういった事は容易であろう。

しかし、この男の足運びや姿勢からは施設独特の振る舞いは感じられない。非常に自然なものだ。それゆえ、この癖の無さは天然のものなのだろう。なんとも腑に落ちない男だ。

男について考察を進めながらも尾行を続ける。

——この男の歩み方からすると、次の通路は左か？

男は予想とは違い右に曲がった。尾行が発覚したか……？通路をゆつくりと警戒しながら進み、男が曲がった角を見る。

一瞬、待ち伏せをされるかと思ったが、杞憂に終わり男は遙か前方へと進んでいた。念のため周囲を確認し監視カメラの位置を見る。なるほど。確かにここは右に曲がるのが正解のようだ。付け焼刃の予想では勝てないな。

おそらくこの男はこの部門においては本物の天才だろう。

そのまま男のあとを追い、考える。そろそろ声をかけるべきだろう。この男の足取りから向かっているのはオレと同じDクラスだ。忘れがちだが、この男に声をかけた最初の理由は友人作りだ。

まあ、想像以上に興味深い男だったため、つい観察が過ぎてしまったが、これまでの行動からあの施設の関係者ではないと分かった以上そこまで警戒すべき相手でもない。このあたりで、この男の遠距離からの観察は中断しよう。それに、話をしてみても新たに分かることもあるだろう。

しかし困ったな。高校生の話しかけ方が分からない。普通はどう

やって話しかけるんだろうか？やはり興味のあることだろうか？

「監視カメラが気になるのか？」

マズイな。出方を間違えた気がする。しかし男は特に気にしなかったのか、こちらの質問に答えた。——今、左瞼が僅かに痙攣した。「いや、校舎に入るところにもあったので、なんだか沢山配置されているように思えて……」

声のトーンは普通だが、僅かに声に不安定さがあったが、おそらく緊張だろう。現状、この男が左瞼を揺らしたのは声を掛けられた時の2回と質問をされた時の1回だ。痙攣は緊張由来のものだろうか……？なにぶん、他の癖が少なく判断に迷う。

「そうか？そんなに配置されてたのか……気づかなかったな」

男の反応を見る。また、左瞼が揺れた。

「ええっと、あなたは新入生ですよね？もしかして同じクラスだったりします？自分はDクラスなんですけど……」

やはりDクラスか。しかし面白い質問だ。今の質問と仕草からこの男はオレがDクラスだとは確信してはいないようだ。ここまでの天才性を発揮しながら、現在位置からオレの行動の予想を取れていない………設計・構造学の間ではないな。もしこの分野の天才であれば消去法から推測できるはずだ。

「ああ、偶然だな。オレもDクラスだ。綾小路清隆って名前だ。よろしく……？でいいのか？」

マズいな、どうもこの歪な男の考察は面白い。おかげで、オレのコミュニケーション力まで乱れてしまった。本来であれば、無難にこなせるはずだが……

「綾小路君、こちらこそよろしく。俺は赤石求と言います。【きゆう】は【求める】って字の求です。よく変わった名前だって言われます」
珍しい名前だが、反応に困る。笑え、という事だろうか？しかし、オレが黙っていると赤石は左瞼を震わせた。今度はオレの反応で震えたか。この左瞼の法則はもう少しで掴めそうだが………適当に名前に関して珍しい事を告げておいた。

そのまま赤石と何度か会話を続けた。オレのコミュニケーション

能力の賜物故か、かなりの会話をを行うことに成功した。どうやら、オレは赤石と相性が良いようで、話題のチョイスが似ていた。さらに会話からこの男が建築学の知識に乏しい事も理解できた。

また赤石はオレに話しかけられてからカメラの確認を止めたようだった。

これは好意的に解釈するならば、『赤石は人と対話するときはそのことに集中する人間である』となり、否定的に見るならば『赤石はオレの事を警戒している、ないし、周囲の人間には自身の天才性を隠している』となる。

ここで解釈に指向性を与えてくれるものとしては、赤石のこれまでの言動である。赤石は他人とのコミュニケーションが比較的良好であり、また尾行や観察されていることにまったく気づかない程警戒心が欠けている。このことからおそらく前者である可能性が高い。

歪な天才だが、高校生活に彩りを与えてくれる友人の1人として見ると悪くないかもしれない。

オレは心のメモの友人候補の欄に「赤石求」を加えるのであった。

教室に入り友人候補の赤石とは席が離れてしまったが、バスで同じだった少女と席が隣同士となった。なかなか面白い縁だ。ちなみに赤石は前の席で男子生徒と話し込んでいた。やはりあいつはオレと同じくらいコミュニケーション力が高いようだ。

その後、茶柱と名乗った教師から説明を受けたのち、自己紹介の場面となった。

平田と名乗った男が自己紹介を始め、次々と生徒たちにバトンが回されていった。赤石は再度笑えない名前ネタでいった。持ちネタみたいだったが普通は反応に困るネタだ。どうも笑いのセンスはないようだ。いや、天才故、凡人の感覚が理解できないのだろう。

——ここは今後の学校生活を考えて、少し気張って自己紹介することにしよう

幸い、今までの生徒たちの発言と行動から笑える、笑えないのボーダーはある程度把握した。具体的に言うとな前ネタは笑えない。

「ええつと、……綾小路清隆です。……よろしくお願いします。得意な事は……えー、ありませんが、仲良くなれるように頑張ります」
クラスが静寂に包まれた。

——失敗した。

しかし、間髪入れず赤石が拍手を送り、それにより平田をはじめ周囲の生徒たちが拍手をして、なんとか有耶無耶になった。

やはりあいつは結構いい奴かもしれない。

入学式から二週間以上経過した。オレはなんとか池たちのグループに入ることに成功した。また隣人である堀北とはそこそこ会話をする仲になった。

一方、友人候補であった赤石とは未だに親しくはなれていない。どうも赤石は平田や櫛田、その周りの女子といったカーストが比較的高い集団と親しくしており、話しかける事が難しい。縁がなかったようだ。

どうしても赤石と友人になる必要性はない。現状、池や須藤・山内といったメンバーに囲まれている以上、『他愛の無い話をする友人』というのは確保されている。されてはいるのだが……

——変な感覚だ。最初に会った時は嫌な目線の男だと思ったが……入学式での立ち回りから感じさせる天才性と、普段のカースト上位集団と話している一般性のギャップ故に興味を持ったといった所か？

自身の感情であるのだが、上手く分析できない。いや、あえて言葉にするならば、

——あいつは、楽しいのか……？

オレはこの学校に来て自由を謳歌している。何気ない日常を過ごし、現状に満足している。しかし、おそらく『楽しい』とは感じてはいない。そもそも、それ以前に『楽しい』という感情など持ったことは無い。

あいつは、今の日常をどう感じているのだろうか？ 案外、あの歪な天才には悩みなどないのかもしれないが。

そう思っていると赤石はこちらに話しかけようとしていた。が、すぐ何かを気が付いたような顔をして止めた。やはりどうにも赤石とオレは間が合わない。

しばらく赤石を目で追っていると、見学の女子生徒が赤石に対して手を振っていた。確か、あの女子は……佐倉だったか？ やはり、カースト上位である赤石は女子との交流が多いようだ。こちらの男子ばかりの集団とは違う。

授業の途中で堀北がオレの体格について質問してきたが、無難な返答を行っておいた。

この少女、能力的には比較的有能である。つまり『利用できる』人間だ。

そこで、ふと気になり、堀北に対して質問を試みることにした。

「なあ、堀北。お前は赤石をどう思う？」

「……？ 赤石君？ 平田君とよく一緒にいる生徒という認識しかないわね」

堀北の回答は一般的なものだった。おそらくほとんどのDクラスの生徒はそう答えるだろう。もしかしたら平田もそう答えるかもしれない。赤石は自身の天才性、おそらくセキュリティ理論における才覚をひけらかす事はしていない。

故に当たり前の返答であるのだが、期待外れ感が否めない。

「……そうか」

故に、これ以上は意味を持たない。よって会話を打ち切る。

「綾小路君の考えている事は単純ね。いえ、浅はかとも言えるわ」

しかし、堀北はどうかやら、会話をまだ続けたいようだ。今日はいつもより舌が回っている。水泳の授業はお気に召したようだ。

「……？単純？」

「つまり、赤石君と友達になって、クラスの中核に関わりたいたいと思っ
ているのでしょうか。少し櫛田さんに毒されてるんじゃないかしら。少
なくとも貴方には無理だから止めたほうがいいわ」

堀北のその言葉を聞いたとき、普段のオレであれば、適度な回答を
行うのだが、この時はそんな余裕はなかった。

——オレは赤石と友達になりたいのか？

それはあまりに衝撃的な言葉であった。しかし、それに考察してい
る暇はない。

「ああ、そうだな。赤石はいい奴だし、友達になってみたいな」

「どうかしら？彼の中身が外側以上に伴っていればいいけれどね」

「いや、少なくともお前よりは善人だ。なんたってオレの自己紹介の
時に真っ先に拍手をしてくれたからな」

「そんな下らない理由で善人かを判定するなんて、綾小路君の倫理観
は少し擦れてるわね」

「擦れてるのはお前の人間性だと言っておこう」

そう言うと、堀北は実力行使に出てきた。オレの脇腹を直接掴み上
げたのだ。なんとという暴力行為だ。

まあ、話題を無事逸らせたのはよかった。

しかし、堀北と論争を行っていたせいで、競争のスタート位置につ
きそびれてしまった。先生に注意されてしまい、しぶしぶレーンに向
かった。去り際に堀北が笑っていたが、もしや、堀北は故意に話題を
引き延ばしたのだろうか？

プールに入った際、2レーン隣の赤石はこちらを呆れ顔で見えて
いた。ふむ、赤石は堀北が故意に話題を引き延ばしたと判断したよう
だ。オレもそちらの可能性が高いと思う。

競争自体は適度に力を調整し、他の生徒と近い力量で行った。赤石は3位であり、1グループの中では上位であった。これはいい機会である。人間というのは上位の者よりも下位の者に対して心を開きやすい。ちやうど赤石と視線が合った。

ゆっくりと赤石に近づく。鋭い視線がこちらを捉えた。不思議と入学式のような不快感はなかった。

「赤石、速かったな。水泳をやったのか……？」

実際のタイムはそれほど特筆すべき点ではない。須藤や高円寺レベルでなければ、速いとは言えない。

しかし、見た所、このクラスの平均値から考えると赤石は速いと言える。このクラスの平均が男子高校生の平均を大きく下回っている可能性もあるが……少なくとも会話の切欠としては悪くは無いだらう。

「小学生の頃スイミングスクールに行ってたまして、といっても水遊びの延長みたいなものだったので……競泳の選手とか水泳部の人には普通に負けると思いますよ」

赤石の左瞼は痙攣しなかった。

——やはりか

赤石の左瞼に関しては1つの仮説をオレは打ち立てている。

それは、赤石は脳内での思考が加速した際に左瞼が痙攣するというものだ。そして、おそらく後天的なものであり、本人の意識していない点である。

言動や仕草から赤石が何かを思考するときには痙攣することが多い。また、赤石は初対面の人間や、会話を始めるとき、話しかけられた時は相手をよく観察する節があり、その観察の際の思考が加速される。

それゆえ、赤石は話しかけられた時に痙攣を起こすことが多い。逆に考えずに情報を言うときや、比較的備えられる状況すなわち視界内に存在する人がゆっくりと近づいてきた時などは痙攣が無い。

また、これが後天的だと判断した理由は、赤石の頭部の手術痕にある。小さく目立たない傷であるため、余程目を凝らさなければ見つけられないだろう。位置的に大脳に対する手術だ。人間の脳は非常に特殊な構成をしており、デリケートな部位だ。目との神経系も非常に複雑だ。なんらかの事故、たとえば交通事故などで頭部を強く打ち、その後遺症として思考の際のブレが左瞼の痙攣を引き起こしているのだろう。

最後に本人が気づいていないというのは……純粹に気づいていないからだ。というのも左瞼の揺れは本当に僅かであり、おそらく余程意識しなければ気づかない。医者も気づかなかった可能性が高い。

オレも赤石をよく知ろうと思わなければ気づかなかっただろう。

「そうか……」

左瞼の秘密がほぼ明らかになったが、どうにもそれ以上の会話が続かなかった。残念だ。やはり間が悪い。

水泳の後は、悩みつつも学食に向かうことにした。何度か出入りしたが、例の山菜定食を食べるべきか悩んだからだ。この山菜定食の存在理由に関して、考察してみるのもいいが……

そう考えていると赤石が視界に入った。どうやら女子生徒と一緒にいるようだ。見ない顔だ。自信はないが、同じクラスではないだろう。

しかし、赤石はかなり女子生徒と仲が良いようで、手を握り合ったりしていた。付き合っているのだろうか？平田といい赤石といい、カースト上位ともなると、彼女の1人や2人はいるのが当然のようだ。

一般的に男子高校生は女子との触れ合いを重視している。これは池が言っていた事なのだが、高校3年間で彼女を1人も作れない男は負け組らしい。どういう理屈だ？

また、山内はだいぶ経験者らしく何度も告白されているらしい。

しかし、あの2人が現状女子と付き合っている素振りはない。また山内が言う告白してきた女子の中には佐倉がいた。そして今日の水泳の授業の際、佐倉と赤石は交友関係があるようだ。さらに今、赤石は他クラスの女子と手を握り合うほどに親密だ。

赤石が他クラスの女子と付き合っていることは、池たちには秘密にしておいた方がいいだろう。

綾小路清隆の独白1―2

5月1日、茶柱先生の説明によりこの学校のシステムの真相が発覚した。

クラス中が阿鼻叫喚となる中、赤石は1人だけ反応を見せなかった。後ろから観察すると、オレの席からだど左隣は見えない。が、あそこまで反応に乏しいという事は、今回の出来事に関して赤石は事前にある程度予期していたと見ていいだろう。

小テストの結果は赤石は6位だった。単純な学力では平田より上かと思っていたが、手を抜いたか？手を抜くにしても6位というのは微妙な順位だ。トップ5位を避けて、かつ上位にいる事を意識したといった所か。あまり目立たず、カーストでの地位を捨てることもない。そう解釈すれば中々の妙手である。

しかし、器用な男だ。オレは問題の配点からの逆算で50点を目標したが、赤石は上位陣の点数を予想して自身の点数を決めたようだ。平田や王、松下といった交友関係が近いクラスメイトの点数ならば予期できるだろうか、交流が無さそうな90点組3人の点数にもあたりをつけたか……赤石の方が他人の観察は一枚上手か？

ともあれ、騒然としたDクラスであったが、平田が統率を取り、昼休みまでには一時的にDクラスは落ち着きを取り戻したようだった。

そして、昼休み中、ポイントが尽きた山内が赤石に無心した。しかも、運悪く、教室の外には赤石の彼女と思われる女子生徒が来ていた。赤石は少し慌てて、教室から出ていき、女子生徒もその後を追っていった。オレはとりあえず、赤石を追おうとしていた山内を引き留めて、池たちと合流したあと、トイレと偽り、食堂へと足を運んだ。

赤石を探すが、見当たらなかった。どうやら、今日は食堂ではないようだ。

この学校のシステムから考えると、他クラスを追い落とすしかAク

ラスに行くことはできない。故に、他クラスの女子生徒と交際している赤石はどう判断を下すのか見たかったが……いや、赤石が今回の出来事を予期していたことを考えると、他クラスとの女子の繋がりも何かの布石と考えた方がいいかもしれない。

昼飯を食いながら、今後の事を考える。オレの友人たちである池や山内、須藤は小テストが散々な結果であった。おそらく、このままいけば3人は退学になるだろう。また、Dクラスは茶柱先生の言うように全体的に成績が悪く、何の対策も取らなければ退学者が多数現れることになる。

クラス全体の舵取りは平田と櫛田の2人に任せられている。あの2人ならばなんらかの処置は行うだろうが……はたしてその手は池たちまで回るだろうか？隣人である堀北はAクラスに拘っていたようだが……それに最大の不確定要素である赤石の出方も気になる。

ある程度思案を重ねた後、なんとなく中庭に通じる廊下を通りDクラスに向かう。一応赤石を探してみたら、いた。件の女子生徒と一緒だ。

中庭にいうという根拠は全く無かったが、思わぬ収穫である。

遮蔽物を使い身を隠し様子を伺う。今日は5月にしては比較的、気温も高く建造物の影に座り込んでいる生徒がいたとしてもあまり不自然ではない。残念ながら遮蔽物と影の関係からあまり近くで観察することができず、声を聞き取ることは叶わなかったが2人の仕草からでも何かを得られるだろう。

見た所、赤石は女子生徒と仲が良く、前回と同様に両手を握り合っていた。2人の愛情表現だろうか？少し独特だ。

しばらくすると、赤石と女子生徒は昼飯を食べ始めた。2人とも器用に食べるタイミングを外していて、赤石がパンを食べるとき、女子生徒の方は何かを赤石に話しかけ、逆に女子生徒が弁当を食べている時、赤石が何かを女子生徒に話しかけていた。

なるほど、ああすること、2人で最大限話す時間と食べる時間を確保するわけか。どうやら恋人というのは食べるタイミングまで意

識するようだ。

そう思っていると、2人の近づく影が見えた。2人がいる中庭は、比較的人が少ないが、カメラの監視領域内だ。しかし、近づく影は器用にカメラの監視範囲を避けながらも2人に接近していく。

見ない顔だ。Dクラスではない。男の背は平均より少し高いがオレや赤石よりかは少し低く見える。体重は重心の移動が独特なため分かりにくいだが、平均に近いかと思われる。体捌きや足運びが鋭い。喧嘩慣れしているといったところだ。

男は会話に集中している赤石たちの間に割って入ったようだ。赤石の表情は分かりにくいだが、男の視線を考えると、女子生徒に何か話しかけたようだ。女子生徒の方も乱入した男と知り合いなのか柔らかな表情で対応していたが……

——危ない

咄嗟に身を屈め、遮蔽物に隠れる。件の男があたりを見回している。どうやら、かなり視線に敏感な男のようだ。他にも監視カメラの位置をしきりに確認していた。先ほどの動きといい、かなり監視カメラを意識しているようだ。

あの男は赤石の才覚を知っているのだろうか？もし、そうだと仮定した場合は赤石の有力な手駒という可能性もあるが……いや、それはないか。あの男は今にも赤石を殴りそうだ。なんとかカメラの前だから抑えているといったところだ。

——なるほど、赤石はカメラの前での行動が多いと思ったが、こういう状況に備えていたからか……

しかし、緊迫した状況も長くは続かなかった。女子生徒が男の前で露骨に赤石の手を握り出したのだ。男の方は度肝を抜いたようで、静々と引き下がっていった。中々度胸のある女子だな。

男が去ると……不味いな、男がこつちに来た。気づかれたか……？携帯端末を開き、足をだらしなく伸ばし、ポケットからイヤホンを取り出し、耳にはめる。

一通り工作を済ませ、携帯端末を適当に操作する。念のため、すぐ動けるように右手は自然に力を抜いておいた。

男がオレの近くを通る。僅かにこちらを見たが、気づいたような素振りはない。こちらから来たのはどうやら偶々……いや、運が良い、男の行き先が分かった。

どうやら男はCクラスの生徒のようだ。視線の元に来たのではなく、単純にCクラスへの最短ルートを辿ったからであろう。……ということは、ここでもう少し張り込めば女子生徒がCクラスかどうかも分かりそうだが……いや、あまり留まりすぎて赤石に気づかれるのは避けたい。このあたりでオレも撤収しよう。

最後に赤石を確認しようと身を乗り出すが、赤石は既に居なかった。代わりに女子生徒が1人でベンチで前のめりに倒れていた。どいう事だ？しばらく観察すると、女子生徒がむくりと立ち上がり、こちらに向かってきた。どうやらCクラスのようだ。先ほどと同じような工作を行い女子生徒をやり過ぎすが、そこで女子生徒が小声で何かを呟いているのが聞こえた。

「……やつと……で……」

よく聞こえなかったが、嬉しそうな表情に見えた。赤石か、もしくは先ほどのCクラスの男か。どちらにしろ少女にとって喜ばしいことがあったのだろう。

5月15日の昼休み、堀北が非常に不思議な提案をしてきた。なんでも学食で奢ってくれるらしい。怪しい。ここは1つ、最近交流の無かった赤石を巻き込むとしよう。堀北に許可を取るのには難しそうなので、赤石の方をじっと睨んだ。オレの念力が通じたのか、赤石はこちらを振り向き、いつもよりも鋭い視線を浴びせてきた。ふむ、やはり堀北の行動を赤石も怪しんでいるようだ。試しに手招きしてみる。

「何をやっているのかしら、綾小路君」

そう言いながら、堀北がオレの脇腹を掴んだ。やはり暴力行為に出たか……だが、赤石はこちらの状態に気づいたのか、近づいてきた。

やはりいい奴だ。堀北の暴挙を止めてくれるようだ。

しかし、無情にも、その歩みは途中で止まった。隣で堀北が赤石を威嚇していた。なるほど、2人の相性はあまり良くないようだ。オレは堀北など気にしないようにと、さらに赤石を手招きするが、机を2つ分離した距離から近づくことは無かった。

「えっと、その、何か俺に用ですか？綾小路君」

左瞼は動いていなかった。やはり赤石の方から近づいている場合は心の準備があるためか、瞼は揺れない。

「おお、そうだ、赤石。良ければ一緒に学食に行かないか？堀北も一緒だぞ」

赤石はCクラスに彼女もいる上、カースト上位であるため、この説得方法に効果があるかは疑問であったが……しかし堀北も容姿は良い。——左瞼が動いた。何かを思案しているようだ。

「いえ。その、お二人の邪魔はできませんよ」

お二人の邪魔？どういう意味だ。やはり赤石の思考方向は若干謎だ。学食という言葉に反応したように見えたが……もしや今日は赤石のデートの日だったか？もしそうなら少し悪い事をしたな……

「……？いや、邪魔とは思わないが。むしろお前が来てくれると——」
「悪いけど、赤石君はお呼びではないわ。私は綾小路君だけを呼んだのよ。そこを勘違いしないでもらえるかしら」

堀北が邪魔してきた。これから堀北が行うであろう行為についてはいくつかが、推測できるが……どれであったとしても赤石は力になりそうだが、堀北は理解していないようだ。もちろん、能力を秘匿気味である赤石が悪いというのものもある。不気味なまでに癖が無い赤石から能力を読み取るのは難しい……オレとて赤石が油断していた初日出会わなければ難しかっただろう。

「いや、別に赤石1人ぐらい良いだろう。むしろ俺のためを思うなら赤石を連れて行ってくれ」

正直、堀北の説得は難しそうだが、妥協点を探してみることにする。
「赤石君を連れて行くメリットが無いわ。いえ、それ以上にデメリットがあるわ。彼は廉価版平田君みたいなものよ。平田君が使い物に

ならない以上、廉価版の彼に出番は無いわ。それに、一体どうして彼を連れて行くのが綾小路君のためになるのかしら」

——廉価版平田、やはり堀北には見えていない、か。

「廉価版には廉価版の長所がある、という冗談はさておき、赤石と平田は違う人間だからその例えは止めた方がいいじゃないか。あと、赤石を連れて行くのはこれから、お前が起こす恐ろしい行為からオレを守ってもらうためだ」

どうも、オレと堀北が話している間に赤石は思案を終えたのか、左瞼を震わすことは止めたようだ。どうやら、赤石の中で結論が出たようだ。

「恐ろしい行為？ いったい何のことかしら。私はただ、ポイント不足で生活にも苦しんでいる哀れな綾小路君に食べ物恵んであげようとしただけよ」

「いや、お前が無償の行為をするのが怖い。裏がありそうだ」

「可哀そうに。人の善意も素直に受け取れなくなってしまったのね。綾小路君は」

このあたりで終わりだろう。ふと赤石を見ると、再び左瞼を痙攣させていた。何か琴線に触れたようだ……？ 直前の会話を考えると善意が無償あたりか？

「えっと、俺は一応弁当を持ってきているので……すみません。失礼しますね」

オレが赤石の思惑にあたりをつけていると、唐突に赤石はこの場を離れようとした。その行動は予想外だった。故に、

——反射的に赤石の腕を掴んでしまった。

なぜこんなことをしたのか自分でも少し驚く。どうにも堀北と赤石の2人が揃うと、オレは自分の行動を制御できなくなるらしい。面白い発見だ。

「あの、綾小路君。離してもらっていいですか？」

どうやら、赤石にはこの技を解く技術は無いようだ。もちろん解けない振りという可能性もあるが。

「ああ、すまん。ちよっと、手が出た」

手を放して気づく。筋肉の構成を見ておくべきだった、と。今度似たような機会があれば試してみよう。

「ええ、では」

そう言っつて赤石は去っていった。

「綾小路君。今の動きは何かしら？随分、素早かったわね」

赤石が去った後、堀北が面倒な事を聞いてきた。咄嗟であったためか少し調整を間違えた。

「いや、中学の時、陸上をやっていたな……」

適当に誤魔化しておいた。

その後、堀北の罠にまんまとひっかかり、池や山内、須藤を集める手伝いをする事になった。勿論読めなかったわけではないのだが……教室に戻った後、赤石をちらりと見る。水泳の時のような呆れ顔だ。どうやら彼には堀北の方針が読めていたようだ。

——赤石、こうなると分かっていたのなら教えて欲しかったんだがな。

堀北の要請により赤点組を集めたのだが、勉強会は頓挫した。須藤達の勉強を受ける姿勢にも問題はあったが、堀北の教え方も3人のプライドを悪い意味で刺激してしまった点も問題だった。どうやら、堀北は気合が空回りしているようだ。茶柱に挑発された事が主要因だが、他にも理由がありそうだ。おそらく、プライドの高い堀北は平田と櫛田が予想以上の速さでクラスを纏め勉強会を開催したことで焦っているのだろう。

今後の事も考えると赤点組の退学は避けたい。故に、櫛田を使い、堀北の勉強会の再建を図った。なんとか堀北を説得し、櫛田が勉強会

に關与しないという条件で赤点組を再び集める事に成功した。

しかし、再建の前日に櫛田から連絡があり、放課後、校舎裏で落ち合うことになった。どうやら、櫛田には何か考えがあるようだ。

「綾小路君、来てくれてありがとう。それで、明日のことなんだけど……図書館じゃなくて、別館で勉強会をやらないかな？」

今日の櫛田は少し悩んでいるように見える。

「別館か……何か理由があるのか？」

「綾小路君は平田君が主催してる勉強会の事は知ってる？」

「ああ、知ってる。確か先週くらいにやってたな」

「うん、それで、その平田君が主催している勉強会で私と赤石君が教師役なんだけど、ちようど明日、赤石君のチームが別館で勉強会をするみたいなの」

赤石が勉強会を開いていたというのは初耳だ。言つては悪いが意外だ。あの男はそんな面倒な事をしそうには見えなかったが……いや、カースト上位を維持している以上面倒事の方が多いか。あの男は本当に色々と謎だ。しかし、合流させる気か。堀北が納得するとは思えないが……

「なるほど、つまり赤石の勉強会を合流させるのか」

「そう思ってるんだけど、綾小路君はどう思う？」

どう思う、か。堀北の心情を意識するならば合流させるべきではないだろう。が、オレ個人としては赤石がどう勉強を教えるのかは気になる。

「そうだな……オレはあまり赤石の事を知らないんだが、勉強ができるのか？」

「赤石君は小テストはクラスでは6番目だったよ。堀北さんほど突出してないけど……でもその方が逆に須藤君たちにはいいかもしれないよ」

どうやら、上手く躲されたようだ。

「確かに、その方がいいかもな。ただ堀北は納得すると思うか？」

「ちよつと難しいかも……でも堀北さんもきつとわかってくれると思うんだ……」

「そうか、ならいいんだが……ちなみにどうやって赤石達と合流するんだ？」

「実はそれも少し問題で……最近、赤石君の端末に上手く繋がらなくて、明日、直接合流するしかなさそうかな……一応、今日の夜にもう一度連絡を入れてみるけど、駄目だったら、明日は私が直接言おうと思ってるよ」

やはり、櫛田は赤石の番号を持っていたか……

「それは止めた方がいいんじゃないか。堀北との約束を破ることになるぞ」

堀北は櫛田が参加しない事を条件としていた。それなのに櫛田が来たら本末転倒だ。

「うん……確かにそうなんだけど……でも、池君たちを見捨てられないよ」

どうやら、堀北との約束は櫛田にとっては重要ではないらしい。

「そうか、ならいいんじゃないか。オレも頑張って堀北を説得してみよう」

「ありがとう、綾小路君」

そして、勉強会当日。堀北を別館に誘導することに成功した。しかし、別館で偶然を装い待ち構えていた櫛田に堀北が激怒した。やはり、そう簡単にはいかなかった。流石に不自然過ぎた。どう堀北を宥めようかと考えていると、別館の入り口の窓から不自然な影が見えた。目を凝らし観察すると、赤石がこちらを伺っていた。この距離では左瞼の動きは分からない。しかし、赤石はオレを視認すると素早く顔を引っ込めた。少しの間、窓を凝視するが、影も無くなっており、気配も薄い。移動したか？

櫛田の近くまで向かい、堀北に聞こえないように小さな声で伝えた。

「櫛田、さつき、入り口の近くに赤石がいたぞ」

「え、本当？……ごめん、綾小路君。ここを任せていいかな？」

「ああ、行っていい」

榎田が去ると、堀北が咎めるように口先をこちらに向けた。

「綾小路君、さっきからどういう事かしら？それに今、榎田さんに何を伝えたの？」

「実は、榎田に頼まれてな。せっかくだから、赤石に手伝ってもらおうかと思ったんだが、どうだ？」

「赤石君……う……意図が読めないわ。何故急に赤石君の名前が出てくるのかしら？」

「赤石は榎田と同じで平田の勉強会で教師役をしていたらしい。そこで、教えを乞おうと思ってな」

「赤石君は小テストでは6位よ。榎田さんより下だわ。……とても教えを乞う相手とは思えないわね」

堀北には受け入れがたい提案のようだ。

「小テストの点数で実力の全てが測れるとは思われないがな……」

「さすが、小テスト50点の綾小路君は言う事が違うわね」

おっと、茶柱先生に言われた事を根に持っているようだ。先生も余計な事をする。

「まあ、オレは赤石を呼びに行く。最終的な合流の可否はお前が決めればいい、じゃあ、3人を頼んだぞ」

堀北との会話を一度打ち切り、別館の入り口を抜けて榎田と赤石を追う。入り口を抜ける際にチラリと後ろを覗き見ると、堀北は3人に対して向き合っていた。熱意はあるようだ。堀北のプライドの高さは悪い面でもあるが、根の真面目さがある分、こういった状況では良く働くところもある。

別館を出て、廊下を進んでいくと、榎田と赤石達を捉えた。しかし間に合わなかったようで、丁度榎田が赤石達に背を向けこちらに歩き出していた。やはり赤石とは間が合わない。

「あー、榎田。その感じだと上手くいかなかった感じか？」

「うん、ごめんね綾小路君。せっかく教えて貰ったのに……綾小路君の方はどうだった？堀北さんやっぱり怒ってた……？」

櫛田は上目遣いでこちらを見る。魅力的だが、屋上の一件を思うと複雑だ。

「いや、櫛田は悪くないと思うぞ。赤石はノリが悪いからな。あと堀北は、まあ、怒ってはいたが……あいつはいつも機嫌悪いから気にするだけ損だと思うぞ」

櫛田に返事をしつつ、赤石を観察する。特に何かをする素振りはない。やはり左瞼以外の癖が極端に少ない。と、思っていると、赤石はオレと櫛田に軽く頭を下げた。確信は無いが……不自然にならないように間合いを詰め、赤石の腕を掴む。

やはり、赤石はここから去るつもりだったようだ。今回はある程度予期できたが……周囲に悟られないように筋肉の構成を調べる。やはり、見た目通りの筋肉だ。高くも低くもない平均に近いか？となる。と水泳はあれで全力だろう。また、この格闘技術を振りほどく能力も無いと見ていいだろう。

赤石の身体技能について考察を進めつつ、声をかける。

「まあ、待て赤石。堀北は美人だし、話してみると意外と面白いかもしれないぞ。須藤達も気のいい奴らだ、きつと話も合う」

「あの、綾小路君。櫛田さんにも言ったのですが、今日は外村君と井の頭さんと先約がありますので……失礼します」

赤石は左瞼を一切動かすことなく言っただけだ。どうやら、赤石の中ではもう結論は出ているようだ。これ以上、食い下がり不興を買うのは避けたい。故に一度赤石を解放する。ただ、最後に1つだけ確認したい事があった。

「櫛田が言っただけ勉強会か……どんなやつなんだ？」

こちらが質問すると、赤石は一瞬オレから視線を外した。……方向から考えると櫛田の方に視線を向けたように見えたが、判断に迷う行動だ。

「櫛田さんや平田君の勉強会に比べると小さいものですが、基礎の見直しをしています。ただ俺はあまり平田君たちほど教えるのが上手くないので、基本的に自主的に学習できる方であつ中間が厳しい人だけとさせてもらっています」

そう言う赤石の表情はいつも以上に自然なものだ。読み取りにくいな。嘘は言っていないように見えるが……しかし、赤石が基礎の見直しを態々行わせるというのは疑問を感じる点だ。いや、そもそも、この男の嘘を今まで見切れたことはあったか？この男の言動が全て嘘でオレが全く見切れていない可能性もある。

やはり、天才的なセキュリティ理論の技術を抜きにしても、この男を上手く使うのは至難だろう。勿論、案外何も考えていないという可能性もゼロでは無いが、それはあまりに楽観的すぎる考えだ。

「そうか……確かにその方針だと池たちには難しいな。わかった邪魔して悪かったな、今度学食で何か奢るからそれで許してくれ」
適当なところで話を打ち切った。

赤石たちが去った後、櫛田と共に堀北たちの元へと戻る。堀北は怒っていたが、櫛田の有用性をある程度認めているのか、今回の勉強会の櫛田の参加を認めた。

参加を認められた櫛田は自身のバックから問題のようなものを取り出した。堀北は何か言いたそうな表情であったが、池や山内は櫛田に良い所を見せようと乗り気であった。櫛田は3人に問題を配った後、なぜかオレにも問題を渡してきた。教科は数学のようだ。

「はい、綾小路君も。やってみて」

正直、解く必要性を感じない。

「オレは一応、最近は授業を受けてるから赤点は無いと思うんだが……」

「おい！文句言うなよ、綾小路。せっかく櫛田ちゃんが作ってくれたんだからお前もちゃんと受けるよ」

池が余計な事を言ってきた。池にとっては櫛田へのポイント稼ぎは勉強会以上に優先される事だ。仕方ない、やるか。

「あー、わかった。悪かったな櫛田」

そういつて問題を受け取る。櫛田から10分以内と言われたので

問題に取り組んでみるが……やはり見た所目新しいものではない。8問目以降の3題が若干難しいため、Dクラスが取り組むと仮定した場合、正解できない者もでるだろう。適当に回答しておく。しかし、ふと迷う。いつも通り5問目まで正解でも良いが、この問題は5問目と6問目は本来繋がっている可能性が高い。4問目あたりを落とし、5、6問目に正解してもよいが……しかし出題傾向を見ると「櫛田が作った」ようには見えない。百歩譲って「櫛田が纏めた」問題だろう。

櫛田に対する判別の意味も込め、5問目までを解答することにした。

規定された時間が過ぎ、櫛田が答案を回収すると、今度は英語の問題を配ってきた。須藤は少しげんなりとしていた。やはり一番の苦手は英語か？

櫛田から問題を受け取り回答していく。……そして、他の3人が問題に集中している間に櫛田と堀北を観察する。櫛田は数学の問題の採点をしているが特に不審に思っている素振りはない。堀北は櫛田や池たち、それと問題を観察しているようだ。——単純に考えると櫛田が演習書にある問題を纏めて作ったといった所か。または、作者が別の問題を流用したか。

英語の問題も終わると、4人分の答案を櫛田が採点した。そして何か別の用紙のようなものに記入を始めた。4人で見守っていると堀北が櫛田に質問を行った。

「櫛田さん。その紙は何？」

「あ、うん。これはチェックシートになっててね、間違った所と間違え方を記入していくと……こんな感じにその人の苦手な所と、オススメの演習書が分かるの」

櫛田は説明しながら、山内の答案についてチェックシートに書き込んでいき、お薦めの問題集を導き出した。もし、本当なら大したものだが……無論、チェックシートの精度にもよるが。幸い、オレの分はもう終わっているようなので、櫛田の傍から回収する。

「……少し、見せて貰ってもいいかしら」

堀北も少し驚いている。言葉に詰まっているようだ。

「え、う、うん。いいよ」

「……なるほどね、観点別になってるのね。それで、この演習書ね……」

堀北は櫛田のチェックシートの中身を素早く読み込み、お薦めされていた演習書の1つを手に取った。

「……凄いわね。櫛田さん。これは貴女が作ったの？」

堀北の表情から嫌味で言ったわけではなく、純粹な驚愕・称賛の気持ちが大い。オレは自分の分のチェックシートの中身を確認していく。

「う、うん。そうだよ。今日皆の為になるかもって思って持ってきたんだ。余計だったかな？」

「……そんなことないわ。これはとても有意義な物よ。ただ、他の3人は演習書をやればいいと思うけれど……須藤君は0点だからこのチェックシートは役に立ちそうにないわね」

「なんだとー」

須藤が堀北達の会話に割り込んでいたが、そんなことはもうどうでもいい事だった。チェックシートの中身を確認してから、もう外界の情報など気にする余裕はなかった。

——このチェックシートはホワイトルームで使用されていたものと同じだ。

勿論、問題のレベルはまったく大したことは無い。しかし、問題を間違えた場合の間違い方からの解析と、薦められる練習手段。これらの構築が心理テストや単純な統計などではなく、非常に複雑な統計と莫大なデータを元に作られている。

これは通常の人間を完成された人間へと置き換えるための有用な手段の1つであり、ホワイトルームによる教育方法の1つだ。

当然、櫛田レベルで作れるものではない。

いや、人間1人では作れない。何人もの科学者、それもホワイト

ルームレベルの研究者を数人以上集めてようやく構築することができる技術の結晶だ。しかも、それが、たかが高校1年生の数学と英語の問題に使われている。異常としか言いようがない状態だ。櫛田はどうやってコレを手に入れた？コレは誰が作ったんだ？

心が乱れる。ああ、なるほど、この感情は「慌てる」だな。堀北たちを視界に収め、なんとか平常心を取り戻す。幸い堀北たちはオレの内心には気づいてはいないようだった。

なにせよ、結果として赤石がここにいなくてよかった。あの人間観察が上手い男が今のオレを見たら、平常ではないことに気づいただろう………

その後の勉強会は安定して進行していった。堀北が須藤に教え、そして櫛田は池と山内を教えていた。オレは不審に思われない程度に偶に櫛田に質問し、問題とチェックシートの解析に努めた。そして最終的に下校時間の30分前程度で解散となった。

須藤たちが去った後、堀北は櫛田に池や山内に勉強を教えてくれた事を感じた。しかし、その一方で櫛田にはもう勉強会には来ないように言った。櫛田は何度も堀北の約束を破っている。それが堀北には許せなかったのだろう。櫛田も堀北の感情は理解しているようで、もう参加しない事を伝えた。本当かどうかは分からないが……とりあえず、今回の件は双方蒸し返さないといったところか。

堀北の勉強会に今後櫛田が干渉しない以上、タイミングは今しかなかった。

「あー、櫛田。その、まあ、池たちの面倒を押し付けた上、こんな結果になってしまつて、すまない」

「ううん、綾小路君、これは私がしたことでいいから。それより、赤石君の事や堀北さんの勉強会の事を教えてくれてありがとう」

「綾小路君は口が軽すぎるわね。こんな事が続くようなら、私が石でも詰め込んで重くした方が良さそうね」

堀北は機嫌が良いのか悪いのか分からない冗談を言った。この少女も赤石ほどではないが、笑いの素質に欠けるようだ。優秀な人間は

笑いの素質に欠けるのだろうか？

「あはは、堀北さん。綾小路君に無理やり聞いたのは私だから、許してあげて」

櫛田はいつもの様な笑顔でそう言った。昨日会った時よりも、晴れやかな笑顔に見える。オレの口に石を詰める堀北でも想像したのだろうか。

「そうね、最大の原因は櫛田さんね。貴女はもう少し思慮深くなった方がいいわ」

「あー、それを堀北が言うのはどうかと思うが……というより、今回の件は何だかんだで櫛田に助けてもらった所が大きいわけで、もう少し櫛田に向き合った方がいいんじゃないか？」

「向き合う？十分に向き合っているわ」

堀北の表情からは嘘の気配がない。どうやら本気で言っているようだ。

「これは櫛田の前で言うべきことではないかもしれないんだが……」

「うん？綾小路君、私に気にせず何でも言つて」

「堀北、お前は櫛田の能力の高さをちゃんと理解したほうがいいと思うぞ。第一、今日の問題とチェックシートは便利だっただろ」

「……まあ、確かに便利ではあったわね」

「オレはああいう感じの診断表みたいなのは興味があるんだが、櫛田。あれはどうやって作るんだ？問題集を全部読んでから作る感じか？」

オレが言うと、堀北は何か気づいたように顔を驚かせた。あのチェックシートの真の恐ろしさに気づいた訳ではないだろう。

しかし単純にあの形式のモノを作るのは大変だ。いくつかの問題集を熟知し、またそれぞれ問題が「どんな能力を要求しているのか」を正確に理解している必要がある。

仮に櫛田が行ったとすれば、高校生としては多大な努力をしていると言える。

「……そうね。櫛田さん、良ければ私にも作り方を……いえ、問題集の選び方を教えて貰えないかしら」

堀北にしてはかなり下手に出たと言っている。恐らく、櫛田の能力

の高さを感じたのだろう。まあ、このチェックシートは櫛田が作ったわけがないのだが。

「ええっと、その、」

当然櫛田は言い淀んだ。可能なら入手手段を知りたいが……

「教えては貰えない、ということかしら」

「その、堀北さん。実は、これは本当は私が作った訳じゃなくてね……」

「……?なら誰が作ったというの?」

「えっと、それは、その……」

「もしかして、貴女、自分の手柄にしようとしているの?」

堀北の物言いは厳しい。勿論、想定内だ。

「そ、そういう訳じゃないんだけど」

櫛田が助け舟を求めるようにこちらを見た。オレは視線に頷いて答えた。

「この問題を作った人が協力してくれば須藤たちの勉強は大きく進むと思うが……」

櫛田の期待していた答えではない。しかし須藤たちの赤点回避を名目に堀北の勉強会に参加している以上、オレの発言をどう躲すかは見物だ。当然、作成者の名前を教えてくれればベストだが、これで答えなければ、「櫛田が答えを言い淀む」という情報を手に入れる事ができる。どちらに転んでも損はない。

「その、2人とも、その人はとても忙しい人だから、ちよつと……教えられるかない、かな」

その人か……櫛田のミスリードでなければ作成者は1人という事か? いや、『その人』の背後にさらに何人か控えていると考えた方がいいだろう。流石にあの異常なチェックシートを1人で作れる存在が櫛田の知り合いにいるというよりは合理的だ。

「須藤君たちが退学になってもいいの?」

よく言った、堀北。やはりお前は『利用できる』。

「堀北さん、その言い方は卑怯だよ。でも約束したから……ごめんなやう」

この言い方でも答ええない、か。その上『約束』と来たか。まあ、これ以上の情報収集は危険だな。櫛田から逆探知されかねない。櫛田の口を封じておくか？……いや、その方が危険だな。まだ現状はオレと堀北が『赤点組の為を思っている』故の行動だ。不審な行動ではない。

とりあえず、得られた情報は大きかった。櫛田は屋上で的一件といふ若干注意を払う存在だが、背後に協力者か、もしくは櫛田を操る者がいると知れたのは収穫と言える。そして、その集団は非常に高度な技術を所持している事も。

——櫛田はオレの指紋を所持している。高度な集団と指紋。この2つが化学反応を起こした場合……いや、オレに直接何かを仕掛けるならば排除するだけだ。わざわざ藪を突く危険を冒す必要はない。

堀北の勉強会は頓挫した1回目と比較するまでもなく良い結果となった。そのことに堀北は何処か満足そうであった。

一方でオレの中では1つだけ恐ろしい仮定が存在していた。それが、ただの妄想に過ぎない事を、願っていた。

綾小路清隆の独白 1—3

6月某日。茶柱先生が範囲を伝えた次の日。平田から範囲の修正が発表された。Dクラスの面々は茶柱先生を非難したが問題はそこではない。

オレは範囲が間違っていた事に気づかなかったが、平田はどうやって気づいたのだろうか。いや、それだけではない。平田は若干行動が怪しい面がある。

例えば4月の後半に授業への集中を促したのも不審な行動だと言える。それまで平田は良く言えば放任、悪く言えばクラスの環境を放置していた。しかし、あの授業への集中を促したのは唐突すぎて若干不自然だった。平田がああ事態を予期していたとは考えにくい。赤石が入れ知恵したか。あいつはおそらく5月1日より以前にポイントの事を予期していた節がある。前回は今回も平田に入れ知恵したのが赤石だと考えると自然である。

しかし、そうすると別の問題が浮上する。いったい赤石はどうやってこの短期間で範囲の間違いに気づいたのか。

可能性の1つとしては赤石の恋人であるCクラスの生徒だ。この生徒から情報を素早く受け取った事が考えられる。ただその場合はあまりにも連携が強すぎることから、少女と赤石の関係はクラスでの活動よりも重視されていると考えていいだろう。これが比較的可能性が高い方の考えだ。

もう1つの可能性としては何らかの手段により茶柱の説明から範囲が間違いだと推測した場合だ。茶柱先生が範囲を間違えていると確信を持っているなら、あとは他クラスの誰にでも聞けば良いだろう。勿論恋人に聞くのが一番簡単だが。この場合の手段は様々だが、最も単純な方法としては茶柱先生の嘘を見抜いたのだろう。しかし、オレは茶柱先生を堀北の一件から観察していたが、範囲説明の時はあまり嘘のようには見えなかった。つまり茶柱先生は嘘が上手い。オレでも見抜ける可能性は5割といったところだ。赤石は茶柱先生からでも嘘を見抜けるのだろうか？

まあ、どちらにしても赤石が関わっていると見て良いだろう。あの男の突出した才幹と人間観察力、そして横に広い人脈は有用だ。

つまり赤石は、『利用できる』、……………？

……………？おや、オレは今、悩んでいないか？赤石は『利用できる』区分でいいはずだ。他の区分は『利用できる』しかないのだから。……………？どういわけが、オレの心理、いや本能か、とにかく、オレの何が赤石を『利用できる』に区分したくないようだ。これは何という感情だろうか？

ふむ、こういう時は、堀北と赤石を衝突させるといいだろう。経験上、それが一番のオレの理解へと繋がる。

堀北、ちよつといいか」

「今日の勉強会の件かしら？」

堀北は、オレの声を聞くと、間髪入れずに答えた。

「そうだな、それに関わる重大な事だ」

「重大……………？念のため言っておくけど榊田さんの参加は認めないわ」なるほど、そう解釈したか。

「そうじゃない……………おそらく今後に関わる重大な事だ」

「それが何か言わないと分からないわね」

榊田以外というヒントだけでは堀北には分からなかったようだ。

「それをオレが今言うと、お前の成長に繋がらないかと思うが」

「成長？随分上からの物の見方ね」

後、一押し。と、いったところか。

「どう思いかはお前の自由だ」

「まるで詐欺師のような言い方ね」

「詐欺のつもりでは無いんだがな」

本当に詐欺師のような言い方になってしまったが構わない。今は堀北の感情よりもオレ自身への理解の方が重要だ。

「……………まあ、いいわ。慈悲深い私は、綾小路君に騙されてあげましょう。で、何処かに行くのかしら」

この少女はやはりプライドが高く負けず嫌いだ。だから扱いやすい。

「何、少しだけ歩くだけだ」

そういつてオレは堀北を赤石の近くまで導く。

「ちよつと待ちなさい、もしかして、赤石君の所かしら」

やつと行き先に気づいたようだ。

「そうだ」

「先に別館に向かっていいかしら？ 必要性を感じないわ」

堀北は赤石に対する評価はだいぶ悪いようだ。

「少しで良いから、お前も来てくれ」

「はあ」

堀北は溜息を吐きながらも少しは付き合ってくれようだ。この少女も案外、入学時より人当たりが良くなっている気がする。

「ちよつといいか、赤石」

赤石はこちらを一瞥すると興味の無さそうな顔をしていた。この男の表情が内面と同じなら分かりやすいのだが……

「はい、なんでしよう綾小路君」

いつもの様な他人行儀な口調だ。この男は何時も口調を崩さない。恋人の前でも、この口調なのだろうか？

「榎田からお前が勉強会を開いていると聞いた。何でもかなり教えるのが上手いとも言っていた……実はオレも結構小テストがヤバくてな……できれば教えて欲しい」

まずは軽く、質問する。

「それは過大評価だと思いますが……ちなみに綾小路君はどのあたりが苦手なんですか？」

今日は、左瞼が殆ど動かない。何も考えていないのか、思考する必要すら感じていないのか。それとも……自身の特徴を抑制する手段を知ったか。

「そうだな。全部苦手だが……強いて言えば——」

「行きましよう、綾小路君。時間の無駄よ」

堀北。もう少し我慢して欲しかったが……いや、堀北が行動を起こすときは結果としてオレの何かが判明する時だ。きつとこれで良いのだろう。

「いや、櫛田があそこまで言ってたし、それに最近の博士を見る。かなり授業に集中してるぞ」

「博士——ああ、外村君のことね。外村君の事はあまり興味がなかったから、よく見てないわね。それにたとえ綾小路君の言った通りだったとしても、それが赤石君の勉強会の効果かどうかはわからないわ」
確かにそれは一理ある。外村がどのようなようにして伸びたかが判明しない以上、赤石の勉強会との相関性は不明である。そこまで考えて、頭の奥がチリチリと焼けるような感覚に陥った。赤石の勉強会。基礎の見直し。そして堀北の勉強会。

そう、櫛田が持参したチェックシートを見た時から、僅かに想像していた恐ろしい仮定。

——櫛田にチェックシートを渡したのは赤石ではないか、という仮定だ。

櫛田と赤石は比較的仲が良い。またセキュリティ理論における天才的な才幹を持つ赤石が、他の何かにも卓越した技術を持つ可能性はゼロではない。または直接チェックシートに関係してなくても、この男の広い人脈なら何処からか作成した問題を受け取って、自身が作者のように見せて櫛田に渡した可能性もある。勿論、これらの事は何一つ物証は無く、根拠の無い推測に過ぎない。

だが、この仮定が成立した場合は、櫛田と赤石のラインが確定的なものになる。危険だ。

「お前は、どうにも赤石の能力を低い水準だと確信しているみたいだな」

堀北には悪いが、少し面白い。

「別に、私はただ事実を言っているだけよ。まあ、櫛田さんのように『なんとなく』で話す人が赤石君を評価している時点で、あまり期待していないというのはあるわね」

「櫛田からの評価が気に入らないということか？」

「別に櫛田さんだけではないわ。平田君も『なんとなく』で話す人の一人よ。あと赤石君もね」

赤石が『なんとなく』か。そのように評価されても赤石の表情に変

化はない。この男もオレと同じで他者からの評価を気にしないのだろうか。

「つまり櫛田の事を嫌っているように赤石も嫌いだから勉強会に入つて欲しくないか？」

「別に嫌いではないわ。ただわざわざ関わらせるほど優秀な人間には思えないと言っているのよ」

確かにあの優秀さは、上手く手綱を握らなければ大変な事になるだろう。そういう意味では、まだ堀北には荷が重いかもしれない。

「ええっと、すみません。外村君と井の頭さんを待たせてしまうので。俺は失礼しますね」

残念ながら時間切れのようだ。今日のオレ自身の分析は失敗だ。どうやら、毎回上手くいくわけではないらしい。

赤石はオレと堀北の前から離れるとき、不思議なステップを刻んでいた。意味が分からなかったが、天才なりに何か考えがあるのだろう。

中間試験当日。

須藤が過去問題を解いて来なかった。

前日の櫛田から貰った過去問により緊張が切れてしまったようだ。こうなるならば2日前に渡すべきだったか？

堀北は懸命に須藤に應對していた。見た所、嫌味を言ってるわけではなく、純粹に須藤を退学にさせない気持ちが強いように見える。それでもいい。

だが、この段階に至ってしまった場合は行えることは少ない。須藤の力を出すよりも、安全圏を拡大させる方がいいだろう。

堀北の努力に心打たれたというわけではないが、最近はその少女のおかげで少し自己理解が進んだ。少しは協力するか。

オレは英語の試験が始まる前に赤石の元へと向かった。

「赤石。少しいいか？」

左臉が少し動いたか？やはりこちらから突然近づくと、臉は震えや

すい。

「えつと、なんでしよう？綾小路君。英語は苦手なのでギリギリまで粘りたいのですが……」

これは協力する気はないという意味表示だろうか？まあ、一応伝えておこう。

「次の英語の試験、出来るだけ低い点を取ってくれ。お前ならできんだろう」

「すみません。その、言ってる意味がよくわかりません……」

……？いや、須藤が過去問をやってきていないのはさすがに想定外だったか。オレも想定外だったことだ。

「須藤が英語だけ過去問をやっていない。このままだと退学になる。おそらくクラスの平均点の半分が赤点のラインだ。お前は高得点組だから、点数を落とせば須藤を救える」

「ええつと、そのよくわかりませんが……目的があるのでしたら頑張ってみます。ただ、俺も英語は苦手なので、あまり落としにくいです。それでもいいですか？」

見た所、左瞼は震えていないように見える。赤石の思考は加速していかない。何か策を考えている様子はおそろくない。単純に協力はするといった所か。

「ああ、それでいい。頼むぞ」

赤石の元から去り、席に着くとチャイムが鳴った。堀北の方もギリギリまで須藤に詰め込んできたようで、その顔には焦りもあったが一種の達成感があった。堀北も須藤を見捨てないという意志は固いようだ。

「須藤はどうだった？」

「彼も出来る限りの事はやったはずよ」

いつもの様な怜悯な口調だが、心なしかその目は須藤の合格を祈っているように見えた。

「余計なお世話かもしれないが、次の英語の——」

「分かっているわ。60点、いえ出来ればもっと低い点を目指すつもりよ」

どうやら、赤点の仕組みについては理解していたようだ。

「あなたはどうする気かしら？」

「オレはいつも通り全力で試験に取り組むつもりだ」

「50点を取るといふ解釈でいいのね？」

「もつと上かもしれないぞ」

オレの回答に対して、堀北は薄く笑うだけだった。

そして、結果公開の日。須藤は退学となった。

赤点のボーダーラインを見て疑問を感じ、Dクラスの面々の得点を確認していく。

——『赤石求 82点』が目に入った時、疑問は解消された。

どうやら、あの男は須藤を退学させたかったらしい。なんとも絶妙な点数だ。小テストの時と同じように全員の点数を予期したのだろう。その上、堀北が点数を下げたことも考慮に入れたようだ。

赤石にはオレとは違うものが見えているのだろう。

オレは須藤が退学になるデメリットと須藤がDクラスにいるメリットの2つを考えて行動した。しかし赤石には須藤が退学になるメリットとDクラスにいるデメリットの2つを考えていたようだ。いや、どちらかと言うと退学のデメリットを早く確認したかったといったところか。オレも確認したい事項であったが、それを戸惑いなく自身のクラスで行うというのは想定外であった。

赤石に対して行動を行うと、少しずつだが、こちらが不利になっていく感覚に陥る。勿論、それはただの感覚で、現状は実害がない。しかし、この男を堀北のように簡単に利用できると思わない方がいいだろう。というより、現状、干渉するのは危険な可能性がある。今後は接触はある程度までで控えた方が良さそうだ。

平田が何かを言っているのを尻目に、オレは教室を出て茶柱先生を追った。そして廊下を走っている時に気づいた。今まで悩んでいた赤石の正しい区分に。

——赤石は『利用してはいけない』区分だ。

2章 暴力事件 集会場

中間試験の動乱が過ぎ、6月30日の午後。特別棟の近くで、俺は工夫して設置した改造監視カメラと盗聴装置を回収していた。ここにはCクラスの小宮・近藤・石崎とDクラスの須藤が1時間前に行つた行為がはつきりと記録されている。

なぜ、俺がこんなことをしているかという、事態は中間試験2日前に遡る。

中間試験2日前。各クラスが中間試験を強く意識している時。その時が仕掛けるチャンスだと思った。前々から計画していた、Cクラスの会合傍受作戦を実行に移した。作戦内容はCクラスの集会場と思われる高級カラオケ店に潜入し、例の量販店で購入した自作の改造盗聴器を仕込むというものだ。

文章で言うとは簡単だが、なかなか大変な作業であった。

まずこのカラオケは団体利用のみ対応していて、1人カラオケは駄目であった。この時点でハードルが高く、どうしたものかと悩み……ここはハッカーらしくハッキングで対応することにした。カラオケルームは例えビップルームとはいえ鍵はかかっていない。廊下のカメラと巡回する店員にさえ何とかできればルームには潜入可能であった。

よって、まず予め店員の巡回時間とルートをハッキングで入手し、シミュレーターを使い安全な時間を調べ、また、その時間にはカメラが上手く機能しないように細工を行った。そして、隙を見て安全時間に突入。団体客の中に紛れて進み、無事龍園が普段使うカラオケルームに潜入し盗聴器を仕込んだ。

ちなみに龍園はこのカラオケの中の1室を気に入っているのか年

間専属契約を結んでいる。そのため、他の客は使うことはない。……
気に入り過ぎだろ。

正直な話、ここに潜入するときは、カラオケ店の通路にカメラを設置するなら、ルームにも設置しろよとは思った。……現場に突入というのではできれば、もう2度したくない事であった。

そんなこんなで、ついにCクラスの作戦会議の中枢に無事盗聴器を仕込むことに成功した。ちなみに改造品でかつ小型なので発覚はありえないと思われる。

龍園もCクラスの面々に退学になって欲しくなかったためか、中間試験の1週間前は会議は行われていなかった。その一方で中間終了時と結果発表日は大々的にこの集会所でパーティーが行われていた。大音量でちよつと耳が痛かった。また、中間終了時から結果発表日までの間は毎日会合が行われ、その度に龍園のカリスマ演説を聞くことになった。

本来、会合は火曜日と金曜日に行われるようで、結果発表日以降は週2回のペースとなっていた。

そして、前回の会合時に龍園は今度はDクラスに仕掛けることが判明した。また当たり屋でもやるのかと思ったら、どうも前回の一之瀬の行動から刺激を受けたのか、今度はあえて生徒会を呼びつけ、冤罪をふっかけるようだ。ちなみに対象は須藤であった。作戦手順や内容はそこまで目新しい手法ではなかったが………須藤ならひっかりそうだ。

まさかのDクラスのクラスポイントに危機であった。仕方ないので急遽、新たに盗聴装置を組み上げ、今度は監視カメラまで用意した。盗聴装置は前回のスクラップから作ったのでポイントの損失はほぼなかったが、カメラの方は自作でも4000ポイント掛かった。須藤め。……まあ、生徒会裁判に持っていく以上負けるわけにはいかないし、中間試験で得る予定である95クラスポイントを考えれば4000ポイントの出資は悪くないであろう。それに今回は資金回収方法も考えがある。

そうして、無事、Cクラスの作戦決行日である6月30日にカメラと盗聴器を作戦場所に設置し、自分は少し離れたトイレの個室に立てこもった。須藤と石崎たちの言い争う声が聞こえた時、作戦の成功を感じた。

7月1日となった。端末を確認するが、やはりポイントは振り込まれていなかった。昨日の事なのに学校側の対応が速い。まあ、よい。まだ俺は約5万5千ポイントある。

それにこの事件の一部始終は全て録画済みだ。つまりCクラスの敗北で終わる。悪いな龍園、いつも椎名の事で助かってるけど、俺のポイントは何よりも優先されるのだ……許せ。

あ、ちなみにまだこの証拠品は使わない。生徒会が出てきてから使うつもりだ。恐らく平田と櫛田がDクラス代表として出ることになるので、どちらかに匿名で送信するつもりだ。理想は資金回収も考えればと櫛田が良いだろう。それまでは、少し困っているDクラスの生徒でいますかね……

登校すると、Dクラス内は複雑な雰囲気にも包まれていた。クラスポイントが入った事に関しては喜んでいて、「学校側の不手際」によりポイントが入らない事ばかりしているという感じだ。うん。須藤。お前が原因だと分かったら大変なことになりそうだな……がんばれ。まあ、お前も3人相手とはいえすぐ手を出したのは悪い点だと思うぞ。いや、まあ、普通に正当防衛だから仕方ないとも思うけどね。そんなことを考えていると後ろの平田が話しかけてきた。忘れがちだが後ろの席は平田だ。入学当時は嬉しかったが、今は少し億劫に感じてしまう。

「赤石君、少しいいかな」

平田の方を振り向き返事をするが、マズいな……後ろの席にいる綾小路と目が合った。

「何でしようか？平田君」

「赤石君は今回の学校側の不手際って言うのは何だと思う？」

やべえ、平田のヤツ氣づいていない。後ろから綾小路がこっちに來ている。いや、まあ、平田にとっては悪い事でもないが、俺にとつては目下近寄りたくない奴ベスト3に入る男だ。あ、もう平田の後ろまできた。平田ー、後ろ後ろ！

「平田、赤石、ちよつといいか」

よくないよ。

「僕は大丈夫だよ。何かな？綾小路君」

平田はそう綾小路に返した。……俺は大丈夫じゃないです。

「ポイントが入らないんだが……何時ごろ入ると思う？堀北に聞いてみたが、教えてくれなくてな。2人は分かるか？」

須藤の暴力事件の決着が着くまで入らないよ。と、言うわけにもいかない。というか、何だ。綾小路は何をしにきたんだ？お前のポイントはこの前の中間試験での散財により8000ポイント程度だったはずだ。まだ大丈夫だろ……もしかして探りにきたのか？もし、そうだとしたら、俺と平田どっちだ？俺だと困るが、……いや、それは自意識過剰だな。現状、俺は精々ちよつと勉強ができて勉強を教えるのが上手いと思われている程度だ。おそろく探りに來たならば平田だろう。

……俺と同じで2000万狙いなら平田の思考分析は重要な事だ。

……でも、それなら今までも平田に探りを入れるはずだが、そんな素振りは見せていない。駄目だ。綾小路の思考はよくわからない。せめて目的が分かればいいんだが……

「僕もそのことを赤石君と相談していたんだ。恥ずかしながら、僕だと思いつかなくて、赤石君はどうかな？」

なんか、平田は俺が目立つのが苦手な外部アドバイザーだつてこと忘れてない？人前で聞かれても答えにくいよ。しかも綾小路の前とか喋りたくない。

「難しいですね。ただ、生徒数十人に一斉にお金を送るわけですから、慎重になると思いますし……長ければ2週間ぐらいかと思います。」

短くても数日は必要かと思いますが……綾小路君はポイントが危ないのでしょうか？」

ついでに綾小路のポイントに関して平田の前で追及してみる。答え方で綾小路が嘘をつくタイプか真実を秘匿するタイプか正直なタイプが分かるかもしれない。いや、まあ、プライベートポイントの情報で綾小路が重視しているかなども関わってくるため一概には言えないが……

「いや、ポイントはまだあるが、少しばかり心許ない……それに何かと入用だ。できれば早くポイントを貰いたい」

うぐぐ。何とも判断に迷う回答だ。嘘は言っていないが、うーん。真実を秘匿するタイプだろうか？いや、正直に答えてるともいえるが、何かと入用というのが何だか怪しく感じてしまう。いったいポイントで何をやるのか気になる。まあ、俺自身ポイントを使って諜報工作を行っているから他人も怪しんでしまうだけだが。

綾小路は聞きたいこと聞くと、自身の席へと戻っていった。そして堀北とイチヤイチヤしていた。本当に仲が良いね、あの2人は……

昼休みになると、Dクラスの面々も朝の鬱々とした気分を忘れ学生の本分である青春を満喫し始めた。

Dクラスはポイントがピンチなため自炊してきている者もいるが、中には無料で手に入れることができる山菜定食を求めて食堂へ挑む猛者もいる。というより自炊できないやつが多いからなのか食堂へ行く生徒が多い気がする。俺も本当は食堂に行きたかったのだが……あそこは椎名のテリトリーだ。できれば避けたい。まあ、最近は龍園が頑張ってくれているので椎名と会う可能性は低いが……

しかし今日はなんとも教室で食ベにくい日だ。なぜなら珍しく平田と軽井沢軍団が教室に残って飯を食っているのだ。どうもみんな自炊してきたらしい。いや、お前ら食堂組だろ。何残ってるんだよ。女子たちが平田を中心に群れている。まるで平田ハーレムだ。まあ、正確には中核は軽井沢のような気もするが。

いや、まあ、いい。よくないけど。とにかく平田の席の前というのは、なんとも居づらい空間だ。仕方ないので、椎名遭遇率が比較的低い中庭に向かおうとすると、隣から声をかけられた。

「ねえ、赤石君はポイントが何時入ってくるか分かる？」

なんと声の主は篠原だった。なんで俺に聞くんだ？あとその質問は今日で2回目だぞ……それに何時もそういう質問は平田にしてなかった……？いや、まあ軽井沢の配下っぽい篠原が彼氏と仲良くしている所に介入したくない気持ちは分かるが……

俺がそう思っていると、何を考えたのか平田が軽井沢の相手を止めて、口先をこちらに向けた。

「篠原さん、実はさつきその話を僕と赤石君と、……あと綾小路君とでしていたんだ」

おい、やめろ馬鹿。本日の昼休みは早くも終了ですね。

「そうなんだー。平田君は何時頃だと思う？私、ポイントヤバイから早いといいんだけどなー」

軽井沢もどういう訳が話しに乗ってきた。いや、お前は平田の彼女だろ。2人で話せよ。軽井沢が話したせいとか、他の女子も平田と俺の方を見た。マジで止めろ。あ、ちなみに今日の軽井沢軍団のメンバーは軽井沢・篠原・松下・佐藤の4人だけだ。森は櫛田たちというようだ。市橋は知らん。

「うん、長くとも2週間くらいじゃないかな。といってもこれは僕が考えたんじゃないで、赤石君の受け売りだけどね」

おいおいおい、平田、お前、これは裏切り行為だぞ。許されないぞ！……いや、まあ、大した予想ではないし、生徒会の干渉の度合いによつては大きく外れる予想だから別にいいんだがな……でも、最近、平田は俺のことを表に出したがっている気がする。そういうのは困ると何度も言っているんだけど……うーん、平田の求心力は思ったより低かった、いや、Dクラスが協調性がないヤツが多すぎたと言った方がいいか？

まあ、とにかくDクラスで平田が使える駒が少ないから平田としては俺の利便性を高めたいのかもしれないが……俺は困る。このあと

本格化するであろうクラス闘争で目立ちたくない。目立たないで4000万ポイント欲しい。

どうも平田とのコネクションの持ち方を間違えてしまった気がする。まあ、どうしようもなくなったら、平田の善意に縋るか……

「えーそんなにー、ちよつと長すぎない?」

そう言つて軽井沢は俺を咎めるように見てきた。いや、俺がポイント配布決めるわけじゃないんだけど……なんて答えればいいんだ……? 適当でいいか。

「えつと、すみません。俺も自信はないんですが、ポイントもこの学校ではお金の一種ですから、管理や配布はかなり慎重になると思うので、長ければ2週間ぐらいはかかると思つたんです。ただ、茶柱先生が言うには「ちよつとした」トラブルということですし、2、3日で配布される可能性も高いと思いますよ」

俺がそう言つと、軽井沢は少し安心したような顔になり、再び平田と談笑し始めた。佐藤はすぐにその輪に加わり、松下は一度こちらに一瞥をくれたあと、軽井沢たちの会話に加わつた。しかし、篠原は何を思つたのか、まだ話を続けるようだった。

「赤石君は何で2週間つて思つたの? 1週間だと駄目なの?」

おい、なんか市橋みたいな追求してきたぞ。やっぱ篠原は市橋のクローンだったか……ん? 逆だっけ? まあ、いや。適当な事言つとけばいいでしょ。というより、ポイントの配布は生徒会次第だから誰も予想できないし。俺も具体的な日程はわからん。

「ええつと、すみません、これもあまり根拠となるものはないのですが、月に1度ポイントの配布があるというルールがこの学校にはあります。この学校はどうもルールを重視する所がありますよね? などで、月に1度という言葉から考えると、規定日である月初めから半月を過ぎてしまうと、配布日が月の後ろになるので……なんと言いますか、名分が立ちにくくなるように感じられます。例えば7月だけ月の最後だとすると、それはほとんど1月に1度というより2月に2度ですよね? そう考えるとちよつと変な気がしたので。すみません。なんか感覚的な事ばかり言つてしまつて」

うん、自分で言ってるんがらがつてきた。というより論理が飛躍してて意味が分からない。しかし、篠原的には許容範囲だったのか、彼女は何度か考える仕草を見ると、一度小さく頷いて、「教えてくれてありがとう」と言った。そして、平田たちの会話の方へ入っていった。

篠原の追求を退けたので予定通り中庭へと向かった。比較的人が少ないベンチに座る。ここは平穩の地だ。誰も俺の昼飯を邪魔しない……

……

……

……

……なんか佐倉が居るんだけど。

っていうか、こつち見てない？気のせい？あ、気のせいじゃなかった。こつちにゆつくりと佐倉が近づいてきた。帰って。

「あ、あの。赤石君。隣座ってもいいかな？」
だめ。

「え、ええ。どうぞ。佐倉さん。珍しいですね。中庭は普段から使用されているんですか？」

佐倉は俺の回答を聞くと、少し安心したような顔になり、隣に座った。椎名と違い許可をとる分、椎名よりは危険ではないのかもしれない。しかし、彼女がマウント少女である以上油断はできない。というより、なんで中庭にいるんだ……？ここがお前のテリトリーなら別の所で食べるけど……

「ううん。私は中庭はあんまり使わないかな……ただ、その、赤石君と話したいことがあって……」

つまり、俺を追ってきたのか……龍園のおかげで取り除かれた椎名

の代わりに佐倉が来るとは……こういうの前門の椎名後門の佐倉っていうのかな？前門の門は龍園だな。

「ええっと、どんなことでしょうか？」

正直、面倒事の予感がするので相談とかしないでほしい。中間試験の恩を忘れたか佐倉よ。

「あの、中間試験は教えてくれて、ありがとうございます。あの、私、打ち上げも行かなかったから、御礼を言っただけだったので……」

佐倉は緊張しているのか、少し頬が赤かった。純粹に感謝を伝えに来てくれたのか……？いや、別にたいしたことでもないし、井の頭のついでにやったことなので、そんなに気にしなくていいよ。あ、でも、これをネタに相談事に発展するのは駄目だよ。

「あ、いえ、気にしないでください。俺も最初の1日しか、佐倉さん達に教えることができなかったもので、むしろ、あの時図書館で佐倉さんが加わってくれてよかったです」

適当な事を言う。しかし、佐倉は何を考えたのか目ざとく追及してきた。中間試験の恩を忘れたな佐倉。

「あ、あの！どうして、1日目で勉強会を終わらせたんですか？あのあと、私と王さんは困って、それに市橋さんも残念そうでしたよ……」

いや、めんどかったからかな？っていうか、お前ら3人は俺の勉強会に参加しなくても赤点はなかっただろうし、あの勉強会が高得点を指すものではなく、赤点を回避するという名目である以上、誹りを受けるようなことではないと思うのだが……しかし、彼女の目はいつも以上に真剣に見えた。1日で投げられたことが嫌だったのだろうか……？佐倉と市橋は勉強会にそこまで乗り気でもなかったように見えたし、王は俺以上に実力がある。やはりあのまま、6人で続ける意味合いは薄い気がする。

「その、俺は人前で話すのが苦手で……あの時クラスメイトが沢山いましたし、その、5人もの人に教えるのは中々難しくって。佐倉さんならこの感覚は分かって貰えるかと……いえ、すみません。変な事を言ってしまうって」

とりあえず、論点をすり替えておこう。いつもの人前苦手アピール

だ。もう何かを追求されたらコマンド「人前苦手」とコマンド「適当な事を言う」で良いような気がする。

佐倉は俺の返答を聞くと申し訳なきような顔をした。少しだけ罪悪感を感じる。い、いや、俺は悪くない……ような、気が、する。いや、まあ、その、ごめん佐倉。

「ううん。私こそ、赤石君のこと、その、ちゃんと考えなかった……かな。そうだよね……赤石君は私と同じだもんね……」

いや、俺はお前と違って初対面の人にマウント取ったりしない。でも、さすがに空気を読んで黙っておく。井の頭にも前言われたし。うん。やっぱり俺は空気読めないかも……

しかし気まずい。いや、俺が悪いんだが、でも気まずい。仕方ないのでポイントの話でもするか？

「いえ、その気を遣わせてしまってすみません、佐倉さん。えーっと、そういうえば、クラスポイント入って良かったですね。トラブルがあった遅れるみたいですが、これで俺も一か月0円生活から脱却できそうです。佐倉さんはポイントが入ったらどうしますか？」

そういうえば、佐倉と初めて会ったのは家電量販店だったな……佐倉はテレビコーナーにいたんだっけ？あれ？パソコンコーナーだったかな？もう、マウント技をかけられた事しか憶えてないな……

俺が質問すると、佐倉は顔色が悪くなり、答えに窮していた。あれ？聞いちやいけない感じか……？あ、いや、男子がお金の使い道を女子に聞くのはマナー違反かも……というよりセクハラかもしれない……やっぱ俺は空気が読めないのかも。

「あー、いえ、すみません。答えにくいことなら全然答えなくてください。変な質問をしてしまってすみません」

「あ、い、いえ、その違って。答えたくないんじゃないの……もしポイントが入ったら、しばらくは使わないで残しておこうと、思うよ……あの、その、赤石君。き、聞いていいかな？」

相談事は駄目だよ。

「え、ええ。俺の答えられることならですけど……なんででしょうか？」

俺が答えると、佐倉は緊張しながら、俺の目を見て、そして下を向

いた。それから何か小声で、これから話すことを練習するように言葉を紡いでいるようだったが、聞き取ることは叶わなかった。何度か佐倉は練習をすると、再びこちらの目を見て口を開いた。

「そ、その、須藤君が……………う、ううん。やっぱいいや。ごめんなさい」

しかし、途中で全てを言い切ることなく、再び口を噤んだ。

なんだ…………？須藤がどうかしたのか…………？あいつは今きつと自分がトラブルを起こして不安だと思うよ。もしかしたら、トラブルを起こしている自覚がない可能性もあるが…………

それにしても、佐倉と須藤は関りがあっただろうか？席が一番後ろという共通点以外は無かったと思うが…………？俺と井の頭のように隠れ友達なのだろうか。と、すると不安に思った須藤が佐倉に相談したとか？うーん、なんか須藤の性質とも佐倉の性質とも合っていない気がする。

まあ、面倒事にならないならいいや。

その後は適当に雑談を挟み解散した。佐倉は椎名と違い、雑談のネタに方向性がないため少し新鮮だった。

放課後になり、素早く帰宅した。今日は月曜日だが、龍園のカリスマ演説の生放送があるのだ。せっかくチケットが無料なので、今後の須藤の暴力事件の動向把握の為に聞いておこう。

いや、もう正直、須藤と石崎たちの暴力事件に関しては勝負がついているような気がしたのだが、龍園は何をやるのか分からない事があるので、聞いてみたかったのだ。

これは決して、暇だからとか、最近なんかカリスマ演説聞くのが面白くなってきたからという訳ではない。

盗聴装置をライブモードで流す。映像は無いがパソコンから龍園御用達の集会場である高級カラオケルームから流れる音が聞こえてくる。それと同時に手元の端末が僅かに揺れた。見ると櫛田から着

信のようだ。今は忙しい。櫛田からの連絡をスルーし、龍園のライブに集中する。

『それで、石崎。上手くやれたのか?』

爆音が響くカラオケルームにて威圧感たっぷりの龍園の声が響いた。ちようど、いいタイミングだったようだ。

『はい、龍園さん。須藤のバカは無事ひっかかりました、これでDクラスも終わりですね!』

龍園は石崎の答えを聞くとクツクと器用に笑った。やっぱりあの笑い方がいいな。

『そうか、それはよかった。ところで、お前ら、あんまり怪我をしてるようには見えねえが……』

そこで龍園は一度言葉を区切った後、たつぷりと溜めを作り口を開いた。

『本当に大丈夫か?』

ひえ。ちよつと怖い。具体的に言うとならぬ。3椎名ぐらいの怖さだ。しかし、映像もないのにこんな怖いとなると、目の前にいる石崎は大変だな。

『え、いえ、その龍園さん。あ、あの、俺はだ、大丈夫だと、お、思っています』

『お、俺も大丈夫です』

『俺もです!』

声が震えている。それに石崎以外もいるようだ。たぶん一緒に須藤を嵌めた小宮と近藤だろうか?

3人組の反応を聞くと龍園はククと笑った。おや?クツクだけではなくククというパターンもあったのか。

そして龍園が『アルベルト!』と叫ぶと、何かがぶつかるような音が聞こえてきた。その音が何度か続いた後、カラオケルームは静寂に包まれた。あんな爆音を鳴らして楽しんでいたCクラスの生徒も沈黙を選んだようだ。おかげで凄く怖い。0・6椎名だ。映像がない分より怖い。なんかホラー映画みたいだ。

え、というか、もしかして、今、石崎たち殴られた?アルベルトっ

て多分山田アルベルトだよな。アレに殴られたら病院送りになると思うんだが……というより前後の文脈を踏まえると、須藤に暴力を振るわれた事をより鮮明にしたいが為に殴らせたのだろうか？

いやいやいや、これ完全にやべー奴じゃん。誰だよ龍園と友達になれそうとか思っただのは。

そんな事を考えていると、何かを閉じるような音が聞こえた。いや、まあ、本を閉じる音なんだが……もしかして居るの？いつも会合に参加していない人が居るのか？

『龍園君。あまり有意義な時間には感じられないので、帰っていいですか？』

ひえええ、1. 0 椎名だ。あ、いや、それ、ただの椎名だ。というよりこの沈黙を破るとか、コイツの度胸はどうなってんだ。

『まあ待て、ひより。これからが面白いところだ』

龍園はそう言うのと、何かを零すような音が聞こえてきた。なんだ？

『石崎。美味いか？』

ジュースでも渡したのか……？

『は、はい……』

石崎の声は震えていた。

『ひよりもやってみるか？おもしろーぞ』

マジで何をやってるんだ？石崎にジュース飲ませる遊びか？石崎のジュースの飲み方が面白いのか……？いや、もしやジュースではなく青汁系か……あれは苦手な人が多いから無理やり飲ませているとしたら龍園は中々の鬼畜だな。

『龍園君。友達は大切にした方がいいですよ。それでは、また明日学校で会いましょう』

椎名は龍園の誘いを無視し、別れの挨拶を告げた。そして扉を開けるような音が聞こえ、そしてすぐ閉まる音が聞こえた。椎名は帰ったか……？しかし、椎名はすごいな。こんな状況で自分を貫くとは……さすがは龍園の相談役だ。

椎名が去ると龍園は気を悪くしたのか舌打ちをし、さらにたくさん

のジュースを石崎や他の2人にも振舞った。

もしや、青汁ではなく辛い系かもしれないな……

その後は龍園がCクラスの担任である坂上先生への打ち合わせの仕方や生徒会への手続きの方法などをCクラスの面々に解説していった。

とはいっても計画自体には変更はないようで、最終確認といった感じであった。

龍園は見た目の雰囲気とは違い、このように事前練習や確認を欠かさないタイプのようだ。あえて言葉にするならば「計画的な努力家」という感じだ。うん、まったくイメージに合わない。

今回の事件でも事前に石崎たち3人へ須藤への絡み方、対峙の仕方などを教えていた。ちなみにその時の須藤役は山田だった。須藤はそこまで威圧感ないだろ、とは思った。

平田グループ チャプター1

7月2日。ホームルームから空気が悪かった。どうも、須藤が暴力事件を起こしたことが広まってしまったようだ。いや、まあ、茶柱先生が言ったからなんだが……

一時は須藤が総スカンになるかと思ったが、櫛田と平田が庇い、平田が庇ったため軽井沢も庇ったので、なんだかんだで須藤の冤罪を晴らそうという方向になった。

ただ、皆心の中では納得していないようで、空気は悪かった。一応櫛田がDクラスで目撃者を探したが見つからなかったようだ。今後は他クラスの目撃者を探すようだが、はたしてどういう展開になるのだろうか……まあ、俺がやることは変わらないか。

そういった感じで、なんとも微妙な空気で授業を受け終えた後は高度な情報戦が展開される昼休みの時間となった。

なぜ高度な情報戦になるかというと、虎と狼、ではなく椎名と佐倉、この両名がまるで俺の行動を先読みするかののように俺の安住の地を破壊していくからだ。椎名のテリトリーである食堂、そして佐倉のテリトリーである中庭、そしてなぜか軽井沢軍団がたまに駐留する教室。これらを搔い潜りながら昼休みを無事過ぎさなくてはならない。

幸いにして、佐倉は教室を出た形跡があり、軽井沢軍団は昨日とは違いどこかに行くようだった。ついでに平田も連れて行ってくれた。その上、櫛田が堀北と綾小路と赤点組を率いてどこかへ向かったようだ。なんと素晴らしい日だ。ヤバイ奴が全員教室から消え失せた。

久々の1人教室飯だ。心が躍る。そう思っているとこちらに井の頭が近づいてきた。友よ。来たか。……いや、待て。友よ。ヤバイ奴は消えたが、この教室にはまだ人がいる。今、一緒にいてはいけない。

俺が焦っていると、井の頭はこちらから少し離れた所で止まった。そして、井の頭の背後から王が現れた。ちよつと待て、気づかなかつたぞ。王は井の頭より背が低いと思っていたが、まさか、すつぽりと隠れられるのか……俺が驚いていると王はゆっくりとこちらに近づ

いてきた。卑怯な。井の頭を盾に使いおつて！

「あの、赤石君。お昼、一緒に食べない？」

やだ。

「王さん……う……打ち上げ以来ですね」

友よ、なぜこんなやつ……って！いない！井の頭は気づいたら教室からいなくなっていた。ちよ、ちよつと待って王を押し付けられないで。

「あ、うん、打ち上げの時はあんまり話せなかったから……それで3人で一緒にお昼にしようかと思つて、どうかな？」

もう1人減ってるから。帰つて。

「えーつと、井の頭さんは食堂に行つたみたいですよ」

友よ、なぜじゃ……なぜ、わしを見捨てたのじゃ……

「えーあれ、心ちゃん？一緒に居てくれるつて……あれ……？」

王はきよろきよろと辺りを見回したが井の頭の姿を捉えることはなかった。王はわたわたしながら、こちらを見やり、そして手をぶんぶん振り回し始めた。やめろ。危ない。

「あ、あの、赤石君。その、また今度！」

そう言つて王は風のように教室から去つていた。井の頭がいる食堂に向かつたようだ。……友よ。もしやこれを予期していたのか。疑つてすまなかつた、友よ。そして流石じゃ友よ。王がドヤ顔をしない日など初めてじゃ。

その後、無事昼休みは終わった。昼休み終了15分前程度に王と井の頭は戻つてきた。どうやら、2人で一緒に食べたようだ。

終了10分前になると顔を赤くした佐倉が戻つてきた。走つてきたようだ。まだ10分前だから大丈夫だが……佐倉は結構真面目っぽいので急いだのだろうか？佐倉が戻つてきた後、同じ方向から今度は堀北が帰つてきた。はて？堀北は榎田たちと一緒にいたと思つたが……考えていると、授業開始5分前になり、榎田と綾小路と赤点3人衆が戻つてきた。うん？堀北だけなぜ早く帰つてきたのだろうか？まあ、たいしたことではないので、気にしない事にする。

授業を適当に乗り越え放課後へ。今日は火曜日だが、残念ながら龍園のライブはない。本来は定例日だが、龍園は「明日は無しだ」と言つたため会合は無しになった。おそらく昨日臨時に開いたからだろう。やることはあまり無いが……いや、そろそろ特別試験について本格的に調べるべきだろう。

やるべきことを決めたため、櫛田に絡まれている綾小路を尻目に素早く帰宅しようとするのだが、平田が邪魔してきた。なんかデジャヴ。

「赤石君。ちよつといいかな？」

駄目だよ。

「なんででしょうか？平田君」

「実は今日、僕と櫛田さんと2チームに分かれて須藤君の冤罪を晴らすために行動することにしたんだ。それで、櫛田さんの方には綾小路君たちが付くことになったんだけど、僕の方は軽井沢さんたちとつて事になったんだけど、赤石君も一緒に来てくれないかな」

やだ。

「そ、そうですね。勿論大丈夫ですが……すみません、ただ、俺がいると軽井沢さんたちに悪いですし……皆さんのお力になれるかどうか……」

そう言いながら近くで待機していた軽井沢に目を向ける。

まだ、軽井沢とはほとんど言葉を交わしていないが俺にはわかる。この女子は根っからの虐めっ子の女王様タイプだ。気に入らない人間は虐めるし、彼氏とのデートは邪魔されたら怒るだろう。だが、反面、王の気質（ドヤ顔の気質という意味ではない）があるため、伺いを立てるような相手を無下にはしない。という訳で軽井沢様、頼みますよ！

「んー？別に赤石君が来ても私は気にしないけど。というより早くいこうよ。皆待ってるんだからさー」

ちよ、女王陛下。何言ってるんですか。もしや、道化役をご所望ですか？道化役は佐藤だけで十分でしょう。俺を巻き込まないで頂きたい。

「そうでしたか、すみません。なら大丈夫ですよ、平田君。どのあたりから回っていきますか？」

最後の抵抗として、軽井沢軍団の面々を見ていくが、あまり不快そうな顔をしてるやつはいなかった。市橋は軽く手を振っていて、森は目が合うと僅かに笑っていた。佐藤と松下と前園はどうでも良さそうだ。篠原は少し驚いたような顔をしていた。いや、俺が驚きたいんだだけ。

今日の軽井沢軍団はかなり多いな。須藤の事とかどうでもいい奴の方が多だろうに……

これも平田と軽井沢の力か……いや、待て、冷静に考えると少ないか？思ったより動員能力が低い気がする。

Dクラス全体から見るとカースト武闘派の集団だが、他クラスとの比較を行うとするとクラス全体を統制している一之瀬や龍園、内部分裂をしているものの未だ安定している葛城、レジスタンスのような活動をしている坂柳の方が動員可能兵力は多い。これは少しリーダーレースに負けている気がする……平田のバックアップを行うべきか？一応、連絡網や勉強会を通して、平田体制の地盤は作ったが、まだ何かやるべきなのだろうか。

いや、今回は緊急かつ、問題ばかり起こしている須藤なんか助けるやつはいないということ、動員数が減っていると考えると、平時の動員力はかなりある方だろう……平時に動員できても有事にできなければ意味ないかもしれないが……なかなか難しいところだ。

適当に平田戦略を考えながらも平田・軽井沢の両名に導かれ進んでいく。平田が先頭の1番手ポジション、その右斜め後ろに軽井沢、つまり2番手ポジションだ。ここまではいい。だが、なぜか平田の左斜め後ろに俺がいる。まるで3番目の参謀ポジションだ。

あのー、この陣形で他クラスに突き進むと、大変目立ちますので、俺は後方で警戒任務でもやりたいんですけど……

バレないように速力を落とす——

「どうしたの赤石君？」

馬鹿、篠原。気づくの早いよ。いや、まあ、篠原は俺の後ろだったので仕方ないのだが……

「いえ、ちよつと、前に市橋さんに頼まれていた参考書について思い出したことがあったので……お話できればと思います」

素早く適当に理由を作る。勉強会で一緒だった市橋が最後列を歩いていたのが不幸中の幸いであった。ちなみに今は同じく最後列を歩いている前園と話しているようだ。

「そうなんだ。赤石君って市橋さんと仲良いの？」

うるさいぞ、俺は早く安全な最後尾に行くんだ。邪魔するな！

「中間試験の勉強会の時少しお話ししまして、それで降偶に話をさせてもらってます。市橋さんは数学が好きみたいなので話も合うようで」だから邪魔するな！なんか平田と軽井沢の足取りが危ないのだ。この方角からすると、まさかのAクラス突入っぽいのだ。何であんな常時ゲリラ戦を展開しているクラスに行かなくてはいけないのか……というより現場への突入とか二度としたくないと最近思ったばかりなんだけど。

幸い篠原は俺の説明で納得したのか、追求を止め、俺のいた3番手ポジションに陣取った。よし！いい案山子だ！俺はそのまま少しずつ速力を落とし最後尾に合流した。すると市橋がこちらに気づき声をかけてきた。いや、そのまま前園と話してていいよ。俺の事は気にしないでいいよ。

「赤石君。久しぶり。なんか意外……でもない？」

いや、何がだよ。

「意外ですか……？」

「うーん、赤石君って、こういうのに参加しないキャラかなーって思ったけど、でも勉強会の時の事を考えると結構エモい事言うし、参加するのは変でもないかなって思っただけ」

エモい……って何……？日本語で喋って。エロいの仲間とか？もしそうならそれは俺じゃなくて綾小路だから。堀北と路地裏で……

いや、これは止めておこう。

「ええ、まあ、そんな感じですよ」

適当に話を区切る。何か話を打ち切られた前園が不満そうな顔で見えていたからだ。市橋は前園と喋って、やくめでしょ。

俺の念力が何とか通じたため、市橋は再び前園と話を始めた。よし。いいぞ。平和だ。この後、俺は後方警戒に備えることにした。いやいや、後方を守るの一番重要なことだから。決してサボってるわけではない。

——楽でいいな、最後尾は。

そのまま最後尾で警護をしていたのだが、悲しい事にAクラスへと平田たちが突入していった。平田を先頭に軽井沢と篠原が後に続いた。こいつら本当に度胸あるな。その他メンバーはAクラスの入り口で待機している。ちなみに俺は市橋と前園を盾にしてクラス内からの視線が通らない位置をキープした。

2人の盾を使いつつ中を伺う。主要メンバーでAクラス内に残っているのは葛城と的場・矢野といったところだ。他にも葛城の副官みたいな戸塚もいる。坂柳派はあまり見かけない。もう帰ったのかな？

平田が大きな声でAクラスに呼びかけを行っていた。Aクラスの反応はまちまちだが、不快感を抱いている者は少ないように見える。平田の名声はAクラスにも響いているようだ。一方で、この問題に関心を抱いている者も少なく見える。たぶんAクラス全体としては『どうでもいい』といった気持ちが大きいのだろう。

まあ、確かに仮に立場が逆だったら自分も何か手伝ったりはしないだろう。というより俺は一回BクラスとCクラスの騒動を傍観してたしな……

このまま何の進歩もなく終わると思っていたのだが、小さな事件が

起きた。Aクラス内で演説を始めようとした平田に対して戸塚が野次を飛ばしたのだ。それに対してDクラスの精鋭女子たちが反論していった。

俺は騒ぎが起きた時、素早く廊下側に移動し、Aクラスから距離をとったが、何を思ったのか市橋と前園の2人がついてきた。そして、Aクラス近くの廊下に陣取った。おい、何考えてるんだ。

Aクラスの中から論争の声が聞こえる中、俺は市橋と前園と共にDクラス戦闘集団から少し離れた廊下に並んだ。まるで廊下を封鎖しているような気分だ。

気まずいので廊下の封鎖線を解くため移動するが、俺の移動に合わせて市橋と前園が移動し、Aクラス前の廊下に再び封鎖線が敷かれた。おい、馬鹿やめろ。廊下にいるAクラスの面々から変な目で見られて辛い。

戦闘には参加しなかったが、もの凄く気まずい空気となってしまう。まるで戦闘集団の背後を固めて退路を確保している別動隊のような気分だ。実際、市橋と前園はそれを狙っているように見える。なんでこいつら発想が暴力的なんだよ。

幸いにして、Aクラス内部では葛城が戸塚を窘めたことで、一応は事態は収束へと向かった。ただし葛城の方もあまり関わりたくはないようで、平田にそれとなくAクラスでの活動の自粛を求めた。そして平田は葛城とAクラスに軽く謝罪している時、俺たち別動隊は、間違えた、俺と別動隊2人は少し厄介な人物に声をかけられた。

「なあ、あんたらは、須藤が無実だと思ってるのか？」

声の方向に視線を向けると坂柳派閥の古株である橋本がいた。戦闘集団の背後を守っていた俺以外の奴、つまり市橋と前園は橋本に対して鋭く睨み返した。怖いよ、お前ら。橋本は視線を受けて少し肩をすくめ、笑みを浮かべながら話を続けた。さすがは凄腕営業マンだ。まったく動じない。

「いや、悪い。うちのクラスは葛城を筆頭にちよつとばかり融通が利かない奴が多くてな。皆ポイントの配給が遅れて少し慌てるんだ」橋本が言い終わると、前園が露骨に舌打ちした。やべえなDクラス

の戦闘集団は思ったより怖いぞ。というより、もしかして俺もこういった同類だと思われるんじゃないだろうか？

なんか嫌だと考えていると市橋が軽く目くばせしてきた。何だ？と思っていると、市橋が頷いた。いや、意味わかんねーよ。もしかして俺が喋れってこと？嫌だよ。こいつ坂柳の腹心っぽいもん。目立ちたくないよ。いや、もう戦闘集団の退路確保係とか思われてそうだけど、これ以上目立ちたくないよ。

仕方ないので市橋の方を向き首を横に振っておいた。お前が説明を頼むという合図だ。市橋は俺の首振りを見ると、少し考えるような仕草をしたあと首を縦に振った。そして無言になった。おい、了承したらなら橋本に説明しろよ。その分かったような顔やめろ。やっぱり市橋は駄目だな。

今度は前園の方を見るが、こっちはもつと駄目だった。ずっと橋本を睨みつけている。おい、だれか喋れよ。橋本も少し気まずそうだな。「あー、別に平田、……平田君に対して悪いとか思ってるわけじゃなくてな。俺も平田君の言うことは一理あると思ってるぜ。ただAクラスは情報不足でな。よく分からないことが多くて。教えて欲しかったんだが……」

少し申し訳なさそうな態度だ。なんか、平田達がすみません。でも俺も被害者です。巻き込まれただけなんです。信じてください。

そのまま、睨む前園、黙る市橋、気まずい橋本という見ていて悲しくなる状態が少し続くと、Aクラス内での事態を収束させた平田がこちらに気づき駆け寄ってきた。救世主が来た。そして平田が来るとすぐに封鎖線は解かれた。怖いよ。なんだ、この無駄に組織的な動きは。0・61椎名だ。つまり龍園越えだ。

「橋本君、何か用かな？もしかして須藤君の事を知ってたりする？」

平田はまるで封鎖線が形成されていた事に気づいていないような口調だ。もしかして、平田の周りの女子がやばいって平田は気づいていないのか……？

「平田。俺もその事はよく知らなくてな。できれば聞きたい方なんだ

が、須藤は無罪、いや冤罪……ってことでいいのか？」

橋本は確かめるように言った。さつきよりも心なしか表情が穏やかに見える。どうやら平田を救世主だと思ったのは俺だけではないようだ。

「僕はそうだと確信しているよ」

「そうか。時間を取らせてしまつて悪かつたな。葛城もきつと悪気は無いんだ。あいつは少し真面目すぎるからな」

「いや、分かっているよ。今日の事は無理やり来た僕たちが悪い。葛城君の言っていることは正しいことだと思う。ありがとう橋本君」

平田は本当に自分が悪かつたと思つていような、そんな誠実な声音で言った。うーむ。こんな完璧な平田だから、こんなにやばい戦闘集団が形成されてるんだらうけど………なんか機関銃で武装した強盗が笑顔で握手を求めているようで、逆に怖いぞ。いや、平田は悪くないんだけど。

「話が分かるやつで助かつたよ。平田。良ければ連絡先を交換しないか」

おお。流石は営業のプロ。なんとも自然な感じで携帯番号をゲットしたか。うん。俺としても悪くない展開だ。橋本は坂柳の側近だ。そして平田の端末からは制限付きだが情報が入ってくる。この2人の会話情報が分かる俺としては是非とも2人に連絡先を交換してほしい。

平田は当然、笑顔で了承した。平田の笑顔を確認した前園は橋本を睨みつけるのを止めて市橋と談笑し始めた。市橋もすぐにそれに応じた。まるでさつきの封鎖線形成からの流れが無かつたかのような切り替え早すぎて怖いよ。

橋本が去つた後、主力戦闘集団である軽井沢・篠原を中核とするグループもこちらに合流した。なんか一仕事終えたみたい顔だ。カチコミ完了みたいな雰囲気だ。暴力団かよ。

合流後は、少しだけ散策を行い一部の人々に聞き込みを行い解散となった。ちなみに戦闘集団はカラオケで一発決めたかつたみたいだ

が、平田から須藤君の冤罪を晴らすまでは、という言葉を受けてカラオケは無くなった。ふう。一安心だ。まあ、俺はカラオケになつたとしても、戦闘集団から爪弾きにされると思うので、余計な心配だつたと思うが。一応といったところだ。

寮の帰宅後、休息を挟んだ後に、特別試験について調べる。今日は戦闘集団と一緒にたつたため気疲れしてしまつたが、そろそろ特別試験についての対策を考えておきたいため、調べることにする。

——この2時間後、俺は絶望することになる。

榎田グループ チャプター1

えーと、7月3日。

なんか大変な事になった。

昨日のハッキングで夏に行われる特別試験が判明した。絶望しかなかった。

試験は2つ。1つは無人島試験。そしてもう1つは船上試験だ。

船上試験の方は概要しか見ていないが大変心が躍る試験だった。あとで詳細を確認し、今後に備えておきたい。

しかし、問題は無人島試験だ。この試験では1週間の間、無人島で過ごすらしい。ちなみに持ち込みは禁止だ。クラス単位で試験専用のポイントを使い物資をやりくりしていくというものだ。

おいおいおいおい、俺死んだわ。いや、ネットワークに1週間接続禁止とかありえねーよ。そんなんじや、俺はただの無能じゃん。何の役にもたたねーよ。山内2号だよ。やべえよ……やべえよ……

ホント、マジでどうする？もう夏休みが鬱なんだけど。普通逆じゃない？

はあ……、どうしよう……

昨日の夜から鬱だったが、朝になりもう一度絶望したあと、学校に登校した。

教室に入ると、まだホームルームまで時間があるにも関わらず、人が中央に集まっていた。見ると軽井沢軍団と、あと意外な事に池と山内がその集団に入っていたことだ。あの2人と軽井沢軍団は相性が悪いと思っていたが、池が中核となつて篠原や市橋と会話していた。中には榎田の姿もあったが……いったい何を雑談しているのだろうか？と、言うよりこの不思議な集団は何をもって構成されたんだ……？

まあ、いいや、というか、なんか本当にどうでもいいや。やる気が

起きない。無人島試験とか考えた奴は頭おかしいだろ。せめて端末は所持可能にしろよ。そしたら何とかなったかもしれないのに……

頭の中で不満を抑え込みながらも、席に着く。しばらくすると、茶柱先生がやってきて、うきうきしながらクラスの真ん中で集まっている不思議な集団に声をかけていた。不思議な集団の注目を集めた先生は2000万ポイントで好きなクラスに編入できる権利の話を得意げに語っていた。いや、それは言わなくていいよ。

鬱々とした気持ちで授業を受け、そして昼休みとなった。

——あ、というか今日、昼飯を作ってない。あとパンも買ってない。駄目だ。何もかも鬱だ。今日は早退しようかな……

そんな事を無為に考えてると、声をかけられた。

「赤石君、今日は学食だったりする？」

顔を上げて声の方向を見ると、櫛田が人の好きよそうな笑顔を浮かべていた。

「ええつと、そうですね。昼飯を作り忘れてしまったので、そうしようかと思っています」

正直、今は櫛田と話す気分ではないのだが……いや、別に櫛田と話す気分の日などないか。

「そうなの？それならお昼ご飯一緒にどうか……？」

……もう、どうでもいいや。どうでもいいから、誰か無人島試験をこの世から抹消してくれないかな……

「ええ、喜んで。でも、珍しいですね。櫛田さんはよくお弁当を作ってきていたと思いましたが」

「あはは、実はみーちゃんが学食に行ってみたかったみたいだったから……みーちゃんも一緒だけど、いいよね？」

……どうでも、いや、よくないよ。みーちゃん、じゃなくて王は駄目だよ。あいつ最近俺にマウント取ろうとしてくるから、きっと佐倉二世目指してるみたいだから、駄目だよ。

「ええつと、大丈夫ですよ。ということは俺と櫛田さんと王さんの3人でということでしょうか？」

井の頭を呼ぶのだ。

「あと、心ちゃんも呼ぼうと思ってるけど駄目かな？」

駄目じゃない。呼べ。というより、なんで王の時は『いいよね?』という同調圧力だったのに、井の頭は『駄目かな』という疑問形なのか……

「いえ、そんなことはありませんよ。井の頭さんとは中間試験の勉強会以来ですから、久しぶりな気分です」

俺がそう言うと、櫛田は何時もの人好きな笑みを浮かべて、井の頭を呼びに行った。その後、なぜか、教室の外でスタンバイしていた王と合流し、学食を目指した。

学食に着くと、少し混雑していた。そのため櫛田が席を確保し、その代わりに櫛田の分の食券の購入することになった。ちなみに当然櫛田の分は櫛田が出した。当たり前だ。俺は絶対に奢らない!あと、櫛田の今日の気分はうどんらしい。

井の頭は定食を狙っているようなので、俺も一緒に定食コーナーに向かう事にする。幸い、王はラーメン狙いらしいので、櫛田の分を任せられる。

「王さん、櫛田さんの分のお願いでできますか?」

言いながら、王に櫛田の食券を渡す。うどんは任せた。

「えーあの、あのね、……赤石君も麺類にしない?」

なんで、お前に食べるものを指定されなきゃならねーんだよ。……あ、マズイ、今日は本当に心が荒んでいる。何時も以上に沸点が低い。というより、王はそんなに櫛田の分を持ちたくないのか……

「ええっと、今日は定食の気分なので、……櫛田さんの分は定食を取ってきてからにしますね」

仕方ないので、櫛田の分を後回しにする。食券を回収し、王の元から離れ、井の頭を追う。というより、井の頭は王が俺に絡んでいる隙に離脱していたようだ。友よ、裏切りじゃぞ。

「……？赤石君、定食にするんですか？王さ……、美雨ちゃんと一緒だと思つてました」

合流した井の頭の第一声だ。キョトンとした顔だが、いやいや、騙されないぞ。というより、今、王さんって言いかけたね……

「ええ、定食にしようと思つたので、終わつたら櫛田さんの分も手に入れようと思ひます」

周りに生徒が沢山いるため、普段用の口調で答えた。井の頭は俺の手にある「うどん」の食券を見て少し笑つていた。やつぱりおかしいよね。ここは麺類にいる王が頑張るところだよ。

井の頭は魚定食を選んだようだ。それは結構美味かつたぞ、友よ。「井の頭さんは魚定食ですか。それは結構良かったですよ」

俺の声を聞くと、井の頭は瞬きをして不思議そうに俺を見た。ん？なんか変な事言つた？

「えっと、赤石君。魚定食を食べた……ううん、赤石君、魚定食を買つたんですか？」

え、いや、俺つて魚苦手なイメージがあるのか……んん？あー、いや、そうだ、魚定食は俺は買つてない。奢つてもらつたんだ。

「あー、何て言つたらいいのか……魚定食は食べましたよ。ただ、奢つてもらつたので買つてはいません」

俺が言い淀むと、井の頭は素早く追及してきた。

「誰に奢つてもらつたんですか？」

……？なんか、いつもと井の頭の雰囲気が違う。作つた丁寧語というだけではない、少し冷たい雰囲気だ。

「まあ、知り合いに」

友達ではない。名前は言わない。なんか言つたら出現しそうだからだ。名前を言つてはいけない本の人だ。龍園、元気かな……

「そうですか」

あれ？なんか冷たい。なんで……？

いや、まあ、井の頭と組んでいる事は秘密にするべきだから、これが正しいのだろう。たぶん井の頭は俺に不用意に接触を控えるようにと伝えたいのだ。

やはり井の頭の方が演技力は一枚上のようだ。わかったぞ、友よ。

仕方ないので井の頭との話は一回打ち切り、比較的安価な野菜炒めの定食を購入し、麺類コーナーへと向かった。最後まで井の頭とは陰悪な雰囲気演技を演じてきた。お互いの演技力を磨きあつたといったところだ。

麺類コーナーでうどんの食券を……おい、王、お前なんでまだ麺類コーナーに居るんだよ。というより、ラーメンはどうした。

王はこちらに気づくと小さく手を振った。来いつてこと？嫌だったので、小さく手を振り返すにとどめた。

しかし、王は何を考えたのかさらに強く手を振ってきた。やめろ馬鹿、目立つだろ。

色々と面倒になってきたので王の方へと向かう。王はなんか嬉しそうな顔だ。コイツめ……いや、駄目だ。悔しがってはいけない。悔しがったら、きつと渾身のドヤ顔を放ってくる。それだけは阻止せねば……

王の思考を分析しながら近くになると、王がこちらを上目遣いで見してきた。おい、それは椎名、じゃなくて、名前を言ってはいけない本の人を思い出すからやめろ。

「あの、赤石君、その、私、学食初めてだから……教えて」

やだ。ラーメンの入手方法くらい、分かれ。勉強会じゃないんだぞ。

というより、王は結構イイ性格してるな。櫛田は待つてるのに……王が初めてであることを櫛田に伝えておけば、王が席取りをして櫛田が王の分を買うということも出来たのに……いや、まあ、待つのは櫛田だから別にいいんだけど。

「ええっと、トレイや箸やレンゲを用意して、それから食券を見せて、作ってもらったものを貰う形です」

それ以外無いだろ……

「う、うん。わかった」

そう言うと、王は指示通りに必要なものを用意していった。俺も王

の後に続き櫛田の分を用意する。一味とか大量に入れた方がいいのかな？

「あ、あのね。赤石君。やっぱり、赤石君の点数を考えると、英語を私が教えるほうがいいと思うの」

麺類の列に並んでいると、王が下劣な策を仕掛けてきた。どうやら、どうしても俺に対してマウントからのドヤ顔コンボを決めたいらしい。

「それで、その代わりに、赤石君が私に数学を教えてくれたら、丁度いいと思うんだけど……どう、かな？」

俺に何のメリットも無いんですが……もしかして、数学でマウント取っていいから英語でマウント取らせてという王なりの譲歩なのだろうか。別に俺は王や佐倉と違って人にマウント取る趣味は無いから、それは佐倉と分かち合ってほしい所だ。今度紹介しようか？あ、いや、王の場合は精神的なマウントだが、佐倉は肉体派だから……やっぱり駄目か。

「いえ、その王さんに迷惑はかけられませんし、それに今は須藤君の事を考えた方がいい気がします」

あいつのせいで俺の貴重なポイントが減っている。俺のポイントは何よりも優先されるのだ。須藤を決して許してはいけない。いや、まあ、須藤自体は正当防衛だから仕方ない面もあるんだけどね……「迷惑じゃないよ……それに須藤君は自業自得だから、須藤君のせいで今月もポイントが入らないし……」

いや、今月に入るけど、とは言えないし、どう答えたらいんだ？ 適当に須藤は悪いよなーでいいか。よし！須藤の悪口で話を逸らそう。女子は悪口大好きだし、いけるだろ。ちなみに根拠は櫛田とつての綾小路と堀北、あと井の頭にとつての櫛田と王。

「そうですね。こう言つては悪いかもしれませんが、須藤君があのと引き退……いえ、すみません。これは言つてはいけない事です。どうも俺も、ポイントが入らない事でイライラしてしまつてるみたいです」

「う、うん。確かに今日の赤石君は少し刺々しいかも……」

え、まさかの俺の悪口！……なんでコイツは何時でも俺には微妙に強気なんだ。マウント少女の佐倉でもここまで言わないぞ。王は新たなマウント少女に昇格だな。佐倉は降格だ。佐倉よ、もつと精進しなさい。いや、逆だ。王よ、お前はもつと大人しくしてなさい。

しかし、目の前で悪口を言われたらなんて返せばいいんだ？笑ってみるか……

「クク、………王さん、その、すみません」

間違えて龍園の笑い方を出してしまった。ちよつとカリスマ演説聞き過ぎたな……しかし、王は渾身の龍園の笑い方をスルーした。名前を言っただけはいけない本の人とは笑いのツボが違うのか……？

若干空気が気ままずくなった後、王はなんとかラーメンを貰っていた。トレイに乗せた時に、なぜかこちらをドヤ顔で見してきた。マジで止めろ。

俺も櫛田の分のうどんを入手。それとなく適当にトッピングしておく。一味は少しだけにしておいた。大量に入れても良かったのだが、櫛田はたまに不安定モードになったりしたら、ちよつと怖いので止めておいた。いや、まあ今日は安定しているから大丈夫だと思うが……前は王の前でいきなり不安定になったのだ。王がいる以上、危険な橋は渡らない方がいい。

………今日の俺は本当にやばいな。王がいなくても危険な橋は渡らない方がいいのだ。というより石橋は叩いても渡らないのがベストだ。それなのに、なんで櫛田のうどんに一味混入とか考えてるんだ……やはり、無人島試験を排除しなければ俺の心は荒む一方だ。

思い返してみると、今日の自分の振る舞いは少し変だ。井の頭もそれに気づいていたから、あんな態度を取ったのだろうか………なんとか、表面上だけでも心を静めなければ。

しかし、考えても考えても無人島には行きたくない。俺だけ休めないだろうか？体調不良みたいな感じで………とりあえず、帰ったら無人島試験のルールを読み返すか………やだなあ………

王と一緒に櫛田が取った席に向かうと、既に井の頭は合流していた。席はどちらかというと端よりで周囲からは見えにくい。静かな席といった感じだ。よくやった櫛田！良い席だ。

「櫛田さん。席取りありがとうございます。どうぞ」

うどんを櫛田に渡す。櫛田はうどんを見て、そして俺のもう一つのトレイの中にある野菜炒め定食を見て不思議そうな顔をした。だよね！やっぱり王がやるべきだよ。初めて櫛田と気が合ったと思う。

「赤石君は野菜炒め定食が好きなの？」

そっちじゃねえよ。というより、あれだ。王と櫛田は何か変に間を外してないか？わざとやってるだろ。

「ええっと、まあ、嫌いではないですね」

そう言うと、なぜか櫛田を目を輝かせた。

「そうなんだー、それなら、もしかして山菜定食も食べた事あったりする？」

ないよ。

「いえ、まだありませんね。何時かお世話になる可能性を考えると、早いうちにも思っているのですが……」

結構本音だ。あれは美味しいのだろうか？不味いみたいな噂をよく聞くが……

櫛田は俺の回答に納得したのか1度頷いた後、席についた。俺と王も席につき、さっそく食べ始める。しばらくの間、女子3人が喋っていたが、空気と同化しながら野菜を処理していく。しかし、半分程度食べた所で櫛田がこっちに話題を提供してきた。しなくていいよ。

「そういえば、赤石君は中間試験どんな感じだった？」

今、食べてる途中です。あとお前もうどんを食べ。伸びるぞ。

「あ、あの赤石君は英語が82点で……」

王はどんだけ俺の英語の点数がツボに入ったんだよ。どう考えても龍園の笑いの方が面白いだろ。あと、お前ラーメンだから、うどん以上に伸びるぞ。早く食べる。

「そうだったんだ。ちよつと意外かなー。赤石君って何でもできるイメージあったけど得意不得意もあるんだね」

うどん食え。

「ええ、まあ、色々ありまして」

野菜炒めを食べろ。ふと井の頭を見ると魚定食を熱心に食べていた。俺も井の頭を見倣い、手元にある野菜炒めを口に運んでいく。

「みーちゃんは英語は100点だったんだっけ？」

おい、馬鹿。何聞いてんだ。お前が口を開けていいのはうどんを食べる時だけだよ。

王は櫛田の質問を聞くと、渾身のドヤ顔を放ってきた。やめろ。

「うん！……桔梗ちゃんは何点だった……？」

まさかの櫛田へのマウント取り。いいぞー、戦え、戦えー。

「90点だったよ。赤石君より8点、上かな」

俺の点数を基点にするな。あと、90点とか佐倉より下じゃん。佐倉助けて！こいつらからマウント取って！

「いや、まあ。櫛田さんや王さんには勝てませんよ。というより、これなら勉強会の時は俺じゃなくて王さんが教師役をやってもらった方が良かったかもしれませぬ。……櫛田さん、期末試験は勉強会を開くんですか？」

「うーん。どうだろう。平田君は開くと思うから、私も参加しようと思ってるけど……」

「それなら、次は平田君と櫛田さんと王さんの3人で教師役をやるの良いと思います」

俺はもうやらん。というより、井の頭も外村も大丈夫だから、もういいや。ちらりと井の頭を見るときもう魚定食を食べ終えていた。速い！

「えーあの、私は教えるのはちょっと……」

いや……さつき教えるとか言ってたじゃん……あと、ラーメン伸びてるけど大丈夫？

「確かに、みーちゃんが教師役は向いてる気がするけど、……でもみーちゃんが大変そうなら無理やりは頼めないかな」

俺からチエックシートを奪ったヤツが何か言ってるぞ。まあいい……最後の野菜屑を食べ終え、無事完食。順位は2位。やはり王と櫛

田ごときでは俺と井の頭のタッグには勝てんようだな……

ちなみに麺類の2人はまだ半分に至っていない。櫛田はうどんだから何とかなるが、王のラーメンはもう食べたくない感じにふやけるぞ……

「だから、期末試験も赤石君にお願いできないかな？」

やだ。

「どうでしょう……？最近授業も難しくなってるので、教える側に回るかどうか心配ですし……なかなか難しいと思います」

まあ、どうせ平田が打診してきそうではあるが……うーん、そろそろ平田との付き合い方を変えるか？……いや、無人島試験はおそらく俺は雑魚となる。それに平田、いや軽井沢か？軽井沢が保有する戦闘集団はちよつと怖い。平田と櫛田に今のうちの媚を売っておいた方が得策か……ぐぬぬ、まあ、教師役は前と同じ方式ならそこまで目立たないし……平田、櫛田！無人島試験が終わったら覚えておけよ！

「そっか、……でももし、できたら皆に教えてくれると嬉しいな……」

櫛田は最後にこちらを上目遣いで見てきた。うどん食え。

それから何度か雑談を挟んだ後、櫛田はうどんを食べきった。一方、王は涙目になりながらラーメンの完食を断念した。3位櫛田、王は失格だ。

全員が完食してからも——間違えた、1人を除き完食してからも、すぐにはクラスに戻らなかつた。まだまだ話をしたいようだ。井の頭と王と櫛田の3人が喋っているのを見ながら、無人島試験について考える。……やっぱやだ。無人島試験は考えたくない。

そう思っていると、櫛田が皆に野菜は好きか？という謎の問を発した。普通かな。ちなみに櫛田は好きで、井の頭は好きよりの普通、王は普通寄りの嫌いらしい。しかし、櫛田としては皆の好みの把握よりも、提案したい重大な議題があつたようだ。もう帰りたい。

「そっか、……それなら、今度皆で山菜定食、食べない？どうかな？」

櫛田は3人の菜食主義者度合いを確認するとそう言つてのけた。王はさつき嫌いつて言つただけ……

「う、うん。山菜定食は美味しく無さそうだけど……いつか食べるなら、……早いうちに皆で食べた方がいいよね」

王は何を考えたのか櫛田に同意した。そんな事を言うのなら、そこに残ってるラーメンの上にある小松菜を食べろ。あと、山菜定食を食べても俺にマウントは取れないしドヤ顔もできないぞ。俺は王に抗議の視線を送るが、何を思ったのか王はこくと頷くだけだった。いや、小松菜を食べろ。

こうなれば最後の手段。やはり信じられるのは親友だ。井の頭、任せたぞ！

「えつと、桔梗ちゃん。あの、私は大丈夫だけど、……赤石君は忙しくないですか？」

ちよ、ちよ待って、なんでそこでキラークラス？断れってことだよね？頑張るよ、俺。

しかし、俺の決意をよそに櫛田がこちらを見て口を開いた。

「赤石君は何時もお昼は教室だから、いいよね？」

よくないよ。……恐ろしいことに、本日二回目の同調圧力だ。櫛田の笑顔に曇りが無いように見えるため不安定モードでは無いと信じたいが……やっぱ、櫛田と王の2人が揃うと駄目だな。

「ええつと、実は……明日はやる事があるので……すみません」

適当に言い訳作って有耶無耶にしておこう。

「なら、須藤君の一件が終わってからなら大丈夫かな？」

「ただ、山菜定食を食べたいんだよ……そんなに好きなら「うどん」じゃなくて山菜食べろよ。」

このままでは、なし崩し的にまた櫛田と王と一緒にお昼ご飯を食べることになってしまう。どのように回避するかを悩んでいたが……駄目だ打開策が思いつかない。

「そうですね。須藤君の冤罪を晴らしたら、その記念としていいかもしませんね。山菜定食が記念というのは少し可笑しい気がします……」

俺の回答を聞くと櫛田は笑顔で頷いた。ちらりと王の方を見ると、にんまり顔だ。なんかムカつく。一方井の頭は安定のポーカーフェ

イスだ。流石じゃ。でもキラークラスは投げないで……

昼休みが終わると、流れるように午後の授業もまた終わった。放課後になると、櫛田が再び綾小路の方に近寄っていったのが見えた。昨日と同じ流れだ。ここは危険だ。俺は平田に声を掛けられる前に素早く教室を離脱した。あんな怖い戦闘集団と一緒に居られるか！俺は寮に戻るぞ！

無事、寮に戻りパソコンを開く。本当は調べたくなかったが特別試験の詳細の把握を行う事にした。あー、無人島行きたくないなー。

……鬱々とした気持ちを何とか振り払いつつ、ハッキングを行う。1分もしないうちに内部に侵入し、機密情報を抜き取っていく。本来であれば、試験が始まる直前にようやく生徒が知ることができるルールが、次々と表示されていく。

ルールや日程を纏めると以下ようになった。

・無人島試験の期間は8月1日から7日の午前まで。船上で3日間の休憩を挟んだ後、8月10日の午後から14日の夜まで船上試験が開催される。おおよそ2週間の日程となっている。

・無人島試験はジャージで行動し、何かを持ち込むことは禁止される。身体検査もあるらしい。

・無人島試験では各クラスに試験専用ポイントを300ポイント支給する。このポイントを効率良く使うことでクラスを1週間生存させるのが主な目的となる。

・たとえばポイントでは食料や飲料の他に、釣り道具やテント、仮設トイレなどを購入できる。

・そして、この試験専用ポイントが試験終了時に余った場合は、その値だけ2学期からのクラスポイントに加算される。

・また、各クラスは1人のリーダーを選定し、選定したリーダーが持つカードキーを使用することでスポットと呼ばれる空間を占有す

ることができる。

・占有スポットはそのクラスが使う空間のようなもので、他のクラスが使用するのには基本的にはいけないらしい。勝手に使用すると試験専用ポイントが50ポイント減点される。

・占有スポットは8時間で占有が解除される。

・占有スポットを1度占領すると1ポイントのボーナスポイントを得る。つまり理論上、1日張り付けば1つの占有スポットにつき3ポイントを得る事ができる。

・ただし、欠席者や途中離脱者、定時の点呼に不在者がいるとポイントは減点される。

・そして最後のクソルールとしては、試験終了直前にリーダー当て大会を行い、他のクラスのリーダーを予想する。当てることに成功した場合は1クラスにつきポイントとして、50ポイントを得る。ただし失敗した場合は50ポイント減点となる。ちなみにリーダー当て大会に参加するのは自由。1クラスだけ当ててみるというのも可能。

・なお、この際リーダーを当てられたクラスは50点減点された上、ボーナスポイントが無効になるらしい。

うん、迷うことなき、クソ試験だ。特に電子機器持ち込み禁止が有り得ない。持ち込み可能なら、俺が一方的にリーダーを当てるといふ、結構面白い試験だったんだが……休みたいけど、休んだら減点されてしまうため、2学期から総スカンが予想される。ぐぬぬ。

一方船上試験はただのボーナスゲームだった。詳しくは省くが、この試験では犯人当てゲームのような事をするのだが……なんと、犯人リストを入手したのだ。俺は試験が始まる前から全ての犯人が判明したのだ。リストの中身はまだ詳しくは見えないが、もうこの試験は余裕と考えていいだろう。一応、7月の中頃から立ち振る舞いを研究するつもりだが、今は無人島試験について考えよう。

おそらく考えることは2つだ。

1つ目はリーダー当て大会というクソゲームをいかにして乗り越えるかだ。

このルールは本来は試験開始時に発表される。つまり、リーダーが決まるのは試験が始まってからだ。故に俺の端末はもう没収されており、誰がリーダーかは分からない。もちろんリーダー当てに参加しないという手もある。というより十中八九こちらの司令塔は平田である以上、安定を好む彼がリーダー当てに参加するとは考えにくい。よってリーダーを如何にして当てられないかという事に焦点を置くことになるだろう。こちらのリーダーを平田にするのはすぐにバレそうだから目立たないやつ……外村あたりだろうか？その辺をリーダーにするのが良いような気がするが……いや、まあそのあたりは平田や櫛田が上手く考えてくれるだろう。あの2人は俺より遙かに思考が深い。きつと何とかしてくれるだろう……

もし綾小路にやる気があれば、発想力がある彼がDクラスのリーダーを決めるというのが防衛には結構良いかもしれないな。まあ、力を隠したがっている彼がクラスに貢献するとは思えないが……

2つ目は、そもそも俺が無人島で生活できるのか、という点だ。水や食料、テントなど必要なものは多岐に渡るが、この試験の性質上、Dクラスの面々は出来る限り節約したくなるはずだ。もちろん、俺だって節約したい。ただ、それで飢餓を味わいたくはない……なんとか快適に過ごせないだろうか……？

やはり平田や櫛田への媚売りは大事だ。クラスの中核をなす2人に良いように思われていけば、そう悪い仕事は任されなと思う。たぶん。須藤の1件をもう少し協力的に振舞った方がいいだろうか……？おそらく、今後生徒会が出てきた時の平田と櫛田が弁護の席に着く。その時に俺が撮影したフィルムを……いや、やはり直接は嫌だ。それでは本末転倒だ。目立たない方向でいきたい。

櫛田が学年全体にアンテナを広げてから、それとなく匿名でコンタクトを取ろう。そして櫛田から有り金を頂こう。情報提供料だ。彼女の性格上、嫌とは言わないはずだ。5000ポイントぐらいなら出してくれるだろう……

根本的な問題として、人間関係だけでは何とかかなりそうにない。俺

だけが上手く振舞っても、色々と問題のあるDクラスでは閉鎖的な無人島で何時何処で問題が発生するかはわからない。もつと別の、何か欲しい。ハッキングで俺は常に情報というアドバンテージを得てきた。しかし、俺は無人島試験ではただの無力な山内2号となり下がる……いや、今、俺は山内より僅かにリードしている点がある。この情報だ。山内はまだ無人島試験を知らない。この有益な情報は俺以外は誰も知らない……ん？ちよつと、待て、確か、そう、佐倉だ。アイツが乱入してきた勉強会の日。その日に橋本が持っていた本、あれは確か……

気になり、坂柳の過去の通信履歴を漁る。見ると坂柳は橋本にサバイバル訓練をしているように指示していた。偶然か？それともサバイバル試験を予期したか？一応、過去数年はこの無人島試験は行われている。先輩から聞き込み調査をして推測したか……

どちらにしろサバイバルガイドを今のうちに読んでおくか……？橋本の2番煎じだが悪い案でもない気がする……いや、2番煎じではない。俺ならば橋本とは違いルールを知っている分効率良く――

………あ、

今、閃いた。あ、いや、まっつて、これっつて、理論上可能？

逸る気持ちを抑えながら、パソコンを操作し、あるシステムにアクセスする。この学校ではなく、国際的な、国家機密に近いシステムだ。流石に少し時間がかかったが……アクセスに成功した。そして目的のモノを見つけたことができた。モノをパソコンに落とし、今度はそれに画像処理を行う。ついでにネットワーク上から植生分類表と海流データ、気象データなどあらゆるものを抜き取り、プログラム上で加工・合成していく。

様々なデータを統合して……ついに完成した。

「やばい、俺、もしかしたら天才かもしれない……」

目の前にある地図を見る。

——この地図は試験が行われる無人島の3Dマップだ。地図には

標高や川のデータ、気象情報、植生、人工的な栽培物、木々や岩場の1つ1つが書き込まれ、本物を忠実に再現している。

俺が最初にハッキングしたのは某大国の人工衛星のデータだ。無人島といっても人工衛星の目には写っている。人工衛星が捉えた画像を詳細に分析し、地形や植生を導いた。さらには数々の人工的な施設や栽培物の発見にも成功した。最後に周囲の気象・海流データを入力し、試験日の大まかな天候の予測も書かれている。

「このデータと、データ上の食べれるもの、飲めるものを覚えれば……ハッキングできない俺でもいけるだろ」

山内の無能さ、坂柳の有能さ、そして何より橋本の勤勉さが俺を正解へと導いてくれた。ありがとな、みんな！

この試験の正解は、小狡い攻略本作戦だ。間違いない。

最高の作戦を考えた後、放置していた学生証端末を見ると、大量の通知があった。不在着信が榊田から5件、平田から2件だ。他にも2人からメッセージが届いている。あかん。攻略本作りに熱中してて気づかなかった。一応、中身を見てみたが、平田の方は榊田に連絡してくれという内容で、榊田の方のメッセージは長かったが……要約すると、佐倉さんと仲が良いかという質問だった。いや、良くないよ。メッセージを榊田に飛ばすと、端末に電話がかかってきた。当然榊田だ。出たくないな。しかし、これが出ないのは明らかにおかしいので出ることにする。

「もしもし、赤石です」

『あー良かった。やっと繋がったよ。ええつと、須藤君待って、どうしよう？綾小路君……え？いいの？ええつと、堀北さん!』

なんか、受話器の先が揉めている。切っていい？

『赤石君、少し聞きたいことがあるのだけれど、いいかしら?』

なんで、榊田の端末から堀北の声が聞こえるんですかねえ。

「ええつと？堀北さん？あの櫛田さんからの電話だったと思うんですが……」

『赤石君、貴方は佐倉さんと仲が良い？イエスかノーで答えなさい』
ノー。

「ノーです。普通です」

『そう、ありがとう。どうやら誤報だったようね。皆、見栄っ張りの綾小路君の勘違いよ。赤石君はやっぱり使えなかったわ』

どうも、後半の部分は櫛田の端末の近くにいる人たちに対して言ったようだ。あとこっちの質問には答える気が無いとか堀北は流石すぎる。高円寺と並び非コミュの双璧は2人の永久称号だろう。

『えつと、そのごめんね赤石君。もう大丈夫。突然連絡して本当にごめんね。みんなちよつと焦ってて』

なんとか櫛田が端末を取り返したようだ。別にいいけど、もうどんな事があったても連絡してきちゃ駄目だよ。

「あ、いえ、大丈夫です。だいぶお忙しいようですね」

『うん。ちよつと揉めててね。堀北さんの質問に答えてくれてありがとう。赤石君。また明日、学校で』

「ええ、また明日」

そう言って電話を切った。一体、何やってるんだ櫛田たちは……？

カメラ、貼り紙、電話

櫛田による同調圧力事件および、不在着信事件の次の日の朝、昨日の夜に忙しく行えなかった龍園・坂柳・平田の通信内容を軽く確認する。

龍園は計画が順調に推移していることから満足しているかと思いきや、決して油断しないように配下たちに命令していた。やっぱり、本質的にはかなり慎重な人なのかもしれない。まったく見た目と合わないが……

坂柳の方はあまり変化はない。幸いな事に封鎖線の事はあまり会話になっていないようだ。まあ、大したことでもないか。坂柳は橋本に配下を増やすように指令を出しつつ、他のメンバーにも偶に連絡を入れていただけだ。

坂柳は龍園とは違い配下を気にかけているというよりは、様子を見ているといった感じだ。あえて例外を挙げると、神室との通信は少しお遊びがあるように感じた。信頼している部下ということだろうか？

個人的には龍園の方が配下の心を掴んでいるように思える。この辺りは、見た目的に美少女の坂柳に軍配が上がるかと思っていたので意外な点だ。

最後に平田だが……あまり目新しい情報は無かった。これは平田用のシステムがちよつと弱いためメールと一部のメッセージアプリ以外の傍受ができていないからという技術的な理由もある。あるのだが、想像より通信量が少ない気がする。

具体的に言うと、通信の中身はちよつとした小話程度で、重要な情報はあまり流れていない。これでは普段の俺との会話の方がまだ重要な事を言っている。平田にとつての参謀候補は俺と櫛田しかない。その上、櫛田は思った以上に平田とは親しくはない。そして俺は意欲と能力が欠けている。

つまり平田にとつての参謀などいないに等しかったのだ……監視カメラで見たAクラスの葛城もこんな感じだった。いや、まあ、あち

らはDクラスよりも平均してレベルが高いのだが……1人の長が全部やっているとこの点は近い気がする。

通信傍受の結果をまとめた後、日課となっている椎名のメールを適当に処理し、井の頭からのメールを見つけた。何だろうか？

タイトルは『昨日はごめんね』となっていた。本文の方は『あと、櫛田さんと王さんが赤石君を買い物に巻き込もうとしてるよ。気をつけてね』と書いてあった。ちなみに謝罪の理由は書いていなかった。ふむ？昨日、山菜定食でキラークラスを投げた件だろうか？うむ、よいぞ、友よ。許す。でも次はちゃんと櫛田に中指を立てて拒否するのじゃぞ。

しかし流石は井の頭だ。なんとも恐ろしい情報を教えてくれた。あの2人は中間試験以降何かと絡んでくる。今回は……きつと俺を財布のように使う気だろう……若しくはショッピング会話の生贄か……どちらにしろ断った方がいいだろう。あ、でも櫛田に媚を売るには受けた方が良いのか……？うーん、どうしたものか。

一応、井の頭に返信をしたところ、日曜日は王が忙しいので恐らく土曜日に買い物に行くと言う事が分かった。ふむ、この路線で行くか。

登校後、教室に入る前に櫛田に捕まった。教室前の廊下ですつと準備していたようだ。

「赤石君。おはよー」

いつもの清く明るい櫛田だ。ちらりと周囲を見ると王も堀北もいなかった。やはりあの2人がいないと櫛田は安定している気がする。いや、まあ、不安定櫛田はまだ2回しか見てないから、法則性が正しい根拠などないのだが。

「おはようございます。櫛田さん」

適当に挨拶をして、さりげなく教室を目指す。しかし、素早く腕を

掴まれた。やめろ。

「赤石君。実は今度の休日、みーちゃんと心ちゃんとシヨツピングに行こうって話になったんだけど。男の子の意見も聞きたいから……赤石君も一緒に行かない？」

やだ。

「楽しそうでいいですね。……ただ、休日ですか。すみません実は土曜日は先約があるので、俺が参加できるのは日曜日になると思います。が、どうでしょうか？」

井の頭ナイスじゃ。これで榎田はきつと「そっかー、日曜日はみーちゃんが忙しいから、無理そうだねー」となるはずだ。完璧だ。しかし、榎田は何故か笑顔で俺の提案に答えた。

「うん！良かった。実は私たちも土曜日は忙しいから、日曜日にしようと思ってたんだー。じゃあ、赤石君、日曜日の10時に集合でいいかな？」

よくないよ。というより、待って、え、何で？もしかして井の頭が俺を売った……？いや、そんなはずが……なぜだ……

「ええ、大丈夫です、はい」

まさかの展開だ。いや、まあ榎田に媚を売ったと考えれば……ありか……？まあ、榎田もクラスメイトを財布扱いはしないでしょ。うん。というより、俺は軽井沢が榎田にポイントを借りているのを見た事がある。たぶん榎田は奢らせたりはしないだろう。問題は王だが……あいつはドヤ顔させてれば満足するだろう。よし、頑張つてドヤ顔に耐える練習をしておこう。

——この展開が思わぬ事態を招くのだが……それは明日の夜になるまで分からない事であった。

午前の授業を消化してお昼休みとなる。これまでの事態から教室で留まるのは危険だと予想される。よって、俺は授業終了と共に素早

く離脱し、校内の休憩スポットへと向かう。中庭ほど広くは無いが飲食が許されているエリアが校内にはいくつ也存在する。そこで昼飯を食べるとというのが新たな生存戦略だ。

スタスタと歩いていき、休憩スポットに到着する。ここはかなり穴場のスポットのようで、上級生と思われる生徒が1人いる程度であった。まあ、監視カメラで前もって人がいないエリアを調べただけなんだけどね……

上級生を避けるように適当な所に座る。そして、家で作ってきたおにぎりを頬張る。うむ。静かで良い空間だ。ここを新たな安住の地と定めよう。今まで、永住の地は椎名・佐倉・櫛田・王といった数々の侵略者たちにより灰燼と化してしまった。ここだけでも平和であつてほしいものだ。

ここにいた上級生も俺の事を一度は視界に収めたが、それ以降気にしている所作は見えなかった。うん。風流を分かっている人だ。きっと静かで穏やかな人なのだろう。声はかけたりはしないが、気が合うだろうな。そうやって、2人で安住の時間を過ごしていく。うーむ、良い日だ。

そんなことを考えていたのだが……軽薄そうな男の声が響いたとき、俺は、まただよ、と思った。

「あれ、石倉先輩じゃないですか。こんな所で何をやってるんですか？」
「どうやら、誰かがここにいた俺の相棒、じゃなくて上級生に声をかけたようだ。声は比較的大きく、おにぎりを食べることに集中している俺の鼓膜まで響いてくる。うるさいぞ、平穩の地で大きな声を出すんじゃないパツキン。」

「……南雲か」

石倉は詰まらなそうに答えた。

「どうも、お久しぶりです。最近はどうですか」

丁寧な口調だが、なんだか、変な感じだ。

「さっきまでは普通だった。お前が来てから不調だな。だから早くクラスに戻れ」

ん……なんか、この石倉先輩にシンパシーを感じる。なぜだろう。

「はは、厳しいですね。俺は先輩とまた会えて嬉しいですよ」

媚びた笑みというよりも、挑発するようなニヤニヤとした笑い方だ。やはり、この南雲は丁寧な喋り方だが、根本的に人を舐めてる気がする。

「心にもない事は言わない方がいい。……で、何か用か？」

「いえ、偶々見かけたので、ご挨拶に、と思いましたが」

そう言つて南雲と呼ばれた男は軽く頭を下げた。なぜだか、その仕事は敬意よりも悪意を感じた。なんだろうか？あえて言うとな龍園に似ているが、それとも少し、いや根本的に違う気がする……なんとも変わった人だ。どこかで見た気がするのだが思い出せない。たぶん1年生ではない。おそらく、この南雲も上級生なのだろう。ということとは南雲が2年で、石倉が3年か？

「そうか、じゃあな」

そう言つて石倉は会話を終わらせようとした。うん。俺のリスぺクトする先輩に石倉先輩を入れよう。しかし南雲はさらに食いついた。

「いえ、それとあと一つ、堀——」

「待て、その話は今はいい」

石倉は南雲が何か話そうとするのを途中で抑えた。なぜかこちらの方に2つの視線を感じた。ふむ。あとで監視カメラチェックじゃ。あと石倉と南雲も調べとこーつと。

話を遮られた南雲は最後に石倉に挨拶すると去っていた。石倉も南雲が去るところを一度鋭く睨み去っていった。ちなみに俺は石倉が睨んできた時も呑気におにぎりを食べていた。俺の知らない揉め事は俺の知らない所でやってくれと言いたい。

教室に戻り、午後の授業を受けた。そして放課後となったところで事件が発生した。

——櫛田が佐倉のカメラを破壊したのだ。

よく見ていなかったため状況は分かりにくかったが、なんか周囲の状況を見ると櫛田が佐倉に声をかけて、佐倉が逃げ出して、本堂と衝突して、カメラが壊れたらしい。櫛田がやったか微妙な所だが、近くにいた綾小路が櫛田と佐倉をじつと見ていた。綾小路の謎の策略か？綾小路が佐倉のカメラを破壊したくなつて櫛田を使つた……とか？いや、佐倉のカメラを破壊したいという前提が色々成り立っていない気がする。

しばらく3人の動きを目で追っていたが、なんか今度は須藤が少し不機嫌そうなオーラを出して、高円寺が唐突に須藤に語り出した。あ、これ、危険な流れだと思い、俺は素早く教室を離脱した。俺が離脱した後、現場はどうなったか分からない。けど、須藤と高円寺のガチムチ殴り合いが発生してそんな気がする。

そんなこんなで事件に事件が重なりそんなDクラスから逃げ出し、真の安寧の地である寮の自室に戻る。

そして、お昼に出会った2人について調べる。まずは休憩スポットを捉えていたカメラにハッキングして様子を見る。どうやら、予想通り南雲と石倉は俺を見ていたみたいだ。ただ、俺個人を見ているというよりも部外者を見ているといった感じだ。現に、南雲が現れるまで石倉は俺の事を意識しているような素振りには監視カメラからは確認されなかった。

せつつかくなので、昨日から今日にかけて考えた、新型の個人追跡システムを使う。これは従来の画像認証に頼らない画期的なタイプだ。……というより、昨日人工衛星にアクセスして思ったのだ。GPS追尾した方が、画像認証より楽じゃん、と。俺はどうやらかなりアホだったようだ。あんな重い機能を作らなくても個人の端末を追えばいいじゃないか……いや、まあ、端末を携帯していない相手には画像認証が有用だし、人工衛星アクセスは少しコツがいるから無意味では無かったのだが……一応、一般生徒向けに番号の知っている相手の現在位置を知る機能もあるのだが、あれはサーバーに履歴が残りやすいので使いたくない。

まあ、いいや。とにかく追跡システムで2人の、正確には2人の端末の移動の履歴を追っていく。あ！石倉、お前、GPSをOFFにしてるじゃねーか。仕方ないので石倉は従来の画像認証を使用し居場所を追尾する。やはり画像認証システムは重要だったようだ。

2人のこれまでの行動履歴を見ての予想だが……どうやら、2人は何か怪しい事をする仲間のようだ。公的な場所では滅多に会わないが、人が少ない場所では何度か会い、そして数分程度何かの密談をしているようだ。また、南雲に関しては、現生徒会副会長のようだ。どっかで見たと思ったら生徒会だったか。あれは堀北兄が目立ちすぎてて他を覚えられないのだ。石倉の方は3年Bクラス在席のようだ。うーん、ちよつと陰謀の香りがするが、あんまり興味がない。というより俺は無人島試験で忙しいから、この人たちに関しては適当でいいや。

一応、陰謀の相談をしていると思われるタイミングでカメラの録音データにギリギリ引っかけたものをコピーしておく。2人ともカメラの向きは気にしているようだが、集音半径についての勉強は少しだけ甘かったようだ。まあ、俺が作った専用のソフトを通さないとあそこまで音を聞き分けられないから本来は2人の行動は間違っていないのだが……

最後に南雲の方の端末にはおまけとして、スパイウェアを入れることにする。隠密性重視の実験的なもので、初投入だ。まあ、別にたいして重要な事ではないので練習程度のもりだ。色々不備もあると思うので、南雲相手に使って、不備を直したら、坂柳や龍園といった面々に使っていきたいところだ。

ちなみに最大の不備は感染方法だ。現在の方法では個人の端末に直接感染させるのは少し面倒くさい。いつそのこと、学内のポイント供給装置を感染させて学内の生徒全員にスパイウェアを散布するか……？いや、さすがに学内のシステムそのものにスパイウェアを発覚せずに仕込むのは骨が折れそうな気がする。それにまだこのスパイウェアは未完成だ。とりあえず、今は対個人用の新兵器として考えて

おこう。

監視カメラを使い現在の南雲の動向を追う。——いた！ちようど喫茶店で女子生徒と談笑しているところだ。うん、結構良いタイミングだ。

ハッキングを敢行して、喫茶店の会計システムにアクセスする。各レジに干渉を行い、いつでも単発式のスパイウェアを放てるようにする。これで準備は整った。後は南雲がレジで会計を行うときに学生証端末にスパイウェアを送るだけだ。……南雲が女子生徒に奢って貰ったらどうしようと思っただが、南雲は腐っても生徒会副会長だ。まさかヒモではあるまい。

……それから数十分後。いや、長いよ。お前らいつまでイチャイチャ雑談してるんだよ。見てるこっちが退屈だ。自動化システムがほしいな。……画像認識を使って南雲がレジ前に来たら通知音でも出す方が良かったか。そう考えているようやく南雲と女子生徒が立ち上がり会計へと向かった。

南雲！ここまで俺を待たせたのだから、絶対にお前が払えよ。……俺の祈りはなんとか通じ、南雲が会計を払った。払う瞬間、レジからスパイウェアを流し、無事ウイルスは南雲の端末へと潜んだ。ふー、ようやく終わった。なかなか面倒であった。うーん、監視カメラを見ながら手作業でやるのは面倒だな。なんとか短縮化できないだろうか……理想はこちらがクリックしたら相手の端末が爆発するぐらい単純だといひ。ただし、俺がやったことがバレない前提だ。つまり隠密重視だ。うーん。なんか閃きそうなんだが……

その日は新しい対個人用の情報入手方法について悩みながら眠りについた。

翌日の金曜日は平穏な日であった。これまでの混沌とした4日間が嘘のようである。この日は朝も昼も夕方も事件なく終えることが

できた。あえて問題点を挙げるとすると2つの不思議な出来事を見た程度だ。

1つ目は朝から綾小路が一之瀬とイチヤイチャしながら登校してきた点だ。流石は綾小路だ。手が速い。堀北に櫛田に一之瀬と見事に学年の美少女を狙い撃ちだ。

2つ目は放課後、下駄箱の近くの掲示板に神崎とBクラスの何人かが工作を行っていた点だ。

気になったので神崎達が去った後、掲示板の中身を1つずつ自然な動作で覗き見ていく。適当に部活動の紹介文などを流し読みした後、本命の神崎達が貼ったと思われる貼り紙を見た。どうも須藤事件についての情報提供を呼び掛けている。また情報提供料も払うとあった。

はて？なぜBクラスの神崎達がこんな事をやっているのだろうか……？

寮に戻った後、怪しい神崎達を調べるためBクラスの監視カメラの精査を行った。最近は忙しくてあまり一之瀬と葛城へのチェックを行っていないかった。

Bクラスは明け透けなクラスであるため、調べた所、すぐに事情が判明した。午前のホームルーム前に一之瀬がDクラスへの協力を呼び掛けていた。一之瀬が言うには昨日（木曜日）の放課後に堀北と綾小路と遭遇したらしい。そして、一之瀬は2人に協力したい事、学校側が想定していない不正な行為を見逃せない事、もし協力してもいいと思う人がいたら協力してほしいという事を伝えた。一之瀬のスピーチは皆拍手をもって迎えた。

ちよつと、いや、かなり龍園に似ていると思ってしまった。見た目や雰囲気、喋り方は全然違うのだが、根本的に龍園と一之瀬は似ているような気がした。全然似てないけど。でも似ているように感じた。

一方、龍園と違い強制力が無い為か、協力者はそこそこといったところだ。Bクラスのメンバーは一之瀬は好きだけどDクラスに対して頑張るのは違うといった感じだ。意外だったのは協調性Dと散々

な事を書かれ続けている神崎が積極的に参加した点だ。もうこいつ協調性Bでいいよ。普通のスペックが高いよ。平田級だよ。

そして最後に、素晴らしい事に一之瀬の方はネットワーク上の掲示板を使って情報を集めていた。匿名可かつ報酬有りという信じられない程豪華な宣伝だ。櫛田から資金回収をしようと思っていたが、一之瀬でも良さそうだ……後日、彼女に暴力事件のデータを送っておこう。

Bクラスへの諜報活動を終えた後、無人島試験用の3Dマップを改良していると、櫛田からメールが届いた。なんだ？今度は誰と仲が良いと勘違いしたんだ、と思い見ると……なんか、日曜日に買い物に行けなくなつたというメールだ。どうやら、佐倉と綾小路と一緒にカメラを修理するらしい。なるほど、綾小路の両手に花作戦だな。キャットファイアのピンチをハーレムのチャンスに持っていくとは、なんとも凄まじい男のようだ。でもナイスだ。これで櫛田との約束はチャラだ。

そう思っていたが、なぜか櫛田からの文はまだ続いていた。スクロールさせていくと……何を思ったのか櫛田から王は任せた（意訳）という怪文が添えられていた。ちなみに井の頭も忙しくていけないという情報が添えられていた。いやいや、井の頭の事前予想と真逆の展開になってるんだが……

困ったので、井の頭に電話する。友よ。ちょっと疑ってるぞ。

『もしもし、赤石君？』

「友よ、裏切りじゃぞ」

『じゃぞ……うっ…』

じゃぞは駄目か……

「井の頭さん、なんか、櫛田さんから王さんと2人で買い物に行くように指令が来たんだけど……なんでこうなってるの？」

仕方ないので普通に聞く。

『じゃぞ………うっ…』

じゃぞは井の頭的には許されないようだ。次は気をつけよう。

「いや、それは忘れて」

『うーん、なんか昼休みと放課後に色々あつてね。まず昼休みに榊田さんが王さんを説得して無理やり日曜日に都合を合わせたみたい。それから放課後に佐倉さんのカメラが壊れちゃって、榊田さんが行けなくなつたから、中止つて話になつただけ……王さんと2人で行くの？それは私も聞いてない』

榊田の奴が謎の陰謀を仕掛けてきたようだ。やっぱり榊田もよく分らん奴だ。Dクラスは綾小路といい榊田といい変な奴が多すぎるだろ。

「それ本当？というより、なんか王さんが日曜日行けないって聞いて日曜日に暇アピールしたんだけど、なんで榊田さんは日曜日にしたの……？」

『榊田さんは赤石君が参加したくなさそうにしてるのに気づいてるみたいだから、赤石君の予定に合わせたんだと思うよ。それより本当に王さんと2人で行くの？』

井の頭は少し不満そうだ。まあ、井の頭からすると榊田に嘘を吐かれたことになる。榊田を肉盾としている井の頭としては信頼されてない事は不安であり、不満だろう。俺も同じ立場なら、おいー平田ー、つてなる。

「行きたくない」

正直に告白する。

『……行くの？』

行きたくない。

「す、すっぱかしたら怒るかな……？」

『誰が？』

「榊田さん」

それ以外ないよ。

『その答え方の時点できつと王さんは怒るよ。あと榊田さんは結構、約束事を大事にするタイプだと思うから怒ると思うよ』

王は怒るかなー？あ、でもアイツ中間試験の打ち上げの時も睨んできたからな……あと榊田も普通に怒るのか。やだなー。

「ぐぬぬ、行きたくない。というよりなんで井の頭さんには中止って伝えたの？もしかして、俺と井の頭さんが繋がってるってバレてる？」

結構重要な点だ。バレてないと思ったが、俺の仕草が駄目だったかも。ごめん。

『それはないと思うよ。……櫛田さんは、——ううん。やっぱりいいや』

良かったセーフだ。でもなんか言い淀むと気になるんだけど……

「待って、待って、それすごく気になるやつ。教えて教えて」

『いいけど……たぶん、王さんと赤石君を2人きりにしかつたんだと思うよ』

櫛田はただの鬼畜だった……？

「櫛田さんの新手の嫌がらせ？」

『そういうわけじゃないと思うけど……』

自覚が無いという事はナチュラル畜生か……まあ櫛田の人格論議は置いて、話を進めよう。

「でも、井の頭さんだって王さんと2人きりなんて嫌でしょ」

『……確かに、……私も一緒に行こうか？』

来て！

「来て、来て。一緒に王のドヤ顔への怒りを分かち合って」

『あ、私はあの顔そんなに嫌いじゃないけど……』

……なん、だと

それから、軽く小話を挟み、井の頭との通信は終わった。この後、井の頭が王に電話をして、上手くやっておいてくれるらしい。うむ、井の頭も来てくれるなら、結果として考えると悪くない買い物時間になりそうだ。

買い物と口笛

土曜日。

無人島試験と船上試験について考察を行っていた時に、俺はある大発明の着想を得た。試作品を作り終えて思った。これはすごいんじゃないか、と。

そうして試作品の改良をしていたら1日が終わった。

気づいたら日曜日になった。

日曜日の10時、15分前。王と井の頭と待ち合わせ場所に向かっている途中、スパムメールが送られてきたが、無視しておいた。

俺は個人情報漏洩している事に恐怖しながらも集合地点にたどり着いた。時刻は9時55分であった。もう2人ともいた。気が早いよ。

「おはようございます。遅れてしまってすみません」

適当に謝っておく。

「おはようございます。赤石君。今日はよろしくお願いします」

井の頭は丁寧に戻したが、王はドヤ顔で返してきた。いや、別に俺は5分前に来てるから。遅れてないから。

「あの、あ、赤石君。遅刻だね」

だから遅れてないって言ってるだろ。いや、言っただけだと思ってるだろ。察しろよ。

「ええっと、その、すみません。王さん」

「いいよ、許すよ……あとメールは見た？」

許すなら、なんで遅刻を強調してきた……？あと、スパムメールなら見てないよ。というよりお前は何で俺のメアド知ってるんだよ。

「王さん、メールとは？」

「あのね、桔梗ちゃんに頼んで赤石君のアドレスを教えて貰ったんだけど、届いてない？」

戦犯櫛田。俺のアドレスを勝手に教えるんじゃない。

「ああ！なるほど。それは良かったです。櫛田さんのアドレスしか

持ってなかったもので、今日上手く待ち合わせできなかったらどうしようかと思っていたので……ええっと、45分に送られたメールが王さんのアドレスで合ってますか？」

「うん、合ってるよ」

一応、王に端末を見せておく。ちなみにメールの内容は待ち合わせ場所に着いている事は書いてあるが、差出人の名前が書いていないので、サーバーの名簿データを持っている俺でなかったら誰から来たか分からなかったと思う。まあ、状況から考えると王か井の頭の2択で、井の頭のアドレスを持つてるから王1択ではあるが……

「メールありがとうございます。そういえば今日はどのあたりに向かうんですか？何か買いたい物があるみたいですが……」

何を買う気だ……ラーメンの素とかだろうか？

俺の質問に対して、王が少し慌てながら答えてきた。今の質問に慌てる要素ある？

「ふ、ふ、ふ……こ、心ちゃん」

王は何かを言いかけると井の頭の方に向かい、何かを小声で相談し始めた。帰っていい？

井の頭は近寄ってきた王に対して迷惑そうにしながらも何かを指摘していた。指摘を受ける度に王の顔色が赤くなったり青くなったりしていた。

しばらく雑技を眺めていると、相談は終わったようで、王がおおずおおとこちらに近づいてきた。

「あの、赤石君。今日は参考書探したり、心ちゃんの裁縫道具を見たり、あとアクセサリーとか見たり……したい、な」

上目遣いで見てきた。それは名前を言っただけじゃない本人の技だから、やめろ。いや、まあ、王は身長がかなり小さいから上目遣いになるのは仕方ない事なのだが……ふむ、それにしても参考書か。やっぱり何というか王は結構勉強熱心だな。

あと井の頭は裁縫道具が見たいのか……もう充足していると思っただが……いや、俺もたまにパソコンや部品を見たくなるから、きつと周りからは十分に見えても本人には十分ではないのだろう。

「……わかりました。何から回っていきますか？」

「う、うん。さ、参考書かな」

いきなり実用的な所にいったな……

俺が反応に困っていると、王は少し顔を赤らめながら、こちらに体を寄せてきた。やめろ。近い。

「赤石君は行きたいお店とかあるの？」

参考書で行きたいお店って何だよ。それに、俺はそんなに参考書が好きではない。勉強会のは井の頭の為に作っただけだ。

「特には。王さんは、どんな参考書を求めているんですか？」

難しい問題が書いてある感じのやつだろうか。それとも期末試験で出そうなところだろうか。

「う、うん？……私は、数学の参考書にしようと思ってるけど……赤石君の方が詳しいから、教えて欲しいな」

……いや、ごめん。まったく想定外の事態だから何が王に向いてるか分からない。たぶん勉強会の時のような事をやれと言ってるんだろうが……今は無理だ。

「えーっと、とりあえず本屋さんに行ってみますか？」

問題を先送りにしよう。そして、どさくさに紛れて話題を変えよう。

「そ、そうだね」

王が同意の言葉を出した後、井の頭も軽く頷き、モール内にある書店へと足を運んだ。

日曜日だが、時間がまだ早かったためか、それとも書店に来る生徒が少ない為か、人は少なかつた。なんとなく後ろを向くと、王がこそこそと井の頭に話しかけていた。井の頭が何度か頷くと、王がこちらに忍び寄ってきた。いや、勝手に人のパーソナルスペースに入らんじやない。

「赤石君。あの、参考書はあっち」

そう言つて参考書があるコーナーを指差した。いや、さつき館内案内図を見たから知つてるけど……

「あ、はい」

王に導かれるように参考書のコーナーへと来た。さて、どうやって言いくるめるか。適当にそれっぽい事言つて問題集薦めるか？王はかなり勉強ができる、というより多分カンニングをしている俺よりできると思ふので、適当な問題集でもやれば成果はでるだろう。

勿論、あんまりにも酷い問題集を薦めると駄目だが、さすがに、余程酷い物ならわかる。……まあ、それは王もわかると思うけど。

俺が対王戦術を考えていると、袖を引つ張られた。見ると、王が分厚い英語の演習書のようなものを持つていた。さらに俺が演習書を視界に収めたのを確認すると王はページをめくつていき、Dクラスでは到底解けそうもない問題を見せつけてきた。

「赤石君。この問題解ける？」

若干ニヤニヤしながら聞いてきた。英語でマウント取ろうとするのはやめろ。

「いや、ちよつと難しいと思います」

俺が答えると、王は渾身のドヤ顔を見せつけてきた。やめろ。というより、今日半日コイツのこの顔を見ながら過ごすのか……耐えられそうにないんだけど。

「そ、そっか、ふーん。そうなんだー」

おい、おい、おい。マジでその顔止めろ。あと煽ってくるな。というより、お前は解けるのか。ああ、いや駄目だ。きつと解けるのだろう。聞いたら、コイツは調子に乗つてさらなるドヤ顔からのマウントコンボを決めてくる。佐倉二世め……

「教えて上げるね。赤石君、これはまず……」

俺が王に煽りに黙っていると、何を勘違いしたのか、解き方の解説を行い始めた。あの、ここ書店なんで。迷惑行為になるから止めてください。あと、そのドヤ顔も迷惑行為になるから止めてください。

「あの、王さん。書店で解説を始めるのは、ちよつと気まずいので、……」

俺が苦言を呈すと、王は顔を少し赤くした。人が周りにいなかったとはいえ、流石に恥ずかしかつたようだ。当たり前だ。もう王はDクラスの恥部と言っても過言ではない。須藤二世め……

「あ、あの、これ買います」

いや、それ結構高そうだぞ。それと、俺はその演習書を解いたりしないからな。

「それ結構ポイントすると思いますが……大丈夫ですか？」

「えー……うーん、でもこれで一緒に勉強できるなら……」

残念ながら勉強できません。あと、どれを買っても今後は王とは勉強しない予定です。

「そうですね……すみませんが、多分その問題はAクラスの人でも一部を除いて解けないレベルだと思いますよ……俺もまったく解ける自信が無いです」

正直な話だ。これはたぶん平田クラスでも解けないと思われる。Dクラスだと堀北と幸村がなんとか解けるか、解けないかといったところだと思う。高円寺と綾小路は知らん。

「そ、そうかな？……でも、それなら尚更、赤石君が解けるようになれば……Aクラスに近づけるかもしれないよ」

いや、ポイント争奪戦に個人の学力はあんまり関係ないんじゃない？まあ、出来ればいいと思うけど……このレベルの問題になると、かける時間に対してのポイントの回収能力を考えると微妙じゃないだろうか。勿論、英語の能力が上がることは良い事だとは思う。普通の学校であれば間違いなく良い事だ。けれど、この歪な学校とは相性が悪い勉強法のように感じてしまう。

——たぶん、王は根本的な部分で真面目なのだろう。佐倉と一緒に。俺はそこまで真面目じゃない。自分がそんなに頑張れるとは思えない。

ドヤ顔を抜きにしても、いやドヤ顔は抜きにはできないけれども、この太い演習書をやろうという気にはなれない。綾小路や龍園、坂柳はこんな時、なんて答えるんだろうか？

「その、王さんの気持ちはありがたいのですが、他の教科との兼ね合い

もありますし、英語だけを重点的にやるわけにはいきません」

結局、自分は適当に答える事しかできない。『なんとなく』で喋る事が癖になってるのだろう。

「う、うん……」

そう言うと、王はしょんぼりとしながら演習書を元の位置に戻した。なんか罪悪感がヤバイ。凄く気まずい。悪い事をした気分だ。やめろ。ドヤ顔していいから、いや、やっぱり駄目。ドヤ顔はしっちゃ駄目。でも、そんなに落ち込むのも駄目。

なんとなく、どんよりとした空気になっていっていると、肩をトントンと叩かれた。井の頭が小さな問題集を抱えている。教科は数学のようだ。

「……あの、赤石君。……この問題集にある問題はもしかして前、赤石君が作ったテストの、問題ですか……？」

ふむ。井の頭が指したページを見る。……どうだったかな。たぶんそんな気がするが、自信はない。もう2月くらい前の事だ。でも問題集の出版を見た感じ、俺が取り扱ったビツクデータに関係している気がする。おそらくそうなのだろう。

俺が問題集を眺めていると、王が横から覗き込んできた。王は背が低いから小回りが利くな……

「あ、うん。たぶんそうだよ。心ちゃん、よくわかったね……この問題を間違えちゃったんだよね。市橋さんだけ正解したんだよね。あの時は……」

王は先程までの、どんよりムードは無くなっている。そして唐突に自分語りを始めおった。心配して損したわ！

井の頭は俺と王を視界に収めると、くすりと穏やかに笑っていた。どうも気を遣わせてしまったようだ。

その後、資料集や参考書など学術的な物を一通り漁った後、王が井の頭が持ってきた小さな数学の問題集を買うことになった。どうも

間違えた例の問題に復讐を果たしたいらしい。復習じゃないの？とは突っ込まないでおいた。目が少し本気に見えたからだ。君子危うきに近寄らず、というやつだ。

学術系を終わった後、井の頭が裁縫系の本を読みたいと言ったので、3人で裁縫本や雑誌を見て回った。残念ながら井の頭の満足するような本は無かったようで、こちらのコーナーではポイントを使用しなかった。

裁縫系を回った後は、王がお腹を鳴らしたため昼食を取ることとした。少し早いですが、日曜日は混雑が予想されるため、丁度いいかもしれない。

お昼をどこにしようか3人で考えていると不意に井の頭が、俺の袖を引っ張った。なんじゃ？

「あの、……赤石君。……桔梗ちゃんがあそこにいませんか？」

井の頭がデッキの下にいる人達の中から小さな集団を指差した。目を凝らしてみると人が3人並んで歩いていたが……うーん、遠すぎて分からない。あの距離となると個人を識別するのは困難な気がする。こちらの方が高い位置にいるから3人組だと分かるが、同じ高さだったら人数の特定すら難しい距離だ。一応、3人組は家電量販店の方に向かっていているように見える。というより、なんか1人だけすごい重装備だ。この距離からでも分かるぞ。今7月だぞ。なんであんな厚着なんだ……

確か、櫛田は佐倉と綾小路と一緒に行動しているはずだ。原因は櫛田の器物損壊だ。そして目的はカメラの修理。うん。条件は合ってる。

「なんか、1人だけすごい重装備に見えますが……」

「……たぶん佐倉さんだと思います。残りの2人は桔梗ちゃんと綾小路君なので……」

目良すぎじゃない？そんなに仲が良くない綾小路まで識別できるとは……

「井の頭さんって目が良いんですね。視力はいくつ位ですか？」

「両方とも2. 0です。…………でもそれ以上は測ってないので……もしかしたらもう少し上かもしかれません」

マジかよ。普通にすごい。この情報化社会でよく2. 0なんて保てるな……友よ、流石じゃ。」

「心ちゃんって目が良いんだね。赤石君は視力はいくつぐらい?」

なんかマウン트의予感……

「両方とも普通です。0. 8くらいだったと思います」

昔は1. 2くらいだったのだが、この1年くらい、パソコンに触りすぎた。あ、これフラグだ。

「私は1. 0だよ」

はいはい、知ってた。そして当然の如く、ドヤ顔だ。なんか最近、コイツ強気すぎない? 初対面の時はもう少し弱気だったと思うんだが……

まあ、話しているうちに推定綾小路チームも家電量販店に入ってしまった。このあたりで話を打ち切ろう。

「そうですか……お二人とも目が良いですね。人も多くなってきましたし、そろそろ食べる所を決めた方がいいかもしれませんね」

3人ともポイントはそこそこだが、あまり無駄に使うというタイプではない。ちなみに俺が約5万5千、井の頭も同じくらい、王は1万くらいらしい。あ、王が思ったより無かった。まあ、王は野菜でない料理でかつ伸びない料理なら何でも良いような気がするが。

「えっと、私はあんまり苦手なものは無いけど、……美雨ちゃんはどう?」

井の頭が王に質問した。王もきつと伸びない料理なら何でもいいと思うよ。

「さっき、学生御用達のラーメン屋さんがあったから……そこにしようよ。……ポイントも安いし」

いや、お前ラーメンは鬼門だろう。何考えてんだ。

「……………」

珍しく井の頭が無言だ。反応に困っている。俺も困っている。何て突っ込めばいいんだ?

「えつと、いいよね……?」

おい、同調圧力の櫛田の物真似はやめろ。あと、この無言は反応に困っているのであって、反対意見が無いわけではないから。いや、まあ、俺も井の頭もラーメンは食べれるし、ポイントが少なめなら別に問題は無いのだが、無いのだが、どう考えてもお前が一番問題があるだろう。なんでラーメンなんだよ。この前、結構残しただろう。

「う、うん。いいよ」

井の頭、ツツコミを放棄。もう、いや。どうせ困るのは王だし。「えつと、俺も大丈夫ですよ」

俺と井の頭の回答を聞いた王は満足気に頷いた。王がラーメンを残す方に100ジンバブエドル賭ける。あ、いや、駄目だ。みんな残す方に賭けるから賭け事にならないや……

ラーメン店に突入する。王曰く普段は人気の店らしいが、まだ時間が早いため人は少なかった。王はもしかして常連なのだろうか……?だとしたら逆に怖い。

3人でラーメンを頼んでいく。井の頭は安めの野菜ラーメン。俺は普通の塩ラーメン。王はチャーシューが沢山入った豚骨ラーメンだ。1人だけ本気度が違う。あと、王は麺を硬めにするように頼んでいた。なるほど、その手があったか。

少しだけ感心していると、注文を終えた王がこつちをドヤ顔で見してきた。いや、その『作戦成功!』みたいな顔やめろ。別に凄くないから。普通の人は大体伸び切る前に食べきるから。

ラーメンが出来上がるのを待っていると、王が仕掛けてきた。まただよ。

「赤石君、これ、解ける?」

そう言つて、王はバックからノートを取り出して見せつけてきた。当然英語の問題だ。王が考えてきたようだ。ちなみに文法の6択問題なのだが……いや、これ分からね。1と4は違う。2と6も多分違う。3かな?」

「3番ですか……?」

俺の回答を聞くと、王が今日一日で最大級のドヤ顔を放ってきた。中間試験の打ち上げ時レベルだ。やばい、ちよつと頭にきた。

「はずれ……1番だよ」

え。マジで？1と4は絶対違うと………あ！この野郎！ひっかけ問題作りやがったな！なんて狡い問題を！というか、こんな問題、普通に出題されないぞ……よく思いついたな。

「なるほど……これは難しいですね。王さんが考えたんですか？」

「うん。赤石君はこれができるようにならないと駄目だと思うから……」

駄目じゃないから。あと、このレベルはたぶん皆ひっかかりません。Dクラスでやったら一部の人たちじゃないと解けないと思うよ。

「あの、私、土曜日は暇になることが多くて……赤石君、一緒に勉強しようよ」

やだ。

「すみません。実は土曜日は忙しくて……」

どちらかという土日曜日の方がメンテナンスを行うので忙しいが、まあ、メンテナンスを土曜日にするのもいいだろう。言い訳を考えながら、言葉が続けていく。

「ただ、王さんにとっては教えるのが上手いと思うので期末試験の勉強会は王さんに教師をやって貰うのがクラスのためになると思いますよ」

王はみんなにドヤ顔を出来て幸せ。皆は英語の成績が上がって幸せ。俺は仕事が無くなって幸せ。皆幸せの夢の計画だ。すばらしい。「え……それは、ちよつと。桔梗ちゃんも無理にしなくていいって言ってたし……」

櫛田の名前を出しチラチラとこちらを伺ってきた。櫛田の名前を出したら俺が怯むとでも思っているのか……？櫛田のことを今度から黄門様と呼んだ方が良い感じ？そうすると、井の頭と王は助さんと角さんだな。ちらりと井の頭を見ると首を横に振っていた。そして口パクで「ちがうよ」と言っていた。

……もしかして心読まれた？……今、すごく詰まらないギャクを思

いついた。心の中に秘めておこう。うん。秘めてないな。

下らない事を考えていると、ラーメンが3つ到着した。よし！戦闘準備じゃ！今度は井の頭にも勝つぞ！

箸とレンゲを使いラーメンを処理していく。王が推すだけあつて結構おいしい。ポイントも悪くなかったし、味に対するコストパフォーマンスは悪く無さそうだ。

「だから、Dクラスの人たちの前ではまだ、教えられない、かな……」
なんか戦闘中に喋っている奴がいたが、井の頭と共にスルーしラーメンを処理していく。伸びたら終わりだ。

「でも、もし、赤石君と勉強会ができたなら、教え方が身について、それで……」

ラーメンを処理する。やはり井の頭は速い。

「そしたら、皆に教えられるかなって思えるから……」

ラーメンを処理する。よし、安全圏に入った。これから先は時間経過による伸びる速さとこちらの処理スピードが逆転する。軽く雑談ぐらいはできるラインだ。ただ井の頭は安全圏に入っても油断はしていない。おそらく前回と同じように、この機に一気にゴールする気だろう。王の方をちらりと見たが、まだ手を付けていなかった。故にもう伸びている。もう手遅れだが……このラーメン屋を紹介してくれた恩くらい返すか……井の頭には勝てそうにないし。

「王さん」

「うん、赤石君」

声をかけると、王はこちらをじつと見つめてきた。

「ラーメン、伸びてますよ」

そう指摘すると、王は一瞬呆けた後、ラーメンを見た。そうして顔を赤くしながらも、ラーメンを黙々と食べ始めた。

結果は井の頭が1位、俺が2位。王は半分食べて、諦めていた。また半泣き状態だ。あー、だからラーメン屋はやめた方がいいと言ったのに。これは自業自得である。

「ぐす、ひどい、……」

確かにひどいくらい伸びている。これは食べれそうにない。

「2人とも……なんで話をちゃんと聞いてくれないの……」

何言ってるんだ……ちゃんと聞いてただろう。井の頭も首を傾げている。いったいなにが……？

「王さん、その、……話とは？」

慎重に聞いてみる。

「……食べるのに夢中で聞いてなかったの？」

もしかして、食べてる時に大事な話してたの？ここラーメン屋だよ。井の頭も目をぱちくりとさせていた。

「ええっと、その、ラーメンが伸びそうでしたので……」

「その、美雨ちゃん。ごめんね……ラーメンが伸びそうで、つい」
許せ。

「……反省してる？」

あんまり。

「う、うん。反省してるよ美雨ちゃん」

井の頭もちよつと嫌そう。今日は帰ったら少しキレ気味に王さんには困ったなーという電話が来ると予想される。

「……赤石君は？」

流れが読めた。だから予め言っておく。やだ。

「……すみません、王さん」

「……なら、勉強会——」

ほら！来た！これを機に英語マウントを掛ける気だ！なんという手段だろうか！悪辣なり！

俺が心の中で王を非難していると、どういう訳か王は言葉に詰まったような顔になった。あれ？もしかして声に出た？いや、井の頭も不思議そうな顔をしている。そうではないようだ。

「……2人とも、私の苗字と名前、言える？」

なんか雲行きが怪しい。これは英語以上に恐ろしい事が起きそうだ。

「王美雨ちゃん」

「王美雨さん」

井の頭と共に緊張しながら名前を告げた。井の頭は俺以上に震えている。これから王がすることが分かるのか？

「あの、私の名前って呼びにくいよ……ね」

確かに王様みたいで言いにくい。ドヤ顔の王とか言ったら一瞬どういう意味か考えてしまう。あ、でもDクラスでドヤ顔の王といったら1人しか該当者はいないから問題ないか。あと王と書いてワンと読むから、話し言葉的にはセーフだ。書き言葉だと混乱するが……

俺が不毛な事を考えていると、井の頭の顔色はだんだん悪くなつていった。……なんだ？井の頭は何かに怯えているようだ。

「あの、だから私の事これから『みーちゃん』って呼んで。気に入ってる渾名だし、桔梗ちゃんや、仲が良い人は皆そう呼んでるから……」

いや、仲良くないけど。というか、なんか渾名ってちよつと嫌だ。井の頭の方を見ると、……すごく嫌そうだ。渾名で呼びたくないようだ。

「あの、美雨ちゃんの名前は可愛いと思うから、私はこのまま美雨ちゃんって呼びたいな……」

井の頭、敵前逃亡。

「うん、……そうかな？……なら、いいよ。赤石君は？」

え、いいのかい！井の頭の方を見ると、とても安心したような顔だ。さつきまでの怯えていた顔が嘘のようだ。そんなに渾名で呼びたくなかったのか……じゃあ、俺も……

「俺も王さんの苗字はとても真面目な感じがして、いいと思いますが……王さんではだめでしょうか？」

いいアイディアが思いつかなかった。

「……『みーちゃん』がいい」

王さんがいい。というより、井の頭が良いのに俺の意見は駄目なのか……

「……………」

渾名で呼びたくないが、言い訳も思いつかなかったため無言になってしまった。

しかし、俺が答えないでいると、王がテーブルに手をついてこちらに少し体を寄せてきた。

「……『みーちゃん』がいい」

やだ。あと、視線の外で井の頭が王の近くにあつた井をてきぱきと移動させていた。

『みーちゃん』がいい」

最初の方は何うように聞いてきたが、だんだんと繰り返すことにはつきりと渾名で呼ぶように迫ってきた。もうかなり距離が近い。井の頭が井を移動させていなかったら、王は井をひっくり返していたな……なんて危ないヤツだ。

「えっと、じゃあみーちゃんって呼ばせてもらいますね」

その代わりもう二度と英語の話には付き合わないからな。

「うん！よろしくね、赤石君」

なんか、すごい笑顔だ。花が咲くような笑顔、みたいな感じだ。さつきまで半泣きだったのに、コイツはコロコロ表情が変わるな……

まあ、いいか。これでラーメンの時の謎談義と英語の話は流れたと考えていいだろう……これから、みーちゃん呼びは少し負担があるが……だが、これでアドバンテージは取った。もう絶対、英語の話には付き合わないからな。あと、出来るだけ王の名前は呼ばないようにしよう。君とかあなたでいいだろう。

各自ポイントを支払いラーメン店を出した後、少し歩いてから井の頭の裁縫道具を見て回るようになった。

お昼の時間が過ぎ、モールの近くも混雑し始めた。生徒が行き交う中、俺と井の頭と王は人混みの間を潜り抜けつつ、目的地へと向かう。途中でちっちゃい王が人混みの中に2回ほど紛れそうになった。1回目はなんとか、俺が高所から見つけ、合流に成功したが、2回目は完全に見失ってしまった。

どうしようかと悩んでいると、背後から笛の音が聞こえた。何かと

思い振り向くと井の頭が口笛を吹いていた。ピー、ピー、とまるで本当の笛のような音だ。そんなこともできたのか……

やはり井の頭は興味のある事は、とことん得意なようだ。半面、興味の無い事は全然できない。勉強や運動が苦手である（勉強は過去形だが）のもその性質が原因だろう。

俺が考えている間もピー、ピー、と器用に口笛を吹いている。本当に上手いな。笛みたいだ。……でも、今、王を探してるんだが……もしかして口笛で王が来てくれることを期待しているのだろうか……5歳児とかならまだしも高校生が口笛に惹かれて来るとは思えないが……いや、来たよ。

あたりを見ると不思議そうな顔をしながらもこちらに近づいてくる王が見えた。俺は口笛に誘われたお前の方が不思議だよ。井の頭は王を視認すると口笛を止めて、いつものおっとり無表情顔に戻った。

合流した王は井の頭を少し見つめた後、唐突に口笛を吹こうとした。え？お前も口笛上手いの？

「ふー、ふー、ふー」

息を吹いているようにしか見えなかった。そのまま見ていると、ずっと息を吹き続けて、だんだんと顔が赤くなっていった。

「えつと、王さん、口笛を吹きたいんですか？」

無理だから止めとけ。

「ふー、ふー、(っ)ほ(っ)ほ、み、みーちゃん、だよ」

息を整えながらも訂正を要求してきた。こいつはこいつで強気な時はとことん強気だ。クラスにいる時は気が弱いのに……

「美雨ちゃん、コツがいるから、……初めてだと難しいと思うよ」

井の頭が王の背中をバシバシと叩きながら指摘した。いや、王は咽てるわけじゃないから背中が叩かなくていいと思うよ……

「う、うん。赤石君は吹ける？」

やったことないから、たぶん無理。

「いえ、やったことがないので、たぶん、できないと思いますよ」「そ、そうなんだ……やってみない？」

やだ。

「いえ、別に口笛が吹けなくても問題はないかと思っただけです……」

一応言っておくけど、この件に関してはお前はどうぞ足掻いてもドヤ顔できないと思うぞ。どんぐりの背比べで終わるぞ。

「ふ、ふーん……赤石君、自信ないの？」

ないよ。というより、俺はさつきできないと思うって言ったよな……。どんだけマウント取りたいんだよ。本気で佐倉を紹介した方がいいかもしれないな。

「赤石君。えっと、私が教えましょうか……？」

なぜか、井の頭が悪乗りした。……もしや王の気を逸らせということか……？ 確かに英語マウントよりは避けやすい……なるほど妙案だ。

「もし、井の頭さんが良ければ教えて貰えると嬉しいです」

俺が答えると井の頭は笑顔で了承し、そして王の方をちらりと見た。

「心ちゃん、私にも教えてほしいな」

よし、王が釣れた！ 井の頭ナイス！ さすがは親友だ！

それから王と一緒に歩きながら、ふーふーふー、と息を吐き続けたが一向に上達しなかった。俺と王はどっちも才能が無かったらしい。裁縫道具を扱っている店に着いた後も王は、ふーふー言っていた。お店の迷惑になるから止めよう。

井の頭は店の内部を素早くチェックしたが、お目当ての物は無かったらしい。どうも井の頭曰く、この店には毎週訪れており、常に新しい物がないかチェックしているらしい。今週の入荷物はあまり良くないようだ。なんか夏物を作りたいと言っていたが、色合いがしっくりこないらしい。

王と俺は井の頭の行動を近くから観察することしかできなかった。

俺は裁縫知識が乏しく、王は口笛の練習をしていたからだ。店内で口笛を吹くな。……いや、まあ、傍から見たら、ただ息を吐いているだけに見えるから問題は無いのかもしれないが……

裁縫店を出た後は本日最後の目標であるアクセサリー店へと向かった。モールの中でも比較的大きな店舗を構えている。中には休日の午後という時間帯もあるせいか、かなりの生徒がいた。そういえば7月のポイントが入って初めての日曜日だ。つまり給料日最初の休日だ。なるほど、今日入店したのは間違いだったか。

ちなみに生徒層としてはやはり女子が多いが、カップルの姿も多い。ちらほらと1人で見ている男子生徒もいる。自分用か、もしくは親しい女性への贈り物か。

王と井の頭は2人とも、ウキウキしながらアクセサリーを見て回っていた。王はなんとなくわかったが、井の頭もこういった物品に興味があるのは意外であった。まあ、女子は皆、こういうの好きだよね……し、じゃなくて名前を言っただけいけない本の人、元祖マウント王の佐倉、あと非コミュの双壁の堀北あたりも、こういったアクセサリーに興味があったりするのだろうか？

堀北はあまり着飾らないイメージが強い。あとの2人は花より襲撃といった感じのタイプだからアクセサリーとは無縁な気がする。

王に引つ張られつつアクセサリーコーナーを回る。そろそろ、袖が伸びそうだな……

「あの、赤石君。これ、どうかな……似合ってる……？」

月みたいなネックレスを王が見せてきた。月マークが王の胸元を揺れている。……似合っているような、似合っていないような。どちらかというとも8000プライベートポイントという値札の方が気になっってしまう。しかし、このネックレスのブランド名はイヤホンの種類みたいだな。

でも、月マークは小柄で勉強熱心な王のイメージとなんか合ってる気がする。

「月の意匠は勉強熱心な、……みーちゃん、には合ってると思います

よ。鎖の部分の色はその色以外はありますか……？」

「え？鎖の色は……うーん、たぶんこれ一色だよ。……変かな？」

「いえ、すみません。自分も色彩や意匠には疎いので判りませんが……ただ、王さんの雰囲気と鎖のイメージが上手く結びつかなくて、青色とか緑色みたいな穏やかな色なら中和されていいと思ったのですが……」

わりと本音だ。いや、なんか鎖つけてる女の子ってパンクな印象があるから、王みたいな真面目だけど抜けているタイプとは違う気がする。

「う、うん。そう言われると、そんな気がする……かも、ちよつと待ってて、別のにしてみる」

いや、俺の意見は素人が適当に言ってるだけだから、あんまり気にしなくていいと思うけど……

「あ、いえ、すみません。俺の意見が合ってるかどうかは分からないので、井の頭さんにも聞いた方が良い気がします」

しかし、王は俺の声が聞こえていないのか、ネックレス選びに没頭していた。まあ、静かなのは良い事だ。

それから、王の選ぶネックレスを中心としたアクセサリー群に適当にコメントしたり、なぜか店内に1人でいた松下の視界に入らないように努力したり、店舗の外に一之瀬らしき人影を見かけたりと、色々と体力を使うことになった。アクセサリー店を出た時にはもうヘトであった。

ちなみに、2人とも買っただけではない。当然だ。金欠のDクラスにそんな余裕は無いのだ。いや、まあ井の頭はポイント的には買えそうだが、意外と財布の紐は堅いようで買おうと悩む素振りも見えなかった。

アクセサリー店を出た後は自然と解散となった。王と井の頭に笑顔で今日付き合ってくれたお礼を言われた。何だかんだで感謝されて、少しだけ嬉しかった。

寮に着くと、井の頭から電話がかかってきた。今日の怒りの愚痴タイムだ。

やはり井の頭は人を渾名で呼んだり、呼ばれたりするのは嫌らしい。少しいつもより怒っていた。井の頭の話聞きつつ、口笛の話やラーメンの食べる速さについての話題をこちらからは提供した。

井の頭的には俺が提唱するラーメンの均衡点というのは存在せず、常に食べることに全力を出さなくてはいけないらしい。なるほど。確かにそういう解釈もあるだろう。

ラーメン論について井の頭は熱く語ると、王への怒りも一旦収まったのか、テンションも下がってきた。

『あとは口笛の話だったよね』

「こそ、あれ凄いな。もしかして鳥の真似とかできる?」

『返答はまさかの鳥の鳴き声だった。敢えて文字で表すと、ホーホケキョと言った感じだ。』

「そっくり。井の頭さんって、前世がウグイスだったりする?」

「こういった、適当な雑談はしていて楽しい。」

『今度は別の鳥だ。何の鳥だったか分からなかったが、ウグイス以外にも余裕のようだ。』

「ごめん。訂正します。前世が鳥類だったりします?」

『鳥以外もできるよ』

マジかよ……

「降参です、助さん」

『やっぱりラーメン屋さんに居た時に櫛田さんの事を水戸黄門だと思ってたんだね……』

あ、やっぱり心を読まれていたようだ。いや心が読んでるんだけどね。これは流石に言ったら井の頭でも怒りそうなので黙っておこう。心に秘めておいて正解だった。

「なんで、分かったの……？あと、あの時の口パクって、ちがうよ、で合ってる？」

『うん、正解だよ、分かった理由は……私もあの時、王さんが櫛田さんを口実にしたのが紋所っぽく思ったからかな』

まさかの同じ発想をしていたからだだった。やっぱり考え方が似ているようだ。

「さすがじゃ、友よ」

『……じゃ？』

じゃぞ、も駄目。じゃ、も駄目。覚えておこう。

「じゃ、って喋っちゃ駄目な感じ？」

『……じゃ？』

じゃ、も許されないラインのようだ。

「駄目な感じですね。次から気をつけます」

『別にいいよ？』

いやいや、許してないような雰囲気だから止めておきます。

「ええつと、あとそうだ！視力！すごいね！」

『露骨に話を変えたね』

「視力！すごいね！」

『うん、実はちよつと自慢……かな』

心なしが少し嬉しそうな声だ。

「2・0は結構珍しいから、かなり自慢していいと思うよ……ちなみに口笛の自信度はどのくらい？」

『かなり自慢』

「それはわかる」

それから井の頭と少し長めに雑談に時間を取った。通話が終わる前には、調子も戻ったようで、声音からも機嫌の悪さは消えていた。良かった。

さて、火曜日、つまり明後日は須藤の審議の日だ。土曜日に作った珍兵器、じゃなくて新兵器の実戦研修もかねて明日は朝早くから登校しますかね。

一之瀬様を讃えよ

7月8日月曜日の早朝。校内のあまり使われていない3階のトイレの一室。俺はそこで珍兵器、じゃなくて新兵器のテストを行っていた。

新型の兵器。というか、新型のソフトウェアは俺の端末の内部で作った短距離端末操作システムだ。これは南雲のヤツにスパイウェアを仕込む際にあまりに面倒だったことから思いついた副産物だ。

機能としては、俺の端末から短距離用の電波を発射し、近くの電子機器に不正アクセスする優れものだ。とりわけ、強制録音機能に特化していて、アクセスした学生証端末やPCの録音機能を乗っ取り、俺の端末で聞くことができる。

仕様上、端末の付近の音を拾ったり、電話の内容を盗聴したりできる。隠匿性を上げたためデータの保持が苦手でありアルタイムでの盗聴以外は対応していないが、それでも学生証端末という盗聴器を皆がぶら下げている以上、短距離とはいえ任意の場所の音を拾えるこのシステムは画期的だと考えられる。

欠点はリアルタイム操作であるため音域調整が難しく、小さな音は聞き取りにくい事と、射程が20メートル前後しかない点だ。とはいっても学校という人が密集している環境であれば20メートルというのは短くもない。今俺が陣取っているトイレからだとな駄箱、1年Bクラス・Cクラスなどが主な有力対象だ。

今回はテストということで、ここから、一之瀬の端末にアクセスしたいと思う。一之瀬が下駄箱に入る少し前に一之瀬が情報収集を行っている掲示板に書き込みを行い、盗聴し様子を伺う。新兵器のテストに丁度良い安全なミッションだ。このミッションに成功したら明日の審議をこの新兵器で盗聴したいと思っている。そして、ゆくゆくはネットワーク構築で悩んでいた船上での活動に生かしたいところだ。うん、今から船上試験が楽しみだ。無人島試験はまだ少し嫌だけど。

しばらく待っていると、一之瀬のGPSに動きがあった。寮から出ているようだ。うん。いつでも一之瀬の端末を拾えるように準備する。GPSの反応が近くなったので、掲示板に前もって容易していた須藤の事件の映像、厳密には僅かに加工した映像を流す。そして少し待つと一之瀬の端末が射程内に入った。システムを使い盗聴を開始する。

少し雑音が大きい。調整をする。おそらく、今、端末は一之瀬のポケットに入っているのだろう。一之瀬が歩く度に布が擦れるような音が聞こえる。さらに調整を行い、歩く時の雑音を省く。うん、結構クリアに聞こえてきた。布越しでこれなら集音機能は悪くないな……そう思っていると、一之瀬が止まった。場所は下駄箱の近くの掲示板だ。神崎が紙を貼っていた場所だが、出来栄の確認だろうか？
『おはよー綾小路君』

ありや？綾小路？お前何やってんの？

『今、貼り紙を見てたんだが、これは一之瀬がやってくれたのか？』
ああ、そうだった。綾小路と堀北が一之瀬と組んだって話だったな。それから、2人の会話を聞いていると、さらに神崎が合流した。神崎と綾小路は面識が無かったため一之瀬が互いの紹介を行っていた。

それから神崎の貼った紙に効果が無かったことを確認すると、話は一之瀬の掲示板のものへと移っていった。中々良いタイミングだ。一之瀬の端末が外気にさらされる。再び少し調整を行い、聞き取りやすくする。

『ポイントは気にしないで。私たちが勝手にやってることだから。それに今の手応えだと、新しい情報は難しいかもね。……あ』

気づいたか……

『どうした』

『書き込み、3件ほど来てるみたい。えつととりあえず古い順に開けてくね』

さあ、俺にポイントを……って俺以外にも2人もいるのか。これはもしかやポイントが貰えない流れか……？

『えつと、ふむふむ。初めの2件は石崎君についてだね。石崎君は中学時代に結構、ワルだったみたい。喧嘩も強いみたいで地元だと恐れられていたみたい』

『興味深いな』

神崎はそう呟くと、石崎の能力から状況の考察を披露してみせた。考察内容は見事に当たりです。龍園がほとんど同じことを言っていました。さすが神崎。やっぱり能力が高いな。

『でも、この情報だとまだ弱いよね。えーつと最後のは、……え』

『どうした一之瀬』

『なんか事件の動画みたい。えつと再生するね』

それから俺が送ったフィルムの音が聞こえてきた。須藤と石崎たちの声が響く。当然映像付きだ。

『これは、何というか、ピンポイントな情報だな』

神崎は少し驚いているようだった。確かにラッキーな感じがするかも。まあ、そんなに不審に思うほどではないと思うよ。というより、不審に思うな。

『うん、加工してる感じもしないし……なんか、見ちゃったって感じだね』

一之瀬も苦笑いといった感じだ。そんなに不審に思っではない……かな？

『まあ、良かったんじゃないか、これで須藤も助かるだろう』

綾小路が楽観的な事を言っていた。コイツは本当に何を考えてるのかわからん。今からシステムを一之瀬じゃなくて綾小路に乗り換えるか？あ、いや、この位置からはDクラスは射程外だ。ここで乗り換えても、綾小路がDクラスに着いた時には機能しなくなる。それに、綾小路は都合よく独り言でペラペラと計画を喋るとも思えない。

『とりあえず、情報をくれた子にはポイントを振り込まないね』

よっ！待ってました！一之瀬様、どうか、この哀れなDクラスの生徒にお恵みを！

『あれ、でも匿名の人にはどうやって渡すんだろう？』

……え、ちよ、ちよ、誰か説明してあげろ。神崎、お前能力高いよ

な。顔からして出来そうだし、協調性以外も良いし。いや実際協調性も良いし。お前知ってるよな。一之瀬に教えろよお前。本当に頼むぞ。

『良かったら教えようか？』

綾小路ナイスー！堀北を操る男！能ある鷹は爪を隠すという言葉を体現した男！流石だ！

無事、綾小路が解説を終えると、一之瀬からポイントが送金された……その額、2万。

ヒヤッホー！一之瀬様！一之瀬様、万歳！一之瀬様は世界一慈悲深い方じゃ！皆の者、一之瀬様を讃えよ！一之瀬様を讃えよ！

その後、綾小路と別れた一之瀬様と神崎がBクラスに入っていたが特に新しい情報はなかった。一応、対象となる端末がそこその距離を移動してもシステムは正常に動くようだ。うん。あと少ししたらホームルームも始まるし、チェックはこのあたりでいいだろう。システムを落とし、一之瀬様の端末へのアクセスを中断する。

このシステムの優れた点は何らかの要因で対象端末との接続が切れた場合は、自動的に相手側に入ったものが死滅する点だ。厳密には1度電話をかけるまで僅かにログに残ってしまうが、どこかに電話をかけた瞬間、ログも纏めて死滅する。証拠は残らない。いやー、我ながらよく考えたものだ。

トイレから出てDクラスに向かうと、教室前の廊下で榎田が駆け寄ってきた。榎田がいた方向を見ると、綾小路がいた。彼と何か話をしていたのだろうか。堀北！廊下で彼氏が浮気してるぞ！

「おはよー！赤石君っ！」

いつもの明るい笑みを浮かべていた。今日は安定榎田のようだ。

「おはようございます。榎田さん」

「昨日は参加できなくてごめんね」

王の御守りは大変でした。まあ、榎田がいたらいたで、マウント攻

勢が2倍になる気がするから、参加してもらわなくて良かった気がするが……

「いえいえ、佐倉さんの事を考えると仕方ない事ですよ。佐倉さんのカメラの方は大丈夫でしたか？」

「うん。店員さんが……ちよつと大変だったけど、綾小路君が頑張ってくれたから特に問題はなかったかな」

店員さんが大変だった……？もしま、佐倉が店員の事が気に食わなくてマウント技をかけてしまったのだろうか……そして綾小路がマウント技をかけられた店員に応急措置でもした感じだろうか……？綾小路は謎のポテンシャルを持つてるし応急措置ぐらいできそうだな。うん。須藤の冤罪を晴らす前に佐倉のマウント技をかける癖を直さないといけない気がする。いや、まあ、本当は何があったかは知らないが……

「そうでしたか。大変でしたね」

適当なことを言っておく。

「それはそうとして……赤石君、昨日はどんな感じだった？デート上手くいった？」

何言ってるんだコイツ。

「デート……ですか？昨日は王さんと井の頭さんと一緒にいただけですので、デートとは違う気もしますが……」

「ん……そっか、うーん、なるほど。てっきり私はみーちゃんと付き合ってるんだと思ってたんだけど違ったの？」

大丈夫？頭打った？

「いえ、俺と王さんは付き合っていませんが……」

王がいなので王さん呼びができる。良い事だ。

「……………そうなんだ。ごめんね。ちよつと勘違いしてたみたい」

今の間はなんだよ……

榎田は軽くこちらに謝罪した後、「今度こそ4人で一緒に遊びに行きたいね」などという妄言を吐いて去っていった。寝言は寝て言え。

しかし、今回の一連の買い物事件はこれで終わったと見ていいだろう。思うと、買い物事件の発端も、この教室前の廊下で櫛田に話しかけられたのが原因だ。廊下で始まり廊下で終わった。

新しく脳内の危険地帯リストに教室前の廊下を加えておこう。これでリストは学食（椎名）、図書館本館（椎名）、中庭（佐倉）、教室（軽井沢軍団）、教室前の廊下（櫛田）となる。なんということだ、この学校は危険な場所だらけじゃないか……

教室に入った後、平田たちに適当に挨拶を済ませ席に着く。最近は軽井沢軍団とよく朝の挨拶をするようになった。昔は森と篠原ぐらいいしか挨拶しなかったが、勉強会を通じて市橋とも挨拶をするようになり、例のAクラス突入事件を経て、他のメンバーとも挨拶ぐらいいは交わすようになった。良いことなのかもしれないが、軽井沢軍団が相手だと、盃を交わしたみたいで何か嫌だ。

茶柱先生が来てホームルームが適当に終わると、綾小路と佐倉が雑談しているのが見えた。一方で堀北が鋭い視線を綾小路に浴びせていた。対して、櫛田の綾小路を見る視線は緩やかなものだった。うーむ、綾小路の愛人っぽい櫛田の方が余裕があるようだ。逆に堀北は嫉妬心が強いのか本命っぽいのに余裕がない。

綾小路は佐倉と話した後、何を考えたのか櫛田の方へ向かい少し話をする、今度は堀北の方へと向かった。おいおいおい、いくらなんでも節操が無さすぎるだろ。綾小路は尋常じゃないな。さすがは路上でせ、……行為に及ぶ男だ。

しばらく眺めていると綾小路が堀北が近くにいるにも関わらず櫛田の方に目配せした。すると櫛田が堀北と綾小路の方へと歩んでいた。綾小路の取り合いになるか……？

野次馬根性で眺めていると、綾小路は2人を引き連れ教室の外へと出て行った。これは廊下で一波乱か？……まあ、あまり深く関わりすぎると火傷しそうなので、これくらいにしておこう。

昼休みになると綾小路たちが作戦会議のようなものを教室で始めていた。どうも明日の審議についてのようだ。とはいっても、証拠映像もある以上、よほどの事がなければ勝てるだろう。

今日のお昼休みの教室は綾小路と堀北が率いる須藤救出部隊と、他にも男女が何人かいると言ったところだ。比較的、教室に人がいない日だ。チラチラと王がさつきからこちらを伺っている事を除けば概ね平和と言える。

昼飯を教室で素早く食べた後、トイレに向かうときチラリと堀北たちを見たが……なんか混沌としていた。綾小路と櫛田が何か話している一方で堀北は無言でパンを食べていて、池と山内は雑誌のようなものを読んでいた。おい、お前ら、会議しろよ。

そして審議の日である。火曜日になった。

昨日の夜に、珍兵器、もとい短距離端末操作システムの最終チェックを終えた。これでリアルタイムで審議の実況ができる。間違えた。審議の盗聴ができる。

朝、登校すると、下駄箱で綾小路と出会ってしまった。幸先が悪い。挨拶しないのも不自然なので適当に挨拶をする。

「綾小路君、おはようございます」

「赤石か、おはよう」

それからお互い無言になり教室を目指す。しばらく歩くと、横にいる綾小路が沈黙に堪えかねたのか、口を開いた。

「赤石は今日の審議はどうなると思う？」

漠然とした質問だな……

「クラスメイトとしては須藤君を信じたい気持ちもありますが……」

アイツは俺のポイント減少を招いたため、ちよつと不安だ。いや、まあ審議は勝てるだろうが……彼はまた同じ過ちを犯しそうな雰囲気

気がある。毎回監視カメラを仕込むのはちよつと面倒なので止めてほしいところだ。

……ん？審議は映像があるため勝つというのは綾小路も想定していると思つたが、違うのだろうか……？というより、俺に審議について話しかけるなら、事件の証拠を見つけた事を前もつて言えよ。こっちが情報を持ってない事を前提で話さなきゃいけないだろ。

「須藤は……お前は、須藤についてどう考えている？」
はい？

「どう、とは？」
「言葉通りだ。須藤はお前から見てDクラスに必要か？それとも不必要か？他にもお前は今回の審議で須藤がどうなるべきだと思つている？停学か、退学か、それとも無罪か。そういった、お前が須藤の事をどう考えているか知りたい」

俺が須藤の事について考えてること……いや、アイツのせいで俺の貴重な4000ポイントが無くなったって事しか考えてないよ。まあ、一之瀬、じゃなくて一之瀬様のおかげで、20000ポイント入つて、差し引きプラス16000だから、悪くはないのかな……？もしや、須藤のおかげで俺にポイントが……今度から須藤様、あ、いや、須藤さん、うーん、もう少し下で良いか。須藤君と呼ぶべきか……？いや、そもそも龍園が差配してくれたお陰だと考えた方がいいか。こういうのは何ていうんだっけ？風吹けば桶屋が儲かる？龍園が画策すると赤石が儲かる？ちよつと語呂が悪いな……

まあいいや。やはり、俺にとつての恩人は龍園のようだ。いつも椎名を引き留めてくれてありがとう。今回はポイントを俺に捧げてくれてありがとう。龍園。あ、綾小路に適当な事を言わないと。ちよつと考え事してたら無言になっちゃった。ごめんごめん。

「……Dクラスは纏まりに欠け、能力的にも他の優秀なクラスの人たちに一步遅れているように感じることはありません。そんな中で、退学者を出すのは危険だと思つています。俺個人の意見としても、須藤君はあまり仲が良いというわけではないですが……ただ、須藤君が、もしかしたら皆のプラスになるような、もつと欲深く言つてしまえば、

ポイントになるような事をしてくれるかもしれませんが。そのため、彼に退学や停学を望んではいけません。綾小路君は須藤君をどう思っていますか？」

それに、今、須藤、じゃなくて須藤君が退学になったらせつかく95まで上がったポイントが無くなってしまう。それは少し勿体ない。今後須藤君が存在することによりDクラスが95ポイント以上の損害を受けることが分かっているなら、ぜひ退学して欲しいが……個人がそこまでポイントを落とす原動力になり得るのだろうか……須藤君ならありそうだな。

うーん、現状須藤が、あ、須藤君が……もう須藤でいいや。よくよく考えなくても、俺がポイントを得られたのはコイツじゃなくて一之瀬様のおかげだから。

……現状須藤がいる事にメリットをあまり感じていないというのも問題だ。あ、いや、部活での活動がクラスに還元される可能性がある以上、95ポイント払ってまで切り捨てるのは早計か？それに無人島のようなふざけた特別試験では、彼のように肉体的に優れた人物が活躍するかもしれない……俺が言うのも変かもしれないが、須藤がもう少し協調的な人物なら、もうちょっと須藤に対して支援できるかもしれないが……

クラスポイントが0だった頃に須藤が退学してくれば何も悩む必要は無かったんだけどなー。まあ、今はクラスポイントもあるしね。こういうのを状況変化における戦略方針の変更というのだ！勉強したまえ綾小路……単に、行き当たりばったりで行動しているだけとも言える。

「……………、……………、……………そうだな、変な質問をして悪かったな」

間が長いよ。櫛田といい綾小路といい、不安定だったり謎だったりすると、応答時間が長いな。そして、俺の質問には答えないのかよ。重要な事は何一つ喋らない。さすがは綾小路だ。

教室に入ると早速綾小路が佐倉の方へと歩いて行った。最近の綾小路は佐倉・櫛田・堀北と順番にイチヤイチャするのがジんクスのよ

うだ。俺は綾小路がいつ刺されてもおかしくないと見ている。綾小路、お前は須藤の退学の心配よりも自身の命の心配と、3人が殺人ないし未遂で退学にならないか心配した方がいいと思うよ……

綾小路と佐倉のイチャイチャは目に余るのか、彼の友人である池と山内も2人をチラチラと見ていた。まあ、同じグループで1人だけ女に手を出しまくってたら気になるな。

授業が無事終了し放課後となった。俺はいつも通り、荷物を持ち帰宅する……風に装い、会議が行われる生徒会室の下の階にあるトイレへ向かう。このトイレも生徒の使用頻度が低い場所だ。まあ、イヤホンも持つてるので聞くだけなら、中庭のベンチでも良いのだが……なんか聞くのに集中してるときに話しかけられたりしたら慌ててしまいそうなので、トイレの個室の方が安全に思えたのだ。

トイレに入り、時刻を確認すると、3時50分であった。短距離端末操作システムを起動させ、目標の識別を行う。射程圏内には……おや？堀北兄がいる。偶然かと思ひ、座標を確認するが、生徒会室で間違いないようだ。動く気配もない。どうやら彼が今回の審議に関与するようだ。本来ならこの規模の事件だと書記1人で対応する場合が多いが、生徒会長が直々に来たようだ……今日は暇だったのだろうか？

せっかくなので、堀北兄にシステムを使う事にする。南雲にスパイウェアを使って、堀北兄に短距離端末操作システムを使った。このまま生徒会全員に何か仕込んだ方がお揃い感があっていいかな？

少し待つと、Dクラスの面々がやってきた。生徒会室に突入した端末を確認すると、うーん？須藤と、茶柱先生と……堀北と綾小路だ。あれれ？櫛田と平田じゃないの？あ、でもさつき帰りの挨拶を平田に伝えた時、審議に行くような雰囲気じゃなかったな。なんだ？平田が軽井沢とデートで忙しいとかか？

しかし、このメンバーはヤバいな。綾小路に堀北妹に堀北兄。例の

路上事件の当事者じゃないか……おいおいおい、きつと3人が一番気まずいと思うけど、これは内容がハード過ぎて聞いている俺まで気まずいよ……もう須藤の審議どころじゃないよ。まあ、3人ともポーカーフェイスが上手そうだし何とかなるかな？

俺が3人に同情していたが、無情にも4時になると審議はスタートした。あの3人がやったことがバレませんように……。じゃない間違えた、審議で勝てますように……。そう願いながら、審議の流れを聞いていく。

序盤は、Cクラス側の先生である坂上先生が話をリードしていき、Cクラスの潔癖さと須藤の暴力性を説いていった。龍園の筋書き通りだ。1つだけ気になった点としては、茶柱先生が審議が始まる直前に生徒会長がここにいる事を揶揄した点だ。しかし堀北兄は歴戦の勇者。ボロを出すことなく切り抜けた。当然だ。彼も妹の名誉を守るために必死だ。……。なんで堀北兄は妹の行為を……いやいや、今は審議に集中しよう。

それから須藤が反論するも、坂上先生に封じ込められてしまい、なんと劣勢に陥ってしまう。いや、お前ら、証拠使えよ。一之瀬様から貰ってるんだろ。しかし、証拠は提示されず、どんどん劣勢に陥ってしまう。というよりDクラス側で喋っているのは須藤だけだ。

おいおいおい、コイツら無能もいいところだ。やつぱり堀北は駄目だな。綾小路もこれは能無しですな。誰だよコイツの事を能ある鷹とか言ったの。あー、最初から櫛田と平田を使えばよかったのに……。しかし、諦めモードに入っている俺の耳に「ひゃっ」という可愛らしい声が聞こえてきた。……今の誰？……少女っぽい声だった。橘書記か堀北のどちらかだ。でも堀北が出すとは思えない声だった。橘書記の近くに虫でもいたのかな？

生徒会書記が虫に弱いという推測をしていると、やつと堀北が喋り始めた。遅いよ。何やってたんだよ。

堀北は理路整然と流れを作っていく、議論を展開していった。ん……ああ、なるほど。ここから反撃で最後にトドメの証拠映像の流れか……まったく、不安にさせやがって、いや、まあ、勿論、信じてた

けどね。堀北は優秀だし、それを隠れ蓑に活動する綾小路はきつと堀北以上に優秀なのだろう。少なくとも発想力は堀北以上だ。当然Dクラスの最強タッグだ。平田と櫛田は強いが良い人だから議論には不向きだろう。

うん。よくよく考えると最高の布陣だ。この2人がここに来るのは必然とも言っていないだろう。当然負けるわけがない。いや、当然、俺も信じていたし、勝つと確信していたが……

最後に堀北はトドメの一言を放った。さすが！Dクラス一の才女！かつこいいい！

『今回の件で一部始終を目撃した生徒もいます』

『ではDクラスから報告のあった、証人を入室させてください』

ええ？証人？データじゃなくて？というより、そうすると証人は俺になるんだが……今から生徒会室に行った方が良い感じ？いや、行かないけど。

『1年Bクラスの一之瀬帆波さんです』

ありや？証人つて一之瀬様、うん……ああ、なるほど、そっか、あれ匿名のデータだから部外者の一之瀬様を通して信頼性を上げたかったのかな……？やっぱり堀北、あ、いや綾小路か？まあ、どっちでもいいや、この2人のタッグは結構綿密に計画を練るな……

『Bクラスの生徒ですか……』

坂上先生は緊張しているような声だった。確かに証人が現れたのは意外だし、その上、Bクラスでも有名な一之瀬様だ。不安になるだろう。そういえば坂上先生は何処まで知っているんだろう？龍園と完全に結託しているというわけではなさそうだが……

『では一之瀬さん証言をお願いします』

橘が一之瀬様に促した。うーん、落ち着いた声だ。立ち直りが早いな。さつき悲鳴を上げた人とは思えない。さすがは生徒会役員と云ったところだ。

『はい、私の端末に映像が保存されています。これは撮影したのは私ではありませんが、事件の前後の様子が動画で保存されています。確認の方をお願いします』

『では、失礼しますね』

その後、ガチャガチャと音がして、そして生徒会室から暴力事件発生時の状況が放送された。反応は様々だった。

『これは……』

橘は啞然としていた。

『なっ！……これは、そんな、馬鹿な……』

坂上先生は有り得ないといったような事をなんども呟いていたが、小さい声だったので今のシステムでは聞き取りにくかった。

『ほら見ろ！俺が言った通りだっただろう！その3人は嘘つき野郎どもだ！』

須藤が今までの鬱憤を晴らすような喜びの悲鳴を上げていた。

Dクラス側は須藤以外は知っていたようで、証人の一之瀬様も含めあまり反応は無かった。……ん？今誰か舌打ちした？石崎あたりか？

『……これ以上の審議の必要はなさそうですね』

最後に、堀北生徒会長が締めに入ろうとした。というより、彼はほとんど驚いていなかった。初めて知っただろうに……なんとも冷静な人だ。

『ちよつと、待っていたきたい。先ほど、一之瀬君が言ったことについて疑問がある……彼女は自分が撮影したのではないと言った。では誰が撮影したのか、なぜその人物がここにいないかの説明を頂きたい』

坂上先生が最後の抵抗を行った。

『はい、理由としては、これが匿名で送られたものだからです。私は今回の事件の際はどちらの側にも肩入れするつもりはありませんでした。しかし、この学校で暴力という間違った方法で何かがなされたと聞いて、1人の生徒として放っておくことはできません。Cクラスの石崎君たちと、Dクラスの須藤君たち、どちらが嘘をついているのか、それをはつきりさせる必要があると思います、掲示板を使い情報を集めました。もし不審に感じられるようでしたら、私の端末を調べて頂いてもかまいません』

一之瀬様の回答は誠実なものだった。でも端末は調べちゃ駄目だよ。俺が送ったってバレないけど……バレないから逆に皆不思議に思うから、だから調べちゃ駄目だよ。

『ぐっ……いや、……匿名の生徒というのは、果たして無関係な者なのでしょうか？』

坂上先生はまだ抵抗を続けていた。さっきから石崎たちは喋っていない、いや正確には尾張がどうのとか呟いていた。日本史の勉強は他所でやれ。

『とっとうっ。』

橘が先を促した。いや、もう閉廷でいいだろ。

『例えば、須藤君が事件があった日のために前もって準備して、仲間に頼んで録画していたのではないのでしょうか。確かに動画からするとこちらの3人から仕掛けたようですが……私は3人を知っていますが、皆努力家で良い生徒です。やはり何か理由があるのだと思います。それにこの動画もあまりにタイミングが良すぎる。須藤君が準備していたと考えるのは不思議なことではありません』

いや、それは、ちよつと厳しくないか……というより、何か水掛け論というか、それ言い始めたら終わらないじゃん。

『坂上先生、それは少し厳しいですよ。確かに、あまりにもタイミングが良いのは確かでしょう。しかし、この動画でもCクラスの3名が今回の彼らが最初に行った証言をするような……つまり事件を作り出したかのような言動をしています。その上、Dクラス側はここまでの審議での発言には矛盾はありませんが、Cクラス側の証言のほとんどは結果として信頼性に欠けるものとなりました。……今回の審議に関してそろそろ結論を出すべきでしょう』

堀北兄により、坂上先生の、そして龍園の計画に終止符が打たれた。すまない、龍園、許せ。

そうして、審議は解散となった。細かな判決は後日発表されるようだが、大まかな内容としては、須藤は無罪、Cクラスの3名は暴力行為・計画的陰謀・偽証によりお縄、もとい停学処分となった。1週間くらいだと思われる。終業式には間に合いそうだ。またCクラスの

クラスポイントはいくらか差し引かれることとなる。

——俺が関係してるってCクラスの連中にバレたら吊るされそうだから、今回の俺の行動は墓まで持っていこう。

審議は終わり、もうやることも無かったのだが……どういわけか堀北兄はまだ生徒会室にいるようだ。この審議の後に生徒会で会議でもするのだろうか？ 気になったので盗聴を続けていると不思議な会話が始まった。

『お疲れ様です』

綾小路が生徒会室に残っている橘と堀北兄に声をかけた。

『今回の出来事、どこまでがお前の計画だ？』

堀北兄はそう返した。

『なんか勘違いされてるみたいだが、全部あなたの妹がやったことだ。俺は何もしていない』

綾小路はいつも通り爪を隠した。

『証拠の映像、撮ったのはお前か？』

ハズレ。

『違う。というより、俺じゃないってわかってるだろ』

『ああ、可能性は低いと見ていた』

なんか、この2人仲が良いな……まあ、将来の義兄弟だから当然か。

『低い、なのか……』

『お前ならば手ぶれや身長を考慮して撮影することも可能だと考えたが、メリットが薄いと感じた。誰か人を使ったか？』

手ぶれに、身長……やっぱり生徒会長は鋭いな。いやー、よく考えて設置しておいてよかった。……というより綾小路の「俺じゃないってわかってるだろ」という言葉からすると、綾小路も気づいていたか……ふー、今回は俺が出し抜いてやったぞ。……にしても綾小路は本当に怖いな。一之瀬様から映像を初めてみた時は楽観的な事を言っていたが、裏では手ぶれと身長差までしっかりと測っていたか。

『いや、本当に俺は何もしていないんだ。信じて貰えないように残念だ』

ちつとも残念でなさそうだ。綾小路はもうちよつと声に抑揚をつけたほうがいいぞ。きつと俺より演技下手だ。いや、まあ、表情を隠す演技やポーカーフェイスの演技はきつと上手だけどき……

『あの生徒会長、その彼、綾小路君が人を使つたというのは、どういう意味でしょうか？』

『橘、あの映像は須藤たちを下から撮っていた。身長差を考えると、撮影者は140cmから150cmの小柄な人物だ。また、あの映像のぶれ方から考えると、固定されていたカメラでは有り得ない。つまり手を使って普通に録画していたということだ。勿論綾小路が屈みながら撮影したことも考えられるが、撮影者と須藤達の距離を考えると、発覚する可能性もあつた。あの状況では身長を誤魔化すよりも、発覚した際に素早く行動できるように自然体で撮影した方がいいだろう』

ふつつつ、生徒会長、ナイスじゃ。実はあれ、固定したカメラに画像処理を施して、あたかも手ぶれが発生しているように偽装したのだ。俺の工夫に気づいてくれる人がいて凄く嬉しい。頑張つた甲斐があつた。やっぱり入学式の時に思つたがこの人と俺は相性が良さそう。やばい、かなり嬉しいぞ。小さな事だけでも、でも生徒会長に謀報戦で勝つたのだ。

やっぱり綾小路以外が相手だと、心臓に悪くないからいいな。純粹に成果を喜べる。まあ、俺の実際の身長175cmが特定されても、それで生徒会長や綾小路が俺だと思つてもないが……一応ね。いや、まあ、たぶん綾小路から見れば、俺はこれらの有象無象程度だから、意識すらしていないと思うけど……あ、いや、堀北や櫛田との仲の良さを自慢する相手として見ているかも……

何か言つてたら少し悲しくなつてきた。いや、計画的にはバレない事が大事だから、別にいいんだけどね。わっはっは、実は綾小路、俺はお前の実力をちよつとだけ知ってるぞ！お前からするとモブみたいなやつだけどな！はっはっは……うん、虚しくなるから止めよう。

『な、なるほど……』

橘が堀北の言動に感動していると、綾小路が再び言い訳を始めた。いや、まあ、俺と綾小路は繋がっていないから、本当に綾小路は悪くは無いんだけど……なんかスマン。

『いや、別に誰も使っていない。その映像は純粹に目撃者がいたんだろう……あんたは何故か俺を評価しているみたいだが、あんたの妹を評価してやってくれ。あいつはあんたの評価を望んでいる』

綾小路がそう言ったが、堀北兄は取り合わず、唐突に橘に生徒会の空きを確認した。そして橘がまだ書記が空いている事を伝えると、堀北兄は綾小路を生徒会に誘い始めた。なんじゃ？と俺と橘が思っていると、綾小路は素早く、その提案を突っぱねた。まあ、綾小路は面倒くさがりのようなだしね……

しかし、これまでの言動を思うと堀北兄は綾小路の隠した爪を知っているようだ。まあ、妹の彼氏ぐらいチェックしてるか……

帰宅し、日課であったカリスマ演説を見た。最近ちよつと飽きてきたが、今日はいつともより新しかった。何ととっても龍園が思わぬ証拠による敗北故に怒っていたからだ。よし、絶対に俺が証拠映像を出したことは墓まで持っていこう。龍園は周囲の人をちゃんと把握していなかった石崎たちに強く叱責した。だいぶお怒りの様だ。怖いので、今日はこのくらいにしておこう。

ちなみに今日も椎名は不参加だった。彼女が参加する日はだいぶ少ないようだ。思えば2か月以上直接的には会っていない。平和でいいことだ。

雨の日、再会

審議があつた翌朝。水曜日。

朝からDクラスは活気づいていた。黒板には池がでかでかど「逆転勝利」という文字を書き入れていた。これには須藤を非難していた人たちも皆が一様に喜んでいた。当然だ。須藤はどうでも良くてもポイントは大事なのだ。俺も皆と同じ気持ちに分かち合い、池が書いてくれた文字を朗らかな気持ちで見ながらホームルームを迎えた。

ホームルームではいつも通り不機嫌そうな……？いつも以上に不機嫌そうな茶柱先生から須藤の無罪とDクラスは何らお咎めがないことが発表された。同時に明日にはポイントが振り込まれるようないや、なんでそんなに不機嫌なんだ。もしかして須藤を退学させたかったのだろうか？

まあ、須藤は少し騒がしい人だから静かそうな茶柱先生とは相性が悪いのかもしれない。

ホームルームが終わると、平田や榎田、他にも須藤の友人である池や山内、綾小路らが須藤に祝いの言葉をかけていた。堀北は参加していない、流石だ。

須藤の席の近くを見ると佐倉がチラチラと須藤を伺っているのが見えた。なんだ？元祖マウント王としては筋肉がありそうな須藤にマウントを掛けて、真の王者を決めたいのだろうか？せっかく無罪になつたばかりなので止めてほしいところだ。

放課後になると、佐倉が素早く教室を出て行った。そして綾小路がそれを追いかけて行った。堀北、榎田！浮気ですよ！浮気！

しかし、綾小路は運が良いのか、綾小路を追いかけていた堀北が茶柱先生に呼び出されて職員室に行った。もしや堀北が呼び出されるのも計画の上か？

まあ、俺も佐倉達に倅い帰るかと思つたが、軽井沢軍団に囲まれた。

え、なにこれ？

「赤石君、今日、みんなだとカラオケに行くんだけど。良かったらどうかかな」

軽井沢軍団の間を縫って平田が現れた。ちよつと待てよ。これ断つたら蜂の巣にされるパターンじゃん。これは脅しだよ。

「すみませんが、今日はやるべきことがあるので……」

俺は脅しには屈しない。というよりカラオケは無理。それだけは絶対に無理。

「赤石君のやるべきことって何？」

ちよ、まさかの松下の攻撃。俺はお前と挨拶以外で初めて喋る気がするぞ。

「すみません、期末試験の対策用の本を考えていて……」

やべえ、良いなネタが思いつかなくて、完全に適当な事を言ってしまった。まあ、期末も遠くないし間違いでもないか？

「そっか、ごめん、赤石君。無理には誘えないね。今度はみんなで行けると良いね」

ふう、なんとか平田が取りなしてくれた。ありがとう、つて言いたいけど、コレはお前のマッチポンプだから感謝は言わないからな。

「はい、すみません……」

適当に謝ると、軽井沢軍団と平田は去っていった。明日には収入もあるし、一発決めるか、といった感じだ。

しかし、困ったな。そのまま寮に戻っても良いが、平田か軽井沢軍団に見られると、明日には俺の骸が東京湾に沈んでいる。危険は冒したくないし、時間を潰すか……現在時刻は4時少し前だ。1時間くらい潰せば言い訳にはなるだろう。

悩みつつも図書館の別館に行く。図書館は椎名のテリトリーだ。よってより安全な別館を目指す。あそこは非常に静かで人も少ない。一時期、櫛田と堀北のせいで使用不能に陥ったが、勉強会が終わった今なら人もいないだろう。

——そんな安易な考えが、ついに、俺を地獄へと導いた。

——思えば、俺は随分と油断していた。5月1日、龍園との出会いからもう2か月が過ぎている。このまま、平和な日常が続くと、そう信じていた。それだけではない、綾小路と生徒会長の2人を出し抜き、どこか自惚れていたのだと思う。だから、俺がきつと、今、地獄の……

うん、長いな、もう正直に言おう。

別館に入ったら椎名がいた。なんで別館にいるんだよ……

予期せぬ再会に愕然としてしていると、椎名はこちらを見ると、少し笑いながら口を開いた。

「お久しぶりですね。赤石君……最近はどうでしょうか？」

どうって？油断しててお前に会っちゃったよ。どうしよう……？

「お久しぶりです椎名さん。最近、色々と忙しくて……ある意味充実している日々を送っています」

俺の答えを聞くと椎名はキョトンと小首を傾げ、不思議そうな顔でこつちを見た。くそ、ひさびさに見たらかなり可愛いぞ。

「？……ひよりちゃんですよ？」

いや、お前の名前は知ってるけど……？

「ええ、はい。えーっと、椎名ひよりさんですよ。覚えてますよ」

「……ひよりちゃんですよ？」

……無限ループ的なやつ？というか、最近これと同じことをしたやつがいたような……

「はい、その……椎名さんの下の名前は知っていますよ」

俺は情けない龍園とは違う。椎名には屈しない。そう思っていると椎名がこちらにゆっくりと忍び寄ってきた。心なしか椎名の両手に力が入っているように見える。

「ひよりちゃんですよ？」

バグった機械みたいになってるぞ。……なんで、いきなり名前呼び

を強制してくるんだよ。王だつて一応はタイミングは見えていたぞ。第一、メールで最近連絡したときも「椎名さん」と書いても自然に対応していただろ……あと、ちよつとずつこつちに近づいて来るな。

「ええつと椎名さん。あの、女子生徒の事を名前で呼ぶのは少し恥ずかしくて……すみません」

「……そうですか」

そう言いながらも椎名はかなり距離を詰めてきた。もう1メートルを切った。椎名の手の動きをよく見る。動いた！馬鹿が！お見通しだ！

「……………」

椎名が伸ばした手が空を切った。綾小路相手に鍛えたステップを使うことになるとはな……だが、これで俺の勝ちだ。まさに連戦連勝。綾小路（不戦勝）、堀北兄（そもそも向こうは知らない）、そして椎名（1回避けただけ）。強敵たちを次々と葬ってきた。もはや敵なしだ。

「赤石君は今回の騒動についてどう思っていますか？」

唐突に話題を変えてきた。しかし、油断せずに椎名の両手をじつと観察していく。攻撃タイミングを伺っている気がする。一步下がりが椎名の質問に答えることにする。……おい、俺が一步下がった瞬間一步詰めるのはやめろ。質問に答えられないぞ。

「須藤君の件ですか？」

さらに2歩距離を置きながらも、回答を行った。そして、椎名も素早く2歩距離を縮めた。

「そうです……とても残念な事件でした」

残念か……やはりCクラスのクラスのポイントの減少に嘆いているようだ。絶対に俺が関わった事は秘密にしておこう。バレたら拷問的な『にぎにぎ』をしてきそうだな。

「その……なんて言ったらいいか……すみません。Dクラスとしては、その、須藤君が処罰されずに良かったと思っ……すみません。……やはりクラスを超えて関係を持つのは難しそうですね。……もしかしたら、俺と椎名さんもこうして会うのは、これからも難

しくなるかもしれませんがね」

「そう言いながらもさらに三步距離を取る。そして素早く椎名が3歩の距離を縮める。駄目だ。未だに椎名の両手の射程内から抜け出せない。さつきから、ずっと1つのテーブルをぐるぐる回ってばかりいる。」

「いえ、赤石君が謝ることではないと思っています。今回の一件はCクラス側に問題があったことですから」

「じゃあなんで残念な事件だって言うんだよ……あれかな？悪いとは思っているけどポイントは欲しいな感じだろうか……？」

「それと赤石君。図書館は本を読むところですよ。ぐるぐる回るのはよくないことですよ」

ぐるぐる追いかけてるヤツが言っているいい言葉じゃないぞ。

「あの、椎名さん、とりあえず止まりましょう」

「そう言ったら俺は止まると、椎名も止まった。よし、そこを動くな。」

「ひよりちゃんですよ？」

おい、無限ループに入るのは止める。

「あの、先ほども言いましたが、女子の名前を呼ぶのはちよつと恥ずかしくて……」

「……？この前は呼んでくれたと思いましたが」

「この前……？いや、俺がお前の名前を呼ぶとは思えないけど。」

「この前とは……？」

俺がそう言うと、椎名は悲しそうな顔をした。……え、ちよつと待って、俺悪い事した……待って、待って。そんな悲しそうな顔されても、困る……

「仲が良い友達というのはファーストネームで呼び合ったりするするものだと本に書いてありました。現に私のクラスでは名前で呼び合う女子が多いです。私と赤石君は『おともだち』ですよね？……『やつと名前で呼んでもらえた』と思ったのですが……違うのですか？」

いや、違うけど……って言いたい。

「ええつと、そうですね。……確かにそういった面はあると思います。ただ、俺には気恥ずかしいです。現に、俺はそこそこ知り合い

や友人がいますが、誰一人として名前でも呼んだり、呼ばれたりしていません。つまり、人それぞれだと思えます」

俺が同意したのはファーストネームの下りだ。椎名との友達の間ではない。しかし、椎名は納得がいていないのか、こちらをじっと見つめて追及してきた。

「いえ、赤石君は5月の初めに私の事を名前でも呼びました。覚えていませんか？確か、あの時は少し暑い日で……あと、龍園君がいたので」

龍園がいた日。確かに5月1日には龍園がいた。アイツが確かぶざけた事をして椎名の怒りを買って、そしてにぎにぎされて……あ、龍園の物真似して椎名に一本取ったな。確かそう、

——邪魔して悪かったな。ひより。次の会合は何時になるかわかんねーぞ。じゃあな

って言った気がする。……ひよりって呼んでたな。いや、でもさ。あれはさ。前後の関係から、龍園の物真似って分かるでしょ。いや、これは、うん。まあ、確かに呼んだけどさ。いや、でもさ。これは仕方ないと言うか、その。いや、椎名も笑ってたし……笑ってたっけ？そういうえば、表情は見えなかったような……椎名は笑ってたんじゃないくて、喜んでたのか……あれ、俺が……悪い……？

「ええっと、椎名さん。もしかして別れの時に『ひより』って呼び捨てにした事についてでしょうか……？」

恐る恐る聞いてみると、椎名はじつとこちらの目を見て答えた。

「はい」

あまりに端的な答えだった。その顔色もいつも以上に真剣さが見える。やばい、どうしよう。

「……あのですね。あれはですね。ちよつと、言いにくいんですがね……あの、あれですよ……つまりですね。龍園君の……あれです。はい、あれですよ、あれ」

なんとか言い訳をしたいが、駄目だ。なんか悪いと思ってしまうと、上手く弁解できない。

「赤石君。大丈夫ですよ。言いたいことは分かりましたから」

椎名は少しだけ、笑顔を見せてくれた。いつものほんわかとした笑顔に近い。ゆ、許してくれたのだろうか？というより、この説明で分かったのだろうか？まあ、許してくれるなら……………

——それは、一瞬に気の緩みだった。罪悪感、弁解できない状況、じつところらを見る一対の瞳、緊張した状況下における朗らかな笑み。

椎名の左手が俺の右手を、右手が俺の左手を指を通すようにして絡まった。そして、椎名は手を強く握った。

うわああああああー、僕のハッキングの王の腕がああああああー

にぎにぎ、にぎにぎ、にぎにぎと椎名の細く滑らかな指が、こちらの指や指間腔、そして手の甲を余すことなく蹂躪していく。

2か月間、まったく味わっていなかった恐怖と指圧によるえも言われぬ感覚、そして鈍くて浅い背德的な感情。それらが手から腕へ、そして体の中にまで浸透していく。

「し、椎名さん……………」

なんとか、口を開く。もう『にぎにぎ』を食らって何十分経っただろうか？いや、何時間かもしれない。ともかく長い間、俺は動くどころか喋ることもままならなかった。

「ひよりちゃんですよ？」

そう椎名は笑って言うのと、これまでよりも強く指間腔を刺激してきた。うぐぐう……………まずい、これ以上されると……………意識が……………

「……………ちよつと……………これ……………を……………止めて……………」

「ひよりちゃんですよ？」

あ、あ、あ、ご、ごめ、ごめん龍園。お、お前の、ど、努力を、俺が……………あやまちで……………むだに……………お、俺は、ここまでの、よう、だ

………

「ひより、さん、」

俺が何とか最後の力を使って声を振り絞った。

「はい、これからも、よろしくお願いしますね。赤石君」

そう言うのと、椎名は花が咲くように笑って、手を離れた。

——ああ、生きてる。

最後にそう思った。

恐ろしい拷問を受けた後少し時間を置くことで、俺はなんとか再起動し、椎名に別れを告げた。椎名は一通り拷問をして満足したのか俺を笑顔で解放した。くそ！覚えておけよ！この恨みは絶対に忘れなからな！別れ際に心の中で捨て台詞を吐いておいた。

時計を確認する。おそらく3時間くらい拷問を受けた事を考えると——時刻は4時25分であった。平田達と別れて30分程度しか経過していなかった。別館への移動と椎名と会って話して10分以上は経過している。そして再起動には10分くらいかかった。拷問時間は……10分程度だと……

「そんな、有り得ない」

思わずそう呟いてしまった。校内であることを思い出し、手を口に当てる。なんて恐ろしい、いや、おぞましい。椎名はこの学校最大の危険人物だ。あれに捕まったら生徒会長でも間違いなく致命傷を浴びるだろう。

しかし、そう思うとやはり龍園はかなりいいやつだ。なんとたつて、クラス闘争に椎名を投入していないからだ。アレが投入されたら、全てのクラスが文字通り吹き飛ぶ……いや、反作用でCクラスも吹き飛びそうだ。もはや使用禁止兵器だ。うん。ある意味龍園は学校全体に気を配っているのかもしれない……

椎名との恐怖の再会と、龍園の意外な良心について考えていると、誰かが俺に声をかけてきた。

「何が有り得ない、なのかしら？」

振り返ると堀北がいた。……いや、何でいるんだよ。堀北は確か帰宅部だったはずだが……？

「いえ、大したことではないですよ。堀北さん。……今日は珍しいです。部活ですか？」

思うと初めてまともに喋っている気がする。何時もは周りに誰かがいることが多かった。

「私は部活には所属していいわ。それよりも少し聞きたいことがあるのだけれど、いいかしら」

今疲れてるんで……

「すみません、今は少し、疲れているので……また今度にして頂ければ」

「大丈夫よ。時間は取らせないわ」

大丈夫じゃないです。というより、元気があるなら、今すぐ別館に行つて。そして椎名の拷問を受けてこい。それで元気を失くせ。

「はあ、まあ、分かりました」

「貴方の事を綾小路君が随分と高く評価しているみたいだけれど、それは何故か分かるかしら？」

いや、別に高く評価していいと思うけど、多分お前とのデートや櫛田とのデートを自慢したいだけだと思うよ。

「いえ、そんなことはないと思いますが……綾小路君とはあまり話をしませんし、彼が何か言っていましたか？」

一応聞くが……正直話題のチョイスをミスった気がする。こんなことを聞いたら彼氏大好きな堀北は惚気話を始めてしまうだろう。はあ、面倒なことをしてしまった……

「貴方の話をよくするけど……どうやら、綾小路君の一方通行の友情だったようね。哀れだわ」

ん？あれ？何で俺の話をよくしてるんだ？……何かが変だな。も

う少し聞いてみるか……いや、墓穴を掘りそうだ。そんな事よりカメラを精査して堀北と綾小路の会話を確認した方がいいな……適当に打ち切るか。

「いえ、俺も綾小路君のことは嫌ってはいませんよ。ただ余り話をしていないので、友人かと聞かれるとすぐには領けなかっただけです」

俺の回答を聞くと、堀北は少し何かを考えた後、溜息を吐いた。

「どうも、よく分からないわね。一応聞いておくけど、貴方もテストでは加減をしているのかしら？」

貴方「も」か。やはり綾小路は点数を調整していたか……そして堀北が知っているという事は思った以上に綾小路は堀北を信頼しているのだろうか？

「加減……？もしかして、中間試験の英語の件ですか？」

「気づいていたのね」

「あ、いえ、すみません。実はあの時は意味がよくわからなくて、綾小路君に試験の直前に言われて、少し落としたんですが、言われた時は意味が良く分からなくて、もつと自分に理解力があれば、須藤君が不安な思いをすることも無かったと思っていて、反省しています」

反省してまーす。

「そう……なるほど、あの時、綾小路君が貴方の席に行つたのはそういう事……一応言っておくけれど嘘は許さないわよ。後で発覚した場合は苦痛を伴う報復処置を行うわ。当然分かつてるわよね？」

おいおいおい、俺は椎名の拷問を経験したばかりだぞ。あまり強い言葉を使うなよ。そういう常に自分が上とか、連戦連勝とか、敵なしとか言ってる人間に限って、一瞬の隙を突かれて捕まって、そしてひどい目にあうのだ。せいぜい気をつけるんだな。

「ほ、報復ですか……その、嘘はついてるつもりは無いのですが……証明するのは難しくして。すみません。何か堀北さんの気に障るような事をしてしまったでしょうか？」

「別に気に障ったわけではないわ。……どうやら、貴方は普通、いえ、特筆することの無い生徒のようね。単純で良い事だと思っわ。さよなら」

最後のそう言うのと、堀北は素早く去っていった。なんというか、彼女は自分が納得すると、すぐに物事を終わらせるタイプのようだ。椎名もちよつとそういう所があるな。やはり人に苦痛を強いるタイプは何かと似ているのだろうか……

しかし、どうしたものか。あと30分程度は時間を潰す必要がある。幸い、いや、もはや幸いなどという言葉は使うことはできないが、とにかく、まあ、椎名は別館にしばらく残るようなので、本館の方が安全だろう。

最初から本館に行っていれば……後悔しながらも本館に向かい、内部構造を改めて確認する。カメラで見るとよりも直接確認することで、より静かで安全な場所を見つけられる気がするからだ。

そうやって、本館の安全地帯の発掘を行った後、時刻は5時になった。外を見ると雨が降っていた。雨という天気はどちらかというところ好きだが、傘を所持していない時に降られると少し困る。確か天気予報は曇りであったが……いつそのこと天気予報システムでも作るか？ 無人島用に作ったヤツを改良すればいけそうだな。

くだらない事を考えつつ、一度Dクラスのロッカーへと向かう。あそこには傘を置いておいたはずだ。図書館からDクラスまで雨で濡れないルートを考える。少し遠回りだが、並木通りの近くを通るルートがベストだろう。

ルートを決め歩いていくと、不穏な空気を感じた。雨のジメジメとした環境の中に、殺伐とした空気が混じったような感じだ。あたりを見回すと、並木通りの近くで2つの小集団が対峙していた。どちらも4人ずつだ。それぞれが向き合っている。不良の喧嘩かな……？

集団は目視できるが、雨で視界が霞むため8人の人相は分からなかったが、なんだか危なそうな空気は伝わってくる。非常に困る。俺が雨に濡れずに傘を取りに行くためにはこの集団から数メートルほど離れたところにある渡り廊下を使わなくてはいけない。どうしようか……？ あ！ 閃いた。

手元にある端末を使い短距離端末操作システムを起動させる。そ

して隠れながら集団に近づく。20メートル以内に入ったところでシステムを使い、8人の会話を盗み聞く。これでこの不良軍団の動向を把握し、気づかれぬように渡り廊下を通過する作戦だ。

画面を見ると8人の端末情報と名前が表示される。えーとまず、近い順に石崎、伊吹、龍園……あれ？えつと、うん。あと1人は山田だ。で遠い方にいる集団は鬼頭、坂柳、神室、橋本だ。おいおいおい、ただの不良軍団かと思ったら、Cクラスの中核と坂柳派のメインメンバーじゃないか……何やってんだよ。実は仲が良くて、遊びの約束でもするのか……？

ちなみに位置取りは俺が龍園集団の後方斜め後ろから様子を伺っている感じだ。

『坂柳か』

龍園が言葉を発した。少し緊張しているような感じだ。もしかしたら、昨日の審議での負けが響いているのかもしれない。許せ龍園。それと俺はお前のことを、すぐ椎名に屈した情けないヤツだと思っていたが、あれは違った。間違っていたのは俺だった。きつとあの5月1日よりもはるか前に龍園は椎名にひどい拷問を受けたのだ。そして、まだ「椎名」と呼んでいた俺を見て、だからあんなに気にかけてくれたんだろう……この2か月間、あんなに椎名を引き留めてくれたんだろう。すまない。お前の努力を無駄にして。本当にすまない。

駄目だ。今龍園の前に立てない。こうして彼の声を聞くだけで悲しさと虚しさが心に浮かぶ。だからこのまま隠れておこう。決して、これは龍園にもし暴力事件の事でバレたら、吊るされるとか、椎名に売り飛ばされるとか考えているのではない。決してない。本当に嘘じゃない。俺は龍園を信じている。本当に本当だ。

けど暴力事件に関わった事は墓まで持っていこう。

『あなたは確かCクラスの……』

坂柳の方は余裕があるような感じだ。

『入学早々女王様気取りか、いい気なもんだな』

女王様気取りは間違いないうちのクラスの軽井沢だぞ。

『ふふっ、……そんなつもりはありませんよ』

坂柳の話し方は優しいような丁寧なような、不思議な感じだ。しかし、どこか不気味さを感じる。何というか、残虐性を感じると言うのだろうか……？いや、偏見なのは分かっているのだが……なんだろうか？たぶん先入観だ。彼女の儂く可愛らしい見た目と葛城派を崩していく冷酷さのギャップから、どうも、おつかない人という印象があるのだ。

『Dクラスは俺が潰す。次にB。最後にAクラス、……お前を潰す』

そうだ！軽井沢軍団を潰せ！元々、アイツらがカラオケとかふざけた事を抜かしたせいで、俺は椎名にやられてしまったのだ！軽井沢軍団を許すな！

『あなたにできるでしょうか』

邪神椎名を2か月も封じ込めた英雄龍園に不可能はない。たぶん。

『王は1人で十分だ』

そうだぞ。王^{ワン}なんて1人で十分だ。あいつが沢山いたら、今頃Dクラスはドヤ顔祭りだ。あと王^{おう}も一人で十分だ。だが、その王は坂柳でも龍園でもない。一之瀬様だ！一之瀬様を讃えよ！

『そうですね』

坂柳も一之瀬様を讃えてくれるようだ。よし。えらい！

坂柳が最後の言葉を放つと、2人の会話は終わった。よし、お前ら、さっさと解散しろ。通行の邪魔だぞー！

俺が念じると、それぞれの集団が前に進む。龍園たちは坂柳たちがいた方へ、そして坂柳たちは……俺の方へ………

おいおいおいおい、ちよつと待てよ。なんで真っ直ぐ行かないんだよ。何でこつちに曲がってきそうな雰囲気出してるんだよ。

——いや、堂々としよう。堂々とすれ違う事にしよう。幸いこつちの顔は……橋本と1回会っているが、覚えていない事を期待しよう。大丈夫だAクラスを封鎖したときは前園がずっと睨みつけていた。記憶に残っているのは彼女の方だろう。

堂々とした態度で、前へ進む。そして、傘を差した集団が目に入る。坂柳の日本人離れした銀髪が雨の中で妖しく輝いていた。

……なんか変な感じだ。いや、まあ椎名も銀髪だから……もしかしたら俺はヤツのせいで銀髪に拒絶反応を示しているのかもしれない。椎名め、なんと恐ろしい。

屋根があるが壁が無い渡り廊下を彼らは傘を差したまま横切っていく。幸いこっちは曲がってこなかったようだ。こういうの何て言うんだっけ？ 丁字有利？ ちなみに有利なのは坂柳側だ。

坂柳たちが俺の前方3メートルを通る。一瞬、坂柳がこちらを流し見た。そして杖を使うのを止め、立ち止まった。と、止まらないで……

「どうしました？」

凄腕営業マンである橋本が素早く質問する。俺も気になる。あと、いきなり止まるのは止めてください。俺の心臓に悪い。

「いえ、少し杖が……」

坂柳の少女特有の透き通った高い声が頭を貫いた、そんな気がした。……なんか変な感じだ。いや、まあ坂柳を初めて肉眼で見た時から変な感じだが……何といえればいいのだろう。頭がくらくらする感じだろうか？

俺が考えている間、坂柳は何度か手元にある杖を弄っていた。杖が壊れたのだろうか……？

「……………問題ありませんね、行きましょう」

何度か杖で地面を叩いた坂柳は、橋本達を引き連れて再び歩み始めた。どうやら杖は大丈夫なようだ。彼女は先天的に病気があるように杖をよく使っている。大変そうだ。

坂柳たちを見届けた後、目的地であるDクラスに向かい、ロッカーから置き傘を持ち、そして寮へと戻った。

——肉眼では初めて坂柳を見たが……何と言えればいいのだろうか、その、あれだ。この学校で一之瀬様や椎名以上に、いや、こういう外

見だけで人を評価するのは良くないことなので止めておこう。

その後、綾小路と堀北の会話を精査したが、あまり俺の話をしていくようなには感じなかった。敢えて言うところ、堀北勉強会の時に俺の名前を出していたりはしたが……

まあ綾小路は他人に興味があまりないようだし、そう言った意味で相対的に名前が挙がっているという意味かもしれない。綾小路が挙げる名前は俺、平田、櫛田ぐらいだ。なるほどそう思うとあの2人と同じくらい優秀なのではと堀北は怪しんだのかもしれない……悪いな堀北。俺は残念ながら平田の廉価版っぽいから、あんまり役に立ってないぞ。

それにしても綾小路は何で俺の名前を挙げているんだ……もしかや俺と友達になりたいのだろうか。いや、まあ、それは流石に自意識過剰か。たぶん自慢する相手が欲しいのだろう。つまり綾小路がギャルゲーの主人公で、俺がギャルゲーの主人公の友達枠か……うん？ やっぱり友達になりたいのかな？

うーん、綾小路は人に面倒事を押し付けるのが上手そうだし、できれば避けたいかな……いや、まあ、多分向こうもそんなに俺の事は気にしてないと思うけどね。

呪い

今日は記念すべき日だ。7月21日の日曜日。この日、俺は16歳になる。つまり、今日は俺の誕生日なのだ。いやー、めでたい。

しかし、この2週間振り返ると色々あった。7月9日の審議、7月10日の椎名との恐怖の再会と拷問体験、そして期末試験。

期末試験では結局また教師役をやることになってしまった。幸い、中間以降は真面目に勉強をしている生徒が多かったため、労働日数は2日だけであった。

前回と同じで赤点組と綾小路は堀北とみっちり勉強会を行い、平田が女子に教え、櫛田が男子に教えた。俺は王と佐倉。そして市橋と前園という暴力団の別動隊をやっているような恐ろしいメンバーを教えることになった。井の頭と外村は参加しなかった。まあ、大丈夫そうであった。

王と佐倉のマウントコンビはあまりお互いに喋ったりはせず黙々と問題を解いていった。いや、お前ら普通に勉強できるし、1人で勉強しろよ。市橋と前園には適当に問題をやらせておいた。そういえば、勉強会始まりに市橋は「テストは無いの?」とかふざけた事を抜かしていた。なんで井の頭がないのに、あんなに面倒な物をもう1回作らなくちゃいけないんだよ。まあ、市橋と前園は適当に相手をしておいた。

なお、前園は成績は普通であった。市橋よりも暴力的な雰囲気がある分、勉強はそこそこ止まりなのかもしれない……

それと無人島試験と船上試験に対する準備も行っている。無人島の3Dマップは完全体へと進化を遂げた。今は頑張つて島の構造や植生などを暗記している。結構大変だ。やっぱり無人島試験はクソだな。一方で、船上試験に関しては良いニュースと悪いニュースがある。

良いニュースとしては、短距離端末操作システムの射程が改善され25メートルとなった。入手した豪華客船の船内図から得た情報を

考えると、もう少し射程が欲しいが、広範囲の通信を傍受できるようになったのは大きい。これをうまく生かして、船上試験をポーナスタム試験へとジョブチェンジさせてやりたいところだ。

悪いニュースは……俺のグループ。蛇グループと呼ばれるグループなのだが……メンバーがちよつとヤバイ。いや、凄くヤバイ。この蛇グループを決めたヤツはたぶん頭がおかしい。正直1日目から優待者であるBクラスの白波をチクって船上試験を終わらせたくなくなるくらいにヤバイ。

まあ、いいや、ヤバイ奴らの事はあとから考えよう。それにこのメンバー表はおそらく決定版ではないはずだ。無人島試験から船上試験まで3日間の猶予がある、そこで調整される可能性もある。無いと思うけど、調整に賭けよう。

特別試験の他にも通信傍受も順調だ。といつてもBクラスは平和で、Cクラスも思ったよりかは平和。そしてAクラスは表面上は平和だ。ただし、坂柳の通信傍受を見るに、内通を約束したのもや、12月までに葛城派が弱くなったら味方するなどといった消極的な坂柳支持も増えてきている。風見鶏が多いというべきか……？

そういえば、この前、坂柳が謎の怪文を神室に送っていた。非常に不思議な内容で分岐式の命令文になっていた。なんでも、「真澄さん。この問題を解いてみてください。解けたら、添付した資料にある指定された炭酸飲料を、解けない場合は頑丈なロープを入手してきて下さい」という内容だった。いや、なんでif文なんだよ。

ちなみに問題の内容は「a4d6Ra3e6Rd3」から始まっていて、その後、ずつと半角文字が続き、最後に「Kg2a8||Q#」と書かれていた。文字はアルファベットの他に数字とプラスやマイナス、それにイコールのマークもある。演算しろという意味だろうか？どこかで見た気もするのだが……何かのプログラムのコードだろうか？よく分からなかった。神室は俺よりも厳しい意見を持っているので、「解く気になれない。知恵自慢なら他所でやって。あとロープはこれでいい？」という冷淡な返信と、入手した物の画像を坂柳に送っていた。コイツ上司相手に容赦無いな……いや、まあロープは入手し

たようだし、忠実な人なのだろう。

ただし、坂柳は坂柳で神室の返信に不満なのか「別に真澄さんに解いて欲しくて考えたわけではありません」という意味不明な回答をしていた。いや、どう考えても神室に解いて欲しくて作ったんだろう。やはり坂柳は非常に尖っている人のようだ。うーん。見た目に関してなら一之瀬様や椎名、……あ、いや、止めておこう。

それにしても、頑丈なロープはいったい何に使うんだろうか……用途が思いつかない。うーん、期末試験は関係ないよな。綱引きの練習とかか……？ 体育祭はまだまだ先だしなー。神室とロープ、そういえば神室はかなり坂柳と仲が良い感じだ。神室は坂柳派閥では唯一、坂柳にタメ口を利いている。きつと単純な上下関係以上の関係なのだろう。友達なのかもしれない。それゆえ、神室は橋本と同じくらい坂柳に頼られている。ん、橋本……ん！ 閃いた！ おお、最近なんかすごいな俺。かなり閃きがあるぞ。

ずっと前に坂柳は橋本に無人島試験のためにサバイバル訓練をしておくように言っていた。たぶんその練習用だろう。あの無人島は急斜面や崖がある。きつと頑丈なロープで上り下りできるように練習しろということか……やはり坂柳陣営はハードだ。というより橋本はかなりハードなことをやらされている。大変そうだな。

あと添付資料にあった炭酸飲料は俺の好みのやつだった。坂柳はどうやら炭酸の趣味はなかなか良いらしい。

そうして、一通り最近の通信状況を漁った、日曜日のお昼。あんまり外に出ないのも不健康なので、出歩くことにする。しかし、寮の部屋を出ようとしたとき、不幸にも電話がかかってきた。俺の連絡先を知る者は少ない。見ると櫛田だった。

「もしもし、赤石です」

『もしもし赤石君。お誕生日おめでとう』

おや。覚えてくれたようだ。何だかんだで、祝ってもらえると嬉し

いものである。

「ありがとうございます。櫛田さん」

『それで、……あのさ、もしよかったら午後、みんなで遊びに行かない？ 赤石君の誕生日記念って事でどうかな？』

よし、そろそろ切るか。

「お話はとても有難いのですが、お恥ずかしい事に、誕生日が近くなつて羽目を外してしまって……ポイントをだいぶ使ってしまった」

昨日、好きな炭酸2本買った。俺からすると凄まじいポイント消費だった。まあ、400ポイントぐらいだけどね。坂柳の好物でもあるようだが……坂柳の部屋に行ったらいっぱい備蓄があったりするのだろうか……？もし、そうなら俺は坂柳と友達になれるかもしれない……あ、いや、流石にそれは危険か。うーん。やはりDクラスの配給額の少なさは俺の心を貧しくするな……

『あはは、意外だね。赤石君って散財しないイメージが強かったから。でも、そんな一面を知れて嬉しいかな……もしかして、このことを知ってるのは私だけ……かな？』

いや、別に散財が趣味じゃないよ。あと、別に井の頭は知ってると思うよ。少し前に炭酸について熱く語っておいたから。

「はは、ええ、まあ、そのできれば平田君や他のクラスメイトには秘密にしてみらえると有難いです。少し恥ずかしい事ですから……」

『うん。わかったよ。それとポイントは大丈夫だよ。誕生日なんだし、私が払うよ』

何……奢り、だど。どうする？ いや、待て、どうせ野菜炒め定食レベルだ。釣られるな。高々200ポイントぽちのために櫛田+αと過ごす苦痛を味わうのは御免だ。

「いえ、ご迷惑はかけられませんから」

『うーん、迷惑だなんて思っていないんだけどな……ん？……もしかして』

おい、考察とかしなくていいから。お前は綾小路を落とす方法でも考えてろ。

『もしかして、赤石君。今日はデートだったりするのか？』

誰かコイツの頭治してやれよ。

「いえ、違いますが」

『本当かなく、なんか怪しいなー』

切っていい？

「いえ、本当に何もありませんよ。ただ端末の電池がそろそろ切れそうですので、一旦切ってもいいですか？」

『ふーん、秘密の事なのかな？……上手くいったら教えて欲しいな』

はい、切ります、今日はめでたい日なので。これ以上は駄目です。切ります。

最後に櫛田に適当に別れを告げた後、端末を切った。ふう、まった。というか、アレだな。櫛田は恋愛とかそういう話が好きなんだな。まあ、櫛田自身も綾小路に愛憎交える感情を抱えているみたいだし、他人にもそういったドロドロを要求しているのかもしれない。ちよつと関わりたくないかな……

電話を終えた後、本来の目的である散歩と物資調達に出かける。しかし、途中で一之瀬様率いるBクラスの軍団が見えてしまった。なんだか、休日は一之瀬様とよく会うな……

まあ、一之瀬様と話をしたのはたった1度だ。向こうは人間関係も俺と比べてはるかに忙しい。堂々とすれ違うことにしよう。坂柳派閥の中核メンバーにも通じた技だ。なんとかなるだろ。

スタスタと歩いていき、一之瀬様と男子と女子が何人かいる集団との距離が3メートルと切った。このまま――

「あれ？君は確か、赤石君だよ。久しぶりだね」

おい、馬鹿やめろ。一之瀬、じゃなくて一之瀬様、お前……貴女様はこれで1000ポイント減点です。これで残りの恩ポイントは14000な。

え？恩ポイントは20000あったって？そうだった？いやー、最近はマイナス金利とか聞くし、恩も時間が過ぎると摩耗しちゃうよね。仕方ないね。

んー、それにしても、一之瀬様が俺の事を憶えていたとは……凄

記憶力だ。一之瀬様のような美少女に名前を憶えられて嬉しいような、Bクラスのボスに名前を憶えられていて危険なような判断に迷う所だ。

「えっと、一之瀬さ、さん、でしたよね。お久しぶりです」

俺が答えると、他のBクラスの面々は不思議そうにしている。いや、俺が一番不思議な気持ちだよ。

「帆波ちゃん、この人は……？」

後ろにいた少女が一之瀬様に質問してきた。なんだか、露骨に俺の方に嫌いオーラを出している。早く去れって事だね。俺も早くここを去りたい。しかし、どつかで見た顔だな……あ！思い出したポイントの白波だ！へっへ白波さん船上試験ではよろしくお願ひしますよ。へっへ。俺に50万をくれる親切な人だ。丁重に対応しよう。白波様の方がいいだろうか……いや、学校側が白波をポイントボックスに仕立てただけだから、別にいいか。

やはり俺に2万ポイントを譲渡してくれた一之瀬様こそ至高。……まあ、今回声をかけてきたから、ちよつと駄目だけど。

「うん？千尋ちゃん、こっちはDクラスの赤石君。こっちがBクラスの白波千尋ちゃん」

いや、紹介されても困るんだけど……

「ええっと、どうもよろしくお願ひします」

適当に挨拶しておく。

「え……うん、よろしくお願ひします」

白波が少し嫌そうに俺に答えると、すぐに一之瀬様の後ろに隠れた。あれかな？ちよつと50万奪いそうな雰囲気を出しすぎたかな……？

「Bクラスの神崎だ。よろしく」

なぜか一之瀬様の隣にいた神崎まで自己紹介をしてきた。何でお前までいるんだよ。休日に一之瀬様含む集団と行動するとか本当に協調性詐欺だな神崎は……

「よろしくお願ひします」

神崎にも返事をする、なぜか次々とBクラスの面々と名前交換を

することになった。あのー、ちょっとBクラスの、それも一之瀬様率いる中核人物の方々とはあまりお知り合いになりたくないのですが……いや、まあ、たぶん俺が何かしてるって誰も分かってないだろうし大丈夫だと思うけど。……適当に三下演技でもするか？あー、いや、何か墓穴掘りそうだから止めておこう。

それから2、3会話を挟み一之瀬様たちとは別れた。どうやら、昨日が一之瀬様の誕生日だったらしく、そのお祝いにBクラスの何人かで行動していたらしい。何で昨日ではないのかと思って聞いてみたら、どうも一之瀬様は人気者らしく、昨日は別のグループと一緒にいたらしい。年に2度も誕生日があるとか一之瀬様凄すぎるでしょ……

一之瀬様の偉大さを再確認した後、ゼロポイント物資を入手するためモールへと向かう。一之瀬様たちとの戦いで精神力を使ってしまったため、ゆったりとモールの回ることにする。

ゼロポイント物資を次々と籠に放り込んでいくと、奇妙な感覚に襲われた。なんだろう？たぶんデジャヴだ。さつきから、同じ女子生徒が何度も俺の視界に入っている気がする。たぶん気のせいだと思いが。

そう思っていると、また、その女子生徒を見かけた。うーん、七つ子の人がこの学校にいたりするのだろうか……

「ねえ、さつきから何なの？」
突然話しかけた。声のした方向を見ると七つ子の女子生徒が話しかけてきた。

「はい？」
というよりこの七つ子、どっかで見た事あると思ったら、Aクラスの神室じゃん。何やってんの？坂柳に傘差してあげるのがお前の仕事じゃないの？いや、今日は雨降ってないけど……ああ、でも日が強いから日傘差してあげないと。

「あんた、さつきから私の事、付けてたでしょ」

「いやいや、それを言うならお前はさつきから分身で俺を攪乱しようとしてるだろ。」

「ええつと、すみません、言っている意味がよく分からないのですが……」

「ここは忍術を勉強する学校じゃないぞ。」

「惚けてるの？さつきから撒いても撒いても付いてきたでしょ。分かってるから」

「分かってないから。まさか市橋よりも分かったような顔して分かってない事言うヤツがいるとは……」

「その、たぶん推測ですが、あなたは俺に付けられていると思っているわけですね。俺はそんな事はしていません。むしろ俺からすると、あなたが何度も俺の近くを故意に通り過ぎているように感じられますが……」

俺に適当な事を言わせないとはいコイツは中々の逸材だな。ある意味椎名レベルの逸材だ。

「は？私はそんな事してない」

神室は吐き捨てるように言った。なんだろうAクラス版堀北みたいな？でも堀北以上に決めつけてかかるタイプな気がする。

「わかりました、ならこうしましょう、俺はこの後、食品コーナーをもう1度回った後、衛生品のコーナーをいきます。それで帰ります。これでああなたは俺と一緒にならなくていいですよね」

面倒だったので行動計画を教えておいた。まったく……俺の重要な個人情報を坂柳の側近に教える日が来るとは……

「……もしかして、あんたは私がこれから行きたいところ分かっているの？」

「うん？……えつと何？もしかして同じところ行く予定だったの？」

「えつとそれなら衛生品コーナー行った後に食品コーナーに行けばいいですか？」

仕方ないので交換してやる。お前が先に食品コーナー行っているよ。でも分かっていると思うけど、ジャガイモを買い占めるのだけは

止めろよ。

「別にいい。というより、私も一緒に行くから」

大丈夫？ Aクラスの勉強が大変で頭のネジ外れちゃった？

「ええつと、一緒にですか？」

俺が洩ると神室は鋭く睨んできた。0. 1椎名いや、コイツが坂柳派閥の中核であることを考慮すると、0. 2椎名あたりが妥当か……？

「何、文句あるの？」

文句以外ないけど……

「いえ、その、いつも一人ですので恥ずかしいなと思ひまして」

だから早く食品コーナーに行け。俺は衛生品見て来るから。中間地点で合流な！ あ、間違えた、コイツと合流する必要はそもそも無いや。……でもなんかここで別れても合流しそうな雰囲気があるな……

「そう、なら決まり。そういうえば、あんた名前は？」

決まりって何が決まったの？ お前が食品、俺が衛生って事でいいんだよね？

「えつと、では俺は衛生品を見て来るので、あなたは食品を見てきてください」

神室の質問は聞こえなかった事にして、俺は素早く立ち去ろうとするが、神室に後ろから袖を掴まれた。

「ねえ、名前なんなの？」

坂柳の側近が俺の名前を憶えなくていいよ。

「……………」

判断に迷っていると、神室は疑うような視線を向けてきた。……ぐぬぬ、駄目だ。ここで坂柳派閥相手に不審がられたくない。いやもう手遅れ感があるが……

「……………あ、赤石」

今、偽名を名乗ろうと思ったけど、勝手に名前を借りたと知られたら謎の技術が怖かったから止めておいた。というより、神室に偽名が発覚したら、何で偽名だったか疑われると嫌だったので止めてお

た。

「……………そう」

神室はどうでもよさそうに呟いた。コイツ……………人に名前聞いといて何て態度だ。

「えつとあなたの名前は？」

名前は知ってるけど、聞かないで知ってたら不自然だ。それに呼ぶときに不便だから、便宜上聞いておこう。

「何で教えなきゃいけないの？」

おいおいおい、コイツは堀北越えじゃね？高円寺呼んで、コイツとラップバトルさせようぜ。

「え、いえ、……………まあ、教える必要は無いのかもしれませんが、俺も教えたので、聞いてみたのですが……………」

神室は俺の答えを聞くと、重く溜息をついた。そして、数秒ほど黙った後、こちらに目を合わせて鋭く言葉を放った。

「……………食品コーナー行くから、来なさい」

なんで、ナチュラルに命令文なの？あれかな？坂柳にいつも命令されてて不満なのかな……………まあAクラスなんていう階級にいるとプライドも高くなりそうだし、適当な相手で発散したいのかな。相方っぽい橋本でやれよ、と思ったけど、そういえば神室はAクラスのカメラを見た感じ坂柳以外とは会話してないな……………神室、お前もしや友達がないのか……………

「いえ、あの、あなたは俺と一緒にいると不快なように見えるので、距離を置いた方が良くかと思っただんですが……………」

「不快でも、あんたを野放しにしてる方が危険でしょ」

俺は危険じゃないよ。この少女のペースはやばいな。なんか椎名や堀北以上に人の話を聞かないぞ。きつとコーヒーかお茶どっちがいい？って聞いたらココアとか答えるタイプだ。せめてお水にしろ。

「危険、ですか……………」

「私の事をつけてた。だから監視」

体言止めばつかしてるんじゃない。ちゃんと喋れ。

「えつと、まあ分かりました。食品コーナーは左から回っていいです

か？」

仕方ないので神室と回る事にした。はあ。

なぜだか、足手まといがいるにも関わらず、いつもとあまり変わらないスピードで食品コーナーを回っている。本当に何故だ？というより色々可笑しい。買うものが似すぎている。いや、まあ、神室はちゃんと0ポイント品以外も買っているが……分類的には同じものを買っている。行動方針が似ているのか……？こんな高円寺みたいなヤツに……！

「……坂柳」

無言で食品コーナーを物色しているときに、唐突に神室はそう呟いた。

「名前……私の名前、坂柳」

いや、それお前のボスの名前じゃん。まさかの偽名かよ。思いつかなかったのかもしれないけど短絡的すぎるだろ。坂柳の名前はそこそこの知名度だし、すぐバレるぞ。何考えてんだ。

「そうですね、坂柳さん、よろしくお願いします」

俺がそう返すと、神室はこっちの顔をじつと見てきた。何度か神室は考えるような仕草をしたあと、再び口を開いた。

「……やっぱり止め。あいつの苗字で呼ばれるとか耐えられないから」

コイツは何がしたいんだよ……

「ええっと、どう呼べばいいですか？」

「坂柳以外なら何でもいい」

じゃあ何で坂柳を呼び名にしようとしたんだよ……

「……そうですか」

そう行っただ後、黙って物色を続ける。しかし、数分後に再び神室が静寂を破った。

「ねえ、あんたさつきから0ポイントの品物ばかり入れてるけど、ポ

イント無いの?」

無いよ。

「ええ、まあ」

俺の答えを聞くと神室は僅かに笑みを作った。コイツも人並みに笑ったりするんだな……

「もしかしてDクラス?」

そうだよ。

「ええ、そうですよ。あなたは何クラスですか?」

「Aクラス」

特に気にせず言つてのけた。あまり誇っているような感じはしなかった。はて? 結構プライドが高そうなイメージがあつたが……当然の事だと思つてるから気にしてないとかそんな感じかな。

「Aクラスの方でしたか……」

俺が適当にビビつてると神室は目を細めてこちらを見た。

「何、怖いのか?」

資料で見た感じはそこまでは……でも何か強襲型堀北みたいなどころは怖いかな。堀北と同じで黒系(?)の長髪だし。なんか刺々しいし。実は堀北の従妹とかなのかな? まあ0・25 椎名といったところかな。4人いたら椎名1人分と考えるとなかなかの怖さだ……あ、いや、そもそも恐怖に足し算は適用できるのか……?

「いえ、どうでしょう。でも確かにAクラスの方は結構厳しい物言いの方も多いので、そういうった感情を抱いてしまったかもしれません」

俺の返答を聞くと神室は鼻で笑った。今の笑い方、堀北っぽい……まさか本当に従妹とかじゃないよな……?

「変な言い回し。あんた友達いないでしょ」

ハズレー! 俺には友達が1人いますよ! ばーか、ばーか!

「クラスメイトで何人か仲良くさせてもらってます」

まあ、平田とはきつと傍から見れば仲良いよ。榎田あたりとも一応話すし、まあまあなんじゃない?

「そう。どうでもいいけど」

神室は再び無関心に呟いた。いや、お前。人にボツチのレツテル

貼つといて『どうでもいい』は無いだろう。コイツはガチで高円寺レベルじゃないか……?」

「そうですか……」

その後も、恐ろしいまで行動指針が一致した。いや、何でこんなに被るんだよ。俺もびつくりしたが、神室も途中から驚いているように見えた。一通り物資を手に入れた後、モールを出てようやく神室から解放された。

ちなみにアイツは最後まで名前を名乗らなかつた。あと去り際に「せいぜい足掻けば」という露骨な挑発行為をしてきた。お前さてはDクラスだと思って舐めてるだろ。あんまり舐めた態度取ると筋肉参謀の綾小路さん呼ぶぞ。たぶん謎技術でお前なんて一撃だぞ。たぶんだけど。

神室と別れた後は沢山の荷物を持ちながらも一直線で寮へと戻つた。寮のロビーでポストを見てみると、何かが入っていた。見ると小さな袋が2つあった。はて?なんだろうか。2つの袋を持ち、部屋へと戻る。

部屋に着き、一通り物資を整理した後、小袋2つを確認する。といても1つは誰からのものかわかった。たぶん井の頭だ。差出人は書いていないが、「あなたの友人より」とマジックで書いてあった。女子特有の丸文字だ。また、何度か見た井の頭の字に似ている気がする。

中身を確認すると、誕生日カードとコースターが入っていた。カードの方にも差出人は書いていなかったが、ラーメン談義の内容についての追伸などが書いてあった。うん、井の頭で確定だ。コースターの方は……これは凄い。たぶん編み物だ。作ってくれたのか……まずいな、井の頭の誕生日プレゼントは何にしよう。……王からの通信が3回に1回繋がらなくなるプログラムとかなら喜んでくれるかな

……？

井の頭から貰った誕生日カードを一通り楽しんだ後、もう1つの袋を開ける。櫛田と井の頭以外に俺の誕生日を知っている人はいないと思うから、たぶん櫛田からだろうが……

中にはコピー用紙と、あとなんか形容しがたいモノが入っていた。ちよつと櫛田さん、クラスメイトに嫌がらせするのは止めてくださいよ。形容しがたいモノはとりあえず、袋から出さず、コピー用紙を見る。英文で「赤石君へ、誕生日おめでとう」と書いてあった。いや、なぜ英語……？さらに文が続き、えーつと、これ何て訳すんだ……？

ちよつと抽象的な表現が目立つので自信は無いが、あえて訳すなら、「見放されたあなたは、あなたの敵に捕まり、飢餓に苦しみ、恥辱を味わい、全てが欠落し、敵はあなたに鉄の首輪を嵌め、あなたの生涯は潰えるだろう」かな？誕生日に呪いの文を送ってくるんじゃない。しかし、こちらも差出人不明だ。いや、まあ正確には差出人は「あなたの敵より」と書いてあるが……英文っ！さてはこの呪いの文を書いたのはアイツだな！なんてものを送ってきてやがる……ドヤ顔の王め……

まあ、それよりも深刻な問題がある。コピー用紙と一緒に入っていた、この形容しがたいモノだ。いや、まあ、ある意味、コピー用紙の内容的には理解できるのだが……袋の中には首輪が入っていた。着けるといいたいのだろうか？嫌だよ。あ、ちなみに革製で色はピンク色だ。そこは頑張つて鉄製を用意しろよ。とは思った。

ふざけた革製首輪を適当な所にコピー用紙と一緒にしまっておく。

——真面目な話。誰が送ってきたのだろうか。俺の誕生日を知る人は少ない。井の頭ではないと思う。というより、言ってしまったのは悪いが、あの難しい英文を井の頭ではまだ書けないと思う。王はドヤ顔とマウントは大好きな上、櫛田とも友達だから俺の誕生日を知っていてもおかしくはない。でも誕生日にこんなに趣味の悪い事はしないと思う。たぶん。たぶんだけど。消去法では櫛田一択だが……櫛田は不安定モードになるとちよつと怖いし、恐ろしい怪文を送るのは少しだけありそうな気もする。英語能力も櫛田ならきつと何とか

なるだろう。でも櫛田は根は良い人っぽいしなー、うーん。……あ。

監視カメラで、俺のポストを調べれば良いと気づいた。うん。最初からそうすれば良かった……

ハッキングを敢行し、今日1日のポストの様子を確認する。俺のポストは寮のロビーに面しているため、1年生なら誰でも不自然なく入れることができる。入れる瞬間を捉えれば誰がやったかわかるだろう。

ちょうど画面上では、早朝の皆が寝ている時間に井の頭が素早く俺のポストに小袋を入れた。うーん、井の頭の袋と謎の敵の袋はどつちが上だったつけ？ 駄目だ、思い出せない。まあ確か、最後にポストをチェックしたのは3日前くらいだから、最悪3日間調べればいいか……

……

……

……

……おかしい。

この3日間、井の頭以外、誰も俺のポストに投函していない。おかしい。

と、というか、鳥肌が立ってきた……ちよつと怖いぞ。これ何時誰が入れたんだ……？

いや、落ち着け。このカードには「誕生日おめでとう」とある。

俺の誕生日を明確に知っていたかは不明だが、もし知っていたらならば俺がいつポストを開けるかが重要な要素になるはずだ。こんなに格好つけておいて、誕生日以前に俺がこのカードと首輪を発見したらダサい。俺が適当な人間でなければ毎日ポストはチェックしている、いや、まあ適当な人間だから3日に1度ぐらいしか見ていないが……それを知っているのは井の頭ぐらいだ。

つまり、入れたのは誕生日の当日。少なくとも今日の深夜0時以降のはずだ。

カメラの0時以降映像を目を皿のようにして観察する。俺のポス

トはロビーに面しているため、自然と人が通ることがある。もしかしたら、見逃してしまっただけで、誰かが通り過ぎると同時に袋を入れた可能性がある。

……駄目だ。わからない。

一応、超常現象は抜きにして、かつ今日の0時以降に犯行が行われたと仮定すると、俺のポストの前を通り過ぎたのは120人。そのうち、42人は俺のポストの半径50センチメートル以内を通り過ぎている。全然絞れていない。

ただ、ポストに干渉するには、ある程度近づく必要があることを考えると、犯人は42人の中だが……俺の知り合い。おそらく俺の事を知っているであろう人物だけ挙げると、櫛田・王・井の頭・軽井沢・松下・佐藤・長谷部・池・三宅・一之瀬様・椎名の11人に絞れる。

この中から、明確に投函を行っているのは午前5時45分の井の頭だ。朝早くからありがとう。気遣ってくれてすごく嬉しい。俺の駄目な脳内容を改善できれば……つまり例の怪文書が入った袋が井の頭より前か後かが分かると、犯人が一気に絞れる。具体的に言うと、この中で井の頭よりも前に俺のポストの前を通り過ぎたのは一之瀬様だけだ。とても何か怪文書を入れたようには見えないが……

うん？ いや、待て。小袋といっても結構目立つ。この11人は直接小袋を持つてはいなかった。バックや服の中に途中まで隠して、そして、ポストの前でバックや服に手を突っ込んで、自身の体を盾に監視カメラから隠れればいけるか？

そうすると、犯人はさらに絞れる。一之瀬様は軽装でとても何かを隠し持っているようには見えない。同様に池と三宅もセーフだ。王は微妙だが、彼女の体格とこのバックの大きさでは難しい気がする。椎名と軽井沢はポストのそばに居るときにバックや服の中には手を突っ込んだりはしていない。

だんだんと絞れてきた。櫛田・井の頭・松下・佐藤・長谷部の誰かだ。

この中で最も簡単に犯行を行えるのは井の頭だ。自分が入れた時、もう1つ袋を突っ込めばいい。差出人と届け人が一緒である必要は

ない。もしかしたら、井の頭が誰かに頼まれて「自分の分も入れて」と言われたのかもしれない。今考えるとそれが一番有り得そうだ。後で聞こう。

一応残りのメンバーも考える。櫛田と松下は偶々かもしれないが、俺のポストの近くでバックに手をつ込んでいる。長谷部は癖なのかよく自身の体やポケットを触っている。どさくさに紛れて入れられなくもない気がする……最後に佐藤だが、コイツは挙動不審すぎる。いや、いつも挙動不審だが。動きが少しふらふらしている。独特な歩法のせいで、カメラが上手く動きを捉えられない。というより、もしや眠いのか……？

うーん。わからん。たぶん郵便係は5人の誰かだとは思いますが……いや、郵便係なら、別に俺の事を知ってる必要は無いよな……差出人と郵便係が違ってもいいわけだし。なんかこれまでの推理が一気に崩れた。また、42人からやり直した。一応俺が、というより俺を知らない人たちも調べよう。

……調べた結果、先ほどの俺を知っている5人に加えて、容疑者候補は新たに15人増えた。これで累計20人だ。まだ多いな……それにこれも今日の0時以降という前提があつてこそだ。ちなみに時間的な内訳は井の頭以前が一之瀬様を入れて3人。以後が16人だ。もし投函されたのが井の頭以前なら、一之瀬様に犯行が難しい事を考えると2人に絞れる。

というわけで井の頭に電話だ！

『もしもし赤石君？』

「井の頭さん。誕生日プレゼントありがとう！コースター凄く嬉しい。あと、カードは笑った」

『うん……気に入ってくれてよかったよ。でも、カードに面白い事書いたかな……？』

いや、あれは面白かったよ。

「その返しも個人的には面白い。つと、あとゴメン、ちよつと聞きたいことがあるんだけど、今大丈夫？」

『大丈夫だよ』

「あのさ、井の頭さんがポストに袋を入れてくれた時に、もしかして、他の誰かの袋も一緒に入れたりした？」

『……………』

ん……………何、この間。

「井の頭さん？」

『……………どうして、そんな事聞くの？』

もしかして、聞いちや駄目な感じなのか……………

「いや、なんか、他のも誕生日おめでどうつてプレゼント？的なものが入っていたけど、差出人が書いてなかったから分からなくて」

『入れてないよ』

聞こえてくる声は、端的で、なぜか、いつもより冷たく聞こえた。

「……………そ、そう。えっと、そうだ、あと、俺の誕生日を教えたりはしてないと思うけど……………櫛田さん以外に知ってる人とか思いついたりする？」

この郵便係の話題はあまり良くない気がしたので、差出人について聞くことにした。

『……………いないと思うよ。それに多分だけど、櫛田さんは赤石君の誕生日を広めたりはしないと思うよ』

「そうすると、あの袋は櫛田さんが送ったことになってしまう……………」

……………櫛田はちよつと怖いところがあるし、無いとは言い切れないよ。うな気もするのだが……………どうなんだろう。

『櫛田さんらしくないね。櫛田さんなら絶対に差出人は書くよ……………さつき櫛田さんは広めないって言ったけど、聞かれたら答えるくらいはすると思うよ……………心当たりは無いの？』

確かに、それもある。でも、櫛田も首輪を人に送るときは流石に匿名にする気がする。愛憎交える感情はちゃんと綾小路に送ってくれよ。無関係の俺に八つ当たりしないでくれ。いや、まあ、櫛田が送ってきたか分からないけど。

「俺に誕生日プレゼントを渡そうとする人に心当たりはないな」

正直な話である。井の頭と、あと義理で櫛田、と、実は平田も可能

性があるが……彼はあんな物を書いたりしないと思っっている。おや？不思議だ。人間不信の俺は友人である井の頭を疑うことがあるのに、平田を疑ったことはあまりない。とても不思議だが……相手が平田だと納得してしまう。うーん、これも平田の人望故か。

『……王さんは？』

可能性はあると思っっている。

「英語の問題集送ってきそうなイメージはあるけど……」

アイツはマウントの為ならポイントも支払うという強い覚悟を持っっている気がする。

『……そうだね。……うん、それに王さんが赤石君の誕生日を知ってたら態度で分かると思うから、やっぱり違うと思うよ』

うーん、井の頭予想では王は違うようだ。そうすると本当に櫛田一択になっってしまうな……

「平田君はないかな」

一応聞いてみる。

『ない』

即答！

「ちなみに理由は？」

『平田君は人に誕生日を聞かない』

ん？

「そうなの？……ああ、でも確かに、聞いている所をあんまり見ないな」

『あ、そういう意味じゃなくて……聞くなら、必ず本人に聞くとと思う。誰かから又聞きみたいな事はしないとと思うよ。あと匿名にはしないよ』

ああ！確かに！人の個人情報之又聞きのような事はしないとと思う。それも平田が誕生日を知りたいと思う相手なら味方に限られるし、誠実な彼なら本人に聞くだろう。

『だから、多分送ってきたのは女子だと思っうよ』

「女子は又聞き専門ってこと？」

『それもあるけど……男子ならポストなんて使わないで直接渡すと思

う。特に赤石君みたいなタイプの男子に渡すような物好きな人なら
そうするはず』

なるほど……でも呪いの言葉と首輪だからなー。直接渡したら宣
戦布告だから……相手は男女問わず間接的に渡すと思う。………
うん、伝えるか。

「いや、ごめん。ちよつと伝え忘れたんだけど……その誕生日プレゼ
ントがなんか誕生日カードと不幸の手紙を足して二で割ったような
感じなんだよね。だから男子でも直接は渡さない気がする」

さすがに首輪は黙っておいた。

『………いじめっ?』

実は俺も内容物を見た時にちよつといじめっぽいなーって思った。

「あるかも」

『………なら、女子だね』

井の頭は一瞬考えた後、結論を告げた。

「マジで?」

まあ、野郎がピンク色の首輪を送ってきたと考えるよりは精神衛生
上いいかもしれない。いやまあ、女子に送られたら送られたで怖い
けど。

『たぶん。確信は無いけど、候補言った方が良い?』

分かるのか……

「怖いけど聞いてみる」

『軽井沢さんのグループの誰か』

もしや……カラオケを断った件だろうか………?

「ちなみに、いじめじゃなくて、誕生日を祝いたい気持ちでやった場合
は?」

一応、聞いてみる。この場合だと男子もあるのだろうか?

『………無いと思うけど、私が知る限りの人で赤石君にそれを
する可能性があるのは……榎田さんだけかな』

性別どころか、1人に決まってしまうらしい……もう榎田が犯人で
いいよ。

それから、改めて誕生日の事について感謝を伝えたりして、電話を終えた。

収穫は大きかった。というより、これはもう櫛田でいいんじゃないだろうか。もちろん、俺の事を気に食わない、英語がそこそこ堪能で、櫛田から俺の個人情報を知る女子（ただし王は除く）という可能性もあるが……それって誰だ？

ああ、さらにその女子は郵便係を誰かに頼める、又は郵便係自身であるという条件もあるか。ちなみに櫛田は先程のカメラチェックから郵便係である可能性もある。やっぱり櫛田が一番怪しい。……井の頭曰く、「いじめ」なら軽井沢軍団が関わっているという話だ。松下は結構英語ができた気がするし、軍団全員で考えたならありそうだな……松下と佐藤は郵便係候補でもあるし、あと軽井沢軍団の森は櫛田とも仲が良い。それに超絶虐めっ子の軽井沢なら首輪とか送ってきそうなイメージがある。

うーん、いつそのこと、櫛田に俺の誕生日を誰かに伝えたか聞くか？現状それが一番確実だか……やだなー。

……今日はもう櫛田と話をしたし、明日以降にしよう。ちよつと不気味な誕生日プレゼントだけどあんまり実害は無いし……

後日、櫛田に今回の事を聞いたら、誰にも誕生日を教えていないと惚けおった。あと、俺のポストに何かを入れた事は無いかという質問に関しては「入れちゃ駄目かな……？」という供述をした。えつと、それは自供ってことでいいかな？有罪！

——こうして、櫛田に関しての恐怖ポイントがそこそこ上がるのであった。だいたい0.7椎名ぐらいだ。これからはゴマをすりつつ、距離を取っていくことにしよう。

櫛田桔梗の策謀2—1

私は赤石君の事を嫌いではない。

中間試験を通して、思った事がいくつもあった。

まず、私が所属するDクラスは想像以上にできない人が多かったことだ。このことは私の優越感を満たしてくれる……というわけでは無かった。なぜなら、それ相応、ううん、それ相応以上にできる人が何人も居たからだ。

例えば、幸村君。彼は私よりも勉強ができる。他の面では一切負けている気がしないが、それでも嫉妬心や劣等感を感じることはある。例えば、高円寺君。彼は過去問を受け取らずに高得点を出していた。彼には色々と思う所がある。

他にも平田君。彼はなんでもできる。ただ一方で彼と話をしてもあまり劣等感を感じない。心配りが上手であり気に障らない人だからというのもあるが、それ以上に彼の人間性は欠けているように感じるからだろう。彼はどこかおかしい所を持った人だ。私の今まで培った人間観察眼がそう言っていた。だからか、彼相手にはあまり嫉妬心を抱くことは少ない。機械に嫉妬心を抱かないからという表現を使うと近いかな？

——平田君の立派なところは見習わないとっ！

幸村君、高円寺君、平田君。あとは、あの女。あの女は本当に苛立たしい。彼女については考えないようにしているも、いつも考えてしまう。勉強も、運動も、そして、認めたくないけど容姿も彼女の方が上だ。それだけでも許せないけど、それ以上にあの彼女の態度はいつも私の神経を逆撫でる。

思わず、大きな声を出しそうになり、手で口を押える。私は誰にでも優しくして、皆に信頼される人だ。そんな人が夜大声を出すわけにはいかない。彼女の事を頭から撥ね退け、他の人に関して考える。

——赤石君はどうなんだろう？

ふと、クラスメイトのある男子が頭によぎった。彼の事を最初見た時は、平凡な生徒だと思った。

運動も勉強もそこそこできる。顔も見ていて不快にはならない。話し方は距離感を感じるが、相手をしていて気に障らない。適度に見下せて、適度な優越感に浸れる。思考も賢くも馬鹿でもない。つまり接していて不快にはならない。ある意味珍しい生徒だった。人は何か1つくらいは飛びぬけて優れた点があったりするものだが、赤石君からはそういった点を感じなかった。

彼と話すとき、私は彼の事をぜんぜん信頼していないけれど、彼は信頼するように、こちらに話を預けてくるのは、滑稽だった。ある意味、平田君よりも接しやすい生徒だ。……そう思っていた。

しかし、中間試験を通して、彼にも優れた点が1つあった。彼は人にものを教えるのが上手かった。単純な教え方は私の方が上だが、教えるための資料の集め方は私よりも上だった。それが、気に食わないと思った。全てにおいて私より下だった男が、たった1つとはいえ、突然私よりも上になったのだ。

勿論、その不快さは出すことなく、彼を褒めたたえた。彼は良く言えば良い人で、悪く言えば単純だ。私の称賛を聞くと、赤石君は尻尾を振った犬のように喜んだ。

——赤石君に喜んでもらって良かった。

犬に餌をやったと思えば、気も晴れた。それに彼は純粋な学力では私よりも一回り下だ。つまり、馬鹿に教えることに長けているだけだ。私は再び落ち着きを取り戻し、平田君や赤石君、そして赤石君の勉強班の相手をしていった。それで終われば、良かった。

初めての勉強会で、私は正気を失いそうになった。理由はみーちゃんだ。

彼女は幸村君と一緒に学力が良いが他は致命的だった。ただ、彼女は幸村君以上に単純で間抜けで、その上、数々の隠し事を私に話してくれた。そのことが私の優越感をよく満たしてくれた。

みーちゃんは平田君の事が好きだ。いや、好きだった。彼女はあまりにも単純で馬鹿だった。入学式の時に少し平田君に親切にされた

ことが理由で、彼に惚れているという事だった。あまりにも馬鹿で哀れで、見ていて楽しかった。ただ、一方で彼女は思い込んだら一直線だった。

軽井沢さんと平田君が付き合い始めてからもその思いは変わらな
いどころかささらに熟されていった。平田君や軽井沢さんのグループ
と遊びに行くときには何度も平田君に近づこうとしていた。こま
までくると、哀れみからくる優越感よりも、その場を安全に処理しな
ければならない徒労感の方が大きかった。みーちゃんが何かをしよ
うとする度に私が何度も動くはめになった。女子というのは僅かな動
きにも敏感なのだ。おまけにクラスで一番のベストカップルの事だ。
皆が注目している。それに土足で入るのは、大きな事件を呼ぶ。

そんな、爆弾のようなみーちゃんだったから、私は彼女を赤石君の
グループに押し付けた。私は私で、男子たちの相手をしなくてはい
けなかったし、平田君のグループに入れるわけにもいかなかった。だ
から、赤石君がみーちゃんを平田君のグループに入れようとしたとき、
止めようとしたら、みーちゃん自身が赤石君のグループに残りたいと
言った事が私にとっては衝撃的なことだった。

みーちゃんは平田君の性格に惚れたと言っていたが、そんなのは建
前だ。ただ単にスペックが高く外見が良い彼に惚れただけだ。あ
の周りを省みない行動もそれゆえだ。それが、ちよつと教えるのが上
手だけの男のところに残りたいと言った事が信じられなかった。
私の特技の1つである観察眼が破れたようで、そして、みーちゃん、い
や、王美雨という1人の人間が私に牙を向いたように感じられた。

当然、そんな事はない。ただ、みーちゃんも成長しただけだ。平田
君への恋心と友人である私に依存していた彼女から、1人の自律した
人間へと。そんな成長、しなくていいのに……

——みーちゃんが、ちゃんと自身の恋心と向き合えて良かった。
……それから何とか自分を落ち着かせた。ただ、その日はいつも以
上に憂鬱で勉強会が解散した後もそのことを引きずってしまった。

おまけに最後に赤石君が堀北さんの名前を強調してきたのは腹が
たつた。従順だった犬に突然手を噛まれた気分だ。その時の怒気が

出てしまったのか、彼は少しだけ私を避けるようになった。思った以上に思慮深い性格だったのかもしれない。気に食わない。

その上、彼の勉強会を受けた2人の成績の伸びはすさまじく、下位陣だった2人が中間試験では上位陣となっていた。もちろん2人しか相手がいない以上、そう難しいことではない。私も、池君……は少し難しいが、綾小路君や佐藤さんくらいなら集中しつと教えれば上位者にすることができらるだろう。

ただ、それでも彼に対する悪感情の芽は私の中で育っていった。

中間試験の打ち上げの時には、私も心の整理がついていて、彼もだいぶ落ち着いたのか話をする機会を得た。言葉を何度か交わすと、赤石君と前のように話をする事ができた。その上、さらに面白い話を聞いた。どうやら、赤石君は綾小路君とあの女のことを嫌いなようだ。大した秘密ではないが、赤石君は踏み込んだ話を他人にはしない。勉強会では避けられたと思っただ、結果としては彼の心を上手く掴めたようだ。

事前に協力してくれた寧々ちゃんには感謝だ。彼女がたまたま赤石君が機嫌よく炭酸飲料を購入する場面を見てくれたお陰で、スムーズに会話をすることができた。やはり数多くの友達がいる私は強い。信頼は力だ。ちなみに寧々ちゃんは表向きには仲の良いグループで実は嫌われているので、寧々ちゃんの事を心の中から信頼している人はいない。哀れだ。

——また、赤石君と仲良くお話ができて本当に良かった。

「はあく、やっぱり皆凄いなあく」

寮の部屋で溜息を吐いた。寮の壁の厚さは平均的なものだ。大声を出して悪態を吐くには少し薄い。まあ、もちろん、小声で悪態を吐く分には問題は無いけれど。

……少し前に屋上であの女の事を罵っている時に綾小路君に聞かれてしまったのは大きな失敗だった。あれ以降、自室で悪態を吐くようにしているが、大きな声が出せない分、不満も溜まる。何か発散できるものでも見つけた方がいいかもしれない。

——堀北さんは、私と友達にはなってくれないのかな……

彼女の見下したような目は私をいつも苛立たせる。きつと私の事を覚えているのだろう。私の本性に気づいているのだろう。気に食わない。優越感に浸ったようなあの目を抉り出してやりたい。

——どうしたら、私は堀北さんと友達になれるんだろう……

気が付くと、またあの女の事を考えてしまう。綾小路君はどうやって彼女と仲良くなれたのだろう。

7月1日。学校側の不手際によりポイントの配布が遅れた。はあ。困るな。軽井沢さんがこれを理由に返済を渋りそう。

その日は何事もなく終わったかと思っただが、お昼休みに篠原さんが赤石君にちよっかいを掛けていた。篠原さんは少し焦っているようだ。このクラスは軽井沢さんが女子における最大の派閥を形成している。女子にとっては数は力だ。篠原さんは軽井沢さんと仲が悪いわけではない。むしろどちらかと言うと良い方だ。でも絶対に敵対しないというわけではない。女子の世界は何時誰が誰を刺しても可笑しくは無い。そういった世界だ。だからこそ、力が欲しくなるのだ。

赤石君は女子の中では評価がそこそこな生徒だ。Dクラス以外では知名度は無いが、Dクラス内だと、総合力では平田君の次といった感じだ。運動も勉強もそこそこ良くて、人当たりも悪くないので、「キープ」相手にするなら良い感じだ。ただ、Dクラスの男子は色々致命的なメンバーが多い。スペックは有るけど他は最悪な高円寺君、顔は良いけど根暗な綾小路君など、欠点が必ず付随している。「欠点がない」という条件を付けると平田君と赤石君しかない。

でも赤石君を狙うのは妥協のようで、まだ1年の初めなのに妥協はしたくないと思う女子が殆どだ。どうせなら、一発狙いで平田君を狙いたい。大多数の女子がそう思っている。まあ、平田君の場合は他クラスや他学年からも狙われているけど。

そんな競争率が高い平田君を落とした軽井沢さんはその力で女子の多数を味方につけた。つまりは篠原さんも同じ方法をやろうとしているのだ。ただ、それが赤石君というのは、あまりにも馬鹿馬鹿しい。彼と付き合っても精々1人か2人しか仲間にはできないだろう。それに赤石君が平田君や軽井沢さんと争う姿も想像ができない。篠原さんは全ての意味で軽井沢さんに劣っている。見ていて楽しい。付き合つて少し不快な女の子だけれど、そういった面もあるから篠原さんもあまり嫌いじゃない。

それに言つては悪いが篠原さんには難しいだろう。赤石君は私や堀北さんにも性的な視線を向けてこないタイプだ。篠原さん程度じゃどう足掻いても無理だろう。もしかしたら何か特殊な性癖でもあるのかもしれないけど……あまり恋愛に興味が無いのかな？ 気取っているという感じはしない。

個人的には特殊な性癖でも私に晒してくれた方が、気分が良いけど。まあ、赤石君はそこまで期待できないかな。

ただ赤石君の恋愛事情は少し困った問題でもある。原因は惚れっぽいみーちゃんだ。どうやら、今度は赤石君に惚れたらしい。最初に私に報告しに来たみーちゃんは犬のように忠実で、悪くはなかったけれど、「またかあ」という声を抑えるのに苦労した。

——みーちゃんの恋、今度は上手くいくといいな。

みーちゃんにもきつと赤石君は落とせないだろうな。私だったらどうやって落とそうかな？ 本気を出せば簡単に落とせるけど……まあ、赤石君の事は恋愛対象として見た事はないし、どうでもいいかな。

その日の放課後は、須藤君に頼まれて綾小路君の部屋に向かった。須藤君がまた厄介事を持ってきたらしい。少し悩んだ後、2人に許可を取り赤石君に電話をかけることにした。あまり力にはなれない人選だけど、折角握った手綱を離すのも勿体無い。こういう時に頼つて関係性を深めておくのがいいかな。コールが何回か鳴つても彼は出なかった。どうも赤石君はデジタル関係に弱いのか、端末が繋がらない事が多い。これは、彼の数少ない不快な点の1つだ。

赤石君に電話をかけ終えた後、綾小路君がこちらを少し睨んだ気がした。彼は根暗だが年相応に異性に興味がある。この前、触らせてあげた事でも思い出したのかな？

——ははっ、私は赤石君とは何も無いよ。綾小路君。

7月2日。須藤君の暴力事件が広まった。正直な話。私はあまり須藤君を信じていない。けれど、わざわざDクラスのクラスポイントを減らすような事態は放っておけない。その日はホームルームの後、事件の情報を募ったが、得られたものは無かった。

昼休みになると、私は堀北さんや綾小路君、それと池君と山内君と須藤君と一緒に作戦会議の為に食堂へと向かった。しかし途中で空気を読めない堀北さんが抜けた。彼女の言いたい事はなんとなくわかった。でも、大事なのは須藤君が間抜けかどうかではなくて、Dクラスのポイントが減らない事だ。綾小路君も堀北さんも問題の本質をちゃんと認識していない。まあ、根本的にあの2人は他人なんて気にしてないかな。

——綾小路君も堀北さんも須藤君を助けたくないのかな……

放課後になると、私はすぐにでも帰りそうな綾小路君を引き留めて、堀北さんのあとを追った。彼女と言葉を交わしたが、言いたいことは想像通りだった。はあ……変な所で清純だよね。堀北さんは。須藤君の成長なんて考えるのは後でいいのに。綾小路君はとぼけた顔をしていたけど、堀北さんとは以心伝心なのか、分かっているようだった。ふーん、そう。2人で私の事を見下してたって事？やっぱり、この2人と一緒にいるとストレスが溜まる。

その日は男子3人とBクラスで情報を集めたけど、得られたものは無かった。明日は気晴らしが必要かな。うん。みーちゃんに電話しておこうかな……

7月3日。ホームルーム前から平田君たちのグループとの情報交換を行った。けれど、得られたものはなかった。どうでもいい事だけど、池君や山内君は女子と話せて嬉しそうだった。彼らは愚かで私の優越感をよく満たしてくれるけれど、頭が悪すぎて話をする和不快になる類の男子だ。

ただ、そんな2人よりも今の私には少し気になることがあった。どうも、赤石君は昨日平田君たちと行動したらしい。少し意外だった。平田君の頼みを断らなかつた……それだけなら気にならないけど、もし、篠原さんを意識していたのなら問題だ。赤石君がブス専だとは思わなかつたけど……

困つたなあ。赤石君は現在、平田君寄りの中立だ。変に今の位置から動かすのはクラスが揺れる。私は前、「赤石君が動いても女子は1人か2人しか動かない」と言つたけど、それは戦力としてあまり向上が見られないというだけで、人間関係としてみると大きな爆弾なのだ。女子の派閥が1人動いただけでも、人間関係は歪む。歪んだ関係はさらに新しい歪みを生み出し、連鎖的に崩れてしまうことが……女子ではよくある。

だから方針としては、赤石君の派閥における位置はこのままで、私が少しずつ裏から飼いならしていくのがベストだったんだけどなあ……はあ。やっぱり篠原さんみたいな頭がついてない子は面倒だなあ。何をやっても今更、これ以上の上は目指せないのに……

篠原さんのグループ（といっても佐藤さんを除いたメンバー）は情報交換の時も、少し赤石君の方を伺つていた。一方で当の赤石君は静かに席に座つていた。情報交換に参加する気はないようだ。まるで興味が無さそうだ。うーん、難しいなあ。

——皆で仲良くするにはどうすればいいのかな……

……仕方ない、かな。気晴らしのつもりだったけど、少しだけみーちゃんの恋を応援しようかな。

昼休み、私はみーちゃんに頼まれて、赤石君をお昼に誘った。まあ、昨日、みーちゃんが私を頼るように誘導しただけなんだけどね。

「赤石君、今日は学食だったりする？」

今日の赤石君はいつもとあまり変わらない。けれど、私が声をかけると、少し気の抜けたように見えた。

「ええっと、そうですね。昼飯を作り忘れてしまったので、そうしようかと思っています」

僅かに笑みを浮かべていた。誘って貰えて嬉しいようだ。こういった単純な所は気に入っている。

「そうなの？それならお昼ご飯一緒にどうか？……？」

「ええ、喜んで。でも、珍しいですね。櫛田さんはよくお弁当を作ってきていたと思いましたが」

調教済みの犬、……とまでは言えないけれど、私は彼に対して強い影響力を持っている。勿論、ある一定以上は持つつもりは無い、彼が勘違いすることは無いだろうが、周囲の人間に騒がれでも面倒だ。そこそこの距離、つまりは表向きは平田君くらいの距離を維持する。でも、裏では少しづつ影響力を強めていく。今日、これから行うこともその布石だ。

「あはは、実はみーちゃんが学食に行ってみたかっただけだったから……みーちゃんも一緒だけど、いいよね？」

実は、これが最初にして最大の難関だ。赤石君は私にはだいぶ懐いたが、みーちゃんとの相性は、私にもいまいち分からない。

「ええっと、大丈夫ですよ。ということは俺と櫛田さんと王さんの3人でということでしょうか？」

通った。どうやら、赤石君はあまりみーちゃんの事を悪くは思っていない。無さそうだ。

「あと、心ちゃんも呼ぼうと思ってるけど駄目かな？」

一応、心ちゃんも呼ぼうとは思っている。彼女は私以外には全く心

を開いていない何もできない少女だ。一応みーちゃんとはそこそこ喋っているみたいだけれど……できるだけ一緒に居ないと不安にさせてしまうだろう。現状、心ちゃんは私に忠実である以上、孤独にさせる気はない。

ただ、赤石君の出方次第では、今日だけは心ちゃんには1人でお昼を取ってもらおうかな。ごめんね。

「いえ、そんなことはありませんよ。井の頭さんとは中間試験の勉強会以来ですから、久しぶりな気分です」

赤石君は特に興味も無さそうに言った。言葉では久しぶりと言っているが、どうでもいいという意図を感じる。中間試験であれだけ教えた相手だけれど、あまり好意は抱いていないようだ。彼も馬鹿を相手にするのはあまり好きではないようだ。どうやら、勉強会の一件は平田君との友情だけで引き受けたみたい。やっぱり赤石君は平田君寄りの中立だ。そして女子では私が一番親しい。現状の認識はこれで十分かな。

……彼が篠原さんのグループの影響下になってしまうと、クラスに不和を呼び込むことになる。それに、せつかく手綱、うーん、馬というより犬っぽいからリードかな？リードを握ったのだから、篠原さんに渡すのは勿体ない。でも、私が強くリードを握っている事は赤石君以外は知らなくていい。

だから、みーちゃんに握ってもらおう。いや、正しくはみーちゃんという首輪を赤石君に嵌めて、そのリードを私が握るの方が正しいかな？まあ、どっちでも同じかもしれないけど。

——うん！みーちゃんの新しい恋を応援しないとっ！

榎田桔梗の策謀2―2

私たち3人は赤石君を連れて学食に着いた。

予想通り、混雑していたため、私は前もってみーちゃんと話した通り席取りを行うことにした。みーちゃんの計画では麺類コーナーに2人で行くという話だったけど、正直失敗すると思う。でも、やる気があるのは良い事だ。

私としては、みーちゃんには頑張って赤石君を縛ってほしい。私がみーちゃんを、みーちゃんが赤石君のリードを握れば、Dクラスは今のまま壊れないし、それにもしかしたらあの女を排除する時に使えるかもしれない。

赤石君にうどんを頼み席取りを行う。本当は麺類の気分ではなかったけど……

彼が好きそうな人が少ない席を4人分確保する。それからしばらくすると心ちゃんが魚定食を持って来た。意外な事にみーちゃんは上手くいったみたいだ。

さらに待つと、赤石君とみーちゃんが戻ってきたが、少し様子が変わる。

「榎田さん。席取りありがとうございます。どうぞ」

そう言っつて、彼はうどんを渡してきたが……彼は野菜炒め定食だった。麺類に誘うのは失敗したのかな……？まあ、みーちゃんの嬉しそうな顔を見ると結果的には一緒に回れたようだ。

「赤石君は野菜炒め定食が好きなの？」

「ええつと、まあ、嫌いではないですね」

「そうなんだー、それなら、もしかして山菜定食も食べた事あったりする？」

「いえ、まだありませんね。何時かお世話になる可能性を考えると、早いうちにも思っているのですが……」

みーちゃんにリードを渡すまでは、こういった適度な雑談は大切だ。私から強く攻めすぎるのは外聞もあるので避けたい。しかし摺

んだりリードをあまり緩めるのも良くない。バランスが大事だ。

その後、皆で座って雑談をしながらも食事を取っていく。意外な事にうどんは結構美味しかった。一味の辛さが丁度いい具合だ。赤石君が上手くトッピングしてくれたみたい。こういった気遣いができる点は嫌いじゃない。

3人で話をしつつ、赤石君の様子を伺う。彼は、こちらの会話を邪魔しないようにしているようだ。普段ならこのままでも良いが、今日はみーちゃんと赤石君の接点を強固にするための日だ。

「そういえば、赤石君は中間試験どんな感じだった？」

赤石君がこちらを見るが、それより早くみーちゃんが行動を起こした。

「あ、あの赤石君は英語が82点で……」

ちよつと思っていたのは違っただけだな。

私は事前にみーちゃんに赤石君を攻略する方法をいくつか教えておいた。彼は性格は穏やかで落ち着いている。つまりは控えめな性格だ。あまりぐいぐいと女子を引っ張っていくタイプではない。そのため、彼を落とすための第一条件としては、こちらから積極的に行く必要がある。篠原さんのグループとの折衝も考えると、赤石君に早めに名前を書いておくという意味においても有効だ。

まあ、元からみーちゃんは見た目によらず、思い詰めたら一直線な子だ。平田君相手の時には肝心な時に勇気が出なかったみたいだけれど、赤石君相手なら尻込みすることもないだろう。そういう意味では赤石君と相性は案外悪くないのかもしれない。

ただ、英語の点数で話を盛り上げようとするセンスはちよつと無い。まあ、多分、得意な勉強でリードを取りたいって事なのかもしれないけれど、悪手かな。

「そうだったんだ。ちよつと意外かなー。赤石君って何でもできるイメージあったけど得意不得意もあるんだね」

一応持ち上げておく。中間試験の打ち上げで堀北さんを悪く言っていた事を考えると、彼もプライドが無いというわけではない。まあ、Dクラスでは低い方だけだ。

「ええ、まあ、色々ありました」

そう言いながら、赤石君は心ちゃんの方を見た。気にしていない風を装っているが、私にはわかった。ふうん、どうも、できなかったのは勉強を教えたからと言いたいみたい。ただの実力なのにね。こういう節々に垣間見える彼の醜さは私の優越感を満たしてくれる。

「みーちゃんは英語は100点だったんだっけ？」

試しに、赤石君の表情を見ながらみーちゃんの点数を言う。中間試験の打ち上げでは2人の間で口論になった所らしい。しかし、あまり不快に思っているようには見えない。流石に100点は無理だと思っているみたいだ。赤石君には90点もきつと無理だよ。

「うん……桔梗ちゃんは何点だった……？」

みーちゃんは知っているはずの私の点を聞いてきた。こういう所は彼女の汚点の1つだ。犬を2匹も飼うのは大変だ。

「90点だったよ。赤石君より8点、上かな」

苛立っていたわけではないが、少し突っついてやる。

「いや、まあ。櫛田さんや王さんには勝てませんよ。というより、これなら勉強会の時は俺じゃなくて王さんが教師役をやってもらった方が良かったかもしれないね。……櫛田さん、期末試験は勉強会を開くんですか？」

赤石君は少し笑うと、勉強会の話へと切り替えた。やっぱり私に噛みつく牙は抜けているみたいだ。まあ、そうなるように私が仕向けたんだけどね。

「うーん。どうだろう。平田君は開くと思うから、私も参加しようと思ってるけど……」

「それなら、次は平田君と櫛田さんと王さんの3人で教師役をやるの良いと思います」

そう言いながら赤石君はまた心ちゃんを見た。自分の方が教えるのは上手いと思ってるみたいだね。うん。そうだね。そこだけなら赤石君が一番だよ。でも、赤石君は馬鹿に教えるのが上手いだけだよ。

……完全にプライドが無くなるのも良くないし、この点だけはしつ

かり褒めておく必要がある。飴と鞭というやつだ。

「えーあの、私は教えるのはちよつと……」

みーちゃんがそう言うのと、赤石君はかすかにみーちゃんの方を見たあと、視線を下へとやった。優越感を感じたのかな？そして、その後、少し悪いと思つて下を向いた。あははっ、赤石君は分かりにくいように見えるけど、私の観察眼は誤魔化せないよ。

「確かに、みーちゃんが教師役は向いてる気がするけど、……でもみーちゃんが大変そうなら無理やりは頼めないかな」

そう言つてあげると、赤石君は期待するようにこちらを見た。餌を欲しがらる犬のようだ。

「だから、期末試験も赤石君にお願いできないかな？」

私の声を聞くと、彼は堪えきれず笑み漏らしていた。

「どうでしょう……？最近授業も難しくなつてるので、教える側に回れるかどうか心配ですし……なかなか難しいと思います」

どうやら、もう少し飴が欲しいようだ。欲張りな犬だ。でも、今は機嫌がいい。

「そっか、……でももし、できたら皆に教えてくれると嬉しいな……」

明るさや角度を計算して、しっかりと演出をする。少し本気を出し過ぎたためか、彼の視線は私ではなく、テーブルを見つめていた。赤石君には刺激が強すぎたかな？

その後、少し雑談を挟んだ。途中で野菜についての話題を振つた後、せつかくなので、次の予定を決めることにする。理想は週2回のペースがいい。

「そっか、……それなら、今度皆で山菜定食、食べない？どうかな？」

赤石君とみーちゃんは野菜が好きらしい。みーちゃんには頑張ってもらいたいところだ。

「う、うん。山菜定食は美味しく無さそうだけど……いつか食べるなら、……早いうちに皆で食べた方がいいよね」

嫌いな食べ物よりも気になる男子を優先させたみたいだ。さすがは一直線なみーちゃんだ。赤石君は少しみーちゃんを見ていた。う

ん？違う。ラーメンの上の小松菜を見ていた。うん。確かにまず、それを処理した方がいいね。でも、みーちゃんは勘違いをしたみたいで、赤石君に対して頷いていた。

「えっと、桔梗ちゃん。あの、私は大丈夫だけど、……赤石君は忙しくないですか？」

心ちゃんは臆病だけれど、怖い事が無ければ基本的に私に同意する。赤石君にはある程度慣れたみたいだ。

……でもまだ、赤石君が男の子だからか、心ちゃんの視線に恐怖が含まれているように感じる。2人とも、勉強会で一緒だったのにお互いの事をまったく理解していないみたいで面白い。心ちゃん、赤石君は危険が少ないから大丈夫だよ。赤石君も……あー、駄目だ。心ちゃんはあんまり良い所が無いから紹介できないや。まあ、心ちゃんにわざわざ赤石君の事を説明する気はないけどね。

赤石君は心ちゃんに話を振られたが、どう答えたらいいか悩んでいるみたいだ。意外と冷たいね。まあ、心ちゃんが相手なら仕方ないけど。

「赤石君は何時もお昼は教室だから、いいよね？」

遠慮しがちな所は不快ではないが、今は遠慮しなくていい。

「ええっと、実は……明日はやる事があるので……すみません」

本当に申し訳なさそうにしていた。どうやら先約があったみたいだ。篠原さんかな……思ったより彼女も頑張るなあ。

「なら、須藤君の一件が終わってからなら大丈夫かな？」

「そうですね。須藤君の冤罪を晴らしたら、その記念としていいかもしれませんね。山菜定食が記念というのは少し可笑しな気がします……」

……次のプランを考えておかないとね。

——うん！今日も皆で仲良くお昼ご飯を食べて、嬉しいなっ！

放課後になると、私は再び綾小路君を呼び止め、須藤君の暴力事件の調査を行った。須藤君と赤石君、両方のトラブルを解決するには今頑張る必要がある。須藤君の方は実入りが少ないけど、赤石君の方は将来的な布石にもなる。手は抜けない。

私は徒労感を感じながらも放課後の調査を終え、そして、堀北さんを除く皆で綾小路君の部屋に集合することになった。

しばらく無意味に今後の情報収集について話し合っていると、チャームが鳴った。堀北さんが来たというのは分かった。

私は、玄関に向かった綾小路君のあとを追い、すぐに帰ろうとする堀北さんを引き留めた。須藤君は堀北さんを見ると感激していた。池君と山内君も少し驚きつつも、歓迎しているように見えた。本当にこの女は………なんか、気持ちを抑える。

——堀北さんが来てくれて良かった。

それから、堀北さんが何時もの様に皆を見下しながらも講釈を垂れてくれた。彼女が言うには佐倉さんが目撃者のようだ。推測だけではなく、態々昨日のお昼休みに佐倉さんに聞きに行ったそう。お昼休みに勝手に会議から抜けたと思っていたが、彼女は自分で調べていたようだ。

……気づかなかった。やっぱり、どうやら私は堀北さんよりも下のようだ。いつも考えないようにしていることを彼女は私に見せつけてくる。まるで獲物を虜る鷹のようだ。ううん、彼女は何時も自然な仕草だ。きっと私がどう思っているのか気にもしていないのだろう。

——堀北さんみたいな凄い人が協力してくれれば、すぐに須藤君の冤罪を晴らせるのに……

佐倉さんは私もあまり詳しくは無い。地味な子だが、私に庇護を求めることはしなかった。だから心ちゃんとは違い、守つてやる気はない。彼女とは番号を交換したが、あまり話もできていない。最終的には秘密を握るつもりだが、まあ、軽井沢さんあたりが虐めてから仲裁すれば十分だろう。

佐倉さんについて、池君たちがまったく記憶に残っていない事を聞

いていると、不意に綾小路君が口を開いた。

「なあ、櫛田。佐倉は確か赤石と仲が良かったと思っただが、違うのか？」

「……？赤石君は中立だ。特定の女子に肩入れしていない。もしかしたら、綾小路君は何か勘違いをしているのかもしれない。ありそうだ。人間関係が乏しい綾小路君なら赤石君の事を平田君のような男子だと誤認してそんな気もする。」

「うん？どうだったかなー。あんまりお話しているのは見ないけど、でも佐倉さんって元々勉強会では赤石君の班だったから、意外と仲が良いのかも？」

私が答えると、一瞬綾小路君は何かを考えようとして止めた。綾小路君は意外と頭が回る。勿論、人間関係以外でだけけど。

「赤石君ね……綾小路君は随分彼にご執心ね。そういえば櫛田さんは赤石君と友達だったかしら？」

昼休みの事は知らないと思うけど……堀北さんは鋭いところがある。赤石君の事は不自然にならない程度に隠しておきたい。

「うん、友達だよ。綾小路君はもしかして、赤石君と友達になりたいの？」

もしそうなら傑作だ。綾小路君は自身を嫌っている相手と友達になりたいという事になるのだから。

「……あ、ああ。……そうだな。結構いい奴だし友達になりたいな」

綾小路君の喋り方はいつもより濁っていた。嫌われている自覚があるのかな。もしかして赤石君は結構嫌いな人には態度が出ちゃうのかな？

「綾小路君ならきつとなれるよ。赤石君も綾小路君も良い人だし、きつと相性も良いよ」

まあ、無理だけどね。他人には少し距離を取る赤石君が堀北さんと綾小路君の悪口になった時は随分と饒舌だった。よほど気に入らないのだろう。

「2人とも話が逸れてるわよ。赤石君と佐倉さんの話でしょ。まったく……」

呆れたように堀北さんは言った。

「そもそも、お前が榎田と赤石の関係を聞いたのが元だったと思うが……」

綾小路君が小声でつぶやくと、堀北さんは鼻を鳴らして無視を決め込んだ。綾小路君は相手にされていけない事に気づくと再び皆に対して口を開いた。

「ああ、そうだ。もし堀北の言うように佐倉が目撃者なら聞く必要があると思う。それで、榎田がさっき言ったように、あまり榎田との交流が無いなら、交流がありそうな赤石を交渉役にしようと思ったんだが……」

「まず、前提として、赤石君と佐倉さんの間に交流があるのかしら？あの2人が話をしているのを見た事はないわ」

私も勉強会以外ではない。たぶん綾小路君の勘違いだと思うけど……

「ずっと前に、プールの授業の時、見つめあっていた。赤石は女子と仲が良いし、多分佐倉とも仲が良いと思う」

綾小路君がそう言うと、堀北さんではなく男子3人が反応した。

「そういうえば、あいつ平田と一緒に軽井沢たちと調査に行ってたんだよな……男子2人に女子沢山。クソ、羨ましい！」

「俺、あいつ、あんまり好きじゃない。なんかスカしてるし、平田の物真似的なこととして、ウケてるだけっていうか、大したことないって感じ」

山内君と池君は醜い嫉妬心を出していた。単純で扱いやすいけど、やっぱり馬鹿過ぎると使い道に困るかな。

「堀北、一応言っておくけど、俺はちゃんと筋を通すっていうか、まあ、平田や赤石のような軟派なヤツらとは違うからな」

須藤君がまた堀北さんに近づいたが、その分だけ堀北さんは距離を取った。須藤君は使い道次第だと思ってたけど、ここまで堀北さんの事が好きだと使いにくいかな。

「馬鹿な事を言っていないで、話を戻すわよ。つまり綾小路君は赤石君が佐倉さんを誑かしているから利用できると言いたいよね」

「別にそこまでは言っただけではない。ただ、ここにいるメンバーの中では佐倉相手に榎田以外では唯一コンタクトを取れそうな相手だと
言っている」

「はあ、まあ、いいわ。そんなに言うなら貴方が連絡しなさい」
「悪いが、オレは赤石の連絡先を持っていない。榎田が頼りだ」

そう言っただけで綾小路君はこちらを見た。まあ、綾小路君の人脈だと知らないのは当然か。今日は珍しく、綾小路君の相手をしていてもストレスが溜まらない。

「呆れた……結局は榎田さん頼りなのね」

「私は全然いいよ。えっとじゃあ連絡するね」

端末を使い赤石君の番号にかけるが、繋がらなかった。何回か試すも全て駄目だった。やっぱり彼はデジタルが苦手なようだ。一応メッセージを飛ばしておく。

「うーん、ごめんね。繋がらないみたい……」

堀北さんは私の言葉を聞くと、いつもの見下したような笑みを浮かべた。

「ここはピエロの集まりかしら？」

「何もしてないお前が言うな」

「私は無駄な努力をしている貴方達の代わりに情報を届けただけで、愚かな真似は一切していないわ。第一、赤石君に頼るのはあまり有用とは思えないわね」

綾小路君と話せて、堀北さんは何時もより饒舌だ。やはり彼にはある程度心を開いてるようだ。

「そうかな……赤石君は頼りになるよ」

今回の件に関しては赤石君が頼れないことは同意見だけど、今後の事を考えると、ある程度持ち上げておかないと不自然だ。

「そんなつー榎田ちゃん。あんな口だけのやつにー！」

口だけね……まあ、気持ちはわかるかな。でも池君と赤石君の関係は、篠原さんと軽井沢さんの関係と一緒だよ。片方が圧倒的に上。それだけ。

「池君、赤石君は口だけじゃないよ。平田君と一緒にいつも皆のこと

を考えてるよ。池君にも分かって欲しいな」

一応窘めておく。今後、私は赤石君との交流が増える。変に暴走されたら面倒だ。

「う……いや、ま、まあ赤石が結構できるやつっていうのは、うん、まあ知ってたし」

「帰っていいかしら？」

堀北さんは一度皆を見回した後、冷たく言い放った。赤石君の連絡待ちである以上、彼女が帰ってしまうほうが早いかもしれない。一応、平田君にもメッセージを飛ばし、赤石君への伝言をお願いした。無いと思うが、私からのメッセージの返答で迷っていた場合は平田君に押ししてもらおう必要がある。

「まあ、待て。せめて赤石から情報を貰ってからにしよう。櫛田も言ってたし、池もそうだろう」

綾小路君がタイミングよく池君を巻き込んだ。やっぱり男子たちの中では1枚上手だ。

「え、いや、ん……そ、そうだな！賛成！赤石は結構できるやつだし！堀北も偶には待ってもいいんじゃないか！須藤もそうだよな！」

当然、池君はさっきの反動で赤石君を持ち上げる。やっぱりこの単純さはある意味貴重だ。

「まあ、俺は堀北が居てくれるなら……」

綾小路君は須藤君の方を呆れながら見ると、堀北さんに語り出した。

「なあ、堀北。なんでそんなに赤石の評価が低いんだ？」

「前に説明してあげた事をもう一度する気にはなれないわね」

「中間試験、井の頭と外村は上位陣だったぞ。2人の小テストの成績は知ってるよな」

「え！博士って上位陣だったのか」

山内君は当然知らなかったようだ。

「2人が急成長したことは知っているわ。お陰で須藤君が退学になりそうだったわね。まあ、それは仕方ないことだけれど……急成長したのは2人の努力が大きいんじゃないかしら？赤石君の方針が良かった。」

たかは分からないわね」

「何！俺が退学しそうだったのはあいつらのせいだったのか……！」

「いや、それは須藤が馬鹿だったからだろ」

須藤君が山内君に襲い掛かったけど誰も止めなかった。

「なら聞くが、俺たちが赤点じゃなかったのも堀北のお陰ではなく、俺たちの努力ってことでいいよな」

「そういった考え方もあるというのは理解しているわ。まあ、私がいなければ、そもそも勉強会に参加していない人たちがどうなったか分からないけど」

「なら、その部分だけでも評価してやらないのか。赤石だって外村と井の頭を勉強会に参加させたぞ」

「外村君と井の頭さんは貴方達よりも従順だわ。勉強会に参加させるのは遥かに簡単なはずよ」

そこまでいった所で、メッセージが届いた。もう少し2人の言い争いを聞いても良かったけど、回りの3人が困っているし、伝えたほうがいいだろう。

「あっ！赤石君からメッセージが来たよ。うーんと、そこまで親しくないみたいだけど、でも聞いてみるね」

赤石君に電話をかけると、当然1コールで出た。

『もしもし、赤石です』

少し申し訳なきような声だ。まあ、面白いものも見れたし、許してあげるよ。赤石君。

「あー良かった。やっと繋がったよ」

「よし！櫛田、貸してくれ！俺がガツンと言ってやるから！」

電話が繋がると、須藤君が素早く手を伸ばしてきた。堀北さんと話せなくて鬱憤が溜まっていたようだ。だが須藤君と赤石君はどう考えても相性が悪い。

「ええっと、須藤君待って、どうしよう？」

状況的には、綾小路君に渡すべきだろう。まあ、赤石君は綾小路君を嫌っているが……この状況なら赤石君も私が本意ではないと思うだろう。それなら十分だ。むしろ綾小路君に渡せばもつと面白いも

のが見れるかもしれない。

私は綾小路君の方を向き、アイコンタクトを送った。

「綾小路君……え？いいの？ええつと、堀北さん!」

しかし、綾小路君は、手を前でクロスさせ、大きくバツテンを作った。そして、何を思ったのか、それを見た堀北さんは私から端末を奪った。

「赤石君、少し聞きたいことがあるのだけれど、いいかしら?」

堀北さんは殆ど確認を取る間も与えず、矢継ぎ早に質問をした。

「赤石君、貴方は佐倉さんと仲が良い?イエスカノーで答えなさい」

彼女はいつも通り高圧的な態度だ。赤石君のなけなしのプライドを刺激してくれるだろう。少し不快だけど、赤石君がより堀北さんを嫌ってくれるなら、結果としては悪くないかな。

「そう、ありがとう。どうやら誤報だったようね。皆、見栄っ張りの綾小路君の勘違いよ。赤石君はやっぱり使えなかったわ」

結論が出たのか堀北さんは最後に吐き捨てるように言うと、端末を私に返した。おそらく最後の言葉も赤石君には聞こえただろう。……ここまで行くと、端末を渡した私に対してまで悪感情を抱きそうだ。堀北さんは私の計画を分かっててやってる……わけではなさそう。けど本当にやる事なす事が私の邪魔をする人だ。

「えつと、そのごめんね赤石君。もう大丈夫。突然連絡して本当にごめんね。みんなちょっと焦ってて」

端末を取り返した私は、声のトーンをいつもより調整して話しかけた。

『あ、いえ、大丈夫です。だいぶお忙しいようですね』

幸い私に対しては悪感情を抱いてはいないようだ。

「うん。ちよつと揉めててね。堀北さんの質問に答えてくれてありがとう。赤石君。また明日、学校で」

『ええ、また明日』

電話を切ると、再び、男子たちが騒ぎ、そして騒乱に紛れて堀北さんが立ち去った。その後は大して有益な成果を上げることもなく時間を浪費した。

自室に戻った後、みーちゃんからメールを処理する。今日の自分はどうかだったか、赤石君とは上手くいきそうかといった恋の相談文だ。今日の赤石君を見た感じ、少し難しそうだ。赤石君はみーちゃんよりも殆ど意識を私に向けていた。彼はあまり性的な視線を女子に向けないタイプだけど、それでも外見は多少は気にするだろう。

私からみーちゃんにリードを託すのは難しそうだ。

現状、篠原さんの方が仲が良さそうだ。やはり彼女は赤石君と席が隣の分、有利だ。みーちゃんには頑張ってもらいたいけど、場合によつては計画を変える必要があるかもしれない。篠原さんのグループが持つていくのはDクラスの危機になるかもしれないから無しだ。かといって、これ以上軽井沢さんのグループが力を持つのは考えものだ。私のグループで赤石君と相性が良さそうなのはみーちゃんぐらいだ。中々良い候補が決まらない。

赤石君の事を本命にしているのはクラスでは一応みーちゃんだけだ。どこにも所属していない佐倉さんか堀北さんあたりとくつつけば逆にクラスは安全になるかもしれない。まあ、堀北さんは色んな意味で有り得ないから、佐倉さん一択だけど……せつかく握ったリードを私の影響力が及ばない人に託すのは抵抗がある。

うん。須藤君の事件の目撃者という話もあるし、佐倉さんとは近いうちに「お話」する必要があるし、佐倉さんとは近い。

——佐倉さんとはどうやったらずら仲良くなれるかなっ！

一応、みーちゃんにはデートのセッティングをしてあげよう。次の作戦は買い物にしよう。そう考えた私はみーちゃんと、心ちゃんへとメールを打つのであった。

榎田桔梗の策謀2―3

7月4日木曜日。朝早くから学校に登校した私は廊下で赤石君を待ち、彼が来るとすぐに声をかけた。

「赤石君。おはよー!」

笑顔を携えて彼に挨拶をする。

「おはようございます。榎田さん」

そう言うと、彼は少し俯き教室を目指した。昨日の件で罪悪感を感じているのかな。ちよつと首輪を強く絞め過ぎたみたい。このまま窒息死されても困るし、緩めてあげよう。

私はさり気なく、彼の腕を掴み体を寄せた。お互いのパーソナルゾーンに入るが、当然、彼は不快感を感じていない。私も感じないように努力した。この距離に人を入れるのは本当は私にとっては不快だ。まあ、おそらくクラスの男子では赤石君が一番不快ではないが、それでも不快だ。でも今は大切な事だ。

「赤石君。実は今度の休日、みーちゃんと心ちゃんとシヨツピングに行こうって話になったんだけど。男の子の意見も聞きたいから……赤石君も一緒に行かない?」

さつそく本題に入ることにした。不快な距離での話は手早く終わらせるに限る。首輪を緩めた分だけリードは強く引かせてもらうよ、赤石君。

「楽しそうでいいですね。……ただ、休日ですか。すみません実は土曜日は先約があるので、俺が参加できるのは日曜日になると思います。が、どうでしょうか?」

やっぱりこの距離で話すと、あまり性的な目をよこさない赤石君にも効く。これが効かないのはDクラスでは平田君と三宅君くらいだ。「うん!良かった。実は私たちも土曜日は忙しいから、日曜日にしようと思ってたんだー。じゃあ、赤石君、日曜日の10時に集合でいいかな?」

本当はみーちゃんの予定が厳しいが、無理にでも変えてもらう事にする。

「ええ、大丈夫です、はい」

彼の返事を聞いたあと、直ぐに手を離れた。この距離ですつと一緒にいるのは辛いというのもあるが、一番の理由はボディタッチの安売りは厳禁だからだ。せっかくの貴重な手段なのだから、出し惜しんだ方がいい。その方がより価値が生まれる。そして、ここぞという時に使う。みーちゃんにはこういう狡猾さが足りない。

昼休みにみーちゃんと心ちゃんと相談して、日程に再確認を行った。ただし少し気になる事があった。この日は赤石君が昼休みにどこかへ行ってしまったのだ。篠原さんのグループに動きは無かった。自信はないが、軽井沢さんのグループもちよつかいをかけているようには見えなかった……赤石君の約束の相手は誰なんだろう？

もしかして、他のクラスの子かな？いや、それは無いか……今度機会があつたら問い詰めてみよう。

自分のグループと赤石君、そして須藤君の事件に目撃者の佐倉さん、色々と気を回し過ぎてしまった。それゆえに、私は放課後少し強めに佐倉さんに近づいてしまった。案の定佐倉さんは逃げ出してしまい、そして本堂君と衝突してしまった。

佐倉さんのカメラが壊れてしまい、彼女は逃げるように去っていった。そして須藤君がまた理不尽なことを言っていた。それだけならどうでも良かったけど、運悪く高円寺君が会話に入ってきた。面倒なことになった。徒労感を感じながらも私は平田君と一緒に怒る須藤君を静めた。

その後、綾小路君が教室内にカメラが設置されている事を指摘してた。カメラは小型でかなり設置場所に気を使っている為、私は今まで気づけなかった。でも、確かに、カメラでもないDクラス内で起こった不真面目な行為による減点は全て処理するのは難しそうだ。やっぱり綾小路君は鋭い。それに堀北さんも小テストのポイント発

表には気づいたらしい。

……やっぱりこの2人は私を不快にさせる。平田君や高円寺君も気づいてそうだ。私にとっては赤石君くらいの不快にならない平凡さが接する相手としては丁度いい。彼はきつと今もこんなカメラがある事には気づいてないだろう。今度教えてあげてもいいかもしれない。うん。堀北さんを排除するときには赤石君を利用することになっても、捨て駒にはしないであげよう。

金曜日はこれまでとは打って変わって平凡な日だった。

夜になり、私は佐倉さんに電話を入れ、彼女とカメラの修理の約束を取り付けた。運悪く日曜日になってしまった。その後、綾小路君に連絡して佐倉さんが提示した条件を満たさせた。

しかし、困ったことになった。赤石君は私が誘ったから買い物に約束を受けた。本当なら私が行く必要がある。でも、いつかはみーちゃんか1人で頑張らないといけない。うーん、でも夏休みまでもう時間も無いし、みーちゃんには覚悟を決めてもらおうかな。

みーちゃんに私が参加できない事と日曜日に勝負をかけるようにメールを送った。ついでに心ちゃんには休んでもらうために中止になったと嘘のメールを送る。まあ、彼女は私がいらない以上参加はしないだろうけど、一応私から伝えた方が安心するだろう。そして最後に赤石君にもメールを送った。

少し不安だけれど、私は私で佐倉さんと綾小路君と話す必要もある。

……夏休みが来れば平田君を諦める人も増える。妥協で付き合う相手を選ぶ子も出るかもしれない。女子としてのスペックが低いみーちゃんはもう勝負をかけるしかないのだ。

日曜日、私は綾小路君と佐倉さんと一緒に買い物へ出かけた。私の私服姿を見た綾小路君はやけに興奮していた。彼は普段は冷静で鋭い面を持つが、異性に対しては赤石君や幸村君以上に弱い。せっかくなので先週池君たちと遊んだことで煽ってみたら、良い反応を返してくれた。綾小路君はこういう面では単純だ。

私の本性を知らなければ、彼を籠絡することも考えたけど……：：：：：難しい。でも、今日の反応を見ると、私の本性を知っているにしているには脈がありそう。場合によっては綾小路君は堀北さんを打ち崩す重要な駒になるかもしれない。うん、考えておこう。

集合場所で着込んだ佐倉さんと合流し、家電量販店へと向かった。途中で綾小路君が唐突に周囲を確認してから不思議そうな顔を作っていた。何かあったのか尋ねても「いや、視線を感じて……」と格好つけていた。言葉にはしなかったが漫画の見過ぎだと思った。けど佐倉さんが乗ってしまったて、何処からしたのか尋ねていたが、当の綾小路君は恥ずかしくなったのか「いや、分からなかった。気のせいかもしれない」と返していた。

私が中学生だった頃も、そうだった事を言っていた男子生徒がいた。彼は元気だろうか。確か彼は初恋の女の子に実は嫌われていて大変な事になっちゃったんだよね。まあ、私を裏切った人の事は別に考えなくていいか。

その後、気持ちの悪い店員が居たり、綾小路君がカメラコーナーを下見していたり、佐倉さんとお話したりした。佐倉さんの事はどこかで会ったことがあると思ったけど、佐倉さんは頑なに否定した。怪しい。私の昔の知り合いではなかったと思っただけ……：：：：彼女に関して調べる必要がありそう。

一応、佐倉さんは須藤君の件での証言を約束してくれた。結果的には須藤君の問題が僅かに前進することになった。でも須藤君が勝つのは難しそう。佐倉さんを絞りつくして、泣き落としに持ち込めば、Dクラスの被害も少しは抑えられるかな？……今思えば、須藤君が退学してくれた方が助かったかもしれない。

いや、数は力だ。須藤君もいつかは利用できる。そう思う事にしよ

う。

——佐倉さんが証言してくれるなら、きつと須藤君も大丈夫だねっ！

その日の夜、綾小路君と電話をすると、どうやら、佐倉さんは目が悪くないらしい。やはり彼は鋭い。本当に勿体ない。堀北さんと友達でなければ、いや、それよりも私の本性を知らなければ……そう思ってしまう。

月曜日の朝、私は綾小路君に挨拶をして昨日の感謝を伝えた。その後、嫉妬した堀北さんが綾小路君を咎めているのは見ていて楽しかった。

私は綾小路君を再び廊下に呼び出し、堀北さんの気持ちを教えてあげると、彼は言葉に詰まっていた。やっぱり人間関係全般は彼の大きな弱点だ。

綾小路君の相手をしていると、ちょうど赤石君が登校してきた。

「おはよー！赤石君っ！」

赤石君はこちらを見ると、少し安心したような表情を浮かべた。佐倉さんとの約束を優先したから嫌われたとか思ったのかな？

……少し関わりすぎたせいかな、彼の心を掴み過ぎてしまったようだ。まあ、最近は飴ばかり与えてしまったし、偶には鞭を振るったと思えばいいだろう。

「おはようございます。櫛田さん」

「昨日は参加できなくてごめんね」

鞭の後に飴を渡すのを忘れてはいけない。

「いえいえ、佐倉さんの事を考えると仕方ない事ですよ。佐倉さんのカメラの方は大丈夫でしたか？」

昨日の話は無しか……みーちゃんは駄目だったかな。私はしばらく綾小路君の相手をする必要があったけど、でも思ったより赤石君の攻略は簡単そうだし、私がやった方が速いかな？……元々、みーちゃ

んが恋心を向ける相手を変えなければ私が自分でやっていた事だ。赤石君を上手く隠しながら、少しずつ飼いならす。私ならできる。

「うん。店員さんが、……ちよつと大変だったけど、綾小路君が頑張ってくれたから特に問題はなかったかな」

綾小路君を強調しておく。どんな反応をするか楽しみだ。

「そうでしたか。大変でしたね」

話題を避けるような態度だ。綾小路君の事を嫌っているのもあるけど、どうも私の事も少し意識するようになってきているみたいだ。

「それはそうとして……赤石君、昨日はどんな感じだった？デート上手くいった？」

一応確認をする。赤石君の仕草次第ではみーちゃんにもまだ可能性がある。そしたら、私が飼いならして、出来上がったものをみーちゃんに渡すという手も考えられる。

「デート……ですか？昨日は王さんと井の頭さんと一緒にいただけですので、デートとは違う気もしますが……」

……心ちゃん？……しまった。私が相手をしなかったからか、いや、みーちゃんの事だ。きつと最後の最後で踏ん切りがつかなくなつて心ちゃんを呼んだみたいだ。はあ、もうみーちゃんは駄目かな。

「ん……そっか、うーん、なるほど。てつきり私はみーちゃんと付き合ってるんだと思つてただけで違つたの？」

こぶ付きでデートなど有り得ないけど、でも一応、せめて好意を持っているかの確認はしておく。

「いえ、俺と王さんは付き合っていませんが……」

少し嫌そうな顔だ。脈無しか……私ができるしかなさそうだ。でも、どういう方針でいこうかな。このまま関係を深めるのはクラスメイトが騒ぎそうだから却下だ。私も赤石君と真面目に付き合う気はない。本来の目的はDクラスの火種の処理と赤石君を手駒の1つにすることだ。目的から考えると――

「……………そうなんだ。ごめんね。ちよつと勘違いしてたみたい」

今、とても良い事を考えた。みーちゃんには悪いけど、仕方がない。

みーちゃんが作戦通りに事を運ばないのが悪い。それに今回もどうせ軽い気持ちで決めた恋だ。せつかくだから私が利用してごこう。失敗しても成功しても赤石君の弱みも握れるし、とても良いアイディアだ。

私は赤石君を飼いならす計画を進めるために、彼に「今度こそ4人で一緒に遊びに行きたいね」と伝えておいた。

——私はみーちゃんの事をずっと応援してるよっ

関係をこのまま進める。そして赤石君にはみーちゃんを「キープ」してもらおう、それでいて赤石君の本命には私になろう。途中でみーちゃんに乗り換えてくれてもいいし、みーちゃんを捨ててくれてもいい。捨てた上で私に表に出さずに恋心を抱いてくれば手駒にできるし、捨てた上で私と付き合おうとするなら赤石君が下衆だという弱みを握れる。ほとんど労力無くできる良い計画だ。

ホームルームが終わると、綾小路君が佐倉さんと雑談していた。昨日の事かと思いい眺めてみると、こちらの方に寄ってきた。

「櫛田、ちよつといいか」

相変わらず無表情な顔だ。綾小路君は色事が関わらないと行動の把握が難しい。

「うん？ 何かな綾小路君」

「実はさつきBクラスの一之瀬から情報をもらってな……事件の映像を入手してみたんだ。まだ映像はもらっていないが、無償でこちらの証拠品として提供してくれるらしい」

これは思わぬ収穫だ。本当なら、Dクラスが一気に有利になる。佐倉さんの証言も必要なさそうだ。

「もしかして、さつき佐倉さんの所に行ったのは……」

「ああ、無理に証言台に立たせる必要は無いと思って、一応堀北と櫛田に相談しておこうと思ったんだが」

私も別に佐倉さんを苦しめたいわけではない。

「うん、私はそれでいいと思うよ。堀北さんは？」

「これから伝えに行く、一緒に来るか？」

こちらを伺うように、ううん、大して期待するわけでもなく綾小路君は言った。私がどう答えるかももう分かっているみたいだ。

「ううん、止めとくよ」

それから綾小路君は堀北さんの方へ行つて、情報の共有を行っていたが、途中でこちらに目配せした。何だろうか。気になり彼らの方へ向かう。

「どうしたの？綾小路君」

私が話しかけると堀北さんは少し嫌そうな顔をした。

「いや、茶柱先生に証人に一之瀬を呼ぶことになりそうだから、どうしようかと思つて……一応、関係があるオレと堀北で行こうと思つたんだが、堀北が——」

「一之瀬さんが入手した映像の確実性が不明だわ。一応佐倉さんも証人として準備しておいた方がいいわ」

「——とのことだ」

流れるように2人は言葉を紡いだ。この2人は相性がいい。

「うーん、堀北さんの言いたいことは分かったよ。私はどうすればいいかな？」

それにしても堀北さんは厳しい。ストイックと言い換えた方がいいかな。とにかく彼女は佐倉さんをとことん絞る気のような。

私は勝ち筋が見えているなら佐倉さんは無理に苦しませる気が無いけど……堀北さんは勝つことが大切なんだね。まあ、佐倉さんが堀北さんを嫌いになつてくれるかもしれないから、これはこれでいいかな。

「綾小路君が佐倉さんに証言台に立たなくていいなどという余計な事を言ってしまった以上、今佐倉さんを刺激するのはよくないわ。そこで私と綾小路君で一之瀬さんに話をするから、貴女には茶柱先生に話を通して欲しいの。できるかしら？」

大事な証拠の管理は堀北さんで、雑務は私つてことね……

「うん。分かったよ」

私と綾小路君と堀北さんは3人で教室を出た。そして途中で別れ

て、私は職員室へ、2人はBクラスへと向かった。

——堀北さんも頑張ってるし、私も頑張らないとっ！

茶柱先生への報告を終え、授業を受けお昼休みになると、私たちは教室に集まり作戦を練ることになった。とはいっても、池君と山内君は雑誌を回し読みしていて、私と綾小路君と堀北さんで少し話したただけだ。堀北さんも一之瀬さんから見せてもらった情報が納得できたようで、少し話をしたらパンを食べ始めてしまった。

あまり有意義な時間にはならなかったけど、池君たちが読んでいる雑誌が少し気になった。頭の悪そうな内容だったが、どこかで見た顔が雑誌の中に写っていた。

その日の夜。私たちは再び綾小路君の部屋に堀北さんと須藤君以外が集まり最後の会議を行った。何時もの名ばかりの会議だ。

綾小路君を試すために私は佐倉さんがアイドルの雫であると暴露した。池君と山内君は食いついたが当の綾小路君の反応は乏しかった。意外だと思っていたけど……どうやら佐倉さんが可愛いということには前から気づいていたみたいだ。だから優しくしてたのかな？中々油断ならないな。

私は皆が帰る少し前に綾小路君だけ呼び、彼に対して私が何処まで効くか調べることにした。意味深に彼を誘い、計算高く演出した。見たところ、脈はありそうだ。彼は冷静なふりをしているが、結局のところ下心は池君たちとあまり変わらない。やっぱり綾小路君を攻略する鍵はそのあたりにありそうだ。

7月9日、火曜日。

結局佐倉さんを使わないことになった。そのため、朝から綾小路君

が佐倉さんに安心するように伝えていた。綾小路君はかなり佐倉さんと親しくなれたみたいだ。ふーん。あと、池君たちが佐倉さんを雫だと知ってからチラチラと視線を送っていた。そういう所が女子に避けられるところだよ。

放課後の審議には堀北さんと綾小路君が同席者として参加した。結果から言うと、無事Dクラスが勝利したようだ。私は石崎君たちとも友達だから堀北さんたちが議論の場に出てくれて助かった。石崎君はCクラス版の須藤君のような人だ。まあ、須藤君よりは組織に属するタイプの人だけだ。

7月14日、日曜日。

来週は赤石君の誕生日だ。彼は端末のプロフィールを非公開にしているため、彼の電話番号を知っている人でも彼の誕生日を知っている人は少ない。多分私だけだろう。

ちなみに篠原さんも赤石君の誕生日は知らないようだ。まあ、最近の篠原さんの態度を見ると赤石君の事を諦めたようにも見える。やはり彼女程度では無理だったようだ。篠原さんが諦めたなら、私が態々赤石君の相手をする必要性も薄れたけど……夏休みになり妥協のシーズンが来るとどうなるかは分からない。

それに今更彼を野に放つのは勿体ない。

彼の誕生日プレゼントは何がいいだろうか。彼は好き嫌いがあまりない。敢えて言うとな炭酸飲料が好きで、あとは堀北さんと綾小路君と勉強ができない馬鹿が嫌いだ。こういう男子に対する贈り物は少し迷う。好きな物か、それともイメージに合うものか。赤石君のイメージ……大人しい犬、かな？

犬の首輪でも送ってみようかな。きっと彼には似合うだろう。流石に怒るかな？

そういえば、最近心ちゃんも何時も以上に編み物に熱中していた。聞いたところコースターを作っているようだ。

心ちゃんに渡す相手はいないと思ったけど……気になったので聞いてみると少し顔を赤くしながら目を背けて「桔梗ちゃんには……秘密」と言った。

やっぱり心ちゃんは忠実だ。馬鹿で運動もできない魅力の少ない子だけど、忠実な子だから私を裏切らない限りは守ってあげよう。

7月21日日曜日。

今日は10時から心ちゃんに呼び出されている。私は寮を出る時、ふと赤石君のポストを見た。バックの中のモノに触れて確かな感触を確かめる。本当にコレを送るべきか悩んだけど……悩みながらも彼のポストの前をゆつくりと通りすぎる。

待ち合わせ場所に行くともう心ちゃんは待っていた。心ちゃんは私を視界に入れると、笑顔で手を振って、紙袋に入ったものを渡してきた。彼女に許可を取り中身を見ると、当然コースターが入っていた。

心ちゃんはグループの子たちのためにコースターを作ってくれたみたいだ。コースターはかなり良い作りに見える。編み物だけは彼女の数少ない取り柄の1つだ。

心ちゃんは顔を背けながらも、「一番上手くできたのを……桔梗ちゃんに渡したかったから……」と言っていた。うん。こういう私を慕ってくれる気持ちは嬉しい。それに彼女は馬鹿だが不快な子でもない。

心ちゃんも私を裏切らない限りは捨て駒にはしないであげよう。

心ちゃんと和気あいあいと過ごしていると、Cクラスの石崎君に会った。心ちゃんは少し怯えていたけど、石崎君も大事な駒の1つだ。違った、ついつい本音が出てしまった。大事な友達の1人だ。

彼に話しかけると、少し疲れたような顔をしていた。話を聞くと、停学を終えた後にCクラスのリーダーに言われて図書館の整理を同じクラスの女の子と手伝っていたらしい。何でも最近、文化や宗教の

コーナーの配置が乱れていたらしく、本の位置を正しく直したようだ。二年生や三年生の社会の授業で大きな課題でも出たのかな？

また、石崎君が言うにはその子はかなり本の整理に厳しく、石崎君が間違える度に叱ったらしい。少し意外だ。石崎君が素直に女の子に叱られている姿が想像できない。

気になって名前を聞いたが、石崎君は教えてくれなかった。やっぱりクラスが違う生徒に対しては私も影響力を上手く伸ばせない。

——もつと皆と仲良くできるように、頑張らないとっ！

石崎君と別れたあと、心ちゃんと言笑し、お昼近くになった。私は色々と考えた結果、赤石君に連絡することにした。

『もしもし、赤石です』

最近は何もすぐ電話に出るようになった。この前綾小路君と佐倉さんと買い物に行った後からは繋がりがやすくなった。やっぱり上手く飼いなすには餌だけではなく鞭も必要だ。

「もしもし赤石君。お誕生日おめでとう」

『ありがとうございます。榎田さん』

いつもの様な口調だが声からは喜びを感じ取れた。

「それで、……あのさ、もしよかったら午後、みんなで遊びに行かない？赤石君の誕生日記念って事でどうかな？」

勿論メンバーは厳選するつもりだ。

『お話はとても有難いのですが、お恥ずかしい事に、誕生日が近くなって羽目を外してしまって……ポイントをだいぶ使ってしまった』

……そういえば、彼は学食でもポイントを使っていなかった。普段の印象からポイントを極力使わないように溜めていたのかと思っただけど……この言い回しからすると、7月に入ってきたポイントを殆ど使っちゃったかな。

「あはは、意外だね。赤石君って散財しないイメージが強かったから。でも、そんな一面を知れて嬉しいかな……もしかして、このことを知ってるのは私だけ……かな？」

声の出し方も工夫次第では、相手に影響を与えられる。これも私が使う技術の1つだ。

『はは、ええ、まあ、そのできれば平田君や他のクラスメイトには秘密にしてもらえると有難いです。少し恥ずかしい事ですから……』

うん。大した秘密でもないけど、良い情報だ。赤石君の普段のクラスでの距離感を考えると、かなり心を開いていると見ていいだろう。順調だ。みーちゃんは悲恋で終わるかな。まあ、赤石君は結構大人しいし、上手く馴らせばみーちゃんでもリードを握るくらいはできるかな？

「うん。わかったよ。それとポイントは大丈夫だよ。誕生日なんだし、私が払うよ」

今は機嫌が良いし、それに上手く集まるメンバーを選べば今後に生かせる。

『いえ、ご迷惑はかけられませんから』

やっぱり遠慮気味だ。嫌いではないけど……

「うーん、迷惑だなんて思っていないんだけどな……ん？……もしかして」

せつかくなので少しリードを引くことにした。

「もしかして、赤石君。今日はデートだったりするのかな？」

『いえ、違います』

ん……今少し答え方が変だったような気がする。

「本当がなく、なんか怪しいな」

赤石君の事は大体把握できている。私に隠し通せる訳ないよね。

『いえ、本当に何もありませんよ。ただ端末の電池がそろそろ切れそうですので、一旦切つてもいいですか？』

間違いない。焦っている。みーちゃんがもしかして上手くやった……？ううん、それは無いかな。みーちゃんなら必ず報告するはず。もしかして篠原さん？最近のDクラスの動きを見ると無いと思うけど……

「ふーん、秘密の事なのかな？……上手くいったら教えて欲しいな」

赤石君は私の質問には明確に答えずに、誤魔化し、電話を切った。ふーん。そういう態度取るんだ……別にいいけど。少し気に食わない。たぶん女子と遊びに行くんだらうけど……誰だろう？もしかし

て、他のクラスの子かな？あまり彼は他クラスと絡んでいるようには見えなかったけど……

お昼を心ちゃんとお食った後、一度分かれた。その後、モールに行き無料で手に入る物を貰っていく。Dクラスはポイントが少ないから、こういう所で上手くやりくりする必要がある。もちろん、使うべきところではポイントはしっかりと使う。取捨選択が大事だ。

モールを歩いていると赤石君と、あと女子生徒を見かけた。2人は距離が近く、何かを話しているようだ。

なるほどね。あの子がデートの相手ってことかな。見た感じ、外見は悪くない。長い髪の一部を結びサイドポニーテールを作っている。珍しいタイプの髪型だ。少々目つきは鋭いが顔も良く、身長は女子にしては高い。みーちゃんよりは赤石君と並んで不自然さはない。どこかで見たと思うけど、思い出せない。……いや、確かそうAクラスの女子だ。番号は交換してない、いつも1人でいる女の子、名前は、うん、思い出した。神室さんだ。

ふーん、赤石君、結構頑張るね。Aクラスの女の子と遊びに行くなんて……少し意外だったかな。でも、モールで無料製品を漁っているというのはデートの雰囲気としては最悪だ。いや、もしかしてデートではなく純粹に友達なのかな？

元々、一緒に生活用品を買いに行く約束をしていたから、さつきは私の誘いを断った。赤石君は約束事を守るタイプだから、先約を優先したのかな。でも友達と会うなら私に言うはず……やっぱり、少なくとも赤石君の方は神室さんの事を意識しているはず。

それに神室さんの方も異性としてかどうかは分からないけど、ある程度赤石君とは親しいようだ。女子は普通少し付き合いたくらしいの異性の友達相手にプライベートは見せない。神室さんが変わった子という可能性もあるけど……どちらにしろ、みーちゃんに新たなライバル登場だ。

あと赤石君が私に黙ってた事も意外だった。恋の相談もなかったし……少し赤石君の事を侮っていたかもしれない。思った以上に心

を許してなかったようだ。うーん、勉強会の件で少し口が軽い印象を与えすぎたかも。やっぱり彼は思慮深い面がある。もう少しだけ馬鹿の方が好きかな。まあ、恋人としてではなく、飼い犬としてだけだね。

でも、まあ、赤石君に本命がいるなら、もういいかな。私に隠すほどの本命から彼を奪うのは難しい。その上、裏向きだけの恋心を抱かせるのは手間がかかりすぎる。時間と労力は有限だ。彼だけに構ってはられない。それに他クラスの女子ならDクラスは大して荒れないし、二次被害だけ気を付けて立ち回れば問題なしかな。

——赤石君の恋が上手くいくといいなっ！

少しだけ徒労感を感じながらも、私は2人の追跡を諦め寮へと戻った。

ふとバツクの中に入れておいたモノ——炭酸飲料を見る。赤石君が好きな飲み物だ。今日ポストに入れようか迷ったけど、流石にやめておいた。

まあ、もう態々渡さなくてもいいか。私は炭酸飲料を開け中身を飲み干した。味は普通だ。彼はなぜこんなものが好きなのだろう……

私は赤石君の事を嫌いではない。だけど、好きでもない。

今のクラスの中でのポジションを維持しながら、可能であれば上のクラスを目指す。そして最大の問題である彼女を排除する。私の目標はそれだけだ。限りある時間の中で目標の為にできることをする。それが私の行動指針だ。

でも、まあ、神室さんに捨てられたら……その時は拾ってあげるよ。赤石君。

3章 無人島

無人島へと至る船

「貯金箱1号、がんばれ、君ならできろ」

8月1日の早朝。全ての準備を何とか完了させた俺は、寮を出る時に、相棒であるパソコンに、俺が糞特別試験を受けている間に果たすべき訓示を与えた。色々と考えた結果、特別試験の間、寮の俺の部屋で、起動させたまま放置しておくにした。彼には、今後の俺の学校生活を豊かにしてもらうために、働いてもらうのだ。

相棒に別れを告げた後、Dクラスの面々と合流し、バスで東京湾へと向かった。午前5時の集合だったためか、ほとんどの者がバスの中では静かに睡眠をとっていた。

ちなみに俺の隣の席は三宅だ。彼とは、クラスでの相談の結果、今回の旅行という名の特別試験では同じ船室となっている。他のメンバーは外村だ。本来は4人で一室なのだが、人数の関係上3人となった。わりと、気心が知れている外村と、静かさを理解している三宅という最強の布陣だ。これで、船室でのトラブルは、まず無いと考えていいだろう。

バスに揺られ、東京湾へと辿りつき、客船スペランザへと乗り込んだ。

なお、Dクラスメンバーで、バス内で一度も眠らなかつたのは平田と堀北、そして綾小路と井の頭だけだった。井の頭には今後の情報をある程度教えているため、早朝時間に合わせてもらっているが、なんで残りの三人は寝ないんだ？あれか、周囲に人がいると眠れないタイプか？

客船スペランザ。比較的大型の船であり、乗客が出入りできる場所

だけでも九層構造に屋上付きという、まさしく豪華客船といった感じだ。

九層のうち、地上は五層、地下は四層となつてはいる。最下層である地下四層は配電盤室となつており、生徒は行くことが物理的には可能なものの、やるのが無いので、殆どの生徒には関係の無い場所であろう。まあ、俺には大変関係がある場所なのだが……

しかし、不安だな。なんでこの船は配電盤室の近くまで生徒が行けるようになってるんだ？安全上、問題ではないのかね？もし生徒が暴れて配電盤室を破壊したら、この船の重要なコントロールシステムに不具合が発生し、大きな問題になるぞ……

そんなことを考えながら、地下四層の配電盤室にハッキングシステムを次々と投入し、船の重要なコントロールシステムにアクセスする。ふむふむ、洋上通信網は確保できそうだ。これと、暴力事件の時に使った珍兵器を合わせれば、珍兵器の射程範囲内の好きな端末にアクセスし、情報を盗み取ることができるとね。やったね。

まあ、理想を言えばもう少し珍兵器の射程が欲しかったところだ。この船が結構大きいこともあり、船の真ん中においても、船内全域をカバーするのは難しそうだ。まあ、楽しい楽しい船上試験までは時間があるし、少しずつ調整すればいいか。

うむ。そこそこ順調じゃ。現在時刻は9時と少し。洋上通信システムを丸つと入れ替ええたと思えば、悪くないタイムだ。上陸時間の予定が11時だったはずなので、もう少しだけ活動できそうだ。さて、どうしたものか……

船内を少し見回った後、開いている店で少しばかりのブレックファーストを楽しむことにした。一応、乗船時にレストランフロアで食べたのだが、その時は、いまいち食が進まなかったのだ。一作業終えて、お腹も減ってきたといった感じだ。いや、しかし、0ポイントで食べるメシは美味しい。というか、この船の料理は中々美味しい。店の種類も料理の幅も広く、見た目もリッチだ。うむうむ、よいぞ、よいぞ。

船飯の美味さを味わうことで、来るべき上陸の時間へと備える。

が、そこで、緊急を知らせる信号が足首から震えた。

俺は、今回の試験においても、目立たずにポイントを頂くことを目標としている。そこで、目立たない為に重要な点は、まず相手の視界に入らない事だと考えた。

しかし、普段の学校とは違い、ここは狭い船。いや、船としては比較的大きいが、空間的には比較的狭いのだ。狭い空間では、個人の遭遇確率は当然上昇する。気づいたら、目の前に椎名！などという1・2椎名体験（驚き補正+20%）をすることになる。そう、つまり、偶発的遭遇からの事故死、もとい、にぎにぎ死を避ける必要があるのだ。

あの悍ましい7月10日の事件、あの事件を二度と起こさないこと。これが、俺が龍園に（勝手に）誓ったことだ。

この誓いを果たすために、俺は先程、洋上通信システムを入れ替えた時に、ちよつとした小細工もしたのだ。

それは、1年生の有力なメンバー（の端末）が俺の近くに来るような動きをすると、それを読み取り、俺の足首につけた受信機が反応。これが震えることで、俺はあたかも、何も確認することなく、危険な領域から離脱できるのだ。これが赤石流、卑儀、じゃなかつた間違えた、秘儀、『戦わなければ負けない』だ！

ちなみに一応、振動の仕方によつて葛城派、坂柳派、一之瀬様派、龍園派、椎名、となつている。本当は個人で識別しなかったのだが、さすがに足首の振動だけでは覚えられるのは五種類が限界だった。そこで個人ではなく団体の識別までにとどまっている（例外あり）。

あ、今回は坂柳派だ。俺は適当に飯を腹に詰め込みながら、端末を確認する。ふむふむ、船首側から来ている。よし船尾側の出入り口から出よう。ははは、こういうった時の為に、この船では常に二か所以上出入口がある店を選んで行動しているのだ。

神室のような人にポツチのレットルを貼った上Dクラスを舐めまくっている0・25椎名の強襲型堀北が在籍するような派閥に、俺は負けない。

さも、食い終わったという雰囲気を出しながら船尾側へ……………おい、さて、やめろ。

なんで、船尾側にも坂柳派がいるんだよ。お前ら友達だろ。ちゃんと店に入るときは同じ入り口を使えよ。てか、何で俺が包囲されてんだよ。俺、何かしたっけ？

あ、いや、さすがにそれは自意識過剰だ。俺がやっていることが露見しているとは思えないし、おそらく偶然だろう。というか、多分アレだ。この歩き方からして現地集合だ。船首側からは橋本と鬼頭、船尾側は坂柳と神室だ。

うむむ。どうする。どちらかと言うと面識がある神室は避けたい（厳密には全員面識があるが、会話をしたのは神室だけだ）。つまり船首側に行きたい。

しかし、もう立ち上がり、船尾側の出入り口へ向かってしまった。ここから、動きを変えると、なんか神室を避けているみたいなの雰囲気を出してしまう気がする。ぐぬぬ。悔しいが、このまま何食わぬ顔で前進しよう。なーに、一度はこなした、坂柳派へのすれ違いスルーだ。今回も余裕ですよ！

そう考えながら、出入口へ向かうと、ちょうど坂柳と神室が見えた。二人は何か話をしているようだ。

「真澄さんは、今回の旅行で、何か目標のようなものがありますか？」

近づくにつれ、自然と二人会話が聞こえてくる。いいよ。そのまま会話に集中して。

「……別にないけど」

おい、神室。お前、早々と会話を打ち切ろうとするな。もっと坂柳との会話に集中しろ。

「そうですか。私はありますよ。聞きたいですか？」

丁寧だが、どこか嘲笑するような響きのある声だ。いや、まあ、これは偏見かもしれないが。

「興味ない」

「ふふっ、素直じゃありませんね」

坂柳は神室弄るの好きだね。でも、そのシワ寄せが他の所に来るかから止めて欲しいのだが。

「何が言いたいのか？」

「では一つだけ。これは私の体験談になります。意外なところで、目標の方が手元に来ることもありますよ。まあ、あなたには、目標など必要ないかもしれませんが……」

悲報、神室、リーダーから目標意識が低いと思われる。

「さつきと言ってることが違うと思うんだけど」

俺も同じことを思ってしまった。目標が必要無いなら、何で目標について聞いたんだよ……

「私は、真澄さんに目標があるかは聞きましたが、目標を持つ必要があるとは言っていません」

面倒くさい論法だ。神室も同じことを考えたのか、無視を決め込んだようだ。しかし、神室が反応しなくても、坂柳は饒舌に語り続けた。よし！そのまま神室弄りに集中してくれ。

「目標とは、自由な行動が許された人間のみが持つことができます。いえ、正しくは持つ意味があります」

よし、よし良い感じに神室に集中しているな。俺も落ち着いて、交差しよう。すれ違うまで、約3メートル！強く当たってあとは流れで、あ、いや、当たっちゃ駄目だ。弱く避けて後は流れで……

「つまり、支配されている人間が目標を持っていても、意味などないということですよ」

その声の一つ一つに何か違和感を感じるが、意識を向けると気づかれそうなので、気にせず前へ進む。そして、ついに0メートル、つまり真横に坂柳だ。まあ、あとはウイニングランだ。このま前に進み、俺と坂柳たちの相対速度分だけ、離れ続けるだけだ。

「あなたは、もう、ずっと前に、私が捕まえてしまいましたから——」
真横からそんな声が聞こえた。いつもの頭を貫くような声だ。なぜか、この少女が視界内にいる状態だと漠然とした不安に襲われる。なぜだろう。まあ、考えても仕方がないので、そのまま坂柳たちから離れる。

「——支配されているあなたが目標を持っていても意味はありません。勿論、支配を脱する為に抵抗する選択はあります。お勧めはしません。試してみても構いませんよ」

背後から聞こえる坂柳の声音は、挑発するような、どこか期待するような気持ちが籠っているように聞こえた。もう背後故に見ることは叶わないが、おそらく、神室が顔を真っ赤にして怒っているだろう。ぜひ相棒っぽい橋本で発散してほしいところだ。

「……あんたは碌な人間じゃない」

沈黙を貫いていた神室が、思わずといった感じに声を出した。煽りに我慢できなくなったようだ。ここからでは見えないが、おそらく顔真っ赤だ。

「ふふっ」

坂柳の微かな笑い声が耳を撫でた。

思わず、頭を押さえる。ズキリと、頭の奥が痛んだ気がした。

気を取り直して、船室に戻ると、外村がベッドで横になっており、三宅は椅子に座って端末を弄っていた。うん。平和でいいね。

俺も自分のベッドで横になり、外村と三宅との距離関係を確認した後、イヤホンを耳に突っ込み、通信システムを起動させる。対象は少し悩んだが、先ほどの集まりが気になるので、坂柳を選んだ。まだ同じ店で側近3人とともにいるようだ。

『——では、俺は予定通りということですか？』

どうも、なにかの会話中のようだ。声の感じからして橋本だろうか？

『ええ、よろしくお願いします、橋本君。鬼頭君と真澄さんは待機。場合によっては葛城君の指示を聞いても良いですよ』

むむむ、これはアレか？無人島試験の事か？

『できれば、二人には俺のバックアップをお願いしたいですね』

橋本の声はいまいちわからん。何か真面目なような、ふざけているかのような、判断に迷う声音だ。

『橋本君であれば、一人で十分かと思いますが……自信がないようでしたら、二人の力を借りても構いませんよ』

一方、坂柳の声は、うん、なんか、その、アレだ。うん、不安になる。なんでだろう。ちよつと怖いというか、いや、まあ、まったく根拠がないので、ただの偏見なのだが……

『……、……、いえ、ちよつとした冗談ですよ』

橋本は、ユーモアがあるのか、なんか不思議な怖さを持つ坂柳にも冗談を飛ばせるようだ。ちよつと間があつたような気もするが。

『ふふっ、中々、面白かったですよ』

くすくすと笑う坂柳の声音はなぜか挑発的に聞こえる。いや、本当に、まったくもつて根拠がないのだけど。なんで俺はこんなに坂柳に對して偏見を抱いているのだろうか？うーん。わからん。

『では、皆さん、頑張ってくださいね。真澄さんは少しいですか？』

そう言うと、坂柳と神室は店を出て行つた。店に入るときとは違い船首側の出入り口を使ったようだ。入るときもそつちを使えよ。残された男二人とどちらを追うか悩んだが、坂柳の端末をそのままトレースし続ける。もしかしたら、まだ何かあるかもしれない。

『私に何か用？』

神室の問には答えず、坂柳はさらに船首の方へと進んでいき、そして………見失つた。

うん？あ、しまった、射程外だ。タイミングが悪い。仕方ないので、船内の洋上通信システムにアクセスし座標を探る。このやり方は端末の場所は分かるが、珍兵器と違い、情報は抜き取れない。うーん。船の先端に2人もいるようだ。なんだ？タイタニックごっこでもするのか？坂柳は体が弱いっぽいので止めた方がいいぞ。

なんか気になるな。どうしようかな、と考えていると声がかつた。

「音楽ばかり聴いてて飽きないのか？」

声の方を向くと、三宅が少し苛立ったような顔でこちらを見ていた。なんやねん。

「好きなので」

適当に答えておく。三宅は「そうか」と軽く言うと、何か気になるのか、端末を弄りながら、「ああ」と、なんとも言えない声を漏らした。

はて、三宅は静かで、風流を理解している人だと思っていたが……
疑問を感じながら三宅を見てみると、船室の扉がガンつと開かれ
た。

「みやつち、遊びにきたよ」

扉を見ると長谷部が普段は見せないような明るい顔で三宅に手を
振っていた。

「長谷部……ノックくらいしろ」

「いやー、この船の扉って太いからさ、なんか叩くの嫌なんだよね」

そう言いながら、長谷部は三宅ではなく部屋の中を観察し始め、俺
と目があつた。その視線は、あまり好意的には見えなかった。

「……、……、……、みやつちの班、独特だね」

なにこれ、あれかな? 『お前、おもしれー女だな』の逆みたいな感
じか。

「何が独特なんだ?」

しかし、三宅は慣れているのか冷静だ。

「いや、外村君とみやつちって全然キャラが違うし、それに……、……
赤石君は平田君と組んだのかと思つたよ」

なんだろう。なんか、いや、まあ、クラスにいるときから結構思つ
ていたのだが、長谷部って俺のこと嫌い? 俺、マジでお前には何もし
てないぞ。

「赤石にガン飛ばすな。困ってるぞ」

「あつはは、いや、ごめんごめん赤石君。別に、赤石君が悪いわけじゃ
ないんだけどね。まあ、女の子には色々な事情や人間関係があるんだ
よね」

俺が悪くないなら睨まないで。というか、アレだ。なんか初めて長
谷部と喋った気がするが、コイツとは馬が合わなそうだ。うむ、坂柳
たちの動向も気になるし、一旦船室を出るか。

「いえ、別に特に気にしていませんが……」

そう言いながら、扉へ向かい脱出を試みる。

「また、どこか行くのか?」

三宅に阻まれる。

「いえ、少し酔ってきたので、デッキの方に出ようかと思いましたが、何時ものように適当なことを言う。本当は何となく船の先端に行った2人が気になるだけだ。

「そうか、辛いようなら医務室まで案内しようか？」

「なんか、心配させてしまったようだ。すまん。」

「ありがとうございます。でも大丈夫です。そこまで重くはないですから」

俺がそういうと、なぜか長谷部が不快そうに顔をしかめた。いや、別にお前に話しかけたんじゃないんだけど。

早歩きで船内を歩き、船の先端を目指す。一応射程は25メートルあるので、先端部に近い適当なトイレや休憩所などに行けばよいのだが……時間が経ち、生徒たちの活動時間になったのか、どうも船内が混雑してきた。生徒が邪魔で上手く進めない。

うーん、坂柳たちはまだ先端部にいるようだ。これはいよいよ坂柳と神室がタイタニックが好きで濃厚になってきたな……

まあ、あと5メートルだ。ちやうど人混みも少なくなり、良い休憩所を見つけた。あそこに入り、端末にイヤホンを使い盗聴を再開しよう。まあ、多分タイタニックの話で盛り上がってるだけで、戦略的に重要な情報はどうせ無いだろうが……

そう考えていると、足首から警告振動が響き、近くから鋭い声がかげられた。

「あ、あのー」

大きな声にビククリしてしまい、音源を見ると、そこには……いや、誰だ。あ、いや、ボーナスポイントの白波だ！しまった。自分から動くもんだから、警告が上手く発動しなかった。

クソ！これはあれだ！システムの発展が人間を愚かにする典型的なパターンだ！あ、いや、どちらかと言うと、高度なシステムを使いこなせるのは高度な人間だけ、というやつか？ぐぬぬ、まさかこのシ

STEMの弱点である使い手の知性が平凡であることを突いてくるとは……流石は一之瀬様の近侍だ。コイツ、なかなかできるぞ！

「ええっと、俺ですか？」

一応、近くにいる人を見るが、白波の視線の先が俺だったこともあり、多分俺に話しかけているのだろうと推測し、白波にゆつくりと声をかけてみる。これで、違います、と言われたら、すみません、と言って去ればよい。そうだよ、と言われたら、すみません今は忙しいので、と言って去ればよい。

「確か、赤石君？でしたよね」

「そうだよ。でも、俺の名前は忘れて。」

「そうですが、確か、あなたは、し、しら、……すみません、白波さんで合ってますか……？」

一回会った相手の名前を完全に覚えるのは、個人的には、かなり優秀な人だと思っている。

つまり、一之瀬様や龍園は無茶苦茶優秀な人だと俺は思っている。いや、まあ、中には他人の顔や名前を憶える技術だけが突出している人や、逆に顔や名前を憶えるのだけが苦手な人もいるだろうから、必ずしも、その技術が高い人が万能とは言えないかもしれないが、それでも、その技術を持っているだけで、ある意味警戒に値すると俺は思っている。

「そ、そうです。合ってます。あの、ちよつと聞きたい事があるんです。答えてくれますか……？」

やだ。

「俺に答えられる事でしたら」

適当に答えると、白波は少し溜めを作り、手を握りしめてから、口を開いた。

「あ、あの、赤石君の誕生日って7月21日ですか？」

何で俺の誕生日知ってるんだよ。なに、コイツ、エスパー？いや、まあそんな事は無いと思うが……誰かが漏らしたのか、俺の重要な個人情報……ちよつと櫛田さん、マジで止めてくださいよ。

うむ、何て答えるかな……俺の誕生日を知る人は少ないし、嘘を吐

いてもいいような気もするが。いや、まあ、誕生日程度知られるデメリットはそこまでないし、何かの弾みで嘘が露見した際の評価の方が怖いから止めとくか。

「ええ、そうですが……でも、よくご存じですね。俺はBクラスの方とあまり交流が無かったので、正直意外です。どちらの方から聞いたんですか？」

まあ、どうせ櫛田だろ。アイツ、本当ありえへんぞ。次、俺関係で口の軽さを見せたら、綾小路に、櫛田は口の軽い女です！って言いふらしてやろうか……不安定櫛田が怖いから止めとくか。

そんなことを考えながら白波に答えを待つが、彼女はこちらに質問には答えずに、何か戸惑ったような雰囲気を出しながら、ブツブツと「え」とか「そんな」とか「おかしい」とか口にしていった。おかしいのはお前の会話率だよ。

「——っ、あの、……ちよつと来てください」

そう言うと、白波は唐突に俺の手首を掴み引つ張り始めた。おい、勝手に触れるな。もし俺が警官だったら公務執行妨害だぞ。あと質問に答えるろ。

ズルズルと白波に引きずられ、人気の少ない通路まで連行される。コイツ小柄なのに結構力あるな……というか手首を離せ。力入りすぎで、ちよつと痛いぞ。

「あ、あの白波さん。何か御用ですか？用があるのでしたら、言ってもらわないと分からないのですが……」

俺の問に対して、白波は立ち止まり、キツと俺の方を睨みつけた。体格上、下から見上げるような形になると、あまり容貌に攻撃性が無いから、そんなに怖くは無いが……なんか俺怒らせることしたっけ？あれ、俺今日こんなことばっかり言ってるぞ、あ、いや、正しくは思ってるぞ。

「あのっ！帆波ちゃんは誰にでも優しいだけですから。勘違いしないで下さいねー！」

一方的に言うと、こちらの返答も聞かずに、白波は顔を真っ赤にしながら、素早く走り去っていった。おい、会話しろよ。

その後、坂柳たちを射程圏内に収めて、もう一度、珍兵器を使用するものの、その時には坂柳と神室の会話はちょうど終わってしまい、別れの挨拶しか聞くことができなかった。なんとも、まあ、徒労に終わる結果となってしまった。

なんか、すっかりやる気が失ってしまったので、適当に空いていたビーチベッドで横になりながら、射程距離内にある龍園の端末を拾い、カリスマ訓示を聞く。うーん、やっぱりあの笑い方がいいなく。

しつつかし、坂柳も龍園も、この学校に対する警戒心が高いな。素直に教師の説明に納得しろよ。というか、クラス間の大事な戦いが旅先で行われるなんて、なんで分かるんだ？うちのクラスなんて皆、ただの船旅だと思ってるよ。いや、まあ、俺もあの説明をただ聞いたら、きっと同じように思うから、うちのクラスが無能なのではなく、単に坂柳と龍園が優秀すぎるだけだが……

うーん、俺は本当にコイツら出し抜けるのか？なんか無理っぽいぞ。無人島は前途多難になりそうだ。

そう考えてるいると、ふと船内にアナウンスが入った。ふむ？

どうも、とても有意義な光景が見れるから集まれとかいう内容だった。はて。何だろうか。一応、体を起こし周囲を確認する。

デッキに人が集まっており、近くの島を眺めている。もしかしなくても、あの島、例の無人島か！非常に有意義ってアレか、この島を見ろってことか？……あ！井の頭に知らせないと！

俺は素早く端末に「この島、会場」とだけメッセを入力して飛ばす。一応、今回の特別試験のことは漠然と井の頭に伝えているので、これで察してくれるだろう。多分。

一応、記憶に刻み込んだ島の3Dマップと比較するために、島をよく観察する。うむうむ、まあ、人工衛星から精密に見たので当然だが、普通に一致している。まあ、無人島とか実物で見ると迫力あるし、船の動きがあるから感覚は違うけど。それでも、まあ、復習にはなった

だろう。

再びアナウンスがあり、30分後に上陸となった。俺はトイレで足首に着けたアラートを外し、自分の旅行用鞆に隠し、船室へと戻った。アラートは使い道が無いので、鞆とともに船室へと置いていくつもりだ。

船室に戻ると何故か、平田と三宅が話し込んでいた。はて？長谷部と外村どこへ消えたんだ？

まあいいか。よし上陸するぞ!!

上陸と探索

上陸するにあたって、真嶋先生からの全体説明が行われた。まあ、これから試験だぞ！という話だ。

あと、なんかAクラスでは、もう欠席者が出たらしい。これはどうも坂柳のようだ。彼女は体が弱いので船で待機とのことだ。まあ、それは仕方ない。しかし、正当な理由による欠席でも、30ポイント減点は容赦なく発動するようだ。これは、アレだな。体調不良になれないな。もし体調不良になったらムラハチ、もとい、クラハチにされそうだ。

真嶋先生の説明が終わると、浜辺で各クラスに分かれることになった。茶柱先生がそこから説明を始め、合間合間に時計を配つたりマニュアルを確認させたりと忙しかった。

当然、平田や櫛田のような生徒が熱心に茶柱先生の話を聞き、それ以外の普段は不真面目な生徒たちも今後の3万が関わる試験のためか、いつも以上に集中していた。

ちなみに堀北と綾小路のDクラスの参謀カップルはいつも通り、堀北は熱心に——ん？なんか違和感、分かんないけど、なんか堀北の雰囲気がいつもと違う気がする。いつもより、……優しい？だろうか、いつもより優しく見える。はて、堀北はアレだろうか。自然とか好きなたいプなのだろうか。まあ、いいや。

なお綾小路はいつも通りやる気の無さそうな無表情だ。あー、駄目ですねこれは。綾小路は、あんまりこの試験に乗り気ではないですね。

その後、ポイントをどうするのか白熱した議論が進みつつ、途中で星之宮先生が来たり追い出されたりした後、茶柱先生がリーダーのロールの説明を行った。そう、あのファツキンルールだ。

茶柱先生が、最後に、まあリーダーは好きに決めれば的な事を言うのと、平田が全員に対して、

「皆、リーダーを誰にするかは、時間もあるし、後で考えよう。まずはベースキャンプをどこにするかだね。このまま浜辺にするのか、それ

とも森の中に入っていくのか……スポットはその後で考えよう」

と議題を持ちかけた。チラリと周囲を見るが、それに対する反応はまちまちだ。けれども、誰も手を挙げるような雰囲気ではない。ガヤガヤしているといった感じだ。よし！ちよつとだけ仕事するぞ！

「平田君、何をするにしても、ここはかなり暑いですし、体力を浪費します。あつちの木陰に移動しませんか？万一、浜辺にベースキャンプを決めるとしても、一旦、木陰に入った方が良いと思います」

いや、まあ島の地図を知っている俺からすると、浜辺はクソザコポジションなので、最強ポジである洞窟を中心とした三角地帯を押したい。大量のスポットポイントに食料、そして高い偵察力を持っている。その上、この島では珍しい雨水に晒されないポジションだ。

次点としては、周囲の植生が豊かで高所でありながら水辺に近い滝壺付近も、なかなかの強ポジだ。まあ、無いとは思いますが、両地点が占有されたら、中堅ポジである森の中の川辺地点だろうか。滝壺以下の存在だが、そこまで悪くない立地だったはずだ。

さて、周囲の反応はどうだろうか。俺としては木陰に移動したあと、なんか流れで洞窟方向までクラスを誘導したいのだが……うーん、賛成3割、どうでもいい5割、何お前が意見してんだコラ！が2割だ。ちなみに賛成メンバーの主な顔ぶれは軽井沢軍団だ。

ウツス！親分方ありがとうございます！でも、盃はいらないんで、そこんとも宜しくです。

「うん、確かにそうだね、赤石君。皆、一旦あつちの木陰に入ろう、いかな！」

平田がいつもの爽やかスマイルで言うと、賛成7割、どうでもいい2割、死ねイケメン！が1割といった感じだ。さすが平田だ。

それから、少しずつ移動し、木陰に到着。その後、再びポイントについて、特にトイレの設置に関して、あーだこーだ言い始めた。主に幸村・池を中心とした男子が、ポイントの使用を制限すべき、という意見で、逆に軽井沢軍団である篠原がそれに対抗している感じだ。ただ、当の軽井沢はあまり乗り気じゃないのか、ポイントを削るのも致し方なし、という雰囲気だ。

はて？ 軽井沢軍団は女王である軽井沢の命令が絶対であると考えていたが、そういう訳でもないのだろうか……？ まあ、そこはどうでもいいか。

というか、俺は今はスポットの話がしたい。どうしたものかと思いい、少し離れたところにいる綾小路と堀北を見る。なんか綾小路と目があった。幸先が悪い。ヤツはこつちをじっと見た後、手を少し挙げて、下ろした。見ると綾小路の腕を堀北が軽くつねっていた。なにイチヤついてるんだ！そこ！

こんなときまでイチヤイチヤしている二人を放っておき、なんとなく各クラスを見る。うん？——って、おいおい、もう動き始めてるじゃん。しかも、あの方向からすると、Aクラスは洞窟、Bクラスは滝壺だな。強ポジ取られるぞ、これは。

というか、何でAもBも迷いなく進んでるんだ？ 特にAはポジションを完全に知ってるような動きだが……もしや坂柳のヤツも俺と同じで強ポジを知っているのか……？ あの少女は無入島試験を中間試験前に予期しているようなフシがあつたしな……そういえば、さっきの通信で橋本が何かやるって話で、その上、他の二人が葛城とどうのこうのとか言ってたな。

ぐぬぬ、どうもクラス対抗では葛城と坂柳はタッグを組んで戦うみたいだぞ。不味いぞ、ただでさえ強いAクラスが要塞化されてしまう！ ちゃんと内ゲバしろ。このハゲー——！ 違うだろ——！

しかし、どうする？ 今から平田に急いで進言して、洞窟は無理でも先んじてBクラスをブロックしながら滝壺狙うか？ いや、それは俺の話術的にもDクラスの戦闘力的にもキツイか？ いやいや、平田と軽井沢の号令をもってすれば、速やかに軽井沢軍団は展開されBクラスは蹂躪されるだろう……いや、さすがに、それは人道的見地から避けたいが……

それに平田はまだ幸村たちと議論中だ。あと、俺はさっきので少し注目を集めてしまったし、もう一度意見するのは個人的には避けたい。ここは0・7椎名の女、つまり櫛田を拡声器代わりに使うか……櫛田の方を見ると、櫛田は忙しなく辺りを見回しており、忙しそうだ。

困っていると、櫛田の近くにいた、井の頭と目が合った。

井の頭は、俺と目が合うと、僅かに首を動かした。良く分からなかったが、首肯だろうか？うん？と思っていると、しばらくして、王が騒ぎだした。

「あ！桔梗ちゃん、他のクラスが！」

でかした、王！ドヤ顔していいぞ！

「うん、そうだね、みーちゃん。ちよつと平田君に伝えてくるね」

王の声を聞いた櫛田は速やかに平田に駆け寄った。櫛田はモーゼのようにDクラスのメンバーをかき分けていった。今度からコイツの渾名はモーゼ櫛田だな。

「平田君、AクラスとBクラスが動いたみたい。私たちも何かした方がいいんじゃないかな？」

櫛田は、何時もよりも少し緊張しながら平田に話しかけていた。うーむ、あの櫛田でさえも、無人島試験はかなり厳しいと判断しているようだ。平田もいつもより少し焦り気味だし、堀北は謎の優しさオーラを出してるし、綾小路は無表情だし、王はなんかこつちみてドヤ顔始めたし、おい！なにドヤ顔してるんだ、オマエ、誰に許可とつたワレ！

「……うん、確かにそうだね、よし、みんな、ここは——」

しかし、全てを言い切る前に、池が遮り、言葉を被せた。平田の指示に被せるとか、勇気があり過ぎるだろ。大丈夫か？

「おい！グダグダ言ってる場合じゃないって！他のクラスにスポット取られる前に俺は行くぞ！幸村、ポイントを女子たちから守れよ！」
「勿論だ」

池と幸村、普段はあまり見ない組み合わせだが、なんか協力しているようだ。うーむ、無人島のような特別な状況は人間関係を変えるな……

「待って。池君、一人で森に入ったら危険だよ。ここは落ち着いて」

こんな時でも、Dクラス一の菩薩である平田は慈悲の心を忘れなかった。南無阿弥陀仏。

「落ち着くもなにもないだろ。それでポイントが入るわけでもないん

だし……健！一緒に来てくれるか？」

しかし、ここで池選手、菩薩が、いや釈迦か？釈迦が垂らした蜘蛛の糸を華麗にスルー。これは後で軽井沢軍団にボコボコにされますね。お陀仏！

「——ッ、おう！わかった。行くぞ！春樹も来い！」

「ええ、俺もかよ……」

須藤は一瞬だけ堀北の方を見た後、山内も巻き込み、池に続いた。「平田、俺達は行くけど、危なそうな事はしないし、スポット見つけたら、すぐ戻ってくる。それでいいだろ？」

最後に池が、平田にそう告げると、平田もしぶしぶ三人の行動を許可した。池が平田に話しかけるのを他所に、須藤が綾小路も誘っていたが、やる気の無い彼は探索班への参加を辞退した。うん、これは綾小路は完全にやる気が無いな。今回の試験では期待できなさそうだな。やはり俺が何とかしなければ。

そして、三人は探索を開始した。

——あ、なんか話の流れが急で、入れなかったが、俺も探索班に入った方が良かった気がする。まあ、平田達本隊に干渉できるから、これはこれでいいか……

その後、平田率いる本隊は、あーでもない、こーでもないと言いながらも、池たち探索班との連帯の面もあり、浜辺を完全に放棄し森へと移動を開始した。時刻が12時を少し過ぎた頃に平田本隊は森の窪地に布陣し、作戦会議となった。

「ここまで森に入れば、日差しも十分に遮れるし、話を聞かれることもないね。うん」

平田のその言葉を合図に、幸村が素早く口を動かした。今日の幸村はよく喋る。やはり彼もかなりAクラスに行きたいようだ。つまり、俺の計画が絶対に知られてはいけない者の一人だ。メガネは大概強

キャラだったり、眼鏡が本体だったり、眼鏡がリミッターだったりするから、要注意だな。

いや、まあ冗談はさておき、幸村は堀北や高円寺並の学力の保有者だ。学力Ⅱ頭の良さとは直結しないだろうが、ある程度の相関性はあるだろうし、彼にも注意は払うべきだと思う。

「平田。池たちだけじゃなくて、俺たちも動くべきじゃないか？ 主要なスポットを他のクラスに取られてからでは遅いぞ」

幸村の言葉はいつも以上に刺々しかった。思わず軽井沢軍団の顔色を確認してしまった。軍団の怒りゲージは30%ってどこかね？

「うん、そうだね。でも、問題を放置したまま皆が分散するのは危険だよ。まずはポイントの、特にさつき話になったトイレの問題について話そう」

しかし、平田はいつもの雰囲気崩すことなく、幸村に対して説得を試みた。さきほどは少し焦っているか思ったが、平田はやはり落ち着いているようだ。うん、平田が大丈夫ならこの試験はなんとかなるだろうな。

俺がそんなことを楽観的に考えている間に、幸村の反論を次々と平田が丁寧に潰していき、結局トイレは設置することになった。そして、ここからが俺にとって重要な話だ。

「次は、さつきも意見が出たけど、ベースキャンプを決めるために僕らも探索に出るべきだと思う。……この中でサバイバルに精通している人とかいるかな？」

平田の言葉を聞き、素早くクラスを見回すが、手を挙げるような者はいなかった。よしっ、やるか。俺は、露骨に周囲を見回して、おずおずと手を挙げた。

「あの、精通とまで言えませんが、中学生の時、親に言われてサバイバル合宿のようなものに行ったことがあります。……と言っても数日の体験なので、あまりお役に立てるか分かりませんが……」

正直な話、ここで動くべきか、発言した今でも若干疑問ではある。しかし、今後の無人島試験において、平田などのクラス中心人物に対して甘言、あ、間違えた、諫言するに、「経験者」であるという要素は

大きいのではないかと思ったのだ。

まあ、厳密には俺は経験者ではないが、この島のことならきつと誰よりも詳しいから経験者みたいなもんだろ。スポット毎の採取物とかスポット間の理論最短距離とか言えるよ、俺は。あ、ちなみに予防線を張ったのは、ちゃんとサバイバルしたことが無いので、色々と不備があるかと思っただけだからだ。火のつけ方とか一応勉強したが、上手くできる自信がない。いやー、ライターやチャッカマンを発明した人は偉大だよ。

「赤石君。ありがとう、数日の経験とはいえ、Dクラスには貴重なものだよ。他はいないかな?……うん、いないみたいだね」

内心記憶力でマウンントを取っている俺に対しても、平田は穏やかな笑みを崩さぬまま答えてくれた。うーむ、何か罪悪感。やっぱアレだな、平田みたいな「良い奴」に対して卑怯な方法で手に入れた情報でマウンントを取るとちょっと悪い事している気分になるな。

「赤石君、新たに探索班をいくつか作って周囲の探索を行う事が僕らがすべきことだと思うけど、君はどう思うかな?」

訂正、やっぱり悪い事してる気がしないや。俺は一応、人前苦手っで設定なんだけど……いや、まあ、俺から手を挙げたから自業自得ではあるが、何といえはいいのだろうか、平田が絶対的なリーダーとして、俺はそれに甘言できれば良いのだ。平田がリーダーとして、なんか俺を参謀長みたいに扱うのは駄目なのだ。わかるかな?わかって。「ええっと、俺もそれで良いと思います。あとできれば、俺もこういった地形は少しだけ経験があるので、探索班に入れて貰えると助かります」

まあ、良い機会なので探索班に志願する。赤点三人衆の探索方向からしておそらく川辺のスポットを発見できるだろうけど、他のクラスの動きも気になるし、いくつかの裏道を使えば洞窟や滝壺に先行できるかもしれない。まあ、探索班のメンバーによっては動き方を考えないといけないが……俺一人だけの班とか作れないかな?上手く平田を言いくるめたいが……俺の話術能力の無さと平田の善良な心からして難しいだろうな。

「うん、志願してくれてありがとう。他にも誰かいないかな？できれば三つ以上の班を作りたいんだけど」

平田が周囲を見渡すと、男子二名が素早く手を挙げた。本堂と伊集院だったかな？しかし、それ以上手は挙がらず、これはガチで一人一班で三班かと思つていると、王がこちらを見て、コクリと頷いた。意味わからんと思ひ王を睨むと、ヤツは何を考えたのか手を挙げて立候補を表明した。

おいおいおい、何考えてんだお前。お前、頭は良いけど、運動はドベに近かつただろ。せめてラーメン早食いできるようになってから出直しな！

王が手を挙げると、隣にいた櫛田も手を挙げ、櫛田が手を挙げると、次々と男子が手を挙げ出した。さっすが櫛田、人望……というか男子からの欲望が凄い！いや、まあ櫛田は実際可愛いし、たまに不安定になるけど性格もたぶん良いし、能力も高いから男子人気が高いのは当然なのだが……なんというか哀れだ。この男子たちは知らないのだろう。櫛田は綾小路にお熱ということ……そして、その綾小路は堀北と路上で交わるほどの仲だと……マジで綾小路そろそろ刺されるんじゃないか？少し心配だぞ。

ちなみに当の綾小路もどさくさに紛れて探索班に志願していた。しかし肝心の堀北は志願せず、13人目の志願者が現れたところでパタリと参加者が途絶えてしまった。

「13人か……あと2人参加してくれれば、5チーム作れそうなんだけど……」

平田的にはスリーマンセルを基礎としたいようだ。まあ、4人班がひとつあつても良いと思ひながらも辺りを見渡すと、佐倉が控えめに手を挙げた。須藤や王といったマウント取りが得意なヤツが志願したので、ここらで真の王者を決めたいといった感じだろうか。

まあ、何はともあれこれで14人、平田的にはあと一人欲しいというところで王が隣にいた井の頭を突つき、それに対して櫛田が苦笑を浮かべて何かを井の頭に話していた。しばらく珍妙な櫛田グループを見ていると、おずおずと井の頭が手を挙げた。ほう、友よ、来る

か。

「うん、ありがとう。佐倉さん、井の頭さん。それじゃあ、3人の班を5つ作って探索しよう。今は12時15分だから、そうだね、3時までには一度ここに戻って欲しい」

平田が指示を出すと、各々班を組み始めた。櫛田は速攻で男子に囲まれ、あぶれた王と井の頭がこちらにきた。むむむ、買い物の時のチームか。王は大幅減点対象だが、真の仲間である井の頭がいるから、まあいいか。

「あのさ、赤石君。桔梗ちゃんが男子と組んだから、その、一緒に組まない……?」

王がドヤ顔と緊張顔の間みたいな顔をしながら尋ねてきた。後ろには、おずおずと付いてくる井の頭を従えている。

「ええ、勿論です。また、お二人と一緒にですね」

王は帰っても良いよ?

そうして、探索が始まった。ちなみに班決めは班が完成した順に探索に出発するスタイルだったため、早く班が決まると残り者共がどういった編成になるかは分からない。

俺・井の頭・王のチーム（長い名前なので、これからは「真の友とおまけチーム」と呼称したい）の編成は3番目の速さだったので、残った6人がどういった編成になるのかは分からない。けれど、どう編成しても地獄であろう。なんとたつて6人のうち、3人がDクラスでも強烈な個性を持つ、高円寺・佐倉・綾小路だからだ。どうあがいても絶望だ。ありえないと思うが、仮にこの3人が組んだとしたら間違いない血を見ることになるだろう。ありえないと思うが……

まあ、修羅道を歩いているような奴らのことは置いておいて、探索に集中しよう。現在、俺は「裏道」と個人的に呼称しているルートを_using_している。どうも、この無人島はかなり手入れがされていて、一般に想像されるような無人島ではなく、試験用の人工島といった感じ

なのだ。勿論、これは作成した3Dマップからの考察であり、実物を見ると全然人工的な感じはせず、まさに大自然の無人島なのだが……しかし実際には人の手が入り過ぎている場所なのだ。

この「裏道」もその一つだ。通常の方法では明らかに気づきにくいような道が無人島内に何本か存在する。そしてその配置は嫌らしく、たとえば裏道に入ることができても迷ってしまい、見当違いの方向に出してしまうため、決して目的地までの時間短縮には使えない道なのだ。

しかし！俺は違う。俺は今回の試験のために裏道を全て憶え、その出入りの仕方、迷わない方法、それぞれの裏道を上手くインターチェンジする方法などを研究し続けたのだ。つまり俺は、おそらくだが、理論上最速でこの島を一周できる。平田から3時間貰ったが、それだけあればこの島の要所を二巡できるぞ！

藪を適当に躲しながら「裏道」を通りつつ、時たま後ろから付いてくる二人を見る。二人とも結構余裕な感じで付いてきている。この「裏道」は上手く歩くと結構歩きやすいのだ。一応二人には俺の2メートル後ろくらいから足跡を踏んでもらう感じで付いてきてもらっている。

「赤石君、なんか、凄い道だね……」

そうだね。

「そうですね」

俺が答えると、王は少し黙った後、また口を開いた。

「あ、あの、赤石君つてさっきサバイバルしたことあるって言ってたけど、やっぱり慣れてるの？さっきから迷いが全然無くて……」

いや、初めてだけど。地図全部覚えたから、多分同じ立場なら皆できると思うよ。というより、俺より頭のスペックが良さそうな王の方ができるか……あ、いや、さすがに持久力や踏破性は俺の方があると思うから微妙なところか……

一応、軍事行軍プログラムでさらに「裏道」での行動を最適化してきたから女子でも大丈夫だと思うが……

「ええっと、まあ、そうですね。お二人は大丈夫ですか。実はサバイバル合宿の時は自分以外上級者だったのでいまいち感覚がないのです

が、もしかしたらお二人のペースに合わないかもしれないので、大変なようでしたらペースを落としますので」

「適当な事をいいながらもチラリと王を見るが、先ほど見た時と同じでまだ全然余裕そうだ。心配し過ぎたかな？」

「私は大丈夫だけど、心ちゃんはどう？」

「そういつて王は、若干息を乱しているように見える井の頭の方を心配気に見た。俺も、もし井の頭と友達になる前だったら、ああーこの子運動苦手なんだなーと思ったが、最近の俺には分かる。井の頭、コイツ！今まで体育の授業、面倒くさいから手を抜いていたな！そして今も、過去の嘘との整合性を維持するためにわざと呼吸回数上げてやる……設定に対して忠実に演技しすぎじゃないっすかね？まあ、井の頭は結構凝り性だから仕方がないか……なんか今一瞬心拍数まで弄ってそうだなと思ってしまった。ちよつと、井の頭はそこまでやりそうなイメージあるな。」

「——はあ、うん、……美雨ちゃん、わ、はあ、私はまだ大丈夫だよ」だから、凝り過ぎだよ。心配そうに見る王がなんか可哀そうになってきた。休むか？そろそろスポットに近い川辺の地点だし、小休止とするのも悪くない気がする。

「ええつと、そうですね、井の頭さん、川が近くにあるみたいですし少し休みますか？」

俺が声をかけると、井の頭は一瞬ビクつと体を震わせた。なんかさ、日々日々演技が上手くなってない？

「そ、その、赤石君。ごめんなさい」

ええつと、反応に困るんだが、井の頭は凝り性だが、無駄な事はあまりしないイメージがある。たぶん、ここまで演技をするということは一週回って休息をしたいという意志表示だと思うが、なにか理由があるのだろうか……

「ああ、いえ、こちらこそすみません、井の頭さん。ペースをちゃんと考えてなかったみたいで、次からはもう少しゆっくりで行きたいと思えます」

「そう言いながら、川辺の近くの岩場に背中を預ける。王も近くの岩

場にこじんまりと座り、井の頭も俺に対して「は、はい」とだけ返して、王の隣に座った。

うーん、川が近くにあるからか中々涼しい。ここから少し下流にいったところに川辺のスポットがあり、そこが洞窟・滝壺の次に良い中堅スポットだが……意外と悪くないかもしれないな。池たちの進軍方向から考えると、そろそろ川辺を見つけてそうだが……ちよつとだけ覗いてくるか。

「王さん、井の頭さん。俺は少しだけ川を下ってみたいと思います、5分だけ下つたら必ず引き返すので、合わせて10分したらここに戻ってきてほしいと思いますが、良いですか?」

二人はここで休憩してて。

「は、はい、どうぞ」

井の頭から許可を貰ったので下流に向かい歩こうとすると、袖を掴まれた。見ると王が少し責めるような顔でこちらを見た。うん?これは、アレか。真面目な王としては、班のさらなる分割は危険と言いたいのだろうか。それは確かにその通りだが、川辺で方向が限定されやすく、移動時間も決めているならば問題はあまりないような感じがするのだが……

「赤石君!」

王の声は何時もより鋭く、間違いを指摘するような、いや、まるで罪人に刑罰を告げる判事のような目でこちらを見た。王は小柄だが、いつも以上に迫力を感じる。ドヤ顔とは違う、真剣な表情だ。怒ってる?いや、まあ、確かに俺の進言は場合によってはチームを危険にするものかも知れないが、そこまで怒るような事だろうか?とりあえず、櫛田にチクるのは止めてください、何でもしますから。あ、嘘。何でもはしないや。

「みーちゃん、だよ」

あん?

「えっ?」

俺が聞き返すと、王はいつもの英語の間違いを指摘する顔、つまりドヤ顔になりながらこう述べた。

「さつき、『王さん』って言ったよね。『みーちゃん』だよ」
うるせー、心配して損したわ！ばーか、ばーか。

その後、下流に4分ほど進みスポットを発見した。ほうほう、これがスポットかー。写真で見るときは結構違和感あったけど、こうして実物を見るとなかなか周りの自然と調和が取れていて悪くないな。ちなみに周囲に池たちの姿はない。どうも先回りしてしまったみたいだ。

そこまで考えた所で、ガヤガヤとした騒ぎ声が聞こえた。森の中に少しだけ入り、姿勢を低くし体を隠す。そして、音源の方を見て耳を澄ますと、男の声が聞こえてきた。

「健！お前、何考えてんだよ！ヤバイって！」

「しようがないだろうが！第一、お前がさつき俺を急かしたからだぞ！寛治！」

「何でそうなるんだよ！っていうか、ルールにも書いてあっただろ！本当にヤバイって、とにかく堪えろ！今、春樹が平田のところに行ってるから！」

「クソ！他人事だと思いやがって——」

なんか、大変そうだ。幸い、目視できない距離にいるためか、こちらには気づいていないようだ。俺は姿勢を低くしたまま上流へと戻り、井の頭たちと合流した。彼らはいったい何をやっていったんだ……？

まあ、だいぶスポットに近かったし、彼らはこのまま補助なしでもスポットを見つけられるだろうから、どうでもいつか。

崖下、滝上

川边上流での休息を終えた俺達真の友とおまけチーム（やっぱりこれも長いので次からは「ラーメンチーム」と呼称したい）は、再び進撃を開始した。

「裏道」のインターチェンジを繰り返し行う事で僅かな労力で高速移動を行い、Aクラスが陣取っている事が予想される洞窟エリアに到達した。

一応、Aクラスが侵入してくる側とは逆から辿り着いたのでまだAクラスの連中にこちらの存在は感付かれてはいないだろう。とはいつても、肝心の洞窟は占領されている可能性もある……どうしたものと考えていると、王に手を引つ張られて無理やり藪^{やぶ}まで連れてかれた。おい！まだお前のことを王さんとは呼んでいないぞ！

「赤石君、心ちゃんがあつちに人影が見えたって……」

王は声を小さくしながら話しかけてきた。マジか……もう来たのか。というか、井の頭はやっぱり視力ヤバいな。

「そうでしたか……王さ——みーちゃん、助かりました」

俺も声を小さくして返した。クソ！みーちゃん呼びを強制されるなんて屈辱だ！

「同じ班だから、と、当然だよ」

当然だと思っているならその顔やめようか。俺が怒りに打ち震えていると、今度は井の頭に軽く肩を叩かれた。見ると井の頭は草むらから洞窟がある方面の傾斜部を指差していた。

「あ、あの、赤石君。もう見えなくなつたみたいです。たぶん、森と高低差があるので、このまま進めば、お互いに見えないと思います……」

高低差を計算しながら観察するとか、井の頭は前世がスナイパーだったのだろうか……櫛田グループは人材が豊富だな。モーゼ櫛田にスナイパー井の頭、ドヤ顔王と固有の特技を持っている人が多い。いや、ドヤ顔は別に凄くないか……

「わかりました、このまま藪^{やぶ}の中を進みましょう。さつき崖下に家のようなものが見えたので藪^{やぶ}伝いに進んで調べるのがいいと思います」

洞窟三角地帯の一つである、崖下の小屋だ。ここは確か貴重な魚釣りポイントだ。まあ、アクセスに梯子を使わなければいけないので少し面倒くさいが、攻められにくい場所なので、洞窟を確保したら一緒に占領したい場所だ。

さっきの井の頭が見た人影はおそらくAクラスであろうことを考えると小屋もAクラスのものになりそうだが……いや、逆に考えるとAクラスが小屋を確保する前に見ておかないと調査が難しそうなので見ておくか。もしかしたら誰か来るのを待ち伏せできるかもしれないし。

そんなセコイことを考えながら、二人を引き連れ藪を進み梯子を発見した。梯子から崖下を覗き込むが、やはり小屋と絶壁に囲まれており、逃げ場は海側しかない。うーむ、なんか降りるの怖いな。ん！そうだ！歩哨を立てよう！

「俺はこれからあそこに見える小屋を見てこようと思うのですが、あの小屋は逃げ場が無さそうなのであそこにある藪から崖上を見張っていてくれませんか？他のクラスの人がいいたら、何か合図を送って貰えば適当な場所に隠れようと思うので……」

俺は見てくるから、二人はここで見張ってて。

「は、はい」

「——っ！私も行く……！」

二人同時に別々のことを喋りおった。

「心ちゃんは視力が良いけど、私は普通だから、まあ、赤石君よりはあるけど……それに小屋を調べるなら、人手があつたほうが良いと思うよ……」

今、俺より視力が良いってアピール必要だった？ねえ？必要だった？無くて文章なりたつたよね？

「ええっと、井の頭さんが見て、王さんが知らせる役割だと丁度良いと思つたのですが……」

これなら最悪目立った王だけが見つかるのでリスク分散に繋がる、というゲスい発想は無い。本当だ。どのくらい無いかと言うと、椎名が次に俺と会った時に俺の手をにぎりにぎする可能性くらい無い。う

ん！まったく無いな。

「赤石君、あ、あの、私一人で見張りは大丈夫だと思います……何かあったら口笛で伝えますから」

まさかの井の頭の裏切り。さては、王の相手は面倒だと思っているな、友よ。まあ、王も下にいればもしもの時二人で藪の中に隠れていれば結果として誰も見つからないからその方がいいとは思うけど……なんか、王と二人つきりって少し苦手なのだ。勉強会の時にあった佐倉と二人つきりのような感じだ。うん、苦手だ。

「分かりました……でも、口笛を吹くと場所が特定されて危険ではないですか？」

さすがに友を犠牲にするわけには……

「え、えっと、その私、……口笛だけでなくて、鳥の真似もできるので……そっちで、知らせます。誰かが来たらウグイスの声を出示しますね……」

そういえば、その特技があったね。鳥は大体コンプしてるんだっけ。ん、どうせなら……

「あの、ウグイス以外もできる鳥の真似ってありますか？」

一応、王の前だと話した事がないので俺と井の頭の情報量が不自然にならないように話題に出す。井の頭も俺の質問から提案を察したのか目つきをいつもより鋭くさせた。

「え、ええ、できますけど……」

あ、俺から提案しろってことね。了解。

「いえ、もしできるのでしたらいくつか合図に応じて使い分ければと思います、例えば、誰かが崖下に来そうならウグイス、崖下には来る気配がなくても人影を見たらトビのような感じでしょうか。あ、あと人影が周囲から見えなくなったら、つまり安全そうならカラスとかできますか……？」

井の頭は俺の提案を聞くと、少し待って、言葉を噛み砕くような動作をしてから、「わ、わかりました、やってみます」と小さな声を出した。あの、いつもはそんなに『理解に時間かかっています』みたいな動作しないよね……ちよっと愚鈍演技ガチすぎるだろ。この夏休みに

何かあったの？

気を取り直して、梯子を降り、王と手分けして小屋の中を漁る。一応王にはもしかしたら誰か来るかもしれないから小屋を漁るときは証拠を残さないように伝えておいた。小屋は入り口に水辺にあった装置と同じものが置いてあった。つまりスポットだ。王は初めて見るスポットに驚いていた。ちなみにスポットは何も表示されてなく、おそろくどのクラスにも占有されていない状態だ。

二人で一通り小屋の構造と内部にあるものをチェックし終えたあたりで、ウグイスの鳴き声が聞こえた。思わず王の方を見ると、王もこちらをギョツとした顔で見っていた。

「隠れましょう」

「え、小屋の中？」

王はかなり気が動転しているようだ。

「いえ、小屋はまず探索されると思うので、外側の藪やぶの中です」

王を引つ張り小屋から藪やぶへと連行するが、途中で逆に王に引つ張られた。何してる！今マウント取ってる場合じゃないぞ！

「あ、赤石君！それなら、こっちの方が！」

そう言つて、微妙に隠れにくそうな小さな藪を指差した。いや、その藪だと二人隠れるのは難しそうだぞ。

「いえ、あそこはかなり狭そうですし——」

俺が慌てて説得すると、さらにウグイスの声が続けて二度聞こえた、合計3回だ。これは、アレだな。井の頭の早く隠れるという合図だな。スマン。

「ううん——こっちの方がいいよ！」

そう言つと、王は強引に俺を引つ張り小さな藪の中に押し込みやがった！お前！何しやがる！と思う暇もなく、王が小さな体をさらに小さくしながら押し込んだ。や、やめろ、つぶれる、やめろ、やめろ。

「赤石君、静かにして……」

俺が思わず声をうめき声を漏らすと、王はそれを見咎めてきた。じゃあ、体重かけるのはやめろ。お前小柄とは言え、人間一人分だけ

らかなり重いぞ。

思わず王を指差し、お前が悪いとアピールすると、王は体重のかけ方を変えるものの、何も言わずに体を小屋の入り口の方へと向けた。おい、謝罪しろ。

王が態勢を直したため、僅かに負担が軽くなり、なんとか呼吸できるようになった。うーむ、改めて考えるとこの態勢は辛いな。どうか密着してとても嫌だ。早く他クラスの生徒はどっかに行つてくれないかな。と思っていると、崖上の梯子の方から声が聞こえてきた。

「か、葛城さん、ここ行くんですか！なんか、この梯子グラついてて、危なそうですよ」

葛城か！こりやまた大物が来たな！井の頭、ナイスだ。

「弥彦、よく見ろ、一見錆びているようにも見えるが、着色されているだけで梯子自体は新しい。梯子の掛け方、崖下に見える小屋との距離、ここまでの茂みの具合から考えてもよく整備が行き届いているのは分かるはずだ」

ほえ、すげえな、よくそんな細かいところまで見てるな。というか、俺は錆びているように見えることに気づかなかったよ。いや、まあ、3Dマップ調べた感じからして大丈夫だと思っ込んでいたが……本当に錆びていたら危なかったかな。

「さ、さすがです、葛城さん」

弥彦と呼ばれた男の声を聞くと、葛城は溜息をつき、「お前はもう少し……いや、後でいいか」と口にしていった。その後、葛城が梯子を叩くような仕草をした後、慎重に、けれど素早く梯子を降ってきた。俺と王より素早いのに安定感がある降り方だ。

葛城が降りると、それに続き弥彦、確か姓は戸塚だったかな？戸塚も降りてきた。おう、緊張してきたぞ。ステルス、ステルス、と念じていると、二人は小屋へと近づいていった。やっぱり最初は小屋だね。そして小屋で満足したら、そのまま周囲を探索せずに崖の上へ戻って欲しい。

「見て下さい！葛城さん、ここにもスポットが！」

戸塚が小屋の入り口にあるスポットを発見したようだ。しかし『にも』か、こりや、やっぱり洞窟はAクラスが確保したと思っっているかな？

「……………よりもよって、入口か」

葛城はそう言うのと、周囲と、特に崖の上を念入りに何かを探るように見ていた。やべえ、気づかれたか？……………それとも警戒しているだけか？

「葛城さん？」

戸塚がそう聞くと葛城は手で顔を少し抑えたあと、何かを決めたような顔つきになった。

「弥彦、このスポット、取るぞ」

「ええっ！いいんですか！あの、さつき洞窟では——いえ、その、葛城さんはリーダーですから判断には従いますが……………」

なんか重要な情報がゴロゴロ出てきたぞ。Aのリーダーは葛城なのか？あ、いや、これは指導者という意味のリーダーであってスポット占有者という意味のリーダーとは限らないか？ああ、いや、でもスポットを取るのには占有を行うリーダーカードが必要だから……………

つまり、これはもしかやこの二人のどっちかが占有者の意味でのリーダーなのか！こりやあ収穫だぞ！しかも、この藪の中からはスポットの装置が丸見えだ！どっちがリーダーか分かるぞ！よし、王、よくやったぞ。さつきは良く分からん所に俺を押し込んだと思ったが、結果オーライだ。

……………ん？もしかして王のヤツ、これを予想していたのか？ふと近くにいる王の顔を見ると、こちらに圧倒的なドヤ顔を見せつけていた。え？マジで。お前、あの状況でよく思いついたな……………これは、お前、アレだ。うん。ドヤ顔していいよ。うん。本当に凄いよお前。

「し、しかし大丈夫でしょうか、ここは結構視界も通りますし、何より崖上からは丸見えですよ」

丸見えもなにも、崖の上には井の頭、そしてお前らの近くの藪には俺と王がスタンバイしてるぞ。

「それなら大丈夫だ。この小屋まで俺達は洞窟経由で最短距離を進ん

だ。おそらく理論上の最短時間で来たと言える。浜辺で時間を浪費しているCクラスとDクラスは勿論、Bクラスも動きと方向から考えてここまで来るにはどんなに早く斥候を送ってもあと十数分はかかる。一度占有すれば、後は素早く塔に向かったメンバーと合流し、ここに洞窟から追加の人員を送れば確保は容易だ。Bクラスも近づけまい。しかし、今ここで占有を怠れば他のクラスに付け入る隙を与える。初動の今が最大の好機と言えるだろう」

理論上最短なんて言葉を簡単に使うんじゃない。俺は1時間ぐらしかけてちやんと軍事行軍プログラム作って演算したぞ。

「そうですね！他のクラスにAクラスの俺達が負けるはずありませんよね！」

戸塚が自信あり気に言うのと、葛城は苦笑し、その大きな体で崖側から装置を隠しながら懐からカードを取り出し、戸塚に渡した。そして戸塚は思ったより素早くカードを使い、装置にアクセスしていた。俺はスポット占有の方法をちやんとは知らないが、恐らく今の行動でスポットが占有されたのだろう。これは決まりですな！Aクラスリーダー！判明！棚ぼた！

「弥彦、行くぞ、塔側のメンバーを待たせるのも忍びない」

葛城はそう言うのと、降りてきた時と同じように、素早く梯子を登っていった。

「はい！葛城さん！」

戸塚の声音は自信と安心感に満たされているように感じた。なんか悪い事をした気分が少しだけした。ごめんな。でも俺のポイントは全てに優先されるのだ。許せ。

二人が崖上に登り終えてしばらく経つとカラスの鳴き声が聞こえた。よし、大丈夫そうだ。俺と王は顔を見合わせた後、藪やぶから出て小屋へと向かった。そして入り口にあった装置を念のため確認すると、やはりAクラスの占有マークが刻まれていた。当然、先ほど見た時は無かったものだ。

「赤石君、やっぱり、さっきの人がリーダーだったみたいだね」

ドヤ顔だが、今日は、いや、あと3時間、ああ、いや1時間……いや無理だ、特別にあと5分間だけ許そう。

「そうみたいですわね」

「このことを桔梗ちゃんや平田君に報告した方がいいよね……?」

……俺がサバイバル経験者という風に見られている現状、俺の所属班がAクラスのリーダーを知ったという情報はない方がよい。勿論、ポイントが欲しいのでこちらのリーダーとなる人物には伝える必要があるが……まあ、誰になつたとしても実質的な指導者は平田だし、平田にそれとなく伝えれば問題はないだろう。

「ええ、俺もそう思います……ただ、Dクラスは少し纏まりに欠けますからこの話をいきなり持っていくと混乱を呼ぶかもしれません。そこで提案なのですが、この情報を一旦俺に預けてくれませんか? 試験の終わりに近くなつたら平田君に伝えようと思います。勿論、王さんのおかげで得られたということも報告するつもりです。どうでしょうか?」

この提案は、王はクラスのカリスマリーダーである平田からの高い評価を得られ、俺はクラスで目立たなくてすむwin-winの関係だ。まさか断ることはあるまい。しかし、そういった俺の考えとは裏腹に王は何かを思案し始めた。おい、即答しろや!

「……………、えっと、赤石君、私はつ——、…………うん、…………うん、赤石君の言う通りだと、…………思うよ」

めっちゃ悩んでたようなんですわ、大丈夫でしょうか。というか、アレ、何これ、俺なんか変な事言った? 俺、また何かやっちゃいましたか、って、煽るべきか? いや、何か、王の顔は結構真剣だ。止めておこう。今日は王の表情が全体的にいつもよりキリリとしているな。いや、まあ結局ドヤ顔に収束するからあんまり変わらないけど……

葛城達の調査後の小屋の変化を確かめた後、俺と王は梯子を登り、藪やぶの中に隠れていた井の頭と合流した。ちなみに臆病者である俺と王は何度も、それはもう何度も周囲を確認し、ゆつくりと梯子を

登っていたためか、途中から何度もカラスの鳴き声が聞こえてきた。はよ来いという井の頭の強い意志を感じた。

「二人とも無事で、よ、よかったです」

井の頭の第一声であった。わりと普通である。

「うん。心ちゃんも大丈夫だったんだね」

「う、うん、ずっと藪の中にいたから見つからなかったよ……美雨ちゃん、何か良い事があったの……？」

友よ、さすがだ。鋭いな。あ、いや、王が分かりやすく、『私、凄く事しました』みたいな顔しているから、誰でも分かるか……

「う、……ううん、と、特に何も無かったよ」

王は俺の方を少し見た後、口を噤んだ。どうも、さっきの約束を守ってくれたようだ。なんだかんだで、彼女も中々真面目な少女である。まあ、別に井の頭に言っても良いのだが……はて、どうするか、井の頭のポジションからすると知らなくても良いハズ、いや、『知らない人』であるとされた方が良いか。

とりあえず、今は王に合わせておいて、明日、井の頭と事前に計画していた集合時間の時にAクラスのリーダーについて伝えよう。その時、井の頭から『王によってAクラスの情報がもたらされる必要性』があるかどうか聞こう。必要ないならこのままで。必要だと井の頭が言ったら、改めて適当に理由を付けて三人で行動し、そのときに王に『井の頭にも同じ班員として情報共有が必要だと感じた』とでも言えればいいだろう。

俺は王相手に、井の頭には秘密だぞ、という意味を込めて軽く頷き、次の目標について話すことにした。

「お二人とも、次の探索ですが」

と、言いかけたところで、井の頭がこじんまりと手を挙げ俺の言葉を遮った。はて？と思えば見ると、井の頭がビクビクしながら、話始めた。

「あ、あの、赤石君。少し言いたいことがあって、い、いいですか……？」

うむむ。友がこうして手を挙げるといふことは、何か大きなことが

あつたのだろう。なんだろう？

「ええ、勿論ですよ、何かありましたか？」

俺がそういうと、井の頭は若干、恐怖感を抑えたような表情になった。

「は、はい、あ、あの、赤石君たちの所に降りた人は、多分Aクラスだと思います。何だか、Aクラスについての事とか戦術？みたいなことを言っていたので。それと、その人たちが来た方向からさらに三人の人があっち側にある塔みたいな物がある方に走っていきました。赤石君たちのところ二人が降りた後です。その後、また同じところから、今度は女の子が一人、私たちが休んだ川辺の方に向かっていきました……私が見たのは以上の6人です」

え、えつと、何というか、ほ、報告ありがとうございます。君は観測手か何かなのかな？

しっかし、どうするかなー？一応、葛城達が来た方向について井の頭に聞いたところ、「あっちです」と指差した方向はまさしく洞窟のスポットがある場所だった。つまり葛城率いるAクラスは洞窟確保が濃厚だ。

そういえばさつき戸塚が洞窟が云々とか言ってたな。何かひと悶着あつたのかな？現状だとそれについての深い考察はできないが……少なくとも洞窟方面から葛城・戸塚以外に4人が現れ、内3人は走って塔のスポットへ、そして残る1人（女子らしい）は川辺かー。川辺側はDクラスの陣地になるっぽい気がするから、あんまり行ってほしくないな。というか、一人とはいえそちらに歩哨がいると川辺に行きにくいな。この後は、塔を偵察してから川辺で赤点三人衆と合流するか、もしくは三人衆をスルーして平田本隊と合流するのもアリかと思っていたが……

「あ、あと、崖下を探索していた二人組も塔の方へ行きました……」

おつと、追加情報サンクス。葛城たちも塔か……？んー、どうすつかなー。少なくとも5人が塔にいる。うち三人は先行している。つまり、こちらから仕掛けるのはおそらく不利だ。となると、塔は避けたいが、かといつて、洞窟前はAクラスの陣地ができている可能性が

高い。川辺方面には謎のAクラスの歩哨が1人立っているから何となく戻りにくいし、それに時間からしてもあと一箇所くらいは偵察したいところだが……

あー、こつからだと滝壺スポットに繋がる裏道がちょうどAクラスの哨戒圏の盲点になるな……よつし、いつちよBクラスを見てきますかね！

「井の頭さん、貴重な情報ありがとうございます。俺の見立てになりますが、だいたい、ここまでの地図を書くところな感じになると思います」

そう言いながら、木の棒を使い土に地図を書く。平田、川辺の休憩地点、洞窟、現在地、崖下、塔を記入していく。

「船が一周するとき滝が見えました。正確な位置は分かりませんが、周囲の地形から考えるとこのあたりだと推測できます」

俺は暗記した滝の正確な位置を地図に追加する。まあ、地図自体が汚いので、あんまり正確でも意味は無いのだが。

「そこで、この滝を目指したいと思います。水源に近いですし涼しいと思います。お二人も良いでしょうか？」

俺の提案を聞くと、井の頭は頷き、王はなぜかドヤ顔をしながら木の棒を持ち地図を指した。なんでお前は当然の権利のようにドヤ顔をするのか……

「赤石君、地図書くの、あんまり上手じゃないね……私、結構得意だけど、教えようか？」

あゝん？

堪忍袋の緒が切れそうになりつつも、俺たちラーメンチーム（このチーム名は正しく機能している気がしないため、今後は「ドヤ顔を許さない会」に変更したい）は、裏道を利用し滝壺スポットを見下せる高所へと向かっていた。

さきほどは沿岸の近くだったこともあり標高差があるため、裏道も

今までのものよりかは険しく、途中王が疲れて休憩を要求してきた。一瞬、「ドヤ顔を許さない会」として厳粛な処分を下すべきか悩んだが、まあ、あんまり人の苦手な面でイビるのも良くないかと思い、2度ほど休憩をはさんだ。

俺がお奉行様だったら、「貴様、他の島でもドヤ顔とマウントを繰り返していたようだな、同情の余地なし」と言う所だが、別に俺は奉行でも鬼殺しを生業とする人でも無いので止めておいた。……一瞬、もしこの仮定がなりたったら打ち首から助けるのは井の頭だなとか思ってしまった。いや？どつちかと言うと櫛田か？

休憩中は、休憩が必要な王がなぜか人一倍元気にマウント取りをし、逆に休憩が必要ない井の頭は必死に息を整えていた。これ、一見すると井の頭のために休憩しているように見えて、なんかもう駄目だった。

休憩後に滝の上流にあたる小川を無事見つけたため、裏道から外れ小川を慎重に下っていく。もしかしたら、滝壺にいと予想されるBクラスが斥候を滝上に配置している可能性が頭を過つたからだ。もし俺が一之瀬様と同じ立場なら斥候を送ると思う。まあ、これは俺が高所を取られると不安になるからかもしれないが……

「あ、赤石君、下にいます……」

井の頭が小さな声でそう伝えてきた。彼女が指差した方向を見ると、滝壺に多くの人影が見えた。Bクラス発見！……いや、まだ厳密にはBとは確定していないが、状況的にBだと思う。

「井の頭さん、ありがとうございます。もう少しだけ近づけそうですか？」

まだ、かなり距離がある。というより、近くを見回してもBクラスはいないし、井の頭も反応していない以上、滝上にはいなかったのだろう。うーん、俺と一之瀬様はやっぱり思考回路がだいぶ違うみたいだ。まあ、いないのならラッキーだ。これで一方的に滝上から滝壺スポットを観測できるぞ！今度は井の頭も一緒だ。

「ええっと、少しだけなら、大丈夫だと思います。大きな音を立てなければ……ですけど」

許可が出た。俺達三人は徐々に前進し、滝の下を見渡せる絶好のポイントを確保する。うむ、俺の視力でも結構見えるぞ。いち、にい、さん、うーん、一杯いるぞ。ん？あの特徴的な長髪に美少女オーラ、あれは一之瀬様か？つて、あれ、なんか集まり始めたぞ……あれ？俺達バレた？偶々だよね？怖いんだけど……

「な、なんだろう？」

王も不思議なようで、小声で疑問を呈していた。チラリと井の頭を流し見るが、……うーん、いつも以上に表情が読めんが、かなり集中しているように見える。邪魔しないでおこう。

「……………あ、」

あの、井の頭さん、いきなり眩かないで下さい。あなたがやると少し怖いです。大丈夫だよね？Bクラスにバレてないよね？

「……………あ」

何を思ったのか王が井の頭の物真似をした。おい、馬鹿、やめろ。今は真面目にする時だぞ。そう王に対して内心注意しながらもBクラスを観察すると、

「あ」

と、俺も思わず声が出てしまった。いや、違う、これは笑いを取りたいのではない。純粹に凄い場面を見てしまったからだ。まさか一日にして二度このような場面を見るとは……

なんと、Bクラスの占有行為のようなものを目撃してしまったのだ。具体的に言うと、彼らはスポット装置に対して円陣を組み外部からの視界を防いだ。そして一之瀬様らしき人を含む4名が装置の対して同時に手を伸ばして何かをやっていた。遠すぎて顔も手もはっきりとは見えないがおそらく状況から考えて4人のうちの誰かがカードキーを持っていたのではないだろうか。

まさかBクラスのリーダーがこんな序盤から4人に絞られるとは……まあ、ここからだと言分らないため絞れていないが……一応、一之瀬様もリーダー候補であるというのが分かっただけでも収穫か。あ、あと、今の時間からBクラスのスポット更新時間が概ね分かったな。

運も大きかっただろうが、高所ゆえ、円陣の効果を無効化できたことも大きいだろう。地の利を得たぞ！思わず王を見ると、驚いた顔をしつつもこちらをじっと見てきた。

分かるぞ、お前は今こう言いたいんだろう、I have the high groundと、つまり地の利だ。うーん、しっかし、今の4人のうち誰がカードを突っ込んだかまでは分からなかったな。やはり、リーダーは一之瀬様だろうか。何だって彼女は、『Bクラスにバランスをもたらす者』だ。なんか闇落ちしそうな渾名だな。無いとは思うが、もし闇落ちしたり過去に闇があつたら『選ばれし者だったのに！』と言うことにしよう。

ふざけた事を考えている間も占領行為を終えたBクラスは活動を続けており、各々が一之瀬様の指示で動き陣地の設営をしていた。皆がテキパキと動いており、Dクラスとの差を感じた。うーむ、やはり一之瀬様率いるBクラスは強い。

一通り滝上での偵察活動を終えた後は、時間もだいぶ経っていたために裏道を使い平田本隊へと合流した。川辺を迂回するルートなため、Aクラスの歩哨に会うことはなかった。また、戻るとき念のため王に井の頭の化け物視力と鳥真似能力は秘密だと伝えておいた。一瞬キョトンとしていたが、井の頭が目立つと悪いし、と伝えておくと、納得していたようだった。櫛田にも秘密だからな！

一日目の終わり

14時50分、平田本隊と無事に合流した。

なお、5つあった探索班の中では合流したのが最後だったため若干気まずかった。まあ、時間内に合流したのでよしとしよう。それに高円寺はなんかどっかに行っちゃったらしいので、厳密には俺達「ドヤ顔を許さない会」が最後というわけでもないようだ。

ちなみに高円寺の班は綾小路・高円寺・佐倉で構成される班だったらしい。まさかすぎる班である。何でこの3人を一緒に組ませたんだよ。熱量が高すぎるだろ。

それにしても、高円寺はどこへ行ったんだ。どっか行っちゃった、みたいなことを綾小路が言っていたが、絶対嘘だろ。だって、それなら綾小路が取り押さえてるだろ。もし取り逃がしたのなら、何の為の謎技術だと思ってしまう。

まあ、見当はついていない。おそらく、グループが上手くいかず仲違いし、綾小路と佐倉が同盟を組み高円寺をフルボッコ。そしてどっかの木にでも吊るしたんだろう。ひえ、何と恐ろしい。まあ、さすがにまかり間違って高円寺がリタイアするような事がないように加減はしているだろう。それに点呼の時間にならないと減点になるので、時間になる前には綾小路か佐倉が高円寺を解放しにいくだろう。

綾小路グループ（正直、佐倉グループとも高円寺グループとも呼称できそうなので悩みどころだ）の恐ろしさについて一通りの考えをまとめてみると、王がマニュアルとボールペンを持ってこちらに来た。なんやねん。

「赤石君、これ平田君から借りたんだ……」

そう言いながらマニュアル内の島の概形が書かれていたハズのページを見せてきた。なんとということでしょう。王がマニュアルに落書きをしていました。これは大変です。見ると、島の概形が書かれていたページはあら不思議。王によって所々、汚らしい書き込みがされていたのです。

「……これは、わ、みーちゃんが書かれたんですか？ 凄く精確な地図で

すね……」

まあ、色々言いましたけど、普通に地図書くの上手でした。普通に凄いいと思います。方向感覚と距離感覚が抜群ですね。……でもさ、いくら自信があっても学校が配布した資料の島の概形に直接書きちゃ駄目だろ。せめて他の白紙のページに概形を写して書けよ。もしお前が下手くそだったら他の人が困るだろ。いや、まあ、上手かったから別にいいんだけどさ。

「う、うん。ありがとう。……地図はこういう風に書くんだよ。私が教えてあげようか」

その顔やめろ。

王の怒涛のマウント攻撃に耐えていると、池が帰還した。どうやら、やつとスポットを見つけたようだ。遅すぎるだろ、いったい君たちは何をやっていたんだ、と思い、平田にそれとなく尋ねると……口に出すのも悍ましい事件があったようだ。幸い、平田と山内の連携により未遂で免れたが……須藤、お前、環境は汚したらいけないって話だっただろ。なんでそんなことを……

なお、平田は本件を秘密にしようと思っていたが、山内が暴露したせいで一部の生徒には須藤の痴態が露わになったらしい。

そんなこともあつてか、赤点三人衆の班の探索速度は大きく低下したみたいだ。まーた須藤が足を引っ張ったぞ。まあ、とりあえず、須藤はしばらくの間平田と山内に頭が上がらないだろう。いや、山内のせいで須藤の名誉が傷つけられたので山内に関してはトントンかもしれないが……

池の案内により川辺のスポットに導かれた平田本隊は無事、スポットを確保していた須藤と山内とトイレの2人と1つと合流した。なぜトイレもこちらに置いてあるかというところ、山内が平田本隊から輸送したからだ。つまりそういうことだ。

まあ、須藤の痴態は本題ではないのでどうでもいい。とりあえず、現状をまとめると、高円寺を除く全員が川辺のスポットに集結したのだ。つまり、今後を左右する重要な会話がここで行われるだろう。た

ぶん。池や平田たちの会話を見守っていると、平田が重大な議題を挙げた。

「じゃあ、後は誰をリーダーにするかだ。肝心なところだね」

難しいところだ。指導者としての意味なら平田一択だろうが、それは他のクラスも知っているだろうし、リスクが大きい。個人的にはあんまり目立ってなさそうなヤツが良いと思うが……

クラス内に目を向けると、皆嫌そうな顔をしていた。まあ、もしリーダーを当てられたら戦犯だからな……誰もやらないだろう。当然俺もやだ。そんな空気の中で、榎田が手を挙げた。なんじゃ？ 推薦か？ 俺と井の頭以外にしろよ。

「いいかな？……私なりに色々考えたんだけど……リーダーは責任感が高い人じゃないとダメだと思うの。でも平田君がリーダーをするのは、リスクが大きいと思うの。だから、目立ち過ぎず、責任感がある堀北さんがいいと思うの」

いや、個人的に堀北は目立ってると思うけど……他のクラスからはあんまり目立ってないからセーフなのかな？

堀北は見た目も美しいし喧嘩腰だから色々と揉め事とか起こしてそうなイメージがあるけど、大丈夫だろうか？ まあ、平田・軽井沢・榎田ほど目立ってないからいいのかな。あと責任感云々で言うなら幸村あたりでも良くない？ アイツも属性としては堀北系ってだけで、堀北ほど注目を集めるタイプではないだろうし。

あー、でも。さつき女子と揉めたから、リーダーにすると反発が大きそうだな。いやいや、でもそれなら堀北は性格上リーダーにするのは不適切のような……

まあ、実質的なリーダーは平田で、堀北はカード操作係だと考えれば問題ないのかね？ うーん、割り切れない人は出そうな気もするけど、あー、でも、来月以降の小遣いが増える試験だし、さすがに皆割り切るかなー。

本当なら自分以外に当たったからいいか。と、思う所だけど、やっぱり堀北は目立ちすぎてる気がするし、もういつそ綾小路でよくない？ あいつ、有能な怠け者っぽいから大変な仕事を押し付けられれば必死に

働くよ。たぶん。きつと必死に戦犯回避のために死力を尽くすよ。

あー、なんか、これ適当な考えだけど、結構ベストな気がしてきた。ちよつとだけ言ってみるか。言ってみるだけ。

「櫛田さんの意見に賛——、赤石君、何かな？」

やつべ、手を挙げたのとはほ同時に平田が話を纏めようとしてたぞ。やべえよ、やべえよ。思わず軽井沢軍団を見る。怒りゲージ10%つてどこっすかね？すんませんでした。本当にすんませんでした。許してください。マジで許してください。これはアレです。何か分かりますが、櫛田が悪いんです。そう思いながら櫛田の方を見ると、櫛田はこちらから視線を逸らした。おいおいおい、まさかお前本当に俺を嵌めたんじゃないだろうな……

「えつと、堀北さんは確かに素晴らしい方ですし、責任感が強い方でもあると思います。しかし、堀北さんが優秀な生徒であることはDクラス以外でも話になっているでしょうし、リーダーにするのは危険ではないでしょうか？」

提案後に素早く、クラス全体を見る。どうでもいい1割、それもそうだな2割、まだ話続けるのかよ7割といった感じだ。軍団の皆様は殆ど7割の方だ。サーセン。2割に属しているように見える平田と櫛田は何かを考えながらもこちらを見て反論を述べてきた。

「そうだね、確かに赤石君の言う通りだね。堀北さんは目立つ人かもしれない。でも、その上で僕は堀北さんがいいと思うよ。リーダーになるのは責任感だけでなく統率力やメンタルの強さも要求される。それらの能力が高い水準に纏まっている堀北さんがやるのがベストだと思う。……勿論、堀北さんが受けてくれれば、だけどね」

という、平田の言葉と、

「うん、平田君の言う通り、赤石君の意見は正しいと思うよ。ありがとう。でも、その上で私は堀北さんがリーダーになるのがクラスの為になると思うの。理由は平田君が言ってくれたけど、でも私から改めて言えるとしたら、きつとそれは、堀北さんが信頼できる人で、それについて皆の信頼に答えられる人だからだよ」

という櫛田の言葉により、俺の意見は却下となった。いや、まあ、メ

ンタル的に受けたくない人に受けさせるべきではないと言われると確かにそうなのだが。

ああ、あと櫛田さん、あなたは堀北アンチじゃなかったっけ。堀北の悪口だとあんなに盛り上がるじゃん。何、あなたはツンデレなの？ 本当は恋敵の堀北の事も気に入ってる系？ ラブコメの登場キャラか何かなの？

まあ、櫛田の態度に考察しても仕方ないので、適当に「た、確かにお二人の言う通りですね」と返して、堀北のリーダー就任を認める事となった。責任感とメンタルが強い堀北は当然この提案を受け入れリーダーとなり、スポットの占有を行った。そして次の議題であるが……

「次にポイントに関してなんだけど……赤石君、こういったサバイバル生活で最低限何か必要なものがあつたら教えて欲しい」

平田がそう言うと、皆の視線がこちらに集まった。ぐぬぬ、やはりクラスの方針に関与しようとする注目を浴びることになる。できれば目立たずに4000万欲しい身としては避けたいのだが、ここは言葉に注意だな……

「まず、マニュアルを見せてもらってもいいでしょうか？……櫛田さん、ありがとうございます。……そうですね、さきほど話にもあつた仮設トイレは必要だと思います。他にもテントは配布は2つですが、あと2つ追加が必要です。野宿するのは身体に大きな負荷がかかりますし、メンタル面にも悪影響を及ぼします。俺の行った合宿でも、野宿は最悪の時のみとしていて、できるだけ避けるようにと言われてました。それと食料ですが——」

「待て、赤石。勝手に使用目的を決めるな。テントは男女1つずつでも十分なはずだ」

幸村が遮ってきた。いや、あの、気持ちちは分からなくもないけど、テント1つで20人は狭いぞ。あと、多分だけど、軽井沢軍団がいるから追加のテントを購入しないと軍団が2つともテント持ってちゃうと思うぞ。あいつらはそういうやつらだ。だって発想が暴力団だもん。

俺が少し困っていると、平田が幸村に対して話しかけた。来た！平田大明神来た！

「幸村君、現実的に考えて、テント1つで20人は収まらないよ」

馬鹿め幸村。こういうのは根回しが大切なのだ。普段から平田や軍団に媚びることでこういうときは意見が通りやすくなるのだ。大切なのは意見の正当性ではない、いかに権力者に気に入られるかだ！分かったか！

「だったら、一部は野宿すればいい。第一、赤石の知識が本当に役に立つか疑わしいぞ」

ギクツ。適当に言ったのがバレたか……？ぐぬぬ、もう少し幸村にも根回しをしておくべきだったか……？

「少なくとも、僕や君よりは彼の方が経験があるよ。それに意見に關しても、彼は俯瞰的に見えていると思う。……そうだね。本当は赤石君の説明が終わってから話そうと思っていたんだけど……今、話そう。今回の特別試験で、僕たちが残すべきポイントのラインについてだ」

そう言うと、平田がポイントの使用目的について話し始めた。内容としては、食料・水はポイントで確保し、テントを2つ、仮設トイレ、あと非常用にポイントを用意して計180ポイントを使用し、残った120ポイントを保全しようというものだった。

この短い間によくそこまで考えたな……俺も漠然と平田に近いものを考えていたが、これはかなり前から準備していたおかげだしな。しかも、考えの質が俺より深い気がする。なんで、俺より思考時間が短いのに結果が良いんだよ……やっぱり、あれだな、平田のスベックは葛城や一之瀬様にも劣らない気がする。親しみやすさなら葛城以上だ。何でコイツはDクラスなの？判定ミスじゃね。

幸村を含むポイント温存派、いや、それだけではなく、Dクラスの大半の生徒は平田のアイディアで行くか、という空気になってきたあたりで恐る恐る手を挙げた。周囲からまたお前か、という視線が刺さった。ちやうねん。今度はいちゃもんじゃなくて、もうちよつとできるよって話だから。

「平田君の提案で俺も良いと思います。ただ一つ、水と食料で110ポイントという件ですが、これは恐らくもつと減らせると思います。さきほど探索した時、この島にはかなりの食料が見られました。果物、野菜、あと穀類も見かけたので、上手く集めれば、食料分の殆どは温存できると思います。水に関しては、その川があります。見てみましたが、透明度と泳いでいた魚から考えて、かなり綺麗な水だと思います。煮沸し、再冷却すれば十分、飲料可能だと思います。勿論、川ですから食事以上に抵抗感はあると思いますので、飲んでもいい方だけだと思いますが……」

ぶっちゃけ、川に関しては学校の手が加わっているので直飲みしても大丈夫だぞ。上流で汚染されれば別だが、学校も汚染禁止のルールを出しているし、たぶん大丈夫だろう。

「はあ？、川の水……？」

軍団から批判の声が上がった。気持ちは分かる。というか、俺も他人に川の水飲め、と言われたらちよつとやだ、と言う。しかし、不思議なことにこの川の水安全なんですよ。マジで。

そう思っていると、平田が少し悩んだ顔を作りながら質問してきた。あー、水はポイントで賄うって言った方が良かったかもなー。

「赤石君、川の水は確かに飲めれば理想だけど、君が言うからには根拠があると思う。教えて貰えないかな」

やだ。というか、この辺の知識はうる覚えなのだ。確か、ヤマメだったかな？このあたりの川で生息していたハズだ。

「さきほど、川を見た時、ヤマメがいました。ヤマメは清流でしか生息できない特殊な川魚です。この魚がいれば、その水は煮沸すれば十分に、最悪、煮沸しなくても摂取できると合宿では習いました」

水の中で泳いでいる魚が何かなんて本当は知らん。あと、清流を飲めるかも知らん。でも、この島の水は特殊な濾過がされてるから大丈夫だぞ。俺が平田に、川の水、平気、川の水、安全と視線でオーラを飛ばすと、平田も納得してくれた。一応、本日は水をポイントで買い、平田だけが煮沸水を飲み、明日平田が生きていたら煮沸水を希望者に配布するという形になった。

なんか、平田を生贄にするみたいで気まずかったから生贄に志願したら、平田から「もし何かあった時に、倒れるのは僕であつた方がいい」と言われて固辞されてしまった。違う、そうじゃない。俺は平田が倒れる事を心配しているんじゃない。俺の立場が悪くなることを心配しているんだ。うーん。軽井沢軍団からの視線が痛い。

その後は食料確保として、釣り道具が1ポイントで購入となつた。また他にもシャワー室が20ポイントで買われそうだったので事前に調べておいた5ポイントのウォーターシャワーなるものを熱心に紹介したら、何だかんだでポイントを残したいDクラスの面々も納得してくれたのか、そちらの方となつた。よし15ポイント節約したな！

他にも、この試験用に作った無人島天気予報システムだと6日目に雨が予想されるので、平田に雨が降った時にテントだけでは心もとないのでと言い、木材製の簡易シェルターの立て方を教えておいた。一番簡単な作り方の物だから、たぶん手先が器用なヤツならできると思う。たぶん。

一通りの方針が決まると、平田の指示により仕事の割り当てが行われた。テントの設営、釣り、食料探索、燃料集めなどにクラスメイトは従事することとなつた。当然俺は、人前で大口叩いたこともあり食料探索班となつた。

正直な話、この班になるためだけにここまで頑張つたと言つていい。なんといつても、俺は植生を全部暗記したのだ。そう、全部暗記したのだ。他のクラスが夏休み遊んでいる間も俺は全部暗記したのだ。暗記したんだ、大事な夏休みを使ってな……

探索班のメンバーは俺と、櫛田グループのいつもの3人と、水泳部の小野寺、あとなぜか長谷部、船室が同じの三宅、探索に志願していた伊集院、ちよつと紹介文が思いつかない宮本の計9人だ。なかなかの大所帯だ。

この九人のまとめ役は櫛田である。まあ、実質探索班のリーダーだ。所々、俺がアレコレ進言できたらいいな。

櫛田に率いられた探索班は、2時間ほど探索を経て水辺周辺の多くの資源を獲得した。探索の際は、あまり不審にならないように、けれどもそこその情報を櫛田に提供できたと思う。

なお、採取物の多くは食料である。まあ、食料探索班なので当然と言えば当然だが……一応、腐ることも想定して、採取する量は、明日の朝食分までにした。といっても40人の2食分なので、かなりの量だ。ぶっちゃけ4回も本陣に戻った。途中からさらに5人（軽井沢軍団の方々）ほど追加の人材を平田から捻出してもらった。

あと、途中で川辺に戻った時に少し本陣の様子を見た所、釣り部隊はかなり活躍しており夕飯には期待できそうであった。なお、さりげなく一回目の探索後に確保された食料を見て平田が篠原に声をかけていたのを俺は生涯忘れないだろう。

いや、まあ、平田の立場からすると正しい判断なのかもしれないが。そういえば3回目の出撃の時に綾小路がこちらに寄ってきて、「赤石、火が……」とか言ってきたが、忙しかったのととても嫌な予感がしたので聞こえない振りをしておいた。

そうして、4回目の食料補充を終えた櫛田率いる食料探索班は川辺へと帰還した。テントは立ち並び、火が焚かれ、川辺には魚たちが骸をさらしていた。また、その近くでは平田により急遽編成された調理班の面々が3回までの食料探索で運び込まれた食材と魚を合わせて調理を行っていた。

うーん、一時はどうなるかと思ったが、案外何とかなるものだ。案ずるより産むが易し、というヤツだな。見たか！これがDクラスの結束！この鋼のような結束は誰にも崩せない！

Dクラスの強さを再確認した後、探索での収穫について平田に報告しようとするが、どうもききな臭い。なんか平田の周囲が少しざわついていた。気になり、近くにいた軍団兵である佐藤に聞いてみると、Cクラスの伊吹何某が先ほどベースキャンプに来て、今平田が対

応しているらしい。

おいおい、マジか。と思っていると、櫛田も素早く佐藤が示した方向へと走っていった。

うーん。まあ、龍園の配下だし。というか、龍園はなんか今回の試験部下に訓示を与えていたし、怪しいぞ。流石に、邪神椎名を解き放つことはないだろうが、戦闘力0・01椎名以下のゴミを投げてくることは十分にあり得る。いや、まあ、椎名が封じられているCクラスのメンバーである以上、伊吹何某が0・1椎名以上の実力を持つことも考えられるが……どちらにしろ、警戒すべきだろう。というか、問答無用で追い出せや。

しかし、平田と櫛田の考えは俺とは違ったようで、なぜか伊吹何某を受け入れる方向となったようだ。いや、追い出せよ。

伊吹を招き入れるという予想外の流れになったものの、気を取り直して夕食を楽しんだ。ちなみに伊吹の分の水は、元々余る予定だった平田のものを渡すことになった。食料に関しては櫛田班の五人がそれぞれ出し合うことになった。チラリと井の頭を見たが、あれは間違はなく、『なんでこんなアホなことをしているんだろう』と思っっている顔だ。

なお、食事に関しては中々美味しかった。野菜・果実・穀類、そして釣り班がだいぶ頑張ってくれたおかげで、少しだが魚も配給され、それを調理班が見事に料理してくれた。

どうも、料理部の篠原がだいぶ頑張ってくれたようだ。よくやった！さすがは軽井沢軍団……と褒めたいところだが、どうも、このクラス、俺の想像以上に複雑な人間関係をしているようだ。具体的に言うと、食事の仕方に歪な人間関係が表れている。

男子に関しては比較的分かりやすく、基本的には全員纏まって食事をしている。綾小路や三宅や幸村などの孤高タイプは若干距離を取っているものの、集団との距離はそこまで遠くない。ちなみに俺は

平田の傍だ。

しかし、一方で女子に関しては大変複雑だ。先ほどの櫛田班に微妙に人と距離を取る長谷部がいたり、他にも軽井沢軍団だと思っていた篠原は別グループだったり、なんだか混乱する。一応大きく分けて、軽井沢、篠原、櫛田のグループがそれぞれある。どこにも在籍しないのは、孤高の堀北とマウント王の佐倉だ。

グループ間の距離は広いというよりは、むしろ深い。仮にもしあの間で落ちたら大変だな、と感覚的にも分かってしまう程の深さだ。

ちなみに、赤点三人衆の女子評を小耳にはさんだところ、Dクラスの3つのチームの名前はそれぞれ女帝、傲慢、仲良らしい。結構納得できる渾名だけど、仲良しチームのうち最低1名は班内に友達はいないらしいから、仲良しチームって呼んで良いかわからんぞ。うーむ、やはり女子の人間関係は複雑だな。

……あれ？3グループあるのに、女子のテントは2つ……1グループ野宿するのかな？

「そういえば、高円寺君は？」

飯を食っている時に女子の一人がそう呟いた。そういえば、見ないな。そろそろ点呼の時間だから、綾小路と佐倉が木から下ろしてやっていると思ったが、まだ下ろしてなかったのか……よほど高円寺がふざけた事をしたのだろう。

まあ、高円寺はいつも暴れまわってるし気持ちも分からなくもないが、許してやればいいのに。そう、どんなに憎くても許すことは大切なんだ。広い心をもって、高円寺の無礼を許してやろうという気持ちの持ち方が大事なのだ。慈悲の心を持つのだ。俺のように。

美味い夕飯で心が和んでいたDクラスの下に今日で最後にして最大級の爆弾が茶柱先生により落とされた。

「ああ、高円寺なら体調不良でリタイアだぞ。勿論、リタイアということになるためDクラスからは30ポイント差し引かれた。これはルール上、どうしようもない」

は？

は??

はあああああああ!!!!

おい、ちよつと、高円寺、お前、マジふざんけん。冗談じゃなくて、本当にマジでふざんけん。ありえないぞ、お前、これはお前、許されないぞ。慈悲とかないからな。これは。お前、本当に許されないぞ。お前、これ、自分が何をやったのか分かってるのか？ありえないからな、マジで、お前、こんな行為ありえないぞ、広い心とか関係ねーぞ、この怒りが収まるかボケ！

ああ、憎い憎い憎い、高円寺が憎い。あの野郎。俺が一瞬想像した「自分だけリタイア」をやりやがった。お前本当にありえないぞ。これが仮に本当に、例えば体が丈夫じゃない人が体調不良になったのなら許せるが、高円寺は絶対違うだろ。どうせ飽きたとかそんな理由だろ。本当に憎いぞ高円寺。許す事の大切さなんざどうでもいいわ。この憎しみを晴らすことしか今の俺にはないぞ。

もう、俺は本気で怒ったぞ。お前、高円寺、俺をここまで怒らせたのはお前が初めてだぞ。お前が将来高円寺コンツェルンを継いだら、内部の不正データを全世界に発信してやるからな。高円寺コンツェルンを世界一クリーンな企業にしてやるからな。これはマジでやるぞ。

俺、卒業したら、世界一クリーンな企業作るんだ！

談合、そしてCクラスへ

二日目の明け方。俺は足音を殺してテントから出た。念のため辺りを見回したが、誰一人起きていないようである。ベースキャンプは静けさで満たされていた。僅かに安心した後、水辺近くの草地に腰を下ろす。そうして5分ほど待つと女子のテントから一人の少女が現れた。来たか、友よ。

「おはよう、井の頭さん」

少し悩んだが、テントから距離があり、小声で話せば大丈夫だと思いい、友人としての口調で話した。

「おはよう。赤石君。結構しんどいね、この試験」

井の頭もそれに応じてくれたが、いつものおっとり無表情だとあまり大変そうには見えない。

「一応メールで伝えたと思うけど……」

言い訳は大事。

「いや、別に責めてるわけじゃないけど……というより、伊吹さんのペースが上手く掴めなくて、そっちが厄介かって思ってる」

伊吹何か。なんかスパイっぽい雰囲気があるからな。まあ、殴られた痕があるという話もあるし、本当に落ち延びてきたという可能性もなくはないだろうが……

「あー、伊吹さんね。あれ、凄く怪しいと思うんだけど、井の頭さんはどう見る？」

友の意見を聞ける貴重な時間だ。今のうちに色々と話そう。

「私も赤石君に同意。というより、皆怪しいとは思ってるよ。平田君も櫛田さんもね」

まあ、そうだよな。何であの二人は受け入れたんだ……

「あ、やっぱりそうなんだ。でも何で二人は受け入れたんだと思う？」
「櫛田さんは整合性からかな、伊吹さんを追い出したら彼女自身の評判と合わなくなってしまうからだと思う。平田君は……上手く言えないけど、持病……かな」

整合性とは、また上手い表現だ。しかし、持病とはなんだ……？

「持病？」

俺が聞くと、井の頭は珍しく、困った顔を浮かべた。これは本気で困っているように見える。ありやりや？

「うん。ちよつと上手く説明できないから、別の話していい？」

さすが、友よ。迷ったら直球だ。

「あー、了解。と、伊吹さんは怪しいで決まり。そういえばテントは伊吹さんと一緒？それとも別？」

これって結構重要な事だと思う。

「一緒。だから、かなり大変。伊吹さんの性質も良く分からないし。裏に誰かがいるとすると、あんまり動きたくないかな。考えるのも面倒だしね」

うお！マジか。それは大変だ。というか、もしかして、井の頭は試験に乗り気ではないのだろうか？悪い事したかな。

「えーつと、ごめん。あんまり特別試験の事話さない方が良かった？」
「そういうわけじゃないけど。というより、試験については話してくれて助かってるよ。ただ、この試験もクラスも、伊吹さんのことも考える事が沢山ありすぎて私には厳しいかな。できるだけ、頑張るけど、あんまり役には立てないかも」

いや、昨日の時点で凄く役に立ってたよ。君は野伏か何かなの？

「いや、いや昨日の時点でかなり助かったよ。相変わらずの視力に鳥類声、あ、そうだ。実は王さんと一緒に崖下でAクラスの情報を得ただけけど、王さんには黙っててもらっている状況なんだ。この情報、最終的には平田君に伝えようと思ってるんだけど。井の頭さんにも回す？ああ、あと王さんが今言った秘密について誰かに話しているよ。うな素振りがあった？」

「……王さんからそういった話は聞いてないし、櫛田さんにもしてなかったと思うから、秘密にしていると思うよ。あと、私にはただけど……、うん、一応聞いておこうかな」

「了解。Aクラスの崖下に降りてきた二人は葛城君と戸塚君の二人で、リーダーは戸塚君。あと、あそこのスポットはAクラスが占有した。この情報を井の頭さんに話したことを王さんに言わない方がいい

い？」

まあ、俺と井の頭が二人つきりで話した事になってしまいうから王には言わない方がいいだろうが、一応聞いておく。

「うん、言わないで。……うーん、戸塚君をリーダーと思った理由を……あ、いや、やっぱりいいや……」

いいの？

「えっと、じゃあ、私からも。昨日Bクラスの占領を見たけど、その時、カードを持っていった人が誰か分かったんだ」

マジっすか。視力ヤバイですね。

「おお、すごい。誰？」

一之瀬様だろうか？

「……顔は憶えたけど、知らない人だから名前は分からなかったよ。ただ、あの有名な一之瀬さんっていう人ではなかったね」

違うのか……

「なるほど、でも顔が分かるなら何かの機会でBクラスのリーダーも分かるかも。って言うか、何か上手く行き過ぎてて不安になりそう……今の問題点って井の頭さんは何だと思う？」

「問題点……ってわけじゃないけど、王さんがだいぶ上手く地図を書いたけど、……大丈夫なの？」

井の頭は悩まし気な表情を作っていた。うん？

「え？駄目なの？」

「駄目じゃないけど……えっと、これは昨日の探索の時も言おう思ったんだけど、赤石君はペースが速すぎるよ。あれだときつと他の班の何倍も探索してるから、目立つよ」

あ、なるほど。確かに。

「あー、なるほど、というか、それで昨日は何度も休息を挟んだのね。いや、何か、ごめん」

「別にいいけど……まあ、王さんの地図はかなり上手かったから、そっちに注意が行くかもしれないから、それは王さんで。探索範囲の広さは、たぶん赤石君の貢献だと思われるから、何か考えておいた方がいいかもね」

どうするかな。まあ、誰かに聞かれたら、高台から王が観測したとか言つとくか？うーん、もしやるなら王と口裏を合わせないと……
「おー、了解。つとあとは、そうだ。前もメールで送ったけど、綾小路君ってどう思う？どうも、今回の試験はやる気がないみたいだけど」
実は綾小路が結構やばい奴っぽいってことも、少し前にメールで送っておいたのだ。その時の井の頭の返信は、今度の旅行の時に考えてみるだったが、はたして……

「綾小路君か……どうなんだろう？……私は彼の事は殆ど知らないし、行動にはそこまで不審な面はないけど、ただ……」

「ただ？」
「上手く言えないんだけど、あんまり相對したい人じゃないかなって……」

井の頭から僅かな不安が読み取れた。井の頭にここまで言わせるとは……綾小路やべー奴だな。

「井の頭さんにそれ言わせるって、その時点でかなりヤバイ奴なのでは？」

「うーん、変とか、凄い、というより、何て言うのかな、仕草が自然なのに不自然って言えばいいのかな？」

「どういうこっちゃ？いや、まあ、綾小路の『変な奴具合』は口では上手く説明できないから変な風な説明になるのは仕方ないが……」

「自然で不自然って言うത്？」

「……彼の知っている情報と彼の行動が釣り合っていない気がするって言えばいいのかな。単に、あまり深くものを考えない人なのかもしれないけど、それにしても思慮深いし……それに、彼は何時も考え事をしているから、やっぱり、不自然なんだと思う」

知っている情報と、実際の行動か。いや、まあ、確かに暴力事件の時は、楽観的な顔して適当な事を言っていたのに、内心で手ぶれ計算とかしてたみたいだし、一理あるか？いや、だが、その件はどちらかと言うと、嘘が上手いとか、โป๊กเกอร์フェイスが上手いという表現が適切な気がする。

井の頭なら、別にこんな分かりにくい言い方はしないと思うが……

うーん。

「ごめん、難しくて分からない」

俺がそう答えると、井の頭は少し困った顔を浮かべた後、再び表情を消し、いつもの、おっとり無表情へと戻った。

「……私こそ、………ん、とりあえず、綾小路君については気を付けるよ。他に——あ、赤石君、あの、私は、これで」

そう言っつて、いきなり態度を変えた井の頭は少し、だるそうに体を動かし、仮設トイレの方へと行った。時間はまだ早く、他の生徒は起きたとは思えないが、圧倒的な野伏力を見せつける井の頭が急に態度を変えたのだから何かあるのだろう。

俺が警戒して十分も経たないうちに、誰かがこちらに歩いてくる音が聞こえた。

闇の中目を凝らすと、陰気だが整った顔立ちの男がこちらに歩いてきた。綾小路だ。噂をすれば影というヤツだな。というか、井の頭大丈夫だったか？ トイレ経由だから大丈夫か？ いや、しかし、綾小路に会った可能性もあるな……

「……あー、赤石か。おはよう。朝早いんだな」

ボケーっとした感じだが、井の頭曰く、コイツは常に考え事をしているらしい。うーん、さすがにそれは言い過ぎなんじゃ？ いや、まあ、かなり頭が切れる男だと思うけど。あと、路上で行為に至るやべー奴だけだ。

「おはようございます。綾小路君」

まあ、とりあえず、適当に接しておくことにする。

「……一人か？ 誰か、平田とかはまだ起きてこないのか？」

なんとも答えにくい質問だ。うーむ、正直、井の頭と一緒にいたこと黙っていたいが、しかし、さきほどの僅かな時間で井の頭と綾小路が会っていたら最悪だ。ここは慎重に……

「平田君は、まだ起きてないみたいですね。さっきまで井の頭さんがいたんですが、眠かったみたいで、テントに戻ったみたいですよ」

俺が答えると、綾小路は少し間をおいた後に、何食わぬ顔で、再度質問をした。

「赤石は井の頭とは仲が良いのか？」

回答拒否していい？」

「……難しいですね。本堂君と綾小路君みたいな関係、と云えばいいのでしょうか。友人の友人と云えばいいですかね」

そう言うと、綾小路は目線を鋭くした。ひえ、0・4 椎名だ。これはアレかな？俺が榎田と友達アピールしたからキレたかな。俺の女を盗るな、みたいな感じだろうか？どうしよう、正直に、綾小路の自由過ぎる恋愛の邪魔はしないと云うべきか、いや、しかし、直接伝えるのも憚られる。ここは、話題を変えるか。

「ああ、いえ、すみません。本堂君と綾小路君は直接話をしているのを見る機会が無かったので……そう、勝手に思っていたのですが、実は仲が良かったりしますか？」

「——、いや、確かに赤石の言う通りだ、本堂とはあまり喋らない。……俺も榎田とは仲良くさせてもらっているが、赤石はやっぱクラスの子だと、榎田と仲が良いのか？俺からすると、かなり良いように見えるが……」

おい、話題を榎田にするな。というか、あれ？これ怒ってます？寝取り野郎だとか思われています？大丈夫です、ご安心を。0・7 椎名の半径1メートル以内には入らないようにしていますので。

「榎田さんとは、綾小路君の方が仲が良いと思いますよ。榎田さんと一緒にいる時、よく綾小路君の話になりますから」

ちゃんと、榎田は綾小路が好きですよ、とアピールしておく。なんで俺が人の恋愛応援してるんだよ。俺は忙しいんだ。この話はこれで終わりにしてくれ。

「……榎田が、俺の話を……差し支えなければ、どんなことを話しているか教えて欲しい」

まだ続けるのか……というか、綾小路はエゴサするタイプなんだな。あれは人間の構造的にあまり建設的ではない行為だぞ。そう思っていると、テントが開く音が聞こえた。誰か起きたか？

「よく、一緒に行動する事と、頼りになるといった感じの事を言いますよ。あと、そうですね。これは俺の主観ですが、堀北さんとはかなり行

動している事が気になつていようです。まあ、櫛田さんはずっと堀北さんと仲良くしたいみたいですし、一方で堀北さんは綾小路君以外は寄せ付けませんから、気になるんだと思います……」

はい、これで本当に終わりな。

「……そうだな。確かに堀北と櫛田の関係は何とかしたいな。赤石は何か良いアイデアはないか？」

つまり、お前のハーレム事情の改善策を出せと？

「堀北さんは、誰に対しても刺々しいところがありますし、中々難しいですね。一度三人で話をしてみたらどうでしょうか？綾小路君ならあの二人の架け橋になれるのでは？」

自分でぐちゃぐちゃにした人間関係なら自分で処理して下さい。スパゲッティコードは作った本人が直しなさい。

「悪いが、俺には難しいな。最近知ったんだが、人間関係全般が苦手なようだからな。堀北の成長に期待だ」

そつすか。

綾小路のなんとも言えない答えに無言になっていると、新たな人影が加わった。平田だ。

「おはよう、赤石君、綾小路君」

今日も眩しい笑顔だ。

「ああ、おはよう、平田」

「おはようございます。平田君」

平田を新たに含めたメンバーで適当に雑談を続けた。

雑談の中には平田の体調についても含まれていた。まあ、煮沸水を飲んだが大丈夫だったらしい。当然の事だが、一応確認できてよかった。平田曰く、本日から川の水を解禁することだった。俺は提案者のため当然参加の意を示した。あと、聞いたところ綾小路も参加してくれるそうだ。まあ、綾小路は泥水でも平然と飲んで、そして何の問題もなく過ごせそうな雰囲気があるがな。

そのまま各自の無人島試験での意気込みなどを適当に話をしていると、話の合間を縫って綾小路が新しい議題を打ち出した。

「そういえば、二人は昨日の伊吹についてどう思う?」

怪しいね。間違いなく怪しいね。アイツはきつと龍園の使いですよ。間違いはない。

「伊吹さんか。正直複雑だね。助けてあげたい気持ち強いし、あんな怪我をしている以上、助けるべきだと思うよ。でも……」

そう言いながら平田はチラリとこちらを見た。え、こっから先、俺が言うの?なんか、俺が冷たい人みたいじゃん。

「俺は、伊吹さんは少し怪しいと思います。こう言うのは酷かもしれませんが、彼女はリタイアすべきだったと思います。昨日の時点で。それが最善だと彼女自身も分かっているはずです。しかし、彼女はDクラスの陣地に来ました。正直、Cクラスのスパイなのではと勘ぐってしまいます」

というか絶対スパイだろ。スパイじゃないなら、リタイアしろ。そして「いじめ」ないし暴行罪で龍園を訴えろ。たぶん勝てるぞ。そして龍園を停学に——っは!駄目だ。それは駄目だ。そんなことをしたら邪神の封印が解かれてしまう。なんということだ、これでは伊吹は学校に訴えられない。

……もしや、それも龍園の考えの上ではないか?伊吹は邪神を解き放ちたくない、唯一封印できる龍園が必要、龍園が伊吹をボコって潜入させる。ボコられてるから怪しまれない。なんということだ。龍園の計画を完全に理解してしまったぞ……なんと恐ろしい。そしてこの策の真に恐ろしい点は、他のクラスも訴えられないところだ。伊吹のことをチクつても龍園が停学処分、最悪退学になってしまう。したら、この学校は邪神の支配下に置かれてしまう。なんと恐ろしい。恐ろしい。クソ、これでは伊吹を排除できないではないか。

いや、ここは誠心誠意伊吹を説得してリタイアしてもらおうか?別に学校にチクらなくても、怪我や体調不良でリタイアはできるだろうし……リタイアしろ伊吹。そして、スパイだけはするな。リタイアしてCクラスのポイントを減らせ。減らすんだ、あの邪神の生きる糧を少しでも減らすんだ、伊吹。お前ならできる。だからリタイアしろ。

「赤石君、それは、少し厳しい考え方のような気がするな……綾小路君

はどう思う?」

平田的にはやはり駄目であった。

「……そうだな。かなり大きな痣が伊吹にはあった。そのことを考えるとスパイの可能性は低いと思う。それに、もしリタイアすればクラスポイントを減らした者として龍園に制裁を受ける。伊吹はそれを恐れているんだと思うが……」

確かに龍園の制裁は怖い。0・6椎名くらいある。でも、恐怖を克服して前に進むことも時には必要だと思う。ずっと図書館を避けた俺が言っつていい台詞かどうかわからないけど。

「……ですが、資材も有限です。伊吹さん、いえ、Cクラスの人を一人助けるためにDクラスの限られた物資を使うのは、少し抵抗を感じます。道義的には、俺の言う事は間違っているかもしれませんが、でも、平田君には分かって欲しいです」

正直、伊吹がスパイじゃなかったらマジで申し訳ないとは思うけど、でもスパイだよ。というか、龍園って俺の知ってる感じ、部下を殴るのには理由を求めるタイプだから、どうせ今回もフリだよ。苦肉の策だよ。絶対スパイだよ。伊吹何某改め伊吹黄蓋だよ。

「赤石君の言う事は分かったよ。でも、幸いまだ物資がある。とはいつても、これはほとんどは君のおかげで得られたものだから、本来は君の言葉に従うべきだとは思うんだけど……一度だけチャンスを与えないかな?伊吹さんが怪しい行動をするまでは彼女を信じたいんだ。駄目かな?」

そう言うと、平田はいつもの誠意を込めた表情でこちらを見た。やめろ、平田、その表情は俺に効く。

「……平田君がそこまで言うのでしたら」

あんまり、平田の意見に歯向かうのは良くないし、この位にしておこう。

その後、平田の彼女の話に話題が変わったあたりで雑談を打ち切

り、俺は一人で陣地の周囲を見回りに出た。今日の収穫予定物の確認のためだ。昨日分かったことだが、やはり俺の持つ植生データは有用だ。これを利用し、飢餓無きポイント稼ぎを行い、快適なDクラス生活としたいところだ。

これはリンゴ、これはアケビ、これはタロイモと、脳内に記憶した位置を再確認し、午前中に回るべき探索ルートを自分の中で作っている。昨日と同じ大人数を率いるならば裏道は使えない。さすがに多くの人がいる中で裏道を多用したくはない。ちなみに昨日、王にも秘密と言っている。

これはブドウ、これはカボチャ、これはナス、うーん、食材の相性や栄養バランスも考えて採取した方がいいのかな。そうすると篠原あたりと相談するべきか？いや、しかし、何を採ってきて欲しいと聞くのは少し変か？

いや、まあ、午前中に見つけたので、と言えればいいか？実際、今見つけてみたいなものだし。うん、あとで料理班のメンバーに見つけたものについて話をし、その上で採取物で特に欲しいものを聞いてみよう。

そんなことを考えていると、何処からか視線を感じた。はて？と思い、周囲を見るが、特に人影はない。気のせいか。ううん？何か見られている感じがしたが……どこかのクラスの偵察か？もしそうなら、こんな早くからよくやるな……うーん、大丈夫とは思いますが、一応陣地に戻るか。襲われたら怖いし。

陣地に戻ると、半数近くの生徒が起きており、一部は作業に勤しんでいた。焚火班と料理班が特に熱心に取り組んでいるように見えた。篠原を中心とした女子数名の料理班は5ポイントで買った調理器具を巧みに使いこなし、昨日は40人分の料理を作った精鋭部隊だ。今回も残りのものを上手く調理してくれるだろう。朝食、期待してまっせ！

昨日の活躍度合いが目出度かったのは調理班や釣り班だが、同時にいぶし銀のような活躍をした班もある。焚き火班だ。池を中心とし

た人員で構成されており、一見すると赤点三人衆とか期待できない、
と思いきや（というか、俺はちよつと思つていた）、実はこの池、
なんと無茶苦茶着火が上手いのだ。

昨日実演を見してもらったが非常に鮮やかなものであった。俺も
練習したが、あんな風にはできなかった。ちなみに、同じ焚き火班で
あった綾小路、佐倉、山内も力量は俺と変わらないのか着火には至ら
なかった。うーむ、池、お見事と思つたものだ。そして今も、池が火
を管理しているようだ。うーむ、今日の火もなかなかのものだ。これ
は敬意をこめて、池ではなく池君と呼ぶべきか……？

そう思っていると料理班の篠原が池君の方へ向かっていき、何かを
話していた。ちよ、待て、まだお前は喧嘩しているのか。ここで有能
二人が喧嘩するのは不味い。篠原、コイツの火の技量はなかなかのも
のです。ここは見逃してやりましょう。その思いが通じたのか、二人
は怒鳴りあうことなく、というか若干朗らかに話し合つていた？は
て、昨日はあんなに仲が悪かつたと思つたが……うーん、苦難を共に
乗り越えるということとで和解でもしたのだろうか？まあ、いいか。喧
嘩がないのは良いことだ。

その後、美味しい朝飯を腹に入れ、少しばかりの休憩を挟み、朝8
時の点呼を迎えた。点呼が終えると自由行動になり、料理班に朝見つ
けたものについて報告し、必要物資の確認を行う。ふむふむ、昼飯は
そういう感じの料理かー、と思つていると、池君の怒つた声が聞こえ
てきた。また揉め事か……

見ると、見覚えのある男子生徒が二人、確か、バスケット部の小宮と近
藤だ。また須藤に声をかけにきたのだろうか？こいつら、須藤の事が
好き過ぎるだろ。小宮と近藤はジュースを飲みつつ、忙しなくお菓子
を食べながら、龍園について語つてくれた。なんでも、夢を見せてく
れるらしい。おそろく真実だろう。

実際、俺は5月から7月にかけて夢を見ていた。邪神が封印されて
いた夢を。結局その夢は覚めてしまったけれど、けれども、龍園が見
せてくれたひとときの夢は今でも思い出すのだ。ああ、あんな日常が
いつまでも続いていればな、と。まあ、Cクラスの陣地に行くとか罰

ゲームでしかないので、当然行かない。というか、Cクラスの陣地に行って見れる夢とか、それただの走馬灯だから。臨死体験は誰もしたくないから。

しかし、龍園は浜辺に陣を敷いたのか、意外だな。あそこは不毛の地だと思つたが……龍園は浜辺に何を見出したのだろうか。いや、もしかしたら何か宗教的な意味があるのかもしれない。邪神を封じるには砂地が必要だった、とかだろうか。やはり英雄の考えることは我々凡人には理解できん。

そんなことを考えていると、よからぬ気配を感じ、思わず周囲を見ると綾小路と堀北がこちらに近づいてきた。俺のそばに近寄るなあーッ。

「赤石君、少しいいかしら?」

よくない。帰れ。

「はい、なんででしょうか、堀北さん」

適当に返事をする、堀北はトレードマークの鮮やかな黒髪をはためかせながら口を開いた。今ふと思つたが、その髪、無人島だとセツト大変そうだな……

「まず始めに、今からする提案は私の意志ではなく、綾小路君がどうしてもと私に頭を垂れたから、仕方なく行うということ的前提に聞いてもらえるかしら?」

わかったから、帰つて。俺は今忙しいの。

「は、はい……えっと、それで?」

「私と綾小路君はこれからCクラスの偵察に行くことになつたわ。そこで貴方のサバイバルの知識が役に立つ可能性がある……。ここまではないかしら?」

よくない、と思ひ堀北を見るも、何を勘違いしたのかそのまま言葉を続けた。

「続けるわよ。勿論、これは可能性であつて、あまり役に立てない可能性は十分あるわ。というより、私はあまり役に立てないと考えているのだけれど……貴方は忙しそうには見えないうし、クラスの為を考えるなら貴方も来なさい。以上よ」

俺はこれからDクラスの昼飯を調達するから無理。という建前は置いておいて、Cクラスの陣地とか絶対行きたくない。お前が今俺に言った言葉は死ぬという言葉に近いぞ。なぜ邪神の贄にならねばならないのか。贄は俺以外にやってほしい。というか、お前たち二人は自殺志願者っぽいから、さっさとCクラスに行つて邪神の糧となれ。「えつと、堀北さん、言いたいことは分かりますし、俺を評価して頂けて、大変光栄なのですが、……ただ、申し訳ないのですが、俺はこれから食料探索に向かいますので、そちらの方でDクラスに貢献できれば、と考えています……」

というわけで、自殺は二人で勝手にして。骨は拾わないけど、贄になってくれたら感謝はするよ。たぶん、にぎにぎしたら邪神も少しは満足するだろ。だから、お前ら二人が犠牲になれ！俺の代わりにな!! 「まず、貴方のことを私はまだ評価していないわ。自意識過剰よ、気を付けなさい。それから、」

そこまで言うとは堀北は一呼吸置いた。今なんか、妙に『私は』の『は』を強調していたな……もしかや……

「——貴方の技術的な知識は平田君が既に継承しているし、食料探索については貴方よりも優秀な櫛田さんがやってくれるから大丈夫よ。Cクラスの分析に貴方が必要だと言っているの。分かったのなら、従いなさい」

やだ。

いや、まあ、堀北の言っていることは分かる。実際、サバイバル知識について使えそうな、ポイントの使い道・陣地設営・水の知識なんかは平田に話してしまつたし、火に関しては俺よりも遥かに凄い池君がいる、残った食料に関しては櫛田に食えるものについて話した以上、俺が必要ないと考えるのもそんなにおかしくはない。

でも、俺は櫛田が知らない場所、というか無人島全域の植生を知ってるからやっぱり食料班が天職だと思うよ。説明できない、つてか、説明したくないけど。

しかし困つたな。困り過ぎて、なんとなく井の頭の方を見てしまつた。すると、井の頭の近くにいた櫛田が頷きながらこつちに来た。い

や、お前じゃない。

「赤石君、私からもお願い。きっと赤石君がいれば、堀北さんたちの力になれるよ」

おい、馬鹿やめろ。というか、何でだよ。お前、実は堀北好きだろ。なんで堀北の協力してるんだよ。お前、これ断れないじゃん。断つたら角が立つじゃん。何で俺がCクラスに行く事になってるんだよ。

クソ仕方ねえ。こうなれば、邪神が降臨した瞬間、「この二人です、この二人が聖典である『月長石』を愚弄しています！」と告発しよう。そしていかに自分が『月長石』を愛読しているかを語り、邪神を鎮めてみせよう。えーっと内容は……全然読んでないけど、まあ、適当に話を合わせておけば大丈夫だろう。

「……堀田さんが、そこまで言うのでしたら。堀北さん、よろしくお願ひします」

俺がそう言うと、堀北は若干目を細めた。うむ。なんだろう。やっぱり、いつもより優しく見える。口調は変わらないけど、いつもより怖くない。なんでだろう？ やっぱり自然が好きなのかな。ああ、いや、堀北は結構プライド高いし、リーダーになれて嬉しいのかな？

全然喋らない綾小路と一緒に堀北の後ろを付いていくと、本陣から少し離れたところで堀北が呟いた。

「堀田さんに言われるとすぐ頷く……まるで犬ね」

そういう発言は堀田にも失礼だぞ。堀田は普通に良い人っぽい所があるから、人を犬扱いしたりしないぞ。あと、堀田はそういう風に他人に勘違いされること自体に少し嫌な思いをするタイプのように見えるから、思っても口に出さないほうがいいぞ。

まあ、口に出してくれたほうが分かりやすいから指摘はしないけど。それに、堀田とも結構距離があったし、聞こえてないと思うから大丈夫か。

なお、この時、隣にいた綾小路が僅かに笑い声を漏らしていた。コイツの笑いのツボは分かん。

そうして、俺はついに、邪神が眠る地——Cクラス本陣がある浜辺に辿り着くのであった。

伝説的な功績

——贄は俺以外、贄は俺以外、贄は俺以外、贄は堀北と綾小路……頭の中でそう念じ続けながら、Cクラスの拠点付近で贄二人とともに隠れる。隣には目の前の光景を見ても無反応の綾小路と、さらにその隣には、目の前に広がる光景に驚く堀北がいる。ちなみに俺も結構驚いている。まさか、龍園がそんな方法で邪神を封じるとは完全に予想外だ。まさか、クラスポイントを捨ててまで邪神を鎮めるとは。

「赤石、こんな状態だと難しいとは思うが、何か分かる事はあるか？」茫然としている堀北を尻目に綾小路がそんな質問をしてきた。分かるも何も、分かり切ってるだろ。龍園は邪神を封じるために、そして、邪神に支配されているクラスメイトの慰安のために、ポイントを全て使ってパーティーしているのだ。

「この試験で得られるポイントよりも……いえ、憶測では何とも言いませぬね。聞くところによると、龍園君はなかなか変わった人だという話ですし、俺達とは考え方が違うのでは？」

思わず、龍園の目的である宗教的儀式、邪神封印祭について言ってしまうところであった。まあ、300ポイントで邪神が封印されるなら安いものだと考えたのかもしれない。ケチな俺からすると考えられないことだ。彼も思い切った事をするものだな。

「確かめに行きましょう。彼らがどんなつもりでこんなことをしているのか」

堀北はそう言うと、Cクラス本陣に向けて歩き出してしまった。それを見た綾小路は一瞬こちらを見たあと、堀北に続いた。あばよ、贄共。お前らとはここでお別れだ。そう思い、そのまま草陰で隠れながら先行した二人を観察していると、何を思ったのか綾小路が何かを堀北に吹き込み、堀北がこつちを見た。馬鹿！何見てる！俺の居場所がバレたらどうするんだ！死ぬなら二人で死んでくれ！

しかし、俺の思いは届かず、綾小路のヤツが引き返してきた。こつち来るな。

「赤石、堀北と一緒に来いって言ってるぞ」

いつもの何を考えているか分からない顔で、心底どうでも良さそうに告げてきた。

「綾小路君、俺は人前があまり得意ではないですし、他のクラスの人たちに囲まれるのはどうにも自分には合わないような気がします。お二人の邪魔になってしまったら申し訳ないですし、ここでお二人を待とうと思います」

「あー、分かった。一応、堀北には知らせるが、何が起こってもオレは責任を取りかねるからな」

俺もお前がCクラスでどんな恐ろしい目にあつても責任を取らないからな。

綾小路が堀北の方へ向かい何かを告げると、キツと堀北がこちらを睨んできた。0・3 椎名だ。ちよつと怖いけど、1・0 椎名よりはマシだ。俺は梃子でも動かぬぞ。

さっさと二人でCクラスへの最後、いや最期のデートを楽しみな、と思っていると堀北が戻ってきた。こつち来るな。

「赤石君、ベースキャンプで話したことをもう忘れたのかしら？ 私は、Cクラスの偵察に一緒に来て、その上で協力するように言ったはずよ。そして、貴方は私に従うと約束したはずだわ」

いや、約束はしてないだろ。というよりサバイバルの知識を活かすという名目なら、ここから観察するだけで十分だろ。

「ええっと、堀北さん。仰りたい事はよくわかります。しかし、人には得意不得意、向き不向きがありまして……俺はお二人のように勇敢でも優秀でもありません。ここで残って、その上で、お二人がCクラスの本陣に入っている間はCクラスの観察をして何か情報を得られれば、俺なりに役に立てるのでは、と思っっています」

俺は安全地帯、お前らは贄、これが正しい役割分担だ。チームワーク

「櫛田さんの命令は聞けても、私の指示は聞けないという事からしたら？」

いや、そういう話じゃないよ。お前らが邪神の生贄になるって話をしているんだよ。

「そ、そういうつもりは……無いのですが、すみません。ただ、今の堀

北さんは冷静ではないように感じられます。果たして今の判断は正しいのでしょうか？」

堀北は今も普通にいつも通りだけど、少し焦っている感じがしなくもないので、適当な事を言つて煙に撒けないか試してみる。本当は俺も、優秀なDクラスのメンバーである堀北に逆らいたくはないのだが。でも、龍園がここまでパーティーをやらなくてはならないほどの邪神の恐ろしさを見ると、やはり、会いたくないと思つてしまうのだ。許せ。そして、俺の代わりに贄となれ。

「今、私はクラスを率いる立場としてやるべきことが山ほどあるわ。貴方一人に時間をかけている暇はないの。場合によっては実力行使もせざるを得ないわね」

実力行使など！俺は一月前に受けている！そう、お前と話もした、あの日！お前に会う、数分前にな！

「不快に感じたのなら謝りますが、……先ほどにも言つた通り、人には得意不得意が——」

「謝罪は必要ないわ。来なさいと言つたのよ」

俺がすべてを言い切る前に、堀北は俺の腕を掴み上げながら鋭く言葉を放つた。痛いと思う暇もなく、そのままCクラスの方へ引つ張つていく。なんだこれ、さては綾小路のヤツ謎技術を堀北に伝授しやがつたな！非難を込めて綾小路を睨むと、まるで、いやいや俺に言われなくても、みたいな雰囲気を出しながらこちらを見てきた。いや、お前も悪いぞ。

ズルズルと堀北が俺を引つ張りCクラスの方へと連行していく。マジで止めろ。温厚な俺でもそろそろキレるぞ。

「あの、堀北さん、放してもらえませんか？」

そういった時には既に、Cクラスの陣中に入っていた。クソ、堀北のせいで結局陣内に入ってしまった。もう逃げるのは無理だが、最悪の事態に備える必要がある。つまり、バックステップできるように堀北に解放してもらふ必要がある。

「これに懲りたら、その非協力的な態度は改めることね。あの櫛田さんでも、こういった時は私に最低限の協力はするはずよ。……貴方が

犬らしく、主人に忠実なのは十分理解したわ。けれど、櫛田さんがここにいたら私に協力するように言ったでしょうね。……たとえば、彼女が私に嫌悪の感情を抱いていたとしてもね。貴方がしていることは主人の命令を誤解している愚かな犬の行動よ。別に私にも尻尾を振れ、とまでは言わないわ。ただ、クラスメイトとして能力の見合う貢獻をしなさい」

そう吐き捨てるように言いながらも、手を放してくれた。よし偉いぞ！そのままお前だけ邪神の贄になれ。俺は一人助かるから。お前が処刑こころごとされてるのをゲラゲラ笑いながら見てるからな、覚悟しとけよ。

堀北の死の予兆を見ていると、ひとりの男子生徒が寄ってきて龍園が呼んでいる事を伝えてきた。その男子生徒についていきながら堀北と綾小路の会話を適当に聞き流す。そして、ついに龍園と相見えた。

「なんだ、ここそこそ嗅ぎまわっている奴がいるって話だったが、お前だったか、鈴音」

ビーチベッドでくつろいでいる龍園の第一声はそんな言葉から始まった。その蛇のような視線は堀北だけ捉えていて、俺と綾小路のことは意識していないように見える。

うーむ、龍園は視野が広い人だから故意に集中しているのだろう。すごい集中力だ。今までの観察から俺なりに龍園という人を分析したのだが、彼は状況によって対象への力の入れ方をかなり変えるタイプだ。危険な相手や障害となる目標に対して意識を向ける力が強い。つまり、龍園はかなり堀北を警戒しているようだ。何か彼の琴線に触れたのだろうか。単純に暴力事件の時に矢面に立って戦ったのが堀北だからだろうか。あの時は綾小路も一緒にいたと思うが……

あー、でも、初対面だとなんか綾小路って堀北の部下みたいな雰囲気出すから勘違いしてしまったのかもしれない。うーん、たぶん、め

んどくさがり屋の綾小路が故意にやっているのだけど……まあ、堀北は承認欲求が高そうだし、綾小路の功績が堀北の分になるのは良いのかもかもしれない。win-winの関係だ。やっぱり堀北と綾小路は相性がいいな。まあ、路上でする仲だしな。

「随分と羽振りがいいわね。かなり豪遊しているようだけれど」

堀北としてポイント事情が気になるようだ。まあ、普通はこんな事しないよね。邪神の存在が英雄に決断させたのだろう。

「見ての通りだ。俺達は夏のバカンスを楽しんでいるんだよ」

うう、やばい。裏事情を知っているこちらとしてはなんか悲しくなってきた。頑張れ、龍園、お前ならできる。

「どうやら、貴方はこの試験のルール、いえ本質を分かっていないよね。愚かだわ」

しかし、ここで堀北、得意の精神攻撃だー！やめてさしあげろ。

「愚か？俺はそもそも努力が大嫌いなんだ。お前らみたいな雑魚が必死こいて100だか200だかの下らないポイントのために汗を流す。惨め過ぎて笑えてくるぜ」

されど、龍園も挫けない。俺からすると努力人間である龍園の演技力の高さに涙が出そうだ。俺も何時かは龍園・井の頭レベルの演技力を身につけたいものだ。

それから、二人の舌戦は続き、内容は前回の事件のことや伊吹何某のことまで飛び火した。龍園曰く、ヤツの独断行動らしい。本当か？怪しいぞ。

そして、話にひと段落ついたところで堀北が締めに入ろうとした。

「警戒してここまで足を運んだのだけれど、無駄だったようね。一之瀬さんは貴方のことを過剰評価していたようだよ」

一之瀬様が龍園を評価していたか。なるほどな。やはり優秀な者同士は互いを理解しているのだろう。

「一之瀬か、確かにあの女は大したことはない。まあ、不良品のお前らよりは遊びがいがあるようだがな」

理解していなかった。いや、まあ、龍園の優秀の定義が厳しいのか

もしれない。あ、それと、内心認めているけど嘘を吐いている可能性もあるか。

「ただ、そうだな、鈴音、お前がどうしても俺と遊びたいようなら、特別に相手をしてやってもいいがな。専用のテントくらい用意するぜ」
そう言つて、龍園はビーチベッドから起き上がり、堀北に手を伸ばした。おいおいおい、これは綾小路さんが怒りますよ。マズいですよ。

「不快よ、猿山の大将気取りはいいけれど、人間相手に動物の常識が通じるとは思わないことね」

しかし、堀北は素早くその手を叩き落とした。綾小路の出番はないようだ。

「おいおい、鈴音、暴力行為は禁止だぜ」

さつきから煽られたのが気に食わないのか、ここぞとばかりに龍園の反転攻勢だ。

「あら？私はまだ汚い虫が寄ってきたから叩き落としただけよ」

されど、やはり堀北、口が悪い。というより、龍園と堀北はなんか相性いいね。お前から永遠に浜辺でラップやってろよ。俺と綾小路は適当なところで帰るから。

「クク、この島の夜は暗い。お互い、気を付けた方がいいだろうな」

ちよ、待てよ。今の言い方襲うって意味だろうけど、それはお前が直接って意味だよな。邪神を使うって意味じゃないよな。もし後者なら、堀北が孤立している時にやれよ。決して堀北がDクラスのベースキャンピングにいるときに邪神を降臨させるのは止めろよ。

「心配なら不要よ。あなた程度に遅れはとらないわ」

ふむ、堀北はやはり龍園だと判断したか。というか、邪神の存在を知らないよな。……邪神の存在を知っているのはCクラス以外だと俺だけかもしれない。

「そのわりには随分とビビッてやがるみたいだな。お供を二人も付けて、一人じゃ怖くて来れなかったか？」

そう言つて、龍園は初めて俺と綾小路に目を向けた。向けないでいいよ。

「確かお前は金魚の糞の綾小路で、お前は……いつぞやの間抜け野郎じゃないか。久しぶりだな」

ククと器用に笑いながらも、俺に話しかけてきた。え？龍園、俺の事憶えてたの？というか、あれ、実は俺今まで冗談で俺の事を助けてくれていると思っていたんだが、本当に俺の事を憶えていたということとは、もしか、本当に俺の事を考えてくれていたのだろうか？龍園みたいな怖いヤツに名前を憶えられているのは怖いけど、でも、ちよつと嬉しいぞ。

龍園、お前、本当に俺の為に頑張ってくれてたんだな。勿論、邪神を封じるのはこの学年、いや学校全体の願いだから全てが俺の為ではないというのは分かっているが、少しは俺のことも意識してくれていたのではないだろうか。龍園ありがと。本当にありがと、それしか言う言葉がみつからない……

「え、えっと、どうも」

一応感謝しておこう。本当はもっとちゃんと頭を下げたかったが、それをやると堀北が怒りそうなので止めておいた。

「鈴音、良い事を教えてやる、この間抜け野郎がここに来た理由はお前のためでも、クラスの為でもない」

おい、龍園、やめろ。真実を暴露するんじゃない。黙ってるよ馬鹿。さっきの感謝は取り消しだわ。お前、本当に黙ってる。黙って邪神封印に一生を捧げてくれ。

「勝てないと分かってこちらを混乱させる気でしょうけど、その手には乗らないわ、行くわよ綾小路君、赤石君」

そういつて堀北は踵を返し、Dクラスのベースキャンプへと歩き出した。ナイス！堀北。俺と綾小路もその後が続いた。しかし、ここで龍園が俺に語り掛けてきた。

「……赤石か、憶えたぞ。一つ教えておいてやる、赤石。ひより目当てで来たんだろが、あいつはもうリタイアした。残念だったな」

マジかよ。龍園やっぱりお前は英雄だよ。まさか邪神を鎮めるところか船に幽閉するとは……これは伝説的な功績と言えるだろう。龍園、万歳。ううう、感激で体が震えてしまう。

「そ、そ、そうですか、それは、教えて頂き、ありがとうございます」
打ち震えながら、感謝する俺を見て、龍園は心底見下したような目でこちらを見た。これはアレか、お前も邪神封印くらいできるようななれ、という視線だろうか？俺にはとてもできない。

「どこまでも間抜けな野郎だ。鈴音、飼い犬を連れてくるのは良いが、次はもう少しマシなのを連れてこい。でないとDクラスの層の薄さに、こつちが泣けてくるぜ」

俺って、そんなに犬っぽい顔してるの？違うよね。堀北と龍園の口が悪いだけだよね。そう思っていると、堀北は振り返る事も無く龍園に答えた。

「彼は私の飼い犬ではないわ」

こいつ、今、『私の』の部分強調しやがった。本当にそろそろ止めといったほうがいいぞ。倫理観低そうな龍園や、なんか感情の機微に疎そうな綾小路はいいけど、榎田や平田が聞いたら傷つくぞ。注意した方がいいかな？あー、でも、堀北が平田や榎田と少しだけ仲が悪い状況の方が俺的には得かな。二人には悪いけど、止めておくか。

龍園の陣から離れると、綾小路と堀北が会話し始めた。どうも会話を聞いたところ、堀北はCクラスが飢え死にすると思っていたようだ。はて？と思っていると、綾小路が龍園の戦略、つまりポイントを使い切ったら全員リタイア作戦について話していた。堀北はそれに対して愕然としてこう言った。

「……正しい考え方ではないわ。ただ愚かなだけ。龍園君には分からないでしょうけど、物事には絶対を守るべき基礎が存在するのよ。奇抜な手と考え無しは、まるで違う事よ」

確かに仰る通りだが、しかし、物事には『絶対を守るべき基礎』すら変えなくてはならない重大な問題、というものがあると、俺は思う。つまり邪神問題だ。まあ、龍園はやり過ぎ感はあるけど……でも、全員リタイアすれば問題ないか。ポイントはマイナスにはならないん

だし。

しかし、アレだな。堀北ってやっぱり根がクソ真面目なのか、肝心な所で発想力がたまに落ちるな。自慢だけど、今回は俺は龍園の戦術に関して読めてたぞ。自慢だけど。まあ、邪神の事を知ってるとか龍園の人柄をよく知っている、という点もあるから、俺の方が事前情報的に優位であったこともあると思うが……

うーん、杓子定規すぎるって言えばいいのかな？ある意味長所なのかもしれないけど……彼女がリーダーカードを持っているのは少し不安になつてきたな。いや、まあ、そのあたりは彼氏の綾小路が何とかするのかな？

浜辺を去るとき、綾小路がぼそりと何かを呟いたので気になり綾小路の方を見た。——そして即座に、見るんじやなかったと後悔した。なんと少し笑っていたのだ。コイツの笑い声を聞いたことは何度かあるが、表情をはつきりと笑顔にしたのは初めて見た。ぶっちゃけ怖い。0・8椎名だ。近年の1・0椎名未満では最大の怖さだ。何笑つてんだよ。怖いよ。笑うときは事前に今から笑うと宣言してから笑ってくれよ。

綾小路の思わぬ怖さにビビった後、森に入ったところで唐突に堀北が面倒な事を指摘してきた。

「赤石君、さっき龍園君が言った言葉に何か心当たりはあるかしら？」
おい、そこは追求するな。俺の心の傷だぞ。とりあえず、すつとぼけるか。

「龍園君ですか、彼は努力を否定していましたが、個人的には努力すべきだと思えます。俺は平田君や堀北さんの考えの方が正しいと思えます」

はい、じゃあ、これで終わりね。

「……そこではないわ。龍園君が去り際に言った、『ひより』という言葉についてよ。聞いたところ、人名のようだけれど、赤石君の知り合いかしら？貴方にCクラスの友人がいたとは聞いてないのだけれど。もし内通行などがあつた場合は厳しく処理するから、そのつもりで答えなさい」

そうやって、堀北は質問を開始した。マジで邪神の話は止める。名前を言っただけはいけない本の人だぞ。全盛期には本の印を打ち上げた、名前を呼ぶとその場に現れるなんて縁起でもない話もあるぞ。

「まず、『ひより』という名に聞き覚えはあるかしら？」

じつと、空気が湿ったような気がした。なんか綾小路がこつちをガン見している。いや、お前は関係無いだろ。

「えっと、たぶんですが、椎名ひよりさんのことですね。Cクラスの生徒で、俺の、なんて言ったらいいんでしょうかね？……友人と言うべきでしょうか」

まあ、椎名曰く俺は友人らしい。邪神の友人とか字面がヤバいわ。「Cクラスに友人ね……別にそれは否定しないわ。貴方以外にも他クラスに友人を作っている生徒はいるし、実際、榎田さんもCクラスに沢山の友人がいるらしいわね。一説によると飼犬は主人に似るそうね」

なんか今日、今までで一番堀北と話をしている気がする。

「ええ、俺も得難い関係を得られたと思ってます」

本当に得難い関係だよ。にぎにぎしてくる関係ってどんな関係だよ。一生得たくなかったよ。

「——ただ、龍園君はまるで貴方を知っているようだった。貴方は一部の能力は平均以上にあるものの、飛び抜けて優秀ではない生徒よ。なぜ、Cクラスの暴君とも言える龍園君が貴方の事を知っていたのかしら？その背景を詳しく知りたいわね」

コイツ、さては俺の事をスパイだとか思っているだろ。てか、綾小路も何か喋れよ。何で無言でガン見してるんだよ。

「前、椎名さんと話していた時に龍園君に話しかけられまして、その時一方的に彼の事を知ったんです。ただ、俺は、その、龍園君ってちよつと威圧的などころがありますよね？それで、怖くて、名前を言わなかったんです。まさか自分の事を憶えていたとは思いませんでしたが……そういうこともあって、本当は龍園君の前に行きたくはなかったのですが……」

お前のせいで行くことになったんだぞ、とアピールするが、それを

堀北はスルーし、さらに質問を続けた。やっぱ神室の親族だわ、コイツ。

「そう、大体わかったわ。つまりクラスを裏切っているわけではないのね」

疑う気持ちは分からなくはないが、俺は結構義理堅いからな。最低でも100万ポイントぐらいないと裏切らないから安心してほしい。「勿論です。平田君や櫛田さん、他にも最近では軽井沢さんや篠原さんたち、俺みたいなヤツの友人になってくれる優しい方がDクラスには多いですから、裏切ったりなんかしませんよ」

さりげなく軽井沢の名前を出し、武威を示す。俺は軽井沢軍団の傘下だぞ！オラ！これ以上舐めた口利くと軍団の皆様を招集するぞオラ！という気持ちで堀北を睨む。

「確かに、忠犬の貴方が主である櫛田さんを裏切ったりはしないわよね」

しかし、孤高、もとい、ハイパーボッチの堀北には効果はなかった。ちやんと女子カーズに参加して下さい。

それから、堀北と綾小路がBクラスにカチコミするという馬鹿なことを抜かしたので、適当に理由を作り即座に辞退してきた。今回は堀北にはあまり引き留められる事なく、抜けることができた。どうも、Cクラス偵察で俺が堀北の期待を大きく下回る活躍をしてしまったためか、ガツカリ感とコレジヤナイ感が強かったようだ。

なお、最後に堀北が「忠犬もここまでくると病気ね。櫛田さんをお願いして首輪でも嵌めてもらったらどうかしら？」と煽ってきたのを俺は三日くらい忘れないだろう。お前、絶対神室の親戚だろ。あんまり調子乗っているとCクラスの邪神降臨させるぞ。にぎにぎでお前なんて一発だぞ。間違いなく一発だぞ。

あと櫛田を絡めた首輪ネタはちよつと最近トラウマあるから止める。シャレにならないぞ。まさか呪いの品を送ってきたのは堀北じゃないだろうな……疑心暗鬼だ。

ベースキャンプに戻ると、クラスの半数程度はそれぞれの職務にあたっていた。

井の頭がないな。櫛田と一緒に食料を見に行つたか？

気になり料理班に尋ねたところ、櫛田は食料探索に向かったようだ。ちなみに俺が参加できなかったためか、調理班の希望品が集まるか自信がないと櫛田は言っていたようだ。いや、これは俺のせいじゃないよね、と思つたが、朝調理班に希望を聞いたのは俺だったので、一応調理班に言葉だけの謝罪を告げた後、単身で付近の調査に向かう事にした。

平田にお願いして、何人が連れて食料探索をすることも考えたが、櫛田の班と食料がタブると効率が悪いと思つたので止めておいた。櫛田は昼飯前には戻ってくるそうなので、そこで一旦合流すればいいだろう。

というわけで、昼まで俺も島の調査を行う事とした。まあ、情報は頭に入っているので調査という名の再確認と偵察行為だ。調査の主な内容の他クラスの陣地の食料採取具合についてをメインとしたい。敵方の食料事情を知れば使用したポイントも類推できるし、食料回収率から探索能力もなんとなく絞り出せると思う。

それと、食料戦争は囲い込みが速い方が勝ちだと個人的には考えている。つまり、他クラスの陣地の近くの食料をさきっと回収できれば色々とプラスの面が大きいのではないかと思う。ナチュラルにゲスのような気がしないでもないが……この島のリソースが限られている以上、仕方がないことなのだ。

Cクラスはどうせ食料探索はしないだろうから、Aクラス側かBクラス側のどっちかだな。昨日の「ドヤ顔許さない会」の探索結果から、Aは斥候をよく出していて、一方でBはあまり出していないイメージがある。あとBは、たとえ斥候中に見つかつても道に迷つてしまつて、と言い訳すれば許してくれそうなイメージがある。よしBにすつか。

岩場の観測者

Bクラス付近の裏道で、特に隠密性が高いものを使用しながら、食料の目星をつけていく。Bの食料回収率はいまいちのようだ。特に陣地付近から円状に採取しているためか、Bの本陣から100メートル以上離れると、ほとんどの食料が手つかずのようだ。今のうちに、全部かつさうか？午後になったら、平田にお願いして、Dクラスの武闘派を率いて、ここらへんの食料を全部持つてつちやうか？

どうするかなー、と考えていると、肩をポンポンと叩かれた。ふむ。叩かれた方を見ると井の頭が立っていた。友よ、どこから現れた。

「赤石君、何してるの？」

いつもの、おっとり無表情だ。

「ああ、井の頭さん、ちよつとBクラス側の植生と、その採取具合を確認したかったから探してた。というより、井の頭さんは櫛田さんと一緒じゃないの？」

報告を済ませると、井の頭は不思議そうな顔をした。はて？

「……？いや、赤石君が……あれ？そういう意味じゃなかったの？」

え……どういうこと？

「……赤石君、さつき堀北さんたちとCクラスを見に行くときに、私の方を見たから……てつきり援護しろって意味かと思つて」

いや、まあ助けを求めたけど。というか援護してたの？

「えつと、まあ、なんとなく助けてくれたらと思つたけど、あの場では難しいから、特に何かを求めていたわけではなかったけど、援護してくれてたの？」

「一応、あつちにある浜辺を見渡せる岩場からずっと視てたけど……なんか、Cクラスの人たち凄く遊んでたね」

マジっすか。見てたんですか……それは、なんというか、分かりにくいタイミングで井の頭をチラ見して申し訳ない。

「遊んでたね。どうも、龍園君が言うのには、Cクラスは試験を降りるらしい……」

「やっぱりそうなんだ……本当にポイントがマイナスにならない、つ

「何で信じてるんだろうね」

ほう。確かに、この学校は嘘つきを育成しているのでは？とたまに考えてしまうこともあるので、ポイントがマイナスにならないという先生方の発言に根拠はない。

「それは……単純に学校が言ったから、信じてるんだと思うけど。井の頭さん的には信用ならないポイントなの？」

井の頭は俺とは物事の考え方が少し違う。というか、一般人とは少しズレてると思う。だからこそ、ここは聞いておきたいポイントだ。

「この学校は本当の事を言わないから……たとえば、二学期以降に悪影響はないって先生は言ってたけど、そもそも何をもって悪影響と判断するかなんて、できないはず。だから、ポイントがマイナスになった分は何か特殊なカウントがされて、この後の、別の特別試験に影響を与える、つてことだつて考えられると思う。だから、私だったら、怖くて、龍園君と同じ判断はできないかな」

あー、なるほど、そういう考え方は確かにできる。まあ、Dクラスでルールの穴を突くみたいなヤツはいないと思うので、あまり考慮しなくていいと思うが……まあ、他クラスの思考の方向性を探る意味では井の頭の考え方は重要なやり方の一つであると思う。

「まあ、確かに、それは言える。でも、Cクラスは色々大変そうだし、聞くところによると、龍園君の独裁体制になっている以上、どこかでクラスメイトにガス抜きをさせる必要があると思うから、それを今回の試験にしたんじゃない？一応、最悪マイナスになってもいい、もしくは絶対にマイナスにはならないと賭けたのかもしれないけど」

そうすれば、Cクラスの連中も、やっぱり龍園は最高だぜ！つてなって付いていきやすくなるし。

——ただ、ポイントについては龍園はどっちだったのだろうか？彼は覚悟を持つタイプだから、最悪マイナスを覚悟している可能性もあるし、一方で自分の判断に自信を持っている人でもあると思うから、マイナスは無いと思ってるのかもしれないし。どっちだろうか？

「……私は後者だと思う。岩場からずっと視てたけど、龍園君の雰囲気やCクラスの遊び方やポイントの使い方から見ても、迷いが無い気

がする。だから龍園君は迷わない人なんだな、って思ったよ……怖いね」

むむむ、迷わない人というのは言い得て妙だな。というより、直接龍園と話すどころか会っていないのに、よく井の頭はそこまで分析できるな……ちよつと怖いぞ。

「……なんか意外、井の頭さんでも怖いものつてあるんだね」

正直、怖いもの無しのイメージがありますね。

「……結構あるよ。というより、私は怖いものの方が多と思うよ。最近だと、櫛田さんとか、怖くなって思うよ」

それって井の頭の盾じやん。つまり、まんじゅう怖いみたいな感じだろうか。やっぱり怖いもの無しであったか……

「あと、綾小路君も怖いかな……」

つまり、井の頭的には綾小路は大したことないってことか？頼もしい限りだ。まあ、でも確かに井の頭は綾小路を前にしても動じないイメージがある。まあ、不確定事項が多すぎるし、今後の計画も考えると、綾小路と井の頭が相對するのは避けたいが……

「なるほど、ちなみに他に何か分かった事とかあった？こっちは、Cクラスの脱落予定と、あと堀北さんと龍園君は口が悪い同士、意外と相良さそうってことと、それと、今、櫛田さんの班が食料探索に向かつてる。この辺りにはこないよ。ええつと、あとは……綾小路君と堀北さんは少し前にBクラスの偵察に行つたみたい。この辺りの地形には疎いと思うから、大丈夫だと思うけど……あと、あの二人の雰囲気とバイタリティーを考えると、たぶんBクラスを偵察した次はAクラスの洞窟に行くと思う」

俺の報告を聞くと、井の頭は少し、ぼーとした表情を作つた後、口を開いた。最近分かつたんだが、井の頭がぼーつとして見える時は大概、考え事をしている時だと思う。

「そっか、ありがとう。私の方からは、Aクラスに1人ずつとDクラスの方を見張っている女の子がいたよ。昨日川辺に向かつた女の子の話憶えてる？あの子が、Aクラスの洞窟の高所から、Dクラスの方を見ていたみたい。……これは自信がないんだけど、赤石君がベース

キャンプを離れたのって今から、50分前くらいで合ってる?」

朗報、俺の友達は無スパだった。

「合ってるけど、よくわかったね。俺がCクラスの方を出た時から逆算したの?」

「うーん、それもあるんだけど……じゃあ、やっぱり、そうなのかな……」

そう、とは?

「何かあるの?」

「さっき言ったAクラスの女の子、たぶん赤石君をマークしてるよ。50分くらい前、洞窟の近くからずっとDクラスのベースキャンプを見張っていたのに、こつち側に視線を動かしたから。まるで誰かを目で追っているのかな、って思ったけど……赤石君みたいだね。昨日から活躍しすぎたからかな……」

マジかよ。誰か分からないけど、Aクラスの女子最低だな。……というより、ヤバくね。ここも見られてると困るぞ。

「あれ?ちよつと待って、そうすると、今の俺達も見られてる……?」「それはないと思うよ。ここは木が上手く重なり合って、周りからは見えないから……というより、だから私も今赤石君に近寄ったんだよ」

さすがじゃ、友よ。俺に声をかけるタイミングが絶妙じゃ。というか、これからベースキャンプに近くにいる時は振る舞いに気を付けるか。

「あ、ああ、なるほど。気遣ってくれてありがとう。……俺はこのままもう少しBクラス側の食料に目星をつけたって思ってるけど、井の頭さんはどうするの?篠原さんが言うにはそろそろ昼飯みたいだけど」

予定を聞くと、井の頭は少し困ったような顔になった。

「うん。もう少し、ううん、日没までCクラスを見張ろうと思ってるよ。やる事もないし、それに、点呼の後にDクラスを無断で抜けてきたから、櫛田さんに見つかったら、しばらくは単独で動けないし、それなら、今だけでも、一人でできる事をやっておきたいと思うから。」

昼食もさつき果物を見つけたから、大丈夫だよ」

果物だけって少なすぎないか？いや、まあ、この辺りを調査した感じ、Bクラスの方がもつと腹が減っていると思うけど。

「昼飯いいの？井の頭さんの計画にケチをつけるわけじゃないけど、昼飯減らしてまで、脱落するCクラスの観察ってメリツトが薄いような気がするけど……」

「……うん、確かに、私もそう思うよ。でも何か、変な感じがするんだ。奥歯に何かつままったような感じ？……それに女の子は一食くらい抜いても大丈夫だよ。代謝も低いし」

代謝とか生々しい表現が出てきたな……

「そ、そっか、了解。じゃあ、偵察頑張つて。俺もBクラスの食料根こそぎ奪う気持ちで頑張つてくる」

そう言い残し、井の頭の元を去ろうと、背を向けると、鋭い声が刺さった。

「——赤石君、……いや、ごめん。何でもないや」

しかし、井の頭は全て言い切ることもなく、途中で言葉を萎めた。気になり振り返るも、既に彼女は、先ほど言っていた岩場の方へと駆けて行った。き、気になる。

その後、一旦昼飯を食べにベースキャンプに戻った。昼飯は食料班の探索結果次第ではなくなる事も考えられていたが、多くの生徒が昨日の成果を知っているためか、ベースキャンプに戻ってきていた。欠けているのは綾小路、堀北、井の頭、あと数名とあったところだ。

これはかなり食料が必要なのでは？と思つたものの、櫛田率いる食料班はその期待に見事に答えてくれた。ブドウやリンゴ、タロイモやシイタケなんかもある。これはあれか、篠原に漠然と伝えた情報を、櫛田がくみ取ってくれたのかな？

うーむ、今日は櫛田とは話す時間があまりなかったが、俺と篠原が話をしていたのを見ていてくれたのかな。篠原から情報を聞き出し、

その漠然とした情報を組み立て、探索場所を当てたようだ。やっぱり櫛田は優秀だな。なんでコイツもDクラスなの？判定ミスじゃない？

まあ、篠原の調理技能や、池君の着火技能など、皆なにかしら優れている点を持つてるし、Dクラスは意外と強いんじゃないだろうか？よく皆、不良品って言うけど、不良品だって直せば使えるんだぞ。自慢だけど、俺は機械のスクラップから結構品質が良い盗聴器が作れるぞ。自慢だけど。つまり不良品だって戦い方では強くなれるのだ。たぶん。

そんな事を考えながら、食料班が調理班に食材を渡しているのを眺めていると、肩を叩かれた。叩かれた方を見ると、櫛田がいた。俺の半径1メートル以内は立ち入り禁止だよ。

「赤石君、お疲れ様。それと、さつきはごめんね。堀北さんがクラスのために頑張ってくれてたから、赤石君にも手伝って欲しかったんだ……それに、赤石君が頼りになるって堀北さんに分かって欲しかったから……」

人前苦手というアピールを定期的に平田と櫛田に送っているのだが、なぜ理解されないのだろうか。というか、櫛田、それ本音か？実は建前だろ。お前、本当は堀北のこと気に入っているだろ。クソ、お前のせいで俺はビクビクしながら浜辺を探索することになったんだぞ。

……まあ、邪神がCクラスにいなかったから、特別に許してやろう。もし邪神が降臨していたり、俺が邪神の攻撃を受けていたら、櫛田の今回の行動を俺は許さなかっただろう。櫛田！龍園に感謝しろよな！

「いえ、よくよく考えたら、食料班は櫛田さんがいますし、俺の役目はあまりなかったと思います。ですから、櫛田さんの言う通りにしてよかったですと思います。……ただ、俺はやはり堀北さんとはあまり相性が良くなかったみたいで。上手く手伝うことができなかったですね。櫛田さんと違って、堀北さんは話しにくい方ですから……」

まあ、最近、櫛田も0.7椎名つばいから話しにくいけどね。でも、

今の櫛田は安定櫛田っぽいから、ここ最近では一番話しやすいかな。「あはは、確かに堀北さんはちよつと堅いところがあるからね。私もまだ、堀北さんとは仲良くなれてないし、あんまり人の事言えないんだけどね」

嘘だろ。実は気に入ってるだろ。もしくは、逆に、堀北の相手をしなくなってくれて俺に押し付けようとしてるだろ。

「いえいえ、櫛田さんは凄く頑張ってると思いますよ。……言っただけは悪いかもしれませんが、堀北さんと二言以上会話を交わせるのは、このクラスだと櫛田さん、……くらいですよ」

今、一瞬綾小路の名前を出しそうになって止めた。愛憎交える感情を向ける相手の話などしたら、不安定櫛田になるかもしれない思ってたからだ。

「……ううん、それは違うよ。一番堀北さんの事を分かっているのは、きっと綾小路君だよ」

しまった。やっちゃまった。話題チョイスをミスった。まさか、自分から綾小路の名前を出すとは。うーむ困ったな。不安定櫛田になつたらどうしよう？俺がなんとも返答に困っていると、櫛田は何時もの人の好きよそうな笑みを浮かべた。

「でも、ありがとう。少しだけ自信が戻ってきたかな。やっぱり、こうやって友達と話せると、勇気もらえるよ」

俺って友達認定だったんだ。まあ、櫛田は学年全体と友達になりたいた言っていた猛者だし、友達の閥値も低いのもかもしれない。

「友達、ですか、……それは、光栄です」

まあ、友達認定されて悪い事もないだろうが、……思わず漏れてしまった単語を適当に誤魔化すことにした。

「もしかして、赤石君、私の事友達って思ってた？」
誤魔化せなかった。

「い、いえ、勿論、友達としてもらえてれば嬉しいなと思っていましたが、中々、対等とは思えなくて……櫛田さんのような立派な人に改めて言われると、少し驚いてしまって。すみません」

誤魔化せなくても、上手い言葉が見つからない以上、ゴリ押しだ。

「私にとって赤石君は友達だよ。赤石君にとっても私は友達でしょ。これからも今まで通り、一緒に頑張ろうね」

よし、安定櫛田っばいぞ。よくやった、俺。

その後、適当に櫛田との雑談を終え、昼飯を食い、調理班の偉大さを再確認した。

昼食中に、井の頭の言葉——自分が見張られているらしいという情報について考えを巡らす。うーん、個人的にあまり目立たないように振舞ったと思うのだが……でも勉強会とか開いたし、一応クラス内では6位、自分で言うのもなんだが、運動もクラス内では6位くらいだ。そして俺はよく平田と一緒にいる。他クラスにも雑魚参謀くらいには評判が広まってるのかもな。

あー、でも龍園は俺の名前を今日まで知らなかったみたいだしなー、どつちかって言うと、昨日のサバイバル知識を披露しているところを見られたのかな？やっぱり自分の得意科目を捨てて（強制的に捨てられて）変に動くのは良くないな。反省反省。

まあ、とりあえず、今からでもできることをしようと思い、喧騒に紛れながら隣でメシを食っている平田に堀北達の動向を伝え、さらに平田に午後の食料班の結成の許可を貰った。今日の夕飯と明日の朝飯を採取する部隊だ。

昼飯を食い終わり、休憩を挟んだ後、今度は櫛田を呼び招集を行ってもらった。招集されたメンバーは一日目とほとんど一緒だが、変わっているメンバーもいる。例えば、井の頭はまだ戻ってこないの、参加はしない。つまり、特記すべきメンバーはいない。

編成した食料班とともに滝壺側の食料を少しづつ奪っていく。まだ、両陣地の中間地点付近であるため、Bクラス側との接触はないものの、このまま拡張政策を続けて行けば、いずれ戦うときが来るだろう。その時は平田にお願いして、軽井沢軍団を遣わせてもらおう。Bクラスなど恐れるに足りん。

概ね、40人分(39人分+伊吹何某の分)を二セットほど集めたところで、探索は終了となった。現在時刻は午後5時50分だ。前回よりも食料班の人数が多かったため、往復回数も少なくて済んだ。まあ、多かつた分統制が大変だったが、そのあたりは櫛田が何とかしてくれたため助かった。

俺はたまに櫛田に「あそこに何かあるようなく」みたいな事を言うだけで、後は櫛田が全部やってくれた。本当に助かる。櫛田が殆どの仕事をしてくれたため、俺もあまり目立たずにすんだ。櫛田万歳! やっぱり安定櫛田はいいな。能力も高いし、性格も良い、あと、こういう評価をするのは失礼かもしれないが、見た目も良い、なんでこの人がDクラスなんだろうね?

櫛田に感謝の正拳突き……はさすがに恩を仇で返すことになるので、普通に、協力してくれたことへの感謝を伝え、ベースキャンプで残りの時間を優雅に過ごした。

6時になると、ジャージを汚した井の頭が、へとへとと帰ってきた。近くにいた櫛田が驚き、井の頭の方へ走っていったが……うーん、まあ、つまり、あれだ。井の頭の名演が行われたとだけ言っておこう。ちなみに堀北・綾小路の凸凹参謀チームは、昼飯が終わって、時計の長針が二周したあたりで戻ってきたようだ。チラリと二人を盗み見ると、堀北は少し疲れているように見えた。昼飯を食べていないからかもしれない。綾小路は、うん、いつも通りだ。つまり無表情だ。なんか、もう少しリアクションしてくれませんか。観察してて分かる事がまるでないぞ。……まあ、突然笑い出したら怖いから、それはそれでいいか。

夕飯を食べ、8時の点呼を迎えた。点呼後に、なんとなく、ベースキャンプのクラスの様子を眺めていると、20メートルくらい離れたところに座っている櫛田から良からぬ気配を感じた。バレないようにチラチラと櫛田の様子を伺うが……何といえはいいのだろうか? 複雑な表情を浮かべていた。うーん、試験が不安なのか、それとも綾小路との恋愛が不安なのか判断に迷うな。

そのまま、見ていると、途中で井の頭と王が櫛田に何か話しかけ始めた。三人はそのまま少し話した後、櫛田は何か考えたような顔になり、そして、なぜか平田のところに向かっていた。はて？と思っ

ていると、平田からライトを貰った櫛田は二人を引き連れ森へと消えた。たぶん、友が何かをしたのだろうが、それが何かは分からなかった。だが、友の事だ、俺の不利になることはしないだろうと思った。

龍園も言っていたように、夜の闇は深く、少し心配だったが、40分ほどして、3人とも無事に戻ってきた。その後消灯時刻を迎え、Dクラスの皆はテントの中へと戻った。

幸い、本日は脱落者はいないようだ。俺卒業したら世界一クリーンな企業作るんだ！

三日目、豊富な食料、飢餓

三日目の夜明け、再び井の頭と会談するために俺は起き上がりテントの外へと出た。水辺の近くまで行くと、既に井の頭が待機していた。早いな、友よ。

友の姿を確認したあと、川に手を突っ込み先日から使用が許された煮沸した水が入ったボトルを手に取り飲む。ボトルは川の水で冷やされており、十分に喉を潤させてくれた。朝の挨拶と雑談を交わした後、本題に入った。

「昨日は色々見た感じ、どのクラスも目標を持った感じがする。Aはちよつとまだ分からないけど、BとDは陣地を決めつつ拡張、Cは試験に参加しないって感じだと思う」

まずは総括して話をする。すると井の頭はボケーっとした顔を作り、話し始めた。

「……Aは昨日観察した感じ、斥候をほとんど出してなかったよ。塔の方に数人、洞窟の近くに昨日赤石君を見ていた女子生徒が一人くらいで、他の人は滅多にいなかったし。あと、洞窟の入り口に布みたいなのが垂れてたから、穴熊になる気だと思うよ。個人的には洞窟から見てる女子生徒が厄介かな。ときどき岩場にいる私の方も見てくるし」

あー、なるほど、俺も試験開始から最序盤を除き妙にAクラスに合わないと思ってたんだが、まさかクラス全員で籠るとは……うーむ、内戦状態でクラスを一つにするのは難しいし、やはり坂柳と葛城は手を組んだと見ていいかな？

困ったな。ただでさえ強いクラスなんだから足を引っ張り合ってくれないと下位のクラスではまくれないぞ。せめて、今回限りの同盟で、特別試験が終わったらまた仲違いしてくれないだろうか。

「了解、Aは穴熊ね。厄介な女子生徒の方は大丈夫？なんかする？」

最近、俺も武器が増えてきた。広がった人脈、ある程度の功績はクラス内での発言力を僅かに上げ、有力者とのつながりはここぞという時に切り札になる。軽井沢軍団二人くらい使ってその女子を排除と

か良い手ではないだろうか、と思ったあたりで発想が暴力団だと気づき、止める。クソ、あいつらのせいで俺の思考回路まで暴力的に……」……ありがとう、でも大丈夫かな。彼女は夜目は効かないみたいだし……あと、聞きたいことはある?」

大丈夫ならいいのかな?というか、なぜ夜目?

「Bクラスは井の頭さんの岩場からは見えただろう?あと、Cクラスを午後中ずっと監視してたみたいだけど、あれどうなった?」

「Bは——、え、私の?……あの岩場は私のじゃないけど、……まあ、いいや。私の岩場からは殆ど見えないかな。森が邪魔になつてるから。ただ赤石君が気にしてる滝上には誰も置いてないみたいだよ。あと、見える範囲ではあまり動いてない感じかな。Aよりは動くけどDよりは動いてないと思う。Cクラスは………脱落した、と、思う」
「思う、とは?」

「昨日、Cクラスをずっと視て戻ってきた後王さんに、——ううん、いや、やっぱりいいや。自信が無いし、不確定なことを言つて赤石君を混乱させたら悪いし。もしかしたら、私の計算ミスかもしれないから」

うーん。なんか、この試験に入って友がかなり言葉を濁すようになったな。前からそう言う所はあるにはあったが……いや、まあ、時間も短いし、とりあえず話を進めよう。

「ええっと、つまりCは脱落つてことでもいい?」

「たぶん。とりあえず、夜には浜辺からはいなくなつてたよ」

なら脱落でいいのでは?もしかして、陣地を森に移したとかを考えているのだろうか。確かにそれはありえなくもないが、ただ、龍園のあの感じからすると、普通に今回の試験は見送りで封印の儀式と仲間たちの慰安に使つたつて感じだと思うぞ。

「了解、偵察お疲れ様です。俺の方は、うん、ごめん、あんまり報告できるときはないな」

「赤石君こそ、食料探索お疲れ様。あと、ちよつと聞いていい?」
「どうぞ」

「赤石君が寝てない方の男子のテントで今寝てる人つて誰か分かる

？」

「えーっと、俺の方じゃない方ってことなら、綾小路君、池君、須藤君、山内君、本堂君に……」

高円寺を除く、9人全員の名前を挙げていく。井の頭は一人一人の名前を慎重に聞いていた。

「そっか、ありがとう。綾小路君もそっちなんだね」

「そうだけど、何かあったの？」

「ごめん、これもちよつと自信が無くて、……というより、目的が私にもよくわからないから上手く相談できない」

井の頭の表情はいつも通りだが、なんとなく、かなり悩んでいるように感じた。たぶん自信が無いというのは本当なのだろう。うーん、こういうのって聞いた方がいいのかな。三人寄れば文殊の知恵と言うし、いや、まあ、二人しかいないし、井の頭が相談に意味がないと思っっている事なら追求しても意味などないのかもしれないが……

「了解、考えが纏まったら教えて。あとは何かある？」

まあ、友の決めた事だし、聞かないことも大事だろう。あと綾小路周りの怖い事とかこれ以上聞きたくないという気持ちもちよつとだけある。アイツ、なんかやべー奴感あるんだよなー。

「……うん、じゃあ、折角だから、昨日言おうと思っただけだけど、赤石君はBクラス側から削っていくみたいだけど、Aの方がいいと思うよ。Aクラスは洞窟に籠ってるから人もいないし、それに一応、Bクラスとは同盟を結んでるみたいだから、あまり挑発しない方がいいと思うよ」

「あー、なるほど。でも、Aは洞窟に籠ってるなら食料はBとの取り合いになるし、ギリギリのラインで採取すれば問題にはならない気もする」

Bが怒るギリギリまで攻めた後にA側を攻めればよいのでは、という発想だ。

「……赤石君は、Bクラスを落とすのが狙いってこと？確かに、Cが脱落したなら、次はBから落とした方がいいかもしれないけど……堀北さんや櫛田さん、あと一之瀬さんの目を盗みながらやることになるか

ら、少し大変だと思うよ。本当にやるなら私も頑張るけど、難しい気がするよ」

いや、リソース少し心配なだけだったが、井の頭的には一大事のようだ。ここは引くか。

「いや、そこまでは思っていないけど。まあ、Dクラスを押し上げるには他のクラスに沈んでもらうって手もあるし、いや、結局2000万ポイントで動くならあんまり変わらないけど……そこまで無理しようとは思っていないよ。この試験はできる範囲でクラスポイントを上げて、毎月の収入を増やすのが目標だと思ってる。その上で、場合によっては他のクラスの足を引っ張ってもいいような……気がする」

本音は食料事情だが、直接言うのはなんかがめつい奴だと思われそうなので止めておいた。僅かに残ったプライドだ。

「そつか……なら、今日の午前の食料探索は私も行くよ。それで、できるだけBクラスのギリギリか、間違つてBクラス側に入るくらいを目標にしてみて。上手くいけば、Bクラスを落とせるかも」

おっと、井の頭さんガチですね。あんまり一之瀬様のような強者がいるクラスに井の頭をぶつけたくないのだが。そういう消耗戦は軽井沢軍団や櫛田にやって貰うのがベストだが。

「あ、いや、ごめん、あんまり井の頭さんを矢面には立たせたくないし、それに俺もできれば矢面に立とうとは思っていないから、無理はしなくてもいいと思うよ」

「……大丈夫、今考えてることは全然無理じゃないし、それに、どちらかというともぐれ当たりを期待する方法だから、そんなに本気でBクラスを落とそうとは思っていないよ……あと、動くのは私でも赤石君でもないから、きつと矢は刺さらないよ」

それなら安心だ。まあ、マージン取りつつ行こう。それに、聞いたところによると、昨日神崎がDクラスの近くまで侵入したという話もある。なので、Dクラスのメンバーが徒党を組んでほんの少しだけBクラス側に入っても、それはただの事故だろう。というか、問題にすらならないかもしれない。

「了解、それなら、一応午前はBクラス側にいつもより深く入るよ。」

「いっても安全なラインで行くから、Bとは遭わないかもしれないけどね」

「そう言ったあたりで、今日の会合は終了した。」

その後は二日目と同じように朝の個人探索、朝食、点呼とノルマをこなしていき、午前中の食料探索に向かう。メンバーは希望通り井の頭を入れた。後は特に特記すべき人はいない。一応、櫛田も参加している。というか、櫛田は今の所食料探索には全て参加しているので歴戦の猛者とも言える。

ただ、最近食料が余り気味になってきたせいか、それとも、安定した島での生活により精神的な「緩み」がでてきたためか、今回の参加者は昨日までより少なかった。なんか弛んできたようだ。まあ、どうせ今日も往復することになるし、二回目の出撃以降も人員を募集すればいいだろう。Bクラスと遭遇したときに備えて手数は欲しいが……まあ、いきなり殴り合いにはならんだろう。

少ない人数ながらも、櫛田の下で一致団結し、Bクラスのテリトリーへと近づいていく。ちよつとだけ、さきつちよだけなら大丈夫だろうという心胆だ。……正直に言うところ少しビビってる。一之瀬様率いるBクラスの領域近くから食料を掻っ攫っても大丈夫だろうか？いや、まあ、中間地点より少し踏み込んだだけだし……大丈夫だろう。不安を抑えつつ、櫛田に、あそこにトマト、あそこにナスと適当に指摘していく。うーむ、位置的にこれ以上進むのは少し怖いかな。そう考えると、ガサガサと人の気配が進行方向からした。これは来ちゃったか？

「あれ？、もしかして、桔梗ちゃん？それにDクラスの皆？」

まさかの一之瀬様である。なんで指導者自らこんな前線に出向いているんだ。うちのクラスの平田も自分で動く人だけど、指示を出さなくちゃいけないから基本的には本陣にいるぞ。

「わっ！帆波ちゃん久しぶり、まさか帆波ちゃんと会えるとは思っ

てなかったよ」

櫛田は一之瀬様と面識があるようだ。まあ、顔の広い者同士、当然と言える。

「私こそ、会えて嬉しいよ。堀北さんから話は聞いてる?」

そういえば、櫛田と一之瀬様って雰囲気結構似てるよな。能力が高くて、おそらく性格も良い、そして当然、口も悪くない。

「うん、聞いてるよ。今回はお互いにリーダーを当てないって話だったよね。帆波ちゃんのクラスと戦わずにすんで堀北さんも嬉しそうだったよ」

あ、そういえば、時間がなかったから井の頭の計画を詳しくは聞いていないな。中間地点で挑発するのが目的なのか、それとも遭遇するのが目的なのか。まあ、ここは櫛田と井の頭の活躍に期待しよう。任せたぞ、友よ。

「私も、今回の試験は中々難しそうだし、堀北さんや桔梗ちゃんがいるクラスは敵に回したくないからね……ところで、桔梗ちゃんたちは、……食料探索かな?」

今一瞬、一之瀬様の目が鋭く光った気がする。ひえ、いや、落ち着け大丈夫だ。こっちには櫛田がいる。さあ、櫛田、皆の盾となり一之瀬様を倒すのだ。

「うん。そうだよ。もしかして、帆波ちゃんたちもかな?」

「そっか、実は私たちも食料を探しに来たんだ。少しでもポイントを節約したいからね。とはいっても、中々難しくくてね……もうベースキャンプの周りは殆ど取りつくしちやったから……桔梗ちゃんたちは、どんな感じ?結構取れてる?」

櫛田、頼むぞ……そう思っていると櫛田はチラリとこちらを流し見た。いや、一之瀬様が目前にいるときにアイコンタクトは止める。危ないだろ。櫛田がいくら警戒されようが一之瀬様にボコボコにされようが俺は構わないが俺がターゲットにされるのは困るのだ。分かるか?分かれ!

「成果は……そこそこって感じかな。Dクラスのベースキャンプの周りには結構食べられるものがあつたから、そのお陰で、上手くいつて

るみたい」

ナイス。個人的には模範解答だと思う。あー、でもこれは流れるに、こちらが退くことになりそうだな。

「うーん、無人島の植物の分布を考えると、不公平になり過ぎないように配慮されてると思うから、きつとDクラスには凄く優秀な人がいるんだね。誰かな。やっぱり堀北さん？良かったら教えてくれないかな」

ひえ、櫛田、応戦しろ。お前ならできる。頼むぞ。俺は昨日不可抗力で龍園に名前を憶えられてしまった。まあ、アホだと思われてると思うからなんとかなりそうだが、一之瀬様あたりに警戒されるのは危険だ。櫛田！本当に頼むぞ。

「それは、さすがに帆波ちゃんにも教えられないかな。でも、私は個人の力よりもDクラスの皆一人一人が協力したから上手くいつてるんだと思ってるよ」

う、そこは、そんなやっぴいないぞ、の方が良かった気もするが……あ、いや、それはさすがに不審か、一之瀬様もさっきの言い回しだとサバイバーがいると思ってるっぽいし。なら、櫛田のこの回答は悪くないか。むしろ最善かもしれない。よくやった！櫛田！

「むむむ、やっぴり、裏に誰かいるんだね。Dクラスは人材豊富で羨ましい限りだよ。堀北さんに桔梗ちゃん、平田君に、あと綾小路君も結構鋭いところがあるし、うーん、やっぴり、しばらくはDクラスとは戦いたくないね」

まさに、貴女様が言うな、である。

あ、でもBクラスは総合力が高い感じで尖った人材はDの方が多いか。堀北・綾小路のボツチ参謀タッグや、運動力の須藤、軍団の保有する軽井沢と篠原、勉強ガチ勢の幸村、チャッカマン池君、ドヤ顔の王に、マウンツの佐倉、あと世界一クリーンな企業の社長になる予定の高円寺。

うーむ、なかなかの尖り具合だ。そして、平田・櫛田の二枚看板はほとんどの試験で活躍できるワイルドカードだ。

「あはは、これは一本取られちゃったかな。……このまま話し続ける

と、帆波ちゃんに大事な事まで話しちやいそうだから、この辺で一旦戻ろうかな。じゃあね、帆波ちゃん」

櫛田は状況悪しと見たのか撤退モードだ。いいと思います。ここは退きましよう。そして、軽井沢軍団をぶつけてBクラスをびっくりさせてやりましよう。

「うん、じゃあね、桔梗ちゃん。——って、あれ、この辺りの食料、採らなくていいの?」

お前、じゃない間違えた、貴女様が怖くて櫛田も俺も、あと他のメンバーもビビッてるだけだよ。なぜ分かりきったことを聞くのでしょうか……

「うーん、本当は採るように言われてたけど……でも帆波ちゃんのクラスの方が大変そうだから、Bクラスの方で食べてもらった方がいいかな」

そう櫛田が言うと、一之瀬は少し困った顔をした。なんか問題あるのか?

「それは、——正直言うと嬉しいけど、でも桔梗ちゃんたちが先に見つけたと思うから、桔梗ちゃんたちのものだよ」

確かにそうだな。よし、貰って行こう。

「でも、まだDクラスには——そうだ!なら、交換っていうのはどうかな?」

いや、貰おうよ。せっかくだし。

「交換?」

一之瀬様は顔に疑問符を浮かべていた。

「うん、この場所の食料をBクラスの人たちが採って行って、代わりに、Bクラスの皆とアドレスを交換したいなって。帆波ちゃんは私の目標知ってるでしょ。でも、まだ交換できてない人もいるから、今は端末が無いから無理だけど、ここにいる人だけでも自己紹介しない?お互いに知り合えば、きっと私と帆波ちゃんみたいに良い友達になれるよ」

いや、何言ってるんだよ櫛田。というより、貴重な資源の対価がお前の個人的探究なのは駄目じゃないか?いや、まあ、龍園や坂柳あたり

もクラスや派閥を私物化してるからこのくらい大したことないと言
えるけれど……

「……うん、私は良いよ。でも一応、皆に聞いてからでいいかな。アド
レスは試験の後でつて形になっちゃうし、それも承諾を得られた子だ
けになるけど……」

俺はあんまり良くないよ。俺の名前が広がったらどうするんだよ。
それともなんだ。ここで一之瀬にあえて食料班を見せびらかすこと
で、さきほどの会話の流れから逆にこの中に有能は櫛田しかいないみ
たいな論法に持ってきたいのだろうか。それは戦術の一つだと思っ
けど、俺には危険に感じられるぞ。リスクを取りたくないぞ。

「勿論だよー」

櫛田が明るく言い放つと、一之瀬様はこちらに背を向け、後ろに引
き連れたBクラスの集団に話をつけていた。1分もかからずに全員
に承諾を貰ったようだ。そして、なぜか自己紹介大会が始まった。な
んで俺一之瀬様に二回も自己紹介してるんだ？

ちなみに櫛田はほくほく顔で、「白波さんや網倉さんとは、まだちや
んと話せてなかったから、これがチャンスだと思っただく」と述べ
ていた。

お互いに軽く自己紹介をした後、解散となった。なお、俺が自己紹
介をしたとき一之瀬様の近侍の一人であり会話率がおかしい白波が
こつちにガンを飛ばしていたことをここに記しておく。アイツは何
がしたいんだ……

Bクラスとの遭遇戦を終えた櫛田班はそのままベースキャンプへ
と帰参した。その後、いつもの往復輸送を行い昼飯分の食料調達を終
えた。そういえばヒヤヒヤして忘れていたが、井の頭が言っていたB
クラスを落とす作戦はどうなったんだ？まあ、こつちが退いちゃった
し普通に失敗かな？

最後の物資を調理班に届けたところで綾小路と佐倉がトウモロコ

シを抱えてベースキャンプにやってきた。どうやら二人は自主的に食料を探していたようだ。綾小路は筋肉ありそうだから普通に櫛田班に参加すればいいのに……ああ、でも俺も井の頭もちよつと不気味な綾小路は怖いから別に参加してもらわなくていいか。

平田の傍で綾小路の報告を聞くと、彼は佐倉と一緒にトウモロコシの群生地を見つけたようだ。うーむ、報告の地点から考えるとAクラスの間地点より洞窟寄りだな……確かに、あそこには群生地があつたが、俺はAクラスに近いので、止めておいた場所だ。

正直、今回の櫛田班のBクラス接近よりも遥かに敵に肉迫する危険の手だ。なんであんな場所をいきなり探索したんだ？ やつぱり、筋肉マウントコンビ故に闘争を求めたのだろうか。これはAクラスとの戦闘になりかねんぞ。井の頭曰く、ずっと偵察している女子もいるという話だし、少し危険な感じがしたので、綾小路に周囲に誰か見なかったか聞くと、「いや、特にいなかったぞ」と平然と答えられた。うーん、偵察が消えたのか、それとも綾小路が鈍いのか、判断に迷うな。

まあ、どちらにしろ時刻は既に12時だ。つまり昼飯時だ。今から群生地に行ったら昼飯が冷めてしまうし、食った後で良いだろう。

しかし、俺の思考とは裏腹にDクラスの皆はトウモロコシが気になるようで10名近くが綾小路が示した群生地に向かってしまった。いつてらっしゃい。俺は暖かい飯を食うことにした。

結局、トウモロコシ狩りは時間がかかり、13時を過ぎてしまったようだ。冷めた飯を食っていた山内が言うには、Aクラスの葛城を付近で見かけたらしい。おい、綾小路、お前の索敵力どうなってるや。この節穴が！ よりにもよって指導者である葛城自ら偵察してるじゃないか。

気づかない綾小路も綾小路だが、葛城も葛城だ。一之瀬様といい、葛城といい、なんでお前らはベースキャンプから離れたがるんだ。もし俺が遭ったらびっくりするだろ。一之瀬様と葛城はもつと俺の心臓を慮れ。ちゃんと本陣にいろ。平田や龍園を見倣え。

昼飯を食い終わり午後になると再び櫛田班が編成された。井の頭は疲れているのか、ベースキャンプで待機となった。まあ、井の頭は体力無いムーブしてるからあんまり活動的になるのも不自然なのでいいと思うよ。

櫛田とともに今度はCクラス側の方向に探索の手を伸ばした。浜辺と森の中間地点だ。今日はここの食料を根こそぎ頂こう。トウモロコシの臨時収入で再びテンションが上がったのか、それとも葛城の姿で危機感を覚えたのか、それとも単に午後になり午前の眠気もとれたのか、今回のメンバーは午前よりは多かった。

もう殆ど指示することはないものの、見つけにくい食料を櫛田に報告し、次々と食料を狩っていく。しかし、何だかんだで櫛田と一緒に活動する機会が多いな。まあ、平田がベースから動かせない以上能力的に櫛田が食料班に指揮を執るのは必然なので一緒に活動するのは当然なのだが……どうも、そのあたりが堀北に誤解を与えてしまっているのだろう。

お、草場に隠れたトマト発見。回収しよう。うん、Cクラスは全員（伊吹何某と、Bクラスにいと噂される何某を除く）脱落したようだし、好き放題奪えるぞ。皆の者、乱取りじゃー。

そして時間は過ぎていき、夕食を食べ点呼を終えた。

点呼が終わると、また昨日と同じように櫛田が数人の女子と共に平田のところへ向かっていった。彼らは何かを話し終えると、そこに軽井沢軍団が加わり途中で軽井沢が平田の腕に抱き着いたりしていた。彼らの観察を続けると、平田と軽井沢軍団の一部、そして櫛田などがまたベースキャンプからライトを持って離れて行った。なんだろう？まあ、平田と櫛田がいるし危ないことではないだろうが……

二日も連続で夜に抜けられると気になるな。何やっているんだろう。星でも見ているのだろうか。

まあ、星とか女子は好きそうなイメージあるし、そんなところかも

しれない。それに偏見だが、女子は流行や迷信が好きそうなイメージがある。例えば、流れ星が落ちる前に願い事を3回言うと願いが叶うなどという迷信もよく流布されている。科学的根拠がまったく無いのによくもまあ信じるものだ。まあ、色々と満たされていない人は神頼みならぬ星頼――

お、流れ星!!

――無人島試験でこれ以上何事ありませんように!無人島試験でこれ以上何事ありませんように!無人、あ……

クソ!3回言いそびれたぞ……

まあ、いいか。心を落ち着かせて30分ほど経過したあたりで平田と女子たちが帰ってきた。もったいないヤツらだ。ベースキャンプにいれば流れ星が見えたのに……

幸い、本日も脱落者はいないようだ。とてもよいことだと思う。俺卒業したら世界一クリーンな企業作るんだ!

四日目の攻防

四日目の朝、いつも通り、井の頭と作戦会議を済ませた。とはいっても、先日から俺の方では新たに得た情報はなく、井の頭はどこかの空であるのか、何かを考えているようで、彼女の言葉はいつも以上に歯切れが悪く、お互いあまり多く情報を交換することはなかった。

ただ、会議の終わりに見せた顔は、なにか決意を秘めているような顔で、危うく感じた。上手く言えないが、少し気合が入り過ぎているように見えたので、「無理しない程度に頑張つて」ということを伝えておいた。

そして、いつも通り、個人探索、朝食、点呼をこなした。今回の午前の食料探索には参加しない予定なので、個人探索で得た情報を櫛田に託し、平田に許可を貰った後、Aクラスの偵察を一人で行う事にした。

井の頭の略奪推奨クラスだ。今日はここを探索し、歩哨の数と採取物の分布の確認を行う。そして可能であれば、以降の食料探索の対象とし、今後の試験ライフを豊かにしていきたいところだ。

哨戒網に引つかからないように森の中を歩き、Aクラスの洞窟を目指す。ちなみに、今回の目的は偵察と食料採取状態の確認だ。昨日のトウモロコシ騒ぎの際、葛城はどういう訳かトウモロコシを採取しなかったらしい。あの一之瀬様でさえ、目の前に食料があったら採取を試みるのだ。葛城だってそうだろう。それでも、なお、彼がトウモロコシを取らなかった理由は、考えられる限り二つだ。

一つ目は食料過多である可能性だ。これは、AクラスがDクラスと同じように周囲の食料を蝗のように荒らしまわり、食料を確保しているということだ。ただ、個人的にはこちらの可能性は低いと思う。井の頭の報告曰く、Aの生徒は彼女の視界内では殆ど見えないとの事だ。つまり、Aは洞窟に隠れている、又は洞窟を挟んで反対側で活動して

おり、井の頭の視界に入っていない。

しかし、井の頭の視界に入らないようにする場合は、おそらく食料分布の関係上、不足が出てしまう。とすると、トウモロコシを奪うはずだ。つまり、もう一つの可能性の方が高い気がする。

二つ目は食料をポイントで賄っている可能性だ。これならば洞窟で穴熊するのにも適している。ただ、まあ、平田の試算では食料はポイントで賄うと110ポイントも使用する。しかも、この計算は一日二食とした場合だ。つまりお腹が減る。

この選択を取っていた場合はAクラスは隠蔽性が確保されるものの、洞窟という閉鎖的環境と栄養不足、そしてポイント浪費と、大きな問題を抱えることになる。葛城と坂柳が停戦したとしても、それだけの重荷をクラスに払わせて、今回のAクラスの指導者（坂柳は欠席なので、おそらく葛城）は大丈夫なのだろうか？

というか、こちらの可能性であったとしても栄養不足であるはずだから、トウモロコシは必要なはずだ。なぜ彼は採取しなかったのだろうか。

そんなことを漠然と考えながら、そろり、そろりとAクラス近くの裏道を使う。ここまで、見た所、採取物は手つかずだ。やはりポイントで賄っているのだろう。

しかし、何か妙な気がする。確かに、完全穴熊戦術は、リーダー当てでは圧倒的な防御力を誇るが……もし、そうするのならば、探索のとき戸塚を本隊に紛れ込ませて、先遣隊に入れるべきではなかった気がする。それさえなければ、俺や王にリーダーが露見せずに済んだのに。いや、まあ結果論だが。

うーむ、葛城の戦略に一貫性がない気がしてきたぞ……ああ、いや、まあ、あの時点では葛城の言う通り、彼にとつての最速であったため、攻勢を優先して、スポット確保のためにも戸塚が必要だったのだろう。そして、可能な限りの攻勢を行った後は、戸塚ごとAクラスを隠して防御に徹した。

ううむ、そう考えると最善手のようにも見える。あー、でも、やっぱりポイントを食料に回したことによる浪費が気になるな。やはり、

彼の戦い方は持久戦というより消耗戦と言える。まあ、自力があるAクラスが消耗戦を行えば、最終的に勝てるのかもしれないが……

「あんた、何やってんの？」

うーん、やっぱり葛城の考えることは……ん？今、誰か俺に声をかけなかったか？

「ねえ、聞いてるんだけど」

声の方を見ると、強襲型堀北、といっても最近堀北もなんか強襲型っぽくなってきたから、堀北でいいか、堀北である神室がいた。誰か分からないから、形容詞の堀北取るか。神室がいた。

「えっと、あなたは、確か、モールにいた……」

こういう時に不便だから、さっさと『神室』と名乗れ。とっさに、名前前で呼んじやったら不自然になるだろ。だから、早く名乗れ。

「何やってるか聞いてるんだけど？」

コイツはやっぱり堀北と同類の臭いがする。

「えーっと、そのクラスの皆に頼まれて、食料を調べてくるように言われて……そういう、あなたは、何をやってるんですか？」

俺の質問を神室は無視すると、次の疑問を放ってきた。会話しろ。

「ここ、Aクラスの占有してる場所なんだけど」

嘘やめろ。この辺りにスポットはないぞ。そういえば、コイツは前会った時に偽名を名乗ろうとしたりしていたな。虚言癖でもあるのかね？

「そうだったんですか……すみません、気づかなくて」

俺がそういうと、神室はジロジロとこちらを訝しむように観察してきた。おい、なんか、俺が嘘言ってるみたいな雰囲気はやめろ。嘘吐いてるのはお前だろ。

『すみません』、で済む問題じゃないでしょ。スポットの不正使用は減点って言ってたから」

そもそも、ここにスポットはねーぞ。というか、これ、分かったぞ。さては神室、テメー、俺からカツアゲする気だろ。マジで綾小路さん呼ぶぞ。謎技術で、お前を洞窟のシミにしてみようぞ。

「ええっと、それは……その、何と言いますか、ここに本当にスポット

があるんでしょうか？もしあつたら、見せて欲しいのですが」

正直、上手く対応できない。というか、何で、こんなところに神室がいるんだ。ここは裏道の一部だぞ。普通の生徒じゃ立ち入れない場所だ。なんでお前がいるんだよ。第一、Aクラスは皆穴熊やってるって——はっ！もしかしてコイツか、井の頭が言つてたAクラスの女子って。謎の見張り女はお前かよ。何やってんだよ。

「誤魔化したいのは分かったけど、そういう態度取るなら、……さ、——葛城に報告するけど、いいの？」

だから、俺が誤魔化してるみたいな言い方は止めろ。ここにスポーツは無いんだって。あと葛城には黙つとけ。

「その、……誤魔化しているつもりはありません、ただ、どうも、あなたは何か俺に望みがあるように感じられます。何かあるんですか？」

まあ、たぶんDクラスの情報寄せ、とかポイント寄せとかだろうな。断固拒否だが、ここは適当に話をして、逃げた後、綾小路さん呼びますかね。

「……、……別に無いけど、自意識過剰なんじゃない？」

今の間はなんだよ……アレか？ちよつと罪悪感を抱いたのか？罪悪感を抱いたなら、謝罪しよう。今なら邪神の処刑にぎにぎ1回で許してやる。

「……そんな、つもりは、ありませんが……すみません、Dクラスの合流時刻に遅れるので、俺は失礼します。あと、俺はスポットを不正利用する気はありませんし、現にしません。スポットの所在が、俺にも、そして、あなたにも明らかではない以上、これで説明は十分だと思います」

適当に詭弁を放ち、さっさと逃げることにする。バレなきや犯罪じゃないんですよ。というか、まあ、そもそも冤罪だけど、

「——ちよつと、待って」

しかし、素早く神室は俺の腕を掴みやがった。最近、よく俺の腕つて掴まれるんだけど、掴みたくなる腕に見えるのか。お前らは全員綾小路の舎弟なの？

「あの、放してもらえないでしょうか」

神室はじつと俺の目を睨んできた。やめろ。

「私の質問に答えたら、今回の件は見逃してもいいけど、どうする？」
見逃すも何も、そもそも証拠どころか、事件すらなかったんだけど。
というか、さつき、望みを聞いたときに言えよ。

「内容にもよりますが……クラスを売るようなことはできません」
最低でも200万ポイントは用意して。ちなみに1000万ポイントならクラスの情報全部売るよ。

俺の回答に神室はフンつと鼻を鳴らすと、予想外の質問をしてきた。

「――坂柳、坂柳有栖って知ってる？」

知らないって答えたい。……でも俺は、嘘はあんまり得意じゃないからな。

「……聞いたことがあったと思います。確か、Aクラスの人でしたっけ？」

というか、なんで、こんな事聞くんだ。正直、坂柳派閥には盗聴以外は何もしてないぞ……逆探知されるわけがないし。うーん、前に神室と話した時に不審な事をしてしまっただろうか。

「……私が、前、あんたとモールで会ったとき、坂柳って名乗った。その時、あんたは何も言わなかった。なんで？」

やつば、そこ突いてくるよな。どうしたものか。

「えっと、すみません、よく憶えていませんが……ただ、単にその坂柳さんという方があなたかと思ったのでは？あなたもAクラスでしたし」

「やつぱりおかしい。私が坂柳って名乗ったのはクラス名を告げる前だから、なんか隠してるでしょ」

ツチ。ミスった。確かにそうだった気もする。正直あの時のモールの事なんか、うろ覚えなんだよ。なんてたって、この試験の内容を全て暗記していたのだ。だから、あんな些細な出来事忘れるだろ、普通。……適当に誤魔化すか。

「えっと、すみません、先ほども言ったように、俺はあの時のことはうる覚えで、あなたと違って、俺はD、……というより、あなたの名前

は何なんですか？いい加減教えて貰えませんか？」

毎回、神室って呼んじやいそうになるから、早く教えて。

「何で教えなきゃいけないの？」

いや、面倒だから、早く名乗れ。

「……こんな、尋問まがいの事を2度も受けて、その上、名前すら教えてもらえないのでしたら、これ以上の会話は俺には難しいですね」

俺に、こんな真つ当な台詞を喋らせるんじやない！まあ、神室は名乗りたくないみたいだし、これでコイツの会話からは解放されるな……

「神室、神室真澄。これでいい？」

名乗るのかよ……

「神室さんですか、よろしくお願いします」

アイサツは大事。

「あっそ」

アイサツしない、スゴイ・シツレイ。

「えっと、俺は前、確か名乗りましたよね？」

喋ってから、少し後悔した。このまま、腕を振り払い、適当に去ればよかったのに、何でムキになってしまったのだろうか。第一、坂柳派にわざわざ、名前を売り込むみたいな感じになってしまっている。大失態だ。なんか、神室と一緒にいるとペースが崩れるな……

「い、……赤石でしょ」

今間違えそうだっただろ。なんだよ『い』って。俺の名前は『あ』からだよ。『い』からじゃないよ。まあ、五十音だと隣だけどぎ。

「そうです……、ええっと、そろそろ、クラスメイトに言われた合流時間なので戻っていいですか？」

一応、平田には昼飯までには戻ると言っておいたので嘘ではない。自信の誠実さを再認識しながら、チラリと神室が掴んだ俺の腕を見る。コイツはなんと、会話の最中ずっと俺の腕を掴んでいるのだ。いい加減放せ。あの綾小路でも1分以上は掴まなかつたぞ。なんという礼儀知らず。

しかし、俺の思いは届かず、神室は腕を放さなかつた。おい、放せ。

「まだ、質問は終わってないから。……本当に坂柳のことを知らないの？」

そう言うと、神室はグツと掴んだ俺の腕を引っ張り、じつと俺の目の中を覗き込んできた。神室の目は、何か期待をしているような、まるで、希望を見出そうとしているかのように見えた。

「で、ですから、名前は聞いたことがあったと思いますが……何か神室さんにとって重要な名前なんですか？」

どうも、神室は話題を坂柳にしたいようなので聞いてやることにする。きつと、いつもコキ使われているから、悪口でも言いたのだろう。神室は十数秒ほど、俺の瞳をじつと見た後、小さく溜息を吐き、顔を離した。

「坂柳はうちのクラスのリーダー。名前がどこまで広まってるか聞きたかった。それだけ、じゃあ、もう行っていいから」

そう言うと、ようやく手を放した。ふう、コイツ、ちょっと、やべー奴だな。ストレス過多で、錯乱して無関係の通行人に襲い掛かるとか、信じられないぞ。堀北風に言うならば、坂柳はちゃんと神室に首輪でも付けとけよ。

……神室は0.5椎名に更新だな。今後は関わらないでおこう。

「そ、そうですねか……えっと失礼します、神室さん」

対応に困ったので、適当に神室に別れを告げた後、Dクラスへの帰路についた。

「――が……足掻いて……には……」

最後に、小さな声が、背後から聞こえた気がした。最近ブツブツ喋る奴が増えたな。もっとはつきり喋れ。

11時20分にベースキャンプに帰還した。一応、偵察しながら帰ってきたが、やはり歩哨は神室のみで、植物も殆ど採取されていないようだ。午後の探索では櫛田に相談して、Aクラス側から食料を調達するのもいいかもしれない。

しかし、なんとも微妙な時間である。ベースキャンプで手持ち無沙汰の生徒に聞いたところ、櫛田率いる食料探索班は、既に最後の往復輸送に向かったらしい。うーん、今からだと手伝えることは無さそうだ。昼飯まで少し暇だな。何するかなー。

試験の折り返し地点だし、そろそろ平田にAクラスのリーダーについて話すか？あー、でも、今、平田の周りに人が結構いるから……まあ、平田の周りには、いつも人だかりが出来ているし、何か情報が出回っても嫌だから、六日目か最終日に、こっそりと告げる方がいいか。

「ちよつと、いいかしら」

よくない。

振り返ると、堀北がいた。珍しく一人だ。綾小路はどうした？気になり、辺りを見回したが、彼の姿は確認できなかった。

「はい？どうしましたか、堀北さん」

今日は、既に堀北と会話した気分なので、あんまり、これ以上会話したくないのだが……

「……そうね、貴方はこれから——いえ、違うわね……」

なんか歯切れが悪いな。堀北ってズバスバものを言うイメージがあつたが……ここ最近、険のある視線も減ったし、本当に堀北はどうしたんだろう？

それから、堀北は少し出だしの言葉に悩みつつも、何かを決めたような顔になり、鋭い声を発した。

「——貴方が私に嫌悪の感情を抱いているのは知っているわ」

俺は今初めて知ったよ。てか、別に自分で言う事でも無いかもしれないけど、俺は、あんまり人間関係の好き嫌いは少ないよ。

「……よく分かりませんが、俺は堀北さんのことを嫌ってませんよ」

そう言つてはみるも、堀北はこちらの言葉をまるで信じていないように言葉を続けた。コイツ、俺の事まったく信用してないな。さては、櫛田に綾小路を取られるのが怖くて、櫛田に関わりのある人間を警戒しているな……

「そう、わかったわ。ただ、この試験ではある程度協力する必要がある

と私は言いたい——今後の為にも、お互いの立場を、はっきりさせましょう」

立場もなにも、俺にとって、お前は、ただのクラスメイトであって、それ以下でも以上でもない。というか、お前も俺のことは同じように思ってるだろ。ほら、じゃあ、終わり、相互理解完了したから、帰って。

「まず、貴方も知っている通り、今回の特別試験では、私はクラスを率いる立場にあるわ。そして櫛田さんは私を補佐する立場にある……つまり櫛田さんは私に従う立場にある。ここまでは理解できたかしら？——そう、続けるわね」

俺が「はい」と答えるか答えないかの寸前で、堀北は次へと話を繋げた。俺が『いいえ』って答えたらどうする気だったんだ……

「——貴方は櫛田さんの犬。つまり、櫛田さんに隷属している立場にあるわ。演繹的に、貴方は私に隷属していると言えるわね。よって、貴方はこれから私のする質問に対して、偽りなく答える義務があるわ」

ないよ。というか前提が間違ってるよ。別に櫛田の犬じゃないよ。そう思ってるの、このクラスで、いや地球上でお前だけだよ。

その思いは堀北には届かず、彼女は尊大に腕を組むと質問を始めた。

「まず、一つ目、綾小路君がベースキャンプに見当たらないのだけれど……貴方は彼が今どこにいるか知っている？イエスかノーで答えなさい」

ノー、というより、俺は今戻ったばかりなんだけれど……いや、まあ、堀北が、Dクラスで注視しているのは綾小路だけみたいだし、無関心の相手が何時ベースキャンプに戻って来たかなど分からないだろうが。

「ノーです、知りません」

なんか堀北のエンジンが回ってきたな。さっきの歯切れの悪さはどこへ消えた。戻って来い。

「そう、では次に、綾小路君が今何をやっているか、貴方には分かるか

しら？これも、イエスカノーで答えなさい」

それは、さっきの質問と同じ質問のように俺には感じられるのだが……

「ノーです、知りません」

このままずっと綾小路に関する質問が続くのではないかと堀北のストーリー具合に恐怖していると、堀北は溜息を吐き、困惑と焦燥と疲労を足したような顔になった。いや、俺の方が疲労してるよ。困ってるよ。

「貴方が知っているはずも無いわね。いえ、気にしないで頂戴。あまり期待もしていなかったし、念のため聞いておいただけよ。質問を変えらわね」

まだ、質問があるのか……

「はい、お役に立てず、すみません……」

適当に謝り、先を促す。

「貴方はさっき帰ってきたようだけれど、何処で何をしてたのか、詳しく話しなさい」

堀北みたいなヤツと話してた。ちなみに今は神室みたいなヤツと話してる。というか、お前は俺が帰って来たのを知ってたのかよ。なら、綾小路が今何をしているのかなんて、俺が知るはずがないことは分かっていただろ。さっきの綾小路の下りはいらなかっただろ。何で、あんな意味のない質問をした。

「Aクラス側の偵察と探索を個人で行っていました。あちら側はどういう訳か手付かずで、まだ食料が沢山ありましたよ。堀北さんは午前中はベースキャンプで過ごされたんですか？」

お前は、俺と違って、クラスのために直接動いてないよね？ベースキャンプでゴロゴロしてただけだよ？と間接的に煽っておく。

「そう……それはご苦勞様。ただ、少し変ね。櫛田さんは食料を探しにいったようだけれど、どうして貴方は参加しなかったのかしら？飼いの主の下から離れるなんて忠犬の名折れよ。首輪だけじゃなくて、リードも付けてもらった方がいいわね」

しかし、鋼メンタルの堀北にはまったく効果が無いようだ。それど

ころか、煽り返してきた。なんとなく、心配になり近くを確認するが、平田は遠く離れた場所において、櫛田はまだ戻っていないかった。まったく、何で俺が人の精神状態まで気にしないといけないんだよ……

というか、アレだな。近くを確認したが、かなり皆離れてるな。いや、そもそも、俺が少し集団から離れた際に、堀北が話しかけてきた気がする。コイツはどんだけ集団が苦手なんだよ……

「堀北さんが以前仰ったように、食料班は櫛田さんが率いることに意味があり、……俺がいることには、そこまで大きな意味はありません。櫛田さんを単独行動させるわけにはいきませんので、食料班にいたくても問題のない俺が別行動をとりました」

適当に言葉を濁しながら答えていく。そろそろ、櫛田も戻ってきそうだし、堀北と絡んでいる所を見せると、揉めそうだから話を終わらせたんだけど。というか、綾小路帰って来い。お前がいけないせいで、堀北が欲求不満みたいだぞ。はよ戻れ。

「確かに、効率を考えると正しいわね。でも意外だわ。……貴方が自身の能力を正しく理解していたとは思わなかったから。一昨日はやけに自意識過剰だったけれど……最低限の思慮は持ち合わせているよね。……そうね、確かに、私の中で貴方の評価が上昇修正されたわ。ほんの僅かだけれど」

光栄です。じゃあ、話はこれで終わりね。

「それは、何というか、光栄です。……すみません、そろそろ櫛田さん達が戻ってきますので、作業を手伝いたいで……またお話は今度にさせて頂けると助かるのですが……」

俺がそう言うと、こちらを見下すような挑発的な笑みを浮かべた。コイツ身長が俺より10cm以上低いのに、精神的に人より高く立つのが上手いな。天然なのか、狙ってやってるのか悩むところだが、彼女のスペックの高さと、それに見合うプライドの高さから前者なんだろう。

「ええ、忠犬の役目、頑張りなさい。隷属する生き方は、私は惨めだと思っけれど、考え方は人それぞれよ、否定はしないわ」

お前も、綾小路の恋人頑張れよ。恋愛の仕方は人それぞれだけど、

路上で行為を行うのは個人的には無しだと思うぞ。完全否定はしないけど。あと、あんまり束縛ばかりしていると、櫛田に取られちゃうから、ほどほどにな。

あー、でも俺的には櫛田と綾小路が結ばれた方が、櫛田が安定するから楽か？いや、でも今日のことを考えると堀北が俺に八つ当たりしてきそうなイメージあるから、それはそれで嫌だな。綾小路には頑張って二人とも幸せにしてもらいたいところだ。

食料班の物資搬入を手伝った後、昼食を食べ、櫛田にAクラスへの略奪計画について話をした。しかし、残念ながら櫛田はあまり乗り気ではなかった。どうやら、彼女のグループが塔の方へ偵察に行きたいらしい。自分の目で確かめたい事があるとか言っていた。

うん、いいんじゃないですかね。櫛田は洞察力とか高そうなお雰囲気もあるし、戦闘力も高そうだから、Aクラスが占領していると思われる塔に行くのは悪くない気がする。ちなみに俺も櫛田に誘われたが、辞退しておいた。井の頭から、塔側にはAクラスを数人目撃したとの情報をもたらった。行くわけがない。

ただ、井の頭も櫛田に同行するらしいので少し心配だが……まあ、櫛田は強いし、井の頭自身も塔の敵については知っている上で、櫛田に同行するようなので、彼女にも何か考えがあるのだろう。

昼飯後に櫛田グループの塔への出立を見届け後、適当にAクラス側から、食料を個人で持てる量だけ回収して、調理班に届けた。連日の食料供給が高すぎたためか、今日の午後は組織的な食料調達はしないことになったのだ。この辺りも、櫛田が食料探索を止めて偵察へと考えをシフトさせた要因かもしれない。

なお、俺の個人行動に関してはちゃんと理由があり、篠原軍団に少し足りないものがあるので、もしあったら欲しいと注文されたからだ。

食料班に物資を少し届け時刻が15時を少し過ぎたところで、綾小

路がベースキャンプに戻ってきた。遅すぎるだろ。お前は何をしていたんだ。お前のせいで堀北が欲求不満で俺に絡んできたんだぞ！思わず、睨むと、なんと、ヤツがこっちへゆつくりと近づいてきた。ひえ、すみませんでした。

「赤石、なんか、久しぶりだな。そういえば、今日はまだ会ってなかったか……こういう時は、おはよう、でいいの？」

もう三時だし、こんにちは、でいいんじゃないか？

「どうでしょう？個人的には『こんにちは』が正しいと思いますが……というより、綾小路君は今までどこに行ってたんですか？」

「ちよつと散歩してた」

フリーダムすぎるだろ。お前は6時間近く散歩してたのかよ。昼飯も食わずに散歩かよ……

「そうですか……」

あ、いや、待てよ。コイツ、もしかして島で迷子になって、それを隠してるんじゃない……優秀な参謀が必ずしも方向感覚が正しいわけではないし、実際この島は迷いやすい構造だし、十分にあり得るな。

「なあ、赤石、なんで女子と男子で扱いが違うんだろうな」

唐突すぎて何から突っ込めばいいかわからない。6時間の散歩で頭がおかしくなっちゃったのだろうか。

「ええっ？性差の話でしょうか？」

「いや、櫛田はすごいなって話だ」

そして唐突な愛人自慢。それは堀北にはマジで黙っておけよ。俺が八つ当たりされるから。

「まあ、確かに櫛田さんはDクラスとは思えないポテンシャルを持っている方ですが……」

その日はなんか適当に綾小路と話して、そして、適当に時間が過ぎ、なんか一日が終わった。今日、俺は意味の分からない会話ばかりした気がする。

あ、あと、今日も、脱落者は当然いないようだ。とてもよいことだと思う。俺卒業したら世界一クリーンな企業作るんだ！

循環する白い布

5日目早朝、この日も早くから目が覚めた俺は、起き上がろうとして、止めた。テントの外に人の気配がするのだ。薄目で外の気配を探ると、誰かが、テントの外にある鞆を漁ってるようだ。変だな。こっちのテントには綾小路はいない。もし、綾小路がいれば、漁り人は櫛田か堀北だと確信を持ったのだが……

そう、思いながら、謎の人物がテントの前から去り、しばらく時間を置いた後に、起き上がり、テントから出る。いつもの川辺の待ち合わせ場所に行くと、井の頭がいた。しかし、どうも様子がおかしかった。頭を抱え、必死に何かを考えているようだ。だいぶ悩んでいるようで、今にも頭から蒸気が出そうな雰囲気だ。

「井の頭さん、おはよう」

一応、挨拶をするが、井の頭は返事をする事なく固まったままだ。やばいな、何かあったのか、と思っていると、突然井の頭が「あ、」と呟き、ガバっと、頭を上げ、こちらを見た。いきなり動くと、びつくりするぞ、友よ。

「え？赤石君、——すぐ、戻って、テントに、今日は皆が起きるまでテントから出さないで。それで寝たふりして。きつと、女子の誰か、……櫛田さん、じゃなくて、たぶん篠原さんが騒ぎ出すから、それまで寝るか、寝たふりをして。それで、きつと、ずっと掴めなかった流れが掴める。きつと、勝てる」

それだけ言うと、井の頭は、まるで話が終わったという風に、彼女のテントに戻っていった。まったく分からないが、……ここは友を信じよう。

俺は、素早くテントに戻り、狸寝入りに入った。

時刻は6時40分、本来であれば、外に出て食料を一人で事前探索をし、午前中の櫛田班への準備に備える時間。そんな時間でも、未だ

俺はテントの中で横になっていた。うーむ、井の頭の指示によりテントに戻ってみたものの、特に何かが起こる様子もない。はて、友の計算間違いだろうか。適当に欠伸をすると、突然、外がざわつき出した。うん？

それら、しばらくの間、ドタバタ音がして、そして、なんと、井の頭の予想通り、篠原の声が外から響いてきた。うわ、預言者。

「ちよつと、男子、集まってもらえるっ！」

なんじゃ、なんじゃ、と男子たちが少しづつ起き上がりテントの外に出ていく。見ると平田が篠原と何か話し合っている。また、テントの外には篠原だけではなく、女子が10人ほど雁首を並べていた。

うん？と思いつつも聞き耳をたてると、どうも、軽井沢の下着が盗まれたらしい。そりゃ、何というか、凄い事件だ。なんたって、あの軽井沢だ。Dクラスの女王にして、カースト頂点、そして、溢れ出る虐めっ子オーラ、コイツの下着を盗った度胸も凄いし、コイツの下着にしたという方向性も凄い。

なんでよりによって軽井沢の下着なんだ？布切れにバラして売るなら、どの生徒でもいいだろうから、態々危険な軽井沢を選ぶ必要はないし、ましてや、そういう目的に使うのなら、もっと魅力的な女子がDクラスにはいるだろう。

いや、まあ、軽井沢も見た目は可愛いし、軽井沢のような女王様タイプから奪った方が良いと考えている性癖の人かもしれないが……いや、軽井沢みたいなタイプは敵も作るし、性欲的な理由ではなく憎悪的な理由での犯行かもしれない。それなら犯人は女子の可能性もある。まあ、犯行動機はどうでもいいか。

適当に観察した感じ、出張ってきてるのは男子が言う所の女帝チームと傲慢チームの皆様だ。つまり軽井沢軍団と篠原軍団だ。櫛田たちは軽井沢を慰めているらしい。井の頭はきつと、また『何で、私はこんなアホなことをしているのだろうか』という顔を浮かべているに違いない。

……そういえば、井の頭は篠原が起こしに来るって言ってたな、他にも、今日はテントの中いろ、とも言っていた。ふむ。これは、間

違いなく井の頭は事件について、なんらかのアクションを起こしているようだが……

うーん、井の頭のポジションがいまいち分からないから、変に関わって井の頭の足を引っ張るのは良くないし、基本は静観でいいな。やることもないので、騒動をぼーっと、隣に立っている三宅と眺めていると、なんか、持ち物検査するみたいな話になった。犯人が自分の持ち物に隠すとは思えないが……んんん？持ち物検査……？

もしや、朝、俺が見た人影が犯人なのではないだろうか。あの時、俺達のテントの中には全員いた。もし、あの人影が犯人であれば、その目的は……やばいやばいやばい、こっちのテントの誰かの鞆に軽井沢の下着がある。これは120%間違いない。

いや、落ち着け、落ち着け、冷静になれ。冷静に、冷静に、自分の鞆の中に手をつつまみ中身を確認すればいいんだ。慌てると怪しい。本当に、自然に手をつつまめ。——クソ、持ち物検査の雰囲気的に、今、自分の鞆を漁ったら怪しまれる……どうする？

見た所、検査は平田と女子3名により行われる。男子は列をなして、検査を行う者どもの所に並んでいる。そして、その男子の列を、残りの女子が囲み、不審な行動がないかを監視している感じだ。ちなみに平田は最初に鞆を差し出した事で疑いが晴れている(イケメンで完璧なリーダーだから、そもそも疑われていないだけのような気もするが……)。

現在の並びは7名。メンバーはこちらのテントに所属しているものだ。そして、隣の三宅が動き、彼が列の最後尾についた。雰囲氣的に、俺が並ばないと不自然なため、仕方なく三宅の後ろにつく。クソ、前の検査が次々と終わっていき、並びは5名となった。こちら側のテントの最後の一人が俺の後ろに並び、その後ろに隣のテントの本堂が並ぶ。並んでいく感じから最後は山内や綾小路あたりになりそうだな。

まあ、いい、とにかく俺のやることは、三宅が持ち物チェックの為に鞆を開けるのに合わせて、鞆を開け、周囲の女子にバレないように鞆の中身をチェック。もし下着があつたら、片手で握り潰し、ポケッ

トに突っ込む。

……できるのか？ポケットに突っ込むのは不審すぎるよな……どうする……いや、落ち着け、俺の鞆にあるとは限らない。確率は10分の1だ。もうこちらのテントで6人がセーフになってるけど、確率は10分の1だ。決して4分の1じゃない。やめろ、俺は現実を見たくないんだ。

あ、三宅が鞆を開けた！俺も彼の動作に合わせて、ふくそろそろ鞆を開けるかねくめんどいぜー、といった雰囲気を出しながら、鞆を少しずつ開ける……堀北のヤツ、俺の事をガン見してやがる……あいつ、俺の何が気に食わないんだ……おのれえ、許さん。貴様の就職先も綺麗にしてやろうか？

——お、堀北が視線を外した！どうやら、どちらが真の強者か分かったようだな……よーし、鞆を開けて……市橋・前園、貴様ら誰を見ている！俺を疑っているのか！こっちを見るんじゃない！見るなら他のやつにしろー！勉強会での教えを忘れたかー！恩知らずどもめ!!

クソ、こうなれば監視下であろうとやるしかない。不審にならないように、チツ、チャツクが詰まったぜという風な演出を行い、手を突っ込み中身を漁る……結果は。セーフ。ふく、ビビらせやがって。まあ、確率は10分の1ですし、俺じゃないって分かかってましたけどね。しかし、そうすると誰の鞆だろうか。

ここまで軽井沢の下着は見つかっていない。お、三宅の番だ。前にいるのは三宅と、検査役の平田と女子三人——松下、篠原、長谷部という珍しい組み合わせだ。というか、なんか違和感。あー、分かった、この三人共通点がないんだ。というか、たぶん、あれだ。これ、Dクラスの三派閥の女子一人ずつだ。

うーん、やつぱりDの女子の謎の連携は怖いな。派閥長の三人である軽井沢・篠原・櫛田には、これからも定期的に媚を売っておこう。

三宅の持ち物を調べる平田の表情は検査が始まるときと同じ顔だ、まるで祈るような、聖職者のような顔といえはいいのだろうか。

やつぱり彼はDクラス一の聖人である。ガールフレンドの下着が

盗られても怒るのではなく、皆の安息を祈るその姿には、信仰心に欠ける俺でも、この世に神がいるのではないかと思わせてくれる。そういえば、平田って昔からこうなのかな。まあ、根っからの聖人っぽいし、中学校の頃からこんな感じなのだろう。すぐ手が出る綾小路や堀北、すぐ声を上げる篠原などとは絶対に違うタイプだろう。きつと中学校の時から、穏やかで、暴力性など欠片も無い立派な人だったのだろう。間違いない。

ちなみに他の四者の表情は、この四人の人間模様を分かりやすく伝えてくれる。篠原は平田の近くで持ち物を詳しく調べている。結構疑っている雰囲気だ。疑い60%って感じだ。実質こつちが検査官だ。松下は、三宅の一挙一動を観察している。疑い50%って感じだ。長谷部は緊張しているものの、三宅に向ける眼差しに疑念のようなものは見えない。疑い0%だ。ちよつと意外だ。長谷部は結構きついイメージがあったが……まあ、船室での一件を考えると三宅と長谷部はただならぬ仲のようだから、信頼しているのだろう。

……最後の三宅は若干緊張しつつもリラックスしている。コイツの鞄にはないだろうな。ということとは、可哀そうに……ババを引いたのは俺の後ろの男子だ。まあ、名前を伏せていたが、正直に言おう、幸村だ。

さようなら、幸村、お前のことは忘れないよ。お前は絶対冤罪だと思うし、きつと平田もお前のことを信じると思うけど、間違いない女の子のほぼ全てと男子の多くはお前の事を軽井沢から下着を盗った野郎だと思うよ。でも、俺だけはお前が冤罪であることを記憶しておくから……怖いから、庇わないけど。すまない。許してくれ。

幸村への別れを告げ終わると三宅の荷物検査が終わり俺の番になる。

平田と篠原の前に開いた鞄を差し出す。平田は祈りながらも中を探る。疑い0%、緊張99%って感じだ。さっきより緊張してない？平田的には三宅より俺の鞄にあると思うてるの？ちよつとシヨックなんだけど……

篠原は、やはり俺と篠原の仲だ。この無人島生活では食料班・料理班と近い任務を帯び、過去には一緒にAクラスを襲撃した仲だ。俺を疑うことはあるまい。うむ、疑い30%って感じた。おい、0%じゃねーのかよ。何疑ってんだよ。俺らの絆はどこへ行った？まあ、三宅の半分だと思えば、篠原的にはだいたい譲歩したと言えるのかもしれないが……

ゴソゴソと中身を見る二人に体を向けながらも、なんとなく気になり、一瞬だけ松下と長谷部をチラ見する。松下はさつきと同じだ。疑い50%。コイツ結構ぶれないよな……冷静って言えばいいのか。さすが軽井沢の懐刀って感じた。

そして長谷部は疑い90%って感じた。いや、なんでだよ。俺は長谷部とあんまり話したこと無いけど、男子の殆どは長谷部と話したこととは無いはずだ。おかしいだろ。何でこんな疑ってるんだよ。というか、パーセンテージの合計とったら、三宅より俺の方が疑わしいのかよ……まあ、確かに三宅は欲が少なそうな顔してるけどさ。なんかおかしくない？大半は長谷部のせいなんだけどさ。

色々と考えさせられた人間関係であるが、篠原が検査に満足したため、俺も晴れて無罪メンバーの仲間入りとなった。そして幸村の番だ。せめて祈りは捧げよう。

荷物検査は続き、現在、池君の番だ。幸村？無罪メンバーだよ。あれーって感じだけど、うん、たぶんアレだ。きつと朝の出来事は俺の勘違いだ。もしくは、軽井沢下着事件とは無関係だ。

うん、まあ、いいや、実況に戻ろう。残りは池君、山内、綾小路だ。池君には今後も焚き火を頑張って欲しいので、できれば彼でないことを祈りたい。

池君は、何度も後ろにいる山内や綾小路の方を振り返りながらも、篠原に鞆を差し出した。綾小路たちは、どういうつもりか、テント前でなんかゴソゴソしている。なんかあったのか？もしや……いや、ま

あ、いい、池君の方に視点を戻そう。

篠原は疑い80%って感じた。うーん、調理班のリーダーと焚き火班のリーダーとして、二人はそこそこ仲が改善されていたように見えただが……

松下はいつも通り、疑い50%だ。コイツは殆どの男子に対して疑い50%って感じた。良く言えば差別しない。悪く言うと、全ての男子を疑っているって感じだろうか。長谷部は疑い70%って感じた。俺よりは甘い配点に見える。というか、コイツ、露骨に俺にだけ疑いの視線を向けていたぞ……

まあ、全体的に疑い指数が高い池君であったが、鞆からは軽井沢の下着は見つからなかった。なお、篠原や松下からは「鞆の中に隠してない？」とか、「なんで綾小路君たちとコソコソしてたの」などと尋問されていた。こういう風に平田以外の観察官は池君などの一部の男子に尋問を行っている。厳しいっすね。

池君が苦しみながらも勝ち取った無罪であったが、残った綾小路と山内はテントの前で蹲ってしまい中々来なかった。しかし、女子たちから激しい罵声を受けて山内がリング、もとい検査場に登った。そして、池君が受けた疑惑の眼差しと同等かそれ以上の視線と尋問を受けた山内であったが、彼の鞆からもブツは発見されなかった。

残った綾小路にほとんどの生徒の視線が突き刺さった。

綾小路さん。残念です。まあ、でも正直言うとな、俺は綾小路じゃないかなって、ちよつと思ってたんですよ。綾小路は堀北・櫛田相手に二股、その上、一之瀬様や佐倉にまで手を出しているような雰囲気があるのだ。顔は可愛い軽井沢を見て、やっちまうか、と考えたのかもしれない。さらば綾小路。

綾小路はこちらに来て、鞆が検められる。最後の一人だ。平田と篠原が慎重に中身を確認していく。長谷部は、明らかに、コイツだろうな、という視線を綾小路に向けている。が、なんと、発見されなかった。はて?と思っていると、篠原から厳しい一言が告げられた。

「さっきから、三人はコソコソして怪しかったよね」

はい、池君、山内、綾小路は身体検査されるようですね。なるほど、

やっぱり綾小路も俺と同じことを考えていたようだ。いや、まあ、池君や山内、もしくは俺の先ほどの推論通り、幸村、はたまた三宅という可能性もあるが……

三人は身体検査を渋っていたものの、途中で、何を考えたのか、山内が「無罪を証明するためなら」などと言い、平田の前に立ち身体検査を受けた。山内の言葉を聞いた池君は顔を強張らせながら山内を見て、彼が何も持っていないことを平田から明らかにされると、今度は綾小路の方を見た。綾小路はいつも通りの無表情だ。

なんか、状況が分かってきたぞ。たぶん、この3人の誰かが、軽井沢の下着をゲットしてしまったのだ。そして、誰が隠すか揉めた結果、山内と綾小路のどちらかとなったのだろう。まあ、状況から綾小路が下着を保有している可能性が高い気がする。

間違いない、綾小路から軽井沢の下着が発見される。今度こそ、さらばだ、綾小路。

その後、身体検査の結果、Dクラスの男子に疑わしい者がいないと証明されたのであった。まあ、俺は信じてたけどね。勿論、綾小路のこともね。彼はDクラス一の参謀タッグであり最強タッグである片割れだ。こんな事はしないとってたよ。

しかし、そうすると誰がやったんだろうか。仮に男子じゃないとすると、まあ女子ということになるが……む、もはや。いや、まあ、これは仮定だが……いや、友も何か画策しているようだし、この考えは秘めていた方がいいか。

一旦検査大会は解散したものの、少し時間が経つと、再び平田による招集があった。女子は男子を未だに疑っているようで、女子のテントを男子から離したいという要望を告げてきた。

あと、軽井沢は意外な事にガチ泣きしたのか、目が真っ赤に腫れていた。うーん、軽井沢のイメージ的に怒り狂いながら襲い掛かってくる

るか、余裕の態度で周囲に精神攻撃するか、二択だと思ったが……
「ねえ、平田君、軽井沢さんのために手伝つてくれる？」

現在の議題は、女子がクラスの分断を主張し、それに男子が乗ってしまい、テントは女子が動かせよみたいな話になって、それで篠原が平田にテントを動かす助けを求めた感じだ。平田はこんな状況でも唯一女子から信頼があり、疑われていないようだ。

まあ、ある意味当然と言える。事態を静観すると、平田がそれを了承し、平田の重労働が確定したかと思つたが、そこで堀北が異議を唱えた。曰く、平田は信用できないとのことだ。

おいおいおい、コイツ死んだわ。当然軽井沢は激怒。まさかの軽井沢と堀北のレスバが見れるとは……野次馬根性で眺めていると、二人の議論はヒートアップしていき、精神攻撃の打ち合いとなつてきた。うーん、これ、俺らもう帰つて良くね？男子の半分くらいが、きつとそう思っているだろう。

堀北曰く、自分の彼氏である綾小路の方が信頼できるので、平田と一緒に作業させようとのことだ。ちよつと俺の主観が入つてしまつたかもしれない。それに対して、軽井沢は、綾小路はむつつりスケベ！と言いつつ放つた。

流れ弾に当たつた綾小路は苦しそうだった。やっぱり彼は見た目が可愛い女の子に弱いね。いや、まあそれは殆ど全ての男子生徒に当てはまる弱点だから仕方ないのだが。

ちなみに、俺はこの問答が行われた時に笑いを堪えるのに必死だった。だつてさ、むつつりスケベだよ。普段のクールさと堀北と路上でやつてしまったギャップを考えると、言い得て妙だろ。でも堪えたよ。だつて笑つたら間違ひなく謎技術でテントのシミにされるからね。命がかかっているから俺も必死だよ。

平田の援護もあり、結局、綾小路もテント移動に参加することになった。お疲れ様です。

綾小路たちがテントを動かしている一方で、他の男子は何をしているかというところ、何もしていなかった。男子の移動は許可されず、午前中はテントの近くで男子は集まり、それを女子が数名で監視にあたっている状態だ。刑務所かな？

ちなみに女子は普通に移動が認められていた模様。女子が犯人かもしれないだろ、と多くの男子が反論したものの、軽井沢軍団が睨みをきかせた結果、男子の意見は黙殺された。平田は女子を説得していたが、残念ながら上手くいかなかったようだ。

ううむ、これは一種のクーデターと言える。クソ、やはり武闘派は危険だ。平田の制御すら効かないとなると、軽井沢への今後の媚売り活動を強化する必要があるかもしれない……しかし、俺と軽井沢は相性があまり良くない。なんだって、平和主義者の凡人と超絶虐めっ子のカースト女王だ。交渉に一步間違えれば、奴隷階級にまで墮とされそう。ひえ、軽井沢怖い。

食料探索にも行けないので、午前中はやる事もなかった。疑心暗鬼に包まれたクラスでは会話も少なく、時折される会話は、男子の、『女子が悪いよー』という内容であり、二、三ワード話したあたりで、監視にあたってる女子がイチヤモンを付けてきて、会話が終わる。その繰り返しだ。やっぱり刑務所かな？

そして馬鹿みたいな話だが、今回、無人島生活にあたって、初日以来初めての昼食抜きだ。理由は食料探索を行えない為の食料切れだ。これ餓死するまで続けるのか？と思っていたが、さすがにそんなことは無かった。平田と綾小路によるテント移設が終わったからだ。お疲れさまでした。

どうも、現状、女子のスタンスは交渉には平田を使わなくてはならず、男子と何かを協力するにも平田を経由する必要がある、彼の作業が終わるまで、男子と上手く話せず監視していたようだ。いや、だったらテント移設に平田を使うなよ……何もやってない俺が言うことでもないだろうが、さすがにアホすぎませんかね。

まあ、それも、このクラスの平田依存度が高すぎるのが原因か。……平田一極体制の構想を考えたのは俺だし、結局、原因の一部は俺

にあるかもしれないが……。まあ、いいや、こういうこともあるね、しょうがない。俺のせいじゃない、俺のせいじゃない。

平田の訴えもあり、臨時に食料班を編成することになったが……。この編成は揉めに揉めた。俺としては、植生を知っている俺と、あと場数があり指揮力もある櫛田がいれば、残りはどうでも良かったのだが、男子女子ともに、誰がベースキャンプに残るか、誰がベースキャンプから離れるかを議論した。

男子の多数は退屈な刑務所ベースキャンプよりも外で食料探索をすることを望んだ。池君や山内は熱心に自分の有用性について訴え、幸村などの非アクティブ系男子も退屈が過ぎたのか自分がやると立候補していた。もう、希望者全員参加でいいんじゃない？

一方で、女子の方は統率が取れており、三派閥のリーダーが車座になり話をしていった。各リーダーの後ろに構成員が集まっているあたり、どう鼻真目に見てもヤクザの会合にしか見えなかった。

時折、「ベースキャンプに誰が残るか分からないから、男子のメンバーが決まってから決めた方がいいんじゃない？」とか、「でも、絶対探索には行かせちゃいけない男子がいるよね」とか、「うん、賛成、ベースキャンプにちゃんと繋いでおかないと何するか分からないし」などという声が聞こえてきた。おい、それ俺のことじゃないだろうな。

なお、こんな時でも佐倉と堀北は話し合いには参加していなかった。佐倉は女子の集団から少し離れたところに座っており、堀北は、嫌悪と侮蔑の眼差しで女子の集団を見ていた。なんとも平常運転である。

その後、男子の間で、熾烈なジャンケン大会が行われた。平田・三宅・綾小路以外全員が参加した。ちなみに俺は負けた。まさかの敗北である。いや、俺も頑張ったのだ、自分は食料班に所属していたし、経験で他の男子に勝っているとアピールしたりすることで、Dクラスへの貢献度を示したのに、残念ながら、話し合いではなくジャンケン大会になってしまったのだ。道理が通らぬ世の中である。

しかし、ジャンケン大会が終わった後も過酷な現実が待っていた。

ジャンケンで勝者10人が決まるや否や、軽井沢を中心とした女子が編成に口出しに来たのだ。

例えば「平田君も一緒に食料班に参加してほしい」とか、「山内君は役に立たなそうだからベースキャンプに残ってよ」とか、「須藤君は力があるんだから、食料班に参加して」などだ。これジャンケンした意味ねーじゃん。男子は反論するも、暴れまわる軽井沢軍団には敵わず、結局は女子の希望を全て受け入れた編成となった。

これにより、最終的に男子は平田を中心に11名が参加した。一方女子は10名となり、計21名のメンバーが参加することになった。食料班の歴代最高人数更新である。というか、大所帯すぎる。

ちなみに、居残り組は、男子は、俺、三宅、綾小路、池君、山内、本堂、外村、幸村であり、女子は櫛田、井の頭、王、小野寺、長谷部、篠原、市橋、前園、堀北、佐倉、伊吹となった。うーむ、良く分からん組み合わせだ。一応、派閥で別れているみたいだが……あ、いや、篠原たちは調理班か。まあ、搬入手順などを考えると、調理班は残った方がいいだろう。うん、さりげなく焚き火班も全員残っている。結構、女子による編成介入は合理的だったかもしれない……いや、じゃあなんで食料班のリーダーであった櫛田とナビゲーターであった俺が参加できないんだ？ やっぱり適当なんじゃないのか……

まあ、仕方がないので、平田たちの出発を見届けた後、再びテントの前に座る。役目がない男子は基本的に女子の監視が行き届く場所にいないといけないらしい。トイレどうすんの、と思ったが、さすがにそこは監視されないらしい。ムシヨよりはマシか……

しつつかし、他人に見られる環境というのはストレスを感じる。あーイライラするなー、と思いつつも、チラリと辺りを見る。看守、もとい、監視をしている女子はだいたい3人だ。1時間に1回交代があるようで、メンバーが変わっていく（当然、伊吹はメンバーに含まれていない）。

例外的に櫛田だけは常に看守を引き受けている。これは、最初、綾小路を合法的に監視するためかと思つたが、そういう訳ではなく、綾小路以外の男子とも関わる事で、男女間の溝を埋めようと頑張っている。

るように見えた。櫛田の表情にはあまり嫌悪感は見えず、男子の中に犯人がいると思っていないのかもしれない。あと、もしかしたら、現状平田にしかできていない、男子と女子の交渉窓口になろうとしているのかもしれない。分断が進んでいるDクラスにとっては、とても立派な行動だと思う。俺にはとてもできない。

現在の看守、じゃなくて監視役は櫛田、前園、堀北だ。強そう。

勇気が乏しい俺は、ブルブルとテントの近くで震えながら、目を付けられないようにする。前園も絡まれると面倒なタイプだが、なんといつても堀北と櫛田が同時に看守になっているのだ。これは危険だ。どっちかと会話すると、間違いなく大変な事になるぞ。綾小路、お前に言っているんだぞ。

いや、まあ綾小路以外の男子でも、どちらかと話すと、もう片方から敵認定されそうな雰囲気があるから、なんとも言えないが……一応、櫛田は堀北の事を気に入っている可能性もあるから、堀北と話の方が安牌かな？まあ、堀北と話すと、煽られまくるから、男子どころか女子も彼女とは会話したくないけどね。

「綾小路君、どうしてジャンケンに参加しなかったの？」

おっと、しかし、何という事でしょう。櫛田が綾小路に話しかけてしまいました。これは大変な事になるでしょう。おっと、危険です。堀北がこちら、つまり綾小路をガン見しています。これは困った。完全に位置取りを間違えた。

クソ、綾小路がテントの傍に座ってるから、俺まで巻き添えを食らってしまう。よし、避難するか。そろりと立ち上がり移動すると、ちょうど堀北がこちらが側、つまり綾小路の方へと近寄って来るのが見えた。あばよ。綾小路。

「クラスには貢献したかったが、やりたい奴がいるなら、そいつにやつて貰った方が良いと思ってな……」

「あはは、綾小路君らしいね」

「そういう櫛田は何で参加しなかったんだ？」

櫛田と綾小路が会話しているのを尻目にそのまま、そそくさと離れ

ると、またしても腕を掴まれた。やめろ、綾小路、修羅場へはお前一人で行けと思ひ、振り返ると、堀北がいた。おい、何で俺を掴む。お前は綾小路を櫛田から奪い返すのが使命だろ。いいのか、今めっちゃ話してるぞ。アレ止めないと、櫛田に綾小路を取られるぞ。

「何処へ行くつもり？」

お前らが存在しないところ。

「堀北さん。あの、トイレに行きたかったのですが……放してもらえませんか？」

堀北は訝し気に、こちらを見た。そして、たつぷり十数秒かけて、俺の方をジロジロと観察すると、

「そう……分かったわ」

と言ひ、堀北は腕を放した。変に間を取りやがって。大物気取りがっ。ぺっ。だが手を放したのなら、こっちのものだ。しめしめ、と思ひ、綾小路たち三人から距離を取るため、トイレに向かう。まあ、実際は嘘なのだが……一応トイレに入って、少し時間を置いた後、出る。手を洗い終えた所で、また、がしり、と腕を掴まれた。

「用事は済んだかしら？」

……いや、綾小路の所にいけよ。ここからじゃ視界が通らないし、声も聞こえないけど、きつと今櫛田とイチヤイチャしているよ。邪魔しないマジで正妻のポジションを櫛田に取られるぞ。無関係な男子を煽ってる暇はないぞ。

「ええっと、まあ、済みました。あ、堀北さんもトイレでしたか？俺は戻りますね……すみません」

適当な事を言つて、逃げようとするも、堀北は掴んだ腕を放す気配はない。それどころか、ベースキャンから離れる方向へと進みだした。おい、放せ。お前は今までに俺の腕を掴んだ回数（手を握った回数はカウントしない）を憶えているか？たぶん歴代一位になったぞ。大変不名誉なことだぞ。

数分歩いたところで、堀北は歩みを止めたが、腕は放さず、未だに、がっしりと握っている。

「私はあなたに質問、いえ、尋問したいことがあるわ」

俺には無いよ。というか、言い直すな。悪化してるぞ。

「ええっと、その、——」

「——まず、最初に、軽井沢さんの下着を盗んだのは貴方かしら?」
「違えよ。というか、話を最後まで聞け。人の台詞に被せるな。」

「違います」

「……昨日も言ったけれど、貴方は私に隷属する立場よ。後で虚偽が判明した場合は叛逆行為として厳しく罰するから、そのつもりで答えなさい」

コイツ、さては、俺の事を疑っているな……本当に、何で俺なんだよ。いや、もしかしたら、疑っているのではなく、精神攻撃をしたいのかもしれない。

より具体的に言うと、堀北は櫛田と仲が良い男子全員をトイレ近くで一人一人絞めてるのかもしれない。真つ当に自分を磨いて綾小路にアタックしろよ。なんでライバルを攻撃してるんだよ。しかも本人ではなくライバルの近くの人間を攻撃とか、迂遠すぎるぞ。もつとちゃんと騎士道精神を持て。

「嘘のつもりはないのですが……変な言い方になりますが、俺は平田君とも仲が良いと思ってますし、客観的に見ても、俺が犯人である可能性は低いと思っっているのですが……」

わりと本音である。まあ、堀北には関係ないんだろうけどね。この少女、優秀だと思っていたが、綾小路が絡むと、判断が感情的で無茶苦茶だな。

「そうかしら? 私から見れば、貴方は十分に怪しいわね。少なくとも3割以上の可能性があると思っっているわ」

正直だな! というか、3割なのか……打率で考えればかなり良いと思うが、ここまで『疑ってます』みたいな顔をしている堀北が言うには低すぎる気がする。もつと怪しくなっただから、相手を責めてくれ。捜査というのは疑ってかかってやっちゃいけないし、間違えていたらごめんなさいで済まないんだよ。

「えっと、その、何と言いますか、7割方、俺ではないと思っっているってことですよ?」

『クラスメイトを信じろ』という思いを込めて発言するも、堀北は俺の言葉をガン無視し、次の質問を投げてきた。おい、会話しろ。

「次の質問に移るわね。貴方はさっき、私と目が合うと、まるで逃げるように移動しようとしたけれど……それは何故かしら？ 疾しい事が無いなら説明できるわよね」

俺はただ、お前らの修羅場に巻き込まれたくないだけなんだけど。「トイレに行きたくなった時にトイレに行っただけなのですが……」

堀北は殺意の籠った視線でこちらを睨んだ。怖いからやめろ。

「……真面目に答える気が無いようね。そういう態度を取るのなら、貴方の怠慢と命令への不服従を榊田さんに相談するわ。せいぜい、彼女からの懲罰を受けた後に、私に謝罪する文面でも考えておきなさい」

悪口やめろ。まあ、俺も榊田にやったけど……それをやっていいのは俺だけだよ。お前がやっちゃ駄目だよ。せつかくの媚売りが台無しになったらどうするんだボケ！

いや、恋敵の意見なら榊田もあまり重視しない可能性もあるか？

……待てよ、榊田は、結構、堀北の事を内心気に入っている可能性が出てきたし、ちよつと危険か？

「……怠慢ですか。そのようなつもりは無いのですが……どうも、俺は堀北さんを不快にさせてしまったみたいですね。すみません」

ごめんね。だから悪口は止めようね。俺も無人島にいる間は堀北の悪口で榊田と盛り上がりたくないようにするから、止めようね。

自分なりに誠意を込めた謝罪だったが堀北には伝わらず、彼女はこちらに軽蔑の視線を流した後、俺の腕をようやく放した。そして、俺の方を見向きもせず歩き出した。しかし、数歩、歩いたところで止まり、振り返った。いや、そのまま見向きもせずに進んでくれよ。止まるんじやねえぞ。

「何をやっているの？」

そんなキレ顔で言われても、反応に困るんだけど。

「はっ？」

思わず、久々に、感情をそのまま乗せて、言葉を発してしまった。対

する堀北は、左手で僅かに、彼女自身の額を触った。

「ベースキャンプに戻るわよ。来ないようなら、腕を引き摺って行く事になるわ。私はそれでも良いけれど」

とりあえず、堀北に従ってベースキャンプに戻った。まるで看守に従う囚人だ。やっぱりここは刑務所だ。

その後も何度も看守の交代を見ながら、食料班の到着を待った。結局、櫛田は常時看守であった。彼女は、俺以外の男子全員と会話したようだ。こんな状況下で立派な志である。なんで俺は省かれたんだろう……まあ、別に櫛田と話をしたいわけではないから、問題は無いのだが。

なお、堀北は看守になるたびに、こつちをガン見していた。精神的に疲労するから止めて欲しいのだが……そういえば、結局、井の頭と王は看守にならなかったな。まあ、あの二人の雰囲気的に監視役は難しいか……

夕方になり食料班が帰還した。櫛田がいなかったため不安視していた食料班であったが案の定、成果は歴代最低であった。

櫛田の代わりに平田が入ったものの、食料班としての適性は櫛田が上だったのか、はたまた、人数が多すぎて統率が困難だったのか、もしくは、他のメンバーが足を引っ張ったのか、理由は定かではないが、彼らは僅かな食料とともに険悪とした空気を出しながら、ベースキャンプに戻ってきたのだった。

一応、平田が説得したこともあり、女子だけで構成される調理班の料理を男子も食べることが許された。とはいっても、食料班の成果が芳しくないため、量は今までの三分の一程度だ。まあ、こんな状況なら食べられるだけマシとも言えるだろうけど。

なお、未だに男子と女子のゾーンは境界線によって分けられており、女子も男子も器用にその線を超えないように振舞っていた。まあ

櫛田や平田・綾小路のように境界線を越えることができる生徒もいるが……

夜の点呼を終えると、綾小路が看守の女子に絡まれ、テントの移設に従事させられていた。女子生徒と綾小路のやり取りは、まさに看守と囚人のやり取りそのものだった。うーん、強制労働までであるとは……やはりここは刑務所であつたか。

クラスの分断が始まったが、なんとか、この日はまだクラスとしての名目が保たれていた。ただ、唯一良かった点としては本日も脱落者がいないことだ。とてもよいことだと思う。俺卒業したら世界一クリーンな企業作るんだ！

大混乱

6日目の朝となった。いつも通りの起床時間だが、今日は俺より先に平田が起きたようだ。先日の事件による二次被害——つまり男子の信用問題が原因だろう。平田としては男子を疑いたくないが、女子が疑っている以上、これ以上の論争を防ぐため、朝からベースキャンプを見守ることにしたのである。女子は平田がいれば安心であるし、男子も平田の傍で活動すれば、何かあった時に平田が庇ってくれるため、有難いことである。まあ、平田の体力と精神力がその分浪費されるが……うーん、これは平田一極体制を煽った俺にも責任があるな。どうしたものか。平田はかなり良いヤツだし、あまり彼に苦痛を強いたくはないが。うーむ。

ほどほどの所で起床し、すっかり量が減ってしまった朝食を食べ今日の方針を考える。井の頭との会談はおそらく試験終了まで困難だろう。平田はかなり精力的に働いているため、ギリギリクラスが成り立っているが、昨日の朝から食料の不足が響き始めたためか、皆ピリピリし始めている。何か一つ爆弾が降ってきたら、Dクラスは離散するだろう。本当にどうしようか……やはり個人的には食料が必要ない気がする。下着事件のせいで、食料が減り、それが皆の士気を下げている。ここは食料を回収し、明日の試験終了まで士気を持たせることが必要だろう。クソ、やっぱりこういう協力ガチ系の試験は苦手だ。あと、俺の長所がまったく活かせない試験も嫌いだ。つまり無人島試験は糞だ。

朝食後に食料班の編成が行われた。女子はいつも通り車座に、男子は適当に、それぞれ話し合った。男子の方は、昨日の探索で、大人数を用いたにも関わらず、全然手に入らなかったことから、意欲が下がっており、昨日参加したメンバーは全員不参加であった。君たち極端すぎないか……？平田はベースキャンプに残る必要があるため、メンバーは綾小路、山内、俺となった。女子の方もなんかごちゃごちゃしていたが、最終的に櫛田と軽井沢の二人がこつちに来た。派閥長二人とか、迫力やべーぞ。というか、お前らヤクザの頭でしょ。単独行

動しているのか。護衛はなくて大丈夫か？

しかし、そう思っていると、櫛田は山内たちの方へ、軽井沢はこちらの方へ歩いてきた。え？なんすか、女王陛下。俺は当然、陛下の下着が盗まれたことに誠に遺憾の意を示しております。……もしや、堀北、アイツ、軽井沢にチクつたんじゃないだろうな。それだけはマジでやめろよ。俺のDクラス生活が終わるだろ。もしそうだったら、お前には2・0高円寺クラスの報復行為をせざるを得ない。

「赤石君、ちよつといい？」

違います、女王陛下。堀北めの讒言にございまする。あやつは奸臣ですぞ。信じてはなりません。

「はい、なんでしようか、軽井沢さん」

ゆつくりと喋り軽井沢を観察する。どうも怒っている感じや下着泥棒を発見したような雰囲気を出してはいないように見える。なんだ、俺を疑ってるんじゃないのか。ふー、良かった。ビビらせやがって、女王気取りが。

「あのさ、ベースキャンプに赤石君も残ってくれない？ほら、今は少しでも信頼できる男子が必要じゃん。平田君以外だと、さ」

そう言いながら、軽井沢は、虐めっ子特有の同調を強いるような、残酷性の強い笑みを浮かべた。ひえ。あ、あの、龍園が、龍園が女王気取りとか言っていました……

それにしても軽井沢は本当に怖い。見た目が整っているから怖い顔の迫力も二倍だ。

「確かに平田君も忙しそうですね……ただ、食料班も今回は少ないようですし、俺も同行した方が、と思っっているのですが……」

反論して、すぐ後悔した。軽井沢が苛立ったような顔になったからだ。ひえ、軽井沢怖い。コイツはいつたい中学時代に何人の生徒を虐めてきたのだろう。怖くて想像もできない。

「えー、櫛田さんがいるし、大丈夫っしょ、それとも、何？平田君を手伝うの……嫌なの？赤石君って平田君の友達でしょ」

声にも苛立ちが多く含まれる。おいおいおい、俺死んだわ。

「そ、そうですね、櫛田さんがいる以上大丈夫ですね。一応、櫛田さん

たちに伝えておきますね」

怖いので、とりあえず、軽井沢の下を離れて櫛田の下へ向かう。当然参加できないことを伝えるためだ。すまん、櫛田。一応、櫛田が相手なので、おそらくまだ物資が残っている地点の情報を教えておこうと思う。

「いいって、いいって、私が櫛田さんにはもう伝えたからさ。それより一緒に平田君のところ、行こうよ」

軽井沢に袖を掴まれた俺は、ビビッて動けなかった。すまん、櫛田。情報は無しだ。

その後、泣く泣く、軽井沢により平田の下まで連行された。食料探索班は俺が欠けたことが影響したのか、新たに堀北と佐倉と伊吹が加わっていた。前者二人に対するツツコミはもう疲れるので、最後の一人に関してのみツツコむ。まさかの伊吹の活用である。……俺は、伊吹はさる理由から起用すべきではないと、思うのだが……いや、まあ、それは俺の妄想かもしれないが、でも堀北と一緒にするのはどうなんだ？ちよつと危険じゃないか、と思ったが、既に軽井沢により拘束された俺にできることは無かった。なんかあつたら軽井沢のせいだからな。

午前中は適当に平田の補佐をしつつ時間を潰していく。ちなみに王は生理でぶっ倒れたらしい。今櫛田以外の櫛田組のメンバーが彼女を介抱しているようだ。井の頭もその一人のようだ。まあ、リタイアできないし、こんな状況だと傍で支えるしかないのだが……しかし生理現象によるリタイアも減点とは、やっぱり、この学校はなかなかキメてるな。まあ、先天的な病で参加できない生徒の分でさえ減点するイカレた学校だから、生理で驚くべきではないかもしれないが……いや、そんな、イカレた学校だから、入学を決めた俺が指摘できることでもないか。

適当な事を考えていると、業務をそこそこ終え、昼になった。平田

から補佐したことに対する感謝を貰い、その後、調理班の市橋に、これから帰還する食料班の搬入を手伝えと言われたため、食料班を待つことになった。数分ほどして櫛田たちが戻ってきた。彼らは、比較的無事に帰還したものの、人数が少なかつたためか、あまり食料は持っていないかった。まあ、あるだけマシである。あと、なんか堀北だけは川へ水浴びにいったらしい。お前、リーダーなんだけど、なんで単独行動してるの？まあ、さすがに単独行動するときに自分でリーダーカードを持つのは危険だろうし、きつと誰かに預けただろうが……ぶつちやけ堀北の交友関係から考えると綾小路が今持つてると考えるのが自然だな。鬼に金棒ならぬ、綾小路にリーダーカードだ。

まあ、しゃーないと、残ったメンバーで物資を搬入し、調理班の昼食の補佐をしていると、ガヤガヤとした騒ぎ声が聞こえてきた。また何か起こったのか……

平田が現場に駆けていくのを尻目に、あれ、平田と調理班、どっちの支援をすればいいのか、と思い、篠原を見ると、

「平田君が行ったから大丈夫じゃない。赤石君はこっち手伝ってよ」と言ってきたので、篠原の指示を聞くことにした。平田が向かった以上、多少のアクシデントは何とかなるだろう。

——この時は、そう、思っていた。

最初は雨だった。ポツリポツリと降り始めた雨は時間とともに大粒になっていった。そして、ようやく思い出した。そうだ！すっかり忘れていたが、試験六日目は無人島の天気予報システムから夜中から雨が降り、朝までには止んで、昼頃からまた降るんだった。すっかり忘れてた。これは失態である。一応言い訳すると、憶えることが多すぎたのと、何より先日の軽井沢下着事件が衝撃的すぎたのだ。まあ、言い訳しても仕方が無いので、この時のために作っておいた簡易シエルターを使い、食べ物や資材の保護を調理班と連携して行っていく。

うーん、コイツらとの連携はAクラス封鎖以来と思うと、なんとも言えない気分だ。

なんとか物資の保護を行い、食料の配給が始まったところで、平田君を手伝えよ、みたいなオーラを篠原から感じたため、仕方なく平田と合流した。聞くところによると、トイレ裏でマニュアルが燃やされていたらしい。また、それに伴い伊吹何某が失踪したようだ。やつぱりお前かよ。昨日から、ちよつと、お前じゃないかと思ってたんだよ。というか、堀北大丈夫かな？ タイミング的に何か怖いぞ……昨日の事件は友も一枚噛んでるから大丈夫だと思いが、心配になってきた。友よ、これも計画の一部なのか？ それとも誤算なのか？

そう考えていたからだろうか、作業中にテントから駆け出し女子とぶつかってしまった。

「きやつ、……す、すみません。赤石君、Bクラスのリーダーは白波千尋さんです。ごめんなさい」

そう言つて、俺に衝突した女子、井の頭心は素早く立ち去り調理班の元へと駆けて行った。

え？ 今、どさくさに紛れてBクラスにリーダーって言った？ 白波千尋ってアレか。ボーナスポイントの白波か。え、リーダーあいつなの？ 何で？ え、え、と混乱するが、これ以上体を不自然に止めるのは危険なので、考えるのを放棄し、平田の指示を思い出し動く。

うーん、Bのリーダーが白波とは。偶然だが、彼女は次の試験の船上試験で優待者なのだ。そして、彼女は俺と同じグループ。つまりBクラスの足を引っ張ることになってしまうのだ。そういえば船にいた時、白波に絡まれたな……なんの関係もないだろうけど、因果のよなものを感じてしまう。

昼飯後、雨脚が強くなり、午後の食料探索班の編成は困難になった。これで食料事情がまた厳しくなった。

さらにマニュアル燃やしの犯人捜しが行われた。俺は真つ先に逃げた伊吹が怪しい事を平田や篠原に進言するも、女子たちは、どうも昨日の出来事で蒔かれた不信感が完全に育ってしまい、男子の誰かがやった（幸い、俺の可能性は低いらしい）という方向に議論が進んで

しまった。平田は平田で、犯人捜し事態を拒み、伊吹論にも上手く乗ってはくれなかった。櫛田はこういう時は黙るタイプなので、俺以上に役に立たん。

また伊吹に次いで綾小路と堀北が姿を消したらしい。伊吹を追ったのだろうか……綾小路の謎技術で伊吹を捕らえ、Dクラスのベースキャンプにて、打ち首とするのは、とても良いアイディアだと思うが、堀北と一緒になのが気になるな。いや、まあ二人とも別件で消えた可能性もあるが、あの参謀タッグはいつも一緒だし、今回も一緒にいると考えるのが自然である。そして、状況的に目標は伊吹であろう。

待てど待てども雨は止まず、綾小路たちが伊吹を捕縛することもなかった。そして、周囲の不快な環境と、食料不足、リーダーの不在により不安、様々なことがDクラスを肉体的にも、精神的にも、追い詰めていった。

夕方になると、食料配分により論争が発生した。軽井沢軍団を中心とした女子は、男子に食わず飯はない、などと言い、ベースキャンプにある食料の確保を行った。これに対して一部の男子が反対活動を行うも、食料奪還は失敗。最終的に、須藤が池君と山内、本堂や宮本などを引き連れ、独自に食料の確保に向かった。

この雨では危険だと思い、平田と共に説得するが、当然無視され、平田と一緒に落ち込んだ。

1時間ほどして彼らは誰一人欠けることなく五体満足で帰ってきた。わずかばかりの食料もあり、それが今日の男子の食料になった。ちなみに平田・赤石の分は無いらしい。いや、まあ、お前らが命がけで取った食料だし、別にいいよ。というか、参加メンバー以外の男子にも分けているあたり（俺と平田は除く）、彼らも人が良い気がしてきた。

なんだかんだで、須藤は暴力的で、思慮が浅く、頭が悪い上、間が悪く、人の計画を無にする上に、ポイント損失まで発生させた男だが、

事性格に関しては、わりと良い面もあるのかもしれない。

夕飯には困ったが、まあ、人間は三週間くらいは食べなくても生きていけるらしいし、大丈夫だろう。それに明日になればまた船に戻るのだ。そこから三日間、英気を養ったのち船上試験だ。井の頭の言が正しければ、リーダー当て大会で100ポイント稼げる。綾小路と堀北が帰ってこないのが不安だが、さすがに点呼までには戻るだろう。明日の12時まで空腹を凌げば、後は素晴らしい大会結果を聞き、船で休み、ボーナスタイム船上試験だ。なーに、半日ぐらい腹ペコでも大丈夫ですよ！

そう覚悟を決めて、少し時間が経過し、時刻は午後7時、腹減った。腹減った。腹減った。いや、昨日から大したもの食べてないし、なんか今日、結構働いたから、腹減ったんだよ。腹減った。ちなみに平田はさつき女子から飯のようなものを渡されているように見えた。遠目だったため自信はない。いいっすね、人望のある人は……ベースキャンプの端でそう思いながら、座っていると、目の前に腕が差し出された。顔を上げると、櫛田がこちらに笑顔を見せていた。今までで見た櫛田の中で一番の笑顔に見える。煽りに来たんだったら、マジで綾小路さんにお前の悪口吹き込むぞ。この性悪が！

「赤石君、はい、これ……お腹空いてると思って持って来たんだ」

見ると、腕には料理が入っていた。よくやった！櫛田！やっぱりお前、良いヤツだな。というか、俺は櫛田のこと不安定とか言ったり、根は良い奴かもしれないと思っていたが、今回の無人島試験を通して、確信した。櫛田は基本的に良いヤツなんだ。たまに口軽かったり、日和見を決め込んだりするけど、コイツはいい奴なんだ。よくやった！櫛田！褒めてつかわす！

「櫛田さん、ありがとうございます。正直、お腹が空いていたので、助かります」

櫛田から受け取り、食す。量は少なかったが美味かった。よくやった！櫛田。――0.3高円寺だ。今度何かあったら、俺の許容範囲内で助けてやる。

「あはは、友達として当然だよ。でも……赤石君の分しか用意できなかったから、皆には内緒だよっ」

勿論だ。この状況で食い物をゲットしていたことがバレたら吊るされかねない。俺は危険な橋はあまり渡りたくないのだ。

櫛田から貰った飯を平らげ、椀を返した後（俺が返すと足がつくので、櫛田に返してもらった）、櫛田が飽きるまで雑談に付き合った。

なお、櫛田が去った後、運よく、王と市橋からそれぞれ別々に食料を恵んで貰った。

王は、ドヤ顔さらしてきたが、功績が大きいのです許した。どうも俺は王に友達判定を食らっているみたいだ。嬉しいような悲しいような複雑な心境だ。なおコイツは俺が皿を返す前に姿をくらましたため、皿を如何にして隠すか悩んでしまった。しかも、王が去って数分で市橋が来たもんだから、思わず皿を川に突っ込んでしまった。下流で助かった。ちなみに上手く川底に引っ掛けたので、市橋が去った後に川底から取り出し、洗った後、櫛田を使い王を呼び出してもらい返却した。

一方、最後に来た市橋に、なぜ食料を持って来たか尋ねたら意外な答えが返ってきた。どうも、勉強会と、今回の試験でたまに手伝った事への恩返しらしい。さすがじゃ、市橋、お前は真に義理堅い女だと、俺はずっと前から確信していたぞ……ただ、調理班所属故に、俺に食料を勝手に渡して大丈夫か、少し気になったので、聞いたところ、篠原と軽井沢の許可は貰ったらしい。その二人の許可が貰えるなら、もつと堂々と俺に配給しても良いのでは、と少しだけ思ったが、それはそれで、男子からの視線が大変な事になりそうなので、今回のようにこっそりと渡してもらおう方が助かる事に気づいたので、素直に感謝しておいた。

なお、市橋に、櫛田グループのヤツには黙っておけと言われた。いや、櫛田や王も食料の横流しをしたから、バレても大丈夫だと思うが……なんか面倒事に巻き込まれそうなので、「わかりました」とだけ言っておいた。

まあ、結果として二人分の一部（櫛田・王）と調理班の好意（市橋）の配給もあつたため、四日目までとはいかないものの、ここ二日の間ではかなり豪勢な食事になったと言える。ありがとう　櫛田・王・市橋、本当に……ありがとう。

清々しい気持ちで、点呼の20時を迎えた時、どうも違和感があつた。なんか人数が足りないのだ。はて？と思うと、どうも参謀タッグがいないらしい……おい、綾小路・堀北。何やってんだ。お前らのせいで10点減点だぞ。お前らふざけてるのか。点呼の時間を忘れるとは……いったいどこで油を売ってやがる。

そう思っていると、綾小路が1時間くらい経過してようやく帰還した。遅いぞ。しかし、堀北がいない。平田が綾小路に問いかけると、この無人島試験最後の爆弾が投下された。堀北が体調不良を理由に脱落したらしい。

え……………？

は……………？

は？

いや、お前、それはあり得ないだろ。もう二回目だから結構冷静だけれどさ、有り得ないだろ。堀北、お前……

てかさ、俺、気づいたんだけどさ、堀北は昨日まで元気だったじゃん。元気に煽ってたじゃん。つまり、今日いきなり不調になったわけだ。しかもだ。綾小路はなぜか点呼に遅れた。綾小路と堀北は午後ずつといなかった。そして、一昨日綾小路は六時間も姿を消している。

ここから導き出せる結論は、綾小路と堀北は島でやりタイ放題やってたって事だ。一昨日はやれそうな場所を綾小路が調べていたのだろう。ふざけやがって。誰だよこの二人が伊吹を追いかけてるって言ったのは。完全に伊吹どころかDクラスのことをガン無視で肉体運動に興じてるじゃねーか。その上、堀北がへばって体調不良とか笑えねーよ。頭が高円寺かよ。マジでふざけんな。遊びじゃねーんだよ。セックスしてんじゃねーよ。

敗北者

特別試験最終日。憂鬱とした気持ちで起きた。昨日の夜の綾小路の点呼遅れと堀北の脱落（どうも堀北は点呼の時間の少し前に脱落したので点呼遅れはしていないらしい）により、Dクラスの士気は落ち続けている。クラス全員で綾小路を磔にしろと盛り上がったものの、平田が庇ったため、結局綾小路への追求も有耶無耶になった。ちなみに今回、俺はだいぶ怒っていたので、思わず綾小路の方をガン見してしまった。ヤツも睨み返してきたが、いつもはビビッて退く俺でも、今回は怒りの感情を優先し睨み続けた。20秒くらいで、綾小路の方が視線を外した。俺は負けない。

昨日の夜でDクラスは全ての食料を使い切ったので、本日の食料はない。綾小路は昨日の昼から食べていないようなので、実質一日飯抜きだ。因果応報である。特にやる事も無いので、テントなどの片付け作業に従事した。片付け中に指示を出していた平田が失踪するとうアクシデントがあつたが、櫛田に聞いたところ、なんか綾小路と話があるらしく森へ行ったらしい。さては綾小路、昨日の失態の言い訳をする気だな……いや、まてよ、これはチャンスか。いつ話そうか悩んでいたが、俺はAとBのリーダーを知っているのだ。これを平田に報告したいが、今までは平田が忙しく機会が無かった。けれど、今、森に綾小路と平田は二人きりだ。綾小路が言い訳を終えた後に平田に話しかければ、他者に伝わるリスクなくリーダーの情報を渡すことができる……チャンスだ。

俺は、櫛田にちよつと平田に伝えたいことがある旨を伝えて、ベースキャンプを去り、綾小路たちが向かった森の中へと進んでいく。3分ほど歩いたあたりで、綾小路と出会った。ありや？平田は？

「おや、綾小路君。平田君は？」

お前、まさか口論に発展して平田を殴って気絶させちゃったんじゃないだろうな？

「……オレと平田が一緒だと、何で知ってるんだ？」

なんか苛立ってるな……まさか本当に殴ったのか？

「櫛田さんに聞いたら教えて貰えました」

素早く櫛田を売る。え？櫛田への恩？そんなの寝て覚めたら忘れたよ。第一、櫛田はこれまで綾小路を巡る三角関係で俺に八つ当たりしたり、堀北に煽られる原因を作ったんだよ。むしろ、こういう時、俺の盾になってくれないと困る。まあ、盾と言うと外聞が悪いかもしれないが、実際、櫛田に多くの功績を渡したのだから、このくらい良いかなって思っているのだ。櫛田は褒められると嬉しいタイプに見えるし、win-winの関係なんじゃないだろうか。

「そうか……平田なら、この先にまだいるぞ。何か用なのか？」

よし、平田は生きているようだ。よかったよかった。

「特に重要な要件ではありませんが……綾小路君こそ、平田君に何か用があったんですか？」

俺の案件について詮索されたくないの、卑儀『お前、平田に言い訳してたんだろ、知ってるぞ』を使うことにした。

「……、いや……、そうだな。お前の言う通りだ。………確かに、お互い、平田に重要な要件などないな」

効果は抜群だ。綾小路は早足にベースキャンプを目指して行った。堀北風に言うなら、せいぜい櫛田への媚売りをやってクラスメイトから守ってもらうんだな！

その後、平田に初日にAクラスとBクラスのリーダーが占有するところを見たと言った。Aは王の功績として、Bに関しては偶然、俺が見てしまった事にした。Bも王の功績にしたかったが、もし確認などがされた場合は不自然になると考え、断腸の思いで俺の功績にした。

平田は呆気にとられつつも口を開いた。

「ありがとう。赤石君。Aクラスのリーダーについては異論はないよ。ただ、Bも書くべきかな。堀北さんはBの一之瀬さんと同盟を結んでいるみたいだけど、君はどう思うかな？」

あー、やっぱりそこがネックだよ。一之瀬様は怖いけど……

「………こういう言い方は卑怯かもしれませんが、堀北さんが勝手に結

んだ同盟です。クラスの総意とは言えませんし、それに彼女は試験を降りた身です。第一、堀北さんは試験の上での名目上のリーダーというだけで、このクラスの指導者、代表としての意味なら、平田君です。堀北さんは頭が良くて判断力もありますが、皆の心をしっかりと分かっているのは、平田君です。それにAクラスを目指すなら、何時か必ずBと戦う時が来ます。堀北さんもそれは分かっているでしょう」
訥々と話しながら平田を観察するが、あまり好ましい回答は得られそうにない。一応、言葉を切らずにもう少し説得してみることにする。

「それと、……今回の試験でDクラスには亀裂が入っています。少しでもそれを癒すためには、今は多くのポイントが必要です」

しかし、平田の顔色は芳しくない。うーん、駄目っぽい。

「……いえ、勿論、決めるのは平田君で、あくまで、これは意見として、ですが……」

一応、念のため、お前が責任を取るんだぞ、と平田に含みをもたせる。俺はちよつと甘言、おつと、間違えた、諫言しただけだから。ちゃんとBのことを問い詰められたら、平田がリーダー名を書いたことを言うんだぞ。

「……うん、そうだね。確かに君の言う通りだと思う。……ただ、それだと同盟を取り付けてくれた堀北さんの名誉にかかわるよ。赤石君の気持ちは、本当に嬉しいけど。Bに関しては書かないことにするよ」

ちえ、失敗か……まあ、平田のこういう所は良い所だと思うし、別にいいんだけどね。なんか、井の頭にタダ働きさせてしまつて申し訳ない。今度謝つとこう。

「そうですか……分かりました。それなら俺はこれで」

そう言つて、平田に背を向けて、3歩ほど歩いたところで、鋭い声が後ろからかけられた。

「——っ、赤石君！」

え、何、なんかあるの？

「はい、まだ、何かありましたか？」

気になり振り向くと、何か、痛みを堪えるかの表情をした平田が目に入った。いや、何？

「実は、君に謝らなくてはいけない事があるんだ……」

その出だしは無茶苦茶怖いんだけど。何かあったの？

「ええつと何でしょう？」

「その前に、君は、今Dクラスが持つてるポイントがいくつか知っているかい？」

「確か……176ポイントでしたね。120のラインは完全に守り切れませんでしたね」

堀北と高円寺と綾小路がバカしなければ、241ポイント。Aへの攻撃が当たれば291ポイントだったのだ。あー、まったく、無能が3人もいると困るぜ。

「いや、実際は160ポイントだよ。……か、——いや、女子側のテントにマットと扇風機が配置されてる。それが2セットで合計16ポイント使ったんだ。僕もそれを許可した。女の子に無人島での生活は酷だと思ったからね。でも僕は男子には黙っていたんだ。余計な不和を呼んでしまうのではないかと思ったから。そして、献身的に僕やクラスのために貢献してくれた、君にも黙っていたんだ。……ごめんね」

駄目です。ポイントの無断使用は許しません。0.533高円寺です。いや、まあ苦勞を背負っている平田が悩んだ末のことなら別にいいけどさ。でもさ。これ絶対後で揉めるじゃん。俺だってポイントの使用状況について知ってたんだから、綾小路は当然として、幸村なんかも知ってるだろうし、絶対後で分かるやつじゃん。無人島の際は女子が男子に不信感を持つてたけど、船上試験の時は間違いなく逆転するぞ。どうするんだ……？俺が言うようなことじゃないけど、隠すならちゃんと隠せ。まさに姑息だ。その場しのぎだ。

「それは……何というか、残念です。……勇気を持って言ってくれた平田君にこんな事を言うべきではないかもしれませんが……」

途中で言葉を濁す。頑張つて、かなり苦しそうに言ってみた。まあ、実際、平田からの信頼度があまり高くなかったのは残念だ。もう

少し信頼されていたと思っていたのだが……平田を宿り木にするデメリットも増えてきたし、あんまりメリットが無いなら、無理に平田の参謀気取りをするのも良くはないな。実際、軽井沢軍団は誰にも止められないことが判明したし、軽井沢は怖いけど、篠原や櫛田相手ならそんなに怯えなくても大丈夫そうだし、いつそのこと宿り木チェンジもありかな……？あー、でも、盃は嫌だなー。

「——いや、何でも言っただけいい。君には言う権利があるはずだ」
マジで！何でも言っただけいいの！それなら……

「俺を信じてはくれなかったのに、堀北さんの同盟話は信じるんですね……一之瀬さんは確かに立派な人だと思いますが、他クラスです。Dクラスの利益は考えてくれないかと思いますが……」

まったく、それとこれとは話は別だけれど、関係ない、今はチャンスだ。Bクラスのリーダー当てをやって貰おう。今の平田は頼めばなんでもしてくれそうだし、我ながらゲスいが、構わない。失った16ポイントを取り返すどころか、お釣りがくる。なーに、堀北の信頼度が下がって、平田にちよつとばかり一之瀬様からのヘイトが向くだけですよ。心配いりません。俺にダメージが無いし、実質ノーダメ。ノーダメ。

「——っ………、……確かに君の言う通りだ。……ただ、Bクラスに関して、少し考えさせてほしい」

うーむ、平田はかなり悩んでいるようだ。ちよつと悪い事したかもしれない。でも、もし可能なら、Bクラスからポイントを奪ってほしい。「いえ、いいんです。クラスの舵取りをするのは平田君ですし、平田君にしかできないことですから」

あんまりBクラス攻撃論を押し過ぎて、梯子を外されると怖いしな……俺は一之瀬様に恨まれたくはないんだ。

「………リーダー当てまでもう少し時間がある。それまで考えさせてほしい」

まあ、かなり良いラインだな。これなら俺がやったのは甘言だけだし、責任は平田が取ってくれるだろう。サンキュー平田。

俺は平田に了承の念を伝えると、ベースキャンプへ帰参した。平田

が戻ってきたのは、その10分後だった。

そして、荷造りを終えたDクラスの面々はベースキャンプを放棄して、開始地点である栈橋がある浜辺へと戻ってきた。

それから、がやがやしなから、正午を迎えた。ふー、試験終了。あとは結果発表かな？

『ただいま試験結果を集計しております、しばらくお待ちください』

まあ、平田がどうあれ、210ポイントは堅い。あとは彼の覚悟次第では260ポイントだ。夢が広がるな……

幸せな妄想に耽っていると、ふと、怨霊のような声が聞こえてきた。

「おい、腰巾着。鈴音はどうした？」

見ると、綾小路が龍園に絡まれていた。はて？お前脱落したんじゃない？

「さあ、オレに聞かれても困る」

綾小路が事案を隠蔽した後、そこに須藤・平田が加わり、プチ口論が発生した。それにしても何で龍園が残ってるんだ。おかしいぞ。というより、龍園の恰好は異常だ。髪がボサボサで髭も伸び放題。浜辺で会った時よりもゲツソリとして明らかに痩せている。その上、ここからでも分かるほど臭い。うん、これは状況証拠的に見て、間違いなくサバイバルしてたな……それもポイントなど使わない本物のサバイバルだ……とすると、龍園はずっとこの島にいたのか。なんか雲行きが怪しいぞ……

それから、真嶋先生の説明が始まるが、龍園とDクラスの口論は一向に止むことなく続いてた。先生の話聞けよ。……それにしても、なんで龍園は島に残ったのだろうか。スポット占有のボーナスポイント狙いか？何か嫌な予感がする。

「は、その程度のポイントで満足できるとは、雑魚の神経が羨ましいな」

現在は平田と龍園がレスバしている。思ったより平田は強い。

やっぱり平田は安定感もあるし、宿り木のままでいいかもな……
あーでも、さっきの俺の平田への態度が悪かったから、心証良くない
だろうし、それも踏まえると微妙か？うーん。

「何を言おうと構わないけど、Cクラスが0ポイントであることには
変わらないよ」

平田が強気で答えると、龍園は蛇のような目でじつと平田を見なが
ら、ククと嘲笑した。

「確かに俺は300ポイントを使い切った。だがな、追加ルールの事
を忘れたのか？」

ぐ、まさか……本当に？

「クラスのリーダー当ての事を言ってるんだね」

いやいや、まさか……

「そうだ、俺は紙に書いたぜ。お前らDクラスのリーダーの名前をな」
やべえ、これはアレだ伊吹何某だ。やはりスパイだったか。リー
ダーカードを見られていたら大損害だ。状況的に、昨日の堀北の水浴
びの時か……クソ、無能堀北。何で一人で水浴びに行つたんだよ。あ
と、綾小路も綾小路だ。お前が一緒にいながら……

「それと、Aの連中も同じように書いた。これがどういう事か分かる
か？」

は？え、誰だ……神室か、いや、それはないか？というか、龍園の
文脈を考えると、龍園がAクラスに教えたのか……？なぜ、そんなこ
とを……

いや、単なるミスリードかもしれないが……本当なら大変な事だ。
もし本当ならDクラスはボーナスポイント抜きとマイナス100ポ
イント。下手したら、100ポイント割るぞ。絶対ラインである12
0どころではない。俺の努力が報われなかったのも悔しいが、やはり
今後のポイント配給、それに絶対ラインを抜かれたことによるDクラ
スへの精神的な影響も危険だ。これはマズいぞ……

「ちよつと待てよ、それどういふことだよ。おい……」

須藤の言葉に対して、龍園は勝者の笑みを浮かべた。ふと、笑みに
釣られて再び龍園を見る。あまりにも酷い見た目だ。きつと俺らと

は違い本気のサバイバルだったのだろう。他のクラスを騙しつつ、その上、他のCクラスの生徒には無人島を精一杯楽しませ、さらに邪神を鎮めた。どう考えても努力のし過ぎだ……俺のした暗記なんて、龍園の努力に比べるとカスみたいなものだ。成果が努力に比例するなら、この結果は当然のことなのかもしれない……悔しいが受け入れなければいけない。龍園、今回の特別試験、お前の勝ちだよ。

あー、でもやつぱり、堀北と綾小路は許されない。お前らがちゃんとリーダーカードを守らなかったせいで、こんな事になったんだし、その上、おそらくリーダーカードを守れなかった後、ヤケになって島でアオハルだ。そのせいで35ポイント失ったのだ。うーん。これは無能と言っても過言ではない。というか、綾小路も結局は無能だったな。アイツ、意味深な態度を取ってるけど、ただの思い込み野郎だな。ある意味、お前ら二人が出した被害は高円寺以上だぞ。誰だよ、この二人の事を最強の参謀タッグとか言ったのはよ。ただの最弱じゃねーか。また、あの二人なんか犯っちゃいましたか〜って感じだ。綾小路と堀北の参謀力が弱すぎるってことだよな。まあ、口にしたら、綾小路に黙れドンとぶっ飛ばされそうだから黙ってるけど……はー、あの二人本当に使えないわー。暴力事件の裁判で勝てたのはマグレだろ。やはりこのクラス最強タッグは平田と櫛田だったか……マジであの無能二人をDクラスから追放する方法ないかな？もし、俺がクラス内で誰か一人を追放できる権利があったら間違いないく、綾小路か堀北に使うよ。もう、はっきりと断言する。綾小路と堀北は無能！この評価は絶対に、絶対に、絶対に、覆らない!!

「それでは特別試験の結果を発表する——」

まあ、うちのクラスが4位か3位だな。最後に、発表を聞く前に、これだけは言っておきたい。

堀北、堀北、敗北者！リーダー、脱落、敗北者！

うおおおおおー！！！！よくわからないけど勝ったー！！！！

うおおー！堀北！綾小路！また、お前らが何かやってくれたんだなー！！よく分からないけど！

お前らなら、Dクラスを、勝利に導くと、俺は最初から確信していたぞー！！うおおおおー！！！！！！

ふう。一先ず落ち着いたので、近くで大歓声を上げているメンバーと合流し、船で待つDクラス一の才女にして、参謀、大正義である堀北を讃えに行く事にする。

船のデッキに向かう途中、やっぱり堀北は神だな、というクラスメイトの意見を聞いて、嘆かわしく思った。お前らはあんなに堀北をデイスっておきながら、今更といった感じだ。なんとこの誠実さの欠片もない態度であろう。手のひら返しが早過ぎる。俺のように堀北と綾小路のことを最初から最後まで信じ切っていたのは平田と櫛田ぐらいであろう。まったく、困ったものだ。

途中で高円寺に会ったりもしたが、まあ、終わり良ければ総て良しとも言おうし、特別に許してやろう。まあ、次やったらマジで高円寺の実家、綺麗にするから、覚悟しとけよ。

高円寺に皆で絡んだあとは、Dクラスの参謀である堀北と対面した。皆で囲んだり、謝ったり、讃えたりした。

いやー、本当に、堀北は凄いですよ。あと、綾小路もね。お前も一枚噛んだんでしょ？ふと気になり彼を探すが、デッキにはいなかった。まあ、目立つの嫌いみたいだし、いつか。……ここまで手柄を堀北に渡しているのを見ると、目立つのが嫌いなんじゃなくて、堀北に手柄を献上したいのかもな。今だって、堀北、なんか嬉しそうに見えるし。

やっぱり綾小路は、かなり堀北が好きなようだ。こりゃあ、櫛田は大変だな。

堀北を皆で讚えた後は、船室に戻りゆっくりと過ごすことにした。とはいっても、今回の試験色々考えることがあった。まあ反省会だ。

結果だけ言うと、1位Dクラス310ポイント、2位Aクラス120ポイント、3位Bクラス42ポイント、4位Cクラス0ポイントだ。一応自分なりに考えてみた。

まずはDクラスだ。俺の考えた予想は210ポイントで平田次第では260ポイントだ。単純に考えて、平田が覚悟を決めて、その上でさらに50ポイント手に入れたのだろう。まあ、50なんて値は1つしかない。残ったCクラスのリーダーを当てたのだ……間違いない。参謀タツグの作業だろう。うーん、もしかしたら、今日綾小路と平田が会ったのは綾小路がCクラスのリーダーを告げたのかもしれない。結局誰だったんだろう？最後まで残っていたし龍園なのかな？いや、別にリーダーが最後まで残らなくちゃいけないみたいなルールはないし、途中で脱落した他の生徒の可能性もあるか？まあ、終わったことだし、そこは誰でも良いか。何だかんだで堀北と綾小路はリーダーカードを守り切ったのだろう。その上、龍園の言葉を信じるなら、何らかの手段で龍園に誤情報を流したみたいだ。まあ、伊吹何某が文字も読めぬ無能だったのかもしれないが。

次にAクラス。ここは思った以上に低かったな。もつと頑張るかと思ったが……いや、食料をポイントで全て賄うと、そんなもんか。ある意味平田の言う120ライン計画と同じ考えをしていたのかもしれない。うーん、ここは、Aクラスの首脳陣と同じ発想を短期間で行った平田を褒めるべきだろうな。Aクラスは、それ以上には特にないかな……いやいや、待てよ。少なくとも彼らは50ポイント減点さされているのだ。その上龍園の発言を信じるなら、Dクラスのリーダー当てを失敗しているはずだ。というところ、少なくともマイナス100ポイント。それに坂柳がリタイアしている事を考えると、彼らの残りは170ポイント。つまり50ポイントの消耗だけであの無人島試験を乗り切ったことになる。変だ。凄く変だ。食料をポイントで賄っていたのなら当然足りない。しかし、四日目の偵察では、食料を採取

した痕跡は無かった……不気味だ。まあ、ここは寮に戻った後の盗聴で調べてみよう。それに上手く衛星写真が取れていれば、主要人物の行動も少しは割り出せるかもしれない。

その次は一気に落ちたBクラスだ。ここは駄目だったな。なんかあったのかな？まあ、平田がリーダー当てをして、ボーナスポイントも抜きになったから、平田と同じ絶対ラインで考えていけば、120から50引いて、70だよな……うーん、Aはポイントが残り過ぎだが、こっちはポイントが減り過ぎだな。何かアクシデントでもあったのだろうか？わからん。

最後のCだが、まあ、ここは龍園も言っていたし、嘘でなければ0ポイントからスタートしたのだろう。綾小路がCを当てた以上ボーナスポイントは無いし、クラス当てでも間違えたのだから0ポイントだ。分かりやすいな。

AとBの謎のポイントについては、夏休み中に解析するとしよう。というか、今パソコンないし、帰ってからだな。元気かな、貯金箱1号。彼は、ちゃんと役目を果たしているだろうか……

まあ、今日くらいは休むかな。三日挟んだらボーナスタイムである船上試験だ。そこで大量に稼ぐためにも、休養が大事だ。

そう心に決めた瞬間メッセージが飛んできた。ツチ、櫛田だ。無人島試験が終わったし、未読スルーでいいか、と思ったが、もしかしたら宿り木を変える可能性もある。しゃーない、見るか。

『赤石君、今、暇かな』

今は、ゴロゴロしてるから、忙しい。

櫛田に呼び出された俺は仕方なく船のデッキに来ていた。しかし、待ち合わせの時間になっても櫛田は来なかった。ドタキャンやめろ。

「赤石、いきなり呼び出して、悪いな」

いや、俺を呼び出したのは櫛田であって、お前じゃないんだけど？

綾小路。

「……綾小路君？ 櫛田さんに呼ばれたと思ったのですが」

「いや、悪い。ちよつと話したくてな。俺の知り合いだと番号を知ってたのは櫛田だけだったからな……」

「……えつと、何か俺に用でしようか？」

「……、……そうだな。いくつか、聞きたいことがあるが、答えてくれるか？」

やだ。

「勿論です。何でも聞いてください」

綾小路はじつと俺の目を見ている。何か変だな。綾小路つて左右のバランスがおかしいのだろうか。正中線を見ていないというか……俺の左側を意識しすぎている気がする。

「……、……、せめて、一つだけ答えて欲しい」

あれ、俺そんなに答えたくなさそうな顔してたかな。思わず、黙っている、綾小路は質問を投げってきた。お！その質問だけ答えればいいんですね。

「どうして、執拗に龍園を痛めつけた？ お前は龍園をどう思っている？」

ここぞとばかりに難解な質問をしてきた。英雄だと思っている、とは言えないし……というか、龍園を痛めつけてるのは邪神だよ。俺じゃないよ。

「痛めつける……すみません、言っている意味がよく分かりませんが……」

「試験終了時、龍園は痩せ細っていた。恐らく、無人島では殆ど何も食べれなかったんだろう。……そこまでする必要があつたのか？ 龍園の何が気に入らない？」

いや、龍園関係はノータッチというか、龍園の計画を壊したのは堀北と綾小路だろ……コイツどさくさに紛れて俺のせいにするつもりか。さては、このあたりにCクラスの生徒を潜ませているな！ そうはさせるか綾小路。Cクラスの見てる人、コイツです！ 綾小路です！ コイツが龍園君の邪魔してまーす！

「……いえいえ、俺は特に龍園君のことは何とも思ってませんよ。綾

小路君こそ、龍園君に思う所があるのでは？彼に何か悪い感情を持つたりはしませんか？」

「……危険な生徒だと思っている。この学年では二番目にな」

一番だれだよ。あ、いや、邪神か。……んー、でも綾小路って邪神を知らないと思うが、実は知っているのだろうか。まあ、俺の知らないだけで、龍園以上邪神未満のヤツはいるかもしれないし、いつか。俺と、そのヤバイ奴が出会わなければ何の問題も無い。

「綾小路君に危険と言われるとは、よっぽどの人ですね、龍園君は。俺も気を付けますね……今回、堀北さんの活躍で何とかなつたみたいですが、やはり綾小路君としては、これからも堀北さんと一緒に活動されるんですか？」

龍園ネタで引つ張ってもボロを出しそうにないし、というか、俺がボロ出しかねないし、適当な話題に変えよう。

「……………、そうだな、悪かったな。今まで通りいこう。オレは何もしてないし、これからも何もしない。お前も知ってる通り、堀北が勝手にやったことだ。お前も、何もしていないし、これからも何もしないだろう。無人島ではオレもお前も、何も活躍していない。……そうだろう」

おい、ナチュラルに俺の質問を無視するな。てか、俺は結構、食料班で働いてたと思うんだけど……功績の殆どは櫛田にあるが、それでも彼女に従事して働いたから、少なくとも普段の活動では、散歩ぐらいしかしてない綾小路よりは働いた時間は長いが……いや、まあ、クラスに対する貢献度という意味では参謀タッグの方があつたかもしれないけど。

うーん、綾小路の俺への評価、思ったより低い……その上、堀北に關係していることを話さないとは、まったく信頼されていないな。いや、まあ、俺は表面的にはあまり活躍していないし、俺の事をDクラスの無能の一人、と綾小路が判断しているのなら、信頼しないのも当然か。それに、それはそれで動きやすいし、まあいつか。ちよつと釈然としないけど。まあ、いいか。

「そうですね。すみません。……その、次に特別試験のようなものが

あつたら、その時は頑張りますね。綾小路君も、色々大変でしょうが、頑張ってください」

最後にそう、話を打ち切り、綾小路と別れた。最後まで彼は無表情だった。圧巻のポーカーフェイスである。まあ、綾小路の俺への評価を再確認できる、いい機会だったか。どうもアイツは俺の事を『Dクラスの無能だが肉盾程度にはなるヤツ』と判断しているようだ。実にけしからん。というか、櫛田経由で俺の事呼んだのも、明らかに今回の特別試験のCクラスへの贄にするためだよな……なんてヤツだ。人のことを贄にしようとするなんて。あそこには邪神が封印されているのだ。人を邪神のクラスの贄にするような、そんな薄汚いヤツだったなんて。綾小路、見損なつたぞ。人の事を贄と考えることすら許されないのに……自分の安全の為に、人を邪神の贄にしようとするなんて、絶対に絶対に絶対に、許されない行為だ。なんて酷いヤツだ。許さん。

そういえば、櫛田は知っているのだろうか……もし、知ってて綾小路に会わせたのなら、許されないが……そもそも、櫛田って綾小路が堀北を支援してることを知ってるのかな？……まあ、三人の関係性から考えると知ってて当然か。うーん、そうすると、なんか今回の件は櫛田の善意より情欲が上回った感じか。そういうところだぞ、櫛田。根は良いヤツだと思うけど、綾小路への複雑な感情で、判断を誤りすぎなんだよ。次、俺に間接的に被害を与えたら、お前の――0・1高円寺（今回の0・2加算された）を0に戻すからな。

堀北鈴音の錯誤3—1

私、堀北鈴音にとって、赤石求という生徒は、理解に苦しむ存在だ。

特別試験。

真嶋先生から告げられた試験の内容は、自分の想定のはるか外側の話だった。

綾小路君も言っていたが、勉強以外のなんらかの指標を用いて、生徒やクラスの能力を測ることは私も予想していた。しかし、それが、このような形で行われるというのは全くの想定外だ。

この試験は、何もかも未知数だ。自分一人では、難しい試験かもしれない。けれど、Dクラスの有象無象と協力することもまた難しい。平田君や櫛田さんならできるかもしれないが、彼らと違い、私は慣れあうつもりはないのだ。そんなことをしている時間も必要性も、私には無い。

——綾小路君なら、どう考えるのかしら。

ふと、脳裏に過った思いを抑える。馬鹿馬鹿しい。彼は、兄さんが認めるだけあって、確かに優秀な面を持つているとは思う。口にはしないが、私も少しだけ、本当に少しだけだが、彼は頼りになると、そう思う所はある。

ただ、それは弱さだ。自分一人で切り抜ける力。それこそが強さであり、兄さんの背中を見て私が学んだことだ。

この試験、兄さんはどのように突破したのだろうか。勿論、毎年、同じ試験をやるとは限らない。けれども、多少は、他者と協力を求められる試験があつたはずだ。兄さんは……

——あの人は天才だ。きつと周囲もそれを理解し、自ずと協力したのだろう。

自分では、きつと今の兄さんの足元にも及ばない。それゆえ、自分に対して協力的なクラスメイトが多くはないのだろう。だが、この試

験の性質を考えると、ある程度、彼らと歩調を合わせる必要がある。一つだけ、案があるが、これを選ぶのは、何だか、綾小路君を頼っているようで、気に障る。

それにしても、体に上手く力が入らない。頭も普段よりどこか冴えないように感じられる。Dクラスの慌ただしい面々を見ながら、私はそんなことを考えていた。

朝から不調だったけれど……僅かに顔に触れる。少し熱い。頬もどこか硬い。表情も上手く作れていないかもしれない。

普段なら、そんな状態ならば、学校どころか他人に会う事さえしないだろうが、これは大事な特別試験だ。Aクラスに上がるための第一歩となるもの。それを体調不良などという脆弱な理由で参加しないわけにはいかない。

僅かに、弱気になりそうな気持を抑え、顔を引き締める。ふと、こちらを見る赤石君と目が合った。彼はいつもの様な柔和で脆弱な笑みを浮かべていたが、こちらと目が合うと、慌てたように目を逸らした。彼は入学当初から変わらない。榎田さんや平田君に媚びるように従い、そして、私とは目も合わさない。上に媚び、上昇意欲がなく、非効率的で、意識の低い、ごく一般的なDクラスの脆弱な生徒の一人だ。

しかし、綾小路君の意見は違う。今も隣にいる彼は、赤石君の方を見ると、手を挙げようとしていた。おそらく、また赤石君に話しかけようとしているのだろう。そう思ってしまったからだろうか。反射的に綾小路君の腕を掴んでしまった。

腕を掴むと、綾小路君は、

「堀北。いきなりどうした？」

などと言って惚けてみせた。思わず、握っていた彼の腕をつねった。

綾小路君がこちらを非難する言葉を耳で捉えながらも、私は心の中で別のことを考えていた。

——どうして、私は、こんな事に……

また、無駄なことを考えてしまった。体調の悪さが、思考を鈍らせ

ている。

他のクラスが動き始め、それに呼応するようにDクラスからも池君たちが動いた。一方で、彼らを制御できなかった平田君は、残った生徒を森の中へと引き連れていった。

道中、綾小路君と他愛もない会話をしつつ、私は改めて自分のやるべき事を考える。

綾小路君と先ほど話したこと——先行した池君たちの動きが、正しいかどうかは分からない。

しかし、あの状況で、素早く行動に移ることができた彼らなら、何か事態を好転させることができるかもしれない。自分には咄嗟にできなかったことだ。Dクラスの生徒全員に能力があるとは到底考えられないけれども、少なくとも、彼らの存在がクラスの好材料となることもあり得るのだ。

上手く彼らをコントロールできればとも思う。その方法としては、誰かを媒介させて、私の指示をクラスメイトに聞かせるという案を思いついたが……優柔不断な平田君は頼りにならず、疾しい心を持つ櫛田さんは信用できず、そして綾小路君にはやる気がない。

森を歩きながら、特別試験のことを考えようとするが、思考が纏まらない。上陸前よりも少しずつ体調が悪くなってきたのが分かる。

それに、綾小路君に心配をかけられてしまった。もしかしたら、顔に出てしまっているかもしれない。けれど、この試験の性質上、いえ、私の信念としても、弱さを見せるわけにはいかない。故に、彼にも自分の状態を告げなかった。

森の窪地に着くと、平田君はDクラスの生徒たちを纏め、今後の方針についての話し合いを始めた。とはいっても、Dクラスの生徒でまともな意見を出せる人はほとんどいない。結果、平田君一人の発表会の様相を呈している。

幸村君が平田君に言い負かされた後、平田君はサバイバル経験の有無をクラスメイトに質問した。

「あの、精通とまで言えませんが、中学生の時、親に言われてサバイバル合宿のようなものに行ったことがあります。……と言っても数日の体験なので、あまりお役に立ってるか分かりませんが……」

答えが出るとは思っていなかったため、私は反射的に、発言者である赤石君の方を見た。彼の表情はDクラスの懦弱な生徒を象徴するものであり、そしてその立ち振る舞いからは他の凡人と同じような才気しか感じない。不自然だと、私は感じた。

赤石君らしからぬ発言だ。私の持つイメージに合わないと言うべきだろうか。彼は責任ある立場に就こうとはしない人間だ。普段からの態度を見るに、クラスでは中核的な立ち位置に就こうとする一方で、リーダーのような立場は避け、集団の行動には差配せず、結果責任も取らない。無責任というよりも、そもそも責任のある地位を避けるタイプだ。私の見立てでは、榎田さんに頼まれてようやく責任のある立場に就くといったところだろう。

今の彼の発言は、この特別試験において、Dクラスの方針に関与する意図があるものだ。赤石君はDクラスの中では、こと知性に関して平均よりは少しはマシだ。今の発言が、彼が普段から大事にしている保身を傷つけかねないという事を分かっているはず。彼の振る舞いらしくない。

赤石君に対する考察をしている間にも二人の会話は進んでいき、探索班を編成することになった。当然、先ほどサバイバル経験について言及した赤石君も参加した。ますます妙だ。彼は運動神経は悪くはなかったが、かといって、この無人島に適した動きができるかは不明だ。彼の性格から考えると、やはり不自然だ。いや不気味と言ってもいいかもしれない。

——よほど、自信があるのかしら？

もし、そうであれば、多少は納得できる。それでも少し不自然である気もするけれども。もし彼が本当にサバイバル環境に適性があるのなら、この無人島試験においては有用な存在になるかもしれない。勿論、彼が嘘を吐いていて、本当はサバイバル経験などなく、何か別の目的——そう、例えば、意中の女子生徒に対する見栄や下心が

あるのかもしれない。

どちらにしろ、彼の探索結果が分からなければ答えは出せないことだ。

私は、体から出る異常な熱さを抑えながらも、今後の計画を練ることにするのだった。

体調を整え、今後の計画を思案している間にも時間は過ぎていった。

途中、先行していた須藤君たちの班員の一人である山内君が慌てながら戻ってくる、などといった事件が発生したけれど、気がつけば、5つの探索班のうち3つが帰還していた。

櫛田さんの班が帰還した時、彼女がこちらに何かを話しかけようとしていたが、気づかぬふりをしてやりすごした。彼女と話をするのは双方の利にならない。彼女は私の事を嫌っていて、そして、私は彼女と話を合わせる気が無い。どこまでも平行線なのだ。

けれども櫛田さんは事あるごとに私に話しかけようとする。上辺を取り繕う彼女を何度も拒絶しているが、未だに諦めた様子はない。そんな彼女からは、愚直というよりも、どこか策謀めいたものを感じる。とはいっても、彼女が何を企んでいるか、それを追求したいとは思っていない。どうせ碌でもないことだろう。周囲に良く見せたい、あるいは私の嫌がる事をしたといったところだろうか。少なくともクラスの妨げになることはしないならば、私にとって関心の対象にはならないだろう。

14時半ばを過ぎた頃、綾小路君の班も戻ってきた。これで残るは赤石君の班だけとなった。

「堀北、ちょうど良かった。赤石を見なかったか？」

綾小路君は私を視界に収めると、一直線にこちらに来て、そんな言葉をついた。

「見てないわね。他の班は戻っているみたいだけれど……これで彼の

班だけ15時を過ぎれば、お笑い種ね。本当は経験なんてないんじゃないかしら？」

反射的に言う必要のない言葉まで出てしまう。体調の悪さが、心の余裕まで削っている。

「そうか。ちなみに、高円寺は見たか？」

綾小路君は特に顔色を変える事なく、次の問を発していた。まるで話題に、いえ、私の興味がないとでも言うかのような態度だ。兄さんに認められた彼に、そのような態度を取られると、自分の僅かな自尊心が抉られるようで、つい固執しそうになる。

気持ちを抑え、綾小路君の後ろにいる佐倉さんを捉え、さらには近くにいるDクラスの生徒を視界に入れる。そこで、ようやく、高円寺君がいない事に気づいた。

「高円寺君？ 貴方の班でしょう。もしかして、逸れたの？」

十中八九、逸れたのだろう。分かり切ったことなのに、語調は鋭くなっているのが、自分でも分かる。

「結果だけ言うと、そうなるな」

綾小路君は特に悪びれる様子もない。ただ、その瞳は、さきほど私が言ったことを責めているようにも見えた。それが悔しくて――、

「呆れたわ。彼を班員にした以上、貴方には監督する責任があるはずよ」

またしても必要のない言葉を返してしまう。

「オレにあの男をコントロールできると思うか？」

けれど、自分のそんな言葉にも、彼は気にする欠片さえ見せず、淡々と答えるだけだった。

14時の終わりに最後の探索班――赤石君の班が戻ってきた。

「戻りましたー……皆さんお揃いですね。すみません、ちよつと時間がかかってしまったみたいで」

言い訳のような言葉を並べる彼を視界に収める。後ろに二人の少

女を引き連れる赤石君はどこか得意げだ。二人の女子——赤石君の班員である王さんと井の頭さんは、どちらも櫛田さんと仲が良かった生徒だと記憶している。赤石君が櫛田さんの強い影響下にある以上、実質櫛田さんに息がかかった班と言っているだろうか。

二人のうち、井の頭さんの方は優秀とは言えない、厳しく言うなら須藤君たちと同じような、Dクラスの中でも特に下の生徒だ。一方、王さんは運動面はかなり苦手としているが、座学においては、Dクラスの中でも高い。中間・期末ともに問題なく突破していたのを、頭の片隅に憶えていた。

彼の班員の二人の女子生徒が運動能力に劣る以上、合流が最後となるのは不自然なことではない。ただ、合流したときの彼の表情は僅かに得意げな一方で、肝心の成果の報告は、やけに抽象的で具体性に欠けていた。

——成果は無し。と言っているようなものね。

得意げな表情は、中身の無さを誤魔化すものか、それとも探索以外の目的を達したからか。合流後も、王さんと楽し気に話していたことを考えると、おそらく後者の方がより強いだろう。彼にとって見栄や下心はクラスポイントよりも大切だったという話だ。もちろん、多少は罪悪感を感じているようで、それが中身の無さを誤魔化す表情なのだろう。つまるところ、赤石君は特別試験でも、いつも通りということだ。

そのことに関して特別責めるつもりは無かった。いや、無いつもりだった。Dクラスの生徒ではそれは普通のことなのだから。けれど、綾小路君が……

——いえ、やめましょう。これ以上、このことを考えるのは不快なだけね。

そう自分に言い聞かせ、いつまでも燻る心に蓋をするのであった。

池君がスポットの情報とともに戻ってくると、Dクラスは、にわか

に慌ただしくなった。流石に、茶柱先生の言ったルールは憶えている生徒も多いようだ。

右往左往する面々を視界の隅に捉えつつ、池君から得た情報について考える。スポットの位置や、ルール上の価値についてまで思考の網を広げていく。広げた思考の中で、最も重要な課題は、このスポットをどうするか、という点だ。

勿論、状況から考えて『占有しない』などといった戦術はありえない。ゆえに『占有する』という観点から考えなくてはならないが、果たして誰が占有するかが問題だ。

『誰か適当な人物に』などという選択肢は思考の放棄だ。しかし、Dクラスの多くの生徒が、議論の末『適当な人物に』決めようとするだろう。考えられそうなパターンとして一番ありうるのは、平田君と櫛田さん、次いで考慮にも入れたくないが軽井沢さんだろう。

平田君は優柔不断であり、リーダーカードを持つ人物となるべきではない。リーダーカードを持つ人物は、この特別試験において、クラス内でイニシアティブを握る。それが平田君のような人間が持つのはクラスポイントを危険に晒すことになる。櫛田さんは平田君以上に信用ならない。軽井沢さんに関しては議論する必要すら感じられない。

つまるところ、このまま座して待てば、このスポット占有を衆愚的選択に任せることとなり、その愚かな行いの結果は火を見るよりも明らかだ。何か手を考えなくてはいけないけれど、どうにもこちらは考えが纏まらない。

すでに移動を開始したDクラスの面々を追いかける。足取りが重い。

一度深く呼吸し、熱くなった体を抑える。少しだけクリアになる頭をさすり、思考を整理する。スポットに関しての思考を一度、頭の隅に寄せ、歩きながら、もう一つのことについても考える。

それは、先行した須藤君たちのことだ。先ほど考えた通り、彼らは見事にDクラスに好材料を持ってきた。当然、その分、考えなくてはならないことも増えたが、何も無いよりは遥かに良いことだろう。彼

らを切り捨てようと中間試験の時に考えたのは、少し早計だった。彼らには彼らの長所があり、私には私の長所と役割がある。

——そう、私はちゃんと自分を省みて、判断をしている。彼に言われるまでもなく、そんなことは分かっている。

そして、客観的に見て、自分の判断はDクラスの中で最も合理的で、正しいはずだ。勿論、すべてにおいて正しいとまで言うつもりはない。ただ、『Aクラスに最短で上がる』という目標を達成するにおいて、私の判断と行動に疑う面は無い。

ならば、リーダーカードを持つに値する人物は、客観的に考えて、私ということになるだろう。

——こんな体調で、その上、クラスメイトと協力していない自分が？

やはり、体調が悪い。余計な事ばかり考え、弱気になっている。

川辺に臨んだスポットに辿り着いた時には、体調の悪さも少しは落ち着いたようだった。日陰で座ることで、僅かばかり体力の回復に努める。

リーダーカードを持つにしろ持たないにしろ、今後のためにも体力の回復は急務だ。そういった事情から、Dクラスの会議には聞き手に徹することにした。

本来であれば、何らかのアクションを行うか、綾小路君を使いインシアティブを握る試みをする必要があったが、そのような余裕は時間的にも体力的にもなかった。

心の中の葛藤を抑えつつ、Dクラスの会議を見守っていると、ついに平田君がこの試験の中核となる議題に触れた。

「じゃあ、後は誰をリーダーにするかだ。肝心なところだね」

その言葉に反応はなく、Dクラスの面々はそれぞれ異なる仕草を見せたが、皆が黙したままであった。そして仕草の意味もほとんどが同じものだ。静かに俯く生徒、心配そうに平田君を見る生徒、視線を忙しなく動かす他力本願な生徒。最後の生徒に強い苛立ちを感じつつ

も、Dクラスの生徒たちの反応を分析する。彼らの仕草は、どれも『適当な人物』をリーダーに望む反応だ。私の予想通りだが、望んではない状況だ。このまま座して待つわけにはいかないが、愚かなDクラスの面々では私の説明では納得できないだろう。眉に力が入るのを自覚しながらも、行動できずにいる。そんな自分に苛立ちを募らせていると、おもむろに榎田さんが手を挙げたことで、静寂は終わりを迎えた。

「いいかな？……私なりに色々考えたんだけど……リーダーは責任感が高い人じゃないとダメだと思うの。でも平田君がリーダーをするのは、リスクが大きいと思うの。だから、目立ち過ぎず、責任感がある榎北さんがいいと思うの」

その言葉が鼓膜を震わせたとき、最初に感じたのは疑念であった。

——なぜ？榎田さんが？

彼女が、私を認めているとは思えない。それは、彼女の今までの言動から容易に推測できることだ。この試験での主導権に拘っていないのだろうか。いや、もしかしたら、このリーダーカードを持つことを彼女自身が恐れているのかもしれない。その方が彼女らしいと言える。リーダーになったとき、仮に失敗したとして、私と榎田さんなら、榎田さんの方がダメージが大きいだろう。勿論、これは仮の話である。まず前提とし、私は失敗する気はない。さらに、この試験の性質上、リーダーを当てられるのは稀だ。ならば、計画性をもって行動すれば失敗することはない。

あとは、僅かだが、私の足を引っ張りたいという考えもあるかもしれないが……いやクラスポイントの関わる試験で、そのような愚かな行動はしないだろう。流石に、榎田さんも、そのくらいの分別は弁えている。

というよりも、むしろ、推薦したりリーダーが役目を全うすれば、その功績の一部は推薦者のものとなる。

——なるほど。榎田さんの目的はそっちね。まったく、狡賢い、いや、要領が良いといふべきかしら？

榎田さんの本心について考察しつつ、それとなく周囲を窺^{うかが}う。Dク

ラスの面々は不快な表情を浮かべる者もいたが、表立って対抗意見を
出そうとする者はいない。不本意だが、好ましい結果でもある。たと
え私が不調であったとしても、他のDクラスの生徒がリーダーになる
よりはマシである。唯一、彼ならばと思わなくもなかったが。

「櫛田さんに意見に賛——、赤石君、何かな？」

そうして、平田君がリーダーの決定をクラスに問おうとしたとき、
赤石君が手を挙げ遮った。理解できず、思わず彼を見て、そしてその
表情を視界に入れてしまい、再度まじまじと見てしまった。赤石君ら
しからぬ、というより、今手を挙げた生徒はまるで赤石君ではない別
の人物のようだ。付和雷同を表現したかのような顔は鳴りを潜め、決
意と使命感に満ちた別人のような顔をしていた。彼は一度だけ、別の
方向に視線を向けた後、Dクラスの生徒たちに語りだした。

「えっと、堀北さんは確かに、素晴らしい方ですし、責任感が強い方
もあると思います。しかし、堀北さんが優秀な生徒であることは、D
クラス以外でも話になっていくでしょうし、リーダーにするのは危険
ではないでしょうか？」

理解に苦しむという意見ではない。ただ、もし、そう言うならば誰
をリーダーにするのだろうか。平田君とでも言うつもりだろうか。
……いや、違う。もつと赤石君の狙いは単純だ。その狙いは、彼が意
見を言う前に視線を向けた先にある。僅かにその方向を見ると、笑顔
を浮かべている櫛田さんの姿があった。

——完全に読めたわね。

この後、平田君と櫛田さんが何を言うかは考えるまでもなく理解で
きた。平田君は悪意なく優柔不断なことを言い、そして櫛田さんは嘘
にまみれた厚かましいことを言うだろう。そして、それは実際その通
りになった。

「そうだね、確かに赤石君の言う通りだね。堀北さんは目立つ人かも
しれない。でも、その上で、僕は堀北さんがいいと思うよ。リーダー
になるのは責任感だけでなく、統率力やメンタルの強さも要求され
る。それらの能力が高い水準に纏まっている堀北さんがやるのがベ
ストだと思う。……勿論、堀北さんが受けてくれれば、だけどね」

「うん、平田君の言う通り、赤石君の意見は正しいと思うよ。ありがと
う。でも、その上で、私は堀北さんがリーダーになるのがクラスの為
になると思うの。理由は平田君が言ってくれたけど、でも私から改め
て言えるとしたら、きつと、それは、堀北さんが信頼できる人で、そ
れでいて、皆の信頼に応えられる人だからだよ」

つまり、簡単なマッチポンプだ。まず櫛田さんが私を推薦し、狡賢
い利益を狙う。さらには一度、赤石君にそれを否定させることで、自
身が得られるであろう功績をより強固なものにする。もしかしたら、
私に恩を売ったつもりかもしれない。

馬鹿馬鹿しい。私が今の一連の小芝居で感じたことは、赤石君が櫛
田さんの飼いだという不快な事実だけだ。彼が櫛田さんの息のか
かった人間だということは、今までの行動から理解していた。けれど
も、クラスポイントのかかった試験で、彼女の個人的欲求を優先する
というのは、許容できないほど愚かな行為だ。

赤石君は自分がどれほど愚かなことをしているか自覚があるのだ
ろうか。彼に認められ……いや、そんなことはどうでもいい。赤石君
の知性に関しては、Dクラスではまともな方であったと記憶していた
が、彼は、それをもう少し活用できなかったのだろうか。

苛立つ気持ちを抑え、赤石君を見ると、櫛田さんの発言を肯定する
ようなことを言い、直ぐに自身の意見を取り下げた。櫛田さんからの
使命に忠実な彼の姿は、まるで調教された犬のようだった。そこまで
考えて、ふと近くにいる綾小路君の方に視線が流れてしまった。もし
て、すぐに自分の行動に後悔した。なぜなら綾小路君は愚かな赤石君
を見ても、何の反応も示していないからだ。自分が綾小路君の表情を
読み取ろうとしたことも悔しければ、それができない自分の洞察力の
低さも悔しく、そして何より、彼の無表情を見て『残念』という感情
を微かに抱いてしまった自分が悔しかった。

その後は、赤石君と平田君が中心となり、無人島での生活に関する豆知識——想像していたよりも優位性が認められる知識がクラス内で共有された。そのことで、彼に対する理解のし難さが、また一段と上がった気がした。有用なのか、そうでないのか、分からない。なぜ、貴重な知識を共有しようという意識があるのに、櫛田さんの策謀に参加するのか。なぜ、まっとうな知性を持っているのに、計画性が皆無なのか。なぜ、私より綾小路に評価されるほどの人でありながら、Aクラスを目指そうとしないのか。

熱を持った頭で、結論が出ない問題に関して思考を巡らす。

そういえば、先ほどの知識——川の水について言及した点も妙だ。クラスの女子からの反感を買いかねない。やはり彼らしくない。これも櫛田さん絡みの事柄だろうか。

今もそうだ。私の視線の先には、赤石君が櫛田さんに媚び諂^{へつら}っている。見るに堪えない。思わず綾小路君の方に視線が流れかけて、鉄の意志で止める。

——同じ過ちを二度も犯しそうになるなんて……これは相当ね。

自身の体調の悪さに呆れながらも、ぼんやりと視界に入れた櫛田さんと赤石君の様子を見る。彼らは食糧を探すための班を編成し、森を探索する前の打ち合わせをしている。

食糧班は櫛田さんが中核になり、赤石君をはじめとした櫛田さん目当ての男子や、櫛田さんの取り巻きの女子によって構成されている。まさに、櫛田さんのホームと言っている。当然私は参加しない。

櫛田さんの班がスポットを離れた後、平田君がDクラスの面々に指示を出し、ベースキャンプの設営に取り掛かった。彼の指示は的確とは言いが難かったが、設営自体は順調に進んでいた。

丁度、視線の先では、平田君が綾小路君に薪集めを頼んでいた。綾小路君は一度こちらに声をかけてきたが、それには応えず、体力の温存と今後の計画について思考する。

——このスポットの維持と管理に努め、リーダーカードを守り、そして秘匿する。

そして、それを成すために、Dクラスの生徒たちをある程度、『協力』させる必要がある。しかし、リーダーを決まる経緯からイニシアティブという点は活用しにくく、また、現在の自分の体調や、やけに非協力的な綾小路君のことを考えると、Dクラスの生徒との協力は難しいだろう。平田君に対してアクションを取ることも考慮にいれるべきだろうか。いや、自分にはできない。というより、する必要がないと感じてしまっている。体調的な面もあるが、平田君や榎田さんを信用できないという感覚もある。綾小路君が伝達役になってくれればと少し考えたが……

ぐるぐると、思考が歪み、戦略が上手く立てられない。方針や目標がしつかりとしているが、それを達成するための方法に難があり、そして、その方法を実行することが、今の私にはできない。

ふと手の中で握られているリーダーカードを見る。薄く、軽いカードだ。けれど、今の私にとっては、遥かに重いものだった。

一時間も経たないうちに榎田さん率いる食糧班はベースキャンプへと戻ってきた。随分早い。一瞬、成果が無く戻ってきたかと思いい、彼らの方を向き、その姿に驚かされた。彼らが大量の食糧を運んでいたからだ。しかも、榎田さんが言うにはまだ多くの食糧があり、運び終えたら、また食糧を探してくるらしい。平田君も私と同じように考えていたからか、食糧が運び込まれたとき、直ぐに調理班の篠原さんに声をかけていた。やはり、彼も食糧班がここまでの成果を収めるとは思っていなかったようだ。

食糧班の成果は喜ばしいものだった。一方で、それは厄介な事態を呼び寄せている。そう、

「——だからっ、堀北さんもどうかな？堀北さんが来てくれたら、この試験を乗り越える一歩になると思うの。それに、私も堀北さんが一緒に来てくれたら心強いよ」

目の前にいる榎田さんのことだ。

「必要性を感じられないわね」

彼女は事あるごとに私に纏わりついてくる。今回もそうだ。櫛田さんは食糧班の成果を見せつけるが否や、私の方に向かってきて、しきりに私に食糧班の存在を誇示してきた。面倒な事、この上ない。

「どうしても、駄目、かな？」

「役割から考えて、私が動くのは危険だと思うのだけれど。貴女なら、その程度は理解しているのではないかしら」

「……確かに堀北さんの言うことも分かるよ。でも、せっかくの皆で協力する機会だから、堀北さんも皆と仲を深めた方がいいよっ」

「余計なお世話よ。私に時間を割くより、クラスのほかの女子に媚びを売っている赤石君の相手をしてあげた方がいいわね」

「堀北さん。赤石君はクラスの他の子たちを集めてくれてるんだよ。そんな言い方したら、赤石君に悪いよ」

「そう。つまり、赤石君がDクラスの女子で、貴女が私ね。益々、私に時間を割かない方がいいと思うのだけれど。赤石君に成果で負けたら笑えないわね」

「……、……堀北さんに、ううん、……堀北さんのその言い方だと、赤石君は必ずクラスの女子を参加させられるってことだね。何だかんだで、やっぱり堀北さんも赤石君のことを認めてるんだね。良かった！二人は仲が悪いんじゃないかって心配だったから、一安心だよ」

櫛田さんの、些細な挑発。いや、売り言葉に買い言葉というだけかもしれない。けれど、どうしてか、今日はいつも以上に苛立ちを感じた。そのためか、また不必要な言葉が漏れてしまった。

「認めてないわ。面の皮が厚い赤石君のことも、貴女のことも……ね」
櫛田さんは一瞬不快そうに顔を歪ませた後、笑みを作った。しかし、それは何時もの善良さを演じたものではなく、もつとドロドロとしたものだった。

「……そっか。そこまで言うなら堀北さんの意見を尊重するよ。じゃあね」

そう言うと、櫛田さんは軽い足取りで赤石君たちがいる方へと歩いて行った。

二時間ほどすると、櫛田さんたちの食糧班は無事作業を終えた。彼らの働きは大きく、おそらく、明日の昼程度までの食糧の確保に成功した。勿論、運の面も大きいだろう。しかし、一方で、櫛田さんの優秀さの表れでもある。そして、おそらく赤石君の活躍もあつたのだろう。やはり彼は不可解な生徒だ。

そして不可解なのは赤石君だけではない。

Cクラスの伊吹さんという生徒がDクラスへと来たことも、また不可解だ。いや、こちらは不可解というよりも、怪しいと言える。彼女の傷は本物だが、彼女自身からどこか嘘の気配を感じた。

しかし、Dクラスの生徒たちは、彼女を受け入れることを表明していた。これだけでも、彼らが普段から何も考えていない証拠と言える。この事に関して、優柔不断な平田君は正しい判断をできず、櫛田さんに至っては、ここぞとばかりに自身の善良さを強調していた。

そして、そんな平田君と櫛田さんの判断を熟知り顔で頷いている赤石君に対して、今日何度目になるかも分からない苛立ちを感じていた。彼は本当にわからない。能力的には愚かな事をしていることには分かっているはずだ。それなのに……

苛立つ気持ちを抑えつつ、特別試験についてに思考を巡らす。

もう日は沈みきり、一日目が終わりを迎えようとしている。

伊吹さんを招き入れたことに対する不安、平田君や櫛田さんへの不安、それらを感じつつも、夕食を口にする。

様々な考えが浮かんで消える。どのように勝つべきか。Aクラスへの最短を目指すために、この試験で行うべきこととは何か。そのために何をすべきか。何をさせるべきか。

考えが何巡もしたところで、クラスの中で怒声が響きわたった。思わず、周囲を窺い、そして愕然とする。

高円寺君がリタイアしたからだ。

Dクラスが混乱に包まれる中、私は、綾小路君のいる方向を目を向ける。彼はどこか険しい顔で、ある一点を凝視している。彼の視線の先を追うと、そこには……

私、堀北鈴音にとって、赤石求という生徒は、理解に苦しむ存在だ。優秀なのか、愚鈍なのか。まるで二つの間を行ったり来たりしている彼の姿は不可解で不気味だ。綾小路君とはまた違う。

勿論、これはきつと私のただの妄想で、実際は見たままの平凡な生徒なのだろう。

ただ、特別試験の一日目終了間際で見せた表情——Dクラスが混乱に包まれた中、一人狂気を宿していたかのように見えた笑顔は、どこか彼を平凡足りえぬ存在としているように思えてしまった。

綾小路清隆の独白3—2—1

無人島での初日を終えた今のオレには、二つの悩みがある。

一つ目は今回の特別試験にどう対応するかという悩みだ。本来、事なかれ主義者のオレとしては、無人島でもクラスの中に紛れ、ゆつたりと、そこそこの青春を過ごせれば良いと思っていた。平田や堀北、櫛田などの試験に前向きな生徒が、ほどほどにDクラスを維持してくれば、それで問題はない。邪魔にならず、目立ち過ぎず、そして嫌われない程度に彼らに協力すれば、二学期以降の自分のささやかな地位も維持できるだろう。そう考えていた。

しかし、人間とは何かに縛られる生き物である。人によっては金銭だったり、名誉だったり、異性だったり、様々であるが、ことオレに關して言えば、それは自由だ。

茶柱先生から告げられた「あの男」に關すること、そしてオレが先生の計画——DクラスをAクラスへと押し上げる計画に参加しなければ、オレを退学させるということだ。現在得られる情報から考えて、先生の言葉は嘘とは言い切れない。そして、最悪のケースを想定した場合、茶柱先生に協力することが、現状のオレの最善の選択肢だ。自由を求めるために、他者に不自由を強要される。なんとも矛盾なことであるが、人生とは矛盾の詰まったモノだ。

——赤石。あの男が、オレと同じ立場ならどう判断するだろうか。いや、そもそもあの男なら茶柱先生が嘘を吐いていたか、そうでなかったかを見抜くことが可能だろう。つまりオレ以上に、あの会話から得られる情報が多い。ならば、単純に判断を比較することに意味などないだろう。

どちらにしろ、オレのやる事は変わらない。不本意ではあるが、茶柱先生をある程度満足させる結果が必要だ。

オレは脳内で、この特別試験のルール、船から見た島のおおよその概形、各クラスの様子、様々な事を思い描き、いくつかの試験結果を想像する。その中で、必要な事を思い描き、そして、結局は、いつもと同じように、あの男のことを考える。

——赤石求。オレにとつての二つ目の悩みだ。

正直な話、この男に対する悩みを最低限解決しない限り、特別試験の考察は難しい。この不確定要素の塊のような男を制御……いや、せめて行動方針だけでも掴まなければ、こちらの行動の成功率は大きく低下する。故に、この男について考える必要があるのだが……まだ、ピースが足りない。少なくとも折り返しである四日目までには、赤石の方針を知る必要がある。

無人島試験二日目の早朝。まだ、生徒たちが起きていないと予想される時間に、オレは目を覚ました。数秒程で意識を整え、さらに数秒を使い、今の時間にやるべき事を決め、静かに起き上がる。隣には須藤が心地よく眠っている。この男は、無人島の悪環境でも、問題なく快眠できるようだ。これも一種の能力と言えるだろう。

テントを出て、まず、伊吹の鞆を漁ろうと考え、止める……足跡が二組ほど川の方へと伸びていたからだ。誰か目が覚めたのだろう。かなり早い。1つは女子で、1つは男子。男の方は赤石がいる方のテントだ。少し悩むが、不審にならないように、足音を発して川辺へと向かう。

ふと、自分とは違う足音が聞こえた。トイレの方から女子生徒がふらふらと歩いてきた。足取りは重く、如何にも眠たそうだ。

「……………おはよう」

挨拶をするべきか悩んだが、早朝に眠たそうな女子を、じつと見ていたなどと誰かに邪推されれば、今後のDクラスに生活に関わる。不審にならないように、向こうも気づくように、害意を持っていないように、それらを示す為にこちらから声をかける必要があった。

「……………え……………」

しかし、女子生徒は、こちらに全く気付いていなかったようで、呆けたような声を上げていた。

「あ、いや、同じクラスの綾小路だ」

一瞬、この女子はオレの事を憶えていないのではないかと思い、念のため名乗った。相手は井の頭心。櫛田の親友であり、よく彼女の傍にいる女子だ。正直な話、一度も会話したことがない。そして、櫛田や堀北からのオレの評価を聞くに、十分、オレの事を憶えていない可能性があった。

「……うんえつと、おはようございます、あ、あやの？ことう？……？」

かなり寝ぼけているのか、それとも彼女がオレの事を憶えていないのか判断に迷うが……実は、オレは、この少女には聞きたい事があった。この時間に女子と二人きりで話すことには、若干の危機感を抱かなくもないが、赤石に対する理解のために聞く必要がある。

「井の頭、少し聞きたいことがあるんだが、いいか？」

井の頭はオレの問を聞くと、怪訝な顔をした。

「え、……は、はい」

「井の頭は確か、中間試験では赤石の勉強会に所属していたんだよね？実はオレも興味があつてな。良ければどんな感じだったか聞かせて欲しい」

赤石勉強会。中間試験に行われた勉強会であり、そして、あの恐ろしい『チエックシート』が使用されたと思われる勉強会だ。七月の始めにあつた一連の事件。あの騒動により佐倉との交友関係を持ったオレは、細心の注意を払い、勉強会に参加していた佐倉から『チエックシート』の情報を聞き出した。重要な点は二つ。一つは、『チエックシート』は赤石が持参したものであること。そして、もう一つは『チエックシート』の使用と問題集の推薦の手順とその速さから、恐らく赤石が作った可能性が高いこと。これは外村にも聞いたことであり、概ね裏付けは取れている。念のため、最後に外村と同様に接触期間が長かつた井の頭から赤石や勉強会の印象を聞いておきたい。そして可能であれば、そこから話を繋げ、櫛田との関係についても聞くことができれば、今後の方針に役立てるだろう。

「……勉強する、ところですよ」

それは質問の回答になっていないが、井の頭の表情はふざけたものではなく、怯えつつも真剣味があつた。

「ああ、それは、……えっと、赤石は井の頭から見てどんな奴だと思っ
？」

どうも、この少女は佐倉と同じか、それ以上に会話が苦手に見える。
あまり、答えにくい質問を強要するよりは、質問を変えた方が有意義
な回答を得れるだろう。

「……、勉強を……丁寧に教えてくれる、人？」

悩みながらも井の頭は疑問形で答えた。……疑問形？赤石から教
えを受けたのではないのだろうか。

「勉強会以外では滅多に話さない……です、から」

オレが思わず黙っていると、井の頭が説明を付け足した。その表情
を素早く見るが、嘘はまったく見えない。おそらく本心から話してい
る。これまでの会話と日頃のクラスでの態度を考えると、この少女は
佐倉に近い。敢えて違う所を挙げるとすれば、佐倉よりも口数が少な
く、それでいて女子グループに参加する集団性がある所だろうか。

「赤石は——」

「——あ、あの……」

オレの質問とほぼ同時に井の頭が顔を赤くしながら、声を上げた。
見ると井の頭は、それまでの静かさと、それに伴う気弱さから打って
変わって、こちらを真っ直ぐと見ていた。

「あの、綾小路君は桔梗ちゃんとどんな関係なんですか……？」

……？オレは赤石の話をしていったんだが……

「……友達だと思っている」

少し詰まるが、そう答えた。本来は櫛田はオレのことをただのクラ
スメイトとしか思っていない可能性も高いが、櫛田の目標から考える
と友達と答えるのが無難な気がした。僅かに櫛田に対する未練が無
かったわけではないと思っっている。

「と、友達……？本当にそれだけ……？」

怯えながらも、じつと井の頭はこちらを訝し気に見てきた。オレが
肯定の意を返すと、彼女は勇気を振り絞ったように手を握りしめ、口
を鋭くした。

「あの、桔梗ちゃんは誰にでも優しいから、その……、勘違いしないで、

下さいね」

そう言つて、井の頭は女子のテントへと歩いていった。

——シヨックだ。オレは、どうも井の頭に、高望みしている勘違い野郎だと思われているようだ。

ふとBクラスの白波千尋を思い返す……先月の須藤の事件の際に、協力した一之瀬との交流。その間に起こった、告白という、あの少女にとつての大きな出来事。井の頭と白波はどこか重なって見えた。やはり櫛田はかなり人望があるようだ。

赤石についての情報を得る事がほとんどできなかったが、井の頭のクラス上の位置を確認できたことは良かった。櫛田の性格と井の頭の立場、二つの条件から考えて、おそらく、今後、しばらくの間、井の頭と関わる必要性は皆無であろう。

気を取り直して、足跡が続いている川辺へと向かう。二人分の足跡が僅かながらに残っている。足跡を追いながら、この足跡の持ち主について思考を巡らす。片方は状況から考えて、井の頭のものだろうか。井の頭の体格と合っていて、それでいて、あまり運動が得意でない人間の歩き方だ。特段、足運びや足跡を意識していない人間のもの。つまり、普通の女子生徒の足跡だ。男の方は……この特徴のない足跡には見覚えがある。

そこまで、考えたところで、川辺に人影が見えた。まだ暗いが、影の大きさと、足跡から誰であるかは分かっていた。

「……あー、赤石か。おはよう。朝早いんだな」

オレが声をかけると、川辺の人影——赤石は、こちらを見ると、半笑いのような表情を作った。相変わらず、判断に迷う表情だ。

「おはようございます。綾小路君」

表情からも声音からも、何を考えているか判断がつかない。あえて言うと、『何も考えていない』ように見えるが、それはありえないだろう。

「……一人か？誰か、平田とかはまだ起きてこないのか？」

少し悩んだが、情報収集と赤石のスタンスを知るために、一手放つ。

「平田君は、まだ起きてないみたいですね。さつきまで、井の頭さんが

いたんですが、眠かったみたいで、テントに戻ったみたいですよ」

赤石は少し悩まし気な表情を浮かべながらも、そのように答えた。先ほどの井の頭の言動や、普段の赤石と平田の関係を思えば、単純に平田の目が覚めるのを待っている、または、上手く会話が続かない井の頭に辟易としたといったところだろうが……何分、赤石の考えは読めない。

やはり、自分はこの男を前にすると上手く思考が纏まらない。そのせいか、意図せず会話が止まりそうになる。本来なら『利用してはいけない』区分である赤石に、あまり危険なことはしたくはないが、今後のこともある。よって、さらに一步踏み込む。

「赤石は井の頭とは仲が良いのか？」

普段のクラスでの様子や、昨日の赤石の班が出発するときの様子と戻った時の様子、櫛田との関係性、そして先ほどの井の頭の態度から考えて、おそらく、特段親しくはないだろう。中立以上友人未満といったところか。お互い櫛田という共通の友人がいる。そういった関係性だ。

答えはほぼ決まっている質問。だからこそ、聞くことに意味がある。読み取れない生徒、赤石求の基準点デフォルトを探るという意味が。

「……難しいですね。本堂君と綾小路君みたいな関係、とえばいいのでしょうか。友人の友人と言えればいいですかね」

集中力を研ぎ澄まし、言葉の一言一句、僅かな抑揚も聞き逃さず捉える。同時に、赤石の表情や仕草に関しても、同様に集中して読み取る。

——これは、本心か？

赤石は、回答に少し困ったような感情を込めていた……ように思えた。また、その抑揚や、言葉の間の取り方からして、自然なものだった。少なくともオレにはそう感じられた。自然すぎるが、『本心』でもこうなのか？

いや、もはやできる限りの手は打った。今できる赤石の基準点デフォルトの読み取りは十分だろう。推測になるが、赤石は嘘をつかない自然な回答をするとき、つまり、基準点デフォルトの状態のときは、見たままの平凡な仕草

をする。以前に、オレが予想した通り、赤石は癖をほぼ持たない人間である、ということだ。一貫している。いや、しすぎている。この読み取りを信用するならば、赤石は今までに一度も嘘をついていないということになる。なぜなら、この男はいつも自然体だからだ。しかし、そうすると、普段の行動の結果とのギャップ、特に須藤を赤点に追い込んだ行動との兼ね合いが取れなくなる。単純に考えて、嘘をつくときも、つかないときも、まったく同じ精神性でいられるということだろうか。

「ああ、いえ、すみません。本堂君と綾小路君は直接話をしているのを見る機会が無かったので……そう、勝手に思っていたのですが、実は仲が良かったりしますか？」

オレが黙っていると、赤石はさらに声をかけてきた。その読み取りは正しい。オレと本堂は特に親しくはない。須藤たちを間に挟んだ関係だ。まさに、赤石と榊田と井の頭の三者の関係との比較としての確だ。そこまで考えて一度思考を中断し、赤石との会話に戻ることにする。あまり、考えて会話が途切れると、先ほどの『分かり切った答えに対する質問』が『ただの雑談』ではなく『不審な質問』になってしまう。

「――、いや、確かに赤石の言う通りだ、本堂とはあまり喋らない。……オレも榊田とは仲良くさせてもらっているが、赤石はやっぱクリスの女子だと、榊田と仲が良いのか？オレからすると、かなり良いように見えるが……」

『雑談』を続けつつ、話の方向性を利用して、榊田の話題へと切り込む。少々危険に感じなくもないが、まだ、これは『雑談』だ。

「榊田さんとは、綾小路君の方が仲が良いと思いますよ。榊田さんと一緒にいる時、よく綾小路君の話になりますから」

客観的に見て、赤石の方が榊田と仲が良いのは分かり切ったことだ。そして、赤石から見た、オレの立ち位置からそのことは明白。つまり赤石のこの言葉は言葉通りの意味ではないだろう。

……これは、どっちだ？赤石はこれを『雑談』として言っているのか。頭の中で数々の思考が流れる。赤石、榊田、チェックシート、指

紋、Dクラス、堀北、茶柱、ホワイトルーム、そしてオレの立場。……これはもはや『雑談』ではない。さきほどの『分かり切った答えに対する質問』は赤石には、最初から『不審な質問』だったようだ。

「……櫛田が、オレの話を……差し支えなければ、どんなことを話しているか教えて欲しい」

言葉に詰まりつつも、『雑談だったもの』の話を続ける。お互いが、お互いの話の裏に気付いている。だが、踏み出した以上、途中では止まらない。止まるには条件が必要だ。そして、その条件は、あと僅かな時間が過ぎれば揃う。ならば、今は、このまま『不自然な自然』を演じればいいだけだ。この状況は時間の経過により、決着を迎えるのだから。

「よく、一緒に行動する事と、頼りになるといった感じの事を言いますよ。あと、そうですね。これは俺の主観ですが、堀北さんとばかり行動している事が気になっているようです。まあ、櫛田さんはずっと堀北さんと仲良くしたいみたいですし、一方で堀北さんは綾小路君以外は寄せ付けませんから、気になるんだと思いますが……」

『櫛田を使っている』という情報開示と、『堀北を支援するな』と示してきたか。前者はいい。既に分かっていたことだ。問題は後者だ。なぜ、堀北への支援を止める？赤石の目的が見えない。単純に櫛田のように堀北が嫌いなどといった理由ではないだろう。この男はそのような理由では行動しない。いや、むしろ、これは堀北に対する妨害ではなく、オレに『動くな』と伝えに来たのか？

オレがこの男を読めないように、この男もオレを計りかねているのか？そうなのだとしたら、まだ手はある。

「……そうだな。確かに堀北と櫛田の関係は何とかしたいな。赤石は何か良いアイデアはないか？」

まずは、赤石の要求を確かめる質問をする。

「堀北さんは、誰に対しても刺々しいところがありますし、中々難しいですね。一度三人で話をしてみたらどうでしょうか？綾小路君ならあの二人の架け橋になれるのでは？」

——そう、来るか……だが、なぜだ。そこまでする必要などないだ

ろう。何が赤石を駆り立てている？

この赤石の要求への回答は本来ならば、するべきではない。だが……。オレは、僅かに心に引つかかった思いを断ち切り、当初の予定通りの決着方法を選ぶことにした。

「悪いが、オレには難しいな。最近知ったんだが、人間関係全般が苦手なようだからな。堀北の成長に期待だ」

オレの完全に話の裏を無視した回答——まるで話の表側しか捉えていない愚かな生徒の回答をすると、赤石は『何とも言えない』といった表情を浮かべた。面白い。この男はこんな表情もするんだな。

そのまま、オレの回答への保留に対して無言になっていた赤石を視線に収めながら、時間を待つ。

そして、オレの当初の予定通りの『会話が止まる条件』が揃った。

「おはよう、赤石君、綾小路君」

そう、平田の介入だ。

平田の起床タイミングは、平田自身の性格とこれまでの行動、そして初日のバス内で睡眠をとっていなかったことから明らかだった。あとは僅かな音に耳を澄ませば、どのタイミングで来るかを予想することは容易い。

唯一の誤算は、赤石の要求内容だった。そこまで行動を起こす理由が分からない。だが、これではつきりした。昨日のクラス内での行動、特に異常な食糧班の成果は、赤石らしからぬ大きな動きで不自然に感じたが、どうやら、あの男は、この試験で大きくDクラスを前進させると決めたようだ。茶柱先生との約束内容を考えると、これはオレにとってもプラスだ。赤石が動くなら、櫛田と平田、そして軽井沢あたりが隠れ蓑となってくれるだろう。オレは堀北を使おうと思っていたが……赤石は、堀北をこのタイミングで使いたくはないということか？これも確かめる必要があるな。赤石の要求も考えると、ある程度、赤石の行動と互換性を持たせたい。

平田と赤石との雑談を終えたオレは、当初の予定通り、伊吹の鞆を漁った。平田の目もなく、クラスメイトの殆どは眠りの中である。そして何より赤石は陣地を離れている。伊吹の鞆を漁るには絶好のタイミングと言えるだろう。陣地を離れて何をしているのかが、多少気掛かりではあったが、今後の方針や赤石との関係性を考えるならば、あまり危険なことはするべきではない。

伊吹の鞆を一通り確認し、鞆の中に「足りないモノ」について考えを巡らせつつ、島の地図を確認する。昨日、赤石の班が戻った時に、王が書き込んでいたものだが……これは異常だな。

昨日の探索の後、最後に赤石の班が合流する前に、平田が各班の探索具合の調査と島の地図の更新を行っていた。オレの記憶にあったモノ——クラスメイトの話声や各探索班の予想される行動領域から、ある程度の島の概形、そして、Dクラスの持っている情報量に当たりをつけていた。しかし、最後の赤石の班の合流後に記述された内容は昨日の時点では目を通せずにいたが……まさか、これ程とは。

——この探索領域は異常すぎる。これ程の範囲を、女子二人、それも運動を苦手とする二人とともに探索したのか、あの男は。

仮に、オレと高円寺がそれぞれ単独で探索し、その成果を合わせても、赤石の班には及ばないだろう。これは理論上の最速をもつてしても探索しきれない範囲だ。どうやってこれ程の範囲を調べた？説明がつかないが……『調べていない』範囲を想像で書いている……いや補っていると考えるべきか？だが、そうすると、ここまで正確な地図は書けない。この地図はかなり精巧だ。オレが船から見た島の特徴とほぼ一致している。いや、地図自体は王が書いていたか。確か彼女はDクラスでは、成績上位者であったが……もしかしたら、赤石からすると櫛田以上に……頭の片隅には入れておこう。

しかし、地図を書いたのがどちらにしろ、やはり探索方法に謎が残る。想像、空想、……補う？

ふと、今までの赤石の異常な能力の数々が頭を過った。

入学式の監視カメラの発見、『チェックシート』の作成、そして異常な探索能力。バラバラな3つの特異な技術。……いや、これは、むしろ

ろ一つの……、流石に発想が飛躍しているか？

……これ以上、考えるのは危険だな。

それに、どちらにしろ、あの男が異常な才能の持ち主というのは分かっていたことだ。それが何であれ、そこから何をするかの方が重要だ。そう、赤石が何をするかだ。それを掴まなくてはならない。

朝食を食べ終えた後、最初の機会が手元に転がり込んできた。

最初の機会——そう、Cクラスのバスケット部の二人がDクラスのベースキャンピングに入ってきたことだ。

これから二人の言うことは、ほぼ精確に予想できる。二日目にしては、かなり良い『引き』と言えるだろう。

オレは、横目で堀北の様子を確認して、今日の行動を決定した。

堀北の置かれた状況や『体調』、そして、堀北に対して何らかの計画を持つ赤石、Cクラスで噂の龍園という男。それら三つの問題を一つに集約させる行動だ。つまり、

——堀北を龍園のいるCクラスへと投げ込む。そして、赤石をその場に立ち会わせる。

少々無理やりだが……だからこそその堀北だ。彼女の現在の立場と状態、兄への確執、そして、オレへの感情と、オレと赤石の関係性、全てが堀北鈴音という少女を駆り立てる原動力になる。赤石がこの少女に固執する理由だけは分からないが……いや、むしろ因果が逆か。膨れ上がった堀北の感情は、赤石をも動かしているのか。もしそうであれば、あの男は堀北だけは読めないのか……？

……それはないな。仮に、そうだとするのなら、赤石の今までの、『やけに、堀北を挑発する態度』が不自然になるか。ならば、赤石は堀北の感情面も完全に理解していると考えるのが自然だ。やはり特別に気を払っていると考えるべきか。オレは、そこまで堀北に期待できるほどの特別性は感じなかったが……赤石にとつて堀北という少女はどんな役割を与えるに相応しいのだろうか。興味深いな。

……？興味深い？

やはり赤石のことを考えると、オレは上手く思考できていない気がする。一度、静かに息を吐き、吸う。心拍数と血圧が僅かに乱れている。無人島での環境の変化もあるが、赤石の影響も大きいな。やはり、あれほどの男と、このような環境下で過ごすことに、無意識下での体調の変動があるのかもしれない。

もう一度息を吐き、思考を一度クリアにする。

——よし正常だ。

感情と体調を制御し、本日の計画を実行に移すため、堀北の下へ向かい、声をかける。

「堀北、ちよつといいか」

「駄目よ」

反射で拒絶されてしまった。

「早くないか？」

堀北らしい回答ではあるが、これを認めてしまうと、オレの計画が狂う。仕方なく、少し、おどけてみせる。

「要件があるなら手短かに言いなさい」

そうすると、こちらの要件を催促してくる。いつも通りではある。しかし、その表情と仕草は僅かに違う。

「さつき来たCクラスの二人。あの誘いに乗って見ないか」

「却下よ」

「早くないか？」

オレがまた、おどけてみせると、堀北は一度深くため息をついた。「必要性を感じないのだけれど？」

——鋭い眼差したが、いつもより力がない。オレの想像以上に堀北の体調は悪いようだ。

「他クラスの動向を知っておいた方がいいんじゃないか？『敵を知り』、とか言うだろ」

「この場合はむしろ、『上兵は謀を伐つ』ね。これはCクラスの作戦の一環よ。乗る必要はないわ」

「堀北は、『交』を伐たれないように……冗談だ。そう怒った顔をする

な」

さきほどの、力がない視線というのは訂正だ。十分、力が籠っている。

「勘違いをしているようだから、一つ言っておくわ。そもそも私に伐たれる『交』など存在しないわ」

「それ、自信を持って言う事じゃないだろ……」

「まあ、いいわ。それで、行くとして、メンバーはどうするの？態々、そんな話をするということは私と貴方の二人だけという訳ではないでしょ。櫛田さん？それとも……」

「あー、たぶん今、お前が思った人選で正解だ」

堀北は露骨に顔を顰めた。

「そう嫌そうな顔をするな。赤石は昨日かなりDクラスの為に頑張ってくれてただろ。そう悪い奴じゃないぞ」

「そうかしら？」

「まあ、ここでの赤石の能力に関する議論は置いておくとして……どうだ、オレとお前と赤石の三人でCクラスへの偵察。サバイバルに詳しい赤石が状況を見て、お前が判断を下す。そして、オレは、にぎやかにしに徹する」

完璧な布陣である。

「ふざけているの？」

「冗談だ。オレは、お前が苦手なコミュニケーションを補佐し、場の空気を整える。どうだ、最高の人選だろう？」

「未だにクラスに友達が一人もない綾小路君が言うと言説力があるわね」

冷ややかな視線がオレの心に突き刺さった。

「……櫛田は、オレのことを友達だと、きつと言ってくれるぞ」

「今から櫛田さんに確認しに行ってもいいかしら？」

「待て、そんなにオレを傷つけないか？」

「自信が無いなら、最初から不確かな事を口に出すべきではないわ」

「わかったわかった。悪かった。オレのことは雑用だと思って好きに使ってくれ」

「それは綾小路君が、今後、私の言う事は何でも従う下僕になるという認識でいいということね」

「そうは言っていないぞ?!」

「とりあえず、赤石君のところに行きましようか」

そう言うや否や、堀北は赤石の方へと歩き出した。

——やはり、堀北は『使える』。

「赤石君、少しいいかしら?」

赤石は堀北を視界におさめると、僅かに瞼を震わせた。赤石の左目の秘密。この情報がまだ有効であるならば、今回のオレの行動は赤石にとつて予想外、ないし可能性が低い選択であったということであろう。チリチリと頭の裏側が焼ける感覚がするが、同時に心にも煮えたぎるものを感じる。まるで、血そのものが強い熱を発しているかのようだ。

「はい、なんででしょうか、堀北さん」

「まず始めに、今からする提案は、私の意志ではなく、綾小路君がどうしてもと私に頭を垂れたから、仕方なく行うということを前提に聞いてもらえるかしら?」

「は、はい……えっと、それで?」

反応が遅い、いや、正しくは『遅く見える反応』だな。

「私と綾小路君はこれからCクラスの偵察に行くことになったわ。そこで貴方のサバイバルの知識が役に立つ可能性がある……。ここまではいいかしら?」

赤石は、鈍く表情を作りながらも、先を促すように堀北の方を見た。まるで、必死に理解しようとする生徒のようだ。相変わらず、自然な演技だ。やはり、この男の表情や仕草を読み取るのは難しい。

「続けるわよ。勿論、これは可能性であって、あまり役に立てない可能性は十分あるわ。というより、私はあまり役に立てないと考えているのだけれど……。貴方は忙しそうには見えないし、クラスの為を考えるなら、貴方も来なさい。以上よ」

堀北は一方的に言い終えると、鋭く赤石を睨みつけた。

「えつと、堀北さん、言いたいことは分かりますし、俺を評価して頂けて、大変光栄なのですが、……ただ、申し訳ないのですが、俺はこれから食料探索に向かいますので、そちらの方でDクラスに貢献できれば、と考えています……」

しかし、赤石は堀北の眼光に臆することはなかった。興味深い対応だ。愚鈍な生徒を演じつつ、堀北の指示も適当に流す。オレと堀北、堀北と赤石、そしてオレと赤石の関係性を考えるなら、最も堀北を苛立たせる行動と言える。堀北を煽ることに関しても、この男は一流だな。

「まず、貴方のことを、私は、まだ評価していないわ。自意識過剰よ。気を付けなさい。それから、」

堀北も堀北で、分かりやすい挑発を会話に入れたがる。能力のある人間は、その能力に応じてプライドも高い傾向がある。彼女ほど能力があると、そのプライドの高さも自然とは言える……言えるが、見事に赤石に操作されているな。

「——貴方の技術的な知識は平田君が既に継承しているし、食料探索については貴方よりも優秀な榎田さんがやってくれるから大丈夫よ。Cクラスの分析に貴方が必要だと言っているの。分かったのなら、従いなさい」

堀北の声には既に怒気が籠り始めていた。それに対して、まるで困ったかのように表情を変え、そして視線を彷徨わせ、拳句の果てに「赤石君、私からもお願い。きっと赤石君がいれば、堀北さんたちの力になれるよ」

——榎田にアイコンタクトを送る。最悪の行動、いや、人間関係、人間心理を完全に理解した恐るべき行動だ。

赤石は榎田の方を見て、少し悩んだかのような表情を作った後に、重い口を開いた。

「……榎田さんが、そこまで言うのでしたら。堀北さん、よろしくお願ひします」

そして、『榎田のおかげ』という余計な一言も忘れない。ここまで来

ると堀北を苛立たせるのが目的の一つだと思っただろう。赤石ならば、堀北の今の体調も理解しているはず……精神的にも消耗されることは、オレには今のところメリットはあまり感じられないが……何か考えがあるということだろうか。

オレの疑問をよそに、堀北を旗頭とした臨時偵察チームはCクラスの本陣へと向かい始めた。

綾小路清隆の独白3―2―2

Cクラスへ向かう最中、自身の苛立ちを鎮めようとする堀北の余計な呟きに対して、思わず笑いが零れてしまう、というハプニングがあったものの、概ね問題なく目的地へと辿り着いた。

厳密に言うと、オレが笑ったとき、視線を感じたことから、赤石にも気づかれてしまったことが問題と言えば問題か？堀北の呟きに対するスタンスは赤石に対するスタンスを表すことになってしまいうのだから。

いや、オレの赤石の能力に対する警戒は朝の会話から察するに、読まれていると考えていい。ならば、今更か。

それに、そんな事を考えている暇は、どうやら無いらしい。

浜辺で文字通り、無人島でのバカンスを満喫しているCクラスの生徒たちを見て、堀北が驚愕し、龍園の下へと向かいだしたからだ。勿論、それだけなら、何の問題の無いことだが……あろうことか、赤石がその場から動かなくなったのだ。一方で、使命感に突き動かされた堀北は、赤石に気付くことなく、そのまま、龍園の下へと恐れ気もなく進んでいく。

人は理解できないものを恐れるという。堀北鈴音は勇敢だ。だから、堀北にとつて理解できない、本来であれば恐ろしい龍園相手に向かつて行く事ができる。龍園を見て、他が見えない堀北。堀北の後ろから着いて行くオレ。そして、草陰から隠れて動かない赤石。

オレは恐怖を感じている。この『ありえない』状況が理解できないからだ。龍園の行動は確かに興味深い。まだ会ったことは無いが、会うことが期待できる程度には面白い男だ。堀北は優秀な面を多く持つ少女だ。そして何より『使える』。そんな二人の対話の陰で、異常な才能の男が草むらに隠れている。流石に、これでは堀北があまりに不憫だ。

このような展開になった責任の一部はオレにもある。そしてついでに言えば、このままでは、堀北が赤石が居ないことに気付くのは龍園と話を始める直後になるだろう。そうなれば、赤石不在への怒りは

なぜかオレへと向かう。できれば避けたい展開だ。

「堀北、赤石が草陰に隠れたまま動かないぞ」

「何を言っているの？いくら彼でも……いないわね」

「知識的に考えて、一緒に来てもらった方が……」

オレが最後まで言い切ることなく、堀北は顔を般若の様に歪めると、鋭く口を開いた。

「すぐ、連れてきなさい。第一、綾小路君がどうしても、赤石君を連れて行ってほしいと言ったからでしょう。まったく」

「あー、それは悪かったな。まあ、赤石も驚いてるのかもな。まさかCクラスがこんな風にポイントを使っているなんて完全に予想外だ」

「言い訳は聞かないから、早く連れてきなさい。何なら、櫛田さんを出汁に使っても構わないわ」

「……それを構うのはお前ではなく、櫛田……あ、いや、何でもない。すぐ連れてくるから、そう怒った顔をするな。須藤が悲しむぞ」

意中の美少女が怒りの表情ばかりしていたら、オレの友人も嘆くだろう。いや、案外、それはそれで良いと言いかもしれないが。

背後から堀北の殺意の視線を感じつつ、赤石の下へと向かう。今日は、よく瞼の動く日だ。

「赤石、堀北と一緒に来いって言ってるぞ」

「綾小路君、俺は人前があまり得意ではないですし、他のクラスの人たちに囲まれるのは、どうにも、自分には合わないような気がします。お二人の邪魔になってしまったら申し訳ないですし、ここでお二人を待とうと思います」

——赤石はどこまでオレを困らせれば気が済むのだろうか。

堀北だけではなく、オレの精神的な摩耗まで狙っているのか……？流石に、それは無いと思いたい。いや、無いはずだ。恐らく、少しでも堀北を精神的に消耗させたいのだろう。しかし、分からない。この特別試験になった瞬間、赤石の堀北への精神的な操作は病的といって良いほど激しくなっている。この特別試験のためか、それとも今後のより大きな視点での判断か。どちらか分かれば、ある程度オレの方でも考えが纏まるのだが。

「あー、分かった。一応、堀北には知らせるが、何が起こってもオレは責任を取りかねるからな」

成果もなく、堀北の下へと歩く。……いや、駄目だ。堀北の殺意の眼差しが強くなっている。思わず、赤石の方へと振り返りそうになるが、鋼の意志で耐える。ここで振り返れば、赤石の謀略にケチがつく。堀北の機嫌、赤石の謀略、どちらも関わりたくない。だが、どちらとも関わらなくてはならない。重いな。流星は自由の代償といったところか。だが、オレはイカロスだ。ならば、やることは決まっている。水底あかひしよりも太陽ほりきただ！

「赤石は、まあ、見ての通りだ」

オレの報告を聞くと、堀北は一度、赤石のいる方へ鋭い視線を飛ばすと、そのままオレを流し見た。

「随分なげやりな言い方ね。とても失敗の報告とは思えないのだけれど……赤石君を今まで高く評価していたことに対する弁明と、今、赤石君を連れてくるなんていう簡単な使命も達成できなかった弁明、どちらの方が貴方にとって簡単かしら？」

太陽に近寄りすぎたようだ。蠟が溶けてどころか、肉体まで焼かれてしまいそうだ。

「まず、赤石を連れてくるのが簡単と定義することにオレは、そこはかとなない疑問を感じるのだが」

「次、ふざけた事を言ったら、コンパスが火を噴くことになるわ」
「待て。それは恐喝だ。第一、コンパスを持ってないだろう」

「二学期をお楽しみに、とだけ伝えておきましょう」

目が冷たい。これは本気だ。

「わかった。理解した。そうだな。どちらが難しいか、だったな。よし……真面目に考えるから少し待ってくれ」

「二学期をお楽しみに」

流星に少し話が過ぎたようだ。まあ、これで赤石への義理は果たした。二学期のオレの健やかな日常が僅かに脅かされた気もするが許容範囲だ。

「わかった。今から話す。えっと、そうだな。まず人には得意不得意、

向き不向きがあつてだな——」

「もういいわ」

全て聞くことなく、堀北は赤石の潜む草陰へと歩き出した。これは大変なことになるぞ。僅かに躍る心を隠し、堀北の後を追う。

「赤石君、ベースキャンプで話したことをもう忘れたのかしら？ 私は、Cクラスの偵察と一緒に来て、その上で協力するように言ったはずよ。そして、貴方は私に従うと約束したはずだわ」

「ええつと、堀北さん。仰りたい事はよくわかります。しかし、人には得意不得意、向き不向きがあります。……俺はお二人のように勇敢でも優秀でもありません。ここで残って、その上で、お二人がCクラスの本陣に入っている間はCクラスの観察をして、何か情報を得られれば、俺なりに役に立てるのでは、と思っっています」

この男、耳も異常に良いようだ。堀北のオレへと向ける感情を悪用するためだろう。

「櫛田さんの命令は聞けても、私の指示は聞けないという事からしたら？」

眉根を寄せながら、堀北が憎々し気に言葉を漏らした。

「そ、そういうつもりは……無いのですが、すみません。ただ、今の堀北さんは冷静ではないように感じられます。果たして今の判断は正しいのでしょうか？」

赤石は瞼を僅かに震わせていた。あまりにも自然に瞼が震えるタ イミングが自然すぎる。まるで焦っているように見える。

「今、私はクラスを率いる立場として、やるべきことが山ほどあるわ。貴方一人に時間をかけている暇はないわ。場合によっては実力行使もせざるを得ないわね」

今の堀北であれば、傷が残らない程度に手が出る。そして今までの赤石の対応から、何が起ころのかも完全に理解できる。

「不快に感じたのなら謝りますが、……先ほどにも言った通り、人には得意不得意が——」

「謝罪は必要ないわ。来なさいと言ったのよ」

堀北の技を受けた赤石の動きは素人同然だった。おそらく、肉体面

では本当に素人なのだろう。今までも何度か赤石の身体能力についての情報を持っていたが、これまでの経験上、それも偽装の可能性があった。しかし、肉体の動きは誤魔化しがきかないものだ。

——思考は誤魔化せても、肉体は誤魔化せない。

これなら最悪、オレでも制圧可能だ。できれば避けたいが、最後の手段として考慮に入れるべきだろう。この情報を知れただけでも大きな意味があったと言える。やはり堀北は『使える』。

予想外の展開というのは続けて起こるものだ。目の前で行われて
いる光景を前に、僅かに、背筋が冷たくなるのを感じた。

今、オレと赤石を無視し、龍園と堀北が激しい舌戦を繰り広げている。

龍園という男を始めて見た。しかし、まさか、この男が龍園だったとは。

5月のはじめ、赤石と話をしていた男だ。この男が龍園であったならば、今までの赤石の行動が全て裏返る。

これまでは、須藤の事件では赤石が関与した痕跡はなかった。勿論、一之瀬に送られた怪しい動画や、審議会の日の態度など気になる点はあった。しかし、決定的なものは何一つなかった。だが、この男が龍園であったならば、赤石の行動の意味が大きく変わる。5月の時には龍園と赤石に交流があった。恐ろしいな。いや、待て。櫛田と赤石の関係は何時からだ。嫌な方向にばかり思考が進む。

いや、根本的に言えば、龍園も櫛田もまだ脅威ではない。脅威になり得るのは現状ただ一人だけだ。ならば、選択を強いられる事態になれば、そこを叩けばいいだけだ。

幸いにしては、オレには先ほど堀北が寄越した情報がある。
……………随分タイムिंगの良い情報だった。オレの動きを全て読んでいたならば、赤石の能力を試すことも読めているはず。ならば、オレに逃げ道を残すかのような情報が、あまりにもタイムिंगが良いの

は偶然ではなく必然では？先ほどの情報だけに頼りすぎるのは危険だな。もう一度、堀北を使うか？いや、そこまでの迂闊さを赤石は許さないだろう。

ならば、発想を変える。堀北を『使う』のではなく、堀北を『使わない』。この方法で赤石の出方を窺う。そして場合によっては他の駒も使う。オレに現状使える手駒はそう多くはない。だが、一時的な利用という意味では、思考パターンが読みやすく、特殊な情報を共有している榊田という選択肢もある。榊田は赤石の手駒であることを考えると危険性は非常に高いが、だからこそその榊田という選択を取るのも手だが……

やはり恒常的に使える手駒が堀北一人というのは、こういった場合に困るな。もう一人、手駒が欲しい。クラスに影響力がある、堀北とはまた別のタイプの、そんな手駒だ。

一人、都合の良さそうな候補がいるが、今はまだ時期早々か。

手札の数では赤石に劣る。今までは赤石とは争う必要性は皆無であつた。いや、皆無でありたいと願っていた。故に、できるだけ考えないようにしてきたが、龍園と赤石の繋がりラインを見てしまった以上、もう目を背けることはできないかもしれない。

幸い、手札の質はいい勝負だ。しかし、手札の切り方は赤石の方が一枚上かもしれない。いや、正しくは、手札の引き方か。あの男の手札の引き方はどこか不可思議だ。超常的というべきだろうか。朝の地図の件が頭に過つた。この考え方は、あまりに発想が飛躍しているが、やはり、そうなのか。

確信が持てないが、調べるのは危険だ。しかし、調べないのはそれ以上の危険性を持つことになる。直接的な危険か、可能性の危険か。安全性を考えるなら手札の補充だが、タイミングが悪いし、目下の危険性がある以上、そちらへの対処が優先される。後手後手な状況だ。……一度、整理しよう。合理性と蓋然性から考えるべきだ。

赤石はどんな人間か。手段を択ばない人間だ。そしてプライドは能力よりも遥かに低い。この学校では珍しい特質だ。一方で堀北への干渉の仕方を見るに、効率的な残酷性も持っている。性格は表面的

には温厚、内面は掴めない。目的は一切不明だ。だが、あくまで戦術選択は合理性を考える人間だ。朝の要求から考えると、赤石の短期的な行動指針としては、Dクラスを上クラスへと押し上げる、ないし、それに準ずる行為、またはその過程上での選択そのものが指針のように見える。

そして、目の前で展開されている堀北と龍園の舌戦から、大まかな龍園の性質は見えた。赤石の戦術選択から考えて、龍園と櫛田を直結させるということはない。そして、龍園が現在最も注視している相手は堀北だ。赤石でもオレでもない。ならば、龍園と赤石の関係性はおそらく非対称的なものだ。つまり堀北と赤石の関係に近い。無意識的に龍園が操作されているという考えが最も蓋然性が高い。

おそらく、最悪の状態ではない。もちろん、あと数か月放置すれば、赤石に大量の手札が補充されることになる。ならば、その前に手を打つか。いや、結論を急ぎすぎている。……………？

——オレは赤石をどうしたいんだ？

排除したいのか、そうでないのか。いや、そもそも赤石は『利用してはいけない相手』だ。なぜ、オレはここまで焦っている。直接的な理由は、龍園と赤石のラインが見えたからだ。異常な才能の持ち主が水面下で行動し、こちらの動きを阻害している。排除するには十分な理由と言えるかもしれない。焦ってはいない。オレは自分を『焦っている』と誤認している、いや、そう思いたいのか？だが、なぜだ……纏まらない考えになんとか答えを出そうとしていて、ふと、こちらに強い視線を感じた。どうやら、一度考えることを止める必要があるようだ。

「そのわりには随分とビビッてやがるみたいだな。お供を二人も付けて、一人じゃ怖くて来れなかったか？」

龍園は強い視線のまま、こちらに声を投げかけてきた。オレは、臍気に龍園を流し見る。

「確かお前は金魚の糞の綾小路で、お前は……いつぞやの間抜け野郎じゃないか。久しぶりだな」

金魚の糞。表現から察するに、この男はあの時、すれ違ったオレを

覚えてはいないようだ。そして、赤石への言葉。やはり龍園と赤石の関係はオレの予想通りの関係に近い。

「え、えっと、どうも」

赤石もいつも通りに答えた。まさに『龍園を前にした赤石』だ。いや、正しくは『堀北の監視の下で、龍園を前にした赤石』か。本当は龍園に適当に頭でも下げて誤魔化したいが、堀北の手前それはできない。そんな風に見えるDクラスの生徒だ。

「鈴音、良い事を教えてやる、この間抜け野郎がここに来た理由はお前のためでも、クラスの為でもない」

「勝てないと分かって、こちらを混乱させる気でしょうけど、その手には乗らないは、行くわよ綾小路君、赤石君」

「……赤石か、憶えたぞ。一つ教えておいてやる、赤石。ひより目当てで来たんだろが、あいつはもうリタイアした。残念だったな」

名前すら知らなかったのか。僅かに、息をなでおろす。ここまで、一方的な関係であれば、むしろ龍園は安全だろう。

その後も、赤石の巧妙な心理操作は続き、龍園と堀北は綺麗に踊り続けた。

Cクラスのベースキャンプに来たことで得られたものは多かった。

龍園の性質、そして何より赤石との関係性を知ることができた。それと、Oポイント作戦ということを考える発想も中々面白い。この学校には、あまり見なかったタイプだ。それにしても、

「Oポイント作戦か、面白いな」

浜辺を去るときに、ふと、笑みが零れた。

——龍園は面白い。その上、適度な刺激をオレに与えてくれそう
だ。

刺激というものは人生を彩るスパイスだ。しかし、何事も限度がある。強すぎる刺激は、心や体を壊す。オレには龍園くらいが丁度良いのかもしれない。

鋭い視線を背後から感じながらも、オレはそんな現実逃避をするのであった。

堀北がまた『良い』仕事をしたのは、浜辺から森へ入ってすぐのことだった。

「赤石君、さつき龍園君が言った言葉に何か心当たりはあるかしら？」
堀北というカードは一度使えば、役目を何度も果たしてくれる。たとえ、オレに使う気が無かったとしても。

「龍園君ですか、彼は努力を否定していましたが、個人的には努力すべきだと思います。俺は平田君や堀北さんの考えの方が正しいと思います」

だいぶ苦しい話の逸らし方……いや、違うな。どうやら、赤石は、この件に対する情報の秘匿よりも、堀北の精神を蝕む方を選んだようだ。

「……そこではないわ。龍園君が去り際に言った、『ひより』という言葉についてよ。聞いたところ、人名のようだけれど、赤石君の知り合いかしら？ 貴方にCクラスの友人がいたとは聞いてないのだけれど。もし内通行為などがあつた場合は厳しく処理するから、そのつもりで答えなさい」

堀北の言葉に対して、赤石は不快そうに眉を寄せた。珍しい表情だ。堀北も僅かに目を開いている。

「まず、『ひより』という名に聞き覚えはあるかしら？」

堀北は勇敢だ。オレなら躊躇うことを躊躇わない。堀北の決意を無駄にしないために、赤石への意識を集中させる。

——実は、オレは、この『ひより』という名前には心当たりがある。おそらくCクラスの赤石が付き合っている少女のことだろう。だからこそ、興味がある。オレは今まで恋愛というものの経験がない。一般的な知識はあるが、それではオレにとつては不十分な気がしてならない。赤石ほどの非才の人物の恋愛観というのには、自身の恋愛観を見つめ直す貴重な知識となりそうだ。知的好奇心を満たすという面が無いわけでは無いが。いや、勿論、一番重要なことは、赤石という危険人物のメカニズムを知ることである。自分の恋愛観以上に、まして

や、人の恋路を野次馬気分で見たいわけではない。当然だ。

「えっと、たぶんですが、椎名ひよりさんのことですね。Cクラスの生徒で、俺の、なんて言ったらいいんでしょうかね？……友人と言うべきでしょうか」

——嘘だ!!

思わず、少し前に放送していた猟奇的な内容のアニメの名セリフを心の中で叫んでしまう。

「Cクラスに友人ね……別にそれは否定しないわ。貴方以外にも他クラスに友人を作っている生徒はいるし、実際、櫛田さんもCクラスに沢山の友人がいるらしいわね。一説によると飼い犬は主人に似るそうね」

違う堀北、そこではない。もっと深い関係ではないのか、という方向に話を進めるべきだ。

「ええ、俺も得難い関係を得られたと思っています」

「——ただ、龍園君はまるで貴方を知っているようだった。貴方は一部の能力は平均以上にあるものの、飛び抜けて優秀ではない生徒よ。なぜ、Cクラスの暴君とも言える龍園君が貴方の事を知っていたのかしら？その背景を詳しく知りたいわね」

………。確かに、それは追及する価値のある情報だ。堀北のおかげで助かったと言うべきか。危うく、赤石の策略に騙されるところだった。そうか、椎名ひよりは見せ札だったか。そうか、恋人ではなかったのか。ではなぜ恋人繋ぎをしていた、赤石。疑問が尽きない。

「前、椎名さんと話していた時に龍園君に話しかけられまして、その時、一方的に彼の事を知ったんです。ただ、俺は、その、龍園君ってちよつと威圧的なのところがありますよね？それで、怖くて、名前を言わなかったんです。そういうこともあって、本当は龍園君の前に行きたくはなかったのですが……」

あの時が最初のコンタクトだったと言いたいということは……どうも、オレがあの時、あの場で三人を目撃していたことに気付いていたようだ。あの時、赤石とはだいぶ距離があった。赤石の肉体的な能

力は平均より少し上程度。おそらく五感に関しても、ほぼ肉体と同等と考えていいだろう。

あの時、龍園が気付いていなかったことを考えると、赤石が気付いていたとは思いいくないが……いや、Cクラスの女子の方、椎名ひよりの方は、あの時オレの目の前を通っていた。おそらくオレの存在に気付き、赤石に報告したと考えるのが自然か。

「そう、大体わかったわ。つまりクラスを裏切っているわけではないのね」

「勿論です。平田君や榎田さん、他にも最近では軽井沢さんや篠原さんたち、俺みたいなヤツの友人になってくれる優しい方が、Dクラスには多いですから、裏切ったりなんかしませんよ」

平田は分かる。榎田も、まあ、分からないことはない。しかし、軽井沢と篠原を『優しい』に分類したか。勿論、真面目に答える気が無いというだけだが、思わず笑いそうになる言い方だ。

「確かに、忠犬の貴方が主である榎田さんを裏切ったりはしないわよね」

堀北は不快感をあらわにしながら、そう答えた。

その後、Bクラスへの偵察を赤石が辞退し、堀北はそれを止めることはなかった。僅かに、この赤石を、堀北の監視の下で一之瀬と衝突させたらどうなるか、という実験に興味があったが、さすがに堀北への負担が大きすぎることから断念した。

——堀北への負担のコントロール。

おそらく、これが赤石の特別試験での戦術の一つだ。先程までは分からなかったが、龍園を見た後なら分かる。赤石は、堀北をリタイアさせ、リーダー変更を行うことを画策している。

これは龍園対策の一手だ。龍園の性質と、所持していたトランシーバー、そして伊吹の存在。これらを繋ぎ合わせれば、龍園が何をしようとしている予想するのは容易だ。

伊吹を使い、こちらのリーダー情報を得ようとしている。赤石は龍園の性質についての情報を持っていたが故に先手を打ったと考える

べきだろう。だが、赤石の場合は行動するタイミングが、あまりにも早すぎる。

赤石が堀北の精神を摩耗させようとしたのは特別試験が始まってすぐだ。つまり伊吹がこちらに潜入する前だ。すなわち、特別試験開始直後、ないし開始する前には龍園の戦術を読み取っていたことになる。これは異常と言って良い。伊吹という情報も、トランシーバーという物証も無いのに、龍園の行動を読み、その行動がDクラスでは防げないと確信していたことになる。試験開始直後に、そこまでの未来を確信できるだろうか。

だが、実際に赤石の予想通りの展開になりつつある。いや、堀北の体調不良に気付いた故に、このような戦略になったのかもしれない。堀北の不調を、最も効率良く利用できる手。そして、赤石にとつて最もベストな手が、堀北を使ったりリーダー変更だったのかもしれない。赤石の今回の戦術を振り返る。

試験開始直後に龍園の行動を予想。そして恐らく、堀北の体調不良を確認し、対龍園のために利用するために、堀北の精神を執拗に摩耗させた。さらに、櫛田を使い、堀北をリーダーへと誘導した。

予想が突飛なところを除けば、戦術としては「ありえない」という考えではない。試験中にリーダーを交代させるといのは本来は奇手だが、状況によっては妙手と言える。龍園のあの性格、そして、伊吹の存在や、Dクラスの性質を考えれば考えるほど、堀北を脱落させるのは理にかなっているようにも思える。時間があれば、オレも同じことを考えただろうが、試験開始直後に思いつけただろうか。

兎も角、赤石の堀北の使い方は理解した。なるほど、つまり、赤石はオレへ『堀北脱落の邪魔をするな』と警告したかったという事か。さて、どうしたものか。オレも真つ当な人間だ。摩耗していく隣人を見るのは心が苦しむ。しかし、仕方ない。ここは赤石に従おう。が、赤石の要求が堀北の脱落を阻止するということならば、他の面はオレにやらせてもらおう。こちらも、先生相手に多少成果がほしい。

幸い、Aクラスのリーダーは目星がついている。そしてCクラスのリーダーに関して、試験終了までには確信を持てるだろう。

堀北とともにBクラスの陣地へと向かう最中、ふと、疑問が頭によぎった。

——なぜ、オレは成果が欲しいと思ったんだ？

茶柱先生は赤石の能力を認識していない。そして赤石の性質上、オレが赤石の手柄を横取りして報告しても気にしないだろう。赤石相手に先手は打てず、そして、主導権を取る必要性がないのならば、無理に行動する必要はない。ならば、この試験を赤石任せにするという手もあるはずだ。

なぜだ？

今のオレには、その答えを出すことはできなかった。

綾小路清隆の独白3―2―3

Bクラスの陣地にたどり着き、最初に感じたことは、純粹なレベルの高さだ。一人一人が協力しあっている。一之瀬を中心にクラスがよく纏まっているというべきか。Dクラスとは、かなり違う。唯一、Dクラスが勝っている点と言えば、それは一つしかないだろう。

「……食糧か」

「何か言いたそうね、綾小路君？」

『都合よく』堀北がオレの独り言を咎めてきた。

「……そうだな。あ、いや、何と言うかだな」

少し語調を濁し、言葉を選ぶように間を取る。

「櫛田さんと赤石君のおかげという妄言はいい加減にしてほしいのだけれど」

案の定、堀北は想定通りの答えを返してきた。この調子であれば、Bクラスのベースキャンプでも堀北は十分に役割を全うしてくれるだろう。

「でも、Bクラスを見た感じ、食糧以外は、うちのクラスよりも良さそうだろう。逆に、食糧で勝っているっていうのは結構凄いこと……なんじゃないか？」

「ナチュラルにBクラスに勝てないような言い方は止めなさい。赤石君の負け犬癖が移っているわよ。それに、この付近に、たまたま食糧が自生していなかった可能性もあるわ。もしくは、一之瀬さんが自生した食糧の利用に関して何かデメリットを感じたかもしれないわね」

可能性としては無くはない。しかし、蓋然性は低いと言える。この学校は平等ではないが、平等を装っている。つまり前者に関して言えば、ある程度スポットと植生のバランスは確保されていると考えられる。実際に昨日の偵察からしても、一之瀬のところだけ、食糧が極端に少ないとは考えにくい。そして、後者に関してだが、こちらも、一之瀬の性格やBクラスの状態を考えると、可能性はあったとしては、蓋然性は低い。

「まあ、確かにそうなのかもしれないが……」

こちらに向かってくる足音を感じ、言葉を途中で止める。見ると、一之瀬が手を振りながら、こちらへと歩いてきた。

「堀北さん！綾小路君！よく来たねー」

一之瀬は、明るい表情を浮かべ、快活な声で話しかけてきた。多少、疲れの色があるが、この試験の性質を考えると、十分すぎるほどの活力があると言えるだろう。

「一之瀬、久しぶりだな。神崎から朝、Bクラスのベースキャンプの場所を教わってな。来ても良いって意味かと思ったが……良かったか？」

「もし、来ることを禁じていた場合は、綾小路君が責任を取るわ」

「いや、お前も来てるだろ」

「神崎君の話は聞いていなかったわ。これは綾小路君の責任よ」

オレと堀北が馴れ合っていると、一之瀬は笑い声を漏らし、口を開いた。

「あはは。相変わらず、二人は仲がいいね」

「そう見えるか？」

「それはないわね」

堀北は冷たく吐き捨てると、こちらを軽く睨んだ。早く本題に入りたいようだ。

「息がぴっ、いや、ううん。何でもないよ。えっと、特別試験の話でも……する？」

一之瀬も堀北の気持ちを汲み取り、ちらりとオレを流し見て、そして再度堀北を見た。須藤の事件の件で、少し注目されたかもしれない。

「そうね。できれば一之瀬さんとは、いくつか情報の共有をしたいと考えていたところよ」

「うん。私もだよ。堀北さん」

そういうと、堀北と一之瀬は特別試験に関する話し合いを始めた。オレは口を閉ざし、会話は堀北に任せ、影に徹する。

二人は特にポイントの使い方などを交互に話し合った。また、今回の特別試験で『BクラスとDクラスは互いのクラスのリーダーを当て

ない』という取り決めがされた。口約束だが、堀北と一之瀬の性質上、破ることはないだろう。

ある程度、話の区切りがついたところで、一之瀬がふと遠い目をして、なんとなしに呟いた。

「でも、ちょっと意外かな。平田君と赤石君が来るかと思ったよ」

平田と櫛田ではなく、平田と軽井沢でもなく、平田と赤石か。興味深い発言だ。

「それは、どういう意味？」

当然の如く、堀北が追及した。相変わらず、堀北は使える。

「え……うあ、えつと、ごめんね。今ひよつとして声に出ってた？」

流石に、その誤魔化しは厳しいが……どうも一之瀬の場合は単純な誤魔化しと判断しにくい。

「私には、はつきりと聞こえていたけれど……綾小路君はどう聞こえたかしら？」

こちらを見る堀北と目が合った。どうやら怒りの熱量にも輻射という概念があるようだ。

「あー、まあ、何と言うか、気持ちはわかる。オレと堀北よりも、平田と赤石というのは、しつくりくるからな」

適当に会話を引き延ばし、情報収集に努める。櫛田、龍園と赤石の黒い手……いや、赤い手か？赤い手が至る所に先回りしている。一之瀬とも何か関係があるのだろうか。

「あー、いやいや、全然、そんなつもりはなくてねっ！ごめんね。堀北さん、綾小路君。ただ、その、何と言うか、Dクラスだと平田君が特に有名だし……つい、思っちゃって。でも、堀北さんや綾小路君の事を低く見てるつもりはないよ」

「……………百歩譲って平田君は分かるわ。でも、なぜそこで赤石君なのかしら？一之瀬さんは彼と面識があるの？」

怒りの視線を一之瀬に飛ばしながらも、堀北は言葉を発した。対する一之瀬は、思ったよりも自然体で、口を開いた。

「うん？面識というか、あれ？あ、そっか。……………えつとね。

以前、赤石君と話をしたことがあって、何と云うか、Dクラスの参謀みたいな人だなーって思ったからかな。あと平田君とよく一緒にいるしね」

今の間は、天然なのか、故意なのか判断に迷うな。今までの『オレから見える一之瀬像』からすると故意ではないように思えるが……どちらにしろ、一之瀬は、堀北とは違う、赤石に対する見方を持っているようだ。そしておそらく、他の生徒とも違うものだろう。

さて、どうしたものか。堀北に期待してみるか。

「まあ、平田は皆の纏めでベースキャンプに残らないといけなからな。赤石も忙しいから、ここには暇人二人で来た感じだ」

「分かっていると思うけれど、一之瀬さん。暇人は綾小路君一人よ。私は、純粹に、特別試験の状況確認と、一之瀬さんとの貴重な対話の機会を逃さないために来たわ」

「貴重だなんて……ちよつと照れるな。でも、まあ、私も、それは同じかな。堀北さんと綾小路君とお話できたのは大きかったよ」

一之瀬を観察するが……少し難しい。赤石ほどではないが、一之瀬も『読み取りにくい』人間だ。

「綾小路君程度で良ければ、クラスポイントに関わらない範囲でなら、好きに使ってもらっても私の方は構わないわ」

「それはオレが構う内容じゃないのか？」

そうオレが言くと、堀北は、一度鼻で笑うと、無言を決め込んだ。仕方がない、オレが踏み込むことにしよう。

「それにしても、赤石が参謀か。まあ、テストの成績も良いし、結構似合ってそうだな」

「綾小路君がテストの成績を気にするとは意外ね」

堀北が上手く乗ってきてくれた。ここで会話を引き延ばせば……オレの想定する一之瀬の人物像からして、もう少し情報を引き出せるだろう。

「いや、実際気にするだろ。赤点になると一発退場だからな。オレもひやひやしたよ」

「貴方の普段の凶太さを考えると何も言えないわね」

「あはは……二人はやっぱり、ってごめん、この話はさつき怒られたばかりだったね。えつと、まあ、その、……話を戻すと、なんとなく、さつきはイメージで平田君と赤石君って思っちゃったんだよね。不快だったよね。本当にごめんね」

一之瀬は誠実な人間だ。いや、より正確に言うると、『誠実に見える人間』だ。だから、堀北の苛立ち具合を見せれば、先ほどの件を蒸し返すことができる。

「いや、全然いいぞ。というか半分合ってるしな」

一手打つ。一之瀬はどう返すか。

「うん？半分？」

「いや、まあ、さつきまで赤石はいたんだが、見ての通り、堀北が素直になれなくてな、気を使って別れてくれたみたいでな」

一之瀬の仕草や表情に意識を向ける……ほう、そうなるか。

「綾小路君、そんなに二学期の楽しみを増やしたいのかしら？」

堀北の言葉を流し聞きながら、一之瀬の表情について考える。そう、一之瀬は——

「まあ待て。落ち着け。ちよつとしたジョークだ。見ろ、一之瀬も少し驚いてるだろ」

——驚いた表情を浮かべていた。赤石と平田が来ることを予期していたと先ほど言ったが、一方で、赤石とオレと堀北の三人では不自然か。それとも、赤石が途中で抜けたのが不自然か。どちらにしろ、興味深い。

「……え、いや、私が驚いたのは、……うんつと、もしかして堀北さんつて」

「何かしら一之瀬さん？」

さあ、どう出る一之瀬。

「えつと、違ったら悪いんだけど……もしかして、堀北さんつて赤石君のことが好きなの？」

……

「どうして、そんな突飛な話を始めるのかしら。一之瀬さんが言うからには何か根拠となるものがあるのよね？」

.....

「根拠って言っていいか分からないけど、さつきから赤石君関係だけ、かなり堀北さんは気にしてるみたいだし。私の経験上、こういう場合合はそういうケースが多いかなって……えっと、違ったかな？」

.....

「絶対に、それだけは有り得ないと言っておきましょう」

ふう。息が詰まりそうだ。

「それなら……」

「逆に聞きたいのだけれど……一之瀬さんは赤石君の事を好きと言えるの？」

追及しようとした一之瀬の言葉を遮るように、堀北が言葉を発した。

「んー、好きと言うか……赤石君って多才だし、頭もいいから、気になっちゃうのかな？」

多才か。それはどちらの意味だ。表面的な、何でもそれなり以上にできるという多才という意味か、それとも別の意味か。

「一之瀬さんが評価するほど優秀とは思えないのだけれど」

「そうかな？私の知ってる赤石君って結構頭が良さそうなイメージがあるけど……」

「一之瀬さんは赤石君とは知り合いなのかしら？」

「知り合いというか、何度かお話ししてるね。そんなに意外かな？」
「意外ね」

堀北が頑張ってくれているが、一之瀬の方が上手だな。会話に粗が少ない。どうとでもとれる会話だ。単に天然なだけにも見えるが、どこか、櫛田よりも巧妙さを感じるのには気のせいだろうか。

「私も意外かな。この点では堀北さんと意見が合うと思ったから……そういうえば、綾小路君、赤石君はさつきまで一緒だったってことだけで、つまり、Ｃクラスへは三人で行ったってことでいいのかな？」

オレは特に考えることなく口を開いた。

「ああ、そうだ」

「待ちなさい、綾小路君」

かぶせるように堀北が遮ったが、少しだけ時間が足らなかつたようだ。やはり堀北は期待を裏切らない。

「あ、堀北？悪い、言ったらまずかつたか？」

「……一之瀬さん、いきなり綾小路君に話題を振らないでもらえるかしら……綾小路君の小さな頭だと、上手く答えられるか不安だわ」

「綾小路君も頭は結構良いと思うけど……それに堀北さん、やっぱり赤石君のこと気にしてるね。私には秘密だったりする？」

強いな。それに、よく見ている。しかし、オレと赤石が同格か。オレは赤石ほど異常な才能はない。そして、今までのオレの振る舞いで、一之瀬がオレを正しく評価することができていたら、それは一之瀬は誇大妄想者だ。そして一之瀬の今までの実績を見るにそれはない。つまり、一之瀬の持つ情報量はそれほど突出しているわけではない。い。

「別に秘密ではないわ。ただ、……そうね、さっきまで龍園君と話をしていたから他人に対して疑り深くなっているかもしれないわね」

どういうわけか、一之瀬は、龍園や櫛田が赤石に下す評価よりも高いものを、赤石に対してしているようだ。一方で、あの男の才幹を深く知っているわけではないようにも見える。なぜなら、一之瀬から見てオレと同格ということは、堀北や平田よりは下ということなのだから。

「あはは、龍園君には悪いけど、それ、ちよつと私も分かるな……それに、いきなり綾小路君に聞いたのは、確かに怪しくみえちゃうね。赤石君のこと、堀北さんに聞くのは、堀北さんにとって嫌なのかなって思ったら、ついね」

しかし、普通のDクラスの生徒に向けるものとは違うものを赤石に向けている。

赤石の何かを掴んだか、それとも掴まされたのか。もし、後者であれば、それもまた、あの男の策謀の一端なのだろうか。恐ろしいな。「いえ、私も悪かったわ。さつきお互いに不戦同盟を結んだばかりなのに、少し、色々と初めての環境で参ってるのかもしれない」

「そうだね、私も、初めての体験だから、いろいろ気になっちゃったか

も。堀北さんも綾小路君もごめんね」

そう一之瀬が謝り、僅かに会話に切れ目が生じた。

その切れ目が、オレにとつても予想外の事態を生み出した。

これまでの疲労、苛立ち、いろいろな思いが貯まった堀北にとつて、僅かな緊張の切れ目。

「皆どうして彼に構うのかしら……」

綻びから出た小さな言葉。隣にいたオレでも聞こえるか聞こえないかの、堀北の、ほんの小さな囁き声。

「彼つて、赤石君？」

それを一之瀬は拾い上げた。

「いえ、一之瀬さん。気にしないで。独り言よ」

突き放す堀北に対して、一之瀬は一歩足を踏み込み、堀北の目を見ながら小さく囁いた。

「さつき私も独り言拾われちゃったから、私も拾っていいかな」

優しく囁く一之瀬の声に、オレはなぜか鳥肌が立つのを感じた。

「ごめんなさい。不快だったわね。謝罪するわ」

「ううん、全然不快じゃないよ。気にしないで……それと、皆が赤石君を気にする理由は分からないけど、たぶん私は……多才ってだけでなくて、一番は『なんとなく』だと思うよ」

一之瀬は表情は優し気だが、目はじつと堀北を見ていた。真剣な思いというのだろうか。そういった部類のモノを一之瀬からは感じた。「なんとなく……？」

「うん、私は、というか、大半の人は堀北さんほど合理的に考えられないと思うから、『なんとなく』っていうのは結構理由になると思う。あと、そうだな……赤石君とは誕生日も近いから気になるのかな？シンパシーみたいなの？」

直感、いや、この場合は直観か。一之瀬の言葉に嘘がないならば、彼女の何らかの経験が理由で、赤石に興味があるのだろう。しかし、こういった概念的なものは言葉での伝達が難しい。ましてや、現在のオレや堀北と一之瀬の関係では、深くは聞けないだろう。つまり残念ながら、一之瀬の赤石に関する追及はほぼ終わりだ。最後に仕入れるこ

とができそうな情報は、あつて一つだろう。

「一之瀬の、……ああ、いや、赤石って誕生日、いつなんだ？」

「綾小路君。本音が漏れてるわよ」

堀北が上手く聞き取ってくれたようだ。

「本音って言うത്？」

「今の聞き方でわかるわ。赤石君の誕生日を聞いている風だけれど、本命は一之瀬さんの誕生日を知りたいだけでしょ」

「おいおい、誤解だ。一之瀬に悪いだろ、堀北」

少し慌てた風に、堀北と一之瀬を視界に収めながら言い訳をする。

「私の誕生日なら、別に教えても全然平気だけど？」

「いや、誤解だ。本当に赤石の誕生日が気になっただけだ」

「一之瀬さん、教える必要はないわ。貴女の誕生日も、別の人の誕生日も」

「うーんっと、私の誕生日は7月20日だよ。だから、もう十六歳。綾小路君の誕生日は？」

「10月くらいだ。あと、さっきのは堀北の誤解だ。オレは赤石の誕生日がいつか気になっただけだ」

少し慌てた風に語調を整える。オレは須藤の件で、一之瀬と接する機会があった。そして何度か一之瀬と話をした。実際、客観的に見て魅力的な面を多々持つ少女と言える。一般的な男子生徒が誕生日を知りたがるのは自然だ。

「綾小路君と堀北さんは本当に……っと、ごめんまた同じ話をしちやう所だったね。赤石君の誕生日だよ。一応、知ってるけど、さすがに人の誕生日は勝手に教えられるんじゃないかな。赤石君なら……聞いてみれば、すぐに教えてくれるんじゃないかな？」

「確かに、それもそうだな。今度聞いてみる」

「一之瀬さんの誕生日を聞き出す目的は達したようね」
「違うって言うてるんだがな……」

そう、違う。目的は赤石の誕生日だったのだから。

そして一之瀬は、オレとは違った面で赤石のことをよく知っているようだ。その理由は分からないが、今後も堀北と一之瀬には仲良くし

てもらいたい所だ。

一之瀬との会話を終えた後、オレと堀北はAクラスの偵察を行った。

堀北と葛城の間で一悶着ひともんちやくあったものの、特記すべき事項はなかった。勿論、葛城の性質や、現在のAクラスの戦略、そこから推測できるAクラスの状況など、思考すべき事はいくつかあったが、Cクラス、そしてBクラスでの偵察と比べると、心臓に優しい結果だったと言えるだろう。

敢えて気になった事と言えば、Aクラスに向かう途中、やけに視線を感じた事だろう。葛城や他のAクラスの生徒たちの性質を考えると、Dクラスであるオレや堀北に強く視線を送ることは、やや不自然だ——侮蔑の視線や物珍しさといった類のものなら考えられるが、こちらは葛城の性質と少し異なる。このような状況で、Aクラスの生徒がそのようなことをする事は葛城も好ましくないと考えるだろう。とすると、警戒と見るべきか？

しかし、もしそうであれば、それが意味するものは……今は余裕がないため深く考察することはできないが、将来的に意味のある情報になるかもしれない。

午後二時を過ぎた頃、オレ達はDクラスのベースキャンプへ戻った。丁度、食糧班が戻っているタイミングだったため、今のベースキャンプには人が多い。食糧班はまとめ役である櫛田が上手くやっている。そのためか、Dクラスの物資はBのものよりも多い。勿論、調達している時間も、その分長いため、この二日間、ベースキャンプにいないタイミングも多い。

オレがこんなことを考えているのには理由がある。それは、食糧班の影の中核と考えられる男が、オレと堀北が戻るや否や、こちらに鋭い視線を浴びせてきたからだ。見透かすような独特な瞳。おそらく、

オレと堀北がBクラスでどんな会話をしてきたか、その見当はついて
いるのだろう。

それから、夕方まで、オレは燃料集めに従事しながら、現在の状況
の確認と今後の想定を行った。

最も重要な赤石の基本戦略に関しては検討がついた。龍園の性格
や、伊吹の立場などを考慮に入れると、おそらく5日目あたりから、龍
園と赤石の戦いが始まるだろう。赤石の方で処理を行うかもしれない
が、一応、伊吹が持っているカメラはオレの方で今夜破壊すること
にしよう。

それと、さらに先の計画、二学期以降の対策のためにも、もう少し
Aクラスの情報が欲しい。三日目と四日目はそのための準備としよ
う。

あとは、堀北を脱落させるタイミングだ。赤石からの指示を待つ
か、それともオレの方で合わせるか……いや、こちらは時が来れば分
かるだろう。

段々とするべき事はつきりとしてきた。もう少し赤石の全体的
な方針や思考回路が分かれば助かるが……いや、それは欲をかきすぎ
ているな。なぜなら、今回、オレは、赤石の異常な才能について僅か
だか手がかりを得たのだから。

赤石は不気味で恐ろしい男だ。しかし、この試験で手札を多く見せ
すぎてしまっている。まだまだ隠された手札があるだろうが、ようや
くオレも赤石の手札の引き方にあたりがかった。

そう、赤石は、手札の引き方が上手すぎるのだ。手札の質でも量で
もない。まるで、次来るカードが分かっているかのような引き方だ。

おそらく、赤石の天才性は、統計学を直観に昇華させていることだ。
初めて見るものであっても、常人には得られないような細かい情報を
を読み取り、それを一瞬で解析し、未来を見る。人間が持つ予想能力、
これを極限まで引き上げた能力だ。

だから、赤石は、初めて受ける試験を、船に乗り移動している間に
得られた情報で、予想することができた。だから龍園の戦術を
試験開始前から予想することができた。異常な食糧探索能力も、島の

植生を僅かに見ただけで把握することができた。あの恐ろしいチエツクシートも、精確な人間観察力も、その能力の副産物の一種であろう。

赤石は予想・分析においての天才、いや怪物と言える。

この恐ろしい怪物が、同じクラスにいることは、幸運と捉えるべきか、それとも不運と捉えるべきか、悩ましい。

ふと、夜風が体に流れてきた。もう、夕方を過ぎ、夜と言ってもいい時間だ。日の光がなく、気温も落ちている。夜風も適度に涼しいと言えるだろう。しかし、どういうわけか、体の中心が熱を帯びたように、オレには感じられた。

——ああ、心臓の音が少し大きいな。

龍園翔の努力3―3

特別試験は今日で三日目になる。

そして、今、俺は危機的な状況にある。

目の前で進行していく事態に対して、手が出せないでいる。いや、自身の戦略を守る為に、あえて手を出さないでいる。

鳴りそうになる腹の虫を誤魔化すためにも、俺は、今までの展開について考察することにした。

夏休みの間に学校側が何かを仕掛けてくることは、予想できていた。そして、それは概ね、俺の考えた内容に近かった。

この三日間での俺の行動を振り返る。まず、Cクラス全体を使った囮作戦。そして、金田と伊吹をスパイとして送り込んだこと。さらには俺自身はAクラスと取引し、その上での潜伏。

勝利のための手は全て打った。盤上に関しては、目の前で行われている局所的な面を除き、ほぼ支配していると言って良い。

全てのクラスの状況を考えた上での最上の作戦。

Aクラスは葛城と坂柳の派閥の対立がある。さらには坂柳の試験リタイアと、葛城の生徒会入りの失敗、この二つが丁度良く重なった。葛城はこの試験で成果が欲しい。その考えを利用して俺は罫を張った。そうして、俺は葛城と特殊な契約を結んだ。

さらには、葛城との契約から逆算し、Cクラスのやつらを派手に遊ばせた。これで俺の持つクラスへの影響力も強化でき、さらにはAクラスへの物資提供の隠れ蓑にもなる。また、それに対して自然と反抗的な生徒が産まれる。まさに一石三鳥の良手。

Bクラスの一之瀬は体面が邪魔をして動けない。俺に『反抗した』金田に対して行動を起こせない。金田の動きを多少不審に感じても、追い出すことはできない。一之瀬はそういう女だ。

三手四手先を読み、手を打つ。葛城も一之瀬も俺の敵ではない。唯一、敵になり得る、あの女はこの試験には参加していない。

この特別試験、殆ど結果が見えていると言って良い。

伊吹と金田の成果に多少影響されるが、あの二人ならば俺の指示し

た通りの結果を示すだろう。

少し伊吹が心配ではあるが、Dクラス程度騙せなければ、どの道話にならない。あいつがその程度の女だったということだ。

——そう、Dクラス程度だ。

Dクラスに関しては、7月の一件で、俺は少し評価を改めた。本筋を描いたのは堀北という女子生徒だと聞いていた。

7月に一目見たが、やけにプライドの高そうな女だった。

俺は、目の前で行われている事態から目を離すためにも、昨日の一場面を思い出すことにした。

特別試験二日目の午前中に、Dクラスの堀北が偵察に来ていることを、Cクラスの生徒が俺に伝えてきた。

俺は、その生徒に堀北を連れてくるように言いながら、その思惑について考察した。

前回の一件での堀北の動きから、Dクラスの中では最も警戒する相手だと認識していたからだ。

おそらくは偵察。こちらのポイントの仕様具合や士気の確認がメインだ。現状で俺の思惑に気付くことは不可能。ならば、これから始まる堀北との腹の探り合いは、断然優位にある。

そこまで考えたところで、堀北がこちらに近づいてきた。男子生徒二人を引き連れた堀北の姿は、少しあの女に似ていた。飼い犬を従えた女王気取りだ。

「なんだ、ここそこそ嗅ぎまわっている奴がいるって話だったが、お前だったか、鈴音」

俺の言葉を聞くと、堀北は不快そうに顔を顰めた。表情が顔に出過ぎてているな。演技の雰囲気ではない。随分、潔癖な女だな。

「随分と羽振りがいいわね。かなり、豪遊しているようだけど」

第一声はそんな言葉か、堀北。俺は僅かに感じた失望を隠し、下卑

た笑みを作り、挑発気味に言葉を発した。

「見ての通りだ。俺達は夏のバカンスを楽しんでいるんだよ」

俺の言葉に堀北は過剰に反応した。

「どうやら、貴方はこの試験のルール、いえ本質を分かっているようね。愚かだわ」

少し不自然だと感じた。明確な理由がないが……本当にこの堀北が7月の事件の中核を担ったかが怪しいと、俺は感じた。

「愚か？俺はそもそも努力が大嫌いなんだ。お前らみたいな雑魚が必死こいて、1000だが2000だがの下らないポイントのために汗を流す。惨め過ぎて笑えてくるぜ」

それから互いに腹の探り合いを始めたが、やはり手ごたえが無い。伊吹が順調に作戦を進めているのは朗報だったが……どうにも、この堀北は俺の想定しているイメージとだいぶズレがある。

「警戒してここまで足を運んだのだけれど、無駄だったようね。一之瀬さんは貴方のことを過剰評価していたようだわ」

探り合いに一息ついたところで、堀北が小生意気なことを言い出した。どうやら、一人前に俺を挑発したいようだ。

「一之瀬か、確かにあの女は大したことはない。まあ、不良品のお前らよりは遊びがいがありそうだが……ただ、そうだな、鈴音、お前がどうしても俺と遊びたいようなら、特別に相手をしてやってもいいかな。専用のテントくらい用意するぜ」

俺が少し手を伸ばしてやると、堀北は素早く振り払った。顔が赤いな。一之瀬でも、もっと上手く躲すぞ、堀北。

「不快よ、猿山の大将気取りはいいいけれど、人間相手に動物の常識が通じるとは思わないことね」

「おいおい、鈴音、暴力行為は禁止だぜ」

「あら？私はただ汚い虫が寄ってきたから叩き落としただけよ」

「クク、この島の夜は暗い。お互い、気を付けた方がいいだろうな」

「心配なら不要よ。あなた程度に遅れはとらないわ」

堀北の涙ぐましい『頑張り』には評価してやりたいところだが、こ

ここまで想定を下回ると、面白味に欠ける。

言ってしまうえば、今の堀北に興味をそえられるものは無かった。

「そのわりには随分とビビッてやがるみたいだな。お供を二人も付けて、一人じゃ怖くて来れなかったか？」

気まぐれに堀北が引き連れてきた飼い犬二人を見る。一人は腰巾着で有名な綾小路。もう一人は……どこかで見た顔だ。確かこいつは、椎名の言っていた男か。

「確かお前は金魚の糞の綾小路で、お前は……いつぞやの間抜け野郎じゃないか。久しぶりだな」

俺が声をかけると、対照的な反応が返ってきた。綾小路の方は、何も考えていないのか、脱力したまま、少しだけ体を反応させた。そして赤石の方は、見るからに怯えたような顔で一瞬びくりと体を震わせた。よほどの臆病者らしい。

「え、えっと、どうも」

声も震えている。演技ではない。体の震えからも強い感情が伝わってくる。

「鈴音、良い事を教えてやる、この間抜け野郎がここに来た理由はお前のためでも、クラスの為でもない」

ビクつく赤石を尻目に、堀北の反応を見るために、椎名の件を話す事にした。

「勝てないと分かって、こちらを混乱させる気でしょうけど、その手には乗らないは、行くわよ綾小路君、赤石君」

俺から出る言葉を聞くのが怖いのか、堀北はそそくさと逃げ始めた。どうやら、飼い犬にも不安があるようだ。

「……赤石か、憶えたぞ。一つ教えておいてやる、赤石。ひより目当てで来たんだろうが、あいつはもうリタイアした。残念だったな」

念のために堀北の疑念の種を撒いておく。必要はないかもしれないが、やることにデメリットは無い。ならばやるべきだ。

「そ、そ、そうですか、それは、教えて頂き、ありがとうございます」

返答など期待していなかったが、赤石は恐怖で体を震わせながらも俺に言葉を返してきた。どうやら、見た目以上に間抜けな男のよう

だ。まあ、堀北の犬らしいと言えはらしいが。

「どこまでも間抜けな野郎だ。鈴音、飼い犬を連れてくるのは良いが、次はもう少しマシなのを連れてこい。でないとDクラスの層の薄さに、こつちが泣けてくるぜ」

妙な納得を感じながらも、最後のもう一度、堀北を挑発しておくことにする。そう、堀北に対する最後の調査だ。

「彼は私の飼い犬ではないわ」

その返事で確信が持てた。

——この女じゃないな。タイプが違い過ぎる。

7月の一件、策を練ったのは、おそらく別の生徒だ。もしくは、ただの幸運だ。Dクラスの生徒の層や、目の前の堀北が交渉役に選ばれている事を考えると、おそらく後者だろう。

もし策士がいるならば、必ずCクラスを直接偵察に来るだろう。そして堀北は俺が考えるタイプの策士ではない。一瞬、堀北が連れまわっていた飼い犬二人が候補に挙がったが、すぐに取り消した。

腰巾着の綾小路はいつも堀北と行動しているが、優秀な点は何もない。直接見たが、強者特有の覇気も感じなかった。間抜けの赤石は、椎名が気にかけているようだが、それ以上に興味を持てる点が無い。そもそも堀北ではないという前提で考えている状況で、堀北よりも数段劣る二人を考察する必要性すらないだろう。

必然的に、策士などいないという考えが最も可能性が高いと言える。

去り行く堀北達の背を見ながら、今後の事について考察する。

Aクラスは、坂柳の不在と葛城の判断ミスで勝てない。Bクラスは、一之瀬の欠陥が原因で負ける。そして、Dクラスは、幸運に恵まれただけで、この試験では大敗する。

あまりにも簡単な、約束された勝利に対して、失笑する。

そうして、二日目の終わりに伊吹と金田を除くCクラスの生徒たちをリタイアさせた後、俺は一人森へと潜った。

たった五日のサバイバル。ちよつとした刺激になるだろう。

その程度だと、この時は考えていた。

昨日の出来事。

堀北という少女を思い返してみても、感じた事を正直に言うとは、少しだけ期待していた。

プライドの高くて、頭のキレが良く、そして妙手を打つ。あの女もそうだった。

つまり、戦い甲斐がある。そんな女だと思っていた。

それ故か、昨日、堀北と本格的に会話をし、肩透かしを食らった。ただの運が良いだけの女だったからだ。

そこまで考えた俺は、諦めて現実を直視することにした。

そう、即ち、Dクラスの想定外の攻勢だ。

「あった、あった。良かったよ桔梗ちゃん。ここにも食糧があるみたい」

「櫛田さん、こちらにもあるみたいです。やっぱり櫛田さんの言った通りでしたね」

「櫛田ー、こつちにもあった。どれから運ぶことにする？」

「櫛田ちゃん、櫛田ちゃん、本当にすごいよ。やっぱりDクラス一の人気者なだけあるね。って人気者関係ないか、ははっ」

馬鹿どもの騒ぎ声が聞こえる。

それだけならば何の問題もないが……あろうことか、この馬鹿どもは、この辺り一帯の食糧を回収し始めたのだ。

このままでは不味い。俺の食糧が無くなる。

「あ、トマト、トマト」

クソッ！

今、目の前にあったトマトを、間抜け野郎が回収し始めた。草場に隠れていたから、これだけは無事だと思っていたが、妙に運の良い野郎だ。間抜け野郎の分際で……いや、というより、何故こいつがここにいる？

一瞬、堀北に気取られたのかと思ったが、目の前の間抜け野郎にも、周りの雑魚どもにも俺を追い詰めようという意志は感じられない。純粹に食糧を回収しに来たという風に見える。

おそらく、偶然だが……ツチ、間抜け野郎の奴、トマトをほぼ全部回収しやがった。ふざけやがって。堀北は飼いだの管理も碌にできないのか？

……いや、昨日の堀北の言動はそういうことか。あの言葉、文字通りの意味だったようだ。やはり妙に潔癖な女だ。とすると赤石は、櫛田の犬か。何の役にも立たない情報だ。

「櫛田さん、トマトがいっぱいあります」

そんな間の抜けたことを言いながら、赤石は、ほぼ全てのトマトを回収し、櫛田の方へと歩き出した。

——好機っ！

間抜け野郎の視界から見えなかったトマトを回収しようと、俺は手を伸ばそうとするが——

「あ、裏にもあったか」

——間抜け野郎の間抜けな声に、思わず手を戻した。

そして、間抜けな動作で、残っていたトマトを全て回収した。俺のトマトが……

幸いにして、赤石は持ち前の間抜けさを発揮して、1メートルの距離に潜んでいた俺に気付くことは無かった。

Dクラスの生徒たちが離れたのを確認して、俺は周囲を探索したが、食べられそうなものは欠片すら残っていないかった。

自身も食糧を探索する必要があるが、そこかしこに櫛田とその猟犬どもがいる。探索に出れば、見つかる可能性があり、そうなれば、俺の戦略は瓦解する。

昼ではなく夜動くことも考えたが、どういう訳か、昨日の夜、櫛田が何人かの生徒を引き連れているのを見た。音や光に意識が集中し

やすい夜は逆に危険だ。

俺自身も、この島で夜に歩き回るのはリスクがある。ならば昼に探索を行うべきだが……

いや、一つ策がある。BクラスとDクラスのベースキャンプ、その中間地点であれば、まだ食糧があるはずだ。

一之瀬の性格上、境界上のものは取りにくいはず。そこが一之瀬の弱さだが、今回はさらに、7月の事件で判明した一之瀬と堀北の協力関係もある。

俺がAクラスと手を組んでいるように、おそらく堀北と一之瀬も何らかの取り決めをしているだろう。昨日、感じた堀北のタイプと一之瀬の性質からも不戦以上の関係が結ばれたと考えていい。

ならば、やはり中間地点は狙い目だ。

俺はDクラスやBクラスの探索部隊に気付かれないように、ゆっくりと両クラスの中間地点へと向かう。

僅かな音も立てないように慎重に動く。一瞬の油断が、全てを瓦解させる。

頬に汗が走るのを感じた。まさか、俺が、まぐれとはいえ、Dクラス相手にここまで追いつめられるとはな……

だが、最後に笑うのは俺だ。

そうして、移動にかなりの時間をかけつつも、到着した中間地点には何もなかった。

いや、正確に言うと、そこには採取された植物の跡だけがあった。

——クソツ!!!

その後も探索を続けたが、結局、俺は午後から何一つ食べ物を口にすることはできなかった。

作戦は上手くいっている。あと4日間の辛抱で全てがひっくり返る。その達成の為であるならば、多少の犠牲は厭われない。

だが、身体的な欲求を我慢するには限度がある。

夜の流れ星を見ながら、俺は、明日には食糧が手に入る事を願った。

神室真澄の共鳴 3—4—1

特別試験四日目の朝。

私は、森の中を一人で歩いてた。

深い目的は特に無い。強いて言えば、不毛な試験のことを少しでも忘れるためだ。

そう、不毛な試験だ。この試験にあいつがない以上、結果にも過程にも意味はない。

この試験でどんな結果が出ようとも、あの少女がいる以上、Aクラスが最終的な意味で負けることは想像できない。

少女——坂柳有栖は本物の怪物だ。

あの怪物が本気になれば、誰も勝てない。

いかに価値のある過程があろうとも、いかに素晴らしい結果を出そうとも、怪物が来てしまえば、人間など簡単に打ち倒されてしまうのだ。

運が悪ければ、生きたまま喰い殺されるかもしれない。

そう思うと、私だけが損をしている気がする。私以外の生徒は怪物が参加してさかやなぎいない試験を挑んでいる。

私だけは、怪物から悍ましい役割を命じられている。

意味の分からない役割。それが命じられたのは三日前に遡る。

三日前。

特別試験が始まる前。無人島へと向かう船内で、私は、あの少女の姿をした怪物の相手をさせられていた。

「真澄さん。今回は一緒の部屋になって頂きありがとうございます。」

真澄さんのような頼りになる方と一緒に、私としても有難いです」

随分、白々しい言葉だった。

「私の記憶だと、あんたが、私と一緒にの部屋になるように強要してきたと思うんだけど」

「ふふっ。強要はしていませんよ」

こちらを嘲笑うかのような坂柳の表情。それを見て、思わずため息が出る。この少女のペースに乗せられてはいけないと思い、会話を打ち切ろうと、端末に手を伸ばそうとして、坂柳が再び口を開いた。

「橋本君たちとの待ち合わせまで、まだ時間があります。丁度良い機会ですので、真澄さんに聞いておきたい事があったのですが、答えて頂けますか？」

できることなら、この少女の相手はしたくはない。けれど、しなくてはならない。

「あなたの質問に対して、満足させられるだけの答えを私が持つてるの？」

私の言葉を聞いた坂柳は、笑みを深くして、一步私に近づいた。

「……それを決めるのは真澄さんではありませんか？」

「答えられることなら答えるけど、満足できなくても、不機嫌にならないですよ」

思わず、予防線を張ってしまう。最近の坂柳はどこか異常だ。勿論、入学当初から十分異常だったが、特に最近は形容し難い悍おぞましさがある。何をしでかすか分からない怖さ、とでも言うのだろうか。

「私は真澄さん相手に不機嫌になったことが、あつたでしょうか」

「最近は……いや、なんでもない」

思わず話しかけた本音を、途中で打ち消す。坂柳は、私に対して、直接不機嫌にはなっていない。ただ、ある時、異常に機嫌が悪い時があった。この冷静さを貼り付けたような、感情の読めない少女が、ある時、そう確か……龍園から挑発された、あの雨の日。あの日の後は、はつきりと分かるほどに機嫌が悪かった。

そして、今考えた事も読まれたのだろう。こちらを見る坂柳の表情は悪戯気で、まるで心を見透かすかのような瞳を向けてくる。

「真澄さんにとって、この学校で一番、警戒している生徒は誰でしょうか」

見透かすかのようにではなく、見透かされていた。私が警戒しているのは龍園だからだ。勿論、一番は、この目の前の少女だけけれど。

「あんた」

「そんなに意地悪なことを言われると傷ついてしまいます」

この少女は思ってもいない事ばかり口にする。

「意地悪じゃなくて本気で言ってるんだけど」

私が真顔で言うと、坂柳はクスリと愛らしく笑い、そのまま言葉を重ねた。

「では私を除くと誰でしょうか」

結局、私の行いは、問題を先送りにしただけだった。

「……………たぶん、龍園。というか、あんたも警戒してるのは龍園でしょ?」

正直に思ったことを話す。怪物に隠し事など、無理な話だったのだから。

「確かに龍園君は興味深い生徒です。実際、少し話をしてみたら、好奇心が刺激されました。ただ……………」

「ただ?」

「これは推測になりますが、龍園君は精神面に弱さを抱えています」

……………? 龍園が弱い? しかも精神面。それは想定外の情報だ。坂柳が私に嘘をついている方が、まだ信じられる。というか、そのような気がする。

「あの龍園が……………?」

私の疑念に対して、坂柳は淡々と説明を始めた。

「ええ、その弱さは、おそらく敗北経験の少なさにあります。彼は生粋の努力家です。目的のためならば、どこまでも忍耐強い。それ故に強く、勝率も極めて高い。つまり逆に、敗北を味わった経験が圧倒的に不足しています。一度の敗北で彼は変わってしまうかもしれません。ですから、龍園君を歓待できる機会は一度だけ。そして、それは必ずしも私たちが歓待できるわけではないという事です」

滑らかに、そして冷たく説明した坂柳の表情は、いつもよりも少しだけ遠くを見ているようだった。

坂柳の説明は、私には理解しがたいものだ。敗北経験の少なきという点は、分らないことも無い。けれど、正しい推測かどうかは私には判断できない。ただ、この怪物が言った以上、それが真実なのだろう。それにしても――

「歓待ね。つまり倒す気があるってことね」

倒すのか、支配するのか、どちらにしても、ろくなことにならないだろう。龍園にとっても、そして私にとっても。

「そうは言っていませんよ。ただ、貴重な白蛇。誰かが仕留めてしまふのならば、自分が先にといい思いはありましたか」

白蛇。龍園も坂柳の手にかかれれば、ただの縁起物にすぎないのか。私には、十分危険な毒蛇に思える。

「そう、その白蛇も災難ね。まあ、あんたが蛇の毒で死なないように祈っておくわ」

「毒蛇ではないかもしれませんが」

じつと私の目を見る坂柳から、思わず目を逸らす。本当に覚り妖怪か何かではないだろうか。

「……龍園の事を欠片も危険視してないのは分かったわ」

私は視線を逸らしたまま、そんなことを呟いた。

「真澄さんにはそう見えますか？」

何時もの、確認のようであり挑発のようでもある、そんな口調で坂柳が質問してきた。その返答をしようとして、私は大きな過ちを犯した。

「少なくとも、もっと意識している相手がいるのは知って――」

途中で過ちに気付き、言葉を止め、坂柳を見る。無表情だ。どこか攻撃性を感じる笑みも、嗜虐的な瞳も、今は見えない。ただただ、虚無が広がっている。

そう、これは今の坂柳と接するにあたって最大の禁忌だ。

虚無の瞳が私を捉えた。鳥肌がたち、体が震える。8月とは思えないほど、部屋が寒く感じた。冷房はそんなに強くはしていないから、きっと私の感じ方の問題なのだろう。

「真澄さん、今は龍園君に関する話だったと思いますが」

そういうと、坂柳は再び、攻撃的な普段の表情を作った。ただ、瞳は、さきほどと同じ、虚無だ。

私は、震えを抑えながら、会話を元に戻すことにした。

「それにしても、龍園が蛇ね。あんな危険人物を、ただの爬虫類扱いするのはあんたぐらいよ」

少し不自然な話題転換かもしれないが、今は少しでもこの空気をどうにかしたかった。

「龍園君は蛇のよう、という見解は私固有のものではないでしょう。例えば、Bクラスの一之瀬さんも似たようなことを考えているかもしれません」

「一之瀬は、あんたと違って人を動物扱いしないと思うけど……まあ、あんたは私や橋本のことでも犬程度にしか思っていないんでしょうけどね」

思わず漏れた本音を口にし、また少し後悔した。今の坂柳に犬などという言葉を使うべきではなかった。

「真澄さんのことは、犬ではなく猫のように思っていますよ」

しかし、坂柳は気にした様子は無かった。そのことに心の中で安堵しながら、坂柳に軽口を返す。

「私あんたの飼い猫ってわけ？」

「いえいえ、真澄さんのことを飼い猫とまでは思っていないですよ。……それに、今は犬の方が欲しいです」

犬……いや、それに関して深く考えてはいけない。

「犬ね……あんたはペットを殺しそうなタイプに見えるけど」

軽口を続けながらも、心胆が再び冷え始めたのを感じた。けれど、妙に話を止めるのは避けたい。坂柳は、支配欲求と破壊欲求を両立させた悍ましい精神性の持ち主だ。

だから、私は、坂柳にとって『支配するのに十分に興味が沸く人物』である必要がある。何度も話の腰を折る人物であってはならない。

支配されるのは屈辱だが、破壊させられるよりは遥かにマシだからだ。

「ふふっ、どうやら誤解があるようですね。私は、飼い犬には優しいで

す」

「つまり猫には厳しいってこと?」

「それは猫次第ではないでしょうか」

「なら、犬も犬次第でしょ」

「確かにそうですが……私の場合は前提条件が違うので、猫と犬では扱い方が違います」

「あんたの犬にはなりたくないわね」

そう吐き捨てて、坂柳を流し見る。彼女は、いつものように攻撃的な笑みを浮かべていたが、未だに、その瞳に感情の色は見えなかった。

恐怖による震えを抑えつつ、坂柳の出方を窺^{うかが}う。

「真澄さんが望まない限りは、私の方で強制はしません……どうやら、待ち合わせの時間が近づいてきたようですね」

ふと時計を見ると、思った以上に時間が過ぎていた。

坂柳と私は、準備をすませ、部屋を出た。

「9時40分なんて微妙な時間。なんで、そんな時間を集合時間にしたの?」

廊下を歩きながら、気になった点を質問した。

「……そろそろ、何か食べ物が欲しくなる頃だと思いましたが」

坂柳は、私の質問に、少し間を置いて答えた。

しかし、私には、その答えの意味が分からなかった。

「別に、私も橋本も鬼頭も、バスを降りたときに食べたし、あんたも、その時に食べたでしょ」

「そうですね。では体格が大きい鬼頭君のためというのはどうでしょう。あとは、このあとの試験で頑張ってもらうことになる橋本君への激励としてもいいかもしれませんね」

坂柳は、どこか遠い目をしていた。

私は言葉にも仕草にも疑問を感じた。けれど、それ以上は追及しなかった。なぜなら、薄ら寒い気分を味わうのは、もう御免だったからだ。

そう思い、会話を打ち切る私に対して、なんとなしに坂柳が小さく口を開いた。

「そういえば、一つ言い忘れていました」

まるで、独り言のようで、私の答えを聞かずに、流れるように言葉をつづけた。

「真澄さんは十分、私を満足させる答えを持っていましたよ」

くすくすと笑い声が聞こえ、そちらを見る。坂柳の瞳はいつものように、嗜虐的な色を浮かべていた。

橋本たちと合流する直前に、私は極度の恐怖を感じたが、それを抑えつつ、坂柳と共に、彼らと合流した。

9時40分丁度に始まった会議では、主にこれから行われるであろう特別試験の考察と、作戦が坂柳から伝えられた。

作戦の基軸となるのは橋本で、私と鬼頭は葛城への牽制程度で良いということになった。

途中で、橋本が坂柳を試すような言動をし、それを坂柳が戒めるといった事を除けば、会議は比較的順調に進んだ。

橋本に関しては、相変わらず恐れ知らずだと、私は感じた。いや、橋本は私ほど坂柳を知らない。だから、まだあんな呑気な事が言えるのだろう。

会議が終わり、橋本と鬼頭と別れた後、私は、一人だけ坂柳に呼び出された。彼女は淡々と私を船首の側へと、連れて行った。

「私に何か用？」

坂柳はその質問には答えず、さらに先へと進んで行く。疑問を感じながらも口には出さず、彼女の後ろへ続く。そうして、船首の限界近くまで来たところで、ようやく坂柳は口を開いた。

「実は、真澄さんには特別にもう一つお願いしたいことがあります。聞いてくれますか」

辺りに生徒は誰もいない。わざわざ、坂柳が人がいないところまで自分を連れてきたのだ、ろくな話ではないだろう。

「それ、お願いじゃなくて命令でしょ」

「いえいえ、そんなことはありませんよ……ただ、真澄さんが、私のお願いを聞いてくれない場合は、少し真澄さんに冷たくしてしまうかもしれないですね」

ただの命令ではなく、絶対の服従しなくてはならない類の命令のようだ。最悪だ。

「やればいいんですよ」

「真澄さんが親切な人で助かります」

思ってもいない言葉を聞き流しながら、私は、坂柳に命令の詳細を言うように促した。

「真澄さんをお願いしたいことは、偵察と妨害です」

「妨害って、葛城たちのこと？」

もしそうであるならば、先ほどまでの会議は何だったのか……橋本は困っていることだろうか。

しかし、坂柳の返答は私の想像とは違っていた。

「いえ、それは先ほど言った通り橋本君に任せます。真澄さんは適度に葛城君に従って、適度に逆らってください。真澄さんをお願いしたいのは、Dクラスです」

そう口にした坂柳の表情は、いつも以上に残酷に見えた。

それを見て、思った以上に暗い命令になりそうだと、私は感じた。

「……なんでDクラスなの？あと、なんで私？」

「人選という意味では、真澄さんのことを最も信頼しているからです。Dクラスを対象とした理由は、本当に聞きたいですか？」

つまり何も教える気もないし、もしどうしても聞きたければ、それ相応の覚悟をしなければならぬということだ。

私は、坂柳の瞳の色が虚無に染まる前に答えを出した。

「やめとく」

「真澄さんの素直なところは好きですよ。あと分かっているとと思いますが、橋本君たちには秘密にして下さい」

どんどん命令が暗いものへと変わっていく。私の中で、断りたい気持ちが強くなってきた。けれど、逆らうことなどできない。

「わかった。けど具体的に偵察と妨害って何すればいいわけ？」

「偵察はDクラスを観察するだけでいいです。終わったら成果を聞きます」

観察するだけ……言葉通りの意味とは思えない。

「待って。そんな曖昧なことを言われても困る。あんたの基準を教えてください」

「基準は真澄さんに任せます。真澄さんがどれだけ熱心に取り組んでくれるか楽しみにしていますね」

愛らしく微笑む少女を見て、他の生徒だったら何と思うだろうか。案外、私と同じように、胡散臭い上に恐ろしいと思うかもしれない。

「……ちなみに、妨害は何をすればいいわけ？」

聞きたくもないが、聞かないと、後でより面倒なことになりかねない。

「妨害も真澄さんに任せます。こちらは難しそうでしたら、無理に実行しなくても構いません。勿論、少しでもDクラスを弱らせてくれれば、私の中で真澄さんの事を、より重要な人だと認識しますが」

つまり現状、私も、橋本達と同じで替えが効く駒でしかないということだろう。

「なら、無理にはしないけど」

「それで構いません……そろそろ時間の余裕がなくなりますね」

坂柳は一度、端末を見て、そう呟いた。私は、辺りを見回すと、ちらほらと生徒たちの姿が見えた。密談を進めるのには適さなくなってきたということだ。

もう一度、坂柳を見ると、彼女は自身の端末をまじまじと見つめていた。何かを深く確かめるように、じっと見つめている。そして一度深い笑みを浮かべると、端末を閉じた。

「では、真澄さん、またあとでお会いしましょう」

「分かった。あんたも一人だろうから気を付けてね」

これが、試験開始前にした私と坂柳の最後の会話だった。

特別試験開始後、Aクラスの行動は坂柳の思惑通りに進んだ。葛城は優秀な生徒だとは思うが、坂柳の足元にも及ばない。

私や鬼頭は、『坂柳不在であるため、しぶしぶ葛城に従っている』風を装う。そして、裏では橋本が工作を進める。そういった作戦だ。概要だけ聞くと、最も負担が大きいのは橋本に思える。

ただ、橋本や鬼頭と違って私には、あの意味不明の指示がある。それを踏まえると、私が貧乏くじを引いているように感じる。

偵察と妨害。具体的なものは何もない。ただ、指示の仕方からして、偵察優先ではあると思う。故に、特別試験開始後は葛城に探索を手伝うと申し出て、Dクラスの様子を窺うことにした。葛城は最初訝しんだが、特別試験が対他クラスであることを示すと、しぶしぶ許可をだした。坂柳がいないためか、いつもよりガードが緩いように感じた。もし、坂柳なら許可は出さなかつただろう。

葛城を中心とする五人の生徒は島の中心へと向かい、私は一人別行動をとった。Dクラスの集団を遠くに見つけたからだ。彼らは浜辺から森へと入り、ゆつくりと移動している。私は、葛城たちとの位置とDクラスの生徒たちの中間点となりそうな川辺へと向かう事にした。そこであれば、Dクラスへの偵察とAクラスへの合流、どちらにも対応できるからだ。

そして、その判断は正解だった。Dクラスのベースキャンプを早期に発見し、またDクラスの偵察班の行動も見ることができた。彼らは4班に別れて行動している。ただ、班員の構成比が少し奇妙で3人班が3つ、そして1人で行動している者がいた。Dクラスの偵察班は、それぞれが別の方向を探索している。見たところ、どのクラスとも距離がある。Aクラスと接触しそうな偵察班はいないようだ。

正直な話、Dクラスは脅威には見えない。適当に探索しているだけのように見える。勿論、私は戦術に詳しいわけではない。ただ、素人目に見ても、危険には思えないし、態々こちらから偵察する必要があるのだろうか。

「どうせ、あいつがいけない以上やるしかないけど」

今は坂柳の判断を聞くことはできない。ならば、試験前にされた命

令に従うしかない。

——支配されているあなたが目標を持っていても意味はありません。

ふと、船にいたときに坂柳に言われた言葉を思い出した。

「所詮、私も、あいつに支配されてる生徒の一人」

あの少女に支配されることに対して思うところはある。だが、それ以上に恐怖がある。

私は、ずっと、坂柳の近くで、彼女の怪物性を見てきた。恐ろしいことも、悍ましいことも沢山あった。何度離れたいと思ったことだろう。だが、その気持ちを抱く度に、あの怪物がクスリとこちらに笑いかけてくるのだ。

逃げればどうなるか、裏切ればどうなるか、そう言外に伝えているように聞こえた。そして、彼女は、それを期待しているようにも、私には感じるのだ。

故に、支配される方が、逆らうよりはマシだと思っている。逆らえば、間違いなく、この学校でまともな生活は送れないだろうから。

神室真澄の共鳴3—4—2

二日目になると、Aクラスの様子も落ち着いてきた。坂柳不在のためか、表面的には葛城の指揮が行き届いているように見える。ただ、水面下では、その体制は少しずつ崩れはじめている。そして、それは葛城も僅かに気付き始めている。

とはいっても、私の行うことは変わらない。葛城やその派閥の相手を適当にしつつ、Dクラスへの偵察を続けるだけだ。場合によっては妨害もしなければならぬ。不安もある。具体的な指示がないからだ。

——ただ、坂柳が何を求めているのか。それは少し分かる気がする。

可能であれば、その情報を調べた方がいい。そのために、朝から、Aクラスがベースキャンプとしている洞窟の近くの高所へと身を潜めることにした。

「思った通り、ここからなら川辺がよく見える」

視界の先には、Dクラスのベースキャンプが見える。丁度、朝から活動している生徒が三人ほど見える。そして、そのうちの一人が二人と分かれて、森へと入っていた。思わず森に入った一人を目で追う。この距離だと自信は持てないが、この生徒の動きをよく見る。木々が邪魔でよく見えない上、顔の判別もつかない。何かを探しているようにも見えるが、何をしているのか。偵察だろうか。

できる限り、この生徒が何をやっているかを調べる方が、今後の自分のためになるという予感があった。確証はない。その上、今日で追った生徒が、私の想像した生徒であるかも分からない。さらには、それが求められた成果であるかも分からない。けれど、できることはなくてはならない。なぜなら、最近の坂柳は今まで以上に恐ろしいのだから。

結局、二日目は点呼と食事のときには洞窟に戻り、そのほかの時間は高所で過ごした。

Aクラスでは葛城の方針で、食糧はポイントで購入し、できるだけ生徒を洞窟の中に隠す事に行っている。

私は例外的に葛城に許可を貰い、外で過ごすことを許されている。集団が苦手、閉所恐怖症、坂柳への密告の示唆、理由などいくらでも作れる。しかし、葛城は私が外で過ごしたい事と、Aクラスの不利になることはしない事を伝えたと、深く詮索することなく許可を出した。

葛城は、私が坂柳を苦手としている事を知っている。だから、これは葛城なりの配慮だろう。そこが葛城と坂柳の違いだ。そういう点では、葛城の方が人として好ましいと思う。そして私や坂柳の方が人として間違っているのだろう。

ただ、そんな葛城にも奇妙な点がある。それは、Cクラスとの取引だ。AクラスはCクラスから物資を融通されている。そして、葛城は、その対価を払っている。Cクラスとの取引、つまりそれは龍園との取引だ。それを強行したのは葛城らしからぬ判断だと、私は思った。調和や秩序を優先するあの男が、なぜ龍園との取引をするのか。なぜ、反感を買いそうな強行策に出たのか。私には、それは分からなかった。

私は一度首を振り、思考を坂柳の命令へと戻す。

二日目の観察で分かった事は、Dクラスのレベルの低さだ。やはり何度見ても脅威には感じられなかった。ほとんどの生徒が適当に動いている。一部の生徒がそれらを統率しているが、あまり上手く動いていないように見える。

唯一、例外を挙げるとすれば、ある女子生徒の存在だ。

たしか名前は……櫛田だったと思う。この生徒は島中を探索し、食糧の調達を担当している。人望が厚いのか、Dクラスの多くの生徒が彼女に従っている。そして大きな成果を得ている事が、遠くから見ても、はつきりと分かる。

実際、無人島試験が始まる前から、櫛田の名前は、臆気ながらも私も覚えていた。クラスを問わず、様々な生徒と交友関係がある、顔の

広いタイプだ。遠目で見たこともあったが、人柄の良さそうな生徒のように見えた。そして、今回の観察からして、能力面でもDクラスの中では頭一つ抜けていると見ていいだろう。

その他の点としては、おそらく私が調べるべき男子生徒は、櫛田と行動を共にすることもあれば、Cクラスを偵察することもあった。時たま一人で行動することもある。あと、よく森の中で迷っている事が多かった。けれど、方向感覚は良いのか、迷っても、すぐにベースキャンプに戻る事ができていた。

ただ、少し気になった点もあった。この男子生徒はCクラスを偵察するとき、他に二人の生徒と偵察していた。そして、この二人は昼を少し過ぎた頃にAクラスの洞窟へと来た。プライドの高そうな女子生徒と才能の無さそうな男子生徒の組み合わせは、まるで女王と召使いのようだった。召使いは葛城を前に怯えたように一歩下がり、女王の方も葛城相手には歯が立たなかった。だが、そこには、あの男子生徒の姿はなかった。Cクラスを偵察したときはいたが、Aクラスの時はいない。警戒しているのか。もしそうだとすると、それは何のためなのか。疑問を感じ、少しでも情報を集めるために、女王と召使いを注意深く観察したが、得られるものは少なかった。

それと、これは特記すべき事項とは言えないが、不思議な女子生徒を目撃した。

その生徒は、一日中、海辺を見渡せる岩場で、ぐったりとしていた。その岩場は、私の潜む洞窟近くよりは低い位置にあり、そしてCクラスの生徒がひしめく海辺を一望できる地点だ。こちらから向こうは見えるが、向こうからは高所を見上げる形となるので、こちらを見るのは難しい。

最初、この生徒を確認したときは、私と同じように、偵察のために岩場にいるのかと思った。しかし、この生徒が、ただただ適当にCクラスを眺めていること、そして、あまりにも緊張感がない仕草から、Cクラスを羨んでいるだけの生徒であることが分かった。偵察をしている身になると分かるが、あんな態度では到底できるものではない。この少女がいる場所はDクラスのスポットの近くなので、おそらくは

Dクラスの生徒だと考えたが、確信を持てたのは夜になってからだ。夜になると、この気だるげな少女と、櫛田、そして小柄な女子生徒の三人がライトを持って森を突き抜け、海辺を見渡せる岩場へと移動したからだ。

櫛田の存在もあり、私は三人を注視した。夜であつたため、小柄な女子生徒が持っているライトの光を頼りにすることで、何とか彼女たちを観察することができた。10分を少し過ぎた程度で、彼女たちはDクラスのベースキャンプへと戻っていった。結局、何をしたかったかは分からなかったが、あの気だるげな女子生徒は櫛田と同じDクラスの生徒であることは分かった。

二日間の偵察で、ある程度のこととは分かった。一方で『妨害』の方は難しいと感じた。それはDクラスの無秩序さにある。たとえば、一人でベースキャンプを離れて高所で無気力になったり、夜に唐突に移動したりと、無秩序に行動するため、予想が難しく、単独で妨害するのは困難だ。

坂柳が『できれば』と言っていたのは、これを予想していたからだろうか。背中に鳥肌が立つのを感じながら、私は坂柳の命令の『偵察』への比重を強めることにした。

三日目になると得られる情報も減ってきた。Cクラスはリタイアし、Aクラスは洞窟内で停滞している。そして、坂柳の命令対象であるDクラスの変化も乏しくなってきた。相変わらず櫛田率いる食糧探索班は優秀で、他は、ベースキャンプで多少纏まっている程度といったところだ。あとは、二日目と同じく夜の行動だろうか。三日目は、二日目のメンバー以外にも、何人かの人物が参加していた。そしてライトの使い方、ようやく目的が分かった。おそらく星を見ている。つまり、特別試験には何の関りもない行動だった。

——櫛田が参加していたから、何かあるのかと思っただけ……どうやら櫛田もDクラス相応の点もあるみたいだ。

そして、私が注視している男子生徒からは得られる情報は少なかつた。少し気になる点としては、彼の立場だ。彼は櫛田からの信頼が厚

いのか、よく櫛田と行動を共にしていた。

つまり彼の立場を表現するなら、櫛田の手下と言えるからかもしれない。坂柳にとつての私のようなものだろうか。いや、櫛田は坂柳のような残忍さを持つ人間とは考えにくい。むしろ、一之瀬とその取り巻きの関係に近いような気がする。

……坂柳は一之瀬を僅かだが意識している。そうすると、櫛田はDクラスにおける一之瀬なのかもしれない……ただ、坂柳の口から櫛田の名前を聞いたことは一度もない。そして同様に、坂柳は一之瀬の取り巻きの名前を口にしたこともない。だから、単純に比較はできない。何か大事な要素が抜けている気がする。

たとえば……坂柳にとつて櫛田は龍園以上に意識する相手であり、その情報を私たちには隠している……坂柳の性格から考えると、この仮定は成り立たない気がする。つまり、現状、坂柳からすると櫛田の方は眼中にはない。けれど、櫛田の手下には……

ならばこそ、やはり、あの男子生徒は特殊なのだろう。それが何かは私には、まったく分からない。分からないが……

「怪物に目を付けられたことは、同情するよ、本当にね」

おそらく、このことで一番共感できるのは、私なのだから。勿論、嬉しくも何ともないことだけれど。

そして今、特別試験四日目。私は、持ち場としていた洞窟付近の高所を離れている。

偵察で得られるものが無くなってきたという理由もあるが、本心は別にある。

多分、これは反発心だろう。曖昧で成果を出すことに対する命令に對してか、それとも、そんな命令を出したあの怪物に對するものか。もしかしたら、怪物の命令に逆らえない自身に對してのものなのかもしれない。

とにかく、私は解放されたかった。それが一時的なものだとしても。

少なくとも今だけは、怪物の目もない。

「あいつのことだから、私の今の行動も知ってるかもしれないけどね……」

もしそうなら、あいつはどうするのだろうか。私に罰を与えるのだろうか。

いつも高所から見下ろしていた森の中へと入りながら、意味もないことを考える。

——今だけは忘れない。

そんな気持ちで、足を進めると、辺りの木々は深くなっていった。幸いにして、一直線に洞窟から降りてきたため、迷う心配はない。ただ、Aクラスのスポットからは離れすぎてしまったかもしれない。

ふと、周囲を見ると、未回収の果実が目に入った。この辺りはまだ誰も来ていないのだろう。なんとなしに、その果実を掴もうとしたとき、ガサリと不審な物音がした。

身を低くしながら、音源を見ると、ひとりの男子生徒が歩いていた。男子生徒の横顔が見えた時、思わず息をのんだ。

口元を手で押さえていると、心臓が強く鳴る音が聞こえた。まるで今にも飛び出しそうだった。

「ふー、はー、……」

何とか息を整え、その男子生徒を観察する。こちらには気づいていないように見える。

——私がしなくてはいけないこと、最近の偵察の収穫の無さ、一歩も進まない妨害作戦、自分の中で渦巻く感情、そして僅かな好奇心……様々な思惑が自分の中を駆け抜けた。そして、最後に、きつと今、あの怪物は船の上で嗜虐的な笑みを浮かべているだろうな、と思った。

「あんた、何やってんの？」

気づけば私は……いや、私は自分の意志で、この男子生徒——赤石求に話しかけていた。

「ねえ、聞いてるんだけど」

しかし、赤石はどこか上の空で、私の問いに答えなかった。些細なことであるはずなのに、なぜか苛立ちを強く感じた。

私の怒気を感じたからか、赤石はこちららを捉えて、鈍く語りだした。

「えっと、あなたは、確か、モールにいた……」

彼の話し方にも苛立ちを感じてしまう。きっとこれは、逆恨み、いや嫉妬だ。

「何やってるか聞いてるんだけど？」

私が問うと、赤石は少し気まずそうな顔をしながらも、答え始めた。「えーっと、そのクラスの皆に頼まれて、食料を調べてくるように言われて……そういう、あなたは、何をやってるんですか？」

赤石の答えは納得のいく内容だった。彼は櫛田の取り巻きの一人だ。そして、方向感覚が良い。おそらく櫛田に命じられて、単独での行動をしていたのだろう。

「……、Aクラスの占有してる場所なんだけど」

私は彼の質問には答えることなく、半ば嘘のようなことを口にした。正確には嘘かどうかは分からないが、だいぶ歩いたことから、ここはもうAクラスの占有したスポットではないだろう。ただ、そう、これは相手の出方を窺う^{うかが}為に必要な工程だ。そう自分に言い訳しながらも、彼の挙動に注視した。

「そうだったんですか……すみません、気づかなくて」

謝る彼の姿を見て、僅かだが鬱憤が晴れた気がした。そう、私は、ずっと、この男子生徒に悩まされてきた。一方的な感情で、彼には自覚はないだろうし、彼のせいとは言いきれない。けれど、怪物に鬱憤を晴らせない以上、行き場のない怒りだった。怒りの感情を向けることができる正当な相手がいる。そのことが、今の私には喜ばしかった。

『すみません』、で済む問題じゃないでしょ。スポットの不正使用は減点って言ってたから」

申し訳なさそうにする彼の表情が見えた。

鬱屈としていた気持ちが塗り替わるように感じた。もしかしたら、

あの怪物も、いや——坂柳有栖という少女も、今の自分と同じ気持ちなのかもしれない。

「ええっと、それは……その、何と言いますか、ここに本当にスポットがあるんでしょうか？もしあったら、見せて欲しいのですが」

私が減点を示唆すると、彼は、急に頑なになった。その事に、少しだけ気に食わないと思いつつも、前に話をしたときの事を思い出した。彼は、以前に話をしたときも、基本的には、落ち着いているが、クラスのことになるかと頑なだった。おそらく真面目な人間なのだろう。だからこそ、なぜこんなにも、厄介な事になっっている人間なのか分からない。彼に非は無いかもかもしれない。それでも恨まずには、嫉妬せずにはいられない。

——なぜ、彼は安全地帯^{Dクラス}で、私が危険地帯^{Aクラス}なのか。

勿論、DクラスにはDクラスの大変さがあるだろう。三日間、彼らを偵察し続けたから分かる。能力が低い生徒が多いクラスだ。そんな中で過ごすのは苦痛を感じるだろう。特に人並以上の水準がありそうな、この男子生徒にとっては。だが、Aクラスが良いなどは口が裂けても言えないはずだ。特に彼は。

彼がもしAクラスにいたら、想像を絶する苦痛を味わっていただろう。そして今頃、きつと私は洞窟の中で適当に配給された食事でも食べていた。だが、そうはならなかった。あの怪物に目を付けられたから、そうはならない。なぜ、彼は無事なのか。嫉妬せずにはいられない。

「誤魔化したいのは分かったけど、そういう態度取るなら、……さ、——葛城に報告するけど、いいの？」

思わず、言いかけそうになった悍ましい名前を寸前で止める。情報収集も兼ねて、一度、葛城の名前を出して反応を窺ってみることにする。

「その、……誤魔化しているつもりはありません、ただ、どうも、あなたは何か俺に望みがあるように感じられます。何かあるんですか？」

反応が鈍い。葛城のことは気にしていないのか、それとも別の何かを考えているのか。いや、それよりも……じつと、こちらを見つめ、問

いかける彼に対して、怒りを感じた。

きつとそれは理不尽なものだ。もし望めば、彼は私と代わってくれるのだろうか。

「……、……別に無いけど、自意識過剰なんじゃない？」

その怒りが言葉にも出てしまった。

「……そんな、つもりは、ありませんが……すみません、Dクラスの合流時刻に遅れるので、俺は失礼します。あと、俺はスポットを不正利用する気はありませんし、現にしません。スポットの所在が、俺にも、そして、あなたにも明らかではない以上、これで説明は十分だと思います」

彼は私の言葉に機嫌を損ねたようだった。当然のことだ。

ただ、今までの彼の言葉の節々から妙な誠実さを感じた。それは、さつきから疑問に感じていた点でもある。なんでこんな普通の生徒が……

逃げるように去ろうとする彼を見たとき、不思議な閃きが、かすかに光った。閃きとともに、私は、彼の腕を掴んだ。

「——ちよつと、待って」

自分の不安定な立場を彼には変えられるのではないだろうか。

安全地帯にいる彼に対して未だ嫉妬している気持ちはある。けれど安全な場所にいるからこそ、分かることもある。そして、本来同じ立場である私たちは協力することができないかと、閃いたのだ。

「あの、放してもらえないでしょうか」

じつと彼の瞳を見ると、困ったように見つめ返してきた。私の心がまた少し軽くなった。

「私の質問に答えたら、今回の件は見逃してもいいけど、どうする？」
嫌がる彼に一方的に言葉を放った。何だか癖になりそうな感触がした。それは変な感覚で、本来は感じるはずもないものだ。きつと、私は怪物と一緒に過ごし過ぎたのだろうか。

「内容にもよりますが……クラスを売るようなことはできません」

彼はクラスを守ることで頭がいっぱいのようなようだ。益々、私とは違う人間だ。だが、本質的な立場は同じだ。そう私と同じはずなのだ。な

ぜ、こんなにも綺麗でいようとするのだろうか。憎たらしい。

「――坂柳、坂柳有栖って知ってる？」

私は核心を貫く質問をした。

「……聞いたことがあったと思います。確か、Aクラスの人でしたっけ？」

彼の表情が陰った。先程とは違う。彼は何かを隠そうとしていると、そう感じた。

「……私が、前、あんたとモールで会ったとき、坂柳って名乗った。その時、あんたは何も言わなかった。なんで？」

彼を問い詰める言葉を口にするたびに、心が軽くなっていくのを感じた。私は心の底まで、きつと毒されているのだろうか。

「えっと、すみません、よく憶えていませんが……ただ、単にその坂柳さんという方があなたかと思ったのでは？あなたもAクラスでしたし」

また陰った。そう、分かるのだ。だって、私と同じなのだから。彼の誤魔化し方は私と似ているのだ。また共通点を見つけた。

「やっぱりおかしい。私が坂柳って名乗ったのはクラス名を告げる前だから、なんか隠してるでしょ」

「えっと、すみません、先ほども言ったように、俺はあの時のことはどう覚えて、あなたと違って、俺はD、……というより、あなたの名前は何なんですか？いい加減教えて貰えませんか？」

本来なら、教えるべきことだと私も思う。けれど、懇願するような彼の瞳を見て、拒みたくなくなった。

「何で教えなきゃいけないの？」

胸の中にあつた泥のようなものが流されていくようだ。いや、本当は知っている。今、実際は胸の中まで泥に浸かって、そして沈んでいつているのだ。

「……こんな、尋問まがいの事を2度も受けて、その上、名前すら教えてもらえないのでしたら、これ以上の会話は俺には難しいですね」

彼はムキになったように、そう答えた。

「神室、神室真澄。これでいい？」

「神室さんですか、よろしくお願いします」

「あつそ」

「えっと、俺は前、確か名乗りましたよね？」

彼の困ったような顔を見て、また心が少し澄んだ気がした。もしかすると、私は、心も怪物に似てきているのだろうか。

「い、……赤石でしょ」

きつと、そうだろう。だから、今も、思わず正しい言葉を口にしようとしてしまったのだから。

「そうです……、ええっと、そろそろ、クラスメイトに言われた合流時間なので戻っていいですか？」

彼は、腕を掴んでいる私の手を流し見た。放してほしいという意味表示だろう。けれども、そうはいう訳にはいかなかった。私には質問をした目的があった。のらりくらりと躲されて、つい気持ちが昂ってしまった。先ほどの閃きを忘れかけてしまうところだった。

「まだ、質問は終わってないから。……本当に坂柳のことを知らないの？」

じつと彼の瞳の中を覗き込む。その色は、自身の瞳の色と同じように見えた。

——そう、反抗の色だ

「で、ですから、名前は聞いたことがあったと思いますが……何か神室さんにとって重要な名前なんですか？」

上手く、誤魔化しているが、やっぱり彼は坂柳の事を隠している。

「坂柳はうちのクラスのリーダー。名前がどこまで広まってるか聞きたかった。それだけ、じゃあ、もう行っていいから」

ただ、これ以上、聞くのは難しかった。だから、今日はこれで見逃そう。

「そ、そうですか……えっと失礼します、神室さん」

そういつて彼は私に背を向けた。隠している事、そしてあの反抗的な目、何をしようとしているかは分からないが、坂柳に対して挑戦的な何かを持っている人間なのだろう。

ただ、彼は坂柳を甘く見ている。あの怪物に何かしようと思えるな

ど、身の程知らずと言っている。

打ち倒されて、そして支配されるだろう。

「あんたがどれだけ足掻いても、あいつには勝てない」

私から離れていく彼の背に向かって、私はそう呟いた。聞こえていても、聞こえていなくてもどちらでもいい。

ただ、きつと龍園と違い、赤石は、私にとって良い結果を出してくれるだろう。赤石と坂柳が対峙するとき、その時ならば、私はきつと……

私は、彼の背が見えなくなるまで、目で追い続けた。そして視界から完全に消えたとき、自然と口が弧を作るのを感じた。

「あんたが、私の代わりに怪物の生贄になれ。赤石」

そう、きつと、赤石ならば怪物の生贄に相応しいだろう。

そうなれば、その時、きつと私は解放される。私の役割を押し付けることができる。

——あの恐ろしい、坂柳有栖から逃れられる。

微かだが、確かでもある期待を胸に、私はAクラスのベースキャン
プへと戻るのだった。

伊吹濤の役割3―5

特別試験五日目の朝。

Dクラスは混乱状態にあった。

それは、私がある工作を行ったからだ。

話は特別試験の開始前まで遡る。

Aクラスの教師から開始を宣言されるより少し前、私と金田は龍園から呼び出しを受けていた。

「――というわけだ。お前ら二人は雑魚どもの中で遊んで来い」

龍園の予想では、今回、各クラスを測る試験のようなものが行われる……らしい。そして、その結果によってクラスポイントの変動がありうるという話だ。この話は初めてじゃない。少し前――船内のアナウンスが入る前にも同じことを言っていた。その時は、クラスの十数人を集めていた。今回は金田と自分しかいない。

「ちよつと待て。何で試験があるって分かった？さっきの演説じゃ納得できないんだけど」

「あー？いちいちそんな事気にしてどうするんだ？お前は？上のクラスに行くのが目標、その為に協力すると誓ったはずだぜ？なあ、伊吹」
「別に誓っちゃいない。ただ、おまえが思いつきで言っただけか確かめてるだけ」

この男は読めない。思い付きで口走っているようにも見えないし、全てが計画的のようにも見える。ただ、先ほどクラスメイト達の前行われた「演説」は、過剰で、演出的だった。まるで何かから目を逸らさせるように。

他の有象無象と同じように、騙されるわけにはいかない。

「説明してやってもいいが、お前の頭で理解できるかどうか怪しいな。だが、まあ、俺も今は気分がいい。特別にこうしよう、伊吹、金田。俺がさっき言ったように、『特殊な試験が先ほどアナウンスした時見え

た島で行われ、それがクラスごとに行動するもの』であった場合は、お前ら二人は俺に殴られた後、BとDクラスへ潜り込め。もし違ったら、今後は別に俺の命令に聞かなくていい。どうだ？破格だろ」

「質問に答えてないし、それに、何でおまえに殴られないと——」

「——なるほど、つまり苦肉の計ということですか。龍園氏」

「クク、金田、理解が速いな。その理解力のある頭を殴るのは、慈悲深い俺としては避けたいが……、一之瀬を騙せるのはCクラスだとお前と椎名くらいだ。……やれるな？」

「暴力は苦手ですが、龍園氏の役割に比べれば大した苦痛ではないでしょう」

「とういわけだ。金田は納得した。伊吹、お前は？」

「——、分かった。おまえの予想が外れてたら代わりにおまえを殴るから」

「好きにしろ、俺はもう行く。お前らは上陸後に殴られに来い」

吐き捨てるように言くと、龍園は一人船内へと歩いて行った。

龍園からの指示。

それはDクラス内への潜入と特別試験の妨害だ。船上では大まかな方針だけだったが、ルール判明後、龍園の下へ向かったとき、さらに詳細の内容が伝えられた。

私の役割はDクラス内のリーダーが誰かを調べることだ。ただ、証明の為に、龍園からは、カメラを使いリーダーカードを撮影するようにと言われた。

そのほかにも、トランシーバーを渡された。「これで連絡を取れ」と龍園は言ったが、カメラとトランシーバーを持って潜入だなんて、どう考えても怪しすぎる。

龍園に殴られた跡を使うとしても、不備が多い。一応、Dクラスのベースキャンプの近くに来た時にトランシーバーは隠したが、肝心のカメラは隠すわけにもいかず、持ち物の中に入れるしかなかった。

ただ、Dクラスの生徒たちは想像以上に馬鹿だったため、カメラの件は問題にはなっていない。

——そう、想像以上に馬鹿な連中だ。

彼らの殆どは馬鹿で単純だ。深くものを考えず、危機管理能力に欠ける。主要となる何人かを除くと、ほぼ全員がCクラスの生徒に及ばない。つまり、端的に言うると、Cクラス以下だ。

Cクラスも碌でもないクラスだが、ここをやつらよりは、もう少し頭が回る。

ただ、そんな中でも、数少ない例外も存在する。それは平田と櫛田、そして堀北と赤石だ。前者二人は優秀な面を持つが、こっちが少し引くぐらいにお人好しだ。つまり精神構造が馬鹿だ。しかし後者二人が、少し厄介だ。

平田は典型的な良いやつだ。クラスを率いていて、能力も高い。総合的な力量なら、Cクラスで平田に勝てる生徒は、ほぼいないだろう。いや、正攻法や真つ当な基準な評価であれば、完全にいないと言っていいかもしれない。

しかし、その本質はただの良いやつだ。決してリーダーに据えて良い人間とは、私には思えない。特に、Dクラスのような問題ばかりのクラスでは、良い人であるがゆえの優柔不断さが、難局を呼びやすく、また難局を悪化させるタイプだ。

それは、私のような女をDクラスに迎え入れたことから立証されている。この特別試験で、この男が中核となっているのはDクラス最大の失敗の一つだ。

櫛田は平田の女版のような生徒だが、平田よりも搦め手寄りのタイプに見える。少し一之瀬に似ていると言えはいいかもしれない。ただ、龍園が多少意識している一之瀬と違い、櫛田は意識されていない。それは、櫛田を見ていると分かる。この女は一之瀬ほどの才能を感じないのだ。一般的な生徒よりは才能があるだろうが、一之瀬には一回り以上遅れている。そんな印象だ。

さらには、平田と同じように私を受け入れ、あろうことが、自身の食糧やテントの一部さえも私に分け与えてきた。平田以上に甘いと

言っている。話を聞いて、僅かに気を許しそうになるという点では平田よりは危険度が高いが、一之瀬以下の才能に、平田より甘い精神構造からして、総合的にはDクラスで一番与しやすい相手だ。これがDクラスでも上位の人物なのだから、龍園の言葉にも頷ける。

堀北は優秀な生徒だ。言動から知性は十分に感じられるし、何よりの体の動かし方や些細な仕草から、高い運動能力の持ち主であることが分かる。さらには、私の事を完全に疑っている点でも、他のDクラスの生徒より勝っている。堀北は時折私を疑うように視線を送ってくるため、Dクラスを探るときは、私も堀北をかなり意識した。『私が探っている』ということ堀北に察知されるわけにはいかないからだ。総合的には、今回の私の役割において、最も危惧すべき相手であり、そして、恐らくリーダーカードを持っている可能性が一番高い人間だ。

赤石は少し特殊な生徒だ。平田の友人のような立場だが、活動を見ると堀田と組んで行動することが多い。能力は堀田には遠く及ばないが、警戒心は堀田より遥かに高い。その辺りで上手く堀田と支えあっているのかもしれない。ただ、この男に関して特記すべき点は、堀北と同じように、私に疑いの視線を送ってきていることだ。つまり、Dクラスでは堀北を除いて唯一、私を疑っている生徒だ。

堀田や平田を慕っている一方で、こちらを疑っている。また、前述した堀北と違い、堀田や平田のように人望もある。名実ともにDクラスナンバースリーの男といったところだ。

私を警戒しているという点では堀北と同じだが、堀北が能力で危険なのに対して、こちらは人脈で危険な人物と言える。総合的には堀北ほどではないが、平田よりは遥かに警戒すべき人物だ。

ただ、赤石は、堀田と同じく特別試験に精力的に動いているため、私を監視する時間が、ほぼないようで、偶に私を見るだけのことが多い。もしかしたら、堀北に私への監視を任せているのかもしれない。

実際、堀北が会話をする相手は、取り巻きの綾小路を除くと、堀田と赤石だけだ。内容は聞き取れていないが、堀北の真剣な表情から推測するに、クラスの運営に関する^{わたくし}ことか、もしくはクラス内にスパイ

が入り込んでいる件について議論を交わしているのかもしれない。

人的に見て、このクラスは堀北と赤石が厄介だ。逆に言うと、それ以外の生徒は警戒に値しない。私にとって好都合だ。リーダーカードを撮影するのは本来は至難な役割だが、この程度のやつらが相手では失敗はしないし、できない。

堀北と赤石に監視の中で行動するのには限界がある。私はなんらかのアクションを起こす必要があった。

幸い、このクラスには火種はいくらでもある。

例えば、このクラスは女子の力が強い。原因は、おそらく女子集団の中核となっている軽井沢の存在だ。軽井沢が平田と付き合っているため影響力が大きい。しかし、肝心の軽井沢は典型的な馬鹿な女子生徒だ。つまり利用できそうということだ。

他にも、女子の派閥のあり方は複雑で、上手く突けば隙を作れそうだと感じた。さらに、男子生徒の慢性的な不満など、問題点は、部外者の私から見ても沢山あった。

四日目には私は一つの策を思いついた。

それは軽井沢の下着を盗み、Dクラスの男子生徒の鞆に隠すというものだ。男子の鞆から発見されれば、おそらく、軽井沢やDクラスの女子の性格上、最悪の火種となる。仮に男子の鞆から見つからなくても、軽井沢の性格上、騒ぎ出すだろう。そうなれば、Dクラスは混乱し、リーダーカードを写真に撮る機会となる。

本来なら、他クラスである私を疑うところだけど……このクラスの知能のレベルから考えても成功する可能性が高い。

あとは、軽井沢の下着を入れる鞆は……私を疑っていて、クラス内でも貢献度が高い赤石にしよう。この男を失墜させればDクラスの戦力は下がる。その上、私を疑っている人物の信頼性が損なわれる。さらには、この男が軽井沢の下着の処理に意識が向けば、その分、私は自由に動ける。

詳細の計画を煮詰めた私は五日目の早朝、音を立てないようにひっそりと起き上がり、誰も目覚めていなことを確認した後、隣のテント

の軽井沢の下着を盗み、男子のテントの前に置かれていた赤石の鞆の中に軽井沢の下着を隠した。そして、再び櫛田たちのテントに戻り、誰も目覚めていないことを再度確認した後、横になり、寝たふりをした。しばらくした後、櫛田の取り巻きの一人がトイレに行くために一度起き上がったが、それ以外は特に何事もなく、ただ、時間だけが過ぎていくのだった。

そうして、今。

私の工作により、Dクラスは混乱状態にある。女子たちは怒り狂い、男子は困惑している。やはり思った通りの展開になった。

しかし、一方で、赤石は何食わぬ顔で事態を静観している。中々のポーカーフェイスといったところだろうか。

けれど、赤石の余裕は途中で崩れた。それは女子が持ち物検査をすると宣言したからだ。

持ち物検査の列に並ぶ赤石は、ちらちらと周りを気にしていた。その上、彼の表情は少し暗いように、私には見えた。ただ、かなり表情を隠しているのです、誰の鞆に入っているか予め知っている私以外には気付く者はいないだろう。……いや、堀北だけは気付いているかもしれない。

三宅と呼ばれた生徒の検査が終わった後、赤石の番になった。女子たちの中では赤石への信頼があるのか、あまり疑いの視線を向けているものはいない。しかし、ここからひっくり返る、そう思っていた私だったが、待てど待てども、赤石の鞆から下着が発見されることは無かった。

———どういうこと？

上手く隠した……いや既に処分した後か？

私が思考を巡らせている間も検査は続き、残りは二人になった。確か、名前は……片方は堀北の取り巻きの綾小路で、もう一人は池だつたと思う。この二人はやけに検査を渋っていた。もしかしたら、赤石

はこの二人の鞆に隠したのだろうか。それなら大した役者だが……普通、処分するなら、土の中や森の中に隠すべきじゃないのか？なぜ、同じクラスの男子の鞆に？

しかし、この考えも、結局無駄に終わった。なぜなら、軽井沢の下着は最後まで出てこなかったからだ。ということは、やはり処分したか？だが、もしそうならば、短時間で、よくそこまで判断したと思う。実際、赤石が処理する為にかける時間は、僅かだ。つまり私が仕込みをしてから、軽井沢が気付くまでの間の時間だ。その時間で、軽井沢の下着を自分の鞆から見つけ、その処理を判断し、どこか最適な隠し場所を見つけた。判断が早い。拙速ならぬ巧速だ。しかも演技力もあった。それにさっきの暗い顔をした時、周囲の女子を観察していた。もしかしたら、誰がやったのかを逆探知していたのかもしれない……私は少し赤石を見くびっていたようだ。こいつの冷静さと演技力、そして度胸と判断力は堀北と良い勝負だ。

持ち物検査が終わった後、軽井沢が騒いだため、綾小路と平田が女子のテントを動かすことになった。途中で平田が抜けた事を確認した私は、探りを入れるために、綾小路と接触することにした。

テントの移動を終えたところを見計らい声をかける。

「ちよつといい」

私の言葉に反応して綾小路がこちらを見た。こちらに意識を向けたのを確認して、私は、用意していた言葉が続けた。

「今朝の下着泥棒の件、何て言うか大変そうだな。Dクラスも一枚岩じゃないっつーか」

「まあ、な。色々苦労は絶えないな」

それから、私は綾小路と言葉を交わしてみたが、得られた情報は大きくなかった。見た目通り、平凡なDクラスの生徒の一人だ。

ただ、

——私のことを犯人ではないと断言した綾小路の表情が妙に頭から離れなかった。

真剣な目でこちらを見る綾小路に対して、僅かだが罪悪感のような

ものを抱いた。それを振り払うためにも、この堀北の小間使いに疑念の種を蒔く。

「おまえは犯人に心当たりは無いつて言ったけど、私はちよつと怪しいやつはいると思う」

綾小路は少し驚いたように目を開いた。興味があるようだ。

「それは……誰か聞いてもいいか？」

「あの赤石ってやつは怪しい」

おそらく、実際に軽井沢の下着を処分しているから、もしかしたら本当に怪しい動きをしているかもしれない。それを確かめる意図も込めた一言だったが、綾小路の反応は予想外のものだった。

「オレはそうは思わない」

ピシヤリと言い放つような言葉が耳に入り、思わず目の前の男を見る。腑抜けたような顔だ。つまり今、声を上げたのは綾小路に他ならない。意外だ。この無気力を固めたかのような男が、突然話し方を変えたのだから。赤石とは友人なのだろうか。

「なんで？」

私が追求すると、彼も自身の行動のおかしさに気づいたのか、「ああ、いや……」といつもの様に語調を整えて、考えるように答え始めた。

「……、……、……、赤石は良い奴だし、それに平田とも仲が良い。そんな事はしないだろう」

綾小路自身も上手く説明できていない事に自覚があるのか、不明瞭な内容だった。つまりは、『なんとなく、そう思う』以上の考えはないのだろう。平田と仲が良いことは下着泥棒でないことの証明にはならないし、説明にしても主観的すぎる意見だ。やはり、この綾小路はDクラス相応の無能な生徒だ。おそらく、赤石とは仲が良いのだろう。だから、咄嗟に否定したのだろう。

「そう。じゃあ、そうかもね」

そうして、私は綾小路との会話を打ち切った。やはり、先ほど思った通り、綾小路は頭が回らない男だ。堀北が連れまわすほどの人物だから、どれ程かと思ったが、能力は特別優れているわけではないよう

だ。雑用程度か、あとはせいぜい護衛だろうか？まあ、護衛だったとしても、あまり強そうには見えないし、もし戦えば100%私が勝つが。

やはり、堀北にとって一番の有力な協力者は赤石だろう。特別試験二日目には、堀北は、綾小路の他に赤石とも一緒に行動していた。ただ、普段から一緒というわけでは無いから、きつと対等な協力者といったところだろう。できれば、この二人が一緒にいるときの会話を聞いておきたかったが、それはできなかった。なぜなら、二人が会話するときには綾小路と櫛田以外は近くに置かないようにしているようだからだ。それは徹底していて、同じDクラスの生徒さえ三人の周りにはいなかった。信頼できないDクラスの生徒に聞かれないように、なんらかの作戦を立てているのだろう。これは堀北の警戒心の強さが良く分かる点だ。やはりDクラスで一番障害になるのは、この女だ。

当然、部外者の私が近付けるわけもなく、この五日間、堀北と赤石の会話の内容は分からないままだ。だが、間違いなく作戦を練っているのだろう。私がここにいる理由にも当たりを付けているかもしれない。やはり、いち早く行動を起こす必要がある。

おそらくリーダーは堀北。何とかしてカードをカメラに写す。

私はDクラスが食糧探索に出かけるときに動こうとしたが、肝心の堀北と赤石がベースキャンプに残ってしまい動けずいた。ただ、軽井沢の下着が効いているおかげで、女子の何人かが男子を監視するのに駆り出されている。また赤石も他の男子ほどではないが、『男子』という理由で女子から警戒されている。私は、堀北が見張りになるタイミングを見計らい、行動した。そして、それは実際に最良のタイミングとなった。なぜなら、堀北は見張りになり少し経った後、彼女は赤石と二人でベースキャンプの端へと移動したからだ。間違いなく密談。完全に私はフリーになった。

——好機！

私は誰にも視界に入らない位置に移動する。本来ならこの時点で怪しまれるが、今はベースキャンピングに殆ど人がいない。そして一番警戒すべき堀北と赤石は作戦会議中だ。

そのまま、鞆の中からカメラを取り出し、一度撮影の練習をしようとして、思わず動きが止まった。カメラが反応しないからだ。

——故障!?こんな時に……

龍園からは確実に撮影するように言われている。リーダーカードを目視するだけでは駄目だと。用心深いだけか、または何か策に利用するのもかもしれない。どちらにしろ、撮影は不可能だ。

……盗るか？

不確実で危険だが、これだけ隙だらけのクラスだ。また騒動を起こし、その隙に盗る……アリか。

再度作戦を練り直した私は、自分の役割を果たすため、特別試験六日目に備えるのだった。